
魔法先生ネギま！銀の風が吹く

珈琲時間

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法先生ネギま！銀の風が吹く

【Nコード】

N9044K

【作者名】

珈琲時間

【あらすじ】

ネギま！の世界に転移させられた男が紡ぐ物語

とある世界で無念の内に死んだ主人公が能力を得てネギま！の世界に転移します。

原作知識の無い主人公が歩む道はゆっくりと無骨にそれでも前へと踏み出していく。

エヴァと出会い、大戦を戦い抜き、麻帆良へと至り超と会う。

現在：

新章・麻帆良祭篇

あらすじ、キーワード改訂05・18

1話：序章（前書き）

初執筆です

レポートや感想文以外まともに書いた事なんてありません

歴史を変えます。キャラの性格も変わります。

Fateを期待している方には申し訳ありません。蛇以外出て来ません。

永遠かもしれない主人公が死んだ世界です。少女コミックスに当たります

以上に耐えられない方々は申し訳ありませんがお戻りください

それでも読んでやんよ！と言う方はご指導ご鞭撻の程をよろしくお願ひします

1話：序章

序章

火の海。辺り一面が燃え盛り
その真っ只中にその者達を取り残されていた

「日巫女様ッ！！」

「ああ駄目だ…この地の神は人を憎んでいる。すまない日宗…私の力が及ばないばかりに。」

日宗と呼ばれた男は黒いスーツを、日巫女と呼ばれた女は巫女装束を

「くっ…狂い桜！トオツカミ エミタマエ 我が剣、狂い桜よ我が巫女を守るため火を退けよ！」

男が叫び剣を振り下ろすと火が裂け道が生まれる

「日巫女様ッ走ってください！！私も後から追います！」

男は自らが切り開いた道を走り抜ける一女（最愛の人）を見届け地に伏せた

「日宗！日宗ッ！！！！」

叫びが、慟哭が耳に入っても、どうする事も出来ぬ

「ああ…最期まで御守りしたかつ…た…た…」

1話：序章（後書き）

パソコンの入力って難しいですね…

「ライトノベルを書きたい人の本」なるものを片手に四苦八苦です
更新頻度の確約は出来ません

一応エヴァ編だけは書き上げた状態です

ここまで読んでいただきありがとうございます。

2話：導入（前書き）

次話はどこから投稿するんだア！と格闘する事20分。

初感想頂きました。ありがとうございます。

投稿って身悶えするほど恥ずかしいですね…

2話：導入

「ここは…」

気が付けば上下左右の感覚も怪しくなるような真っ白な空間にいた

おかしい。記憶が正しければ俺は…

火の中に倒れて…ああ、そうかつまり

不思議と諦めがついた

あの世。根の国が。

「いいやそれは違うぞ巫女守」

全く気配の無かった真後ろから突然声をかけられる

「あんたは？」

油断なく構えつつ振り向く

「これこれそう警戒するでないわ。」

豊かな豊かな白いヒゲ、この空間でなお眩しいと感じるほどの白い
ローブ

これが鬼なのか…いや閻魔だろうか

全く見当が付かない

気配から言えば神々しさすら感じるが…

「ワシが何者か…ふむ。お主らの基準で言えば神であるつよなあ」

「俺の心を…」

「神じゃからなあ。それでどうじゃお主？ワシの授ける仕事を受けるのならば…生き返らせてやらん事も無いぞ？」

「仕事だと…？」

地上を根の国に変えろとでも言うつもりか

それで生き返った所で日巫女様とは顔を合わせる事も出来ん

「常世の神と契約して生き返るぐらいなら死んだ方がマシだ」

「ワシをあやつと同じにするでないわ！そもお主が生き返る世界はお主が元いた世界では無い」

老人が声を荒げると共に強烈な神気溢れだす

常世の神では到底出せない様な澄んだ神気。相当高位の神なのだろ
う。

「同じ世界で無いのならば意味などありません」

間髪入れずに断ると神は困り顔で

「せめて話を聞いてから決めてもらいたいのう？まあ、聞かぬと言
った所でココから一切動けぬわけじゃが」

中々に嫌味な事を言う。

「聞く気になったようじゃな？」

それからその神が語った話は俺の半生の尽くを覆してくれる内容だ
った

「…つまり貴方の尖兵となって、世界の崩壊を招くモノを倒せばいいと?」

神は我が意得たりとポンと手を打ち頷く

「うむ。」

「それで何故俺を選んだのですか?」

「ワシはお主の記憶を覗きその半生を見た。才能は無いが努力に努力を積み重ね境地に至った戦士。誠実な性格、信念。このまま常世の神に渡すのは惜しいと感じた。それにの? 契約を結べそうじゃからのう」

「…契約?」

「巫女守であるお主を失った今、あの巫女はあの地にたった一人じや。結果は見えておろう? じゃがワシと契約すれば二度と会えぬ代わりに巫女の命を救おう」

「悪魔じみた契約だが、日巫女様が助かるのならば是非も無し」

「うむ。良くぞ言った! そしてお主には能力を与えようぞ」

「は?」

今コイツなんて言った…?

「わからんか? 能力じゃよ能力! 魔法とか格闘技術とか色々じゃよ!」

手を広げ雷や火とか出して一気に俗物臭くなる神様

「いや…そんなにホイホイ渡してもいいものなのか？」

「やや！お主その考えは間違っておるぞ！想像してみよ、丸腰の一般人が死者の歩き回る街を脱出できるか？核で滅びかけた世界で養鶏場のチキンの様にブルブル震えて生きるのが？魔法の使えない人間が魔法の世界で何をするんじゃ？」

大仰に神様は身振り手振りを加えて伝えてくる。最早この方が神様なのか信じ難くなってくるほどに

一息置いて

「お主が幾ら強かろうとそれはお主のいた世界でだけの事。コレから行く世界や倒すべき敵はそのようなもの通用せんぞ！」

「例えが全く解らないのだが…悲惨な事は理解した」

「うむ。ならばよし！転移先はネギま！という漫画の世界に程近い世界じゃ」

「漫画？ねぎま？」

焼き鳥なのか？

「むむ…ああ、お主の世界にはネギま！が無いのか…人生三割無駄にしとるの。とにかく魔法使いが跳梁跋扈する世界じゃ！」

今、世界レベルで残念だな！と言われた気がするのだが

「まずはコレじゃ…」

そう言って懐から取り出すのは六角形の金属

「なんですソレは？」

「これは核鉄と言って超常の力を秘めた錬金術の結晶じゃ！」

錬金術：中世辺りの？パラケルススだったか？

「これをお主の心臓にする」

「は？」

何を言っている。

「じゃからコレをお主の心臓にする。 なんとこの顔をしとる？」

「いや、待て。金属を心臓にされても困る」

「まあそれは良い。で、次じゃがこの映像を見よ」

良くない。非常に良くない。話を全く聞いていただけない
神様が空間を手で撫でると
ブウンという耳触りな音と共に映像が流れる

仕方なく映像を見るが

「これは…蛇？いや亜流なのか？」

「お主の使っておる蛇のある種源流じゃよ。より対人向けではあるがの？こやつはお主の並行世界の人物と言った所じゃ。とにかくこ

の戦闘技術じゃ！

「はあ」

今さらりと流したけれど並行世界だと？

「で、これが取って置きじゃ！真祖の身体を与えよう！」

真祖？どうせ説明しないのだろうな

「健康な身体に高い身体能力、大きな魔力に長い寿命、そして溢れる才能と思っておけばよい」

「それはありがたいな」

「そうじゃろう？そうじゃろうなあ！うむ！」

したり顔の神様。いい加減頭が痛くなってきた

「で、武器が無いと思うんだが？」

「武器なら渡したであろう？核鉄じゃ！」

「いや心臓では無いか！取り出すのは不味いんじゃないか？！」

「ええいゴチャゴチャと…わかったわかったわい！別にもう一つ渡せばよかるう？関連する知識もドンと付けてやるうぞ！どうじゃ満足じゃな？！」

余りの逆切れっぷりに俺が唾然としてると神様…爺さんでいいかなとにかく神様はパチンと指を鳴らし、悪戯な笑みを浮かべ

「では頼んだぞ？ 柚木宗一郎」

「ああ、頼ま

真下に黒い穴が開き

あ？！

身体が浮遊感を感じて

ああああああああああ……

「礼や文句を言う暇無く、暗い、暗い闇の底へと落ちて行った

Side 神

ふおっふおっ、汝が使命を果たせよ柚木宗一郎

さて…新たな剛の者が生を終えたようじゃ。また拾いに行かなくて
はのう

Side out

2話：導入（後書き）

ちよつと急ぎ過ぎた感もあります。

正直神様って扱いづらい

でも超常の存在って神様ぐらいしか思いつきません

「永遠かもしれない」の世界では巫女守の名前は日を付けるのが決まりだそうです

身悶えしつつ投稿ボタンをポチっとな

3話：ネギま！の世界に着弾。そして逃避行？（前書き）

PVとユニークを今更把握。

そして見方がわからず四苦八苦。

やっと確認出来たら驚天動地。

確認時点で666人の読者様に感謝感激。

胸が痛くなってきました。歯の根が合いません。

オカシイな心臓は丈夫なはずなのに。

そんなこんなで主人公がネギま！の世界入りします

3話：ネギま！の世界に着弾。そして逃避行？

突然だが俺は神様に会って能力を頂いて送り込まれた。

大丈夫。ここまでに問題は無い。

時に大きな問題から目を逸らす事も重要だと考える。

穴に落とされて長い闇を抜けると

どこまでも澄み切った眩しい世界が視界一杯に広がっていた。

耳に響く風を切る音

肌に猛烈に感じる空気を摩擦する抵抗

非常に息がしにくい

しかし…まるで鳥のようではないか

寒さも痛みも苦しさも空を飛ぶ事から考えれば大した事では無い

ここから見れば荒れた大地も暗く深い森も美しいではないか…目が痛い

だが待つてほしい。冷静に考えてみれば俺は神様から飛ぶ能力など渡されていなかった様な？

ハハッ

思わず乾いた笑いが漏れる

落ちているのだ。ああ飛んでなどいない。

グングン地面に近付いているのだ。

「いやいや待て待て!!!!」

パラシュート無し空挺降下の末路なんて只一つ

完熟トマトを落とせば容易に再現出来る事だ

眼下には深い広大な森が迫ってきている

いや正確に言えば迫っているのは俺なのだが、そこはとにかく横へ置いておきたい

「随分高い場所からのリスタートだと思うのだが神様……」

このままドスンと根の国へ一直線では無いか？これでは余りにも余りではないかね？

諦めてなるものか……必死で心を落ちつけ与えられた知識を探る。

核鉄

己の闘争本能に呼応し展開、己独自の形と特性を持った「武装錬金」へと変化する！

「これしか……無いな」

己の胸に手を当て叫ぶ

「来い……俺の、武装錬金！」

六角形の金属（核鉄）が開き腕輪が両腕に展開される

一ブレスレット（腕輪）の武装錬金！プロテウスアビリティー

った

落ちてくるだろうソレに潰されてしまふのだろうか？

それとも殺されてしまふのだろうか

痛いだろうなあ…苦しいだろうなあ…

そう考えつつも震える膝を折って、目をつむって私は運命の瞬間を待った

Side End

叫びと共に大半は退いてくれるが、明らかに被害範囲に少女が1人

連れて逃げるよ！その他大勢！！！

身体を捻る、逸らす

だがそんな努力は微調整の域を出ない

良くて少女とその他大勢の中間地点

シルバースキンは金属。火薬が込められてないだけで大砲の弾より速いだろう。

まさしく着弾。それ以外にコレを表現する方法を俺は知らない。

ドゴオン

我ながら驚いた。多少以上の痛みを覚悟していたのだが…なるほど超常の合金とは事実であるらしい

と、自らの状態を確認している場合では無い

少女を探索、目視で確認、セーフ？問題無し？被害は無いよな？

OK 適切な言葉を掛けよう。掛けるんだ柚木宗一郎！

「あー…その大丈夫かねお嬢さん？」

少女に声を掛けるが返って来たのは男の声

「な…なんだ貴様！そいつの仲間か?!」

しかも鋏を向けてくる

こちらは現状把握するのも難しいのに実に物騒極まりない

拳句仲間と聞いた途端呆けていた周りまでが各々の農具を向けてくる

いや…考えてもみれば、いきなり空から現れた俺に対して驚きや警戒があるのは当然だ

身構えなどして更に警戒されては話の一つも出来んならばこう答えるのが最適解だろう

「端的に言えば迷子だ。このお嬢さんとは初対面だ。危うく潰してしまう所を全力回避した所だが…」

そこまで言った所で件の少女が無意識か目を瞑ったままヒッシと裾を掴む

「あー…その、この状況はどうしたものか」

状況が全く理解できない

普通なら異物、つまり俺に対する警戒や攻撃的な行動を取る筈だ
この少女を殺しかけた事に対する怒りでも理解は出来る
しかしどうした事か殺意や警戒は少女にまでも及んでいる

「貴様：ただの迷子であると言うならば何故その薄汚い吸血鬼を庇
う！」

きゅけつき？

脳裏にニンニクや十字架を嫌がり胸に杭を打たれると死ぬお馴染の
吸血鬼の映像が流れる

だがこれは現実

吸血鬼、ドラキュラとはルーマニアのヴラド公を示すものであって…

”魔法の世界”

いやいや…冷静に考えて…：…ねえ？

「本当に？」

コクン

大人たちの代表格であるらしい男の言葉に驚き戸惑い散々思考し
少女に振り返り反応を見ると弱弱しく控えめに頷いた

正直こう…吸血鬼というものはもっと…：…こうなんていうか

これではイメージがブロークンファンタズムだ

「吸血鬼ねえー…：…はあ 吸血鬼か」

「解ったのならさっさと退け！迷子と言うのなら村までは送って
やるっ」

実にいい提案だ。だが退けばこの子はどうなる？

吸血鬼と言った所でこの服装にこの程度の農具だ。時代は相当古い

と考えてもいい
ならば”吸血鬼”とは異教徒を指したり、それこそ中世の魔女狩り
なのではないか？

「一応解つたのだが：吸血鬼というモノを初めて見るのでな…」
三少女に質問しても良いかね？」

「…あ、ああ。それぐらいならいいだろう。なるべく早くしてくれ
俺達は我慢の限界なんだ」

見た目より物解りの良い御仁だ

「では問う。周りも君自身も吸血鬼だと言った。ならば君は血を吸
つた事があるのかね？」

コクン

あちゃー…：どうやら本物みたいです。流石魔法の世界。なんでも有
な気がしてきた

「じゃあ次。君が血を吸った相手は強制的に吸血鬼になってまた人
を襲う？」
フルフル

おや？倍々ゲーム的に増えるものだとばかり思っていたがどうやら
違うらしい

大概は同じ様に吸血鬼になるか、食人鬼ゲールとなる話なのだが
しかし被害が無いのなら僥倖

「では君は生きるために仕方なく血を吸っている？」
コクン

つまりこの世界の吸血鬼とやらは栄養源としての血液の摂取
ならばどうにでもなる
質問していると周りの連中の殺気は上がるばかり
ここで決断するのが吉

声を上げて問う

「ならば最後の問いだ。君は吸血以外に何も悪いことやましい事はしていないか？」

コクッ

目には確固たる意志とプライド

少女の一線は理解した。この世界の吸血鬼も理解した。

ただの化け物では無いのならば…意志を貫く心があるならば

「そうか…」

「おい！もういい加減にしろ！早く退かないと貴様も同罪だぞ！！」

吸血鬼よりも話が来んな

少女を助けるにはこれしかない

「ああ。ならば同罪で裁くがいいこれより俺は君達の敵となるう」

「なっ?!」

余りの驚きに硬直する男達

少女も同じく驚きに目を見張っている

「しっかり捕まっていたまえ…飛ぶぞ？」

少女にだけ聞こえるように小さく声をかけ

片腕で少女を抱き上げ

「ひゃっ」

男たちを背に

崖へと飛び込んだ

「お、追えー！あいつなら着地できるぞ！」

「崖下へは二手に分かれて追いこむぞ！」

そんな怒号を背に聞いて

少女を俗に言うお姫様抱っこしつつ

再び着弾

下弦の月の夜、星々の輝きに照らされて

岩を砕き木の根を踏みしめ川を飛び越え森を抜けて何処とも知らぬ地へ

道中、少女が気を失っていたとするのはまだ少し先の事。

3話・ネギま!の世界に着弾。そして逃避行? (後書き)

なんかすごくもっちゃりした文になってしまっていると思います。

r z

ここまで読んでくださった皆様に最大級の感謝を

次回

見知らぬ土地で考えも無しに動くと言っ事

4話・見知らぬ土地で考えも無しに動くと言つ事(前書き)

友人「落下は美学だ。王道だ。とりあえず主人公は落とせ」

ヒロイン誰にすんの？

え？ヘラスの姫様だけど？

なんでエヴァじゃないんだ？！

褐色ヒロインが好きです。大好きです。

4話・見知らぬ土地で考えも無しに動くと言つ事

さて、少女を抱きかかえて逃避行などと洒落込んでみたものの今自分が何処の国のどの辺りにいるのかすら理解できていない。

あの男達に言つたように正真正銘迷子なわけだ
唯一の頼りである少女は気絶中
ただ幾つか把握できている事はある

日本では無い事

そしてあからさまなファンタジー世界では無い事
生えている木や植物は見た事があるものだし
生息している動物の類も普通と言って差し支えないだろう

空から見た風景やその他を総合して考えると欧州であるかもしれな
いとは感じている

困つたものだ

「うん……ん、ここは？」

「良かった気が付いたか？」

「ッ！」

軽い警戒を表す少女

まあいきなり空から落ちてきた奴に有無も言わず拉致されたのだ
仕方が無い

「あー…俺は柚木宗一郎と言う。こちらで言うとソウイチロウ ユズキだ。…うつむ語呂が悪い」

「……………」

無言

さて…どうするかね？考えてもみればこの様な少女の相手をした事が無い

日巫女様が子供好きだったのもあつて戦闘や護衛以外はなんとも…

しかしそれでは困る

なんとかして会話を、コミュニケーションを図らなければ

此処が何処かすらも解らないではないか！！！！

俺がすさまじい葛藤に襲われていると

なんと少女から話しかけてくれたのだ

「あの…どうして？どうして私を助けたんですか？」

「君の目に君の表情に君の仕草に信念を感じた。嘘を吐いてるようにも見えなかつたしね」

「答えになつてません！私は吸血鬼なんですよ！？」

会話を切り出してくれるのは非常に嬉しいし喜ばしいのだけど…これは時間が掛かりそうだ

「まあ…なんだ？俺も人間離れしてるし…人を無闇に襲わないのなら吸血鬼でも生きていていい。俺はそう思うんだ」

ポカンとした表情
それに俺は言葉を続ける

「それにな？例え善でも悪でも最期まで貫き通せた信念に偽りなんて何一つ無い。そう俺は思っているんだ」

それから少女は涙を流しながらポツリポツリと話した
貴族の令嬢として蝶よ花よと育てられた事

そんな日々が続くと思っていたのに誕生日の日の朝起きてみれば吸血鬼になっていた事

家族や今まで優しくかった人達の化け物という視線

何もかも失って逃げて

バレルと受ける人間からの仕打ち

痛かった事、さびしかった事、悲しかった事。何もかも話してくれた

「君も真祖だったのか…」

「え？」

「君の言っている真祖と同義の真祖かは解らないが、私も真祖らしい」

「だからそんなコート？」

……コート？

腕を見て、足元を見て、銀に輝いていて…

なあ…もしかしなくても今までの不審げな目とか警戒されたのってコレのせいですか？

「…武装鍊金解除」

言葉と共にシルバースキンは崩れ腕輪に、腕輪は更に核鉄へ戻る

「なんとも言い難いが…つまりコートを着ている事を忘れていた」

泣き笑いする少女を抱き寄せ、擦り、撫で、慰め
ようやく少女が寝付いた頃、重要な事に気が付いた

「ああ………名前をまだ聞いてなかったな」

夜は明けていく

朝日が照らすは少女と男が休む木陰

余りある悠久の時間を二人がどう過ごすかは……

4話・見知らぬ土地で考えも無しに動くと言つ事（後書き）

短くてすみません。睡魔の波状攻撃に我が艦は沈没するであります。

ユニーク見たら1時と4時が多いみたいです。

なるべく夜は1時を目標に書き上げたいと思います。

ここまで読んで頂きありがとうございます。

ネギいつでのの？ 暫く出ません

このペースで書くと十話越えても出てくるか怪しいです

遅筆、スローペースですみません。

誤字・脱字等あれば御指摘ください

次回

第五話：真祖

初の戦闘描写に挑戦します。

5話・真祖（前書き）

ユニークがどんどん上昇してます…

やはりネギま！という有名作品をベースにしているからでしょうか
完全に予想外です

5話：真祖

ああ神様。

真祖の特徴で何が”健康な体に高い身体能力、長い寿命に溢れる才能”だ！

非常に難しい儀式の上に成り立つ上位種じゃないか…

ハイデイルイトウォーカー

つまり吸血鬼が駄目な物も特に気にする必要が無いって事だ

あの日から数日が経った

少女の名はエヴァンジェリン・アタナシア・キティ・マクダウエル
可愛らしい容姿に似合った素晴らしい名前だ

素直にそう褒めると無言になってしまったのだが……キザ過ぎただろうか？

キティと呼ばれる事を非常に嫌がるのでエヴァと呼ぶ事にした
実に可愛いと思うのだが…

真祖の身体というモノを考察してみたが
様々な作品でニンニク嫌いな理由が解った

鼻が利きすぎるのだ

意識して抑えればいいのだが不意打ちで嗅ぐと頭がクラクラする

そうそう、場所が判明した

ここは英国

今は英国のある街に来ている

遠目に見える優しそうな老神父。彼がエヴァを吸血鬼に変えたとい
うのだ

よりによってエヴァはアイツを殺すつもりらしい
エヴァの憎しみも動機も解る、いやそれこそ正当な権利なのかもしれない

だがこんな少女が殺しをしても良いものか

俺とて最初の殺しは尾を引いた

善とも悪とも言わないが、それでも

それでもだ

俺はこの子には犯して欲しくは無いのだ

「エヴァ…殺すのは一旦待ってはくれないか？」

「…どうして？」

「彼が君を吸血鬼に変えたというなら、逆に君を人間に戻す事も可能かもしれない。」

「え…？」

「あくまでも可能性だけど、儀式の上に成り立つのなら…それにも
しフィードバックがあっても今なら…。」

「わかった…。」

夜

俺はたった一人でシルバースキンを纏い教会へ入る

「どうしました？この様な時間に神の御家に。」

「神父。あんたに問いたい事がある。」

「なんでしょうか銀の子羊よ。」

「エヴァンジェリンという子を知っているな？」

そう告げると柔らかい雰囲気醸し出していた神父が途端にいやらしい程の笑みを浮かべ出す

「ええ知っていますとも。汚らわしい吸血鬼だそうで…全く嘆かわしい事です。」

「ハツ白々しいな神父。貴様がそうしたんだらう？」

数秒の沈黙

「おやおや…そこまでバレてしまっているんですね？」

「突き出すや殺すなどは言わん。あの子を人間に戻せ。」

「戻すうううう？これは異な事を！人なぞに戻せ等とは？！」

笑みは強くなり堪え切れなくなったのか卑しい笑いが漏れだす

「貴様…何を言っている？」

「吸血鬼！それも真祖！！最強種！！！！人の立てる限界点にして頂点！そこへ立たせてやったのです！ならば喜び歓喜に打ち震える事はあっても恨んだり戻らう等とは思わないはずですよ！」

手を大きく広げ一人ごちに大演説を繰り広げる神父

「しかあああし！その最強種へ至るのは非常に難しい！既に失われてしまった物故に術式が完成したか確かめるには実験しかないのでああああある！」

「だから…だからエヴァで試したのかつ！！！」

「ふ、ふ、ふはははは彼女は初の成功例ですよ！いやあ運がいい！ふひひ私も彼女には感謝していますよ！おかげでこの身も真祖と成る事が出来た！」

「何…人…殺した？」

無意識に握りしめただろう拳からギリギリと音がする

「んっんー…覚えてませんなあ！しかし問題は有りませつえええん！私が超越的な生命を手に入れた以上、その礎となつた者より多くの方が救われるのでえす！」

「どこまで…腐つていやがるんだテメエ！」

「ん？んっんー？やり合いますかあああああ？真祖の私とニンゲン（劣等種）の君があああ？勝負になりませええん。……しかあああし？少年少女の血は吸い飽きましたあああああ！どうでしょう劣等種よ私にその血を捧げなさああああああい！」

飛び掛かってくる神父…いや元神父

俺はその挙動に反応する事が出来なかつた

元神父の拳が俺の胸へと吸い込まれる

ドゴオッ

「…なああああんですか?!この感触はああああ!」

元神父は手を押さえて悶える

「貴様の狂気では俺の身体にかすり傷一つ付ける事は出来ないッ!」

「小癩なあああ劣等種の分際でええええ!」

純粹な殴り合い

技も技術も無い力任せの殴り合い

俺の身体にはただの一撃も通らず、神父の身体には無数の打撃が入る

だが瞬く間に神父の傷は再生される

「ふははは素晴らしいいい素晴らしい!やはり真祖は素晴らしい
!」

高笑いにおぞましさをすら感じる

「ならばこれでどうだ!」

神父の死角からの顎への一撃

「ゴッ」

ガラ空きの首に必殺を

グシャア

叩き込むッ

耳障りな喉が潰れる音と共に神父は吹き飛ば

「幾ら最強種とはいえ…脳を潰されてまでは蘇らぬだろう？」

礼拝堂の影にまで吹き飛んだせいかな姿は見えないが
感触から考えて必殺だったと断言できる

「さて…あの口調からして資料があるはずだ。戻る方法もあるかも
しれん」

俺は教会の居住部分に入り家探しを始めた

真祖と言うモノを、吸血種というものに対する理解が足りていなか
った

…故に気が付かなかった
仕留めきれていないという事実

S i d e 神父

こぶっ…こひゅーこひゅー

笛の様な呼吸音

我が身を打ち破ったのは只の…頑丈なだけの劣等種
自分がヒト程度に追い詰められたという事実は憎しみへ

「ガッ…カハッ…許さんぞ…劣等種…めえええ」

真祖の身体は肉体を修復していく
完全に潰れた喉を、瓦礫が突き刺さった肺を、潰れた細胞の一つ一
つを

脳が揺れる、目が泳ぐ、意識が流れる
だが意志だけは殺意だけは、憎しみは憎悪だけは膨れ上がる
それだけを依り代にユラリと幽鬼の如く立ち上がり

「ごふっ…アレだけは渡さぬ…劣等種…殺してくれるわあああああ
！」

男の言と共に指輪が光りだす

「ふ…ふははは！！ワズ・エイワズ・ソラウ火精召喚、槍の火蜥蜴
108柱！！」

炎の蜥蜴が浮き上がり居住スペースへと雪崩れ込む

S i d e E n d

S i d e E ヴァンジエリン

待っている。そう言われても身体は神父を殺せと囁きかける
心は彼と離れたく無くて
だから秘密で覗く事にした

あの神父は私を実験台にして自らも真祖になっていた
もし私そのまま襲いかかっていたら死んだふりをして生き延びて
いたかもしれない

いいえ

それどころか返り討ちにあっていたかもしれない

だけど彼は圧倒的な強さであの神父を打ち破った

彼なら安心だと気を抜いた

あまつさえ約束を破らないように戻ろうとさえした

私はソレを後悔する

神父は魔法使いでもあった

神父の魔法で彼が私の為に入った場所は吹き飛ば燃えている

私が油断したばかりに…私が安心したばかりに…私が……

私のせいで彼を失った

彼は私のせいで死んでしまった

憎い憎い憎い憎いあの神父がニクイ

自分から全てを奪ったアイツガ

家族を生活を人生を幸せを…なによりソーイチローを

「うわああああああああああああ」

気が付いた時には私は飛び降り、その勢いそのまま神父に飛び掛かっていた

S i d e E n d

家探しを始めて数分。ソレは実に簡単に見つかった

パラパラと捲るも戻す方法なんてどこにも書いてはいなかった

「エヴァッ！！！」

「アアアアアアア……アア……あ……？」

「落ちつけエヴァ！俺は大丈夫だソイツから離れて俺の後ろへ！」

混乱の抜けないエヴァも呆けたように俺の声に従い離れる

神父はあれ程のダメージを喰らったと言うのに再生を始める

「なあ神父？貴様の言うとおり真祖は最強で不死身だろうさ……でもその状況で灰すら残らなければどうだ？」

神父の身体が再生するに従いビクビクと跳ねだす。完全再生まで数秒

「地獄に堕ちる糞神父」

やる事は解っている

右手を引き腰を沈め、ただ打ち出すだけだ

身体に纏った炎が引く動作と共に右手に収束、打ち出される拳に乗って発射される

「焼き尽くせ……火雷神の息吹」

赤熱した炎球は神父を巻き込み礼拝堂の長椅子ごと焼き尽くし教会の分厚い石壁を破壊し霧散する

騒ぎに集まる村人の頭上空高く、エヴァを抱えて跳躍

また深い森の中へ

道中

エヴァは俺の胸で泣きじゃくる

「ソーイチローがね…ヒック。死んじゃったって思ったらね…身体がね思わず動いたの…ヒック」

「すまなかった…ほら俺は火傷一つ無いから…」

「私には…ソーイチローしか居ないのに」

「解った。解ったから泣くな。俺は離れもしないし…ああエヴァより早く死なないと誓おう。」

「ほんとに…？」

「ああ本当だ」

その時のエヴァの顔は何よりも輝いていて…

風に流れる金の髪が何よりも美しく…

同時に日巫女様の悲しい笑顔を見た。そんな気がした

5話・真祖（後書き）

駄目だああああああ
なんか戦闘出来て無い！

ネギま！つてぶっちゃけバトル漫画だよね？！これは不味い
次の戦闘までに川上稔先生の小説を読んで勉強しようと思います

ここまで読んでくださった読者様方に最大級の感謝を

次回

マギステルマギ

番外編：設定説明 11・01更新（前書き）

やはりオリジナルキャラクターやオリジナル武装の説明は必要ではないかと

書いてみました

番外編：設定説明 11・01更新

柚木宗一郎の武装錬金

腕輪の武装錬金プロテウスアビリティー プレスレット 96番97番

形状：ヘキサゴンパネルで構成された腕輪

特性：変幻と能力付与

特徴：他の武装錬金の能力に変化し能力を使用者に付与する

一つの腕輪につき一つの武装錬金をセット出来る

単体でオリジナルの同一武装錬金と戦えば僅差で負ける程度

の出力

魔法の発動体としても機能する

方向性

主人公は最強では無く最堅。

シルバースキンの状態での蛇。

岩は砕け散り魔法障壁は容易く崩れ一打一打が生身で受ければ致命傷クラス。

柚木宗一郎の顔

PEACE MAKER 鐵 の土方歳三を温和にした感じの顔。

声

中田譲治さんと江原正士さんの声を足して二で割ったイメージ

年齢

22歳 ただし18歳に見えなくもない。
ただし思考はおっさん臭い。

核鉄と武装錬金は明らかな世界の異常の為、学園結界の適用外となる。

100人が100人、核鉄を見た瞬間に違和感を感じる。
ただし直接掛けた認識阻害は適用される。

元風祭の祭司にして102代目日巫女の巫女守

永遠かもしれない原作主人公 黄金原こすもが100代目。

なお本作は101代目が西渡 美春に決定し継いでから20、30
年前後と考えてください。

フリーバーとしての役割以外ありませんが。

巫女守^{みこもり}

日巫子を守る。名前には必ず“日”の字が与えられる(日嗣・日照
など)。

よって主人公には日宗という名が与えられていた

詳しくはネギ・学園編に入ってから回想等で説明します。

大戦期編オリジナルキャラクター

近衛騎士 騎士団長ルーシディティ・ウインスレット

CV田中理恵さん

剣の腕は帝国でも5本の指に入るほどの騎士。

また彼女は決して兜を付ける事がなく、戦の邪魔になることも承知
で髪も伸ばしている。

これは例え乱戦となっても自分が健在である事を知らせ、士気を鼓
舞させるためである。

ヴェラシオ・ウィンズレット

CV藤原啓治（簡単に言えば 野原ひろし）

飄々としつつも優秀な指揮官であり、魔法剣士。

撤退戦のあとの疾走の中、宗一郎と気が合い最近では暇さえあれば酒を飲もうと忍び寄ってくる。

弱点：娘

NEW 白銀騎士団副隊長

麻帆良過去編オリジナルキャラクター

天船巴

女性・中学生・セレブ

たおやかな美貌と優しいげな微笑み、優雅な物腰に、教養と礼節。

名家の娘として育った巴はどこからどうみても深窓の令嬢。

ただ一つ、そのどうしようもなく墮落した魂から漂う腐臭を除いては……。

完全なる世界の人間。生粋の陰謀家。

19xx。帝国首都にて公開処刑。

七里千明

女性・中学生・二重スパイ

異常な程地味で特徴の無い外見と存在感のなさが彼女の特性である。性格は陰気。明るい場所や賑やかなイベントを嫌い、他人との触れ合いを厭う。

一人静かに読書をし、音楽を聴く時間を好む。

MM元老院が完全なる世界へ送り込んだスパイ。

仕事は仕事と動くが大勢がどう動こうと一切興味を持ってない。

実は多数に接するのにも関わらず自身の名前を覚えている宗一郎の存在が嬉しい。

もし、天船と共に居なければクラスの人間は彼女の名前を思い出せないだろう。

New! 生存。

織戸静馬

男性・中武研講師・69歳

元職業暗殺者。

殺しても死なない男として裏では有名な男だったが吸血鬼と疑われていた為、賞金は真祖・吸血鬼解放により取り消された。

古武術をベースに古今東西の格闘技をミックスした独自の徒手格闘術を使う。

その技量は無手で上位の魔法使いを仕留めるほど。

古希を目の前にした老人だが、その気迫には老いの二文字は見当たらない。

非常に好戦的。

一応完全なる世界に雇われた。

19xx。宗一郎との戦闘により死去。

獵犬編

美奈瀬夏樹

女性・ティンダロスの獵犬総指揮・年齢不詳・元一般人

代々続いた吸血鬼狩りの一族の娘。

父と入り婿である夫はエヴァンジェリンに討たれた。

元々のコードネームは”鋼鉄の防人”

吸血鬼から一般人を守るというスタンスに生きていた。

今では復讐の炎に燃えている。しかし被害は最低限に抑えようとする気持ちは残っている。

夫を失った日に右腕を切り落とし夫の作品である義手を身に付けた。

美奈瀬の義手

伸縮し、電気を放つ素材不明の赤い義手。

コラ！ザドルノフとか言わない！

黒須左京

男性・ティンダロス幹部・年齢不詳・魔法使い

主に内部粛清や吸血鬼の完全消滅を担当する魔法使い。

属性は雷の一元特化属性。雷を槍へ形成する事に特化した魔法使い。

終戦直前にメガ口の軍人であった妹を亡くした。

それ以降美奈瀬に協力する形で宗一郎を追い続けた。

魔法の発動体は右手の骨に埋め込んだ指輪。

ティンダロス

対吸血鬼部隊

個人的な恨みや金目的で集まった集団。

麻帆良襲撃事件にて壊滅。

修学旅行篇

一条・九条・鷹司・e t c

京都の名家衆。

近衛もその中の一つ。

詠春は紅き翼。つまり連合側に付いていたが他はほとんど帝国側に付いていた。

フエイト

帝国の皇子であると伝えているが……。

月詠

原作よりイっちゃってる少女。斬り合いを好む。

小太郎

原作そのまま。

天ヶ崎千草

幼少期の設定等を変更。

スクナ

飛騨の大英雄。朝廷に敗れ死去。本山近くの霊場にて封印中。
原作比2倍程度の強さ？

NEW!

龍宮真名のアーティファクト 蛇の段ボール ” s n a k e s n

e a k”

効果：段ボールを生み出す。

段ボールには種類がある。産み出す時に種類を選択する。

段ボール爆弾。 段ボールスタングレネード。 段ボール戦車。 ラブ段ボール。

ただの段ボール。 認識阻害の掛かる段ボール。 段ボールハウス。

どこぞの世界でどこかの誰かが使いこなした段ボールが流れ着いたモノ。

使用者は何故か段ボールを被りたくなる魔のアーティファクト。スネエエエエエエ。

アーニヤのアーティファクト 炎熱籠手、 火炎の靴

効果：炎系の魔法の威力を純粹に上昇させる。

戦時中炎族の為に製作された武器の原型。オリジナル

闇の魔法の大幅劣化、低負担、炎のみ高威力の兵装。

炎族は固有の火炎同化スキルがある為籠手と靴しか存在しない。

*アーニヤが原作でネギと成就すれば変更有り。 当分無さそうですがね。

番外編：設定説明 11・01更新（後書き）

全設定では無いですが増えればまた書き足していこうと思います

6話：マギステルマギ（前書き）

ラブひなの世界とネギま！の世界って同一軸上で考えてもいいんでしょうか？

京都神鳴流的な意味で

映画見ながら書いてるんですが
アイムレジェンドの序盤の、こっつ…息の詰まる雰囲気ってすごいですね

6話：マギステルマギ

神父の糞野郎を地獄に叩き込んで数週間

武装した一般人や魔法使いと言った所謂賞金稼ぎの連中が俺達を襲う様になった

「なあエヴァ…もしかして神父の件は不味かったか？」

「えっと多分神父は関係無くて吸血鬼っていう件で来てるんだと思うよ？」

首を傾げながら答えるエヴァ。ああ…可愛らしいなあ

「吸血鬼だから？人間ならまだしも魔法使いまで出てくるのはどうしてだい？」

「吸血鬼にはみんな賞金が掛かってるんだよ…」
悲しそうな目でエヴァは答える

「でもまああの程度の賞金稼ぎなら問題ないな」

エヴァの頭をぐりぐりと撫でながら思う

只の人間ならばどうやって来ようと敵では無い
おかげで俺はシルバースキンを脱げないが…

日中の炎天下でも俺は問題なく動けるし
何より俺はともかくエヴァは魔法が使える

認識阻害という魔法は随分便利なものだ

この明らかに不審な恰好で街に買い物へ行ける

しかし…人間が敵になるとは悲しい事だ

以前は人を守り、神を鎮め己を殺して生きてきた

人間は味方ではなかったけれど

明確な敵ではなかった

今では…

殺す意志を持って挑みかかってくるのだ

幸い殺し殺される覚悟を持っている敵は非常に少ない

けれどエヴァと二人こうして何にも縛られる事無く自由に生きる事が出来ている

全く…不幸なのか、はたまた幸運なのか

「そーいちろ？」

「ああ…すまない。考え事をしていた」

考えに没頭してせいで撫でる手は止まるわエヴァの言葉を聞き逃すわとしてしまったようだ

「むー」

ぶんむくれるエヴァを宥めすかしつつ聞き逃した言葉を探る

「だからね！魔法使いもこれからドンドン来るんだよ?!」

「大概の魔法使いは…えー立派な魔法使いだっけ？とにかくそれを

目指してるんじゃないか？」

この世界では魔法使い様達は9割9分ぐらいが立派な魔法使い
マジステルマジっていうのを目指してるらしいが

長つたらしい話をまとめると他人の為に魔法を使って人を助ける魔
法使い

イメージで言えば…スーパーマン

そついうもんだと考えていたのだが

「吸血鬼はね倒すべき悪なんだつて…生きてる事が罪なんだつて殺
しに来るんだよ」

ガツデム

この間から何人が来てる魔法使いは賞金目的じゃなくてマジステル
マジを目指す善良魔法使いつてわけか…

「大丈夫だ。生きてる事が罪になんてならないさ。エヴァは俺が守
ろう。賞金稼ぎからも魔法使いからも、この世界でエヴァに牙向く
ありとあらゆるモノから…な？」

片膝を付きエヴァの小さな手を取り大仰に宣言する

「そーいちろー」

エヴァは困つたような顔で頬を紅潮させている

「な、お姫様？」

がはっ

冗談めかしてお姫様と呼んだらぶん殴られた

しかし

ああ…解った

死ぬ前もそして今も俺は変わらない

俺は俺と俺の世界の為なら何でも出来る

翌週

俺の興味は自分たちに一体いくらのお金金額がかけられているのか
と思

賞金稼ぎを一人捕えてみた

「なあ賞金稼ぎさん。俺達に一体幾ら掛けられてるのか教えてくれないか？」

「お…女の子には\$100万、お前は\$80万だ」

「なんでそんなに高いんだ？」

「あんた等には最初吸血鬼とその仲間って事で結構手頃な賞金額だ
つたんだが…その」

小便をまき散らしかねない顔でガタガタ震えだす

「なんだ？殺さないから言ってみる？な」

「何人も返り討ちにあつてて…頼む助けてくれ」

「殺した事はないはずだが？」

「何人も帰ってきてないんだ…お願いだ話してくれ…」

顔は鼻水と涙でぐっしより正直首を掴んでいるのも嫌で仕方が無いのだが

あああ…鼻水が手袋に垂れたぞ糞っ

「そーいちろー？こっちは終わった…よ？何してるの？」

「いや俺達に幾ら賞金が掛かってるのか丁重に訪ねているだけだよ？」

俺が今立っている場所は崖の淵、丁重に質問している彼は全裸靴下で首を掴まれ浮いている状態だ

「早くしないと日が暮れちゃうよ？」

「そうだな。じゃあ御希望に沿って離すがいいかね？」

男はガクガクと必死に頷く

「ああ！早く離してくれ！」

パツと離すと男は茫然とした顔で崖下へと消えていった

「…そーいちろー？」

他の賞金首は全裸で縛り上げて街に転送しておいた

「なあエヴァ？」

「なあに？」

「コテンと首を傾げるエヴァ。ああー々可愛らしいな

「魔法を教えてくださいませんか？」

6話：マギステルマギ（後書き）

実はストックがここまで何ですよって話。

レーベンスシュルト城ってどこにあるんだよ！？っていうのが止まってる理由です

ここだよ！って知っておられる方はコメントでお願いしますorz
誤字・脱字・アドバイス等ありましたらご御指南、御指摘お願いします

次回

魔法の力

7話：新大陸（前書き）

ええいレーベンスシュルト城はアメリカにあつたんだよ！！！！！！

オリジナル展開に既に入ってるけどもつと入ります！

7話：新大陸

「魔法なら使ってたよ？」

「んーあれは魔法というか何というか何で出来るかわからないんだ」

「じゃあね…練習するなら広い所が必要だよ？」

「それじゃ暗黒大陸か新大陸行ってみるか？」

「新大陸？」

ああエヴァよ。コテンと首を傾げて聞くのは辞めてくれないかい？
その俺はそういう路線では無かったはずなのだが…
思わず抱きしめたくなくなるじゃないか

「ああこの海の向こうになコッチの人間がなくて無い大きな大きな大陸があるんだ」

多分まだ発見されてないと思う。史実が同じなら百年戦争決着後何年も経つてからのはずだ。

「魔法使いも？」

「んー…いやあいつらは飛べるから別かもしれないなあ」

相手は魔法使いだけになるだろう…しかし、新大陸くんだりまで追いかけて来るんだ

よほどの覚悟が無いとこれないだろうさ

「でも土地だけ考えれば恐ろしい程大きいぞ？」

普通の人間が上陸するまでに何とかしてコレを極めて魔法を習得しなければならぬ

この世界を壊せるもの…歴史が似たようなものなら事件が起きるのは間違いなく魔法世界

表の歴史の流れが狂うとそれこそ俺自身が滅びの引き金を引く事になりかねない

大戦中は魔法世界に籠る事になるだろう

だからこそ…

新大陸

「おおおおおお！そーいちろー！地平線から向かって来るのは何??？」

「あ…れ…は…」

砂を巻き上げ木を折って天高くって…

「竜巻だっ逃げるぞエヴァ！」

「ほえ？」

ぽかーんとしているエヴァ

「だから竜巻だつてー!!」

エヴァを横抱きに抱えて洞窟まで

「ハア…ハア…」

「そーいちろ？」

「いいかエヴァ？自然災害には勝てない幾ら俺達でもだ。いいな？」

いや防げるかもしれないが試したくはないな!!!

しかし

新大陸に来て良かった

人はいるけれどいきなり襲いかかってきたりはしない

あちらの人間から言わせれば原始的と言って蔑んだりするのだろうか
俺としては彼らの方が余程理性的に話せる

エヴァも少しだけ丸くなってきた

俺としては同年代の子達と同じ様に学校に行つて欲しいのだが
そんな事が可能な所なんてこの地球上の何処にも存在しないだろう

「魔法球があればもっと練習できるんだけどなー」

ある日エヴァがそう言いだした

「魔法球？」

「ジオラマ、箱庭みたいなものかな？その中は外と時間が違うんだよ」

「それは…欲しいなあ。エヴァもこの間から作ってる人形がはかどるしな」

「なっ………！」

顔が一気に真っ赤になってフリーズしてしまった

いやぁ外見だけどのぐらいの子が人形を持っているのは実に似合っ
つていて可愛らしいぞ？

「な、な、な、な……」

「な？」

「なんで知ってるのー！ー！」

「昼間に眠いのを堪えてチクチクと作ってるのを見たときは…実に可愛らしかったぞ？」

思いだしつつ満面の笑みでエヴァに告げ

ボグウ

「あっ……」

脳が揺れる…顎を…しまった……エヴァに体術仕込んだんだっ…たー

「ハッ！」

「（むっすー）」

「イヨウ旦那才目覚メカヨ？」

気が付いたら凄くふてくされた目を合わせてくれないエヴァと…動く人形がいた

「えーと…あー…エヴァ？」

「駄目ダゼ旦那。御主人八旦那ヲ驚カソウト俺ヲコッソリ作ッテタツテイウノニヨー」

あちゃーやっちゃまったなあ

「ああ…。すまないエヴァ…でも良く出来てると思うぞ？俺も教えて欲しいな」

見てて解るほどにペアと綻ぶ顔

「へへへー凄いでしょーチャチャゼロっていうんだよー」

「ヨロシクナ旦那！」

「ああよろしくチャチャゼロ」

いまだ痛む顎を擦りながら満天の星々の下
新しい同行者が出来た事に喜びを感じる

「とりあえずもう一度続けて唱えてみて『プラクテ・ビギナル
ールデスカット』」

「プラクテ・ビギナル　ールデスカット」

ゴウ

「オオウ。スゲーゼ旦那！」

ゴウといきなり身体が火に包まれる

「……………」

長い沈黙

「そーいちろ？」

「いや、真剣にはやっているのだが……」

魔法。

この大陸に来た一番の理由を俺はこなす……つもりだったが
だがどうした事だろうか

最も初歩的な魔法で全身が燃え上がるのだ
シルバースキンさままで生きている

「……イメージしてみて指先にこう……火を軽く灯す感じで」

「解った軽く小さく……」

指先の一点に集中し

「プラクテ・ビギナル アールデスカットオ！」

ポッ

片手から火が噴き出している

エヴァからの……視線が痛い

「リク……ラク……ラック」

「え？」

小声で何かを言っているエヴァ。聞き取れないので近づこうとする。

が

「来たれ氷精、大気に満ちよ。白夜の国と凍土と氷河を 凍る大地

！」

「なに？」

足元が凍りついて近づけない

「え……エヴァ？」

ニヤリ

いやニタリ

そう表現しても良いだろう

あの表情のエヴァ。俺は一生忘れないだろう

「気合いで…使えるようになるっ…ね？」

「待てエヴァ。落ちつけ。俺は撃たれた魔法なら吸収して使えるぞ？！！」

「大丈夫。大丈夫だよそーいちろー。ちょっと寒いだけだから…」

「アキラメロ旦那。旦那ナラ死ナナイサ。タブンナ」

「聞いちゃいない！」

「契約に従い我に従え氷の女王 来たれとこしえのやみ えいえんのひょうが 全ての命ある物に等しき死を 其は安らぎ也」

「がっ」

周囲が一瞬にして凍りつく

「おわるせかい」

ガッシャーーン

「ハアツ…ハアツ…こ、殺す気がエヴァ…」

「なんというか…シルバースキン。いや核鉄無かったら死んでると思っぞ俺？」

「さ、もう一度唱えてみようかそーいちろー？」

「プ、プラクテ・ビギナル アールデスカット」

ポッ

ようやく指先に火が灯ったのを確認して…俺はまた意識を飛ばすことになった

魔法がまともに制御できるようになって数週間が経つ

己の武装錬金の特性がよくわかってきた

俺が使えるこのプロテウスアビリティーは神様が詰め込んでくれた知識の武装錬金を使う事が出来る

これ自体が魔法の発動体にもなっている

それから教会で起こった事だ

俺はシルバースキンで魔法を受けた時はじくだけではなく纏う事が出来る

コレを言ったらエヴァは何やらブツブツ言いながら考え込んでしまった

纏う事が出来ない魔法は理論上無いみたいだ

いずれ広範囲殲滅呪文も取り込めるかもしれない

ただし制御しないと俺が吹き飛ぶ羽目になるが…

とりあえずエヴァの…その思い起こすのも恐ろしいスパルタ

とにかくそのお陰で魔法の射手。サギタマギカというらしいが、それは習得する事が出来た

過程は…

割愛しよう。思い出す事が俺には出来ない。出来ないのだ…決して

「旦那…涙フケヨ」

7話：新大陸（後書き）

駄目だ。固まらない。

原作のある大戦期とか学園祭の話は構想出来てるのに
もう百年二百年ガッツリ行こうと思います

初期構想が大戦期スタートだったんですよ…
でも…それだと私が持つて行きたい話に繋がらない！

ここまで読んでくださりありがとうございます
拙い文ですがこれからもよろしく願いします

次回

「要塞レーベンスシュルト城 3 vs 50」

追って来た魔法使いの団体さん

二人を殺すためだけに要塞なんてもんを作ってた
ここ新大陸で吸血鬼と魔法使いの決戦が始まる

8話・要塞レーベンスシュルト城 前編（前書き）

何があっただんでしょうもうすぐ50万PVです。

本当に卒倒しかけました

お気に入り登録も40件に届こうかしております。

皆様ありがとうございます。

それでは感謝もそこそこに本編に入らせていただきます

8話・要塞レーベンスシュルト城 前編

Side 魔法使い

「情報は確かなのだろうか？」

「ええ勿論ですよ真祖は向こうの大陸まで逃げました。ハーミット殿」

豊かな白いヒゲを蓄えた老人と色素の薄い少年が会話する。

「ならばマギステルマギとしては討伐せねばならん…早速召集を掛けるとしよう。感謝するぞ少年」

「いえいえ当然の事をしたままでです」

そう言い残し少年は水で転移した

「相変わらず気味の悪いガキじゃ…」

その晩、マギステルマギを目指す魔法使い総勢50人が召集された

Side End

「なあエヴァ…？」

「なあに？」

「あそこに城が見えるんだが虜気楼だよな？」

「ケケケ旦那現実見ヨウゼ。アリヤアドウ見テモ城ジャネエカ」

俺は今とんでもないものを見ている

新大陸の砂漠のど真中に白い城が建つていやがる

ご丁寧に認識障害に探知結界を張った白亜の城

ここに魔法使いがいます。って看板を立てて狼煙上げてる様なもんだ

「エヴァ俺は避ける事を提案するぞ？」

「沢山いそつだもんね……」

「……モウ見ツカッテンジャネーノカ？」

「言つな……」

言ってる傍から封鎖結界が俺達を閉じ込める

城には何重にも防御結界が張られている

「とりあえずエヴァ……年齢詐称薬を飲んでおけ」

「わかった」

ゴクンとカプセルを飲み込むと見る間にエヴァが妙齡の女性に変化する

「ケケケ旦那ドーブルヨ？」

前方から途方も無い数の魔法の射手が放たれる。

「俺が単身で突っ込むエヴァはココから大規模な奴を連発、チャチャゼロは俺が逃した奴をぶった切れ」

「アイサー旦那！」

「わかった」

Side ハーミット

「ハーミット殿！例の吸血鬼と思わしき二人組を結界内に確認しました！！！」

「うむ…封鎖後まずは魔法の射手にて波状攻撃を行う」

「ハッ！全員構えー！サギタマギカ詠唱開始！」

「火の精霊！59柱集い来りて敵を射て！魔法の射手連弾、火の59矢！！！」

「風の精霊！59柱集い来りて敵を射て！魔法の射手連弾、風の59矢！！！」

「光の精霊！59柱集い来りて敵を射て！魔法の射手連弾、光の59矢！！！」

「雷の精霊！59柱集い来りて敵を射て！魔法の射手連弾、雷の59矢！！！」

「氷の精霊！59柱集い来りて敵を射て！魔法の射手連弾、氷の59矢！！！」

「闇の精霊！59柱集い来りて敵を射て！魔法の射手連弾、闇の59矢！！！」

6属性の同時攻撃。怒涛の勢いで魔法の射手が大地に降り注ぐ
一発二発なら怪我で済もう

だが滝の様な一撃は当たれば肉体など残るはずもない

「やったぞ！」「真祖を仕留めた！」「正義の勝利だ！」
そんな部下達の声が入る

「馬鹿者！安心するでないわ！相手は不死ぞ！続けて中位魔法にて
攻撃せよ！」

ワシの声に部下達は真剣な顔に戻り詠唱準備に入る

「総員！中位魔法詠唱開始！」

「……来たれ雷精、風の精！雷を纏いて吹きすさべ南洋の嵐！雷
の暴風！」

「……来たれ氷精、闇の精！闇を従え吹けよ常夜の氷雪！闇の吹
雪！」

「……来たれ火精、光の精！光を放ちて破壊せよ！火の閃光！」
「」

粉塵が消え去らない内に中位の魔法が大地を蹂躪する

「止めはワシがやる……」

ワシが進み出ると部下達はザッと両側に避ける

「ヴァン・ホール・デン・バーグ 契約に従え炎の霸王！来れ浄化
の炎！燃え盛る大剣！ほとばしれよソドムを焼きし火と硫黄！罪あ

りし者を死の塵に！！燃える天空！！」

轟音

術者であるワシの耳にすら音が届かないほどの大破壊
粉塵が収まるにつれて凄まじいまでの破壊の爪痕が露わになる

「…ふむ。いくら不死と言えどもこれで終いよ。ホッパー君」

「ハッ！総員警戒状態を維持！死体の確認に入る！」

どんな吸血鬼であろうと真祖であろうと我がハーミット部隊に正義
の鉄槌を下せぬものは存在せんわ
生きておっても弱り切っておるはず。後は赤子の手を捻るより容易
いわ！

「ほう。気が早いな魔法使い諸君？」

な…に？

Side End

すさまじい攻撃

魔法の射手の弾幕の中を一直線に駆け抜ける

「くううう…」

この状況で一発でもまともに当たればどうなるかは目に見えている
幾らシルバースキンとは言えダメージは免れない
ひたすら魔法の射手の横腹を殴りつけ軌道を変えて隙間を走り抜け

る戦い

相手の意志は確認した。
徹底的な殺意。殺される覚悟はまだしも殺す気で来ている
突如弾幕が切れる

「抜けたかつ…いや…」

眼前に迫るは中位魔法の嵐
大地を更に削り砂を巻き上げ蹂躪しようとする

「ロード！シークレットトレイル！！！」

間一髪で地中に亜空間を形成して潜り込み、過ぎ去った感覚を得て
再び大地に躍り出る

城の防御結界までなんとか接近出来た
もう一度シークレットトレイルを使おうと言う時

それは俺に降り注いだ

「燃える天空！」

「シークレットトレイル解除！続けてロード・ブレイズ・オブ・グ
ローリー！」

正に首の皮一枚

シルバースキンは半分程吹き飛ばされるも生きている

「なんて威力だ…」

息つく間もなく城内に侵入
全員が攻撃に出払っているのか頂上付近以外は人の気配を感じない
外壁を蹴って頂上を目指す

「ハッ！総員警戒状態を維持！死体の確認に入る！」

丁度、頂上に出ようと言う時、そんな声が聞こえた
だから俺は…

「ほう。気が早いな魔法使い諸君？」

一般的な魔法使いが大体4、50人、一際目立つ白い服に白いヒゲ
の老人、その腰巾着らしき人物
それら全てが驚愕といった面持ちで俺を見つめる

停滞した時間を動かすには一声がいるだろう…
ならば俺が告げよう

「さあ第二ラウンドと行こうじゃないか」

8話：要塞レーベンスシュルト城 前編（後書き）

なんか宗一郎が壊れてきました！
もつとキャラを持たせてやらないと…

今回ハーミットとホッパー、それからハーミット部隊なるものをオリキャラで出しました
ハーミットは高慢そうな爺、ホッパー君は執事で腰巾着キャラです。
原作にこんな吸血鬼討伐部隊なんてありません。多分！

隊列組んで魔法打つイメージがあります。織田の火縄部隊みたいに。

今回前・後編と分けさせて頂きます。
何故って？下書き無しだからです。すみません

お気に入り登録、感想、閲覧。全てありがとうございます
書く励みになります！

次回

要塞レーベンスシュルト城 後編

9 話・要塞レーベンスシュルト城 後編（前書き）

決着レーベンスシュルト城の攻防。

感想ありがとうございます！

ネギのフラグをチビチビと削っていけという電波が入りました。

褐色好きな方がいて安心しました！

9 話・要塞レーベンスシュルト城 後編

Side ハーミット

馬鹿な…ワシの魔法が通らなかつたとしても言うのか？

それも標的の真祖では無く真祖の護衛と目されていた銀の戦士

真祖なら信じがたいが解る…だがこやつは人間ではないというのか…

部下達が斬りかかるが奴の拳は剣を折り曲げへし折り、次々と昏倒させていく

手加減されている。殺さぬように、その拳を振り抜けばあっけなく頭蓋は飛び散るだろうに。

「ハーミット様！…！」

ホッパー君の声がワシの意識を覚醒させる。

「う…うむ。牽制しつつ囲い込め！こやつとて死なぬわけではない
！…！」

「…ハッ！」「」「」

Side end

飛び掛かってくる者から武器を叩き折り顎を的確に弾く

どうやらあの老人がここの頭脳であるらしい

最初は固まっていたが徐々に的確な指示を飛ばすようになった

「フウッ」

ゴッ…

周囲の魔法使いを全て昏倒させた時には壁を背に完全に囲まれてしまっていた

「チェックメイトじゃよ…しかし安心せい。お主は雇われておるだけなのだろう？ここで死ぬかこちらへ付くか言わなくても解かる事であろう？」

老人が一步進み出てそう言ってくる

「我等は正義の魔法使いじゃ。ワシらと敵対すると言つ事は悪の魔法使いぞ？」

「それで俺がそちらへ付いたとして…あの子をどうするつもりだ？」

フンツと馬鹿にするような鼻息を出すと老人は決定的な一言を吐いた
「決まっておろう？薄汚い吸血鬼には正義の鉄槌を下すまでじゃ。」

「うお前達？」

その一言に周りの魔法使い達は一斉に頷く

「そつか…ならば俺はお前達の敵だ」

「何を馬鹿な事を言っておる？頭を冷やしたまえ。幼子を守る事は確かに正義じゃがあれは童姿の悪魔じゃぞ？」

「殺すというからには貴様らにも殺される覚悟くらいあるのだろう

「？」

「勿論じゃ！しかしこの城は万全にして強固。ワシの魔法の粹を集めたゲフウツ」

「俺も…真祖だよ御老人。さて…諸君今から私は寸止めを辞める。殺されたくない者は背を向け逃げるがいい」

「総員！武器構ええ！！！」

「死ぬ吸血鬼イイイ！」

ゴシヤツ

先陣を切り飛び掛かって来た男は血を撒き散らして倒れる
後方の何人かが悲鳴をあげて逃げだす

「ゴフツ…前衛一斉に掛かれ！命を惜しむでない！こやつらを倒した暁には諸君らはマギステルマギへと更に一步近づくぞおおお！」

「「「「おっ！！！！」「」「」

先程より苛烈な攻撃

何度も身は斬撃に晒されるがシルバースキンは全てを弾く
腕の一振りでも物言わぬ死体が積算される

蹴り飛ばした魔法使いが悲鳴を上げる事も出来ずに地上へ落下して
いく

「ハアアアツ氷爆！」

「こいつ！魔法まで使うぞ！！！」

Side ハーミット

ワシは初めて吸血鬼に怖れを抱いておる

コヤツをただのボディーパーガーや魔法使いと見誤ったのが運の尽き
と言っ事か…

しかしまだじゃ…まだ終わってはおらぬ！ワシのマギステルマギへの道はまだ絶たれてはおらぬ！

「契約に従い我に従え炎の霸王、来れ浄化の炎、燃え盛る大剣、ほとばしれよソドムを焼きし火と硫黄！罪ありし者を死の塵にッ！」

「お待ちくださいハーミット様！まだ部下達が下がってはおりませぬ！！！」

「黙れ！奴らも吸血鬼を滅ぼすために死ぬのならば本望じゃ！燃える天空！！！」

爆炎は部下を飲み込み奴を飲み込み
城が崩れるかと言っほどの轟音が響く

これで倒せぬはずが無い

Side End

Side エヴァンジェリン

魔法の波状攻撃を耐えきるとそーいちろーが城の壁を駆け上がるの
が見えた

「いくよチャチャゼロ！」

「アイサー御主人！」

お城の近くに来ると何人も魔法使いが外から飛び出してきた

「ッ！チャチャゼロ！」

「サア殺り合おうぜ！！！！！」

「やめてくれええええ死にたくない！こんな筈じゃ無いんだあ
ああ」

「オイ御主人：駄目ダゼコイツラ話ニナラネエ」

「うんそーだね。でも…氷結武装解除！」

泣き喚く魔法使い達は全て丸裸にされ気絶した。

ゴオオオン

「何?!」

「御主人！旦那ノイルトコロダ！」

Side End

まさか部下ごと俺を吹き飛ばそうとするとは思わなかった
白亜の城は黒く煤け

魔法使い達は無残な焼け焦げた死体と成り果てる

「なっ…馬鹿な！馬鹿な馬鹿な馬鹿なああああ！何故貴様生きて
いるううう！」

「ああ…エヴァには感謝しているよ。上位魔法くらいなら纏えるん
だよ御老人…」

「お逃げくださいハーミット様！ここは私が足止めをギャバア」

「老人…アンタだけは逃がさない。部下ごと焼き払うのが貴様の正
義なんだろう？」

「ふざけるな！こんな事があってたまるか！ええい下がれ下がれえ
え！」

老人は口角から泡を出しつつ叫び狂う

「熱波武装解除オオオオオオオ」

炎の武装解除…

「効かな…」

「あり得ぬ！あり得ぬ！ワシの魔法がワシの魔法があああ」

燃える天空の炎が右腕に集まる

9 話・要塞レーベンスシュルト城 後編（後書き）

レーベンスシュルト城を手に入れた。テレーテッテレー
さて過去の捏造も極まって参りました

次回辺りからカリカリ時を回していることと思います

次回

城で過ごす日常

10話：真祖の優雅？な日常（前書き）

ちよつと日にちが空きました。すみません。

GWはちよつと更新出来ないと思います。

その分書き溜めます！

土曜日に松竹座で丹下左善、日曜日にタイタンの戦い観ました。
創作意欲がモリモリと湧き出て来ます！

10話：真祖の優雅？な日常

宗一郎 裁縫を始める

この城を手に入れて早一ヶ月。

最初の一週間はそれこそいつ報復戦を仕掛けてくるだろうと身構えていたのだが：

全く音沙汰なしだ

城の名前はエヴァと一緒に内部を探索した時にわかった

レーベンスシュルト城というらしい

エヴァ曰く白い砂浜に青い海が似合うとの事だが

いくら魔法の世界とはいえ無茶を言うモノだ：

こんな大きい城を持ち運べるわけがないじゃあないか。

そういえば最近エヴァが箱庭を作り出したのだが：

可愛らしい趣味だと思う。うん老人みたいだなんてこれっぽっちも思っていない。

「俺はといえば人形作りをはじめたわけだ。」

「ケケケ旦那ダレニ言ッテルンダ？」

「簡単な回想と言うやつだ。気にするな…で、これをこっちに通せばいいのか？」

「チガツ旦那ソウジャネ…アー…」

悪戦苦闘している。

魔力を込めながら一針一針作っていくのだが
残念ながら俺は縫物の経験が無い。

自慢じゃないが服のほつれもボタンの取り付けもした事が無い。
破れたり取れたらすぐに捨てて新しい物を買っていたし

「なあチャチャゼロ…」

「旦那…」

「言うな…こういう事は女の子が出来ればいいんだ。男がこういう
事も出来たら世界のバランスが崩れるぞ？」

「料理モ出来ネエ ज्याネエカ…」

「いや…食事はな？その…携帯食料をパパッと…」

携帯食料は良いぞ？十分な栄養が10秒足らずで補給できる
忍者の使う丸薬に程近いものだが中々どうして…

「ンデ御主人ニ怒ラレルト…ハア」

人形を作り始めた当初は熱心に教えてくれていたチャチャゼロも今
では匙どころか両手を投げ出して寝転がっている

「ふと思ったのだが…」

「ヤット諦メルノカ？」

「いや。ビスクドール方式で作れば良いのでは無いかと…」

「ナンドソリヤア？デモ旦那ガ作レルンナライインジャネエカ？」

「ちよつと粘土取ってくる」

「御主人ニ出ルツテ言ツトケヨー…ツテ、アア聞イテネエナ」

エヴァ 従者と共に覗く

「なにしてるんだらうね？」

「アー…ビスクドールツテ奴ヲ作ルンダトサ」

「ビスクドール？」

覗きこむ隙間の先

宗一郎は坦々とパーツをヤスリでなめらかにしていく

「トウジキツテイウノヲ作ツテ、ソレニ彩色スルトカナントカ」

「へえー…」

「ケケケ…御主人手伝イタイナラ中ニ入レヨ」

「なっ！」

「詳シク聞ケバイイジャネエカ。ソんなニ気ニナルンナラヨ」

「そ、そこまで知りたいわけじゃないよ!？」

「ケケケ御主人赤クナツテヤガルゼ」

チャチャゼロは言うだけ言ってひょいひょいつと逃げていく

「コラ待てチャチャゼロ!御主人さまを馬鹿にするなああ」

チャチャゼロ 御主人をけしかける

「御主人ハヨ…サツサト旦那二思イヲ伝エリヤイインダヨ」

「な…なにを言い出すのチャチャゼロ!」

チャチャゼロがわけのわからないことを言い出して私の頭が良く回らない

「ダカラヨ…好きナンドロウ?」

「ちがつ…そういう好きじゃないよ!」

「ケケケ赤クナツテルゼ」

自覚するほど私の頬は紅潮していく
身体が火照ってくる

「ソノ内旦那八旅二出チマウ。ソノナ気ガスルンダゼ?」

そついちろーが旅に…?どうして?

「アーアー青クナル前ニヤルコトガアルダロウガヨ」

「で、でもでもでも」

「デモ？」

「姿がこんなだし、他にも色々…そっぴちろーと釣り合わないよ…」

「バカダナー御主人ハヨオ？何ノ為ノ年齢詐称薬ダヨ？口調モ変エリヤアイイジヤネエカ」

「口調も…うっん…俺はエヴァンジェリンだ？」

「……真似シテドースルンダ」

「うっっ…」

「ホラッ年齢詐称薬ヲ飲ムンダヨ御主人」

「わかつ…ああわかつた」

「オイ水探シテンジヤネエヨ。ゴクツト飲ミヤガレ」

「んぐっ」

バツと20ぐらいの妖艶な美女が現れる

「ホラッオドオドシネエデ胸ヲ張レ。」

「…うつか？」

「デ、高笑いシテミロヨ」

「うむ。…ハハハハハハハハハハ！私がエヴァンジェリンだあー！…
こうか？」

「何やってるんだ二人とも…？」

「あ…あ…あ…うわあああああああ」

バツと窓から飛び出す御主人

「前途多難ダナ…」

宗一郎 ちよつと困った事態

ビスクドールが出来た。

ただし動かない。

しかもだ

良く考えたらこの時代まだビスクドールって無いんじゃないか？

気にしたら負けだろう

うん。でもコレは現実逃避だ。向き合わなきゃ現実と！

「宗一郎！聞いているのか?!」

「聞いている聞いているよエヴァ」

最近言葉がこう：乱暴な物に変わって来たと思っていたら
その内に常に年齢詐称薬で大人の姿で生活するようになった

そんなエヴァも可愛いなあと思っていた
なんだろう

娘が一生懸命大人の真似をしだした感じと言えば伝わるだろうか？

大人の姿で生活するようになった最近は娘というよりは妹と言った
感じがするのだ

だが現状コレは…

エヴァに組み敷かれている。

チャチャゼロが横で邪悪な笑い方をしている。

俺はわけがわからない。

「エヴァ落ちつけ。冷静になるんだ。反抗期も解るが今こんな風
にするべきではない。」

しまった。俺は反抗期を見落としていた！

アレはいわゆるグレるという奴では無かったのだろうか？

容姿から10歳扱いをしていたがもっと年齢は上
実質20歳ぐらいではないだろうか？

俺は様々なサインを見ていながら気が付けなかった！

なんたる不覚。これではエヴァが怒るのも当然だ…

「ナイスダゼ御主人！」

ゆらあと起き上がり

「ぎゅっ」「

二人の首を掴む

「サテ…セツメイシテモラエルカナ？」

「そ、そーいちろ…う？」

「旦那、チヨツ…マッ」

二人の前に降臨するは無音でシルバースキンを纏いランランと目を光らせた鬼が一匹

その日、一日中真っ白に燃え尽きた三人が屋上で力無くボケーっとしていたとさ

10話：真祖の優雅？な日常（後書き）

はい。仮契約させてみました。

でもエヴァは！ヒロインに！ならないんだ！

更新が遅れ申し訳ないです。

次回

11話：オリジナルアート

11話・オリジナルアート（前書き）

伏線って気付かれたらアウトだなあと思いました。

11話：オリジナルアート

宗一郎 アデアットしてみる

さて、強引に契約されたわけだが
決して契約をキスなどと読んではいけない。

「エヴァ：契約と言うモノは無理矢理するものではないぞ？」

「ごめんなさい」

シユンと頂垂れたエヴァンジェリン

「チャチャゼロもだ：安易にけしかけるんじゃない」

「スマナカッタゼ」

どこかこう悪気の無さそうなチャチャゼロ
もう一回お仕置きするか…？

「大体だ。俺がすぐにでも旅に出るなんて何時言った？俺はこの大陸発見までは動かんぞ？」

動く理由が無いからな…

日本に行って日本刀を手に入れたい所だが
ソードサムライXは使いにくい
シークレットトレイルは刀としては微妙だ
こちらの世界にも柚木の家があれば愛刀が手に入るのだが…

「旦那ソレダケジャナインダゼ御主人ガ強硬手段ニ出タノハヨオ」

「ほう？何か他にあるのかエヴァ？」

そう聞くとあたふたしだすエヴァ

どうしてこう小動物的呢か

「そ、そ、宗一郎は私の事をどう思っている？」

当たり前前的事を聞く

「娘や妹みたいに思ってるぞ？」

コテン

俺がそう答えると途端にチャチャゼロが手足を投げ出して寝転ぶ
ずーん

という効果音が付きそうなほどエヴァが落ち込んでいる

「えつと何か間違えたか？」

「いや、その…」

「旦那仮契約ノカード使ツテミリヤインジヤネエカ？御主人ト旦那ノ契約ダ。トンデモナイモノガデルカモシレナイゼ？」

「どうやって使うんだ？」

「アデアットと言えはいい」

拗ね出したエヴァ

「あ、ああ。アデアット」

アデアットという言葉と共に日本刀が手に現れる

手に馴染む柄の感触

桜の木をモチーフにした鍔

なにより紅く染まった刀身

「なんだ…ただの刀では無いか…」

「いや…エヴァ。感謝している。我が剣は我が手に戻った」

「旦那何力特別ナ能力デモアルノ力？」

「これはな柚木初代からの家宝であり兵器だ」

俺が生前愛用した日本刀：狂い桜

最初こそ普通の日本刀であったが悪鬼悪霊を切り捨てる内に刀身が
紅く染まり

人外に対する決戦兵器とまで言われた刀

おもむろに説明書を拾って読んでいたエヴァが叫ぶ

「なんだこれは！私達の天敵の様な刀じゃないか！」

「ドウイウコッタ？」

「こいつで斬りつけられた悪鬼妖怪、悪魔と言ったありとあらゆる
人外に傷の直りを遅延させる呪いをかける。本来は俺の血を吸わず
事で更に強化するのだが…この身ではそれも敵わんだろうさ」

「ケケケ確力二天敵ダゼ」

「それでエヴァの従者カードは何を出せるんだ？」

「む…アデアット」

エヴァの従者カードは水晶二つに変化する

「ほう遠見の水晶か」

「遠見の水晶？」

「右手の水晶が見た物を左手の水晶に映すだけだ」

「ケケケシヨボイナ」

宗一郎の仮契約カード

色調 (tonus) : 銀 (argentum)

徳性 (virtus) : 正義 (justitia)

方位 (directio) : 中央 (centrum)

星辰性 (astralitas) : 冥王星 (Pluto)

名は不死の守護者

絵は腕輪二つを装備して黒い翼を持って刀を構えた宗一郎

エヴァ 宗一郎を再現する

宗一郎が魔法を纏って戦う
実に強力で汎用性が高い技術だ

まず魔法を唱え、それを固定し纏う…
いや体内に取り込めないだろうか？

10年程考えて修練を積み重ねてきたが今日はソレを実践に移す
一歩間違えれば身体が吹き飛ぶ

「ふう…来れ氷精、闇の精。闇を従え吹けよ常夜の氷雪 闇の吹雪。
固定ッ」

中々にキツイ

「ふっ…うっ…くぁ…掌…握ッ」

出来た。完璧だ…纏ってはいないものの取りこむ事には成功した

「魔力充填”術式兵装”」

「ヤッタナ御主人」

「ああ闇の魔法の完成だ！漸く宗一郎に追いついたぞ…!!」

宗一郎 更に強化する

「気…か…そういうものは何かの例えだと思っていたが実際にある
とはな」

左手に「魔力」、右手に「気」を溜める

慎重に慎重にそれら二つを握りこみ混合させる
イメージは渦巻き

「気と魔力の合一」

11話・オリジナルアート（後書き）

ちよつと時間が無くなってしまったので続きは夜にー！

12話：修行の日々（前書き）

うへあレポートが山に…

目標：15話で大戦期に入る。

お気に入り登録、感想、評価ありがとうございます
大変励みになっております
これからもよろしく願います

12話：修行の日々

宗一郎 vs エヴァ

「判定はどうする？」

「オレガ判定スルゼ」

「今日こそは絶対に倒すよ！」

「その前に一撃でも通してみる事だな」

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック 来れ氷精、闇の精。闇を
従え吹けよ常夜の氷雪。 闇の吹雪！固定・掌握・魔力充填 術式
兵装」

試合開始と同時に後ろへ下がりがりながら詠唱するエヴァ
詠唱完成で闇の吹雪を纏った…纏った？！

「まさか俺の」

「正解。」

エヴァが真後ろに出現して蹴りを放つ

しかしシルバースキンはその攻撃を受け止める

「そう思うと思っていたぞ…エクスキューションナーソード」

剣がかすめたチップが一時的に崩れる

「気と魔力の合一」

ゴウツと魔力と気が噴き出し咸卦法が発動する

「咸卦法ツ?!」

驚愕と言った様子のエヴァ

「修練して強くなるのはエヴァだけじゃないっぞっ!」

瞬動で離れる直前に喉に左の拳がエヴァに入る

「こぶっ」

喉を潰され脳を揺らされ一時的に行動が出来なくなるエヴァ

「アル・アレック・アルゲントウム 契約に従い 我に従え 炎の
霸王 浄化の炎 燃え盛る大剣 ほとばしれよ ソドムを焼きし
火と硫黄 罪ありし者を 死の塵に 燃える天空 特殊術式「爆炎
牢」リミット90 無詠唱発動鍵設定 キーワード「はい終わり」
術式封印」

立ち上がるエヴァに蛇の構えで応戦する

半身で左手を縦横無尽にエヴァの急所と言つ急所を狙う

左腕は毒蛇のごとくしなやかに死を撒き散らす

下を狙ったかと思えば軌道は容易く上へ右へ自由に化する

常人なら一発の直撃で死に至る猛毒

エヴァはその尽くを逸らし回避してしのぐ

「何が…二回目以降は読める…だっ…」

「くくくこの身体のお陰だと思っ…ぞっ！アル・アレック・アルゲントウム おお地の底に眠る死者の宮殿 冥府の石柱」

跳んで逃れようとしたエヴァの背後に冥府の石柱が降り注ぎ退く事を許さない

「甘いッ」

しかしエヴァは羽を生やして跳躍して石柱の真後ろへ回避

「リク・ラク…」

エヴァの詠唱を確認
対象は壁の向こう

「ならば…」

冥府の石柱の一本を右拳一つで打ち砕く

「なっ!?!」

そのままエヴァの障壁を突破、胸ぐらを掴み…引き寄せつつ

「はい終わり」

術式封印を解放

燃える天空は手を起点に零距离でエヴァに直撃する

ドゴオオオン

「旦那ノ勝ちダナ」

「最初の方だけだからなあ負けたのは」

「旦那ガ雷系ノ魔法ノ対策編ミ出シチマツタカラナア」

「最初は苦戦したぞ？思いつきり電気を流してくれるもんだから死にかけてさ」

「ケケケ死ナナイダロウ？」

「おっとエヴァが復帰したな…今日はちょっと時間掛かったな」

「旦那ガ零距离デアンナ大技撃ツカラナ」

宗一郎 先を考える

真祖というものは時間が長く感じる

まあそれだけ生きているわけだが

実際修練を積んだり、新しい技術を開発していると不老不死である

事をより一層思い知らされる

10年20年といったスパンで人が極めるものを
こちらは100年200年と積むわけだ

辿り着く境地が全く違う

ただの刀の素振りでも心身込めてやればそれなりのものになる
流石にツバメを斬るなんて所業は不可能だが。

しかし時折思うのだ

もし俺がこの世界に来なければエヴァはこの日々をチャチャゼロと
二人だけで生きたのだろうか？

ここが漫画の世界だと神様は言った

しかし、こんな過酷な漫画があつてたまるか…

そろそろコロンプスがこの大陸を発見して

激動の時代が訪れる

インディアンと共に戦いたい所だが

こちらにもシャーマンの様な独自の魔法使いがいる

彼らは恐らく他の魔法使いの下に下る事は無いだろう

ならば結果は見えている…

一応忠告と助言はしたが…無駄だろう

魔法世界に入るべきか、アフリカへ逃げるべきか

いつそ日本へ逃げるといふ手もあるな

差異や時代的な齟齬はあるだろうが基本的な土地勘はある

なにより八百万の神々を招神出来るか確認しておかなければならない

日巫女様程の高位の巫女なら海外でも招神出来るかもしれないが俺
では

偶然が重なって一時的に招神出来るか出来ないかだ

これでは役に立たない

そもそもこの世界に神がおられるのか：

アフリカに逃げてもアメリカ大陸発見からでは開拓や奴隷の件で人が押し寄せる

すぐに住めなくなると言っても差支えないだろう

魔法世界は土地勘が絶望的だ

そもそも入国ゲートをどうやって通過するか

賞金首の俺達をすんなり通すわけも無い

風土、気候、生物なにもかもが異なる地

こうして次の潜伏先を考えた所で

レーベンスシュルト城を放棄するのは非常に惜しい

こちらへ来てから最長居住期間を今も更新中だ

ああ…ままならぬ

12話：修行の日々（後書き）

今回は修行風景を御送り致しました。

次回

13話：お引越し

13話：お引越し（前書き）

累計10万アクセス、ユニーク1万、お気に入り登録100件突破
しました。

ありがとうございます。

今後ともよろしくお願い致します。

13話…お引っ越し

Side ?

暗がりでも黒尽くめのローブを着たモノと白い髪の少年が話す。

「人間の魔法使いでは役不足だったか…申し訳ありません造物主^{ライフメーカー}」

「
」

「はい。エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルは確かに我々が渡した資料で真祖に。ですが銀色の戦士に回収を尽く邪魔されました。」

「
」

「は？……わかりました。…両名の観察を終了します。」

Side End

「エヴァ、そろそろ暗黒大陸に引っ越さないか？」

「暗黒大陸か…もうここは駄目なのか？」

「ああ…そろそろ大量の流入がある。恐らく今頃船でこちらに向かって来ているだろう。」

「そうか…」

「出る準備…といつてもそう持ち運ぶものは無いか。この城を捨てるのは惜しいけどな…」

「ん？持って行くぞ？」

何を言ってるんだ？と言った風で何気なく言う。

「いやいやエヴァ。幾ら魔法が万能と言った所でそんな無茶は出来ないだろう？」

「コレの中に入れていい」

ニカツと笑って水晶の様なものを出すエヴァ

「かなり前に作ってた箱庭じゃないか」

「なっ…また見てたのか！……しかし内容は知らないな？！知らないな？」

「あ…ああ」

エヴァの妙な気迫に気圧されて思わず頷く

「ハハハならば外に出ろ！私の力を見せてやる！！！」

とうつとばかりに外へ文字通り飛び出すエヴァ

「最近キャラが変わってきてる気がする…」

「ヤレヤレダゼ」

居たのかチャチャゼロ…

「ふははははははははげほっげほっ… はははははははははは！」

外に出てみるとハイテンションで城の周囲に何かを施していくエヴァ
高笑いに慣れていないのか時々咳き込むのが妙に可愛らしい。

準備が終わったのか俺の前で水晶を抱えて仁王立ちになる

「宗一郎！驚き目を見開きそして私を褒めるがいい！！」

ハアツと水晶を投げ上げると

見る間に城が中に取り込まれていく

「お…おお…おー」

余りの驚きに俺もおかしくなりそうだ

水晶の何百倍の城が余すことなく取り込んでいくのだから驚かない
はずが無い

「どうだー！！」

中に城が見える水晶を掲げて叫ぶエヴァ。

「すごいぞエヴァ！流石だ。」

褒めると言われたな頭を撫でるとしよつ。

なでなで…なでなで…なでなで…。

「旦那、御主人が溶ケチマウゾ…？」

真っ赤になってほにゃーっと垂れていくエヴァ

褒めろーと叫んでおきながら褒められ慣れていない感じがいいな！
一方俺は良く解らない電波を受信していた。

13話：お引越し（後書き）

ライフメーカー出演です。

実は私、パーティーに向かう巻までしか所持してません。故にライフメーカーがどういう風に喋るのかわかりません。」
「は原初の言語か念話に程近い物だと考えて頂けると幸いです。」

14話：暗黒大陸南下作戦と（前書き）

アフリカ地図？そんな物は覚えていません。
これより更にオリジナル展開に入ります。

14話：暗黒大陸南下作戦と

Side ?

「ふむ…闇の福音は新大陸におったか。」

「今は暗黒大陸へと向かっているようです」

白髪之交じり始めた壮年の男性と白い髪の少年が執務室の様な所で話す。

「ハーミット部隊が行方を絶った理由はソレか…賞金が200万では誰も行かん。賞金を引き上げるとするか」

「それから強力な護衛が付いているようです」

「大方従者が眷族であろう。恐れる事は無い」

「よう爺さん…とガキ。俺が行ってもいいか？おたくらがまともな仕事入れネエから身体が鈍っちゃまってよウ。人斬る感覚忘れそうだぜえ？」

「お前か…柳生栄進。今報告を受けている所だ…少し待っている。」

「へえーへえーわかりましたヨ」

「報告は以上です」

「そうか。ご苦労だったねイスタンプールの方には良い評価を送っ

ておこらう」

「ありがとうございます。それでは。」

ボタンと扉を白い髪の少年が出ていく

「君も彼の様に礼儀正しくはしてくれんかな？」

「あん？あいつは胡散くせえだろうがよ？俺みたいな真つ直ぐな人間の方がいいだろうよ。」

「はあ…本当に君はあの東洋に名を轟かす神鳴流の剣士かね？」

「クははもう神鳴流なんざとは手を切ったよ」

「まあいい。何人が志望者を連れて行け」

「ア？使えネエよあんな奴ら」

「君を単独で動かすわけにはいかんのだ」

「わかった。わかったよ。ったあー面倒臭えナアおい。」

愚痴を言いながら部屋を後にする柳生栄進

「まったく…魔法世界でキナ臭くなってきていると言つのに更に闇の福音まで動きだすか…」

溜息を付き星空を窓から見上げるのだった。

Side End

さて…どういう事だ？

アフリカに入った途端追手がかかるようになった

今回の追手は恐らく4人。それなりの使い手だろうとは思う。

「エヴァ、一旦追手を撒く。シルバースキンリバーズリバーズ」

シルバースキンがエヴァに纏わりつき拘束服に変化、さらに通常モードへと変化する。

「なんだコレは?!」

「大丈夫だソレで隠れてろ!足止めしてくる……アデアット!ロード:ルリヲヘッド」

「どこだっ?!」「探せっ!」「遠くには行けないはずだ!」

チームワークも隊列も無い魔法使い達

最も後ろで孤立した魔法使いから仕留める

ザッ

「なに?!」

「こちらだっ」

狂い桜の一太刀でアキレス腱を切断する

「うわぁああぁぁ」

「魔法の射手 砂の五矢」

続いて前列の魔法使いに砂の魔法の射手にて攻撃

「そんなもの障壁でッ」

「解除」

砂の射手はバラけ目くらましになる

「前がッ」「しまった!」

瞬動二連で後ろに回り

左手で口と鼻を押さえ、右腕で首を押さえ落とす

「 ?! 」

落とした魔法使いが地に倒れ音を出す前にもう一人に刀の柄で後頭部を殴る

「ガッ」

「なんだ?!何がどうなってるんだ?!」

混乱した魔法使いに接敵

下から斬り上げ、首に刀を突き付ける。

「うわっ…ひい!？」

「言え。どうして俺達がココに来たと解った？」

突き付けたまま情報を聞き出す。

「上から賞金の引き上げと場所を聞いたんだ！」

「賞金の引き上げ？」

「エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルが2000万から4000万になったんだ！それにハーミット部隊とか言うのを倒した従者はもう死んでると聞いたんだ！」

俺がもう死んでる？ハーミット部隊っていうのは恐らく新大陸で襲ってきた連中だろうな

「あんた新しい従者なんだろう?!でもあんたの腕前なら真祖だつて倒せる!賞金はアンタが総取りでいい!どうだ？」

「……アベアット。仲間を連れて下がれ。次に顔を見せたら殺す。」

残った魔法使いは気絶した仲間と傷ついた仲間をひきずって逃げた。

「さて…いつまで隠れているつもりだ？」

「あらま流石にバレてたか。ククク…しかしアンタすげえな?誰

一人殺しちゃいねえ」

俺が声をかけると出てきたのは
青年と言って差し支えない風体で頭をちょんまげ風にくくり顎髭を
生やし長物を背中に幾つも背負った男
そいつは気楽な口調でおどけながら話す

「けっ無反応かよ？ツマンねえなあオイ？面ぐらい見せるよ？」

「……」

さて…出てきたが困った。戦闘狂なんてもんじゃない
かなりの使い手の剣鬼だ

「他の駒はさっきので最後だよ案外小心者だな？」

やれやれとばかりに大仰な身振りを交えて話す

「ああワリイワリイ。俺は柳生栄進。いわゆる剣士ってヤツだ。仮
面の俺と殺り合おうぜ？」

柳生は返答も聞かずに槍を抜いて構える

「俺の得物は片手持ち片鎌槍。アンの首、奪い取るッ」

言い終わるかどうかの所で瞬動
肩帯とワイヤーナイフで応戦するが

「居眠りしてんのかオイッ 刺突」

片鎌に弾かれ穂先がルリヲヘッドを傷つける
仮面が予想以上に重いッ
後ろへ飛び下がるが

「下がったナ？ハツアアア雷鳴槍ツッ」

跳んだ俺の心臓に向かって雷を纏った槍が投擲される
投げた柳生は更に槍を取りだしこちらに走ってくる

「ルリヲヘッド解除。ロード：ヘルメスドライブ」

「なっ?!消えやがった!」

俺が現れるのは柳生の後方

「ヘルメスドライブ解除。ロード：ニアデスハピネス」

ドオオオオン

雷鳴槍は大地を抉り爆発を起こす。
とてもじゃないがシルバースキンで受けていても二撃目で破られて
いる可能性がある。

柳生が戸惑っている間に蝶を柳生の周囲に向かわせる。

「ナンだ?!この蝶は!どこから湧いた」

「とりあえず吹きとべ柳生栄進」

「そこかっ!」

蝶が爆発し辺りが煙と埃で見えなくなる。

だが気配で解る。生きてこちらへ向かってきている。

「ニアデスハピネス解除。ロード：アリスインワンダーランド」

「あんな爆発じゃ俺は死なないんだよッ」

そう叫んで俺へと槍を振るうがカスリもしない。

「馬鹿なッ」

アリスインワンダーランド

それは拡散状態では方向感覚や距離感を麻痺させる。
故に柳生は正確な俺の位置がどうしてもわからない。

「畜生ッ幻術の類かッ」

「降参しろ殺す気は無い」

「うるせえ！顔もまだ見てねえ奴に俺が負けルわけがねえ！」

「これから抜けだす方法は無い」

俺は少しずつ濃度を濃くしていく

濃くする程に距離感を失い遂には立つ事すら出来なくなった柳生。

しかし諦める気配は無い。

「俺を舐めるナ！爆導槍ッ」

柳生は周囲に槍をばら撒き爆破する

「そこかつ 槍雨爆撃陣ッ」

柳生の背から発射された槍が俺の周りに正確に降り注ぐ

ドツドツドツドツドツ

「へけけ…やつと面を見せたナ？」

「アリスインワンダーランド解除。ロード：激戦」

「ホウ？貴様モ槍使いかよ？やつと本気って力おい？」

「いや…これを使うに値するから出したまでだ」

「そいつは残念。お前は終わりダ。四天結界槍錬殻。」

俺の周囲に刺さっていた槍が光りを放って結界を成す。

「止めだ…神鳴流柳生の型 決戦秘奥義 真・雷光槍オオオオオオ
！」

反り返りながら跳躍、限界まで引き絞った槍が雷光を纏って放たれる。

ゴオオオオオオ

「おでれいたア…アンた…真祖より…ああ、しくじっ…たア…」

粉塵が収まり現れるのは身体を修復しながら立つ俺と
激戦に胸を貫かれた柳生栄進。

「すまん…コレを使わず普通にやってたら追手がまた来てしまっ
…」

「宗一郎ッ！今のは？」

「問題無い…そっちは大丈夫だったか？」

「ああコレがあつたからな…それでも何人が殺す事になったよ…」

「そういう覚悟で来てるんだ…理由はどうあれ…な？」

「御主人！旦那！北側カラマタ来ヤガルゼ」

「チッ…会話をする暇も与えてくれないか…激戦解除、ロード…ア
リスインワンダーランド」

チャフを散布した空間内に入った空を飛んでいた魔法使いは墜落や
激突で数を減らしていく

地上部隊も迷って同じ所をぐるぐる回り始める

この武装錬金便利だと思っではいたが

有効範囲が半径500mというのは、この場所では狭いと言え
ない。

以前エアリアルオペレーターで麻酔ガスをばら撒いたら隣のエヴァが麻酔で眠ってしまって実に大変だった事は記しておく。

希望峰

「宗一郎！海だよ」

「追手はここで完全に撒く！ロード：ディープレッシング、ロード：エアリアルオペレーター」

海上に巨大な潜水艦が現れる

「乗り込めっ」

「何デモ有リダナ旦那」

「こんな巨大な物を出すとは…流石というべきなのか…呆れるべきなのか」

愚痴を垂れ流しつつエヴァとチャチャゼロは飛び乗る。

「待てえ！！！」

「気体調合開始。酸素過剰散布。…魔法の射手、火の一矢」

潜水艦に飛び込みながら酸素を噴出

乗り込む直前に酸素濃度の高い場所に火の一矢を打ち込む

ゴオウという爆炎で吹き飛ばされる魔法使い達

それを尻目に俺達はアフリカ大陸を脱出するのであった。

そこから暫くはまた平穏な日々が続いた

時折街に立ち寄り食料を買い込み潜水艦で旅をする。

この時代、俺達の潜水艦を襲える物は存在しない。

まあいた所で突撃すら可能な潜水艦に何が出来るのか。

道中妙に大きな烏賊に纏わりつかれたが難なく排除する事が出来た。
あまり美味しくなかった事をココに記しておく。

エヴァが妙に武術に興味を持った年には日本に連れて行ったが
正解だったようだ。

やはり日本の武術は素晴らしい…。

油断すると俺でも投げられるような合気術を身に着けていた。

俺はというと別荘に入れたレーベンスシユルト城で魔法の練習に精
をつぎ込んだり

核鉄を使いこなす練習を延々と繰り返した

武術としてはシルバースキンを着れない状況を鑑みて硬気功を身に
つけたりした。

時折街へ出た際に襲撃される事もあったが

難なく大抵の者をあしらえる様になってきた。

十分な力を付けてきたと俺自身満足している

だから俺はエヴァに俺の計画を打ち明ける事にした…。

14話：暗黒大陸南下作戦と（後書き）

どうして神鳴流は太刀がメインなのでしょう？
月詠みたいなのや、槍が居てもおかしくないのに。
槍や薙刀の方が使いやすいと思うんですけど…

片手持ち片鎌槍は田舎の実家にありました（笑）

こんな技ありませんよ！

突き刺すより薙ぐ方が（ry

とまあ閑話はさて置き

次回

15話：魔法世界

15話：魔法世界（前書き）

つ、遂に魔法世界入り。いいのかこんなペースで？！

15話：魔法世界

喉が通らない、口腔内が粘つく。胃はキリキリと締めあげられる。息をするのももどかしい。冷たい汗が背中を流れ続ける。

魔法使いの本拠地と言っても良い場所でエヴァと二人ゲートを通過する。

バレれば流石に一貫の終わり。

周りの魔法使いに紛れて通過していく。

「可愛い娘さんですね？」

「ッ…え、ええ…自慢の娘ですて。」

一般の魔法使いだろう…突然話しかけて来るから正直心臓が止まりかけた。

まあ核鉄だから止まらないっちゃ止まらないのだが…
それでも精神衛生上余り良くない。

しかし不審に思われてはいけけない当たり障りのない返しをする事にする。

「奥様はいらっしゃらないのかしら？」

ああよりによってお話好きの方ですか…。

「ええ先立たれてしまいました…魔法使いにはこちらの方が暮らし

やすいですから…」

「あらごめんなさい…」

ふう…これで切り抜けただろう

「これから何処へ行かれますの？」

なん…だ…と？

何処へ行くかなど決めているわけが無かるうツ…

そもそもさっきの話の話を聞いたら普通会話を辞めるだろう?!

「一応ヘラスの方へ行こうかと考えています…妻の実家もあること
ですし」

「あら！私もヘラスに住んでいますのよ！奇遇ですわ！」

蟻地獄にハマった様な気がするぞ…？

もうすぐ出口だというのに

俺には地獄の入口に見える…

エヴァはさっきから無言。フォローさえしてくれない！

孤立無援か!?

「そ、それは奇遇ですね…おっ…やっと出口ですね」

「ええ！よろしかったらヘラスまで御一緒にしません？」

なんだこの女！俺に恨みでもあるのか?!困らせたいのか?!

「遠慮しておきますよ…」

「私も昨年夫を失いまして…貴方のお気持ちは解るのよ。でも遠慮しないで！辛さを一人で抱え込む必要はありませんのよ？」

……。

一瞬ばかりとしてしまったぞ？！

正義の味方とか誇りある悪とかそういうレベルじゃない！
俺はどうやらお節焼きの未亡人に捕まったようだ…。

「いえそういう事ではなく…娘に魔法世界を見せてやりたいもの
すから…」

「あらそういうことなの…一緒に一緒するわ！男性だけではお困りにな
る事もあるでしょう？」

善意の行為なんだろう。

普通一般なら実に親切で素晴らしい行いかもしれない。

…でも小さな親切大きなお世話と言っ言葉があつてな？
魔法世界にあるかわからないけれども！

現実逃避で魔法世界へ侵入した方法を思い出してみる事にした。

「宗一郎…賞金首がゲートを通過できるわけなからう？」

「そこでだ…コレを使う」

飴玉をドンと出してみる。

「旦那ソレ年齢詐称薬力？」

「そうだ。俺が+10歳、エヴァは半分に割って-5歳。親子として入る！」

「無茶だ」

「無茶ダナ」

「…即却下か」

「当たり前だ宗一郎は黒髪で私は金髪だぞ？どう考えれば親子になる？」

「ソコカヨ」

「染めて…あー…ヘラス族が母親なんだよ」

「通るわけがないだろう…」

「ソモソモ魔法使ツテタラバレルンジャネエカ？」

「「あ」

「ヤレヤレダゼ」

「そうか…魔法で無ければいいんだなロード：クロム・クレイドル・トウ・グレイヴ」

「なんだそれは？」

手に現れたダガーを見てエヴァが一步引く。

「キドニーダガーの武装錬金。特性は年齢のやり取り…使った事は無い。」

「待て！なんだそれは！？何かで試してからするべきだろう？ちよつやめつ…ぬわー」

ちよいん。

「……………」ぶつすーとむくれたまま手を繋いで突入する。

ちなみにチャチャゼロは武器を外してエヴァに抱かれている。

回想終わり。

現実逃避は終わりを告げる。

ようやくゲートの外

「ああ…マダム？まずは喫茶店でお茶でもどうですか？」

「マダムなんて余所余所しいわ！フローラと呼んでくださいな！」

「ではミスフローラ。俺を見て下さい」

「え？」

「あなたは速やかに家に向かう。」

「ワタシハ速ヤカニ家ニ向カウ。」

「俺の事は思い出せない」

「私ハ、ゲートデ出会ッタ人ヲ覚エナイ。」

フローラは虚ろな眼差しで飛行船へ向かって行った。

「まだまだ暗示の魔眼は修練が必要だな」

「キティ…口調」

「その呼び方も好きではないと言っただろう！」

「シッー静かに！また次のお節介なのが来たらどうするんだ？」

「あらあらお人形さんみたいなお子さんですねー」

悪夢は繁華街に出るまで続いたという。

Side テオドラ

衛士と共に街に出てきた所を襲われて一人ぼっちになってしまった…。
ワガママを言って衛士を減らしたのが悪かったのじゃろつか…。

「へへっ逃がすと思っただかよ第三皇女様？」

「寄るなッ…衛士達をどうしたのじゃ！」

男は心底愉しそうに言い放った

「その辺に転がってるだろうさ。さて来てもらおうか？」

も、もう駄目じゃ逃げ場が無いわ…お父様、お母様

男の手がワシの腕を…

「ぶるっぱー」

掴もうとして奇妙な声を上げて吹き飛んでいきおったわい…どうなつとるんじゃ？

「貴様！何をしやがる！衛士の生き残りか？」

いつの間にかワシの後ろに銀色の男が立っておった…

「と言う事はさっきのゴロツキは貴様の仲間か？子供一人誘拐するのに大層な事だな？」

む、子供じゃと？

「うるせえ退かねえとブチ殺すぞ？」

「やってみたまえ…しかし早くしないと衛士達も辿り着いてしまつぞ？」

「なにっ?!」

後ろを振り向く男…致命的な隙じゃの…

バチン

「ぶぱあー」

ワシを連れて行こうとした男はデコピンを喰らって吹き飛んでいき

おった…

強いのお…

欲しいのお…

「テオドラ様あああああ」

今頃衛士達が来ても遅いではないか…生きておっけてくれて嬉しい
が…。

「て、テオドラ様お怪我はありませんか？」

「うむ大丈夫じゃ。こやつが守ってくれたからもう」

「それは良かった…。ああ貴方は先程の…ありがとうございます！」

「いや、問題無い。では…」

む?!ワシは去ろうとする男?のコートをむんずと掴む。

「……その…離して欲しいのだが…?」

「姫様？」

「お主ワシの専属の護衛になるのじゃ！」

「いや俺は……」

「ワシはヘラス帝国第三皇女のテオドラじゃ！お主は何という？」

「むう……。俺の名前はゆずっ……………シトーだ。」

「こやつ……堂々と嘘をつきおった！……！」

「そんなもの見逃がすと思うてか？」

「本名を名乗るのじゃ」

「姫様。助けて頂いたのですからそのような……」

「柚木。柚木宗一郎だ」

Side End

街の外れで襲われていた騎士の様な連中を助ける
なんと護衛対象を見失ったというではないか……

無視するのも寝覚めが悪い。ということでは協力したまでは良いが……

よりによって見つけてしまった。

「へへっ逃がすと思ったかよ第三皇女様？」

「寄るなッ…衛士達をどうしたのじゃ！」

先程のゴロツキの頭だと思わしき男と見るからに育ちのよさそうな女の子。

「その辺に転がってるだろうさ。さて来てもらおうか？」

はあ見過ごせるわけが無いだろう…。
すまんエヴァ…午後のティータイムにはどうやら間に合いそうになり。

震える女の子の手を掴もうとする男

「ロード：シルバースキン」

女の子の後ろへ着地、男に蹴りを入れる。

「ぶるっぱー」

すぐには起きれないほどの威力だったはずだが…跳ね起きた男は興奮して喚きだす。

「貴様！何をしゃがる！衛士の生き残りか？」

あの程度じゃ足止めが精一杯だろう？

「と言う事はさっきのゴロツキは貴様の仲間か？子供一人誘拐するのに大層な事だな？」

「うるせえ退かねえとブチ殺すぞ？」

あれだな母親の胎内に知性を置いてきたらしい。

「やってみたまえ…しかし早くしないと衛士達も辿り着いてしまうぞ？」

「なにっ?!」

後ろをバツと振り向く男…おいおい…空飛ぶ豚がいる！並の奴に引っかつたな

まあ隙だらけの好機だ。瞬動で接敵。

バチン

「ぶぱあー」

顎に完璧なデコピンを叩きこむ。アゴピンだろうという無粋な突っ込みは無しだ。

「テオドラ様ああああああ」

やっと来たか…。さて俺は逃げたそうかな？

「て、テオドラ様お怪我はありませんか？」

「うむ大丈夫じゃ。こやつが守ってくれたからのう」

女の子の笑顔を見ると守って正解だったと思う。

「それは良かった…。ああ貴方は先程の…ありがとうございます！」

「いや、問題無い。では…」

テオドラ…おいおいヘラスの姫様か?! よし逃げよう。そう判断してコートを翻し去ろうとするが…

前に進めない…。

嫌な予感が猛烈にするが後ろをゆっくり振り向くと、コートの裾を掴んでいる皇女様。

「……その…離して欲しいのだが…?」

「姫様?」

よし衛士援護したまえ! ……ってオロオロするだけかっ?!

「お主ワシの専属の護衛になるのじゃ!」

なんか聞き逃したい言葉を言われた。

「いや俺は…」

「ワシはヘラス帝国第三皇女のテオドラじゃ! お主は何という?」

なんか…記憶の中にある人物に非常に被るのだけでも

「むう…。俺の名前はゆずっ…」

不味い不味い不味い不味い! 本名名乗りかけた! 偽名、偽名は……
子は英語でシトラス? だっけ?

「……………シトーだ。」

シトーっと見て来る姫様

「本名を名乗るのじゃ」

くっ

「姫様。助けて頂いたのですからそのような…」

仕方あるまい…どうせエヴァ以外知られていないさ

「柚木。柚木宗一郎だ」

「柚木じゃな!では」

「護衛は断る」

「何故じゃ!?!」

「今別件で護衛があるのでな…依頼は受け付けない。」

そもそも真祖とバレたら不味いだろう!?

「では約束するのじゃ!次の契約は私と結ぶのじゃ!」

「わかった…それぐらいならいいだろう。」

小指を突き出してくるお姫様

正直勘弁して欲しい

「わかったわかった誓おう。次の契約は君としよう」

「約束じゃからな！」

「ひ、姫様！そろそろ戻らないと」

「む？もうそんな時間か？」

「では俺もお暇させてもらおう」

有無を言わせず走り去る

「約束じゃぞー！ー！ー」

断言しよう。今はまだ幼いあの子とこの先も関わる事になると。それh確実に安寧を奪うと。そんな確かな予感を携えて俺はエヴァの下へ向かったのだった。

あの日から数年

帝国は連合へ侵攻を開始した。

15話：魔法世界（後書き）

すみませんハイペース過ぎたと思います。

次回からようやく大戦期編です。

速度は落とします。

初心者に約600年はキツイという事ですorz

誤字脱字等あればご指摘ください。

次回

テオドラの願い、遅れてきた英雄。

16話：テオドラの願い。遅れてきた英雄。（前書き）

大戦勃発から時は進み
グレートブリッジへ至る

16話：テオドラの願い。遅れてきた英雄。

ヘラス帝国の連合への侵攻に端を発した戦争は周辺諸国を巻き込んでの大戦と化していた。

正に泥沼の戦争。

停滞し始めた戦場。

そこへヘラス帝国は一大作戦を展開。

大規模転送による直接攻撃。

予測すらしていなかった連合は首都の喉元グレートブリッジを奪われてしまった。

俺はその頃たった一人で魔法世界にいた。

数か月前になる

俺とエヴァは大戦期の混乱に乗じヘラス帝国内の国境付近のゲートで旧世界へ脱出しようとしていた。

封鎖寸前へ滑り込む事が出来たのだ。

だが俺達を襲ったのは殺戮だった。

石柱が降り注ぎゲートを押し潰し、火が逃げだす者を焼き払う。

こんな時期に脱出を図るのは女と子供が中心だ。抵抗らしい抵抗も出来ない。

俺が出来る事はたった一つしか無かった

エヴァを文字通り投げたのだ。

そうして俺は崩落に巻き込まれた。

因果な事だが核鉄は主の生命力を増幅させる。
真祖の身体は死を許さなかった。
だから俺は生きている。

崩落の瞬間に庇った少年と俺だけが生き残った。

今となつてはテロなのか連合の攻撃なのか帝国の作戦なのかは解らない。

結果として言える事はエヴァとチャチャゼロは旧世界へ俺は魔法世界へ離れ離れになつてしまったという事だ。

「テオドラに頼るべきなんだろうな…現状それ以外は考えられる方策が無い。」

もう約束した時から何年も経ってしまったが…
虫がいい話だ。

俺を覚えてるわけが無いだろう…。

「そう思いつつ城まで来てしまったんだがな？」

「オイその怪しい奴！何をしている?!」

番兵か？しかしどうやって中へ入ろうか…
いきなり入って覚えて無かったら拙いしなあ

「ふむ…数年前の依頼を果たしに来たわけだが…まあ覚えているかも定かではないがな？」

「何を言っている！こちら正門、不審者がいる！連合の者かもしれ

ん至急応援を寄越せ」

捕まれば入れるがそれは少し拙いな

かといって騒ぎを起こせば余計に悪化するか？

ワラワラと出て来る兵士諸君。

逃げてても…八方塞りとは面倒な

混乱が頂点を極めそうな時、以前見た顔が声を上げてくれる。

「あ、貴方はいつぞやの！」

おお…なんたるご都合主義。

助けた衛士の内の一人か？

オロオロしてた奴以外いまいち覚えていないのだが…

「あの時の契約を果たしに来た。兵を引かせてテオドラ皇女の所へ連れて行って貰えると助かるのだが？」

「わかりました。お前達！この方は敵では無い。武器を納めろ！」

「いやあ驚きました。まさか本当に来て下さるとは…」

「なるべく受けたくは無かったのだが…生憎国境付近のゲートで攻撃に見舞われてね」

沈痛と言った面持ちで衛士は口を開く

「ああ…あの…。まさしく外道の行いです。連合は女子供も容赦しない外道の集まりです。」

「しかし喉下を取ったと聞いた。戦争終結も早いのでは？」

「い、いえそれが…丁度ソレで問題が起きた時に貴方が来て下さったわけで」

言葉に詰まる…いや選んでいる？

連合の反攻作戦でも展開されたのか？

「なにが」

「ここがテオドラ様のお部屋です。詳しい話は中で」

「あ、ああ」

何があったのか聞こうとするも遮られてしまった。

しかし…なんだこの城は？

戦争中だというのに静かすぎる

コンコン…コン…コンコン

ノックが…符丁か？

「入れ」

「近衛騎士ルーシディティ・ウインスレット入ります。」

「失礼する」

「お…お主、本当に…本当に来てくれたのか！」

「テオドラ様」

「ルーシー結界を」

「御意。私は後ろで待機します。」

ルーシーの詠唱で多重結界が作られていく。

「一体どういう状況なのか説明して貰えると嬉しいのだが…」

ここまでで解るのは

信用出来ないものが多数城内・城外問わずにいる事。
…それこそ外へ近衛騎士が行かねばならないほどに。

「宗一郎と呼んでもいいかの？」

「問題無い」

「余り堅苦しいのは困るのじゃ…崩してくれると嬉しいの？」

「宗一郎でいいぞテオドラ皇女」

「う、うむ。それで宗一郎は既に解っておるかもしれんが…」

「城内にスパイと敵ばかり、信用できるのは衛士とその近衛騎士、それから俺だけと言った所か？」

「流石じゃの…それで」

「君を守ればいいのだろうか?」

「違うのじゃ!妾の衛士達を助けて欲しいのじゃ!」

どういこうした

「僭越ながら私が説明致します。現在姫様の護衛は私と衛士一人のみです」

「おいおいお姫様から戦争中に護衛減らしてどうするつもりだ?他の衛士や騎士はどうした?」

「全員グレートブリッジへと…」

最前線かよ…騎士や衛士が行くような戦場じゃ無いぞ?

「しかも昨日何者かに転送装置を破壊されて…」

「最前線で孤立無援、四方八方敵に囲まれて拳句反攻作戦でも始まったか?」

無言で頷く近衛騎士

最悪だな

誰かがチエスをしているみたいに事態が動いていやがる

「助けに行くにも方法が無い。俺が離れたらテオドラ嬢がヤバくなるだろう?」

「それでも衛士達を見捨てたくは無いのじゃ！頼む宗一郎…お主しか頼める者がおらのじゃ…！」

自身の保身に走らないか…よっぽどテオドラの方が正義の魔法使いだな…。

「こんな無茶な依頼は初めてだ」

見るからに肩を落とすテオドラ皇女と納得顔の近衛騎士

「一度だけだ。出来る限り助けて見せよう…我が主？」

16話：テオドラの願い。遅れてきた英雄。（後書き）

変換しようとしたら書く所がせり上がる！

一発で変換出来ないから厳しい！

いきなり妙な動きをしないで欲しい…orz

次回

17話：グレードブリッジ撤退戦

17話：グレートブリッジ撤退戦（前書き）

昼頃MGS・PW買いに行ったらカマを掘られました…orz
避けようがないじゃないですかー！

みんな信号は守れよ！絶対だからな！

脚が痛い。。。。

17話：グレートブリッジ撤退戦

「すぐに出る」

「しかし大規模転送の機械は無いのじゃぞ？」

「問題無い…正確な座標と周辺地図、出来れば写真があれば助かる…それからそこに以前俺が助けた奴もいるな？」

「衛士の何人かが…写真は残念ながらありません。」

「これが地図じゃ！」

「…これなら行けるか？」

「そうじゃ！コレを持って行くのじゃ！」

手渡される細身の騎士剣

「コレは？」

「テオドラ様直属の人間のみが持っている騎士剣です。現地でソレを見せれば…他の兵士も貴方の姿に警戒するものはいないでしょう」

「助かる。ロード：ヘルメスドライブ」

腕輪は大き目の六角形の板に変化する。

ヘルメスドライブ。その特性、限定条件下における索敵及び瞬間移動。

なお瞬間移動の距離、回数は創造者の精神力、体力に比例する！

「座標入力。索敵………発見。座標点の至近位置に対象を捕捉。」

固唾を飲んで見守る二人。

「では…柚木宗一郎。出る！」

Side 帝国兵指揮官

最悪の状況だ…上との連絡はつかない。増援も物資も来ない。疲弊した我が軍の事を知っているかのように連合が動き出した。

ここまでで二日。

先程たった5人程度の魔法使いが連合から投入され
遂に前線は総崩れ…

たった五人に何が出来ると言うのだ……くそっ
ここももうすぐ陥落する。

一人でも多くの将兵を国元へ帰してやりたいが…

「全軍防御を厚くしろ！これより撤退を開始する！！」

「中尉！それは困るな？戦線は維持せよという陛下の御命令では無かったかね？」

「しかし本営との通信は二日前！転送も無い！これでは撤退以外に

無いでしょう！」

「駄目だ。陛下が増援を送ってくださいに決まっている！戦線を維持したまえ中尉！」

くそつくそくそ！文官に何が解る？！

増援？敵に囲まれ孤立した軍に？ふざけるな！

大体この戦争は何かがおかしい

どうして前線にテオドラ様の護衛がいる？！

衛士だけならまだしも近衛までいるじゃないか！
拳銃に指揮系統が二つある…まるで…

「どうしたのかね？早く指示を撤回したまえ」

「くっ」

「その必要はない」

私はその瞬間を生涯忘れないだろう。

銀に輝く一人の戦士

直感があった…万の兵士より頼もしい…と。

S i d e E n d

到着した戦場はまさしく地獄絵図

魔法と銃弾が飛び交う戦場

指揮官は……あの天幕か

降り立ち天幕に近付く

声を掛けられても騎士剣を見せれば済む。

天幕の中に入ろうとした時、中から言い争う声が聞こえた

「しかし本営との通信は二日前！転送も無い！これでは撤退以外に無いでしょう！」

「駄目だ。陛下が増援を送ってくださいに決まっている！戦線を維持したまえ中尉！」

「どうしたのかね？早く指示を撤回したまえ」

「くっ」

馬鹿が…この戦場に最早戦闘を続ける意味など無い

「その必要はない」

「誰だ貴様は!？」

「テオドラ様の指示を届けに来た。全軍退却せよ一人の落伍者も出さな。以上だ」

「きつ…貴様がテオドラ様の指示で来たとは限らんだろう！」

「いやマキユール殿。彼は確かにテオドラ様の直属の兵士だ」

「なんだと証明できるのかねヴェラシオ！ヴェラシオ・ウインスレ
ット中尉！？」

「彼の持っている騎士剣はテオドラ様の近衛騎士にしか渡されてい
ない。紋章を見たまえ」

「ぐ…ぬぬ」

「そう言う事だ。殿は俺が引き受ける。全軍速やかに撤退したまえ
…それとも…何か撤退できない理由でもお有りかマキユール殿？」

「い、いやそのようなことは…無いのだが…撤退の準備を指示して
くる。失礼させてもらおう」

無然とした表情で天幕から出ていくマキユール

「ありがとう…助かったよ。ええと君は」

「柚木だ。あんたはヴェラシオ・ウインスレットで間違いないな？」

「あ、ああ」

「部下に伝える手で持てる武装と食料だけを持って撤退せよと。後
は俺が引き受ける」

「君だけで？！無茶だ腕利きの部隊を残す！」

「その腕利きに近衛騎士が入ってるだろう？それでは困る」

「しかし…」

ザザッ

「前線から順次撤退中です！指示を願います！」

「そら指示を出してやれ。全軍だ全軍残らず撤退しろ。最悪橋ごと叩き潰す」

決意。撤退の邪魔をするなら橋だろうが土地だろうが叩き潰してやる…。その決意を言葉に乗せて

「わかった…すまない、頼む」

なんとかルーシーの親父さんは逃がせたな…

「ロード：ジエノサイドサーカス。さあて…やるとしますかゲートの仇：取ってやる」

Side 紅き翼

「おや…急に魔力の大きい者が転移してきたようです」

「増援か?!」

「いえ…単騎の…ようですね」

「なんだ単騎じゃ気にすることも無いぜ！いくぜ、百重千重と重なりて走れよ稲妻！千の雷!!」

「ナギ！一旦退くんじゃ！何かくるぞ?!」

千の雷を撃つも前線は既に撤退済だった！

どういう事だ?!

師匠が退けつて言ってるけど意味がわからないぜ?

グレートブリッジの中央部から何百何千と放たれたソレは連合軍と俺達を吹き飛ばす

「こりゃやべえってレベルじゃねーぞ?!みんな生きてるか?」

「大丈夫じゃ…だから退けと言っただろう?」とゼクトのお師匠

「ええ大丈夫です。凄まじい攻撃でしたね」とアル

「今のはミサイルか?」と詠春

「ひゃっはー燃えてきたぜ!」とラカン

「彼が放ったようですね」

「戦場であのような目立つ格好とは…囿かのう?」

「囿でもなんでもいいぜ!」

「あつ馬鹿飛び出すなラカン!」

Side End

「チツ…今ので残ったか…しかし主要戦力は奪った。あれがヴェラシオの言ってた増援5人か…ただものじゃ無いな」

5人の中の筋肉達磨がこつちに突っ込んで来やがった…
あれは…剣か？

迎撃に飛びあがる

「ロード：ソードサムライX、アデアット」

ガギンツ

空中での剣劇

「てめえツ強いな！」

重いツコイツ本当に人間か?!一撃一撃がやたらと重い。
剣を切っても次々に出しやがる

ズンツとお互い橋に着地

「もう剣は使わないのか？」

「ああ！俺は素手の方が強いからな！」

「解除、アベアット」

俺と筋肉達磨のインファイト

残りの4人は……まだ動かないか。

筋肉達磨の拳が何発か入るが通らないが、相手も痛がる素振りを見せない
それに明らかに急所に入っている攻撃にも倒れない
無茶苦茶だな……

「ロード：バスターバロン！！！」

ズンツ

その叫びと共に巨大な金属の腕が筋肉達磨を橋に叩きつける。

「ガツ…アツ」

ビクンと一度大きく跳ねるとそれっきり動かなくなった。

筋肉達磨が倒されたのを見て4人が一斉に飛び掛かってくる。

「バスターバロン解除。ロード：フェイタルアトラクション」

手に大戦斧が現れる。

それを中央から二つに分離させダブルトマホークとして両手に構える。

まずは剣士。

「ハアアア斬岩剣！」

ガキンツ

打撃の瞬間に重力操作で全力で弾き飛ばす。

更に後ろに忍び寄っていたローブの男に攻撃の先を向ける。

しかしローブの男はゆらりとギリギリの位置でかわす

「避けたと思っただかね？」

が、遅れてきた重力に飲み込まれて壁へと強かに打ちつけられる。

「来れ虚空の雷、薙ぎ払え雷の斧！！」

紅い髪の男が恐らく頭、しかし厄介さで言えばジェノサイドサーカスを耐えた少年！

「フェイタルアトラクション解除、ロード：ヘルメスドライブ」

「消えた！？」

「ナギ！油断するガッ」

ヘルメスドライブで後頭部を殴りつける。

「雷鳴剣！」

スカッ

「なっ！？」

「お前神鳴流だな？奥義の前に叫ぶのをやめたまえ。」

「くっ！？何者だ」

剣士の剣撃をヘルメスドライブでいなす
振りの隙に服を掴み…

「転送！」

空高くに共に転移

「なにかっ」

「ヘルメスドライブ解除、ロード：バスターバロン！行くぞ？流星
ブラボー脚・改！」

ドバーン

バスターバロンの脚と共に海に消えていく剣士。

「詠春！くそっ百重千重と重なりて走れよ稲妻！千の雷！！」

「バスターバロン解除、ロード：ソードサムライX」

魔法使いの千の雷を刀身で受け下げ緒を通して飾り輪から放出。

「なっ」

そのまま呆ける魔法使いを逆胴で切り捨てる

「かはっ」

しかし入りが甘かった様だ…トドメを刺しておくべきか…

「あんた何者だっ」

「それは死者への手向けか？」

「柚木殿ー！ー！撤退は完了しました！後は私と貴方だけです！」

「残ったのかヴェラシオ？！くっ…おい若造、生き残りたければ仲間を早く拾って助けておけ。筋肉達磨以外は殺してないつもりだ」

筋肉達磨は…まあ無理だろう。決ったしな…。あれで生きてたら…真祖並だな。

「早く！連合から増援が出ました！」

ヴェラシオの下へ向かいつつ準備をする

「ソードサムライX解除、ロード：フェイタルアトラクション」

「何を？」

「橋を壊す。そう言ったはずだ。後ろへいたまえ」

「あ、ああ」

「激突時に中心の重力方向の強弱を最大。橋の解体を行う」

振り上げ橋に振り落とす

瞬間的に小型のブラックホールが発生し橋を歪め、砕いていく
破壊は収まる事無く拡大していく

「フェイタルアトラクション解除、ロード：ヘルメスドライブ 行くぞ掴まれヴェラシオ！」

撤退中の兵士に合流すると、橋が崩落して行くのが見えた。
その崩落と共に兵士たちが歓声を挙げる。

俺達のグレートブリッジ撤退戦は成功に終わったのだ。

S i d e ナギ

俺達はグレートブリッジから敵を撤退させたとして有名になった。
しかし俺達の心は曇っていた
たった一人に負けて橋も壊された…これで喜ぶ事が出来るわけが無い。
幾らバカな俺でもそれぐらいは解る

「いやはや…チートやバグは貴方やラカンだけだと思っていましたが…まさかチートやバグを倒すようなチートバグがいるとは…」

「しかも最初の一斉攻撃以外は手加減された上での…」

「次は勝つ…!!」

あつれ？ラカンて俺よりバカなんじゃねえーの？

「あいつとはまた違う戦場で戦う事になると思うぜ……」

「我々が連合の英雄ならば彼は帝国の英雄といった所ですね」

「名前ぐらいは聞いておきたかったな……」

「詠春。名前だけなら解ってるぜ……詠春と同じ国の出身だユズキって呼ばれてたぜ」

「情報が少ないのお……銀のコートにユズキという名前、奇妙奇天烈な装備の数々。強敵じゃな」

俺達は確かに落ち込んでいた……でも負けっぱなしにはならねえぜユズキ……！！

S i d e E n d

17話：グレートブリッジ撤退戦（後書き）

はい遂に最強状態で暴れました柚木宗一郎。

連合に甚大な被害を与えて紅き翼の面々を有無を言わず蹴散らかし橋をぶつ壊して撤退。

あれ？撤退じゃなくて強襲なんじゃ……。気にしてはいけない。

次話ですがGW後の更新になります。

ですので

ルートの投票を取りたいなあーと思います。

1：英雄ルート（つまりハーレム）で中から正義馬鹿共を変えていく。

2：戦犯ルート（仮契約はしますがヒロインはテオOnly）外から変えるかもしれない。

どちらでも学校編はあります。

戦犯ルートはシルバースキンが完全使用不可になります。

英雄ルートは重い制限が付く事になります。

学園祭は超側に付くのが濃厚です。

ネギはどっちでも苦難の道を歩む羽目になってます。

英雄ルートならフルボッコは確定です。

どちらでもネギフラグは立つ前に踏み折られます。

どちらでも完全なる世界は大幅強化されます。

はあ？！英雄ルートでテオたん一筋にしるよ！という意見も一応受け付けますw

何らかの方法で意志を届けて頂けると幸いです。

では皆様、GWをお楽しみくださいませ。

18話：英雄の帰還（前書き）

御無沙汰でした珈琲時間です。大変お待たせしました。

大方の予想通りですがむち打ちでした。軽いものなので執筆にそこ
まで影響はかからないと思います。

ルート投票ありがとうございました。

結果発表は後書きにてー！

18話：英雄の帰還

Side ?

想定外の事態だ…。やはり命令を無視してでも始末するべきだった。真祖化計画は成功、しかしその後の回収で失敗。

あれからミスばかりだ！

村人を思考誘導して追い詰めさせて、いざ回収と言う時に奴が降って来た。

思い出すのも忌々しい…。

拳句に完成した資料は焼け落ち、情報を提供した男は消滅。

何もかも！あの銀色の男の所為だ！！！

幾度も襲撃を退け払いのけ…

あまつさえ魔法世界にまで侵入！

直接僕達が出向いてゲートごと押し潰したのに肝心の真祖の方がいない！

造物主は言った。

もう真祖は良い。放っておけと！

だから戦争拡大の方に力を入れた！

だというのに…紅き翼だけでも頭が痛いつて言うのに、またしても奴が出てきた。

プププ…プププ…

「…通信？こんな時に…仕方ない。」

Side end

Side マキユール

「はあはあ…私だ！マキユールだ！」

「なんだい？この事態への申し開きかい？」

本当に最悪だ。こいつらの組織に付けば出世も思いのまま、将来は評議会などと聞いていたのに…

この期に及んで申し開きだと？！

転送機を壊して増援を絶つのはそちらの役目だろうが…！！

「こんな事になるなんて聞いていないぞフェイト・アーウェルンクス！」

「何を言っているんだい全く。」

「私は！あの作戦で将兵を連合へ突き出し、亡命できるという話ではなかったのか?!」

「ああ、その事が…。亡命する所の話じゃなかったらどう？」

「わけのわからん増援が出てきた上に！第三皇女の暗殺にも拉致にも成功していない！どうということなんだね…！！」

「こちらに聞かれても困る。大体、君の立場なら直接手を下す事も出来るはずだろう？第三皇女を拉致して連合へ渡れば良い。」

「出来るか！！あのわけのわからん奴が四六時中護衛しているんだぞ?!」

興奮しすぎて咳が止まらんわ…。とにかく逃げなくてはならんだ！捕まれば私は失脚所か…処刑だぞ!!!

「ほう…彼が護衛を…それは良い情報を聞いた。礼を言うよマキユール。」

なにを言っている？

「礼より先に私を逃がしたまえ！もう追手がかかっておるんだ!!!」

「残念だよマキユール。短い付き合いだったね」

「待て！待ってくれ！おい!…:…くうう」

通信機からは雑音以外帰って来ない。

私は…切り捨てられたのか…。

ガンガンガン

「マキユール殿！ここに隠れているのは解っている！速やかに投降したまえ!!!」

絶望の音と死神の声。

「やあマキユール。」

そこへ聞こえるのは救いの神の声。

「フェイト・アーウェルンクス！！助けに来てくれたのか？！」

「障壁突破・石の槍」

ドスッ

「カッ…フグツ…何を……」

「君の役目はここまでだ」

天使に見えたのはその実、悪魔だったか…。

私は胸に突き刺さった石の槍をただ見つめながら…。

Side End

「そうか…奴は自分で命を絶ったか。」

「ああ、我々が踏み込んだ時にはもう…。」

帝国を裏切り、情報を流し、暗殺を企てていたと思われていたマキユールは自ら命を絶った。

「だがこれでテオドラ皇女が狙われる心配が無くなったわけではない。」

「ああ当然だ。今も娘を傍に付けさせている。」

「だがヴェラシオも良く考える。コレと同じ服装を守護騎士や衛士に着させるとは…」

苦笑いしつつ掴むのはシルバースキンの裾。

「ある程度の牽制にはなるさ…あの撤退作戦で君は帝国の英雄だ。」

「四六時中付いていても問題無い…っど？」

「ああだから式典にも戦勝会にもそれで出て貰ったわけだ。」

「流石に式典では不味いのでは無いかと思ったんだがなー？」

「そこは英雄の特典だと思えよ銀・騎・士・様」

「言つな恥ずかしい…」

あの撤退戦の後は忙しかった。

何故か手薄だった敵地を帝国領に入るまで疾走。

先頭をヴェラシオの副官が率いて最後尾を俺とヴェラシオで兵士を見捨てる事無く拾う。

帝国領に入って基地に辿り着いた時なんか皆汗だくで、息も絶え絶えで、

怪我をした奴も、二度と前線に出れない様な奴も、老いも若きも笑っていた。

やったぜ橋を落としてやった！ざまあみる連合、俺達には銀騎士殿が付いている！だ。

全く…思わず照れちまった…。

首都まで戻った時には撤退戦だと言つのにまるで凱旋パレードの様だった。

そのまま飲めや喰らえやの戦勝会。

いやあ…シャンペン掛けてこつちの世界にもあつたんだな…。

シャンペンじゃなくてなんか高そうな酒だったが…。

翌日には式典だ。

誰が手を回したかなんてすぐに解つた。

満面の笑みで手を振るテオドラ皇女を見れば馬鹿でも解る。

城のバルコニーから手を振れなんて言われて出てみれば、城下には大群衆。

手を振るなんて雰囲気じゃないから右手を高く掲げてみれば大歓声。

やれ帝国万歳！やれ銀騎士万歳！

隣に並んだテオドラ皇女を見るやいなや

テオドラ様万歳！銀騎士万歳！

当初の目的の占拠と連合の首都を落とすのに失敗した負け戦だつていうのに。

まるで完全勝利を得たかのような騒ぎっぷり。

誰も俺の全身銀色のこの装備を不審がらないと来たもんだ。

無礼だの脱げだの言われない。

中身も絶世の美女だとか美男子だとか屈強な男性だの良い方向の意見しか出てこない。

これで中身が真祖の化け物だと知ったらどうなるか…。

「ああそうそう…テオドラ様が呼んでたぜ色男。」

「それを報告の次に言うべきじゃないかヴェラシオ?!というか色男ってなんだ?!」

「おっと…気が付いて無いと見える。クク、宗一郎? 娘や姫に手を出してもいいが、後ろから刺されんなよお?」

「そこは止める所だろう! 騎士として親として、それ以前に人として!」

「そうですね。お父様…少々向こうでお話があります。」

「うおっ居たのかルーシー! 姫様の護衛のはずじゃ…」

「宗一郎殿を呼ぶという簡単な事すら出来ないお父様の尻拭いです。宗一郎殿なるべく早く、速やかにテオドラ様の所へ。お父様はそちらの部屋で少し話し合いを。」

「ヴェラシオ…」

グッと親指を下に向けて送り出し俺はテオドラの下へと馳せ参じる事にする。

Side テオドラ

まるで夢の様じゃ…。

宗一郎は誰一人欠ける事無く騎士や衛士達を救ってくれたのじゃ。

妾が一人で静かに街に出たい時には五月蠅いと思ってしまうが、それでも大切な物は大切なのじゃ。

宗一郎は本当に凄い。

魔法を撃たれても矢で撃たれても平然としておるのじゃ…。

宗一郎が来てからというもの妾を狙う敵も随分と減ったのじゃ！

それにの…これは皆には秘密なのじゃが…

宗一郎は妾にだけ素顔を見せてくれたのじゃ…。

胸にビビツと響く物があったのは宗一郎にも秘密じゃ。

Side end

「どうしたテオドラ？」

「ふふふーなんでもないのでしゃー。」

最近のテオドラにはちよつと困っている。

暇があれば肩へよじ登ったり、膝の上に乗ったり、腕にぶら下がったりと…実にお猿な行動が多い。

不快かと聞かれれば、そうでは無いから余計に困る。

現に今も膝の上に乗っておられる。

「のう宗一郎？」

「ん？」

「お主が…そのう…好いとる者があるのか？」

「ブフツ」

予想外の問いに思わず嘖いてしまった…。

「笑うでないわー！」

「いやいやすまない…予想外の問いに驚いてしまった。」

「そ、それでどうなのじゃ？おるのか？おらんのかな？」

俺が愛した女性……か。

一番に思い浮かぶのは日巫女様。500年以上経っても忘れられん
のだから始末が悪い。

だが居るか居ないかで聞かれれば居ないのだろう。心の中にいるの
は別にして。

エヴァも浮かぶ。この世界で初めて会って…500年以上の時を共
に過ごした少女…いや女性。

「かつて居て、これからも居るかもしれない女性ならば。」

「むう良く解らんのじゃ…」

眉根を寄せて難しい顔をして悩むテオドラ。

「まだ解らなくてもいいんじゃないかな…？」

そう言って髪を梳きつつ頭を撫でる。

俺にとって…テオドラは只の護衛対象なのか…それとも…。

いや落ちつけ考えるな。

俺が真祖の吸血鬼と解ればきつとテオドラも拒絶するだろう。
ヴェラシオもルーシーも騎士や衛士、国民達だって…。

「信頼しすぎるな、人は容易く裏切る。過度な期待をすればするほど痛手になるぞ宗一郎。」

そんなエヴァの声が聞こえた気がした。

18話：英雄の帰還（後書き）

GW明け一発目です。ブランクは大きい！改めてそう思いました。

前話でアンケートを取りましたルート投票ですが…。

私の予想に反して英雄ルート人気でした！

戦犯ルートでもエヴァをヒロインに！という声が実に大きく…。

「仕方ない私が出てやっても構わんぞ？ん？」と

まあ首に冷気をヒシヒシと感ずるわけで。

英雄ルートをベースにシナリオとヒロインを加筆修正する事にしました。

感想が非常に参考になります。励みにもなります。

たまにエスパーの方が紛れ込んでいるようでヒヤッとします（笑）

19話：翼は折られた

「は？紅き翼が連合から追われてる？」

「ああ。確定情報だ。向こうの元老院の人間を襲撃したらしい。」

「この情勢でか？」

三つの会戦をやり合ったが…。はっきり言おう。紅き翼以外に俺を足止め出来る奴なんて存在しない。

帝国内部からの援護があつたとはいえグレートブリッジは連中のおかげで総崩れになった。

しかも今ヘラスの前線基地は崩落したグレートブリッジ近辺。連中が居なくなれば…メセンブリーナ連合は陥落する。

戦って解つたがあの中は何の意味も無く自分の飼い主に牙を剥くような狂犬ではない。

だとすれば…何かが連合内で起こつた。

それとも…。

「それからウエスペルタティアが妙に騒がしい。」

あの最古の国か…。地理的にも余り美味しくは無いし…どうでもいい国なのだが。

「中立なら中立らしくアリアドネーの様に静かにしていればいいものを…。」

「いや…そうではない。妙な宗教にでもハマったのか不審な連中が王宮周辺で確認されている。」

「ハッこの戦乱の時代だ…宗教にでも逃避したくなるだろうさ。」

「確かに…。」

「それより紅の翼だ…出来ればこちらへ引き込みたいものだ…。」

「えらく高評価じゃないか。」

「連合の英雄が裏切って帝国に付く。そうなれば連合も抵抗を辞めるだろうさ。」

「ははっ大きく出たもんだ。だが前線の犠牲は少ない方がいいからな。」

「銀騎士殿！緊急の案件です！」

伝令の兵士が焦った様子で呼ぶ。

「どうした？連合が降伏したか？」

とおどけた感じで返すも…。

「いえ、紅き翼の掃討命令です！」

まあそんな甘い事が起きるわけ無いか…。

「ふむ…この後は護衛で遠出の予定だったのだが…仕方ないその命令承ろつ。」

「気を付けてな。」

「ああ。すぐ戻れるぞ。」

ヘルメスドライブで飛んだ先は本命のナギ・スプリングフィールド。

「よう連合の。随分派手にやらかしたらしいな。」

「くっこんな時に!」

「ナギ後ろに下がっている!魔法はロクに効きやしない!」

「わかってるぜ!任せた詠春!」

「ロード:ソードサムライX…。すまんが雑魚の相手をしている暇は無い。」

キンツ…キンキンツ…

剣戟の音が辺りに響き渡る。

「フンツ腕を上げたか青山詠春!」

「貴方と戦って生き残れば嫌でも…上がりますッ」

「だが：まだ甘いッッ」

跳ね上げて出来た隙にズバツと横薙ぎに切り裂く。

だが手ごたえが無い。チィ：皮だけでかわしたか……。

「うおおおおおお斬艦刀！！！！」

どこに隠れていやがった筋肉達磨！？

目の前に迫るは、その名に恥じぬ程の大剣。

「ソードサムライX解除。ロード：フェイタルアトラクション」

打ち合った瞬間に重力で斬艦刀を筋肉達磨ごとぶち壊す。

が、間一髪筋肉達磨はゼクトに助けられる。

「ぐっ……」

推移を見ていたのが悪かった。押し潰すような感覚…アルビレオの重力魔法かッ？！

「本当に規格外ですね…ナギでも圧殺出来るような威力なのですが……ナギ！今の内です！！！」

「わかってるぜ！うおおおお零距离千の雷！！！！」

零距离で放たれる千の雷がシルバースキンへ直撃する。

…そう思われていた。

「フェイタルアトラクション解除。ぐっ…ロード…シルバースキン。続いてシルバースキンリバーズ！」

ドオオオン

「流石に今のを耐えられたらどうしようもありません。しかし三度も戦えばある程度の対策は立てられるものです…。」

「やったのか？」

「わからん…。詠春はどう思っんじゃ？」

「なんとなくですが…無事です。」

煙が晴れていく。

「…なっ！？奴が二人いる！！！！」

「いえ違います片方は…！」

「シルバースキン解除。ロード…サンライトハート」

シルバースキンリバーズの中で千の雷を撃てばどうなるか…。
答えは一つ。今のナギの姿になる…。

「ガッ…ハアアア」

「最強の護りは…反転すれば強固な拘束服になる。…ここで終わり
だナギ・スプリングフィールド！」

「今ですガトウ！」

「豪殺居合い拳…!!」

ドゴオオオン

「ゼクト殿！」

「わかってお…う…う…」

ギリッとゼクトの首を締め上げる。

肘の裏でギリギリとゼクトの首を絞めていく。

「がっ…かっ…こぶっ…あ…げほっげほっ」

もう一步という所で腕を緩めて宣言する。

「全員武器を捨てて投降しろ…次はへし折る。」

「甘いの」

「なにっ？」

首を極めていたゼクトがボロボロと土に帰って行く。

「人形かっ！」

「豪殺…「豪殺居合い拳」…なにっ?!」

ズン

「咸卦法程度…とつくの昔に習得した。今は眠れ。」

ズンッ

「ぐはっ」

「お前は…初見だな?…どこかで見た顔だな。」

気絶した男の顔を良く見てみるが…。ああ確かに覚えがある。

「ガトウさん!」

茂みから出てくるのは…ガキ…とそれを押さえてるガキ。

そうかガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグ。連合の腕利き捜査官だったな。

ちよつと昔に追いかけて回された事があるから記憶に残っている。

「元老院襲撃しておいてガキ連れかよイ…。」

熱くなっていた何かが急激に覚める感じがする。

こついうのを興醒めって言っただろうな…。

その時、緊急の念話が飛んでくる。

「(宗一郎!急いで戻れ!!!テオドラ様が誘拐された!!!)」

「（何があった?!）」

突っ込んでくるラカンに零距离燃える天空を叩きこみつつ念話の方に集中する。

「（連合か何かの襲撃を受けたらしい！衛士は恐らく全滅だ。定時連絡が無くて発覚した!）」

「（何故騎士を付けなかった!くそっ…すぐに戻る）」

「お前達の掃討命令は撤回された。帝国へ連れて行きたかったがそれどころでは無くなった。ロード：ブレイズ・オブ・グローリー。消し炭になりたくなければ最大級の防護をする事だ!」

爆炎が広がる中、俺はヘラスへと転移した。

「どうだ捕捉出来るか?」

「駄目だ…衛視の生き残りはいるか?」

ヘルメスドライブが捕捉出来ないとは…。最悪だ…。

「一人だけ…しかし重傷で…もうどうにもならん。」

「何故街の外へ?!」

「ウエスペルタティアの王女と会う御予定だったそうだ…。」

「そっちの王女も」

「ああ向こうの衛士らしき連中も全滅だ。恐らく共に拉致されたと考えていいはずだ。」

「連合か…。」

「恐らくは…あるいは例の宗教の連中か。」

「無いとは言えんのがこの情勢か…。前線だけには知られるなよ？」

くそっ…紅の翼の件は俺を引き離す罠である可能性が大きい。誰かが戦争を大きくしようとして操ってるようにしか思えない…。

常識的に考えればそれはおかしい。

だが…。

頼むテオドラ…無事でいてくれ。

19話：翼は折られた（後書き）

何故か今モリモリと麻帆良学園編のネタが湧いてきています!!!
せっかくの赤松ワールドなのだからほのぼのしたいのに、湧いてく
るのは武装錬金的な発想だらけ！

大戦期編は遂に佳境へ

夜の迷宮に踏み込んだ宗一郎。

しかし既に夜の迷宮は崩壊していた。

次回：夜の迷宮

20話：夜の迷宮

先刻……生き残りの衛士が息を引き取った。

「眠れ……お前達の仇は必ず取る。テオドラも必ず取り返す。」

「彼女が残した情報はたった一つだ。テオドラ様を拉致したのは「完全なる世界」という組織らしい。」

「完全なる世界……知らないな。出来るだけ資料を集めてくれ……。」

Side テオドラ

妾とウエスペルティアの王女が何者かに拉致されて数日。

閉じ込められているだけで特に何もされる事は無かったのじゃ……。

妾は今か今かと宗一郎が助けに来てくれるのを待っておったのじゃ。
そんな時

ドゴツオオオオオン

そんな音がして壁が崩れたのじゃ！

こんな事が出来るのは宗一郎ぐらいなのじゃ！

外の光が眩しくて見えんのじゃがきつと宗一郎に間違いないのじゃ！

「よう姫さん助けに「そういちろー」もがっ」

「遅いぞ我が…騎士？」

ひ、非常に恥ずかしいのじゃ…助けに来たのは結局紅き翼のナギ・スプリングフィールドじゃった…。

「って事はそっちの姫さんも連れて行けばアイツに会えるって事だよな！」

などという戯けた一声で妾まで紅き翼の秘密基地にまで連れてこられたのじゃ…。

「なんじゃ、これが噂の紅き翼の秘密基地か！どんなところかと思えば…掘立小屋ではないか！」

「俺ら逃亡者に何期待してんだ、このジャリはよ」

「何だ貴様、無礼であるうっ」

ジャリとは失礼なのじゃ！！

S i d e ナギ

「正直やっちゃまったかもしれないと思ってる。」

「ええ、ヘラス帝国第三皇女の事ですね？何をどう考えても連れて来るべきでは無かったでしょう。」

「いや…連れてくればアイツが来るんじゃないかなってな？」

それにあそこに置きっぱなしって言うのも後味が悪いじゃねえかよ…。

「ええ下手すると今度こそ皆殺しかもしれませんよ？何度もトドメを刺すチャンスが彼にあつたはずです。」

「でもよ！アイツを仲間に出れば俺達は本当に無敵になれるぜ！」

「はあ…何を言っても無駄な様ですね…わかりました交渉は任せます。墓にはバカに塗る薬は無いでいいですね？」

おっ 姫さんがきたぜ。本題に入らねえとな！

「さて姫さん。助けてやったはいいいけど、こつからは大変だぜ？連合にも帝国にも…あんたの国にも信用できる味方はいねえ」

「恐れながら事実です、王女殿下。殿下のオステシアも似たような状況で…最新の調査ではオステシアの上層部が最も「黒い」…という可能性さえ上がっています。我々は最早連合内に信用できる場所が無いので連合軍から抜けましたが…。」

「やはりそうか…我が騎士よ」

「だから、その我が騎士つて何だよ！姫さん！？クラスでいったら俺は魔法使いだぜ？」

「もう連合の兵ではないのじゃろ？ならばお主は最早私のものじゃ。」

「なっ…。」

「連合に帝国…そして我がオステイア。世界全てが我らの敵という訳じゃな。」

「じゃが…主と主の紅き翼は無敵なのじゃろ？」

「世界全てが敵…良いではないか、こちらの兵はたったの7人、だが最強の7人じゃ」

「何が最強だ笑わせるぞト三流共。」

S i d e e n d

「かなり微弱だが捕捉出来るようになったぞ！」

「それは…。」

「行ってくる…。」

「畏かもしれんぞ!？」

「畏なら上等。そいつは知ってるって事だロード：ヘルメスドライブ 位置捕捉、転移座標確定。出る！」

「……」

「て、てめえさっきの連中の仲間か!？」

「は?」

「ちくしょう喰らえ!魔法のへぶっ」

魔法の射手を撃とうとしたのだろう…デコピンで妨害したが。

「お前、完全なる世界の人間だな？」

「なんだ?なんだよてめえ?!」

「イエスカノーで答えろ。」

「お、俺は知らないね誘拐なんて関係無い。」

「…ロード：アリスインワンダーランド。」

「おい何ブツブツ呟いていやがっあゝあゝあゝあああゝあゝやめっやめっ」

「吐け…テオドラ第三皇女は何処にいる?吐かなければそれは延々

と繰り返されるぞ?」

「中だああ中にいたんだああああああ辞めて辞めてヤメテヤメやめてやめてくれえええ!!!」

「悪夢に堕ちろ…せめて衛士達の数十分の一の苦しみを味わえ」

既に移動させられた後か…まさか紅き翼が先回りしているとは…。

「ロード：ヘルメスドライブ 索敵…捕捉しにくい?どういう事だ。まあいい強引に飛ぶ!」

出た場所は掘立小屋が立っている簡素な施設。
気配は…多いな。テオドラ含めて10人前後…。
うち二人が例のガキだろう…。

近づいて話を聞くしか…無いな。やはりおかしい…ヘルメスドライブが誤作動など…起こすはずが無い。

「ロード：シークレットトレイル」

これで察知はし難い…はずだ。

「じゃろ?ならばお主は最早私のものじゃ。」

「なっ…。」

「連合に帝国…そして我がオステイア。世界全てが我らの敵という訳じゃな。」

あれは…ウエスペルタティアの王女か？何を言っている…？

「じゃが…主と主の紅き翼は無敵なのじゃろ？」

無敵…ねえ笑わせてくれる。

「世界全てが敵…：…良いではないか、こちらの兵はたったの7人、だが最強の7人じゃ。」

「何が最強だ笑わせるぞド三流共。」

そう言いつつ地面からズブズブと現れる。

「なんだお主は！」

「下がってる姫さん！帝国の奴だ。」

「で、ではあれが銀の戦鬼、血まみれの銀か！」

ああ…連合からはそんな感じで呼ばれてたかな？

「安心しろ…：世界を敵に回す？先に俺が貴様等を冥土に送ってやる！」

「待て待て待て待て！俺達は戦うつもりはねえ！」

両手を前に突き出して後ろに後ずさるナギ。

「…シークレットトレイル解除。テオドラを返して貰おうか？」

「詠春！帝国の姫さんを丁重に連れて来てくれ。」

S i d e ア ル

凄まじい緊張感ですね…。汗が止まりません。

今までこんな威圧感を出している相手と戦った事がありませんよ…。

「（…のうアル）」

「（なんですかゼクト殿…？）」

「（ら、ラカンのド阿呆は何処におるかわかるかのう…？）」

その瞬間背筋を冷たいものが流れました。

ええ…いやな予感がヒシヒシとしますのです。

「（そういえば彼が現れた下りから居ませんね…非常に不味い事になると思っていますが…どうでしょう？）」

「（まだ話をしようとする馬鹿は解るのじゃが…もうワシ嫌じゃ…バグとチートの両方が馬鹿なのは始末に負えんわ）」

20話：夜の迷宮（後書き）

果たして宗一郎は紅の翼に合流するのか？！

世界を戦乱に落とそうとする完全なる世界。

果たして彼らの目的とは……、

そして宗一郎の選択は……！

次回：我が牙は白く

21話・我が牙は白く(前書き)

自身初の恋愛シーン。

賛否両論あるとは思いますがよろしくお願いします。

21話：我が牙は白く

掘立小屋の中、急ごしらえの会談の席。

相対するはナギ、ガトウと柚木宗一郎、テオドラ第三皇女。

「これが我々が集めた完全なる世界の資料だ。」

「コピーとはいえ渡してもいいのかね？ 捜査官ガトウ殿。」

「ああ… 連合だけの問題では無いからな。それから元捜査官だ。」

渡された資料をパラパラとめくり目を通す。

予想以上の広がり方らしい…。

その中のある紋章が気になった。

「この紋章は…？」

「完全なる世界の協力者達が使っている紋章の一つだな。それが何か？」

「大昔に何処かで…。」

この世界に来た頃、そう… ずっとずっと昔。

あの時は目の端に止まった程度の紋章。

「ああ… あの神父の持っていた資料… か。」

「資料？」

「いやいいんだ。気にしないでくれ。」

「そうか…。」

「で、だ！どうだアンタ俺達と一緒に戦わねえか？！」

身を乗り出してナギが手を伸ばしてくる。

「何故そうなるナギ・スプリングフィールド。」

「そうじゃ！宗一郎がそちらにつく理由など無いではないか！」

「だからよ？同じ相手と戦うんだから一緒にいいじゃねえかよ！」

「それでどうやって帝国内の完全なる世界を燻り出す？君達は今や反逆者。この会談自体も危うい天秤の上で揺れている事を忘れないで欲しい。」

それに、と言葉を続け

「完全なる世界の目的が戦争の継続ならば帝国がこのまま全てを潰していけばいい。君達が出なければ遠からずこの戦争は終結する。」

ガトウが焦ってナギを制して言葉を返す。

「しかし…。」

「だが完全なる世界には晴らしたい恨みと討ちたい仇がある。帝国

側の連中は任せておけ。」

「でもよ協力してやった方が…」

「忘れたか？お前達は元とはいえ連合の英雄、俺は帝国の英雄でテオドラの番犬だ。お互い…お互いの同胞を殺し過ぎた。」

一旦言葉を切って

「お前達にとってコレは名を上げるための戦争なのだろうが…俺にとって帝国は…お前達のソレとは違うんだよサウザンドマスター君？」

誰も言葉を発さない静かな間。

「ああ…君達連合では俺の事を血まみれの銀と呼んでるらしいな。光荣だ、俺が血を浴びれば浴びるほど 仲間の流す血が減るのだからな。テオドラ、戻ろう皆が心配している。」

「う、うむ。」

掘立小屋を後にする時、ナギが声を投げかけてきた。

「俺とお前の道が重なる事は無いのか?!」

道…か。上手い事を言う…ただの人に好かれる馬鹿ってわけではない。ということか？

「お前にはお前の、俺には俺の意志と理想と正義がある。今回はソレが譲れなかった。そう言う事だろうさ。」

テオドラの腰を抱きヘルメスドライブで飛ぶ。
だが行先は帝国では無く…。

「おお…とつても綺麗なのじゃー！」

満天の星空の下、潮騒の音が響く小高い丘。

俺はある決意を持ってこの場所に連れて来た。

俺は今日、テオドラに真祖である事を打ち明ける。

もし拒絶されても、この戦況ならば…帝国は有利な条件で停戦に漕ぎ着ける。

あいつらに帝国以外全て滅ぼす。そう言った。
事実だ。

帝国の上層部は俺が居る限り侵攻を辞めない。

連合の後はアリアドネー、その次はウエスペルティア…。

裏切れば良い、捨てればいい。

普通はそう思っつて、そう行動すべきなんだろう。

だが俺には…出来ない。

ああ…正直に言おう。テオドラを愛している。

理由も原因も解らない。初めに助けた時かもしれないし、そうではないかもしれない。

拉致された。そう聞いて肌が泡立った、頭に血が昇った。心がざわめいた。

衛士達は言い訳だ。ああ言い訳だとも。テオドラさえ無事なら些末

な事だ…。

笑わせる。何が”俺が血を浴びれば浴びるほど仲間が血を流さなくて済む”だ。

結局は”帝国が勝って喜ぶテオドラの顔が見たい”そんな下らない事だ。

衛士や近衛騎士が戻ればテオドラは喜ぶ。だから守る。だから助ける。

結局…自分の周りの女が泣く事に耐えられないだけ。

エヴァは言った。

人間なんて信用できない。

人間はすぐ掌を返す。

笑顔を怒りに、親しみを恐怖に変える。と

だから…ここで己が心に決着を付ける。

はしゃぐテオドラに意を決して声をかける。

「テオドラ…話があるんだ。」

「なんじゃ?」

「ずっと、ずっと隠していた事がある。戻れプロテウスアビリティ」。

シルバースキンが崩れ、元の腕輪型に戻る。

「初めて全部脱いでくれたのう。」

「もし、嫌うなら嫌ってくれていい。拒絶するのも、批難するのも自由だ。どうあっても帝国までちゃんと送り届けるし、決して傷つける事はしない。」

「わ…わかったのじゃ。」

居住まいを正すテオドラ。一言一句聞き逃さぬように、見逃す事が無い様にと向かい合ってくれる。

俺はおもむろに石を拾い握りしめて砕く。

鋭い破片。

その一つを握りこみ、そのギザギザの断面で手の甲を深く、深く抉る。

ゴリッ…ゴリッ…。

「何をしておるのじゃ！そんなに…えっ…？」

醜い傷口は見る間に塞がり、修復されていく様を見てテオドラが固まってしまつ。

それから唇をめくり、鋭く白い吸血鬼特有の犬歯を露わにする。

「見ての通り俺は真祖だ。…汚らわしい吸血鬼、立派な魔法使いとやらの倒すべき悪だ。」

遂にテオドラは顔を下げってしまった。
痛い程の沈黙。

風のざわめきと潮騒だけが耳に響く。

柔らかい感触、花のような香り、心音が耳に響く。

「馬鹿者……。宗一郎の大馬鹿者！真祖であろうが、吸血鬼であろうが、魔族であろうが宗一郎は宗一郎なのじゃ！！……その程度の問題で妾が宗一郎を見限るとでも思ったか！？拒絶すると思うたか？！甘いじゃ！宗一郎が離せと言っても離してやらんのじゃ！！！」

「テオ…ドラ？」

「妾を舐めるな！これでもヘラス帝国第三皇女じゃ！世界の有り様が宗一郎を拒絶すると言うならば、その有り様すら変えてやるのじゃ！それが出来なくとも！帝国の中だけでも変えてやるのじゃ！」

「何を…。」

「いいか！ルーシーやヴェラシオが拒絶しても、父上と母上が反対しても、妾は宗一郎の味方じゃ！」

俺は何も言葉を返せなかった。テオドラは一息置くと続けて、

「前に聞いた時、誰かが宗一郎の心にいると言ったな？そんな奴追い出してやるのじゃ！…いいか宗一郎？絶対に手放してやらぬ。逃げたら地の果てまで追ってやるのじゃ。話した事を後悔するんじゃない！妾に引き返せん一步を踏みこませたのじゃ…絶対に責任は取って貰うのじゃー！」

叫んで、叫んで、叫んで。きつと顔は真っ赤なんだろう。

心音は大きく…身体は熱い。

「ふ、くっ…くはははははははは。」

「何がおかしいのじゃ!」

無茶で、無謀で、めちゃくちゃだ…。

魔法世界でも旧世界でも吸血鬼なんて化け物が受け入れられる場所なんて有りはしない。

ならば作ってやる。なんて…なんて無謀なんだ。

だが、それでも…だ。

それでもテオドラの言葉は嬉しかった。

俺だけに向けられた言葉なのかもしれない。それでもエヴァに聞かせたかった。

エヴァにも教えてやりたい。

この馬鹿広い世界の中で、たった一人でも受け入れてくれる人間が居る事を。

たった一人の為に無茶な事をやる人間がいることを。

「なに…一人で思い悩んでいた事が馬鹿らしくて…な?それに…どうも地雷まで踏んじまったらしい…。」

「…泣いておるのか?」

「わからん…最期に泣いたのは 500年以上も昔の事だから

…な。」

「これからは…何度でも泣かしてやるわ…。」

流れ星が走る。あたかも二人を祝福するが如く。

21話：我が牙は白く（後書き）

はい。賛否両論あるんじゃないかなーorzと思いつつ公開。
ちよつと宗一郎が三下臭くなっているぞ！と注意を受けました。すみません。

もっと早くにコレを入れるべきなのか今入れるべきなのかを迷っておりまして。

無自覚フラグ立て主人公では無く、堅実に行きたいと思います。

ラブラブ大ハーレムを期待の方、申し訳ありません。

仮契約をしないとは言わないけれども（溢れ出る本音！

一番はやはりテオドラを据えたいと思うのです。

エヴァに聞かせたい？

きっと彼女はこう言うでしょう。

「うがーーーーー！盗られたー！！！」

P・Sこんな作者ですが今後ともよろしくお願い致します。

22話：闇は蠢き（前書き）

副題：壁に耳あり障子にメアリー。箱にスネーク。書類管理は気を付けて！

22話：闇は蠢き

S i d e ? ' s

黒づくめの老若男女がひしめく室内。

部屋の前には幾人も私兵が見張りに立ち。

その会議の内容は表向き次回の戦争…アリアドネーとの戦争を主眼に置いた作戦会議。

だが本質は完全なる世界に所属したり協力している者達の闇の会議であった。

「もう、完全なる世界に協力するメリットが無いな……。」

しかしその会議は活力溢れたものでは決して無く。その様はまるで葬式。

ポツリと漏らされた言葉は波紋の様に容易く広がる。

「うむ…連合の英雄と言われた紅の翼よりも彼の方が強い。今更連合に味方する理由など無いじゃろう。それよりも我が帝国の英雄殿に付いた方が断然甘い汁を吸えるというものじゃ。」

昔は名を馳せた女指揮官も

「クーデターを起こすにも…私兵ですら彼に刃を向けるか怪しいわい。」

強欲な地方領主も

「とはいえ、フェイト・アーウェルンクスに逆らえば……。」

「マキユールの二の舞というわけじゃな……。」

「ああはなりたくないのう。」

「かといって当初の暗殺が成功するはずもない。」

帝国議会の重鎮達も

「アレがアレで個人の一兵卒ならば取り込んでしまおうと言う事も不可能ではないのだが……。」

「アレは第三皇女様の番犬だ……それも獰猛な。飼い主の不利益になるなら我らとて牙にかけるじやろう。」

「なれば第三皇女ごと取り込むと言うのは……。」

「鈍った様じゃな……そんな思考で帝国の軍師が務めれたもんじゃ……。」

「妙に接近でもしてみろ……血祭りにあげられるのが関の山だ。脅しや薬も論外だ。」

帝国軍の高級将校たちも

「困ったのう困ったのう……。」

「様に板挟みに陥っていた。」

裏切れば串刺しや永久石化、かといってこのままではやはり銃殺刑

や絞首刑。

自分達のやって来た事は決して明るみに出せない事ばかり。故意に戦場を混乱させたり、無茶な命令を発したり。しかしそれは誤魔化しがきこう。

戦争中に混乱が起きたり、判断間違いの作戦は”良くある”事だ。

しかし暗殺未遂、拉致の幫助、そもそも拉致襲撃の主犯それから大規模転送装置の破壊工作。

どれも重罪。軽くて死罪や国外追放。

最高で”民の前”での銃殺刑や絞首刑……斬首刑。

いやそれすら生温いかもしれない。

夜の迷宮に配置していた私兵の死に方。

悶え苦しみ心を壊され狂い、自ら命を絶った私兵達。

グレートブリッジまでは思いのままに謳歌していた老人達は最早八方塞り四面楚歌。

甘い話に釣られて協力した昔が今では憎々しい。

一発逆転の作戦は大失敗。完全なる世界の事も嗅ぎ付けられている。

「そつだ…情報を売って保護を求めるのはどうだろうか!？」

「馬鹿か貴様!お前は拉致や暗殺、破壊工作に関わっておらんからそんな事が言えるのだ!」

もうかつての団結はそこには存在しない。

あるのは保身と欲望、それから恐怖だけだった。

S i d e e n d

完全なる世界の協力者燻り出し作戦。
結果は最上の様子。

まさかここまで愚かだとは思っても居なかった。
数人捕えただけで集まり会議を行ったのだ。まさに愚の骨頂としか
言えない。

手段は簡単だった。

雑務をこなす女性陣は元々テオドラへの支持率が高かった。
老人達は彼女達を機械か何かと思っっているらしく、”外へ出しては
いけない”様な書類を彼女達に運ばせる。時には会談まで行う。

まさにダダ漏れ。

でなければ……俺が現れる前にテオドラは暗殺されていた。

それから俺が戦場で助けた兵士。

彼らに”不穏な動きをする輩が帝国内にいる。君に協力して欲しい。
” そう言うだけだ。

彼らは目を輝かせて危険な潜入をこなしてくれる。

ある議会の老人の私兵に入ったり、今まさに扉を見張る兵士の中に
紛れ込んでいたり。

様々な情報が出るわ出るわ。

明らかに失敗する作戦を解っていてゴリ押しする将校。

連合の村を焼き払えなどという無益で非道な作戦ばかりを提案する

軍師。

急に金の回りが良くなった兵士や地方領主。情報を流したりしている者……有り体に言えば連合の将校と会談する帝国の議会重鎮共。

そんな奴らが今、この扉の先に集まっている。

中から聞こえるのは怒号や不毛な論争。

きっと我々が踏み込めば阿鼻叫喚の凶になることは最早明らか。

「諸君。この先にいるのは帝国内の裏切り者、完全なる世界と言う組織と繋がり、出さなくても良い犠牲を出し続けた諸悪の根源が居る。いいか？今、この場で殺してはいけない。彼らは裁かれ、民衆の前で処刑される事を一番恐れている。……では行くぞ？ヴェラシオ号令は君が。」

「ああ。…総員！捕縛せよ！一人たりとも逃がすな！突入ー！」

バンツと碎けるかと思うほどに扉は開け放たれ兵士達が雪崩れ込んでいく。

十五分も掛からぬ内に全員の捕縛が終わる。

俺の姿を見て幾人かが声を荒げて騒ぐ。

「なんのつもりじゃ銀騎士！何の権限があつてこの様な事をしていく！」

「そつだ！皇帝陛下でも議会で手を出す事は禁じられておるぞ！！」

「！！」

「それは私から説明いたしましょう。」

「ヴェラシオ！私は貴様の上官に当たるぞ？！この様な事をして明日の朝日が拝めると思っうな！！」

「貴方もここにいましたか……はあ……。ここにいる全員の調べが付いている。戦争反対派暗殺、テオドラ第三皇女暗殺未遂並びに誘拐幫助、機密兵器への破壊工作、意図的な帝国への悪意がある作戦立案とその実行。更に先程の会議の音声も録音済だ。貴方達には裁判を受けてしかるべき罪を受けて貰う！」

ヴェラシオの罪の読み上げを聞き頂垂れていくものが多数。それでも必死の抵抗をして兵士に押さえつけられるものが極々少数。何とか助かろうと虚言を弄するのが数名。

そのことごとくが魔法の発動体を没収され牢へと連行される。勿論、逃げれば夜の迷宮を守っていた兵士達の二の舞であることを臭わせた上でだ。

見張りは腕利きの魔法兵士と重装備の兵士。

まあ見張りはいららないのかもしれないが……。暗く絶望に沈む牢から俺は引き揚げた。

「ただいま戻りました。」

「それでどうじゃった?!」

「もう狙われる事はありません。集まっていた連中は全部牢にぶち込みました。」

「そうか!これで一安心なのじゃ!……それからルーシー少し外してくれぬか?」

「はへ?…エヘンエヘン。失礼しました扉の前で待機しております。」

ばたん。

「えへへーこれで二人つきりなのじゃ!」

「テオドラ。」

「もう二人つきりの時はテオと呼ぶのじゃ。」

「テオ。…いやいやそうでは無くて。多分ルーシーにバレてるぞ?」

「なんじゃと!?!」

「シッ!。」

唇の前に人差し指を当てて、ソロリと扉に忍び寄る。

意図が解ったのかテオドラ……テオもニヤニヤしている。

音も無くスイツと開くとズルンとルーシーが転がって来た。

「……………」

「え……う。」

「おやおや最近の近衛騎士殿は扉にもたれかかって警護するのが仕事のようなテオドラ皇女殿下。」

スツとテオにアイコンタクトを飛ばす。

「そのようじゃのう。それも扉に耳を付けるのが流儀と見たのじゃ。」

「ち、違いますー！ー！違いますよ？！違っつたら違っんですからね！……！」

「ほおおう？何が違うんだろうなあ我が娘よ？」

「お、お父様？！何時からそこに！何処まで見ました？！」

「お前が部屋を出てきてコソコソと扉に耳を付けて中の様子を感じようとしてたらズルツとだらしなく部屋中に転がって行って何かを全力否定している所までしか見て無いぞ？」

「全部じゃないですかー！……！」

「ほうれ行くぞ？邪魔をするんじゃない。」

鎧の首根っこを持たれてドナドナよろしく引きずられていくルーシィ。

「ぶっ…ふくくく…見たか宗一郎？今のルーシーの慌てっぷり。」

「ああ見たとも…しばらくはコレでイジれるな。」

しかし驚くべき事だ…。

あのテオの宣言の後、なんとテオはルーシーとヴェラシオに話すと
言った。

あの時ばかりは焦ったが…。

ヴェラシオに至っちゃ、

「なあんだそういう事か！通りで死なないわな。あれだ不死身の英雄
雄って銘打って士気高揚を図るか？」

ルーシーは割と良識があつたのだが。

「で、ようルーシー。お前は宗一郎が無差別に人を襲ってる所見た
か？血を吸っている所は？」

それで折れてしまった。

しかし…気が楽だ。

いつバシて追い立てられるか。そう考えていた時とは比べ物になら
ない程の安心感。

戦争や、完全なる世界の動向を追うのに集中できるといふのは。
背中を任せる相手が複数いると言ふ事は。

「聞いておるのかぁー！」

「いやすまない。考え事をしていた。」

「もう一度言うぞ…妾と仮契約するのじゃ！本契約は…そのまだ少し早いと思うのじゃ。」

「解った。宝石を用意させよう。」

もつとも古い、伝統的な契約の方法。

お互いが魔力を込めて血を垂らした宝石を飲み干す。失敗が無く。まずスカというものが起こり得ない方法。

「た、確かにそちらの方が確実性はあるのじゃが、違うのじゃ…そうではなくて。」

「流石にお互いの血を飲むのは嫌悪感があると思ったのだが…。」

吸血鬼的には有りなのだが。

「わ、わざとであろうっ?!宗一郎!わざとであろうっ?!」

「くく。すまない。つい…ね。」

抑えていた笑いが出てしまう。ああワザとさ、テオがしたいのはキスを媒介にした仮契約だと解っていて…だ。

「最近わかったのじゃが宗一郎の紳士的な部分は仮面じゃな…。」

呆れた様にテオが言う。

「失望した？」

「いや惚れ直したのじゃ。」

「ぶふっ。」

「くくく…妾で遊ぼう等とは甘いのじゃ…今更その程度で嫌うわけ無かるう？」

「負けたよ。ああ負けた。ふう…魔法陣書くよ…従者は俺でいいよな？」

「勿論じゃ。」

「出来たよ。」

「うむ。ご苦労なのじゃ。」

ちゅっ。

静かな夜。王宮の一角がまばゆい光を発したのを見た者は居なかった。

22話：闇は蠢き（後書き）

前書きは軽いおふざけです。

ピースウォーカークリアしました。（誰も聞いてねえ）。

良かった…。今学園編だったら楓と契約して超ハイテク段ボールが出て来るに違いない。

冗談はさておき次回予告。

一網打尽にされた完全なる世界の協力者達。

侵攻も順調に進む中、紅き翼の必死の内偵を尻目に宗一郎はある重大な情報を掴む。

次回23話：世界の敵

23話：世界の敵（前書き）

オリジナルルート過ぎて「おい作者！原作キャラがエアージェアねえか！」という批判は覚悟していたのですが、なんと総計30万アクセス突破しました。

これも一重に読者様方のお陰です。今後ともよろしくお願い致します。

23話：世界の敵

「荒唐無稽、無茶苦茶な話だな…。」

「ああ……しかしそれが事実だとすれば全てに納得がいく…。」

「黄昏の姫御子。こんなガキ使って世界を壊す……か。」

「爺どもが吐いたが、首謀格と思われるのがフェイト・アーウェル
ンクス。しかし出来るのかよ世界を壊すなんて大事をよ？」

「世界全体を対象にした超広範囲の殲滅呪文。そう考えれば不思議
でもなんでもない。」

「なんか知ってるのかよ？」

「旧世界にとある伝承があると言っただろう？炎の国ムスツペルへ
イムのスルトが持つ魔剣レヴァンティン。神々の黄昏ラケナロクという伝承な
のだが、その剣によって世界が火の海に飲まれて幕が閉じる。」

「ハハ…なんだそりゃ…名前だけ聞いてりゃ気持ち悪いぐらい符合
しやがる。しかも後味が悪いと言ったらキリがねえな。」

「魔法世界は旧世界に比べて荒野や砂漠が圧倒的に多い。もしかす
ると……。」

「悪い冗談だとお願いしたいなソレは…。」

完全なる世界に与していた老人共を捕えて数週間吐かせて出てきた情報は大量だった。

首謀格の名前や容姿は勿論、マキユールの件の真相も、得意とする魔法も解った。

水と石、そして闇。

ゲート襲撃がその首謀格だったことも解っている。

何よりも大きかったのは組織の中継基地が判明した事だ。

基地を討伐すれば構成員や資料を確保出来る。

既に南部をも制圧している帝国領内は広い。しかしそれでも異常だ。基地が多すぎる。

まるでこの世界を蝕む癌。

そしてその構成員が完全なる世界の目指す物を知らない。

ある基地では戦争の拡大工作、またある基地では魔族と人間の合成などといったおぞましい実験。

ならず者の巣窟だった事すらある。

皆、目指している物が違う。

まるで巨大な組織の手足、蜘蛛の巣と言い換えても良い。

ある基地から別の基地へ依頼が届く。

例えば研究資材の確保や拉致を依頼され、それらをこなす。そしてその研究結果が戦争を激化させる基地へと移送され、連合・帝国の垣根無く高い金を払った方に、ある時は両方にソレを卸す。

一見すれば完全なる世界は巨大な軍産複合組織。

しかしそこへ幾つかのピースがはまれば話は変わる。

ウエスペルティアに出入りする宗教的組織、ウエスペルティア王の奇行、アリカ王女の逃亡。

第二子が黄昏の姫御子と呼ばれている事。
連日の大儀式に、その連中がこぼした魔法を否定する魔法の事。
そして旧世界の伝承。

魔法世界を戦争で不安定化させ、魔法世界それ自体を消滅させよう
としている。

魔法が否定されればオスティアが落ちる。
それだけでも被害は甚大だ。

「だが最大の問題は……。」

「本拠地がわからない。これに尽きるな。」

「俺はオスティア、ウェスペルタティア王国の何処かだとは思う。」

「下手すると王宮…それ自体か？」

「それは無いと思う。」

「何故だ？」

「アリカ王女は紅き翼と共に逃走していた。敵が居ると解っていて、
妹を放置する様な女か？」

「ならば……。」

「恐らく王宮外。それなりに大規模な場所、古ければ古いほどいい。
しかも王の許可が無ければ入れない。いや、むしろ入る必要の無い
所。そんな条件に思い当たる場所は有るかヴェラシオ？」

「ある。一番臭いのは墓守人の宮殿。他にも幾つか…。」

「一番臭い所を外して兵士達を回してくれ。あくまでも外交的な意味で…な？」

「一番臭い所は？」

「星周りに臭い日がある。その直前に俺が単身で乗り込む。」

「無茶…って言えねえんだよな宗一郎にはよお…。」

「星周りか…。」

「万全の状況でやるなら満月の夜。俺を潰したいのなら新月の日、真昼太陽が最も高くなる日。」

「俺なら新月の日を選ぶね…それなら一カ月後半後。」

「多分…な。それから艦隊を用意して欲しい。多ければ多い程良い。」

「何故だ？」

「妨害出来れば凱旋、失敗すれば完全消滅まで吹き飛ばした後オスティア住民の避難に使う。」

「出来れば凱旋で使いたいものだなオイ？しかし手慣れてんな…。」

「後始末が基本のお仕事だったもんでね？常に最悪を予測しとかな

いと話にならなかったのさ。」

「ハッいつの話だよ。」

「何、ほんの500数十年前までのお仕事だ。世界と人の間に立つお仕事さ。」

23話・世界の敵（後書き）

今回は短いですがひとまずこれで。

次回

世界の敵の敵

24話：世界の敵の敵（前書き）

大戦期編は実質今回で決着です。

24話：世界の敵の敵

「ハハッ…これは集め過ぎだろうヴェラシオ」

本当に集め過ぎだ。

「あちよつと俺もやり過ぎたんじゃねえかと思ってる。」

「テオの旗艦まで来ちまつて…あーあーこれは本当に洒落にならないな。」

空を覆い尽くすかと言つほどの艦隊。

これでは前線はガラ空きか…。いや本国が首都防衛部隊残してガラ空きだろうな。

前線は歩兵だけか…無茶をやる。

「でだ、発破入れてやれよ。みんなまだかまだかと待っていやがるんだぜ？」

「解つた。」

一度大きく息を吸つて、吐いて、また吸つて。大音声で宣言する。

「諸君。帝国軍の諸君！私は今からこの世界を壊すという輩共を撃滅する。諸君には私の背中を守つて貰いたい。出来るか！！」

その宣言への答えは大歓声。

「諸君が相對するのは地上に溢れかえる魔族二万五千。愛する者は

いるか?! 帰りた場所はあるか?! 負ければその尽くが無に帰える事になる!!! まずは私が諸君の歩ける場所を作る。その後は諸君が魔族で屍山血河を作り上げてくれたまえ!」

では行ってくる。とヴェラシオに告げ魔族共のど真中に……

「ブラボー流星脚!!!」

突っ込んだ。

「では行くぞ? シルバースキン解除。ダブルロード: ブレイズ・オブ・グローリー。アル・アレック・アルゲントウム 契約に従い我に従え炎の霸王、来れ浄化の炎! 燃え盛る大剣!!! ほとばしれよソドムを焼きし火と硫黄! 罪ありし者を死の塵に 燃える天空!!!」

詠唱しながらも近付く魔族を焼き払う。

「これを使う事が無い様にと思っていたのだが…仕方が無い。いざ見果てる第二の太陽を! 三重爆炎陣!!!!!!!」

同時展開三方向への広範囲焚焼攻撃。

魔族共は声を上げる暇無く消滅していく。

Side セラス

紅き翼に請われて墓守人の宮殿へ急いでいた私は、いえ私達は…ソレを一生忘れないと思う。

突如荒野に第二の太陽が現れた。
それだけだ。

それだけで魔族達が塵になった。
あんな魔法見た事がない。

そして現場に付いた私達は更に驚かされることになる。

空を埋め尽くす艦隊。

帝国の紋章を掲げた艦隊。

そこから続々と兵士達が降下してくる。

その中、兵士達とは逆に墓守人の宮殿を目指す銀色の影を見た。

帝国最強、帝国の英雄。銀の戦鬼、血まみれの銀、銀騎士、絶対勝者。

氏名不詳、年齢不詳、性別不詳。

グレートブリッジで現れて以後不敗。紅き翼を軽々とあしらい決戦兵器を容易く壊す、それでいて抵抗力を持たない村は一切襲わない。そして……抵抗力を持っていても女子供は決して殺さないという高潔さ……。

さっきのアレは彼の技だ。誰もが直感で解る。

兵士達の中から指揮官風の男が私達の方へ近づいてくる。

「いよう嬢ちゃん達？ここは戦場だ怪我しない内に帰ってくれよ。」

「戦つたために来ました！！」

「つたあー困るな。千人居ないんじゃ話にならん。アイツが焼き払ったとはいえ魔族はまだ一万弱いる。援軍でもあるのか？」

「紅き翼が…。」

「……しゃあねえ連合の英雄様が来るまで上空で待機してな。うちの銀騎士様は女が死ぬのを嫌うんだ。」

「しかし…。」

「わっかんねえかなあ？邪魔だつて言ってるんだ。」

ギシャーーーーー！！！！

「アデアット。」

ズバツ

生温かい魔族の血が私の鎧にまで飛んでくる。

彼は死角から来た筈の魔族を難なく切り捨てた。

「とまあ…つと 宮殿内に魔族を入れんじやねえぞ貴様等！一個中隊で出入り口を固めろ！！ 忙しいわけだ。」

私達が…ここですることは無い。

ただただ帝国の底力を見せつけられるばかりだ…。

彼はそれだけを言うと戦場に舞い戻って行ってしまった。

「おう待たせたな……ってコレどういう状態なんだ？」

「あ、ああナギ殿…外の魔族は帝国軍が殲滅中。銀騎士殿お一人が宮殿内部にて戦闘中です。」

「どうやら色々遅かったようですね。どうしますか？」

「アイツ一人だけが戦ってんだろ？せめてサポートだけはしてやるうじゃねえか！」

「やれやれ……。それでいいですか皆さん。」

「勿論だぜ！」

「ま、功を争う様な状況では無いしもう。」

「ナギならそう言うと思ってたよ……。」

「しかしくやしいのう…連合は全く動いてくれんというのに……。」

「ガトウさんもアリカ姫も間に合わないかもしれないかもしれませんが……そもそも必要なのか……。」

「うむ……帝国の主力艦隊じゃしもう……。」

「グチグチ言ってるねえで行こうぜ！」

行ってしまわれた……。
サインを貰おうなどと色紙を持ってきた自分が恥ずかしい……。

私達は……私は……役立たずだ。

S i d e e n d

宮殿内に突入。

予測していた通り罫があるが、何一つシルバースキンを突破する
仕掛けは無い。

本来こういう所はカビ臭いものなんだが……。

昔はあっただろう荘厳さは失われ、おどろおどろしいまでに落ちぶ
れている。

しかし……石造りには似合わぬ金属の臭い。真新しい人の臭いに痕跡。
鼻は全てを嗅ぎ分け、目は闇を見通し、耳は針が落ちる音すら聞き
分ける。

鉄球が来ればソレを砕き、針山は踏み砕き、石弓が飛んで来れば叩
き落とす。

酸が噴き出しても、火で炙られても何ら身体にダメージを通す事は
無い。

まあ通った所で”痛い”で済むのだが……。

通路を抜けると大広間に出た。

「大ボスのご登場というわけだな？ フェイト・アーウェルンクス？」

「やはり君が先に辿り着いてしまったか…。」

聞いていた通りの容姿の少年に従者と思われる幾人かの男達。

「紅き翼の方をご要望だったのなら残念だ。期待に添えなくて悪いね。」

「まあ…予定は崩れたのはいいさ。だけど君が一人で来てくれた事は喜ばしいね。」

「男に喜んでもらっても何一つ嬉しくは無いのだがね少年。」

「今からでも僕達に付かないかい？」

「魔法世界を消す為に…か？」

頷く少年。

エヴァと二人の時なら協力したかもしれない…。だが…。

「もっと昔なら付いたかもしれないが…エヴァを真祖化させたのは貴様等だな？」

「さて…なんの事やら。」

しらばつくれるか……。今思えばあれだけの大群が襲ってきたのもコイツの企みだろう。

「答えないか…まあいい。俺には魔法世界が消えたら困る理由が増えすぎた。それにな？この世界に来たのはお前たちを止めるためなんだろうさ。」

「そうか…残念だよ。やれ！」

男達の構成は、ほとんど紅き翼の主力メンバーと同じ。

ならば…負ける事は無い。

まずは筋肉達磨…。

「ロード：バスターバロン」

ガッ

「ぐあっ」

虚空より現れた腕が拳で筋肉達磨を握り込む。

「紅き翼の筋肉達磨…：ラカンだったかな？そいつが潰しても生きていてな…まあなんだ握りつぶしたらどうなるか？見せてくれたまえ」

ぐしゃ…。

腕の死角を縫って切り込んでくるのは剣士。
しかし…。

「アデアット。」

ガキツ…ザバアアア

刀も鎧も共に両断する。

だが剣士の、その影から魔法が飛んでくる。

「剣士自体が囷か…よくやる。」

狂い桜は悪鬼羅刹、妖怪、つまり人外に絶大な効力を発する。

そして魔法は……精霊で構成されている。

精霊は人外。

…ならば、

「ならば魔法すら斬って捨てようッッ。」

魔法の流れを絶ち切り打ち消す。余程の自身があったのだろう魔法使いは驚愕と言った顔で固まっている。

「障壁突破 石の槍」

ズンッ

「瞬動。」

フェイトの石の槍を”あえて”かわして瞬動に入る。

そして魔法使いの後ろに現れる。

慌てて魔法使いは振り向こうとするが崩れ落ちる。

「世界最速の剣閃だ。喜べ……今日の俺は最強だ。」

「無茶苦茶だね……銀騎士。」

「一番力の弱る日を選んだはずなのに……かね？」

当然だ。今の俺はこの世界を敵に回しても勝てる。

世界の敵の敵になるんだ……それぐらいの強さは必要だろう？

初めての吸血行為。

この身に流れる血は最早俺だけの血では無い。

テオの血を貰った。テオの意志を預かった。テオからの魔力供給がある。

そんな俺が負けるはずが無い。

「戦いの歌。神曲地獄篇。」

「まだ跳ね上がるか……化け物め……。」

「化け物で結構。我が身が真祖である事を誇りに思っている。まだ二段階上がれるぞ？」

まあまだ試作段階で使つと身体が非常に不味い事になるんだが……
な？

だが、わざわざそれを言つてやる必要は無い。

「君を敵に回した事を後悔するよ……。だけど儀式の邪魔はさせない。」

「殺り合おうか……フェイト・アーウェルリンクス……!!」

S i d e ナギ

「すげえなトラップが軒並み壊されていやがるぜ……」

「マジですげえな！オイ！」

「まるで重戦車もかくやといった風ですね……」

「おいナギ！前を見んか前を！」

「はぁ……最終決戦と息巻いてたのがもうコレとはしまらんわ。」

通路の罠が尽く発動して壊されて突破されている。

通路を進んで行くと濃い血の匂いと轟音が届く様になってきた。

「急ぐぞ皆……!!」

「」「」「おう……」

「はぁ……」

「なんでか師匠が溜息を付いてるけど気にしないぜ！」

激闘の末、遂にフェイトの顔を掴みあげ決着は付いた。

「何：俺も無傷で、というわけには行かなかった。称賛に値するよ。」

事実だ。

シルバースキンには機能上の弱点が存在する。

シルバースキンはその硬化強度より強い衝撃を受ければ破壊は出来る。

出来ると言っても破壊のスピードを上回る形で驚異の再生力を示し、続く攻撃を完全に阻んでしまう。

ならば、ならばだ。

その再生力を上回るスピードで攻撃を行い続ければ良い。

フェイトはソレを見抜き、そして為した。

障壁突破 石の槍の猛撃。

俺は腹を貫かれた。惜しいかな：俺が人間ならばフェイトの勝ちだった。

だが俺は真祖だった。それだけだ。

フェイトの頭を砕き、終わらせようと言う時。

直下から感じる膨大な魔力に俺は気が付いた。

「おい！なんかやべえもんが来るぞ！！！！！！」

有り得るはずの無い声。

「チッ…何故ここにいるナギ・スプリングフィールド！！！！！！！！」

「!!」

光の槍が来るッ。
間に合えッ

シルバースキンもう一つの弱点。

外を見なければ戦闘などままならぬ。

ならば視界を確保する為に目の部分は唯一の隙間が存在する。
普通の魔法ならば覆う事で無効化出来る。

だがコレは……!

ザンッ

フェイトの胸を貫き、間に合った腕に当たり逸れていく。

「不味い……。」

何かもつとヤバい物が来る。

「ふ、ふふ教えてあげよう銀騎士……アレが本当の完全なる世界の
TOP。造物主ライフメーカー……さ。」

「造……物主……。」

この世界を作りし者……とでも言うつもりか?

「一足先に待っている事にするよ……その時には名前を聞かせて貰
うよっ。」

「……柚木宗一郎だ。悪いがまだ行ってやるわけにはいかないのでな……」

…。」

静かに本当の名前を告げる。

「君は…本当に……。」

フェイトが今度こそ本当に死んで、更に波動が広がる。

墓守人の宮殿、それ自体がズクンと震えている。

「ナギ・スプリングフィールド!!! 逃げるか下がるかを選べ!」

「なっ。」

ゴウッ

恐らくは造物主とやらの魔法。

アレは不味い。

「ロード：シルバースキン。最強防御!」

「ナギ下がるのじゃ! ラカン! ハアアア最強防御!!!」

「おう! 気合防御!!!」

並びは俺の前に最強防御が二枚。それを三人で抑える形。

だが、

バリバリと音を立てて最強防御を構成した魔法陣を砕いてくる。

唯一の危惧は…この状態における内臓器官のダメージ。
まだ運用外の性能だ…な。

振り返ってナギを確認するが……全身裂傷。その程度で済んでいる
か…。

「動けるかナギ・スプリングフィールド!?」

「動けなくとも動いてやるぜ……せつかく……庇ってくれたんだ…
…。」

ハッ…気骨だけはあるか。

「ワシも行くぞ。」

「動けるなら来い。アレを止めねば儀式は止まらん!…!」

「かはっ……アレは…倒せないかもしれない……よ?」

「アルビレオとか言ったな?出来るだけその連中を出口まで引っ
張れ……最悪の場合は想定してある。」

「……………」

「ハッ……どうした？まだ生きてるのが不思議か造物主？」

「油断するでないナギ！」

「次は自力で逃げろよナギ・スプリングフィールド。」

「！」

「消えっ！」

「上だ！馬鹿者！！！」

ゴウッ

光の筋が砕く。

アレを無詠唱か……。

「氷爆！！！」

パキュー……ン。

何が起こった？かわしたわけでもない。

「ッ……まさか？！ナギ、てめえの一番を撃て。時間は稼ぐ！！！」

「おう！」

「シルバースキン解除。ロード・ジェノサイドサーカス。一斉発射
ッッ。」

爆音が響きすぎて音が聞こえない。

ズン。

「かはつつ…。」

光の槍が粉塵の向こうから正確に胸へ放たれた。

「千の雷！…！」

ゴゴ　　パキュー…………ン。

「なんじゃと?!」

「やはり…か。」

「どづいつ事だよ?!」

「魔法を無効化していやがる。仕方が無い…殴りに行くぞ、付いてこれるか?」

「付いていく?横に並んでやるぜ!」

「来るぞ二人とも!…！」

「なっ!」

剣山を作るかの如く造物主は光の槍を放つ。

ドンッ

「じぶっつ。」

「師匠!？」

反応の遅れたナギをゼクトは突き飛ばすことで避けさせ自らは串刺しになる。

俺は槍が降り注ぐその中を駆け出す。

「行くんじゃナギ!!あやつと並ぶのであろう?!ならば止まるな!止まるで無い!!」

ゼクトの声が遠い。

「ロード：シルバースキン。」

右手にエヴァとの契約カード。左にテオとの契約カード。

「アデアット!!!」

エヴァのカードは狂い桜に。テオとのカードは漆黒の翼に。

「くっ…あっ…。」

身体強化は既に限界。造物主の使う魔法は理解不能。

口から血が流れ出す。

だが…。

「ナギ!下にいる!!叩き落とす!!うおおおおお!!」

踏み切って大跳躍。造物主の真上。

奴が手をこちらに向け、その掌には光が収束している。解る。この感覚は……紅き翼のほとんどが倒れたあの攻撃！

ズガガガガガアアアアアア

光が俺を恐ろしい威力で押し返す。翼が消える。刀が消える。

”一層目”のシルバースキンが砕ける。

そして、

「ッ?!」

「…シルバースキンリバーズ！」

拘束完了ッ。

「墮ちろ造物主アアアアアア！」

もがく造物主をそのまま蹴り落とす。

「はあああああああ！」

ドオン

「かつ

」

落ちて来る造物主を待っていたのはナギ。

ジャストポジションで全力の蹴りを放ち造物主は壁に強かに打ちつけられた。

ズンツと着地。

「トドメだ。」

振り上げる右手は光を放つ。

「!?!」

「驚く事はない。てめえの魔法だ。掌握出来るとは思わなかったが……案外出来るものだな?」

「お前は…ツ。」

「返すぞ造物主ッ!」

ゴシヤツ ズズン。

造物主の魔法を纏った俺の拳は、壁ごと造物主を砕ききった。

砕けた壁の向こうには魔法陣の中心に座る眼に光の無い少女が一人。光を放つ魔法陣は眩しくて、眩しくて。

「待てっ!」

一歩踏み出した俺をナギが肩を掴んで制する。

「アレが何か解ってんだらう?!」

「ああ。」

「死ぬぞ?!」

「死なんさ……俺は、あの子を助ける為に来た。」

「でもよ……。」

「ゼクトの所へ行ってやれ……。俺は、俺の目的を果たす。」

ナギを振り払って光に触れる。

ビリビリと押し返す感覚。

魔力が…消える。

「シルバースキンリバー。」

姫御子を包むが、まだ漏れ出す物は収まらない。

「シルバースキン……ダブルストレイト。」

ぐらつと目の前が揺れる。

抑え込んだ姫御子の元へ行き、抱き上げ、魔法陣の外を目指す。

たかだか数メートルが遠い。

「……………だ…れ?」

「……………柚木、宗一郎。君を…助けに来た。」

「……………」

「助けて欲しくないなら、そう言いたまえ。無理矢理にでも助けてやる。」

魔法陣から出ると光は薄れ、消えていく。

「ダブルストレイト解除。ナギ！！なんとか走って逃げる！貴様にまで回す余裕が無い！！シルバースキン解除。ロード：ヘルメスドライブ！！」

姫御子を助け出しても外の光は収まらない。

「ヴェラシオ！封印しろ！漏れ出せばオスティアが危険だつ！！！」

あの光に触れば魔力が消される。文字通りだ。奪われる、吸い取られる。そういうものではない。一気にごっそりと抜かれる感覚。

もしあれが、魔力で浮いているオスティアに掛かれれば…。
墜落前に砕くしか……無い。

結果的には封印は成功。

まさにギリギリ駆けつけた連合の旗艦も一応加わっていたが……状況からみれば必要性は薄かった。

あとは完全に終息するのを気長に待つて落とせばいいだろう。

その直後連合の元老院が帝国に対して降伏宣言を出したという報告が届いた。

24話：世界の敵の敵（後書き）

次回、25話：終戦。

5・15 12：08 VS 造物主以下を改訂

25話：終戦

帝国領、ボレアリス海峡 小島

急ごしらえで用意された会場に並ぶのは

南のヘラス帝国と北のメセンブリーナ連合の代表。

ヘラス帝国からは

皇帝陛下、第三皇女テオドラ、ヘラスの英雄銀騎士、他騎士、兵士数十名。

メセンブリーナ連合からは

元老院、紅き翼、兵士数人。

会議は魔法世界全土に放映される。

司会は中立国アリアドネーの総長。

「我々連合は……帝国に対し、停戦の要望を出した。」

「その停戦要望を一部を了承し、ここに終戦会議を始める。」

「この度の戦争は秘密結社完全なる世界により起こされたもので、我々連合はこれ以上無益な血を流さぬ為に停戦合意を行いたいと思う。」

「その提言を我々帝国は拒否する。」

ドヨドヨとざわめく会場。

「貴君ら連合の出すべきは、停戦要望では無く……降伏宣言である
う?。」

押し黙る元老院。

「貴君らの言う秘密結社完全なる世界は我が帝国の英雄銀騎士と主力艦隊の手によって討滅された。」

「それは違う!紅き翼と我々連合の旗艦も参加している!。」

「紅き翼は連合から追われていた犯罪者集団、旗艦もなんとか封印作業に割り込んだだけでは無いか。」

茶番だ。

前線に情報が届いた時、確かに連合は”降伏”と言った。
だが蓋を開けてみればどうだ?

連中は”停戦要望”を出したと言い張っている。

「我々帝国は既に連合の首都の鼻先まで侵攻している。停戦などという
温い物に同意する理由が無い。」

やはり皇帝陛下は戦争の継続、もしくは降伏(有利な条件での停戦
合意)させるおつもりらしい……。

連合の元老院。

彼らの中に完全なる世界の構成員が間違いなくいる。

さもなければあのタイミングで降伏だの停戦だのを言い出すわけがない。

紅き翼の役立たずめ……。

多くのマギステル・マギとやらをを目指す魔法使いは連合の事を本国という。

恐らくこの交渉でヘラス帝国は幾つかの土地を連合に返還する事になるだろう。

その代わりに何を差し出させるか……それが本質だろう。

これはその要求を通りやすくするための前哨戦。

「あー……疲れたのじゃ宗一郎。」

俺の首にぶら下がってだらしない声を出すテオ。

「まあ俺達は見栄の為に座ってるだけだからな……紅き翼もナギとガトウしか来て無いだろう?」

「他の面子は大人しく椅子に座ることも出来ただけではないかのう……?」

「全く否定できないのが連中だ。まあ怪我で動けんというのが事実だろう。」

ラカンは繋がったとはいえ両腕が、詠春も内臓器官がズタズタ、アルビレオは……逃げたらしい。

まあナギもナギで良く会議に出られるな……脇腹に穴が空いてる筈なんだが。

あれで内臓外してるっていうなら強運とかそういうものを超越している。

「無事で戻ってくるとは流石宗一郎なのじゃ！」

「テオの血まで貰っておいて負けるはずが無かるっ？……さて、もう少し茶番に付き合おうじゃないか。」

帝国が返還した土地はグレートブリッジを含む首都周辺の土地。帝国が得ていて、獲得したのはオスティアを含む半島、ボレアリス海峡の島群、龍山山脈の半分。

これで茶番は終わりか、という時に皇帝陛下はとんでもない事を言い出した。

「帝国は連合へ吸血鬼、真祖に対する強制賞金、また討伐対象の取り消しを要求する。」

ブッ

俺は危うく口に含んでいた水を噴き出す所だった。
何を言い出すんだこの方は!!!

「それは出来ない!!!真祖は第一級討伐対象だ!!!」

「なにを言い出すんだ!!!あれは倒すべき悪ですぞ!!!」

「そうか?真祖が、吸血鬼が倒すべき悪かね……。所で世界を救ったのは銀騎士殿という事で相違無いな?」

「連合の紅き翼もだ!」

「だが主力ではない。それは認めるな?」

「む、ぐう……。」

「ではココで銀騎士殿の秘密を明かそう。」

「なっ…陛下!ご存知だったのですか?」

小声で隣に囁く。

「すまぬ宗一郎。妾が父上に明かしたのじゃ……。」

同じく驚いた顔のテオから謝られる。

更に皇帝からの目配せ。

シルバースキンを解除せよ。か

「シルバースキン解除。」

今までは全く違つざわめきが会場を包み込む。

「あれが銀騎士…。」 「やはり凜々しい。さすが帝国の英雄だ。」
「かつこいー!!!」

「血まみれの銀…。」 「銀の戦鬼があのような男だったのか!？」
「やはり男だったか…。」

両勢力で全く異なる声。

「俺が…銀騎士こと柚木宗一郎だ。お初にお目にかかる。皇帝陛下、
いいですね?」

「うむ。」

報道陣のマイクが一斉に俺に向けられる。

「我が身、この身体は真祖である事を宣言しよう。」

「馬鹿な!!!」

メガロメセンブリア元老院は致命的な過ちを犯した。
吸血鬼は悪と言った。その口で銀騎士は世界を救ったと言った。

「真祖である証拠を見せろ!!!ただの人間であろう!!!」

逃げる場所は宗一郎を人間であると言い張るしか出来なかった。

俺はただ無言で騎士剣を抜き、そのまま胸に突き立てる。

「心臓を貫き、それでもなお生きている。そしてこの場合は日が降り注ぐ昼中。これで証明が出来たかね？」

「さて、貴君ら連合で言う第一級討伐対象とやらが、この魔法世界を救ったわけだ。それでも真祖は悪かね？」

「うつぐう…。」

「吸血鬼と言っても強い吸血衝動があるわけでもなく、吸血鬼化も容易にレジスト出来、ただの吸血鬼化ならば戻す事すら出来る。真祖は不老不死である。だが我々ヘラス族とそこまで異なるだろうか？我々は長命であり、人よりも緩やかに年を経る。」

沈黙

「人とヘラス族が手を取りあえて、何故ヘラス族と真祖が、人と真祖が争う関係になるのか？」

「だが無差別に人を襲う者もいる！！！」

「ではその者だけを罰すればいい。人やヘラス族ですら殺人を行うのだ真祖や吸血鬼が起こし得る可能性とて十二分に存在する。何故全体を討伐しようとするのかね？」

メガロメセンブリア元老院は完全に沈黙してしまった。

皇帝陛下からの目配せを受け、俺が話す。

「真祖の中には…完全なる世界によって自己意思を無視され真祖化された者がいる。俺が…私が言うのも何だが、その者らを立派な魔法使いとやらが本来護るべき者では無いかね？ロクに防ぐ事も出来ず、真祖化したら殺す。そんな物が正義かね？」

「そついう事だ。ここにヘラス帝国皇帝として宣言する。我が帝国は真祖を受け入れよう。」

シンと静まり返る会場。

「連合は受け入れなくても良いぞ。代わりに元老院を解体するのならば…な？」

「くつ、うう…わ、我々…連合は…真祖を討伐対象から、削除する事を……確約する。」

震える唇から言葉を絞り出すように宣言する元老院の老人。

「連合の勇氣ある宣言に感謝する。では次に戦犯の引き渡しに入ろうか…アリアドネー総長。」

「は、はい！これで停戦合意が相成りました。休憩時間を挟みまして、次に戦犯の引き渡しに入ります。」

「皇帝陛下!」

「柚木、宗一郎だったな?」

「はい。」

「私の考えは先程言った事と同じだ。」

「……隠し立てしていて申し訳ありませんでした。」

「いいのだ。貴君には返しきれぬ恩義がある。軍事力で劣る帝国がここまで優位な交渉を出来るのは貴君の功績だ。私の頭を悩ませておった膿も貴君が取り除いた。それでいて私の唯一の弱点が貴君の味方と来た。」

「はっ?」

「何、こういう立場になると……娘にしてやれる事も少なくなってしまう。そう言う事だ。」

ニカッとテオに似た笑みを浮かべて行ってしまわれる。

「ありがとうございます……。」

背中にかけた言葉に立ち止り、そのまま軽く手を振ると今度こそ戻ってしまわれた。

「なんとか俺と同じ臭いのする人だな。」

一息おき、

「冷や汗ものだったぞテオ？」

「なんじゃ気付いておったのか…。」

影からテオがチロツと舌を出して現れる。

「良い方に転がったからまだいいもの…‥‥‥どうして皇帝陛下に？」

「そ、宗一郎と婚約をしたいと父上に言ったのじゃ！」

「それで打ち明けたのか…。しかし陛下もテオも無茶をする。」

「む、こ…婚約に関して何か言うべき事があると思つたのじゃ…。」

「特に無いなあー。」

「なっ！っそ」

ちゅっ

ボンッ

驚き目を見開いたテオを抱き寄せておでこに口付けすると湯気が上がり出した。

「さ、戻ろつ。連合からお姫さん達を助けてやらんとな？」

「それでは戦犯に関しての議題に移ります。」

「我々連合は完全なる世界の首謀者、ウェスペルティア王国アリカ王女を既に捕えている。」

「「「「なっ！」「」「」

その言葉に驚くのは俺、テオ、ナギ、ガトウの四人。

「どづいつ事だよおっさん！！！」

ナギが元老院に掴みかかる。

「そうです。完全なる世界の首魁は墓守人の宮殿で死亡しました！」

ガトウの正論。

だが、

「アリカ王女にはクーデターの容疑がある。更にはオステシアの不安定化もアリカ王女の仕業である事は最早明白！！我々連合はアリカ王女を最上級犯罪者としてケルベラス渓谷での極刑を行います！」

やりやがった！！

そこまでして功績が欲しいか元老院！！！！

「確かに銀騎士殿や紅き翼は完全なる世界の首魁を打ち破った！しかしそれは実行犯に過ぎず、真の首魁はアリカ王女である！！！」

「（宗一郎殿、これを打開できるような情報はあるかね…？）」

「（申し訳ありません…。しかし証拠は無い筈です。）」

「証拠はあるのかね？」

「勿論ですとも。アリカ王女は妹君アスナ・V・T・エンテオフユシアの魔法完全無効能力を利用し、魔法世界全体への攻撃を企てた！封印されたとはいえ、その余波はオステイア全土を襲い、現在帝国軍と連合が協力して避難措置を取っている！もしこのまま落下すれば被害は予測もつかないほどの被害を生み出す！」

「それは証拠とは言えんだろう。」

「妹君からの証言が取れている。これ以上の証拠があるだろうか！！！」

「やられた……。」

「あの子がまともにとコミュニケーションが図れるとは思わなかった。」

「だから俺が確保するより姉と共に居る方が良いと思ってナギに渡したというのに……。」

「連中……この会談それ自体を利用しやがった。」

動ける連中はこの会談に出席させ、他は病院。ならばあの姉妹が孤立する。

”確保した。”

恐らくさっきの休憩時間に連絡を受けた情報だ。

後手に回ったか…。

「その……処刑を帝国は支持する。」

「（陛下！？）」

二勝一敗。だがその一敗は余りにも大き過ぎる。

25話：終戦（後書き）

次回

26話：交渉と閑話

5・14 Am4:00改訂、追記。

26話：交渉と閑話（前書き）

25話を上げる前にかなり忙しかった為、尻切れで投稿してしまいました。

混乱を与えてしまった様で申し訳ありません。

予定を変更しまして、交渉と閑話を御送り致します。

26話：交渉と閑話

「処刑を支持する……しかし、少し待つて欲しい。」

「なんですと？民は一刻も早い処分を望んでいるはず。」

「証拠として挙げられた姫はまだ幼い。能力を悪用されてしまうほどに……な？それにアリカ王女は小国とは言え一国の姫である事は厳然たる事実。万が一の間違いが無い様に徹底的に調べなければならぬ。妹君の証言も映像データとして勿論あるのだろうか？」

「し、しかしクーデターは間違いなく行われた！」「そうだ！」

「そうクーデターは行われた。しかしクーデターで処分を行うのであればケルベラス渓谷での死刑は重すぎる。」

「クーデターは重犯罪ですぞ！即刻死刑でもおかしくはないはず！」

「それは連合での話。ウエスペルタイアは現在、帝国の支配範囲内である。ならば帝国の法を適応するのが道理。」

「む、ぐう……！」

「捜査、調査期間並びにアリカ王女の年齢から鑑みて執行までには2年以上の猶予を持つべきであると私は考える。……それともメガロメセンブリア元老院の方々はあやふやな証拠で碌に調べもせず一国の若い姫を最も残酷な刑で処刑するおつもりか？」

ギリリと齒ぎしりの音が聞こえそうなほど苦々しく睨みつけて来る元老院。

「…………その意見に賛同…しよう。執行までの猶予は2年後のアリカ姫の誕生日まで…。」

ふうっと溜息を吐かれる皇帝陛下。

「（流石です皇帝陛下…。）」

「（宗一郎殿、二年の間に無実の証拠を。信頼しているぞ？）」

「（仰せのままに。）」

バカナギはなんとかガトウが抑えている…………か。

不幸中の幸いだな…………あれで傍にガトウじゃなかったらどうにもならなくなる所だった。

…………というかアイツの反応はただの王女に対する反応じゃ無いな。ク、俺と同類という事が。

「ではアリカ姫並びにアスナ姫を帝国へ引き渡して貰おう。」

「それは出来ん！」

「帝国が全力で調査する事を約束しよう。引き渡したまえ。」

「連合も調査に協力したいのだ。」

「では、紅の翼の方々に協力して頂こう。」

「……アリカ王女はお互いの勢力の及ばぬ所、ケルベラス特別監獄で監視体制に置くべきだ。勿論王女の安全の為でもあるし、逃亡の危険性を押さえる為でもある!」

「では、アスナ姫は帝国の管理下に置こう。オステイアの民のほとんどは帝国にいる。そちらの方が過ごしやすいであろう。」

「そ、」

「アスナ姫に罪が無いのは貴君らが言った事だ。ならば逃亡の恐れも無い。護衛と言うのなら最適の人物が帝国にはいる。」

「…護衛?ご自慢の近衛騎士ですか?」

「それもあるがそれは最適ではない。銀騎士殿、君にアスナ姫の護衛を命ずる。」

「我が命にかけて御守り致します。」

「そう言う事だ。」

「くう……アスナ姫を……お預け……します。」

「これにて全会議を終了する。明後日、記念式典でまた……。アスナ姫もその時に。」

その日のニュースは大騒ぎだった。

アリカ姫の処分よりも

真祖が第一級討伐対象から消滅するという事実は魔法世界・旧世界の隔たりなく魔法使い全てに大きな衝撃を与えた。

Side エヴァンジェリン

宗一郎に無理矢理旧世界に送られて随分経つ。

あの崩落で宗一郎は怪我をしていないだろうか…。

「ああ心配だ。」

「御主人…バカジャーネーノ？」

「なんだと！主人に向かってそういう口をきくか貴様！！」

「イヤ、旦那も真祖ジャーネーカ。」

「あ。」

「シツカリシテクレヨ御主人。」

しばらくは枕を涙で濡らす日も多かったものだ。

「今も、タマニナー。」

「独白に突っ込むなバカタレ。」

旧世界はしばらく見ぬ内に凄まじい発展を遂げていた。

あの自然が溢れ、動物達が走り回っていた新大陸はビルが立ち並ぶ超大都市に、

戦乱で焼かれた街も力強く復興していく。

私が遠い昔に住んでいた城は跡形も無く。

宗一郎と共に歩んだ世界は、その面影をほとんど残していなかった。

一人。それが私の胸を重くする。

一人で生きていく。そう言っていた日が遠く懐かしい。

だが昔と違って良い事が幾つもあった。

魔法使いが大規模な攻勢を仕掛けて来る事は無くなったし、何よりも隣に住んでいる住民に対して無関心な風潮。

これは余り定住出来なかった私にとっては中々に過ごしやすい。

たまに補導されたり、保護されるのが面倒だが。

「ケケケ幼女ダカラナ。」

「五月蠅い！だからちゃんとして年齢詐称薬を使っている！」

この姿は本当に便利だ。

男と言う生き物は宗一郎を除いて馬鹿で愚鈍である。

いや宗一郎は宗一郎で何かこう別の域にある気はしているのだが…。とにかく、食事（吸血）には困る事が無い。

ワガママを言えば若い生娘の血が一番なのだがな。

「アー…旦那ト殺り合イテエー。」

「会いたいなあ…。」

チャチャゼロの呟きに思わず本音が漏れてしまう。

しかし魔法世界は戦争中。ゲートは厳重な警備があつて入国する事は難しい。

そんな日々を過ごしていた。

ベリッ。ベリッ。ベリッ。

淡々と剥がされていく吸血鬼達の賞金首。

その手が私の張り紙を剥がした所で思わず話しかけてしまった。

「おい、どうして賞金首の張り紙を剥がしている!？」

「ん?なんだ嬢ちゃん。賞金稼ぎなのに情報に疎いのか?」

「む、ああ少し長い仕事を受けていたのでな…ソイツは闇の福音だろっ?何故剥がす?」

「アツチの戦争が終わつてな帝国が勝つたんだよ。いやあ驚いたね連合が勝つとばかり思ってたもんだから。」

「で?」

「急かすなよ。で、終戦会議で皇帝様が真祖の討伐命令取り消しを

宣言なすつたんだよ。」

「は？」

「んだ。驚くだろ？帝国の英雄が何でも真祖だとかで、おかげで何処のギルドも大騒ぎだよ。」

一瞬。

一瞬だけ嫌な予感がした。

私達が最後にいたのは帝国。大半を過ごしたのも帝国。英雄。

まさか…。

「その英雄の名前はわかるか？」

「あー…えーと何て言ったかな？コッチの人間じゃないらしくて。ああ通り名なら有名だ。銀騎士というそうだ。」

頭の中に電気が走った。

「まさか…ソウイチロー・ユズキか？」

「あーそんな感じだ。そんな感じ。良く知ってたなあ嬢ちゃん。巧く隠れてた真祖らしくて賞金首にも無いもんだがら。」

「色々あつてな。…邪魔したな。」

頭痛がする。

私をほつたらかしにしておいて…英雄などになるとは…！！！！

戦争何ぞ適当にほつたらかして、私にかまうべきであるっ！……！

「フリト無茶苦茶ナ事、言ッテナダナ。」

この時まだエヴァは知らなかった。

柚木宗一郎その人が、帝国で婚約していたとは。

「さっきの嬢ちゃんにもっとビッグニュースがあつたんだがなあ……
……いやあしかし真祖なんぞと婚約するモノ好きがいるもんだなあ。
それも皇族とは。驚きつたい。」

Side end

「あー……。久しぶり……かな？アスナちゃん。」

「……久しぶり。」

俺は今、非常に困っている。

やはり……こう、無反応な子供は困る……！！

過剰にじゃれてくる子供はソレはソレで困るのだが！？

「元気だったかな？」

「……元気。」

「宗一郎—どうじゃ—？」

がばあと背中にもしかかるテオ。

「今、コミュニケーションを図っている所。」

「妾はテオドラじゃ—！よろしくの。」

「……よろしく。」

しばらく俺とテオドラをジッと見ていたかと思うと、

「…ロリロン？」

ピシッ……………。

「ち、違っぞ？いやそうなのか？！」

この世界に来てからの女性。

エヴァ、テオ……………。

サアと血の気が引く音がする。背筋を何か良く無い物が流れる。

……………。

大丈夫。エヴァはともかく、テオは成長する。

そもそもエヴァは娘の様なものだ。…よし理論武装は出来た。

「宗一郎！？しっかりするのじゃ！正気を保つのじゃ！……………アスナ。恐ろしい奴じゃ…たった四つの音で宗一郎を行動不能にするか！流石じゃ……………」

「まあ…私は真祖だからな？ヨボヨボのお婆ちゃんですら若いと言える。」

「…タカミチとアルがロリコン。宗一郎も仲間？」

「ところで宗一郎。ロリコンとはなんじゃ？」

不味い。何故か嫌な方へ話が流れている！！

タカミチ…というのは恐らくガキのどっちかだろう。アルはアルビレオの事だろう。

そうかロリコンなのかあいつら…人間の癖に。

「仲間では無い、一緒にしないで欲しいな。テオ、知らなくていい言葉というものはたくさんあるものだ。聞き流したまえ。」

双方の頭に手を置いて言葉をかける。

「…わかった。一緒にしない。」

「むー気になるのじゃ。」

「と、とにかく本題に入ろう。アスナ、君がアリカ王女が事件の主犯だと言ったそうだが、それは真実かね？」

「…そう言えって言われた。」

「誰に？」

「…わからない。…思い出せない。」

「では質問を変えよう。君は主犯を知らない？」

「…知ってる。」

「それは誰？」

「…白い髪の子と。…顔が見えない人。」

恐らくフェイト・アーウェルックスと造物主。

「顔の見えない人は君が知らない人？少なくともお姉さんじゃない？」

「…懐かしいけど知らない人。姉さんじゃない。」

懐かしい…？

いや、そんな事はどうでもいい。

とにかく証拠の一つは崩れた。

問題は何処の誰が、いや大体は解っているのだが、やったかという事。

元老院の誰が完全なる世界と繋がっているのか
そもそも死刑にしたい理由。

責任の押し付け、名誉、功績、証拠隠滅。

どれを選んでもおかしくはない。

誘導して言わせた拳句に自分の特徴だけ忘れさせたか……。

そりゃ証拠映像も不審火で消滅するわな…。

最初あれ程ぎこちなかったアスナだが数週間もすれば打ち解けてく
れていた。

「宗一郎、コレでいい？」

「ああ出来だ。」

「何を作っておるのじゃ??」

「クッキーだよ。テオ型抜きするかい？」

「型抜きとはなんじゃ？」

「この金型を使って好きな形のクッキーを作るんだ。」

「おお楽しそうなのじゃ！」

アスナは台の上に立って、テオは腰の所を持って届くようにしてや
る。

「美味しそう。。。。」

「良い香りなのじゃ！」

焼き上がったクッキーは香ばしいシナモンの香りを放つ。

食べ始めた二人を見守りつつ思う。

今までアスナはどのような生活をしてきたのか。と

たった数週間で気さくで知的な本来の少女の様になった。

そう。たった数週間で、である。

しかし、共に居れば共に居るほど完全なる世界が悪用した理由が解る。

最初は軽い冗談のつもりで咸卦法を教えた。

習得までにそう時間は掛からなかった。

武術も立ち周りも。

……………蛇さえも。

白紙のノートに書き込んでいる気分になる。

震えが来る。恐怖じゃない。歓喜…でも無い。

紅き翼の連中の技も幾つか見て覚えている。

神鳴流の技も簡単なものなら再現できる。

俺がしてやれる事は、もう二度と悪用されないように自分の意志を貫く手段を教えてやる事だけ。

あとは…一緒に過ごす。
それだけだ。

あとはアリカ王女をどうするか……………。

何、どう助けるかはナギ次第で決めてやる。

なあ……………お前は、どの道を選んだ正義の味方

だ
？

26話・交渉と閑話（後書き）

次回

27話・ナギ・スプリングフィールド

27話：ナギ・スプリングフィールド

「遅かったじゃないか紅き翼の諸君。」

沈黙。

「久しぶりに感じるぜ…ユズキ。」

「一番最初に口を開いたのは、やはりナギ。」

「テオ、ガキ二人を構ってやってくれ。」

「うむ。わかったのじゃ。ほれその二人行くぞ?」

「いいのかい? 仮にも…。」

「もう戦争は終わったんだ。そうだろう青山詠春。」

心配そうな顔でこちらを見るガキと、
こちらを熱い目で見つめるガキ。

「それはそうと、改めて自己紹介しよう。真祖で帝国第三皇女の守護騎士にして番犬、柚木宗一郎だ。よろしく?」

「俺はナギ・スプリングフィールド。紅き翼のリーダーだ。」

「私はアルビレオ・イマ。」

「俺はジャック・ラカンだ。」

「よろしく。青山詠春だ。」

「ガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグだ。」

「くくっ…そう睨まないで欲しいね。」

「なにをッ！」

「アスナ姫の証言は捏造だった。これはそちらにも届いているだろう？」

「もう一つの方だ！！」

「あれも事実だ。アリカ王女は自ら罪を認めた。」

そう。アリカ王女はあろうことか自分の罪を認めた。

元老院に何を言われたか知らんが…。

アスナは無事だ。民も無事だ。何度伝えてもそう言うのだからお手上げた。

助けてくれ。そう言われれば何とか努力しよう。

どんなに劣勢でも引っ繰り返して見せよう。

だがな…？

自ら死にたがる奴はどうやったって助けられない。

俺が居ない時に連合側の捜査班に録音させたのだ。どうしろと言っ。

「帝国側の捜査なら幾らでも揉み消せるが、連合の前でベラベラ話されたんじゃどうしようもない。」

おかげでメガロメセンブリア元老院を追い落とす事が出来なくなつた。

「ハハハ……堂々と揉み消すっていうかな君は。」

「どうにかならねえのか？」

「どうにもならないな。一年半後にはケルベラスの魔獣の腹中だ。……と忘れてたナギ、アリカ王女からの伝言だ。」妾に構わず苦しむ無辜の民を、世界を救ってくれ。」だとさ。」

「本当にそう言ったのかよ……。」

落ち込んだ様に見える。

「余り言いたくは無いが、そもそもこういう事態になったのは君達の責任だ。そうだろうガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグ。お前の才覚で、元老院までたどり着けないなんて事は無い。」

「それは……。」

「何を迷ったのか知らんが一つだけ、どうせなら戦争中に全員殺しておくんだつたな？」

「無茶苦茶だ！」

「そんな事は出来ませんよ…。」

そこまで立派な魔法使いは目指したいわけか…。

「まあ…そう言うだろう。さて、わざわざココまで来たんだ聞かせて貰おうかナギ？」

「どういう意味だ？」

「そのままの意味だ。貴様に、九を捨てて一を取る覚悟があるかと聞いている。」

沈黙。

「眼を見れば解る。戦場でのお前の目は輝いていた。ところが今はどうだ？迷いと疑問で濁りきっている。お前が抱いている正義への疑問の答えはソコにある。まあもっとも最適解というわけでは無いかな？」

「アンタは俺に何をさせたい？」

「お前の心が動くままにやれ。俺は、邪魔しない。協力も、な？」

「貴方が柚木宗一郎ですよね?!」

紅き翼の面々が出て行ってすぐに俺を熱い目で見ていたガキが駆け込んできた。

「そうだが……何の用だ？」

「僕には丸を捨てて一を取る覚悟があるんです！でも力が無い。お願いです僕に……。」

「力を付けて欲しい。それも一年半以内に？」

我が意を得たりと、コクリと頷く。

「名前は？」

「クルト、クルト・ゲーデルです！」

「クルト、一年半以内にどれだけ鍛えても君には救えない。紅き翼にも様々な使い手があるだろう？そちらで積むと良い。」

「で、」

「それでも、と望むのなら……。紅き翼の誰かを正面から倒せ。もしくは俺を倒してみろ。」

「そんなっ」

「無理だ。そう思うのなら君の信念はその程度だ。憧れで命を捨てるなクルト。」

「やります。貴方に絶対認めて貰います！……失礼しました！！」

「あれは無茶をする顔じゃぞ？宗一郎。」

「連れて来ておいて良く言つよ。」

「なんじゃ…バレておつたか。」

「真祖はな？鼻が利くんだ。相手が君なら尚更な。」

「ええい止めい恥ずかしい。コホン…わざとそそのかしたのは、どういつつもりじゃ？元々助けるつもりだったくせに。」

「むくれるなよ…。」

「まるで宗一郎が悪者のようではないか！」

「ああでもしてやらないと連中は動かないだろう？マギステルマギとやらを目指してるんだから。」

「そ・も・そ・も・じゃ！核鉄とやらが使えるかどうかを確かめる為だけにケルベラス溪谷へ入る奴がおるか！！！！！」

「」

「ここにおるなどと言つたら…どうなるかは解つておるな？」

「なあ…最近手慣れてきただろうテオ。」

「宗一郎が慣れないように慎重に行動してくれると妾も嬉しいのじやが?」

「むう。」

「アリカ王女を助けたい気持ちは妾も解る。じゃがな?証言の隠蔽もバレればタダでは済まんぞ?!」

「何、無理を通せば道理はひっこ」

「まんわ!!!」

ガタツ。

「誰だ(じゃ)?!」

ビターーン。

……物音がして、慌てて外に出たら足を引っ掛けられて転んだガキ二号とアスナがいた。

「へへへ…お手柄。」

「うぐう。」

「大手柄だぞー。」

なでなでぐりぐりとアスナの頭を撫でて、それを見て不満そうなた才を撫でつつ笑顔でガキ二号へ話しかける。

「さあて少年？ちよつと奥で話そうか。何、傷つける意志は無い。
……………君の記憶力次第では。」

S i d e タカミチ

クルトとテオドラ様が居なくなってしまうって探しに来たら、クルトが柚木さんの部屋から飛び出してきた所だった。

「……………宗一郎。」

「連れて来ておいて良く言うよ。」

「なんじゃ…バレておったか。」

何を話しているんだろう……気になるな。

「真祖はな？鼻が利くんだ。相手が君なら尚更な。」

わわっ…不味かったかな…あ……近い。近いよ。

柚木さんとテオドラ様は大人だ…。

「ええい止めい恥ずかしい。コホン…わざとそそのかしたのは、どういっつもりじゃ？元々助けるつもりだったくせに。」

そそのかした？助けるつもり？

って真剣な話してる傍でなにやってるんですか！！？？

「むくれるなよ…。」

「まるで宗一郎が悪者のようではないか！」

「ああでもしてやらないと連中は動かないだろう？ マギステルマギとやらを目指してるんだから。」

「そ・も・そ・も・じゃ！ 核鉄とやらが使えるかどうかを確かめる為だけにケルベラス渓谷へ入る奴があるか！！！！！」

…き、聞き間違いだね。ケルベラス渓谷へ入るなんて？

「」

「」におるなどと言つたら…どうなるかは解っておるな？」

入ったんだー！！！！…って…アルの持つてる本より濃い事を…あわわ。

「なあ…最近手慣れてきただろうテオ。」

「宗一郎が慣れないように慎重に行動してくれると妾も嬉しいのじやが？」

「むう。」

「アリカ王女を助けたい気持ちは妾も解る。じゃがな？ 証言の隠蔽もバレればタダでは済まんぞ?!」

駄目だ。これ以上聞くのは危ない気がするよ。視覚情報的にも。

さりげなくクルトを追い掛けよう。

「何、無理を通せば道理はひっこ」

「まんわ!!」

!?

ガタッ。

しまった!!いきなり大きな声出すからビックリして躓いた!!

は、早く逃げないと!

向こうが出口のはぬっわああああ
ビターーン。

なんとか起き上がって隠れないとっ…

ぐっじゃ

「むぎゅっ。」

「へへへ…お手柄。」

「うぐう。」

そんな、Vサインまで出さなくても……。

「大手柄だぞー。」

いつから…姫子ちゃんは、こんなに乱暴にいい。

「さあて少年？ちよつと奥で話そうか。何、傷つける意志は無い。
……………君の記憶力次第では。」

「ひい。」

あの後、こつてりと絞られて

「忘却術は使わないが、言ったらどうなるかわかるよね？」という
笑顔？で説得を頂き、僕は聞いた内容を忘れる事にしました。

あんなに笑顔が怖いと思つたのは初めてです。

みんなに合流してからガトウさんにもこつてりと怒られました。

ラカンには姫子ちゃん関係だろうとからかわれましたが、断じて無
いと思ひました。

僕に踏まれて喜ぶ趣味はありません。。。

S i d e e n d

27話：ナギ・スプリングフィールド（後書き）

次回予告

一年半の時が経つ。

アリカ王女は自らの罪を認め静かにその日を待っていた。
ナギは人々を救いつつも、ただ一度の好機を待っていた。
元老院は歓喜していた。

その日を境にまた自分達にとっての明るい未来を創り出せると。

宗一郎は静かに笑い、その瞬間を待つ。

そして全ての者の思惑が絡み合う中オスティアは……。

大戦期編暫定最終話

28話：ケルベラス溪谷

28話・ケルベラス溪谷（前書き）

28話：ケルベラス溪谷

アリカ処刑まで一か月を切った頃。

Side 紅き翼

「ナギ！動かないつもりですか？！もう一か月も無いんですよ？！
戦災復興は確かに重要ですが！！」

「……………」

「ナギッ！答えてください！貴方が行かないで誰がアリカ様の名譽を守るのです！！好きな女の一人も救えず、何がサウザンドマスターですか！！！アリカ様を救いだして元老院を告発、真実を明らかにするべきです！！！」

俯いたまま何も答えようとはしないナギ。

「……………見損ないましたよナギ。……………今の貴方は僕が憧れたサウザンドマスターじゃない。」

机を強く叩きクルトは飛び出して言ってしまった。

「…せめて何か言っただけやるべきじゃないかなナギ？」

余りの姿に見かねた詠春が声を掛けた。悲痛なナギの顔。

「なあ詠春。」

「すまない詠春……ありがとよ。今ので気合が入ったぜ。」

ナギは詠春を引き剥がしつつ目に強い意志の光を灯していく。

「ったく……やつとかよバカナギ。ずっと腑抜けたまんまだったから危うく帝国の勧誘を受ける所だったじゃねーかよオイ。」

「その割に乗り気だったように見えるけどね俺には……ま、かく言う俺も他人ひとの事言えねえんだけどな？」

「ラカン、ガトウ。」

「私も忘れて貰っては困りますよナギ？」

「アル……。」

「ま、結局みんな見捨てるって事が出来ねえんだよ。」

「世界も姫子ちゃんも”彼”が助けてしまった。けれど、”彼女”はこんどこそ僕達が助ける。そうだろうナギ？」

「ああ……紅き翼はまだ折れちゃいねえぜ!！」

S i d e e n d

アリカ王女処刑まであと二週間。

「失礼します。」

「お前か……遅かったな？アイツはもう動かないのだとばかり思っていたぞ？」

「そんな事は微塵も思っただけで無いでしょう柚木さん。」

「フンツ……これだから勘が良くて覗いたり盗み聞きするガキは嫌いなんだ。」

「だからアレは決して覗いていたわけではなく、いえ見てしまったわけですが、そういう気持ちでは無く。」

「ああもう五月蠅い、わかった。良いから報告をしろタカミチ。」

タカミチからの報告を受ける。

クルトが必死で訓練している事、ナギ達紅き翼の再興。

ラカン達数名の帝国軍兵士への潜入。

ナギが当日に動くという計画。

「やはり当日に動くか……。いい判断力だ。」

「ほう帝国軍へ紛れ込むか…いや、お前は無茶じゃろうラカン。他はなんとかなりそうじゃが…。」

「テオ、当日の会場警備にコイツらを組み込めるか？」

「うづむ…出来ぬ事は無いのじゃが…ラカンは特注になるぞ鎧が。」

「経費で落とせばいいだろう？」

「値段の問題では無いわ。型からやらんと無理じゃろう、この筋肉達磨は……。時間が足りぬわ。」

「まあアイツの便利アーティファクトで何とか誤魔化すだろう。うん。」

「あの…柚木さん。」

「なんだ？」

「貴方の当初の計画はどういう物だったんですか？」

「ああ、ケルベラス渓谷ごと綺麗さっぱり消し飛んで貰うつもりだったんだが……。兵士の半分は帝国軍だわ、皇帝陛下はご出席になれるわで…な？」

「なんて乱暴な……。まともなMM元老院もいるはずですよ?!」

「だから?」

「だからって?! テオドラ様! 何か仰って下さい!」

「妾はこの件に関しては完全に宗一郎に賛成じゃ。手柄欲しさに処刑を急ぐ様な屑ではないか。」

「まともなら周りの暴走を止める義務がある。それが出来ずに利益ばかりにしがみ付いている様な奴なら……居ても居なくてもさして変わらん。」

「ッ。僕は貴方に憧れている。でも貴方のそういう所だけは決して相容れないと思います。」

「くっくくく。」

「何がおかしいんですか?!」

「そういう意志を持った奴を俺は欲しいんだがな? ガトウにも声を掛けてみたが、彼にも断られたよ。捜査官としての嗅覚や戦闘能力は評価しているんだが……。クルトと違ってお前が俺の所に来ると言ってくればなあ。」

「僕もガトウさんも貴方に協力する事はあっても……貴方の下に付く事はありません。」

それでは失礼します。と出て行くタカミチ。

「これはまたドギツク振られたじゃねーかよ。」

「ヴェラシオ……。」

「睨むなつて大急ぎで作らせた仕掛けが出来上がったぜ？」

「ああ、これで仕込みは整った。あとは結果をご覧あれ。ってな？」

重戦争犯罪者アリカ・アナルキア・エンテオフュシア 処刑執行当
日。

Side MM元老院

（アスナ姫を我らが手にする事は出来なかったが、これはこれで上
々の出来。）

（さしもの帝国の英雄とはいえ、アレを弁護する事は出来なかった
わけだ。）

（所詮、強いだけの化け物。知性はあっても知能は無いのじやろう。
ならば我らが返り咲く事も何ら難しくは無い。）

（しかし、失敗しましたなあ。アレが参加していると言うのにテオ
ドラ第三皇女とアスナ姫が見えない。）

（いやいや、この期に襲ったのでは色々拙い。少し時期を置いて我
らが手に戻しましょうぞ。）

(所謂いえば我らが連合の英雄連中はちゃんと引き離しておるだろ
うな？)

(抜かりなく。)

(ほっほっほっ今日の魔獣は腹が減っておるのかいつにも増して吠
えておるわ。)

(では始めようではないか……。)

「魔獣蠢くケルベラス溪谷。魔法を一切使えぬその谷底は魔法使い
にとつてまさに死の谷。」

「古き残虐な処刑法ですが、この残酷さを持つてようやく……魔法
世界全土の民も溜飲を下げる事と相成りましょう。」

「ではへラス帝国皇帝陛下、号令をお願い致します。」

「う、む。処刑を執行せよ。」

S i d e e n d

S i d e アリカ

恐怖は無い……。妾は……満足じゃ。

オステイアの民は救われ、あの子は保護されておる。

あやつならきつと最期まであの子を守ってくれるじゃろつ。

空しく、誰の役に立ったかも解らず死ぬよりはマシじゃ……。

王宮に生まれ、奪われるだけの日々。

その終着が付き、更に妾の死を持って戦争が完全に終結するのならば……。

……ならば、妾は満足じゃ！

「歩け！！」

「触れるな下郎！言われずとも歩く。」

ただ一つ、心残りがあるとすれば……ナギ、そなたの顔をもう一度だけ、主らと過ごした戦いの日々だけが、負け続けた戦いの日々が……何故か暖かだった。

亡き父王がこう言った。

”人の生も、この世界も全ては儂い泡沫の夢に過ぎぬ……”と。

ならば、この眼下にあるものも悪い夢。

さらばじゃ……ナギ。

Side end

Side 皇帝

始終聞こえていた魔獣の雄たけびと肉を食む音が更に大きく溪谷に響く。

「クツクツ……王家の血はさぞや美味でしょうな。この処刑法の最大の長所は、復活がほぼ不可能な点です。魔法の使いぬ谷底で、幾百の肉片となって魔獣の腹に収まってしまえば例え真祖であろうとも……おっと銀騎士様は真祖でしたな。失礼致しました。」

腐っておるな……。

私が頭を痛めたあの連中ですら、ここまで腐っておらなんだ……。

「くう……アリカ様……。」

宗一郎殿……いや婿殿が連れてきた子供。紅き翼の一員であったそうだが……。

この様な小さき者ですら悲しんでおると言つのに……。

しかし、婿殿……何故お主は動かなんだ……。

テオドラもアスナ嬢も置いて、私の傍に付くと言つから……。
そついう事であると思つていたのだぞ？

「よろしい。以上で処刑を終了する。」

「よおおおーしこんなもんでいいな?!」

Side end

「よおおおーし。こんなもんでいいな?!」

帝国騎士の一人が笑いながら

「録れたか?ちゃんと録れたよな?よおおし御苦労!おっさん?!
これ生中継とかじゃねえよな?」

「おっさん！？無礼者め！！貴様何者だ名を名乗れ！！！」

ズカズカと元老院に歩み寄りガシッと掴む

「録画はここで終わりだ。で、今からココで起こる事は”無かった”事になる。わかるな？」

ゴリゴリと掴み上げる。

「貴様はっ？！」

「ふうん！！！」

その掛け声で鎧は弾けて壊れる。

「じゃ、ジャック・ラカンだと？！馬鹿な！！！」

帝国兵、MM兵の中から続々と紅き翼のメンバーが現れる。

「紅き翼？！馬鹿なッそちらが本命か！！！！では谷底の女王は？！」

Side アリカ

なんじゃここは…ここは地獄か？

もっと寒く恐ろしいモノかと思っておったが…。

何やら暖かで、力強いものに抱かれているような…。

おそろるおそろる妾は目を開くと

「え」

そこには妾が願ったものが…いた。

「ナ…ギ…？え…？何故お主が地獄に…？アレ？」

「バーカ。アンタを助けに来たんだよアリカ。」

「え？何故じゃ？な、なぜお主がここにおる？！」

「いつまでボケているアリカ王女！現実を見る！ナギ、流石に数が多い！！さっさと走り抜ける！！」

四本二対の鎌とオレンジ色に輝く大きな突撃槍を持った男。

「すまねえ宗一郎。」

「だから走れと言っている！！！礼も謝罪も後で受け取る！」

「いくぞアリカ！！」

「え？ふわっあ。」

「どついつつもりじゃナギ！あの者はあそこで死ぬ気か？！お主もじゃー！いくらお主でも自殺行為じゃー！」

「アイツは大丈夫だ！アイツはここでも戦える！」

「ではお主は？！魔法も気も使えぬこの場では主も一般人であるう？！あの者が引きつけているとはいえ、一撃でも掠れば即死は免れぬぞ？！無謀にも程がある！何を考えておるこのトリ頭！！！」

「確かにな。アイツと殺り合った時よりヤバい状況だ。けどよ？クリアの報酬がアンタだってんなら、このスリルも悪かねえ！！！」

「な…何を言うておる。妾は何故かと聞いているのじゃ！何故あの男もお主もここまでのリスクを冒して妾を助ける？！無意味な行動じゃ！！！」

「ハッ…忘れたのかよ？言っただろう？どこへだって俺が連れて行ってやるつてな！！！」

「りつ理由になつておらぬ！！妾はもはやそなたの主君であるどころか王族でも無い！戦争を起こした大罪人、世界を滅ぼそうとした災厄の女王じゃ！！妾の救出に意味は無い！！！」

「ゴチャゴチャうるせえ！！！！あーもー言わなきゃわかんねえんだろうなこの箱入り姫さんはよお！理由だ？」

「俺が！アンタを！好きだからに決まってるだろおが！！！」

「は？」

「杖よ！」

「…ってオイ何だよその顔は、予想もしてませんでしたーって顔だな。傷つくなあ…何が世界を救えだ、何が無辜の民を救えだ。好きな女救えねえ男に、何も救えるわけねえだろ バカ」

「はっ…流石に処刑前から渓谷の中にいると言っのはいささか無謀だったか。」

魔獣、魔獣、魔獣の群れ。

「ロード：ヴァルキリースカート、ロード：サンライトハート。悪いが魔獣共、切り刻ませて貰う。」

何時間戦っただろうか…。流石に疲労が来る。
時計が三十分の時に壊れて……。

先程ナギが来た。

「宗一郎か?!なんでココに…。」

「貴様、何故降りてきた！」

「いや、だってあんたが戦ってたからよ？」

「チツ…いいか？アリカ王女はお前が受け止めてやれ。俺はお前達が逃げる為の時間稼ぎをする。」

「俺が？魔力も気も使えねえんだぞ？アンタが、」

ナギの胸を右手で掴み上げ、左手だけでサンライトハートを振るう。

「いいか？目を開けて、絶望が明けて、一番最初に見たい顔はなんだ？！好きな奴の顔だろう？！夜の迷宮でテオが貴様なんぞに飛び込む羽目になった時の事は覚えているだろうな？！今すぐにも貴様の臓物をブチ撒けてやりたいが今は良い。心は決まったんだろう？！ならお前の意志が動くままにやれ！！！」

「ありがとよ…。すまねえ。」

アリカ王女が飛び降りて、俺の肩を使って飛んだナギは魔獣に食われる前に確保。

二人が走り去って既に十分。

恐らくは抜けた筈…。上の連中の為に帝国兵は手を抜くように言うてある。

脱出用の何故か警備の薄い古い型の艦船も置いてある。

陛下の避難はシルバースキンもどきを着たヴェラシオがやっているはず。

「サンライトハート解除！ロード…ヘルメスドライブ！！！」

ならば俺が脱出するだけ!!

「ああ、そうじゃ!この二年間、一日たりとも主のゴトを考えぬ日は無かったわ!!ソレがどうした悪いか?!!」

アリカの告白が終わり、ナギが抱き寄せようとした瞬間。

俺は、よりもよって二人の前に転移した。

「あ……。」

「うっ。」

「…ああスマン。…その邪魔をしたな。俺の事は気にせず続けてくれ。」

「出来るか!……!」

28話：ケルベラス溪谷（後書き）

やはり微妙に終わらなかった！

次回：ケルベラス溪谷後日談

29話：ケルベラス溪谷後日談（前書き）

50万アクセス、5万PV突破しました。

ありがとうございます。

これからも応援、感想、ご意見よろしくお願いします。

29話：ケルベラス溪谷後日談

「婿殿：先に言うべきではないかな？以前の君主と騎士という関係ではないのだぞ？」

「申し訳ありません皇帝陛下……帝国内にまだ完全なる世界の残党や元老院と繋がったが居る可能性があります故。」

「だがそれでも……だ。テオドラの周りには良い騎士たちを付けている筈だぞ？それにテオドラにも言われただろうが、ケルベラス溪谷へ入るなど無謀だ。まあそれをやる者がこの世界に二人も居た事が私には驚きだがね。……ところで、証拠の方はどうだったのだ？」

「それは……………」

「婿殿が調べていない筈が無い。如何な内容であろうと良い。」

「これが、その資料でございます。」

分厚い紙の資料を懐から取り出し陛下に。

「うむ。」

パラパラとめくり、幾度か溜息を吐いた後、

「道理で婿殿が渡す事をためらうはずだ……。これは…拙い、拙過ぎると言っても良い。こんなものを公表すればアスナ姫だけではない。オスティアの民が……。元老院め…解っておって……。」

「処刑場での計らい、感謝いたします。」

「あの状況であれば婿殿が何かを行ったのは明白。ならば父としては意図を察して協力してやらんとな?」

「は?」

「騒動が起こるなり婿殿に扮したヴェラシオが私を奥へ逃がそうとするのだ。そこで私はハツと来たわ。コレは婿殿では無い、とな?ならば連中が逃げやすいように図ってやるしかなかるう?」

「いえ、そこでは無く...。」

「む?テオドラは我が娘、君は婿、ならば私は父であるう?年齢的には...異なるかも知れんがな。」

「ありがたきお言葉。」

「だから...言葉が堅いと言うておるのだ。何も公の場でフランクに会話をしたいというわけではないのだ。」

「りよ...、ゴホン。わかりました。努力します。」

「それでよい。この資料は私が責任を持って来るべき日まで保管しよう。」

「本当にいいのかクルト・ゲーデル？」

「はい。紅き翼のやり方では世界は救えない。僕は貴方に付いていきます。」

世界を救うか……。大きく出るものだ。

「そうか……。勿論、紅き翼の誰かを倒してきたのだろうか？」

「いえ……。しかし神鳴流の技術を習得しました!!」

「あの流派か……。別段珍しくも無い。」

「お願いします!!」

必死で何度も頭を下げるクルト。

これ以上イジるとテオから大人気無いと言われそうだし……。
仕方あるまい。

「ならば君に任務を与えよう……。」

「はいっ!!」

まさに喜色満面。

「メガロメセンブリア元老院の中に潜り込め。」

「なっ!?!……貴方が師事を付けてくれるのでは無いのですか?!」

喜色満面から絶望へ転がり落ちるクルト。

「そんな事は言って無いな。俺の下に付くんだらう？ならば使命を果たせ。メガロメセンブリアの情報を俺に定期的に流せ。」

「しかし…。」

「俺は武の人間だ。確かに政にも対応は出来る。が、武に比べれば劣ると言わざるを得ないだらう。そこで君だ、君は紅き翼でも政に対する適性が高い方に見える。こう言い換えてもいいだらう。俺の右腕となつてメガロに潜り込めクルト・ゲードル！」

「僕が…右腕…。解りました！すぐにメガロへ渡ります！」

「紅き翼から離反した。そう正直に伝える。それで連中はお前を取り込もうとする筈だ。」

「はいっ！」

クルトが走り去り、

「おい宗一郎！使い潰す気か？！あんなガキを！」

「ガキだからこそMM元老院に潜り込める。洗脳出来ると思わせる事が出来る。下手な大人だと信用されない、下手な人間を選べば二重スパイ。若く、政治能力に長けていてコチラに忠誠を誓う人間…そんな奴はアレの他に誰が居る？！」

「それでもだ！！他に幾らでも手段はあつただらう…。」

「これは予測だが、連中はこれから俺やアスナ嬢、果てはテオの命を狙う。紅き翼の連中もだ。今度の事で連中は思い知った。自分達の思いのままに動かぬ英雄なぞ必要無い…とな。」

「つまり…。」

「英雄に出来る人間を探している。無知で、素直で戦いの才能がある人間と扱いやすい自分達の護衛兼右腕。」

「クルトは護衛兼右腕…という事か。」

「今の紅き翼には付いていけない。つまり反逆する様な団体には居られない…とな？それこそ10年20年の期間で潜り込んで信用される事が重要になる。」

「まあ釈然としないが…クルトを送り込む理由と生き残る可能性が高い事は理解できた。しかし…10年20年、簡単に言うなお前は…。」

俺はハツとした。

「お前にとつては10年20年は大きく無いだろう…でもよクルトは人間なんだぜ？アスナ姫だって20年も経てば結婚して、子供が居てもおかしく無い。テオドラ様はかなりいい女に育ってる頃だ。俺は耄碌しかけたらうさ。」

「悪い。」

「良いってことよ。…というか突っ込めよ！沈んだ空気を持ち上げようって言う俺のジョークを放置か?!20年で俺が耄碌するわけ

ねえだろ?!」

「わからんな……総入れ歯で杖付してるかもしれんぞ?」

「てめっ!」

「待てって、お前にも話がある。」

片手で詰め寄ろうとするヴェラシオを制し

「陛下にな…騎士団を作れと言われた。団長は俺だ。」

「で、面子を揃えてえわけか?」

「ああ。ルーシーを誘ったんだが、近衛騎士からは離れたくないらしくてな。」

「内心は付いて行きたかったみたいだぜ?でよう何て名前の騎士団だ?」

「白銀騎士団。団長が俺、副団長がお前、諜報班がクルト。それしか決まって無いがな。」

「俺?!」

「ああ。お前以外に誰が居る?」

「まったく……しゃあねえ。その代わりてめえが無茶な事やったらテオドラ様に報告するぞ?」

「お前が忠言する所なんじゃないのか?!そこは!」

「俺が言っても止まらない。それはケルベラスで完全に証明されたぞ?よし、シルバースキンだったっけ?アレをうちの制服にしようぜ。」

「どこの不審集団だ!!!」

「ぶはっ俺のてめえへの第一印象を……。つか知らないのか…あれが英雄の着ていた服なんだぜ一般的にはよ。実際式典もアレで通していたんだ。誰も今更怪しまんさ。」

「そっいうもんなのか?」

「テオドラ様との婚約発表も正式にされてるから帝国じゃてめえの顔を知らない奴も居ねえ位の有名人だぜ?服装に気を付けるよ?その時に着てた物が流行りになる。」

そう。

最近では通り名が変わって来た。

婚約の正式発表の後から

不死王、帝国の守護者っていう呼び名が増えた。特に不死王。

ノーライフキング……不死者の王。

しかし…相変わらず背中が痒くなる名称が多い。

本名の柚木を隠していた所為もあるのだろう…柚木宗一郎という名称は余り知られてはいない。

だがだ

何時の間にファンクラブ?が出来ていたのか解らないが、其方では本名を言えて初めて加入できるらしい。

何やら熱心に文書を送ってくるから会いに行つたのだが……。

アレはミスだった。

サインを求められても前世と今世両方で考えてサインする様な機会は無かった。

書けるわけが無いだろうが……。

適当に名前を書いて渡したが……あれで良かったのだろうか……。

握手した彼女はちゃんと手を洗っているだろうか……。

あの後爆発的にファンが増えたらしいのだが……。

ファンクラブの人間に会つた事をルーシーがテオに報告してこっぴどく怒られたものだ。

「まあとにかく面子は任せた。人種も種族も混合でいいさ。」

戦争が一段落ついて気になるのはエヴァの事だ。旧世界で何をしているのだろうか……気になる。

もう俺の事なんて忘れてしまっただろうか……？

そんな事はない筈だ。そう自分の心に言い聞かせた。

一度、旧世界に戻ってみるのもいいな……。

真祖でも襲われなくなつた。ならエヴァに教育を受けさせてやりた
い。

普通の……同年代の子と仲良くなつて欲しい。

10歳で真祖化、そして放浪。
ある程度は教えたとはいえ……やはりな。

しかし、それをどうやってテオに言おうか…。

アスナは連れて行けばいいとして、流石にテオまでは連れ出すわけにはいかない。

そうだ…アスナにも教育を受けさせるか。

最近どうもテオや俺の影響を受けてお転婆かつ狡猾な感じが否めない。

腹黒さまで出てきているようで……。

やはり同年代の子達と触れ合って丸くなってもらいたい。

正直お転婆は1人で十分だ。

しかしそうすると長期間テオを独りにしてしまう……。

とりあえず…旧世界で入れそうな学校を探すか…。

Side ?

「このまま黄昏の姫御子が成長してしまつては困る。」

「記憶も困りますな……誘導する際に私は顔を見られてしまいました。思い出されては敵わん。」

「しかし…壊してしまうには問題があるでしょう。」

「一体どうするのかね”フェイト・アーウェルンクス”？」

「僕自身が動きます。彼が成長を止めざるを得ない様にして記憶を消してしまえばよいのですMM元老院の方々。」

「では君に任せよう。」

「うむ。そして我々は次の好機まで待つとしましょう。」

「ええ。次こそは必ず。」

「『『『『我ら完全なる世界の為に。』』』』」

所は変わって人気の全く無いオスティアに少年が立つ。

「武の英雄に未来を創る事は出来ぬ。お前は何かを変えたつもりであろう？だが結局何も変えられまいよ……。愚かにも人形を愛した英雄よ。自らに問え、ヒトや人形は身を捨ててまで救うに足るものか？愚かな英雄よ、貴様も我が2600年の絶望を知れ。」

その姿は……今は亡きゼクトに似ていた。

大戦期編END

29話：ケルベラス溪谷後日談（後書き）

これにて大戦期編終了となります。

次回

安心。それは誰もが感じていた。油断は必然だった。
放たれる刺客。失われるモノ。

運命の改変は更なる惨劇の幕開けに過ぎない。

30話：失態

30話・失態（前書き）

家中の電波時計（3台）がとち狂っててレポートがアボンしました

Orz

一番酷いのは最も良く見る時計が三時間以上もズレていた事。

30話：失態

アスナを学校へ通わせる過程で気が付いた事があるのだが、タカミチを巻き込んでしまうのはどうだろうか？と思う。

クルトは詠春から剣術を学んだ、そしてタカミチはガトウから無音拳を得た。

ならばそれなりに護衛役にはなるだろう。

とにかくソレは一旦置いて

どこの学校へ通わせるか…だが、魔法世界の学校は駄目だ。

帝国内の学校も危険と言わざるを得ない。

それに俺が関わっていて、なおかつウエスペルティア最後の姫となれば注目を浴びるのは確実。

そこで旧世界に目を向けてみたが、そこで大きな問題が発生した。

戸籍などあるわけがない。

まあ魔法学校なるものが一応あるにはあるらしいのだが……。

正義馬鹿と同じ所に置くのは不安でしかない。

一般の学校にほど近い無理の効く学校、もしくは閉鎖的な学園都市のようなものがあればなあ。

そんな諸々があって旧世界の名家出身の詠春に連絡を取る事にした。

「　　というわけなんだが……そういう学校は知らないかね？」

「ありますね。義父が…学園長をやっています……そうそう僕結婚したんですよ。なのでこれからは近衛詠春と呼んでください。ちなみにコレが嫁の写真です。どうですか？美人でしょう？美人なんです。」

聞きたい内容では無く、先程から何度も嫁の写真を見せられる。紅き翼でまともな連絡を取れる奴がコイツとガトウしか居なかったのはどうかと思う。

そう思いつつも、まともな連中がその二人なんだよな…と理解してしまう自分が割と悲しい。

「なんとなくだが数年経って子供が生まれた時に同じセリフを今度は娘に変えて言われそうなのがするな……。」

なんだろうか？コチラも惚気てやるべきなのだろうか？

「なにか言いました？」

「いや、聞き流してくれ。ノロケ話は横に置いて、その学園の事を話してくれると嬉しいのだが……。」

「ああ麻帆良学園でしたね。幼稚園から大学まで内部にありまして日本最大級の学園都市です。旧世界一かもしれませぬね。」

「む……そこはもしかして馬鹿みたいに広くて、やたらデカイ木がある学園じゃないか？」

「御存じだったんですか？」

「ああ…数十年前に立ち寄った覚えがある。エヴァと修行の為に日本へ渡ったからな。そうか…あそこか。」

「立ち寄った？貴方は日本人だったのでは？」

「英仏百年戦争時代の生まれだよ。それ以外は秘密だ。」

「そう……ですか。しかし不思議な物ですね。大戦時には貴方と僕は殺し合ったと言うのに、今は笑って歓談している。」

「確かに不思議だな。…ところでナギ達は巧く逃げられたか？」

「ええ。ナギとアリカ様は旧世界へ誰にも気づかれる事無く。」

「新婚旅行兼ねてってか？」

「ええ。皆で京都に行きました。」

「騒がしそうだな。」

「貴方もアスナちゃんを連れて一緒に来れば良かったのに…。」

「バーカ。俺が言ったら楽しめるもんも楽しめなくなるさ。」

「いえいえ、結局その後はリョウメンスクナの封印が解かれて上へ下への大騒動でしたから。彼らは騒いでいる方が楽しいんですよ。」

「そうか…。」

歓談の最中に扉を叩く音が響く。

コンコン！

「今は会談中だ。後にしろ。」

「緊急事態です！」

「なにつ…。すまない詠春、仕事が入った様だ。」

「それじゃあ僕はこれでお暇するよ。麻帆良には一報入れておくよ。」

「助かる。…入れ。」

「ハッ！会談の最中失礼致します！西の外れの方の村が爵位級悪魔の襲撃を受けております！」

「爵位級だと！避難は出来ているか？！」

「不明であります！」

「仕方が無い…近隣の町や村に被害が無いか確認を飛ばせ、私は現場に出る！」

「ハッ！」

「（ヴェラシオ！西の外れの村が爵位級の襲撃を受けた。緊急で俺が出る。こちらの指揮は任せた。）」

「（爵位級？！解った！救援を大至急送る！）」

火に包まれた村。

夥しい量の血が大地を染め上げている。

その中心で人間の姿を取った悪魔が哄笑する。

「クカカカカ……この度の召喚は実に気持ちが良いわ！それにしてもこの装備…召喚主には感謝せねばならぬな。クカカカカ。」

カタッ

「クカカカカまだ生き残りがおるとは実に喜ばしい……。」

「た、助けて……。」

「んー？聞こえんなあ？」

「辞めて殺さないで助けてッ……。」

「クカカカ実に心地良き悲鳴！その悲鳴こそが我が糧！さあもっと絶望しろ！」

悪魔は腕を振り上げ少女へと拳を落とす。

ガギイイイン

「なんだ貴様？」

「お前の敵だ。」

「く、クカカカカカ！」

「何がおかしい？」

「普段の我ならば上位の魔法使いには苦戦するのだが…今日の我は最強。驚き見晒せ！！武装錬金！！！！」

「なつつ？！」

悪魔が持つのは血の様に赤い核鉄。
それが展開して金属の拳へと変化する。

「ピーキーガリバー……か。ヘルメスドライブ解除、ロード…シルバースキン。」

「ほう…コレを知っているか。」

「貴様の召喚主は誰だ？」

「クカカカ言うと思うか？」

「ならばここで消滅するがいい。」

「フンッ」

ガンッ

「……………何っ？！何故吹き飛ばぬ？何故碎け散らぬ？！」

ピーキーガリバーを片手で受け止める。
肥大していくソレを押し返す。

パキン

最後の一撃、戦意を失った武装錬金は核鉄へと戻り…それを俺は悪魔諸共に砕いた。

「アアア我が…武器が……。」

「偽物、贋作、紛い物。言い方は色々あるが本物ではない。本物はコレだ。」

「ソーン…ナ…コト……。」

ザアと塵になって消滅していく悪魔。

それを確認して後ろの少女に振り返る。

「大丈夫かい？」

「……………して？」

「ん？」

「どづして…どづしてなの？」

「何が……。」

「英雄なんですよ？…どづして父さんや母さんや皆が殺される前に来てくれないの？…！」

少女の叫び。

「すまない…報告が来た時にはもう…」

「どっ…して…どっ…うあああああああ。」

それはどうしようもなく手遅れで…。

英雄、正義の味方…所詮どちらも事件が起こってからしか動けない。それがどうしても悔しくて、狂った様に泣き喚く少女を抱きしめる以外に俺が出来る事は無かった。

それ自体が罠だと気が付かぬままに。

コンコン

「誰です？」

「ハッ！緊急の案件でヴェラシオ様がお呼びです！！」

「解りました。テオドラ様、少し外します！衛士、誰かテオドラ様のお傍に！」

「なにか今日は騒がしいのうアスナ。」

「そうね…それに何だか胸騒ぎがするわ。」

カタッ

「誰じゃ?」

「あっ…申し訳ありません。」

「なんじゃ伝令兵では無いか早く…。」

「テオ!下がって!!」

「どついう意味じゃアスナ?」

「城内で働いてる兵士の顔は皆覚えてる。こんな人、居なかった!」

「なんじゃと?!」

「チッ…ガキはこういう所が鋭くて困る。」

「くっ…誰か!誰かおらぬか?!」

「駄目、多分切られてる。」

「流石は姫御子…適切な判断力ですね。」

「お主完全なる世界の者か!」

「御明察の通り。我が名は完全なる世界のヴィカラーラ……武装錬金!!!」

血の様に紅い核鉄。それが展開され爪の様な装備に変化する。

「宗一郎兄と同じ?!」

「アスナに手を出させんぞ!!!」

アスナの前で両手を広げ精一杯庇おうとするテオドラ。

「父上!何か御用ですか?!」

「ルーシー?何故ここにいる?」

「は?呼んだのは父上で……しまった!」

「やられたッ襲撃自体がブラフか!!!早く戻れルーシー!!!」

t o b e c o n t i n u e d

30話：失態（後書き）

時間切れorz

二日掛けてこの短さ！！吊りたくなる！！

さあ作者自身恐ろしい敵側への核鉄導入。

賛否両論確実なのは解っている！！！！

いや元々どう転んでも麻帆良編の悪魔が持つ装備で出す予定でした
が…。

英雄ルートはここから出ます。

原作武装錬金では黒い核鉄は元々紅い予定だったそう
でそこから偽物の核鉄としての紅い核鉄を出しました。

深夜には次話を上げれると思います。思いたいです。

3 1 話・理（前書き）

5
・
1
9
1
7
:
4
0
改訂

31話：理

「テオドラ様ご無事ですか?!」

扉を蹴破るようにして突入。

目に飛び込んでくるのは壁に打ちつけられ気絶したテオドラ。

そしてアスナの顔面を掴んでいる男。

「貴様ツ?!」

「ふん…意外と遅かったな。」

「その手を離せ!!!」

ドサツ…。掴みあげていたアスナを無造作に投げ捨てる。

「貴様…!!」

「これはお前たちへの脅迫だ。アレに伝える、我々完全なる世界は旧世界へ逃亡する。そしてお前の大切な御同類を頂く…と。私の役目はこれで終いだ。」

「ここから逃げれるとでも?!」

「元より逃げるつもりはない…こつするまでだッ。」

首に鉤爪を掛けて一気に掻き切る。

「ルーシーどうなっ……。」

血が部屋を染め上げ、気絶したテオドラやアスナまで血を浴びている…。

その中でひっそりと紅い核鉄は消滅した。

Side フェイト

白い髪ของフェイトとフードを被った女が紅茶を飲みつつ悠然と会話する。

「造物主の掟、「コード・オブ・ザ・ライフメーカー」その創造をもつてしても再現に至らない…か。」

フェイトは紅い核鉄を掌で回す。

「やはり魔法で作られた物では無いと…。」

「そもそも旧世界やこの箱庭の物ですらないと言う事だよ。彼は、この世界の人間では無い。驚くべき事だが、コレがその確かな証拠だ。」

溜息を一つ付き。

パキンッ

紅い核鉄を砕く。

「実用性に乏しい、脆い、彼のように変化させる事が出来ない。不完全な紛い物…彼に非常に興味が湧くよ……。」

「殺して奪う…というのは？」

「一番目が失敗した。僕はソレを繰り返さない……彼がコレを量産して騎士団に持たせる事も期待したのだけど…。旧世界の方へどうにかして縛りつけなければならぬ。」

「エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル確保というのは？」

「ヴィカララには完全なる世界の残党が旧世界に逃れた。エヴァンジェリンが襲撃を受けた。この二つを伝えさせた。君は……暫くはテオドラ皇女に手を出さない事。彼を出来るだけ旧世界にやるんだ。」

「姫御子は…？」

「次の始動までは時間がある。好きにさせればいい。」

「元老院が五月蠅いのでは？」

「黙らせるか殺して成り変わる。一応君に”も”旧世界に渡って貰うよっ。」

「機会があれば…ですね？」

「はあ……君が好機だと思った時にやればいい。以上だ。」

S i d e e n d

「容態はどうなっている？」

あの村から少女だけを助け、城まで戻ると正に天地がひっくり返った様な騒ぎになっていた…。

部屋は血で汚れ兵士たちは右往左往。ようやく見つけたルーシーは茫然自失。

医務に辿り着いたのが先程。

「テオドラ様は脳震盪とかすり傷程度ですがアスナ様は……。」

「なんだ？」

最悪の可能性が脳裏を過ぎる。

「原因は不明ですが記憶喪失である可能性が……。」

「どこまでの？」

「詳しくは検査次第ですが……。」

俺の事は覚えていない……か。

…大丈夫。記憶が消えても…何もかも忘れるわけじゃない。

「面会は？」

「可能です。」

「アスナ…俺だ。解るか？」

「そついちろうに？」

「そつだ宗一郎だぞ？解ってるじゃないか…驚かすなよ…。」

張り詰めていた緊張が一気に弛む。ほうと一安心。

あの藪医者め…何が記憶喪失だ。こうしてすっかりしてるじゃないか…。

「その変な恰好は何？」

「おいおい冗談でも結構傷つくぞ…。」

「ここはどこ？」

「医務室だよ。襲撃を受けてテオもアスナも怪我したんだよ。」

「襲撃？」

断片的な記憶喪失なのか？

「ああ、どうしようもない罫に嵌められて…ね。アスナが無事でよかったですよ。」

「それでも無いかもしれんぞ宗一郎…。」

壁伝いに歩いてきたのか頭を押さえながらテオが現れる。

「テオ！まだ安静にしとかないと…。」

「妾とアスナを襲った奴は宗一郎と同じ武器を持っておった…。」

「こちらも…か。コレをこの世界で造れるはずが無いのだが…。」

「この世界？ではあの武器は旧世界の物なのか？」

「いや…ああ…聞き流してくれ。」

「何を隠しておる宗一郎、聞き流せるわけが無いじゃろう？アレは危険じゃ…宗一郎以外が持つておるのは危険なのじゃ！」

「俺も聞きてえな。そこんところをよお。」

「私も聞きたいですね。今までは貴方の持つ固有の武具で通せました…でもこの状況に至っては、その様な言い訳は通じません。」

そろそろとルーシーやヴェラシオまでが現れる。

進退窮まったか…。

「解った…場所を移そう。俺の私室でいいな？」

「誰にも聞かれない。」

「では結界を張りましょう。」

「必要無い。武装錬金！ロード・アンダーグラウンドサーチライト。」

「なあここ三階だぞ？どうして地下が出来る？！」

「そういうものだとな納得しろ。」

「すげいのじゃ…。」

「さて…どこから話そうか…。」

「あの武装に関する全てを。」

「俺は全部話して欲しい所だが、そうも言ってもらえんからな。」

「うむ。今日は見逃してやるのじゃ。」

「はあ…これは武装錬金、核鉄という。」

「錬金術…遠く昔に廃れたものですね。」

「錬金術の粹を集めて精製された超常の合金、使用者の精神の一番深い所、本能によって作動する。生存本能に働きかけ治癒力を高めたり、闘争本能を形に成せば、唯一無二の武器：武装錬金を創造する。」

「良く解りませんが：それでは矛盾しませんか？貴方は唯一無二どころか変幻自在の能力をもっているはずですよ。」

「そういう特性をたまたま持っているからだ：。武装錬金には形状、特性、特徴がある。」

「例えばこの場所がシエルターという形状、特性はシエルターを創り出す。そんな感じかの？」

「正解だテオ。特徴は入口を閉じた状態での発見が不可能である事、広さと形状は変幻自在。」

「はははっ何だソレは：。これを敵が使ってたらどうしようもねえじやねえか：。。」

「いや：。そこまで広くは出来ないはずだ。」

「いや、だつててめえが今そう言っただろっ？」

「あの紅い核鉄は模造品だ。本来の物より出力が低い。西の外れの村だつて本来の武装錬金なら西側は壊滅しててもおかしくはない。」

「あのヴィカラーラという者の武装錬金にも心当たりがあるのかの？」

「無いんだ…。だから奴が何をしたかがわからない。」

「そうか……。」

「全く同じものは出来ない…そういう理解で問題無いですか？」

「本来は模造品も出来る筈が無いのだが……。」

「宗一郎の言っていた世界とはなんじゃ？それが関係しておるのでは無いのか？」

「それは……。」

「妾にも言えんかのう？」

やはり…話さなくてはならないか。

「俺は…俺は別の世界から来た。別の世界で死んで、こちらの世界に渡って来たんだ。」

「旧世界というわけじゃなさそうだな…。」

「別世界……。」

「俺は死んで、真祖の身体と核鉄を与えられてこの世界に放たれた。世界を守れと言われてな？まあ500年以上過ごすうちに世界を守るなんて事は忘れかけていたが。」

「どついう世界だったんじゃ？宗一郎の生きてきた世界は…。」

「今の旧世界とほとんど同じかな…。魔法が無いだけの世界だよ…。悪鬼悪霊の類は山程いたけどな。」

「昔言っていた遠い所とはそこなのじゃな…。」

「ああ…確かに愛した人はいた。だが戻ろうとは思わない…俺はこの世界に生きている。テオドラを愛している。今はそれだけだよ…。」

「宗一郎…。」

「おおう背中が痒い。核鉄とは関係なさそうだ。」

「今いい所なんですから黙ってて下さい。」

「本当に行ってしまうのか宗一郎？」

「俺の帰る場所はココだよ。必ず帰ってくるさ…それに結婚式だつてまだ挙げて無いだろう？」

「う…うむ。覚えてくれたのかの？」

「当然、忘れるわけが無い。」

「テオドラ様は俺達が命に代えてでも守る。安心して行ってこいよ。」

てめえはもうしょぼくれるなよ?」

「甚だ不安だが、任せよう。……一度と無い、そう言いたいものだ。」

「大丈夫です。父はともかく私の近衛騎士団と貴方の白銀騎士団は帝国民とテオドラ様を守り抜きます。」

「おいおい……。」

「それからもし……。」

「紅い核鉄が出たら容赦無く呼び出しますよ。アレは別次元ですから……。」

「余程の物でなければ一応は戦える筈だが……遠慮なく呼び出してくれ。」

「時々帰ってくるのじゃぞ?」

「ああ出来るだけ……な?」

「行ってきます。」

「ああ元気でなアスナの嬢ちゃん。」

「それでは皆、行ってくるよ。」

旧世界へ転移の日。

俺達の見送りはテオ、ルーシーと近衛騎士団、ヴェラシオと白銀騎士団のみ。

俺の帰還までは騎士団の誰かやヴェラシオが俺のフリをする。

アスナの記憶はショックか何かで穴があるようだった。

記憶喪失と言ってもこの程度なら特に問題は無い。

あの日、事も無げにあしらわれた事を思い出して特訓を言い出すほどだ…。

そうそう日本に赴くに際して柚木の名前を明日菜に与えた。

黄昏の姫御子アスナはただの柚木明日菜へ。

旧世界での表向きは戦争孤児を俺とテオドラが引き取った形で通す。

エヴァ…待っていてくれ。すぐに迎えに行くよ。

31話：理（後書き）

やはり敵側の核鉄所有は賛否両論どころか反対意見がほとんどでした。

出来そこないの核鉄と宗一郎を対比させることにより宗一郎の異質さや、世界の外側の様な演出をする為でした。

敵の強化に関する苦言もあつた様に思いますが、爵位級悪魔などで言えば上の階級の悪魔が居ても何の違和感も無い筈だとも思います。

* 紅い核鉄の設定*

造物主の掟の創造で創り出した核鉄の紛い物。

現時点では魔法世界で相当な労力を使つて作り出せるかどうか。

出力が大き過ぎると崩壊する、本物の核鉄の力を受ければ容易く壊れてしまう。

つまり紅い核鉄単体では村や大き目の町を辛うじて滅ぼせる程度。

当然唯一無二の能力を出す機能しか無い。

魔法世界で作られた人間型と召喚された上位悪魔しか使用できない。

32話・金の幼女、銀の男（前書き）

「幼女ではな——い——!!」

お待たせしました。エヴァ登場です。

32話：金の幼女、銀の男

S i d e エヴァ

私の賞金首が解除されて以来、よっぱどの正義馬鹿では無い限り襲われる事は無くなった。

おかげで宗一郎を追いかける事が出来るわけだが……。

やはり魔法世界へ入るには抵抗がある。

ゲート内は丸腰。そんな所に余程な正義馬鹿が居ないとも言い切れない。

そもそも吸血鬼への賞金首取り消しという事自体が本来は起こり得ない。

ならば罫ではないか？

そう思う私がいるのだ。

「ケケケ本当ハ、旦那ガ御主人ノ事ヲ忘レテンジャーカト不安ナ
ンダロウガ。」

「うるさいー！」

しかもだ、しかもだぞ？

そ、そ、宗一郎が婚約したなどと言う恐ろしいデマまで回っているのだ。

ヘラス第三皇女と言えばただのガキではないか……。

しかし私も姿はガキなのだ…立場はイーブンであるはずだ。

サアと血の気が引いた。

…ま、待てよ、それでは…

「旦那ガ、ロリコンカモシレナイーッテカ？」

「チャチャゼロ…今度心を読んだらゴミ箱に叩き込むぞ？」

だが、

もし、もしもだ。

宗一郎がロリコンであるならば私の圧勝ではないか？

第三皇女は今は少女とはいえ所詮長命なだけ、成長はするのだ。

ならば永遠の少女で真祖である私が負ける筈が無いではないか！

考えていて悲しいが…。

「ふ、ふははははは我が軍は圧倒的ではないか！！！」

「涙フケヨ。」

涙が目の幅に滝のごとく流れていようが私が不安になる必要は無いのだ！！

……ハッ！

ま、ま、ま、待て。それは無いはずだ。

宗一郎が第三皇女を吸血鬼や真祖にするはずが無い。無いはずだ！

！無いよな？！無いと言ってくれ！！！！

「旦那…頼ムカラ早く御主人ニ会ッテクレ…御主人ガドンドン駄目ニナッチマウ。」

「よし、日本だ。日本に行くぞ！あそこのゲートがヘラス帝国から近いはずだ。もう一刻の猶予も無い。それにもし宗一郎が旧世界に来るとするならばまずはあの国へ行く筈だ！何やら世界で一番平和ボケした温い国と言っていた！！」

「旦那ガイルナラ、モウ何処デモイイゼ…。」

Side end

同時刻、日本・京都

「やあ良く来てくれました。」

「悪いな。奥さん今妊娠中なんだろう？」

「いえいえ大丈夫ですよ安定期ですから。それで、あの子はもしかして…。」

「紹介が遅れた柚木明日菜。義理の娘に当たる。」

「そう…ですか。」

「ああ。”普通”の少女だよ…。」

「そう言えば麻帆良の方へはちゃんと連絡しておきましたよ。この

春からタカミチ君と一緒に通えます。」

「ガトウは来なかったのか？」

「ええ、捜査の方を継続する為にメガ口に残ったそうです。」

「わざわざ連合で捜査するのか……。」

「クルト君の補佐も兼ねる為らしいですよ。」

「そういえば……紅き翼にはクルトが俺の右腕になった事を伝えて無かったな……。」

「伝えておくべきか？クルトからは話さないだろうし……。」

「しかしクルトは紅き翼のやり方では駄目だと言いきった……ガトウからの協力も断るだろう。」

「それに伝えてどうする？」

「手伝ってやってくれというか？それはクルトの意志に反する。」

「手を退けとでも言うか？それでガトウが退くか？」

「……そうか。余り干渉し過ぎるとまとめて消されるぞ？」

「その辺ガトウは良く知ってると思うよ。」

「さて、麻帆良まで僕が送ろう。っとその前に、洋服店に行こうか……。」

「……どっついう意味だ？」

「いいかい？日本じゃそのままの服で歩き回ると確実に職務質問を受ける。姫子……明日菜ちゃんも普通の子には見えない。服装がま

んまお姫様じゃないか。」

「しかし途中職務質問は受けなかったぞ？」

「（不審過ぎて声も掛けられなかったのか?!）…ああ、まあ着替えた方がいい。その恰好は正直子供から見れば不審者云々を超越している。素性もバレるよ？」

「は？素顔を出していた方がバレるだろう？」

「素顔の方はこっちじゃあんまり広がって無くてね…流れてるのは銀騎士とか不死王と言った通り名ぐらいだよ？魔法世界から来た人なら別だけどね。」

「そうか…。まあ学園じゃどっちでもバレないだろう？」

「何を言ってるんだい？」

「一般の学校なのだろう？」

「麻帆良学園には魔法先生という物や魔法生徒が居てね、彼らが君の事を知っている筈だよ？」

「待て待て待て、魔法学校なのか?!」

「一般の学園だよ？」

”一般の学校 魔法先生・生徒”が常識の見解だと思っただが?!

「待て!!!いつから日本はそんな変な国になった!?!」

「んー。とりあえず見て貰うのが一番かな。女子中学校だから安全だよ。結構無茶は効くしね。」

断るのもいいのだが、旧世界で、戸籍無し、子供二人はその…色々
と拙いかもしれない。

エヴァを探しに行くには明日菜を置いて行く必要があるし…。

エヴァの事だからなあ…。

賞金解除も知らずに戦場周辺にいる可能性がある。

あとはもう人外魔境みたいな所とか…。

「わかった…頼むよ詠春。」

家の広さで解ったが…いやぁ金持ちの所に婿に入ったのだなと思う。

同じ様な車をゾロゾロと並べてまあ…。

その中でも一際大きい運転手付きの車に乗って麻帆良学園に向かう事になった。

「しかし…車とはまだるっこしいな…。」

「そうは言っても巡洋艦で飛ぶわけには行かないだろう？」

「宗兄、宗兄。」

「なんだい明日菜？」

「新幹線っていうのがあるはずじゃないの？」

「ああ。」

「しかしまあこれはこれでいいな…新幹線ではこいつをヤレんしな。」

「そうですねえ。流石に新幹線で呑むわけには行きませんかから。」

昔懐かしい日本酒をやりながら行くのも中々乙なものだ。遅々として進まない車でも気を紛らわせる事は出来る。

「すまんな明日菜。久しぶりで…そのつい忘れていた。」

「いつつもヴェラシオ達と飲んでるくせに…。」

「まあまあ明日菜君。彼も付き合いというモノがあるんですよ。」

そうそう付き合いなんだよ。

騎士団を創れとは言われて作ったもの…。

志願者が多過ぎて選考に困るわ、入ったら入ったで畏まり過ぎてたり、ただのミーハーだったりと大変で…。

最初はヴェラシオと愚痴を垂れ流し合いながら城の中で呑んでいたものだが…。

体裁がどうにか整って来れば今度は懇親会だのと言いだして。

城下のバーやら小料理屋を貸し切って呑んだりと…。

酔って帰るとテオが怒るもんだから俺だけ最上階の尖塔に立って酔いを覚ましたものだ。

そう考えると自分から好きなだけ飲むというのは久しいかもしれない。

そうやって茶飲み話しをしつつ酒を酌み交わしていた時の事だった。

「魔力ですね。」

「ああ魔力だな。」

しかも覚えのある。

「あれ、飛んでますよね。」

「飛んでるな。ちょっと確認する。」

視認出来る真祖の眼が悲しい。

太陽で透ける髪の毛…金髪だな。

黒いヒラヒラの服…ゴスロリだな。

片手に見覚えのある人形…チャチャゼロだな。

うん。エヴァだ。悲しいぐらいエヴァだ。いや、魔力の時点で解つてたけど。

「詠春。知り合いだ。魔力出して呼ぶから山道か何か人目の付かない場所へ。」

「不用心なお友達ですね。」

プルプル震えるエヴァ。やはり怒っているのだろうか？ちょっとした冗談だったのだが…。

「そついちろおおおおおおお！！！！」

がばあと抱きつかれてしまった…。

「ちよっ？！エヴァ？」

「心配したんだぞ？私は心配したんだぞ？解ってるのか？！」

「…すまない。心配を掛けた…俺は元気だぞ？」

「それを、それを…暴れ倒した上に英雄だと？！馬鹿者！！大馬鹿者！私はさびしかったんだぞ？！」

エヴァの非難からは俺をずっと心配していただろう事が伺える。

「そつだ！」

バツと俺を見上げてエヴァがクワツと眼を見開き問い詰める。

「帝国の第三皇女と婚約なぞしてないだろうな？！」

…祝ってくれる雰囲気じゃ無いな……拙いな、非常に拙いな。

「どうなんだ？！あれはデマだろう？！」

「いや、その…まあ…。」

「ええい答えろ！しつかりはつきり答えんか！！！」

「した。」

ぽひゅん

そんな音がしてエヴァの電池が切れた。

Side エヴァ

「ふおおおお…宗一郎の気配がする！魔力を感じるぞ！！！！！」

「イイカラ落ちツケ御主人。休ミナシデ飛ビスギダゼ？」

「五月蠅いぞチャチャゼロ！！もうすぐだ！もうすぐなのだ！！！」

感じる魔力が大きくなっているぞ！！！！…大きく？近くでは無く？

何かの気配を感じて急停止すると鼻先を掠める様に魔法の射手が飛んでいく。

く、くくく正義馬鹿だな？愚かな奴だ宗一郎の元へ行くのを邪魔するとは…。

いいだろう全力でその喧嘩買ってやるぞ？

ギリツと睨みつけビビらせてやるづ。

さてどんな馬鹿……………なん……………だ……………と？！

そこにはずっと会いたかった銀一色の……ぷちっ
駄目だ…何故そこに幼女がいるのだ宗一郎…ま、まさか娘か？娘な
のか？

「アー…逃げ口旦那。」

駄目だ感情の制御が効かないぞ？

ゴリゴリと湧きあがる怒りと戸惑いが私に魔力を纏わせる…。

それを察知してか宗一郎が逃げだす。

逃げだす？私から？ククク…どうやら宗一郎は私の事などどうでも
よかったと思える。

「ロリ…コンめ危ないだろうがあああああああああああああああ
あああああああああ！！！」

全力を持って宗一郎の腹に魔力を込めた蹴りを放つ。

ズンッ！！

「くっ……。」

どうだ？痛みを受けて思い出したか？それでも思い出さないのなら
ば塵にして、その塵を毎日愛でてやろう…。

「久々に会ったと思ったたら魔法の射手とは随分じゃないか宗一郎。
普通はしないよなあ？ん？」

精一杯悲しみをこらえて宗一郎を睨みつける。

「や、やあ久しぶりエヴァ。元気だったか？」

……駄目だ涙が抑えられん。覚えていたのか……。
私はずっと、ずっとその声を聞きたかったのだ！

「そついちろおおおおおおお！！！！」

余りにも感情が抑えきれず、気が付いた時には宗一郎に抱きついてしまっていた。

「ちよっ？！エヴァ？」

それからは感情のままに言葉がこぼれる。

「心配したんだぞ？私は心配したんだぞ？解ってるのか？！」

「……すまない。心配を掛けた……俺は元気だぞ？」

「それを、それを……暴れ倒した上に英雄だと？！馬鹿者！！大馬鹿者！私はさびしかったんだぞ？！」

恥も外聞も無い。ただまた宗一郎に会えた事が嬉しいの……待て、さっきの娘の事や第三皇女の事を聞かねばならん！！！！

「そつだ！」

バツと見上げて問い詰める。涙を見られても構うものかっ！！！！

「帝国の第三皇女と婚約なぞしてないだろうな?!」

宗一郎の瞳が彷徨い唇が震えている。いやな予感はあるが、直接真実を聞かねばならぬ!

「どうなんだ?!あれはデマだろうか?」

「いや、その…まあ…。」

「ええい答えろ!しつかりはつきり答えんか!!!」

「した。」

その言葉は今まで受けたどの斬撃よりも鋭く、どの弾丸よりも深く私を打ちのめした。

ぼひゅん

疲れとショックで気絶するほど…。

Side end

「むう。」

エヴァが眼を見開いたまま意識を失くしてしまった。

「久しぶりだなチャチャゼロ。」

「オウ、久シブリダゼ旦那。」

「これは俺のせいかな？」

「100パーセントナ。」

「すまん。」

「マア、本格的二駄目ニナル前デ助カッタゼ。」

「とりあえず車に戻ろうか…。」

「ソウイヤ、アレハ娘カ？」

「ああ、義理のな。」

「御主人二八、ドウ聞カレテモ”義理ノ娘”ツテ義理ノ所ヲ強調シ
口ヨ。」

「理由はわからんが善処しよう。」

車までエヴァをお姫様抱つこで運ぶと…。

「ゆ、誘拐はいけませんよ？」

「詠春、残念ながら君はアルビレオに近くなってきた。早く矯正しないと取り返しがつかなくなるぞ。」

「なっ…。」

詠春を言葉の暴力で座席に沈める。

「宗兄…：…浮気ダメ。」

明日菜の先制攻撃。

「明日菜？浮気じゃないぞ…。」

「ルーシーが言った。男は例外なく浮気するから芽をつぶす事が大事だつて。」

ヴェラシオオオオオオ！！！！貴様アアアアアアアアア！！！！

「エヴァは明日菜のお姉さんの感じであつてだな…。決してそのような関係では無い。」

「小さいけど？宗兄の好みだよ？」

思わず膝を付きそうになるが耐える。良かった一回目なら耐えられる！！！！

「明日菜、何を言っている。エヴァは俺と同じ真祖だから年齢は問題では無い。小さい＝好みじゃない。いいな？解るな？」

「んー解った。」

小声で監視を継続って言ったのは聞き間違いだよな明日菜…？

明日菜の言葉は時々容易くシルバースキンを貫通するから困る。

エヴァを積み込んで麻帆良へ向かって貰うが、この騒動ですっかり忘れていた事が麻帆良で一騒ぎを招く事になるとはこの時、誰も予測していなかった。

32話：金の幼女、銀の男（後書き）

次回

32話：麻帆良学園都市

やっとシリウスから脱出。

暫くはタカミチと明日菜を強化する生活！

33話：麻帆良学園都市

「到着いたしました詠春様。」

「さ、みんな着いたよ。これが麻帆良学園だ。」

車を出るとそこは自然が溢れ、洋風建築立ち並ぶ学園都市が現れた！

「かなり久しぶりになるが……やはり馬鹿デカイな。」

まだ気絶しているエヴァを横抱きにして明日菜と手を繋いで詠春の先導で歩く。

詠春は未だにアルビレオに似てきたと言ったせいで時々ブツブツと何か呟いている……。

言わなきゃ良かったな……。

十数分歩いただろうか……人通りが多くなるにつれて何故かコチラをチラチラと見てくる頻度が増えた。

「そろそろ女子校区画の筈です……ああ看板がありましたね。もうすぐですよ。」

そろそろ居た堪れなくなってきた。女子校区画という事もあって女の子が多いのは解る……。

でもそれが何故全員コチラを見ているのかが解らない。

いやいや……よく考えれば詠春と俺は男だ。やはり抵抗があるのだから。

純粹に育っている証だ。うん。

わけのわからん魔法生徒や魔法先生が居るにしても女子校ならば安

心だな。

明日菜もエヴァも慎ましやかになるだろう。

願わくばテオも慎ましやかになって欲しいが……テオは公衆の面前ではちゃんと演技が出来るから問題無い。

……む？何故詠春は”タカミチと一緒に通えますよ”と言った？

アレは男だろう？ちゃんと付いてるはずだぞ？

まあ……明日菜やエヴァに手を出したら殺そう。うん。

「そこの不審者止まれー！！！」

何やら騒がしい……。学園都市内でもちゃんと警察がいるのか。素晴らしい実に安全だ！

不審者か……。まあ俺が出れば軽く一捻りだろうが……警察の仕事を奪ってやるのは可哀想だ。

頑張りたまえよ警察官。

「聞こえないのか！！！止まれー！」

「詠春。何やら騒がしいぞ？」

「……あ、ああ……きつと下着泥棒とかでしょう。女子校区画はそういう事件もあるみたいですよ？」

「そうか。大変だな。」

「ええい止まれと言ってるのが聞こえんかその……えー……不審な一団！！！」

そうか集団下着泥棒か……物騒だな。

ガッ

肩を何者かに掴まれる。

「なんだね？」

「やっと止まったか不審者め！！」

何を勘違いしている……日本の警察機関はそれなりに優秀だったはずだぞ？ 賄賂が駄目な警察はいい警察だからな！！

「名前と職業、それから目的。」

これはアレか？ 職務質問という物か？

目的……この二人を学校に通わせる為だ。しかし何処へ向かっているのか……？

「詠春。今何処へ向かっている？」

「義父の所ですよ……ハアそんなにアルに似て来ましたかねえ……。」

「さつきは悪かった。余り似て無いから安心しろ詠春。」

詠春が全く歩みを止めてくれないので警官を引きずるように歩いてしまっている。

「ああ、すまない。名前は……。」

ビクンと俺に電流が流れた……。旧世界じゃ名前が流れていないなら

しい。

しかも現在戸籍が無い……なら何と答えても良いのではないか？
法律的にも何の問題も無いんじゃないか？！

「ブラボーだ。」

「は？」

「ブラボーだ。職は……。」

職……。騎士団団長……これは魔法世界の事だ。隠匿しなくてはならない。

旧世界の仕事……吸血鬼？論外だな。では無職という事か。

「職は無職。フリーターとでも言うのだろう。」

「え、いや……。」

「今の目的はそこの詠春の義父に会いに行く事だな。」

よし、終わったな。

「……ちよつと交番まで来て貰えませんかね？」

……何を言っている？

「断る。それは出来ない。」

「そんな事うばあああ。」

吹っ飛んでいく警官。

「明日菜……。」

「武器を出そうとしたから。」

ガトウが使っていた無音拳だろう。

「う、ぐ……むぐう。」

立ちあがるうとする警官に二発目。容赦無いな……。まあ……無音拳だしなあ。バレようがないからいいか？駄目か？駄目だよな？！

「宗兄、詠春行っちゃうよ？」

「ああすまん。すぐに行こう。明日菜、安易に人に対して攻撃してはいけない。みんながみんな俺の様に丈夫じゃないんだ。」

「わかった……。ところでブラボーって何？」

「恰好いいだろう？」

「……良く解らないけど辞めた方がいいと思う。」

哀れな警官二号を出さない為に認識障害を張って歩くことにした。明日菜の目が非常に冷めていたのが、とても気になる。

ブラボー。恰好いいと思うんだがな……。

ナウなヤングにヤヤウケ……。

「宗兄……シルバースキン脱いだ方がいいと思う。せめて顔だけでも。」

「あ。」

麻帆良学園女子中等部の校舎内に入って学園長室へ入ると……。

俺は今、初めて、仙人を見た。

イメージ図の仙人がそのままソコにいる。

かなり増えてきたであろう白髪が完全制圧すればきつとそのものになる。

「彼が柚木宗一郎、隣の子は柚木明日菜ちゃん。小脇に抱えているのは……。」

「エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルだ。初めまして元始……近衛学園長。」

「うむ。ワシが学園長の近衛近右衛門じゃ……お会い出来て光栄ですぞ不死王柚木宗一郎殿。」

「こちらではただの柚木宗一郎でありたいものだが……。」

「ふおっふおっ……連絡を受けておったのは1人なんじゃが……。」

「すまない。ここへ来る最中に再会出来てね……本来は探しに行くつもりだったのだが……。入学は難しいのかね？」

「ふおつふおつふおつ大丈夫じゃよ。まだねじ込めるわい。とりあえず三人共戸籍を作ろうぞい？」

「何から何まで助かる。」

詠春に頼んで正解だったな。実に親切な老人だ。

「柚木宗一郎、柚木明日菜…む…母親は誰かのう日本では片親で養子というのは何かとのう。」

「テオドラ・バシレイア・ヘラス・デ・ヴェスペリスジミア。帝国第三皇女なのだが…。」

「ふおつ…それは…うむ。こちらで適当に作っ。」

「私だ！私の名前を書けばよい！！ふはは書類上はこの私が妻だ！勝ったぞ！！」

いきなりエヴァがモゾモゾと小脇から抜け出して騒ぎだす。

「すみません。適当に聞き流してください。エヴァンジェリンも娘で記入お願いします。」

「なっ…！無視するな！オイ！宗一郎！！」

「う、うむ…わかったぞい。」

「何も解って無い！！おい爺！！くそっ…宗一郎！！大体私は学校へ行くなんぞ聞いていない！！」

エヴァめ…いつから起きていた？
今、起きたにしては反応が良過ぎる…。

「それは後で話すからとりあえず今は静かにしなさい。」

取りあえず…抑え込もう。頭を掴んで抱き寄せて拘束。…これで騒げまい。

「むっ何を！はな……………さなくていい。」

これ以上騒ぐ様ならシルバースキンと俺の間で挟もうと思っていたので若干助かる。

「そういう事で頼みますね近衛学園長。」

「ちょっと待つて欲しい、柚木殿、こちらで職はあるのかのう？」

「いえ、ありませんね。」

「それでは色々と困るじゃろう。どうじゃ教師か、寮監か広域指導員をやってくれんかのう？」

「広域指導員…確か学園都市を回る風紀の先生の様なものでしたよね？」

「うむ、そうじゃ。」

教師か寮監か広域指導員……………どれも明日菜達から離れなくても良い仕事ばかりだな。

なんと親切な仙人だ。
狙われるとすれば当然寝込みという事になる。ならば寮監が一番だ
な。

「それでは寮監を引き受けましょう。」

「ふおつふおつふおつお願いしますよ柚木君。」

「それでは失礼します。」

「僕もこれで。」

「うむ。婿殿は西をよろしく頼むぞい?」

「ええ…解ってます。」

Side 学園長室

「……………どうかのう彼は?」

学園長の話しかける空間には誰も居ない……………いや隠れていた。

「まだ判断は付きませんわ。帝国の旧世界への進撃…その出城を築
く為の彼である可能性はあります。」

「ふむ……………彼に限ってそれは無いと思うんじやが……………」

「それを確かめるのが私の仕事ですわ学園長。このMM元老院から派遣された私、天船巴あまふね とせえのね？」

そう言つて天船は影を使つたで転移で消える。

「ふう……帝国の真祖で英雄に、ウエスペルタティアの姫、元史上最高賞金首。拳句の果てには本国からの作業員まで……もうワシの手には負えんわい……一般の生徒たちだけは何としてでも守らなくてはのう。」

近右衛門は深い深い溜息を吐いて天を仰ぎみた。

S i d e e n d

「どうだい？いい学校に、いい学園長だろつ？」

「ああ。実にいい老人だ……横に妙なのを侍らせて無ければな。」

「横に？どういう事だい？？」

「なんだ気が付いて無かつたのか……。エヴァも明日菜も気が付いていただろつ？」

「うむ。あの程度で隠れているつもりだとは……ザコだな。」

「領域作って影の中に潜んでた。わざわざ作ってる時点でバレるでしょ。」

「とまあそう言う事だ詠春。向こうはバレてないつもりだろうから無視したが……あれはその内、確実に手を出してくるな。」

「はあ……………全く君達は…ナギヤラカンだけがバグやチートってやつじゃないんだね。」

「お前が平均的すぎるんだ詠春。」

「その他の人に言うなよ？多分卒倒する。」

肩をガツクリと落とした詠春を見送り……………。

さて、ここからが本戦だ。

「エヴァ、君には学校へ通って貰う。」

「いらん。」

「通った事無いだろう？せっかくの機会なんだ通ってみないか？」

「知っておけばいい事は宗一郎に教わった。他はいらん。」

「友達も出来るぞ？」

「いらん。何故私がガキと一緒に居なければならん！」

「大人しく真面目に通うのなら……。」

「……なんだ？」

ククク…結局、君は素直なのだよ。

交換条件を出そうとした途端に耳がピコピコ動いているのだよエヴァ。

「成長したくはないか？」

「何…？」

「一年過ごすことに一歳成長させてあげよう。中学校から大学まで通う事が出来たら、あの年齢詐称薬の姿になれるぞ？」

持ってくる年齢は魔法球の中で年を取って確実に老けるであろうタカミチでいい。

さあどうだエヴァ、大きくなりたい。それが一番大きい望みであるはずだ。

「……………わかった。通う。約束だからな！」

「ああ勿論だとも。」

計画通りイイイイ……！！

S i d e エヴァ

「エヴァ、君には学校へ通って貰う。」

何を言い出すんだ宗一郎。最低限はお前が教えてくれたではないか…。

「いらん。」

さっきの抱っこは良かったなあ…。気絶なんぞすぐに復帰したが、あの膝枕は至福の時だった。

お姫様抱っこも良いが、横抱きも宗一郎の力強さが感じられて中々…。
学園長室では私をいきなり抱きしめるなんぞ…全く恥ずかしいではないか！抵抗はしなかったがな！

「通った事無いだろう？せつかくの機会なんだ通って見ないか？」

近くを通る女子学生は皆統一された服…あれが制服と言う奴だな。制服……普段とは違う恰好に宗一郎もグラツと来るか？

「知っておけばいい事は宗一郎に教わった。他はいらん。」

「友達も出来るぞ？」

友達？人間の？100年も生きられん様な連中と？無理だ。そもそも…

「いらん。何故私がガキと一緒に居なければならん！」

「大人しく真面目に通うのなら……。」

その間はなんだ！気になるではないか！！

「……なんだ？」

そして宗一郎は衝撃的な言葉を言う。

「成長したくはないか？」

「何……？」

待て……そんな事できるのか？昔、魔法世界への入国の時に小さくされたな……。

まさかアレの逆が出来ると？

「一年過ぎすごとに一歳成長させてあげよう。中学校から大学まで通う事が出来たら、あの年齢詐称薬の姿になれるぞ？」

実に魅力的な提言だ。

昔の私ならばすぐに頷いていた事だろう……。

だがな宗一郎。お前がロリコンである事は既に知っているのだ……。

唯一のアドバンテージ…………。待て、ここで素直さをアピールするべきか？

それで旧世界にいるうちに私のナイスバディで籠絡、既成事実の作成、ショットガンマリッジ、勝利？

来た！これで勝つる！

33話・麻帆良学園都市（後書き）

次回

日常と修行

34話・日常と修行（前書き）

75万アクセス突破、お気に入り登録580件突破致しました。
ありがとうございます。

凄まじいプレッシャーですが、その分励みになります。

34話：日常と修行

んー：麻帆良学園の制服は女子校だけあって可愛い。
決して邪な気持ちがあるわけではないが、それでも可愛い物は可愛い。

エヴァと明日菜を送り出して一息置くと寮監の仕事が始まる。
新居ともなった部屋は城よりは圧倒的に狭い。しかし己に眠る日本人の血にとつては居心地がよいのだろう……むしろ以前より落ちつきがあつて過ごしやすい。

寮監の仕事！と言つても余り肩肘を張るような仕事でも無い。

朝は早めに起きて朝ごはんとお弁当を作りエヴァを起こす。明日菜は食事の香りに釣られて出て来るから問題無いが、エヴァはちょっとやそつとのことじゃ起きない。

常に氷を一つ持ち、背中に投入する作業から始まる。

余りに起きない日は仕方無いので寝惚けたままのエヴァを着替えさせ食事を口に入れて明日菜に任せる。

二人を送り出し、次々と出て行く生徒たちを見送りつつ寮の周りを軽く掃除して休憩。

…。
…。
…。
やはり居住空間なのだ、綺麗に越した事は無い。

9時ぐらいになったら大浴場の清掃。ここも月に一度清掃業者が入るのだが、やはり水回り関係。

鏡や洗面器、椅子といった物や床を掃除する。

脱衣所にはたまにトンデモナイ忘れ物があったりするので全て一つ

の脱衣籠に入れて忘れ物という張り紙を貼っておく。

大浴場の清掃が終われば備蓄品の確認。

水漏れ、ガス漏れは大事になりかねないのでその類の応急修理セツトは欠かせない。

食料も確認して問題が無ければカロリーバーと飲み物を適当に摂取して昼食を済ませる。

問題があれば同様に摂取しつつ買い物へ向かう。

それからまったりと手紙の受け取りや宅配便を預かる作業に入る。それらは生徒が帰宅した際に渡す。

たまに危険物が届くがソレは秘密裏に処理する。

大概の生徒の名前やその他諸々を把握しつつ行動。

仕事の合間には自己鍛錬。

最近無音拳からある魔法を考えたのでソレの練習を積んでいる。

そうして過ごす日が暮れ始め、部活動に所属していない生徒達が戻ってくるので名簿を片手に確認しつつ手紙や宅配便を手渡す。

夕食を作りつつエヴァや明日菜の帰宅を待つ。

戻って来た生徒の多くが顔を出してくれるので名簿に書き込んでいく。

夕食の支度を終え、紅茶を淹れて飲んでいると生徒の何人かが茶菓子を持って侵入してくる。

そこで生徒から悩み相談を受けたり、雑談をしつつ部活動に所属している生徒達の帰還を待つ。

最初こそ男性と言う事で反応も悪かったが、明日菜やエヴァの父親

ということもあり直ぐに打ち解ける事が出来た。
今では宗さん、宗一郎さん、寮夫さんと色々な呼び方で呼ばれている。

相談は男子垂涎の恋愛相談から友達との関係、日常生活まで……
すまない男子諸君。君達の恋の幾らかは俺が叩き潰している。

諸君らの怠惰で浮気な私生活は寮監を通じてダダ漏れなのだ……。

侵入しようとする変態共には鋼鉄の寮夫と恐れられている。

だがな変態共よ…君達の侵入を阻むたびに寮生達からの評価が上がるのだ。

だから何度挑みかかってきても叩き潰そう。喜んで楽園を阻む壁となろう。

エヴァや明日菜が帰宅する頃には寮中から料理の良い匂いが漂い出すので生徒たちを部屋に返し、料理の盛り付けに入る。

エヴァと明日菜が帰宅すると共に食事を摂る。

二人を大浴場へと送り出す頃には大方の生徒が寮に戻っているので、夜22時には事前連絡が無い限りは扉をロックする。

大浴場の女生徒の利用は23時までなので23時半から入浴する。

連絡なしに何度も門限に遅れた生徒は土曜日や日曜日といった日に罰として大浴場の清掃をさせている。

24時半には完全ロックダウン。表向きは寮監である俺も寝るので誰も入れなくなる。

その時間になってタカミチが侵入…もとい修行に来るので、寮全体に男だけに働くように綿密に作り上げた結界を張り、寮監室

本当にVIP待遇なんだぞタカミチ。
最強などとは奢らないが、誰にも負けない自信はある。

「それじゃあ次は格闘戦だ。お前は全力で、俺は咸卦法と一般の格闘技だけでやってやるぞ。」

「…はいつ。お願いします!!」

あれだけ俺の下に付く事を嫌がったタカミチ。

それなのに俺とエヴァの下で修行しているのには訳がある。
話は数週間前にまで遡る。

「ようタカミチ。女子校は楽しいか？」

俺はたまたま買い忘れた品物を買に出た所、タカミチに遭遇した。
笑えない話だが笑える事にタカミチは今、麻帆良学園女子中等部に通っている。

エヴァから聞いた時には腹を抱えて笑い転げた。史上最高の喜劇だ。

「柚木さん…。」

「おいおい睨むなよ…女の子の中に入った一人。そんな哀れなで幸運な少年に年長者として気を使ってみたつもりなのだが？」

「お話があります。付き合って貰えますか？」

「普段なら嫌だ。という所だが…まあいいだろう。」

世界樹の下のベンチに腰掛けタカミチと話す。

「柚木さん。貴方はどうして、誰の為に力を振るうんですか？」

「俺が力を振るう理由か…護りたい全ての女の子を守る為かな。」

「ふざけないでください!!!」

「そう怒鳴るな…認識障害があるとは言え、ごく弱いものなんだ。まあ聞けよタカミチ。ある男の馬鹿な昔話だ…いや、これはまだ秘密だな。だが俺が力を振るう理由に嘘や冗談は無い。」

俺の言葉に何かあったのかタカミチは少し黙って、もう一度口を開く。

「どうしたら僕はあの人たちや、貴方に追い付きますか？」

「なあ…タカミチ。追いつくだけか？並ぶだけでいいのか？」

「え…？」

「越えたくは無いかと効いている？ガトウに追いつくだけで満足か？」

「それは……。」

男なら誰でも目指した背中では越えたい……否、越えて行くものだ。

「正直言つて俺の所に来るのは不可能だ。真祖になつてもな……。それでもガトウや詠春の居る所には辿り着ける可能性がある。今のお前じゃ……明日菜以下だな。」

「なっ！いくら咸卦法が出来ると言つても明日菜さんには勝てます！」

「く、ククク。男の子だなタカミチ……よし今日の夜、女子寮の寮監室へ来い。現実を教えてやる。」

結果はタカミチの惨敗。
手も足も出なかった。

タカミチが咸卦法で光った時には明日菜の完璧な咸卦法と無音拳が入る。

近距離まで詰めれば蛇。

距離を取つても瞬時に詰められ、無音拳は落とされる。

休む為か大きく離すも魔法の直撃。

全力で放つたのだらう豪殺居合い拳も容易く避けられ、タカミチは意識を刈り取られて倒れた。

「……僕は……。」

「よっ……現実見れたか？」

「はい。」

「どうする？鍛えてやってもいいし、ウジウジ思い悩むのも自由だ。」

「お願いします…僕を…鍛えて下さい。」

「なら涙を拭いて立ちあがれタカミチ。」

いや、内心ひやひやしてたんだぞ？

もしこれでタカミチが折れたらエヴァとの約束が果たせなくなってしまうのだから。

「貴様は魔法が使えん。ならば受ける方が必然多くなる。見て慣れるよ??？」

エヴァが乗ってくれたのは計算外とはいえ大成功だ。

エヴァのしごきも中々……魔法の射手程度は居合い拳やステップでかわすものだ。

そうすれば魔法使い最大の弱点、術後硬直に攻め込む事が出来る。魔法使いと言う物は大方が自身の魔法に相当な自信を持っている。必殺をかわせばソコにいるのは無防備な木偶人形に等しい。

よってタカミチの訓練はひたすらに魔法を避ける訓練と格闘技の訓練のみだ。

あとは出来る限り咸卦法を続けさせたり、豪殺居合い拳の同時発射をさせる。

刀を持たせてみたが……コイツ…絶望的だな。

クルトの様な才気は早々無いか。

「 柚木さん…… マギステル・マギって何なんでしょうかね……。」

「 連合、元老院の玩具だよ。」

「 ……それでも正義の味方です。」

「 正義？何の、誰の為の正義だタカミチ？」

「 救われない人の為の正義の味方に僕は成りたい。」

「 ……なら今すぐ魔法を辞めて医者か何かになる事だ。」

「 ？」

「 何故ですか？って顔だな。いいか？魔法でしか救えないものなんて無い。医者となって治療した方がもっと助ける事が出来る。」

「 でも……。」

「 魔法は隠匿しなければならぬ。そう決めたのはお前たちだ。隠匿されたものでは救えない。救って記憶を消すのか？お前達魔法使いは簡単に記憶を消す。どうもマギステルマギを目指す連中にとつては記憶が軽いらしくてな。」

「 肉体だけ助ける魔法使いなんぞ害悪でしかない。」

「 それに正義の味方として守ったソレが世界の敵ならばどうする気だタカミチ？」

「 エヴァ……。」

まさにナギが迷った所。そして奴はアリカだけの正義の味方を取った。

誰かが言いました。正義の反対は違う正義だ…と。

「……………」

「お前の近くにいる連中はお前と真逆の正義を選んだ。ナギ・スプリングフィールドは1人の女の味方として世界の敵になった。宗一郎はくやしいがテオドラの為なら世界を相手取って戦争を仕掛けるだろう。そして私は宗一郎の為に死ぬ事が出来る。それが私達の正義だ…私は誇りある悪だが。お前はどうかタカミチ？」

「僕は……僕はそれでも皆を救う”人”になりたい。」

皆を救う人か……。

「タカミチ、お前がその信念を持つ限り俺はお前の師匠になってやる。」

「ぐあつ。」

タカミチが二転、三転して気絶する。

おっと…回想に浸ってたせいで本気で打ちこんでしまったか…。

エヴァと明日菜は魔法撃ちあってるし…。

しかし…俺の為に死ねる、か。とんでもない枷を付けてくれたもんだよ。

仕方が無い……起きるまで練習に励むとしよう。

34話：日常と修行（後書き）

今回はセリフは少なく、メインメンバーが宗一郎の段々主夫化という一大事に誰も気が付いていない恐ろしさ。だって居ない時に主夫化が進むから……。

宗一郎の過去ですがまだ引き延ばしてみたり。

ちよつと書いてみたのですが…恐ろしい程麻帆良に合わない暗さの話です。

思わず消しました。

しかし今更変えるわけにはいかない…。どのタイミングで明かさべきか。

35話：闇は盡く

Side 天船

三人の男女が集う部屋。

「……………ふう全くこのわたくしが女子中学生とは……………」

「学校へ通ったとしてもあの男はおらんだ。無理を押しして通う必要は無いぞ天船？」

気遣う様に声を掛けるのは老人。

「そうね……………暫く休んであの男の監視に本腰を入れるべきかしら……………」
千明さん監視はどうなっているのかしら？」

千明と呼ばれた少女は音楽を聞いて読書をしたまま報告する。

「主夫をやっているわ毎日ね。」

「こちらを見て会話しなさい千明。」

そこで初めて巴を見る。

「これはただの仕事だわ……………なにを必死になっているの？」

「あのね……………」

「時間だわ。寮に戻る。」

そう言っつて千明は出て行っつてしまふ。

「落ちつけ天船。ワシらはその男の監視と引きつけが仕事だ。決して殺害が達成目標では無い。」

「無手で魔法使いを屠る貴方がそれを言いますか織戸？」

「ワシとて死ぬ時は死ぬ。たまたま今までの魔法使いが弱かっただけじゃ。アレは万全に万全を重ねて初めて同じ舞台に立てる敵じゃよ。」

フェイト様はわたくしに監視を命じました。ですがアレを殺せるのならそれも良しと…。
敵も味方でさえも関係無い。フェイト様の横に立つのはわたくしだけで十分ですわ。

S i d e e n d

S i d e 七里千明

「ただいま戻りました七里です。」

「はい。205号室七里さん帰寮と…お疲れ様。」

この寮監は天船にとって敵らしい。どうでもいいことだけど。

「寮夫さんも。では。」

「ああ。」

敵だと言っけれど天船と会話するよりも好感を持てる。余計な事を言わないし、余計なコミュニケーションを取ろうとしない。

フエイト達が望むのは完全なる世界。元老院が望むのは自分達の天下。どちらも私にとってはどうでもいい。

「こちら七里。聞こえますか？」

「聞こえている。報告したまえ。」

「フエイトは事の静観を指示しています。ですが派遣された天船は事を起こすつもりです。」

「では君は天船に協力したまえ。静観の必要は無い。そちらで成功の報告があれば連合は軍を起こす。」

「わかりました。」

ただの二重スパイ。

報告が終わればベットに身体を横たえ耳栓をして読書へ耽る。

S i d e e n d

「ただいま戻りました七里です。」

夕食の用意をしていると七里さんが帰宅する。

時間を確認するがいつもと同じ16時半ぴったりだ。

「はい。205号室七里さん帰寮と…お疲れ様。」

「寮夫さんも。では。」

「ああ。」

物静かな子で寮内では唯一の一人部屋、そして一度も手紙や宅配便の届かない子だ。

しかし特に問題を起こすような子では無く、七里君からもその周辺からも相談を受けた事が無い。

何か複雑な事情があるのかもしれないが、この部屋でお茶会を開く子達に聞くとお嬢様の天船という子と仲が良いらしい。

ならば寮監としては立ち入るべきではないし、必要最低限の寮監としての仕事を果たすだけだ。

寮監を長い間やっていると卒業や入学と言った時期を迎える。

卒業。そう言くと大方は進学や別れを想像するものだが麻帆良では意味合いが異なる。

一言で言つと民族大移動だ。

麻帆良周辺の引越し業者がトラックを並べる。

箱詰めにした私物や食器が丁寧かつ素早く積み込まれ高校の寮へ

と運ばれていく。
さながら引越し業者の品評会だがソレは事実でもある。
高評価の引越し業者には余程の事が無い限り来年の業績が約束されたものになるのだから。

入学の時期には新しい子達の事を覚えなくてはならない。

と、同時にエヴァを成長させなければならぬ。

「さあ宗一郎！一年経ったぞ成長させる！！」

「ロード：フロム・クレイドル・トゥ・グレイヴ。」

毎日3倍程過ごすタカミチから一歳取りエヴァに渡す。

「む、余り変わらんぞ?!」

「エヴァは10歳から11歳になっただけで何か変わると思っのか？」

「そうか…。」

「タカミチは3倍過ごしたせいで老けたが…。」

「ちょっと…酷いですよ?!少し身長が伸びただけじゃないですかっ

!…!」

「いやいや顔も老けたらう。」

「老けて無いですって!!」

「よし、じゃあ本当に老ける様に毎日5倍過ごそうか?」

「それはちよつと勘弁願いたいデスネー。」

しかし三倍掛けてる割にタカミチは成長しない。

いや世間一般の指標で考えると恐らく劇的な成長を遂げているんだろうが…。

はつきり言つて魔法を使えない事が大きな壁になっている。

魔法を教えられないならエヴァは魔法の見切りと武術を鍛えるしか出来ない。

エヴァの一番の利点でもある魔法利用とその応用が無駄になつてしまふ。

俺が教えた所で同じく武術と変則戦闘がメインになる。

一応核鉄を渡して使わせてみたのだが…：…よりよつてモーターギア。

居合い拳の基本姿勢でポケットに手を入れ、足場を固定しているタカミチにとつて邪魔でしかない。

常時で貸してやるわけにもいかない。

奪われでもしたら、それこそ冗談でもなんでもなく世界が滅ぶ。

ものによつちや世界中の尽くを更地に出来る。

タカミチとセットで戦う時ならばシルバースキンを着せてやれば済むが…。

いまいちごつ…エヴァ・明日菜・俺と比べれば見劣りがする。

「はあ…。」

思わず溜息が洩れてしまふ。

「らしくないですね。溜息なんて…。」

「お前のお陰でな。」

「…。」

Side 織戸静馬

素性は怪しいが金払いのいい組織に雇われて数年。
ワシが戦り合えるのは後数年もない。

組織が狙っておる男…：ワシが全盛期に戦り合いたかった。
今、目の前で戯れておる男とその弟子。

思わず戦り合いたくなる…。

齢69にしてこの気持ち…：雇われて正解だったわい。
ワシの最期の仕事となっても悔いは無いッ！

「…ッ!?」

男とその弟子と目が合う。
ぬかった…殺気を漏らすとは……。

弟子はあからさまに構えを取る。……懐に手を入れた構え…初めて見る。

男の方は大した警戒も見せずに笑顔で近寄ってくる。

「何か御用ですかね？」

「ああ…うむ。中々良い鍛え方をしておるなあと見ておったのだ。」

「ありがとうございます。貴方は？あまり見かけない方ですね。」

「今日はたまたまこちらの方へ散歩にな。普段は中武研の講師をやっている。」

カヴァーとして講師という立場は中々に良い。

学園都市内の何処へ行っても問題無い上に、若々しい芽を見出す事が出来る。

「ほうそうでしたか。道理でガツシリとしておられる。」

「そちらの少年は君の弟子かね？確か女子中等部唯一の男子生徒と聞く。」

「ええ…やはり有名ですよね。」

「うむ。生徒から良く聞いておるわ。」

「そういえば…貴方はなんでも相当お強いとか？人外だという生徒も居ますね。」

「ほほう嬉しい事を言ってくださいますなあ。」

向こうは恐らく気付いておるな……壮絶な腹の探り合いと言った所だな。

天船は甘い。

武だけの人間？政治にも長けておるわ……。

「どうですか？一戦、やりおつてみるのは？」

乗るか反るか…。

あくまでも手合わせ…どう転んでも害は無い。

まあ…天船は五月蠅いじやろうが。
クライアント

「面白そうですね。是非お願いします。」

そう言つて了承して……絶対防御の服を脱ぐか…。

「勝敗は…坊主、お前が付けろ！」

血が騒ぐ。もっと早く10年、20年昔に会いたかったぞ！

ワシも上着をベンチに脱ぎ捨て構えをとる。

向こうの構えは……面白い。

S i d e e n d

「 ツ!?!? 」

視線は感じていたが急に殺気が飛んでくる。

老人…だがあねは…拙いな。表の人間ではない。

タカミチはあからさまに構えを取るか……。

厄介な。

ここは学園の敷地内。願わくば穏便に済ませたいのだが……。

仕方ないか……笑顔で接近してみる。

「何か御用ですかね？」

「ああ…うむ。中々良い鍛え方をしておるなあと見ておったのだ。」

向こうも衝突は避けたいと見える。

「ありがとうございます。貴方は？あまり見かけない方ですね。」

「今日はたまたまこちらの方へ散歩にな。普段は中武研の講師をやっている。」

中武研……寮生の子が言っていたな。確か…織戸静馬、69歳にして古今東西の武術の使い手。

曰く…最強じーさん、曰く人外ストレス。

「ほうそうでしたか。道理でガツシリとしておられる。」

「そちらの少年は君の弟子かね？確か女子中等部唯一の男子生徒と聞く。」

「ええ…やはり有名ですよね。」

「うむ。生徒から良く聞いておるわ。」

「そういえば…貴方はなんでも相当お強いとか？人外だという生徒も居ますね。」

「ほほう嬉しい事を言ってくださいますなあ。」

完全に腹の探り合いか…向こうの規模が解らない以上話が長引くのは拙い。

「どうですか？一戦、やりおつてみるのは？」

乗るか反るか…。相手は武人といった風…汚い手事は”本人は”使わないだろう。ならば…。

「面白そうですね。是非お願いします。」

シルバースキン解除…。

賭けだが…外れてもこちらは真祖。さあどう動く織戸静馬？

「勝敗は…坊主、お前が付けろ！」

向こうも同じ考えか…。強行偵察。

構えは…蛇を取るわけにはいかない。あれは初見で最大の効力を発揮する。

八極拳の構えを取る。

ジャリッ…と砂を踏みしめる音、ゴウと風が流れる。

織戸は左手を奥に、右手を前に軽く出した構え。

要は最も心臓を護りやすい構え。

下手に放出系の業を使えばやられる。タカミチにとつちや天敵だな…。

一撃で仕留めない限り読まれて死ぬのはタカミチだ。

文字通り仕留める…だ。気絶では無く、一撃で命を絶つ。

ザッ

消えッ

ヴアッ

織戸の蹴りが顎先を擦る。

活歩の類か…。

脚を逸らして返そうとするが、死角からもう片方の脚が飛んでくる。

「カハッ…。」

おかしい…。瞬動や活歩と言っても、完全には消えないッ。

硬気功開始。

二、三発入るが全て弾く。予測していなければ只ではすまない筈なのだが…。

「…硬気功か…やりおる。」

「ハアアアアアア！！！」

斧刃脚

硬気功で固めた身体から放たれた斧刃脚は正に斧。

かわすか…やはり一般人の辿り着ける所では駄目だツ。

瞬動…二連ツ。織戸の後ろへ周り、振り返り様に鉄山靠を叩きこむ。

「ぐう…。」

織戸を弾き飛ばす。

あれだけのダメージを受けたはずなのに…まだ立つか化け物め。

「ストオーツプ！今ので柚木さんの勝ちです。ただの手合わせですよっ？！」

タカミチは何度も喰らったから解ったのだろう。この老人の異常性に…。

あの年なら幾ら鍛えていようと骨の二、三本は逝くはずなのだが…そもそもまともに立てる筈が無い。

「いい…勝負でしたね。」

「うむ。お主中々の武道家じゃな。そろそろ講師の時間故、またの日に。」

「ええ、楽しみにしています。」

案外あっさり引いてくれたか……。
向こうも何かしら言われたか……。

「大丈夫ですか?!」

「問題無い……と言いたいが暫く休む。」

くそっ……。硬気功の上から拳を通すかよ……。シルバースキン着とけば
良かったか。

Side 織戸静馬

「……硬気功か……。やりおる。」

だが甘いぞ……。その程度の物はワシも納めている。

「ハアアアアアア!!!」

強い息吹で力を溜めて斧刃脚。
当たらぬ!

瞬動か、ならば

そう軸を捻った瞬間。

くっ連続で使うかッ！

ズンッ

「ぐう……。」

弾き飛ばされる。

片膝を付くがまだ戦える。もっと血は滾る！

「（織戸！！！何を考えているのですか？！即刻引きなさい！）」

「（黙れ女、ワシが納得するまで辞めんぞ！）」

「ストオーツプ！今ので柚木さんの勝ちです。ただの手合わせでし
よう？！」

ワシが天船からの念話を無視して再び構えを取ると坊主が判定を下
した。

……しかたあるまい。

「いい…勝負でしたね。」

「（早く引きなさい織戸！！！！）」

「うむ。お主中々の武道家じゃな。そろそろ講師の時間故、またの
日。」

「ええ、楽しみにしています。」

次は命の取り合いだ。そうお互いが誓った。

ああ…本当にあと20歳若ければのう。

S i d e e n d

S i d e 天船

流石に頭が痛くなってきましたわ…。

会話一つまともにも出来ない七里、戦闘狂の織戸。

あの男に隙は無く、織戸がまともにも戦えるのは後数年程。

両方とも仕事が出来るからと雇ったのにも関わらずッ!!

強行手段に出ようにも一人一人がかなりの手腕。

単純に戦闘能力で考えれば、わたくしの勝ち目はありません。

いつその事、七里に奇襲させようかとも考えましたが、それは駄目。

あれは信用ならない。

織戸は正攻法を中心にやるでしょうし……。

そもそも織戸は素性がバレたと言っても過言ではない。

段々わたくしの計画が狂っていきますわ…。

なんとしてでも修正しなければ……。

S i d e e n d

36話：絡み合う螺旋

Side MM元老院 穩健派

数人の男女が会話をする。

「実に…よろしくない。」

「うむ。これだから強硬派は困るのだ。」

「旧世界へ戻ったのならば、それで良いではないか。」

「全くだ。これ以上戦争を起こしてどうする……次こそはメガロメセンブリアは地図上から消滅するぞ。」

「それに元々七里は我々の配下だ。コレは立派な越権ですな…。」

「完全なる世界と繋がるメリットも無くなったのだ……これからは内部でどう勢力を取り戻すかが肝要。」

「うむ。表には……紅き翼の離反者クルト・ゲーデルを。」

「名案ですな”英雄達の遺児”として。アリカ王女の件は外部には知られておらぬ。帝国の皇帝も穩健派…ならば唯一の残りカスを始末すれば…。」

「真祖は無理でもたかだか旧世界の田舎出身魔法使い一人……。」

「幾ら魔力容量が多くとも、中身が無いのでは容易い。戦闘データ

はあの真祖のお陰で十二分に取れておる。」

「制御可能な英雄の作成を持って我ら穩健派の天下は約束されたものになる。」

Side end

Side 学園長

「どうじゃ彼の仕事振りは？」

「人気の寮監みたいですよ学園長先生。高校へ進学しても寮を変えたくないという生徒がいるほどで…。」

「そうか、そうか。助かったよ樋浦先生。」

「お役に立てて何よりです。では失礼いたしました。」

「うむ。ご苦労じゃった。」

やはり…かのうう。一般の先生に彼を調べて貰ったのじゃが…。彼がここへ拠点を築くなどという行動には出ておらぬ。

魔法先生からの報告も仕事振りは真面目で誠実、悪い噂など全くない。

あるとすれば一部の魔法先生の個人の感情が多分に入った報告ぐらいじゃ。

ワシには本国の方がよっぽど信用できん…。

天船巴を一度呼び出してはみたが話をするどころか逆に脅されてしまった……。

恐らくはエヴァンジェリンとアスナ君が3年の時。

そこで彼らは確実に激突するじやろう……。

すまぬ柚木君、ワシは何もしてやれぬ。

こうして一般の生徒に被害が出ぬ事を祈るしか…。

やはり以前提案のあった科学を利用した結界の運用をしなければならぬか…。

Side end

「それでどうだあの爺さんは？」

「中武研で毎日元気に活動してるわ……そんなに強いのか？宗兄より？」

「最強とは言わないが、事が起こればタカミチや明日菜では話にならない。」

「宗一郎、その爺さんよりも臭いのがいるぞ？」

「そいつは？」

「天船巴だ……上辺は令嬢だが中身は泥や生ゴミの方がマシだな。」

「エヴァの言う通り、多分入学前の学園長室に居た奴。」

「アイツか……。今頃言うとは…接触を受けたか？」

「私がクラスの委員長でしょう？アイツも他のクラスだけど委員長だから……。」

「そっぴや結局エヴァは3年間何処の委員もやらなかったな……。」

「その話は関係ないだろう!」

「いや重大だ。明日菜は三年間なにかしら委員をやっていただろう?」

「うん。保険委員、風紀委員、委員長の順番。」

じとつと二人でエヴァを見つめる。

「う……。」「

たじろいで目を逸らすエヴァ。

「よし明日菜には御褒美をやらなとなあ。」

「なあっ!!!聞いてないぞ!!!」

ガタンと椅子を倒して立ち上がって掴みかかってくるエヴァ。

「言っていないからな。」

それいなしてソファにかかるーく投げる。

「わかった。高校に入ったら生徒会に入る。それでどうだ?!」

「エヴァ…知ってるかい?生徒会は選挙で決めるんだ…トトカルチヨ付きの。」

「なん…だ…と。」

この麻帆良で過ごせば解るが何かと賭け事をする空気がある。まあ食券程度だから目を瞑るが……。

もちろんテストの順位も対象になるし生徒会選挙も然りだ。

ちなみにエヴァは今まで一度も明日菜に勝っていない。60位以内をキープする明日菜と100位台をうろろろするエヴァ。差は大きい。

「く……馬鹿なッ。」

「ふふふ…囲碁で遊んでいたエヴァとは違うのよエヴァとは!」

「と言う事で……今度の日曜日に渋谷か、その辺りへ行こうか。」

「私も行くぞ!!二人つきりなど許さん!」

「いや、タカミチも一緒だぞ?アイツも3年間何かしら委員やってたからな。」

「雑用委員。」

ぼそつという明日菜の言葉がタカミチのクラスでの役割を痛い程感じさせる。

「あまり言つな。ヒエラルキーの最底辺なんだ仕方ないだろう。」

男子一人で女子に囲まれるのは天国では無い。

あれは地獄だ。

ドンドン達観していくタカミチが心配になる程に…。

「余計行くに決まっておるだろう！何故私だけが置いていかれる！」

「何もしてないから？」

思わず明日菜と俺の声がハモってしまう。

タカミチが可哀想な事になった一騒動の後、結局全員で行く事になるのだった…。

東京・渋谷

「さて……明日菜、何か欲しいものは無いか？」

「んー……何が解らないから見て回りたい。」

「じゃあウィンドウショッピングと行こうか……。ちなみにタカミチの分は決まってる。」

「えええ。」

「なんだ何か不服なのか？お前に買ってやるものはエヴァと決めたんだが……。」

ギロリとエヴァの眼光が光る。

「えーうれしいなー。」

なんて棒読み。調教されきったかタカミチめ……。もっと反骨精神あるやつだと思っていたのに3年……。いや魔法球合わせて8年の内にタカミチはエヴァに全く頭が上がらなくなっている……。

タカミチに買ってやる事にしたのはグローブと宝石。宝石に俺達の魔力を籠めてグローブに付けてやる。一回こっきりのブースト。

幾つかの店を周り、日が真上を越えた頃明日菜が声をあげた。

「宗兄あれが欲しい！」

明日菜が指さす先には二対の鈴が付いた髪飾り。

「よしじゃあ買おうか。」

買ってやった髪飾りを直ぐに明日菜の髪に付けてやる。

「ありがと宗兄！」

「どういたしまして。じゃあ次はタカミチの物を買に行るか…。」

「うむ。宝石店の方へは渡りを付けてある。付いてこい。」

ぐー。なんとも可愛らしい音が響く。結構大きく。

「……………あー…そろそろお腹が減ったんじゃないかな？」

「……………そうね。タカミチはどう？」

「……………僕もお腹が空きましたね。」

上から俺、明日菜、タカミチ。必死でエヴァから目を逸らして食事を促す。

「……………この辺で美味しい店を知らないか？」

「……………わからないわね…タカミチは？」

「僕もちよつと解らないです。エヴァは何か知ってる？」

なーゼエヴァに話を振るタカミチ！！貴様が笑顔で踏んだものは地雷だ！！

ちゅどーん。そんな音が聞こえた気がしたがそんな事は無かった。

フルポッコにされたタカミチがいるような気がするがそんな事も無かった。

エヴァの勧める創作パスタの店に入り各々が注文。

「しかしエヴァは良く知ってるな。おお美味しいな……いいトマトを使っている。」

「うむ。各地の観光ガイドブックは京都の次に多く暗記してある。浅草の方へ行くならもつと詳しいぞ?」

「趣味が濃いぞ……。」

「エヴァババ臭い。」

明日菜!それは禁句だ!

「……………」

タカミチは無言で目を逸らした。

「おいタカミチ。」

だがエヴァに回り込まれた。

「ひい!」

「今日はサンドバックだ……………」。明日菜は後でじっくり話し合おうじゃないか……。」

「ふふ、受けて立つわ！」

エヴァの後ろに龍が、明日菜の後ろに虎が見える……。頼むからお洒落な店で殺気を放つな！

ナギ、アリカ：明日菜はこんなに遅くなりました。いつまでも新婚旅行をお楽しみですか？くたばりやがれ。

どうでもいいがタカミチの後ろには養鶏場でぶるぶる怯えるチキンを見た。

「さて…色々あったが、色々……。」

「宗兄しつかり！」

「大丈夫だよ明日菜。君も原因だ。」

笑顔で毒を吐きつつタカミチのグローブを造る。魔法使い御用達の宝石店の奥で4つの宝石を購入し、そのまま作成に入った。

「エヴァは氷と闇を、俺は火と風を込める。」

「うむ。」

血を垂らした宝石に徐々に魔力を籠めていく。その間に明日菜がタカミチの手のサイズを測ってグローブのサイズ調整を行う。

「見た事が無い革ですね…竜種の革ですか？」

「どこその溪谷の下で蠢いてた魔獣の革だ。」

「は?!」

「ほら、アリカ王女救出の時に下にいたからな……何かに使えるんじゃないかと思って回収した。」

「ケルベラス溪谷の?!」

「ああ……何をそんなに鳩がマシンガン喰らった顔をしている。」

「冷静に突っ込むがバラバラになるだろうソレ。」

「的確なツツコミありがとうエヴァ。うちの騎士団も似たような奴を使ってるぞ?魔法の射手ぐらいなら受け止められるしその辺の刀剣なら傷が付くかどうかだな。」

まあ数が少なくて狩りに行こうとしたらテオにしこたま殴られたな……。
喜んでるが端切れなんだよな……。
指先でてるし……。

「本来ならガバツと覆うんだが……居合い拳を使うなら指出しで薄い方がいいだろう。」

「ありがとうございます!」

「で、宝石なんだが解放したら一度つきり。宝石は弾け飛ばしグロ―ブも相当痛むだろう。相手を絶対に殺す時に最高の機会を見計ら

って使え。」

「……はい。」

まだ迷いがあるか…。

俺とエヴァ最大の悩み。

タカミチはきつと限界まで相手を殺さないように戦うだろう。

だがそれが通用するのは格下を相手にしている時のみ。

全てが終わった時には既に日は暮れ、急いで帰って寮の門限に間に合うかという時間だった。

寮監とその娘が門限に間に合わないなど言語道断。

なんとしてでも戻らなければ…。

「次の乗り換えをミスると遅れる。時間は40秒弱、距離は階段1セット。いいな？」

「うん。」

「わかっている。」

「わかりました。」

扉が開くと同時に飛び出し、階段を駆け上がる。

まばらだが決して少なくは無い他の乗客を避けつつ走る。

駆け込み乗車はお辞め下さいという定型文のアナウンス……！

階段ではまだるっこしい！

手すりを使って滑り降り電車にタッチダウン！！

「全員いるな?!」

「いるぞ。」

「いるよ。」

走り出した列車。返答の無いタカミチ…。

「まさか…。」

嫌な予感がする。

「……大丈夫です居ます…。」

全員がなんとか電車に乗り込み寮を目指していた時…。

「気づいたか？」

「ええ…乗客がこの車両だけ減って行く。」

「宗一郎、奴がいるぞ…。」

「タカミチ、構えとけ。」

乗客が遂に俺達とソイツ以外居なくなった。

「御機嫌よう不死王。」

天船：巴だったか？

「何の用かなお嬢さん？」

「あら、その構えは辞めた方がよろしくてよ高畑君。本日は貴方と取引をしに来ましたの不死王。」

「取り引き？」

「ええ、大人しく核鉄を渡して下さいな。」

「貴様、ここで死んでおくか？」

エヴァの魔力が高まりギチリと殺意が車両を満たす。

「どうぞ。私が死ぬと麻帆良は灰燼に帰しますが。」

「どつという意味よ！！！」

明日菜が掴みかかろうとするのを押し留める。

「ありがとうございます良い判断だわ不死王。麻帆良学園都市内数十か所に爆弾を仕掛けました。科学とは便利ですね……魔法では大規模な儀式が必要な威力を一瞬で再現するのですから。」

強硬策にも程があるぞ……。

「ほう……私がそんなものに頓着するとも？」

「貴女は、闇の福音は頓着しなくとも他の三人はどうかしら？」

いや、今のは演技だ…。

俺達が切り捨てられないと解っていてやっているか。

そのための3年…。こちらから手を出すべきだったか…。

「今すぐに返事は頂かなくてもいいですわ…：…ゆっくり考えて差し出さない。明日の正午、礼拝堂にてお待ちしておりますわ。」

ズルツと天船だったものが溶けて転移する。

時を同じくして乗客が戻ってくる…。

「宗兄…。」

青い顔で俺を見つめる明日菜。

「元老院が完全なる世界の残党が知らんが…：…やってくれる。」

懐の核鉄を握りしめる。

角ばった部分が掌に刺さる痛みと金属特有の冷たさが気を鎮めてくれるのを感じる。

「ところで宗一郎、爆弾とはなんだ？」

わからずに話していたのかエヴァ…：…。

「旧世界の武器だ。無詠唱で、かつ多発に発生する”燃える天空”だと思え。」

「全て解除してしまえば…：…。」

「タカミチ、俺達はギリギリこれに乗った。それでいて奴が居た…
意味は解るな？」

何らかの使い魔か…それこそ科学の産物か…。

寮の近くの駅に着いた時、俺達の顔は列車に乗る前までと一転暗く沈んでいた。

36話：絡み合う螺旋（後書き）

麻帆良過去編での荒事は次でおしまい！
褐色ヒロイン達を探して旅に出ます。（嘘）

次回

37話：花蘇芳の意味

37話：花蘇芳の意味

S i d e 天船

「うふふふ…これで核鉄は手に入れたも同然ですわ。」

「何を考えているの巴?!これは仕事の範囲から外れているわ。」

「お黙りなさい陰気女。何をやっても結果的に核鉄を奪って真祖を仕留めて持ち帰ればいいのよ。」

黙って本でも読んでいればいいものを……。

「そうじゃぞ天船。血気に逸って事を起こすのはワシも賛同しかねる。」

誰も彼も計画通りに動かないからレールに乗せただけよ。

「織戸まで?貴方達何を言っているの?!」

「いつ爆弾なんて仕掛けたのよ?」

「千里が描いた魔法陣を媒介にして学園都市中に。」

「あれは逃走用の魔法陣よ?!」

逃げる?人質を取っているこの状況でわたくしが逃げる必要などないですわ。

「だから？逃げる必要などありませんわ。」

「退路を確保するのは基本じゃろう？貴様…ワシらを捨て駒にする気か？」

拙いわね……。

捨て駒は自身がソレと気が付かない事に意味があるのに。

「そんな事はありませんわ。核鉄を奪ったら織戸か千里に使って貰わないといけませんからね。わたくしでは戦闘力を発揮できませんもの。」

これは事実。

わたくしがあの内の誰にも勝つ見込みはありませんわ。

そのような肉体言語で語り合うなんて下品な事したことがありませんもの。

大戦の時も、今度も……。

S o d e e n d

S i d e 七里千明

爆弾？冗談でしょ。

MM元老院からの指示は真つ二つ……。

協力と始末……もう仕事の域では無い。クライアントもこちらの指揮官も話にならない。

巻き添えなんて勘弁願いたい。

「うふふふ…これで核鉄は手に入れたも同然ですわ。」

「何を考えているの巴?!これは仕事の範囲から外れているわ。」

「お黙りなさい陰気女。何をやっても結果的に核鉄を奪って真祖を仕留めて持ち帰ればいいのよ。」

陰気女?良くも言ってくれたわね生ゴミ。

「そうじゃぞ天船。血気に逸って事を起こすのはワシも賛同しかねる。」

……やはり織戸は冷静。この場では一番マシな意見だわ。

「織戸まで?貴方達何を言っているの?!」

でも爆弾なんて何時の間に?自分からは監視もしないお嬢様が一人でコソコソ?

「いつ爆弾なんて仕掛けたのよ?」

「千里が描いた魔法陣を媒介にして学園都市中に。」

疑念を持って聞いたらよりもよってソレ?ふざけないで。

「あれは逃走用の魔法陣よ?!」

「だから?逃げる必要などありませんわ。」

神算鬼謀と聞いていたけど、この程度なの？
天船への期待がボロボロと崩れて行くのが解る。

「退路を確保するのは基本じゃろう？貴様……………ワシらを捨て駒にする気か？」

「そんな事はありませんわ。核鉄を奪ったら織戸か千里に使って貰わないといけませんからね。わたくしでは戦闘力を発揮できませんもの。」

ああ…そういう事。

決めた…私は穏健派に乗るわ巴。

「巴、貴方花が好きだったでしょ？」

「何？藪から棒に。」

「これあげるわ。」

懐から一枚の紙を取り出し手渡す。

「押し花？地味ね……………まあ貴女らしいけど。この花は何かしら？わたくし薔薇以外には疎くて。」

ハッ何が薔薇以外には疎くて…よ。

「花蘇芳よ。バラ鋼マメ目ジャケットイバラ科ハナズオウ属。」

「そ、そう。ありがとう同性から贈られても何も嬉しくありませんが。」

ヒクツと頬が引き攣ってるわね。その言葉は皮肉のつもりかしら？

「じゃあ私は撤退用の魔法陣を描いてくるわ。」

「どづいう意味かしら？」

「失敗した時用よ。他に何かあつて？」

ギリツと響く音。お嬢様の仮面が壊れて来てるんじゃない巴？

「勝手になさい！」

「ワシもちよつと出るぞ天船。」

「七里、どづいうつもりじゃ？」

「何が？」

「花蘇芳の意味じゃよ。どちらの意味で取るべきかなと聞いておる
「？」

さすが老人って所なのかしらね……。

「両方って所かしら。」

「……………」

「私を殺す？」

「いや……ワシは柚木宗一郎と戦えればそれでよい。天船には悪いが核鉄などに興味は無い。」

「そう。」

始めから誰も同じ目的を持っていなかった。ただ、それでも私達は協力していた。

原因？

思い返せば彼かもしれない。私が今起こっている事に興味があるのだから。

「ワシは捨て駒でも良い。七里、主はまだ若い。ワシや天船と違って……。好きに生きるとよいわ。」

織戸の言葉を背中に聞きながら私は……。

S i d e e n d

正午丁度

礼拝堂の両開きの重い扉を開く。

教会特有の暗さ。

規則的に並ぶ長椅子。
昔を思い出す。
俺とエヴァの原点。

「お待ちしておりました不死王。ノーライフキング」

スタンドグラスから差し込む光が照らすのは聖母マリアでは無く、
正反対の天船巴。

「ああ。」

「持ってきて頂けました？」

「ここにある。」

懐から核鉄を取り出し見せる。

「あら…その絶対防御と名高い服は核鉄の産物では無かったです
ね…。」

人差し指を口に付け首を傾げる天船。
その仕草は可憐な少女だ。

「卑怯な手を使う。」

「卑怯？わたくしのことでしょうか？」

「それ以外に誰が居る？その陰にいる織戸老人かね？」

「うふふ、どうもありがとう。織戸、出て来てもいいわ…もうバレ

「てるのですもの。」

ユリアと懺悔室から織戸静馬が出て来る。

「さあ渡して下さる？」

自信満々と言った風为天船。

「武装錬金。」

核鉄が展開され腕輪に変わる。

「ロード：ソードサムライX。」

腕輪は更に日本刀へと変化する。

「自分が何をしているかお解りですか？」

後ろへ天船が後ずさりする。同時に織戸が前に出る。

「ああ。貴様達をここで始末する…。」

「麻帆良が吹き飛びますよ?!」

「だとしてもココには無い。もしくは逃げる手段がある…俺は真祖だが貴様等は人間…：スペック差という奴だ。」

「冷酷な方ですね。女性には優しいと聞いていたのですが…。」

「ああ、身内のな？」

「つまり身内の方は先に逃がしたという事ですね……織戸、足止めを。計画変更ですが、問題ありません。」

「うむ。」

織戸が服を脱ぎ捨て、天船は”神父室の中にある転移用の魔法陣”へと向かう。

「ソードサムライX解除。」

片方の武装錬金を棄却してしまう。

「ほう良いのか？今度は以前の様に途中で辞めんぞ？」

「あんた相手に長物使う方が危険だからな……それに俺は素手の方が強い。」

今ここに教会には似つかわしくない激戦の火蓋が切って落とされた。

S i d e 天船

「まさか麻帆良を見捨てるとは……。完全に計算外ですが、まだこの

事件の犯人を真祖に被せれば修正可能です。」

千里の用意した魔法陣……この状況を読んでいたら癩ですが、この際はいいでしょう。

転移の感覚は気分が悪くなる。ふわっと浮き、逆さにされる感覚。毎度のことながら吐きそうになってしまいますわ。

出たのは森の中。

湿った土にスカートが付いてしまったではありませんか…。

「ここはどこでしょう？まあ起爆装置の範囲内でしょうね。」

追って来られない様に魔法陣を破壊しましょう。

不死王もまだまだ甘いですね。礼拝堂も吹き飛ばに決まっているではありませんか…。

「オルクス・ソラリス・マスターマインド おお地の底に眠る魔獣
土の顎 噛み砕けよ 大地の牙。」

大地が裂け魔法陣の敷かれた一帯を崩して飲み込む。

「さて、御機嫌よう皆様。そしてさようなら。」

起爆装置を高々と掲げてスイッチを押しこむ。

ポチッ……………ポチッポチポチ……………。

何度押してもスイッチは反応しない。

「あの根暗……範囲外の所へ飛ばしてどういっつもりですか？やはり頭の中をイジっておくべきでしたね。」

「フン…ここは範囲内だぞ天船巴。」

「エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル!？」

何故転移位置が？

「逃がしませんよ天船さん!」

「高畑まで…どういっ事かしら？」

「簡単な話だろ？爆弾は全て解除させてもらった。」

意味がわかりませんわ…。全て解除なんて出来る筈が無い。

出来る筈が無い?いいえ出来る。この世で二人だけ…わたくし自身と…。

「御明察。その通りだよ仲間を駒にしか思わない奴は自分が切られる事を考えない。」

「アデアット!」

「させるかつ!」

「オルクス・ソラリス・マスターマインド 我が敵を拘束せよ 棘の縛め!」

「なにっ?!」

周囲の植物がエヴァンジェリンの身体を拘束する。ひとまず最大の脅威は拘束出来ましたわ…。

ゴッ

「かはっ…。」

見えない衝撃に腹部を殴られ吹き飛ばされる。

「大丈夫ですか？」

「問題無い。すぐに…くそっ宗一郎に貰った服が…。」

なんでしたの？今の衝撃は…。

「オルクス・ソラリス・マスターマインド 大地の魔獣 我が敵を
飲み込め 破碎のガッ。」

「詠唱なんてさせませんよ…。」

「氷爆。」

ズズン…。

棘を全て凍らせて吹き飛ばすなんて…。

最悪…。

でも、まだですわ。切り札は一つではありません。

S i d e e n d

S i d e エヴァ&タカミチ

天船が契約カードで呼び出したナイフを振りだす。

「なんのつもりだ？それで命乞いのつもりかオイ？」

「あ……がつ……。」

タカミチが呻きだす。

「どうしたタカミチ?!」

「逃げ、僕から離れて下さい……。」

ゴウッ

「なにをしているタカミチ！こちらに居合い拳を撃ってどうするバカタレ！」

「うふふふふ。これが私の道具……因子をバラまき領域を創り出す。誰も逃げられない。」

「貴様を潰せば終わりだ！！氷神の鉄槌！」

氷塊が天船を押し潰……さない。

大地が隆起して天船を護る。

「言ったでしょう？もうここは私の領域。貴女が勝つ見込みなんてありませんわ。幾ら真祖でもね。」

タカミチが断続的に居合い拳を放つ為足が止められない。
眠らすのも有りなのだが余裕が無い。

「魔法の射手、連弾、氷の101矢！」

「歪みなさい！！」

魔法の射手を撃つてみたが逸らされ掠りはしているが有効打には成り得ない。

奴の魔法はアーティファクトを中心に構成したもの…。

領域……因子……。空間ごとやるにはタカミチを巻き込んでしまいか…くそっ。

「大地の魔獣 我が敵を飲み込め 破碎の顎！」

大地から岩石の槍が突き出る。

身体を捻ってかわすも……。

ズンッ

「ガアアアアア。」

タカミチの居合い拳で押され身体に突き刺さる。

「うふ、うふふふ……アハハハハハ！勝った…勝ちましたわ…！
おお大地に閉じ込められし水の精霊、滲み来たりて、我が敵を貫け、

雨粒の矢！！！」

水の槍がタカミチや私やそこら一帯を貫く。

私は岩石の槍から飛び出しタカミチを庇ったおかげで再生に時間がかかる。

すまない宗一郎…。

S i d e e n d

「フンッ！」

「ハアアアアアアア！！！」

銀の男と上半身裸の老人の戦い…。

教会の中は今や破壊に満ちている。

腕の脚の一振りが長椅子を砕き、大地を削る。

お互いの手を止める事は無い。

さながら台風が二つ。

老人は放たれる腕を逸らし、中に踏み込む。

男は逸らされたまま中に踏み居る老人を迎え撃つ。

耳に痛く、文字にするに難しい音が響き二人は離れる。

「ハッ……これの上から攻撃を通すかよ化け物め……。」

「化け物に化け物と言われるのは褒め言葉と受け取っても？」

「ああ……称賛に値するよ。」

「それは重畳。」

こうして会話はしているが、老人の身体は満身創痍。俺の身体にもシルバースキンの上からとはいえ浸透する様な一撃。真祖でなければ拙かったかもしれない。

「……退いてはくれないか？」

「退けんな。例え天船の計画全てが失敗しているとしても。」

「お前達に勝ち目は無い。」

「解っておる。七里がそちらに付いたのであるう？」

「……ああ。」

「それでもだ……ワシの血は身体は人生で最も昂っておる。」
一息。

「征くぞ？」

「来い。」

身体の横に丸太を抱える様に構えを取る。蛇。

「ようやく全力かな？」

「ああ、正真正銘必殺の意味だ。」

二度目の激突。

老人は活歩、俺はステップを踏む。

老人の歩法……最初は戸惑ったがエヴァに相談して解った。微妙に視線の死角に入りこむ歩法。

ネタが解ればその死角に拳を放つのみ！

左手がしなり鞭の如く老人の顔を打つ。

「ぎっ！」

そのまま人体の急所に打ち込む。ただの牽制。決め手にはならない。

ガードをしようとする腕に拳を垂直に入れ、たたらを踏ませる。

老人が前へ出ようとする所へ牽制の攻撃を繰り返す。

「ふっ……はっ。」

「くっ！」

ひるんだそこへ瞬動で踏みこみ必殺の右を放つ。

グシャアッ

何とか受け止めた左腕を砕き、その勢いそのまま肩も粉碎する。

織戸老人は吹き飛び柱に打ちつけられ、なお立ち上がる。

「しなる鞭のように円弧を描く軌道」と垂直かつ直線的な軌道を組み合わせるの牽制と可変軌道による強襲。右は普段は動かさず、ここぞというときに強力な一撃を放つ。……そういう技術じゃない？」

「ああ。」

「実に奇襲向け…以前は使わなかったわけでは無く……。」

「人目に晒す事を防ぎたかった。」

「そうか……。」

「普通は今ので死ぬんだがな…。あんた同類か？」

「ワシとて死ぬる時は死ぬ。」

「次が最後だ。」

「構いませんよ。繰り返さなければ…。」

電話を切り、壁にもたれ掛かる。

最後の一撃……流石に響く…。

Side 天船

「あははははは勝ちましたわ！初めからこうすればよかったのですわ！……言う事を聞かないゴミを二匹も飼う必要なかった！！！」

でも作戦はおしまい。

吹き飛ばせないのなら一旦逃げて未だに吸血鬼狩りをしている連中を駒にすればいい。

奴らにとって最悪の敵が二匹も居るのだから！！！！

「フェイト様！もう暫しお待ちください！巴は必ず成し遂げますわ！」

森の中をひたすら笑いながら走る。

「きゃっ…！」

何か足を取られてこけてしまう。

「脱出したら着替えないと…こんな泥臭い所わたくしには似合いませんわ。」

「イヤ、才前ハココデ終ワリダゼ。」

「誰?!」

何処から声が?!

「久シブリニ登場チャチャゼロ様ツテナ。」

目の前には小さいお人形さん。

人形の癖にわたくしを泥に塗れさせたの？
わたくしの領域の中でギタギタにして差し上げるわ。
こっそりカードを取り出して…。

パッ

「はい、残念。」

「ケケケ油断ダナ。」

「なっ！返しなさい！」

「チャチャゼロ！」

「アイサーアスナ。」

柚木明日菜がカードを放りあげて、チャチャゼロとかいう人形が切り裂く。

「あ…あああ。」

私のカードが…。

「ヨクモ御主人ヲヤツテクレタジャーカ。」

身の丈より大きい剣を振り上げて…。

「やめっ…やめなさい！」

「チャチャゼロ。こついう奴にはコレが一番よ！」

拳が…。

ガッ

星が散って…。

S i d e e n d

時は戻り。前日深夜。

寮監室で悩む俺達の部屋にノックの音が響く。

「七里君か。どうしたんだい？」

「柚木寮監、いえ銀騎士に話があります。」

「……中に。」

彼女が語るのは仲間の情報に、計画。

「それで…君は何を望む？」

「オイ、宗一郎！こんな奴の言葉を信じるのか?!」

「ああ。」

「私も信じるわ。今の状況より下は無いと思う。」

「僕もです。」

「信じなくても結構です。爆弾の位置は把握しています。礼拝堂の魔法陣から転送される位置は「コ」。電波のギリギリ届かない所。」

「ぐぬぬぬぬ。」

「エヴァ落ちつけ。それで七里君、君の望みはなんだ？」

「私はMM元老院穏健派の職員です。しかし今度の派遣は過激派の命令でした。天船巴は完全なる世界の残党です。」

「グダグダだな元老院は。」

「私の望みは静かに暮らす事です。正直な話、この世界がどうなるうと関係ありません。ですが図書館島には貴重な本が、私がまだ読み終えていない本があるので。」

「はっそんな物の為に裏切るのか？随分と戯けた理由だ。」

「では最大のカードを切りましょう。その代わり今後一切私に干渉しないでください。本国には死亡と伝えてください。」

「とりあえず聞かせて貰おうか。」

「フェイト・アーウェルンクスは生存。ナギ・スプリングフィールドを襲撃する計画があります。どうですか？」

「「そんな馬鹿な。」」

タカミチと俺の声がハモッてしまう。

「誰だそれは？」

「最悪の部類の敵だ。残党どころか再結成する気満々じゃないか…。わかった七里君の要求を呑もう。監視はさせて貰うがな。」

「ええ、それで構いません。」

「どうぞですか学園長？」

「ずっと黙秘を貫いておるわ…。」

「七里君が顔を見せて以来ですか。」

「うむ。」

「持ち物は…普通の服に、魔法の発動体になる指輪だけですか。」

「この押し花もあつたぞい？」

「それは七里君の贈り物ですよ。花蘇芳の花言葉は不信と裏切り…」

「しかし困ったものじゃのう。」

「本国へ送るわけにもいかないしオコジヨにしても危険と？」

「うむ。どうじゃ帝国の方へ送っては？」

厄介事は押しつけないか。

「引き受けましょう。その代わり七里君の事は約定通りに。」

「わかったぞい。約束しよう。」

そんなこんなで大騒動は閉幕した。

天船巴は帝国で重犯罪人として出来得る限り情報を引き出す事となった。

織戸静馬は急な予定で海外へ渡った事と処理され、教会の修復も近日の内に行われた。

七里千明は結局エヴァや明日菜、タカミチと同時に卒業、その後トルコイスタンブールで消息不明。

その後は何事もなく…。俺も旧世界でNGO銀の牙を作り世界を飛び回る事にした。

勿論たまには帝国へ顔を出す事も出来る様になった。

しかし、まさかそれがタカミチの道しるべになってしまつとは、この時まだ俺は知らなかった。

37話・花蘇芳の意味（後書き）

次回

38話・中東に咲く花

38話：中東に咲く花

Side 宗一郎

灼熱の戦場。

砂が舞い、肌をひりつかせる。

「旦那も奇特な人だね……この先で生きとる者なんておらんぞ？」

ある国とある国の争い。

元々そこら一帯は宗教の違いによる争いが絶えない地域だった。

そこへ我が物顔で大国が乗り出し、絡んであつという間に戦火は広がった。

俺が目指しているのは両軍に蹂躪された街だった所。

「誰か生きている可能性があるのなら、俺は其処へ向かうだけだ。」

数日前、難民キャンプの無線に規則性のある雑音が入った。

それに気が付いたのは本当に偶然。

恐らくはモールス信号。

街の名前とSOSだけ……。一日に一回、同じ時間に入る。

誰もが言う、その街にもう生存者はいない。

他のNGO組織も、難民達もだ。

火と硫黄が降り注いだソドムがマシに思えるぐらいの戦火だったと……。

NGO組織、銀の牙。メンバーのほとんどが見習い魔法使い、数人が吸血鬼という構成で活動している。

悲しい事だが世界初の魔法使いと吸血鬼の同席している組織だ。

吸血鬼のほとんどは活動の中で出会った者たちである。

小規模ながらも最も苛烈な戦場に身を置くNGO。

他のNGOからすれば、俺達が来たと言う事は避難勧告に等しいらしい……。

確かに以前の現場では難民の子供を逃がす為に政府軍とやりあったが……。

「じゃあ旦那、ガイドはここで終わりでさあ。真っ直ぐ歩けば遺跡の様な街が見えるから……。」

「ありがとうよ。」

「おおい旦那、コレ持って行け！」

投げ渡されるのはAK-47。この辺りで一番使われている銃……。

「アブダビあなたは持たなくても？」

「ワシはこいつが慣れとる。氣い付けてな旦那！」

ガイドのアブダビ老人が掲げるのはピストル。かなりの年代物だと解るが。

「ああ。」

とだけ返事をして現場へと向かう。

銃を背中に掛けて熱砂を越える。

赤茶けた壁、石で組まれた柱らしきものが増えてきたのが解る…。

「そろそろのはずなんだが……。」

物陰から物陰へと移動しつつ気配が無いか感じ取る…。

トラップが仕掛けられていないかも確認しつつ焼け焦げた家を一つ一つ検めて行く。

弾痕、何かが炸裂した様な痕、レンガに染みついた赤黒いモノ。

建物は全てが壊れたわけでは無く一部が残っている状態。

既に生活感は無く、まさに廃墟。

「やはり生存者なんて居ないか……しかしこちらの方角にはこの街しか無いのだがッ!？」

キラツと何かが光った瞬間、悪寒を感じてしゃがむと銃声が頭のあった場所を撃ち抜く。

S i d e e n d

S i d e アルカナ

「ッ！外した。皆は裏口から撤退、私がここで引き付ける！」

「でも！」

「行け！私が呼んでしまった敵だ。」

恐らくは哨戒兵。それにしても目立つ服を着ているが……銃を持っている以上敵だろう。

一週間以上前、私が住むこの街は両軍の衝突する戦場と化した。

親や老人達は子供達だけを建設途中だった貯蔵庫へ隠した。

静かになって、食糧が無くなって外に出て解った事は一つ。私達だけしか生き残らなかった。

一番の年長が私だと言うのも嘆くしかない。誰一人街から出て救援を求める体力が無い。

「スコープの反射を見られたか……。だが、そこからは逃がさない！」

Side end

Side 宗一郎

狙撃兵か？狙いがヤケに正確で、安易に出られない。

殺すのは容易。

こちらは死なない、対面して撃ち返せば終わる。

だが一瞬の邂逅ではあったが小柄な兵士……少年兵ではないか？とも思う。

しかし嫌な予感はある。先程から狙撃兵のいる建物の周辺の気配が

高まった。

罨か……それとも少年兵で構成された部隊とかち合ったか…。

いつそ罨に引っ掛けて取り押さえてみるか……。

「ロード：アリス・イン・ワンダーランド。」

砂漠地帯、風の強い所では相性が悪いのだが。

更に銃を狙撃兵に見える様に放り投げる。

同時に反対側へ走る。

S i d e e n d

S i d e アルカナ

仲間を呼ばれると拙い、早めに仕留めておきたいのだが…。

「なにつ?!」

銃が放り投げられた事に戸惑ったその瞬間に相手が反対側から飛び出した。

やられた……。

相手が入ったのは瓦礫で入り組んだ旧居住区。

狙撃銃で相手するには難しい……。

拳銃を抜いて構える。

逃げ場は無い。ここから逃げれば皆が危険だ。

せめて相討ちを…。

Side end

Side 宗一郎

「居住区か……。荒らされているな…コレは？」

キラリと光るのは荒らされた物の中にある宝石の付いた指輪。

「普通…金目の物を残すか？その割には食糧が見当たらないし…。」

脳裏を嫌な予感が過るが、それにしても狙撃兵の存在がおかしい。

子供が偶然生き残り食糧を集めた可能性は有り得る。大人なら食糧を持って動くだろうから救援を飛ばす必要は無い。

だが狙撃兵が何故いる？重要拠点でも無い街だ。

子供を護っている？

……賭けに出よう。

来た道を駆け戻り手を挙げて狙撃兵のいる場所へ近付く。

Side end

Side アルカナ

「は？」

戻って来た拳銃に両手を挙げてコチラに来るだと?!
道理で手榴弾で作った罠が作動しないわけだ…。

「俺はNGOの者だ!撃たないでくれ!SOSを送ったのは君か。」

「NGOの人間がどうして銃を持っていた?!」

「ココに生存者は居ないと聞いた!来たのも俺一人だ!銃はガイドの爺さんがくれたものだ!」

信じるか?

「身分証を見せよう!それで信じてくれるか?!」

「出せ!」

銃を出せば撃つ!

懐に手を入れ、身分証が取り…。

「危ないマナ!」

銃声。

男が捨てた銃が火を噴き着弾した。

男は当然の如く倒れる。

急いで駆け寄る。

身分証にはNGO銀の牙団長…ソウイチロウ・ユズキ。

「なんてことをしたんだ!」

「だってマナが撃たれると思ったんだ！」

「もう誰も助けに来ないぞ…。」

「なんで?!」

「生存者は居ないと思われているらしい、しかもこの人が帰って来ないのなら尚更だ。」

「そんな…。」

男の死体を中心に絶望感が漂う。
なにしろもう食糧が無いのだから…。

「いや…流石に予測してないと痛いな。」

すると突然男が蘇った!!!
しまった銃を…。

Side end

Side 宗一郎

驚いた。話がまとまりかけたら後ろから撃たれた。
シルバースキン解除するんじゃ無かったな…。狙撃兵ならアリスインワンダーランドの効果で当てられないはずなんだが……。
バラ撒くように撃たれちゃたまらんな…。

「なんてことをしたんだ！」

「だってマナが撃たれると思ったんだ！」

「もう誰も助けに来ないぞ……。」

「なんで?!」

「生存者は居ないと思われているらしい、しかもこの人が帰って来ないのなら尚更だ。」

「そんな……。」

絶望感が漂い出す。

再生も終わったし……頃合いかな。

「いや……流石に予測してないと痛いな。」

ムクリと起きてマナと呼ばれた少女に声をかける。
怪しまれない様になるべく笑顔で！

結果、子供たちが逃げだしてこの場にはマナと俺しか残っていない。

「あー……これ防弾素材だね？」

俺を見るマナ。目が光って……魔眼?!

「……………」

無言でこちらを睨むマナ。

「あー……君達を助けに来た。銀の牙の柚木宗一郎だ……シトーと呼んでくれてもいい。」

NGOの活動で名乗り始めた名前はシトー。

ユズキヤソウイチロウというのはどうも発音しにくい様で……。

柚子の事をJapanese citronと呼ぶらしいのでシトーと名乗る事に決めた。

「マナ・アルカナ。それでシトーさんは人間じゃないね？」

「ちょっと人とは違う個性を持っていてね。そういう君のは魔眼かな？」

「ふふふ……面白い人だね。」

「ありがとう。子供達を集めてくれないか？」

「わかったよ。悪い人では無さそうだ。」

一騒動あったが食糧と水を与えてガイドの所まで戻る事が出来た。

S i d e e n d

「宗一郎さん！四音階の組み鈴と連絡が付きました！！！！」

「今どこにいる?!」

「東に30、40キロの所です!」

「解った。こちらからも向かおう!」

NGOを初めて四年。四音階の組み鈴とは一番縁が濃い。

過激な紛争地域となると組み鈴と銀の牙しか居ない事も多々ある。

その中でも”龍宮こうき”とは仲が良い。

まあ吸血鬼さえも命を掛けて助けるような正義馬鹿なのだが。

日本で普通に暮らしてれば一生安泰な神社の一人息子なのにな……。

「久しぶりだね宗一郎!」

「抱きつくな鬱陶しい!敬語使え若造!」

正面から抱きつく青年を引っぺがす。

「へへへ嫌だね!今更宗一郎さんとか呼べませんよ。」

「ずっと正義の味方してる様だな……。」

おどけた調子から一転真面目な顔になって言う。

「諦めるつもり、ありませんから。」

「そうか。」

「解ってます。僕の正義はきつと僕自身を殺す……それでも、その時まで僕は助けたいんです。」

「変わっていないようで安心する様なしない様な…複雑だよ。」

「ご迷惑をおかけします。……その子は？」

「コートをワシ掴みしてる子の事だよな？」

「この間助けた子でな、アルカナと…。」

「マナ。」

「そうマナ・アルカナだ。魔眼持ちで俺の正体を知られたから裏を教えた。」

「そうですね。よろしくマナちゃん、僕はコウキです。」

笑顔で手を差し出すコウキ。だが手は握り返される事無く…。

「ま、まあこの場合は頼むわ。ちょっと本国に帰らなくちゃならなくなってるな。」

「特級犯罪者天船巴の処刑ですか。」

「ああ。思いのほか情報をペラペラ喋るから放置していたんだが、最期の希望が俺との面談だそうだ。」

「でも彼女が話した事は……。」

「ああ、あんまり表沙汰にすると拙くてな。また戦争になっちまう。まあ連合の方で処分したらしいが。」

そう。当初アレは一切何も話さなかった。

が、形だけの裁判開く直前アレはベラベラと話出した。

おかげで処刑は延びに延びて、一週間後となった。今思えば、自身の延命保身のつもりだったのだろうが……。

「シトーさんは行ってしまふのか？」

「ああ。また会えるさ。」

「誰にでも言うくせに……。」

少しむくれた感じで言うマナ。最近マナの目が怖い時があるのだが気のせいだろう。

魔眼が、という意味では無く。気が付いたらコチラを見ている目だが。

「……マナ、余り魔眼を多用しない方がいい。使い過ぎは魔を呼び込むし自身も堕ちるぞ？」

「シトーさんと同じ所に立てるのなら後悔しないよ。」

「はあ……もっと成長してから言ってくれマナ。」

「フフフ、わかった。成長して出直すとしよう。」

ウインクして去って行くマナ。子供なのだが、子供とは思えないな……。

あれでは20近くのとオの方が子供に見えてしまう。まあ30歳でやっと10代なんて戯けた成長率なのだから仕方が無いが。

…仕方無いのか？

そんな考えに惑っている俺にコウキは爆弾を投下した。

「宗一郎、いや師匠はロリコンじゃないですよね？」

「…よし、コウキ。久しぶりに剣の稽古を付けてやる抜け。さあ抜け。三枚におろしてやる。」

「ちよっえ、笑顔がこわっアツーーーーー！！！」

「安心しろ。峰打ちだ。」

「ハア…ハア…ハア…相変わらず敵わないです。」

「まあお前は魔法使いなんだ。同志見つけて従者になって貰え……剣は最後の最後に使うもんだ。」

「魔法使いと狙撃手は決して近付かれてはならない。接近を許した時が最期だ。」……「…でしたね。」

「ああ。最期を少し先に延ばす為の剣だ。」

「それでは……。」

「ここは任されました。全員無事に生き残ります。」

「ああ…頼んだ。」

こうして現場の仕事を四音階の組み鈴に渡し、一般人と見習い魔法使い数人を残し俺は帝国へ戻った。

帝国 城地下牢 重罪人用特別監房内

「久しぶりだな天船巴。」

既に令嬢然とした艶は失い、全身拘束服で包まれた天船巴。

俺は椅子にも着かず天船に話しかける。

正直エヴァを傷つけた罪は万死に値するのだが……。

「わたくしは全てお話ししました。連合過激派の命令だった事も完全なる世界との繋がりもです。」

「ああ。過激派は全員失脚、秘密裏に処刑されたよ。完全なる世界

のアジトは放棄済みだったがね。」

「つまり不正は駆逐出来たわけです。」

「ああ…そうだな。」

何が言いたい？

「わたくしの処刑を取り下げて貰えませんか？」

「何を言っている？」

「お願いです。わたくしを従者にしてくださいな！強力なアーティファクトが手に入りますよ！？」

「罪もない学生を平然と殺そうとする奴を俺が従者にすると思うか？」

「千明さんは助けたのでしょうか?! わたくしも心を入れ替えて正義に仕えたいのです！」

「そうか……わかった。」

「では！」

「ああ。処刑は明後日だ……それまでしかコチラに居られないんでな。」

「……何故ですか?!」

「てめえさ……隠してるつもりなんだろうが、臭うんだよ。魂の腐りきった臭いがな。」

それっきり天船は顔をあげない。
そうして面会は終わった。

S i d e 天船

わたくしの処刑が決まる裁判が開かれる直前フェイト様が特別監房にいらしてくださいました。

「ご苦労だったね天船。」

「いいえ、めっそもございませんフェイト様！」

「それで君に頼みがあるんだ。」

「はい。なんでも命じてください！」

「うん。僕の事はぼやかして全部話しちゃってよ。元老院の過激派はもういらなんだ。」

「わかりました。」

「それとさ、僕はこれから千明さんを追いにトルコに行かなくちゃならなくなつたんだ。だから巴、僕の為に死んでくれない？」

「……は？」

足元が崩れて行く感覚がわたくしを襲いました。

「解らなかつたかな？」

「フェイト様はわたくしを御助けになる為にここに来られたのでは？！」

「残念だけどね僕は出入り自由だけど君は違う。」

そんな…。

でもわたくしが暗く沈んでいるとフェイト様はわたくしを抱き寄せキスをしてくださいました。

「ふえ…イト様？」

「今のは契約の為のキスじゃないよ。僕がしてやれる唯一の事さ。君は出来るだけひっかきまわしてくれればいい。」

「わかりました！！わたくしにお任せ下さい！命に掛けて任務を全うします。」

「ありがとう巴。」

ぱしゃん。そう崩れて行ってしまわれた。

それからわたくしは元老院の事をベラベラと話しましたわ。

そうして処刑が行われる一週間前、最期の願いとしてあの男を呼び

寄せました。

きつとアイツはこれで全部終わったと勘違いするはずですよ……。わたくしが死んでもフェイト様が必ず仇を討って下さる！

Side end

Side フェイト

「ぺっ。」

唾を吐き捨て口を拭う。

「フェイト？」

「ああ、分身とは言え天船とキスしてね。」

「ああ…あの思い上がりか。」

「僕が二番目という事にも最期まで気が付かない馬鹿だよ。一番目は良くあんなのを手元に置いておくよ。」

「フン、女には恩を売っておくもんだ。巧く立ち回れば男より使い勝手のいい駒になる。天船がその最たるものじゃないか。」

「そういう考えはあまり好きじゃないんだけどね。」

「まあそれはあなたの好きにするといい。」

S i d e e n d

拘束服を着た天船、それが群衆の前に突き出される。
群衆の罵声が浴びせられ石が投げられる。

壇上で罪が読み上げられ首にロープが巻かれる。

「最期に言い残したい言葉はあるか？」

処刑人の冷酷で大きい声が群衆を鎮めさせる。

ああ見えて温厚で家庭愛溢れる男なのだが…仕事の時の自分作りは
一等巧い。

「ある。」

「ならば言え。最期の慈悲である。」

「人形如きがわたくしを裁くなど偉そうな！お前達は須らく消滅する！これは運命だ！！柚木宗一郎！！！貴様の大切な物全て奪ってくれる！！！刻みつけなさい！！わたくしの名前は天船巴！！わ」

聞くに堪えない罵詈雑言。

俺は死刑執行の合図を送る。

その瞬間、床が開き頸椎が折れる音と共に天船は絶命した。

人形か：全てを見下す貴様らしい。地獄に堕ちろ、俺が行った時に今度こそ殺してやるよ。

「ひさしぶりじゃーそーいちろー！」

テオの助走を付けたダイビングアタック！

両手を広げて迎撃、もとい受け止める。

「久しぶりテオ。元気だったみたいだな。」

「うむ！ああ、そういえば。ルーシー！手紙じゃ！手紙を！」

「……」

「なんの手紙だい？」

「そついちろー宛への手紙じゃ。」

テオを膝に乗っけつつ手紙を開く。

墨で達筆に書かれた内容。

差出人は詠春。

要約すれば”娘は凄く可愛い”が半分。もう半分が娘に魔法や呪術を教えるべきか。

はあ…親馬鹿め。気持ちは解るがお前は一応英雄だろつに…。行ってやるか。

「うむ。京都へいかなくてはならなくなった。」

「なん…じゃと?!!」

暗い顔。むう…。

「一晩こっちにいるから。な?」

「!?!?!」

泣き顔と涙に逆らえない。ホント、いい女に成長したな。

38話：中東に咲く花（後書き）

ホント、お前何歳だよ！マナ！編でした。

コウキはT・コウキ、マナの本名はマナ・アルカナ。

原作では寮暮らし、龍宮真名。

それならば可能性は0では無いという思いで龍宮コウキとしました。

次回

39話：京都、剣士達の苦悩

39話：京都、剣士の苦悩（前書き）

超難産でした。更新遅れてすみません。
せつちゃん絡み難い。展開迷いまくりました。

39話：京都、剣士の苦悩

京都

「しまったな……エヴァを呼ぶべきだったか……」

帝国から直接京都へ赴いてはみたものの……来たがるだろうなあエヴァは。

中学の修学旅行はハワイだったからなあ……。

京都票がエヴァ一人っていうのは切ない。

正直ハワイ程度のビーチなら別荘の方がいい。

「しかし……デカいなこの家は。」

「お待ちしておりますりました柚木様。詠春様がお待ちです。」

「出迎えありがとう。」

いつもなら巫女さんがお出迎えなのだが……。今日に限って剣士か。余程迷っているに見える。

「久しぶりだな詠春。」

「ええ、お久しぶりです。御呼び立てしてすみません。」

「いやいいさ。わざわざ帝国の方へ手紙を出したんだ……そこまで迷ってるなら来てやるべきだろう？」

「ありがとう。」

「まあそれだけ老けたって事だぞ？先に言うが魔法を教えないと言う選択肢は無い。」

「はは……貴方に言われると説得力が大きいですね……。」

「力を持つておきながらソレを使わせない。というのは助けられた誰かを助けられないと言う事に繋がる。まして、一生隠し通すことなど不可能だ。」

先程から香る芳醇な香りは恐らくソレだろう。
極上の魔力を含んだ若々しい処女の血液。

「詠春。娘は裏の庭園の方だな？」

「え、ええそうですが、どうして？」

「隠し通す事が不可能って意味だ。アレはヤバい。俺に理性があり、なおかつ友好関係だった事を喜ぶべき代物だ。」

「……あの子に魔法を教えてやってください。」

「だが断る。せめて陰陽術も一緒にそれ以上に教えてやれ。」

「しかし主流は……。」

「テメエはどここの長だ？長の娘なら相応の物を学ばせる！」

「……………」

「なあ詠春。お前の事だ小学生になったら麻帆良に送ろうとか考えてるだろっ?」

「!?!」

図星か。

「なら余計にだ陰陽術を教えてやれ。魔法は向こうで俺が教えてやる。それまでにお前は東西友好を深めろ……娘を送る事が不自然ではない様にしろ。」

「わかり……ました。」

「はあ……つたく説教染みた事言う羽目になってしまったが……詠春、ナギが死んだって噂は嘘だろっさ。アイツやラカンが死ぬか?ガトウやお前だって生きてるんだ問題無いさ。」

「ありがとうございます……。」

連中が死ぬわけが無い。普通に死ぬような連中だったら今頃塵すら残ってないだろっ。

それにあくまで噂に過ぎない。

まあ……詠春の気持ち解らん事も無いが。

魔法なんざ真つ当な人間の使うもんじゃない。

使えば最期。

常に付き纏う”他人を死や魔法に巻き込む可能性”。

連合の方針は記憶を消せばいいらしいが……。記憶を蔑ろにする時点で自身が真っ当で無い証明になる事にすら気が付かない愚かしさ。

人を助ける、救うだけなら究極、障壁と治癒呪文だけで事足りる。それに反して攻撃呪文の多さ……。

大多数がそれに気付きもしない。

「いいさ。娘が血の道歩く事は親なら誰でも反対したい……それを素質が許さなかっただけだ。」

それじゃ、と出て行こうとした時。

「待つて下さい詠春様!!」

「刹那君？」

「このちゃ……お嬢様が魔法を使わなくていい様に私が護ります！だから！」

障子をスパアーンと開けて入ってくるのは小柄な黒髪の少女。

木乃香ちゃんと大体同年齢ぐらいか？

…妙な臭いがするガキだ。

「詠春。このこんまいのは何だ？」

「故あって僕が引き取った子で木乃香の傍について貰っている子です。」

「護る？ぶふっ……冗談も程々にした方がいいぞお嬢ちゃん。」

護る？どう見ても護られる側だろうに…思わず嘖いてしまった。

「なにっ！」

ほう刀？に手を掛けるか。なんというか細いなその刀。

「来いよ嬢ちゃん。いいよな詠春？」

「え…いや…。」

「大丈夫殺しはしないさ。刀は保証できんかな…？ほら、外にでな嬢ちゃん相手してやる。」

上着を脱いで庭園に出る。

「アデアット。」

鞘付きの状態で刀を呼び出す。

嬢ちゃんはもう抜き身の真剣を出している。

「きな。」

「抜かなくてもいいんですね？」

「当てれると思ってるなら来いよ。」

「刹那君！彼は僕よりも強いですよ……！退きなさい！」

「退けません！いきます……！」

パアアン

「ツツ……。」

振りおろしを避けて鞘だけで胸を打つ。

「柚木流剣術……幻刀^{まほうしやう}。」

パラリ

「え？」

着物の裾が切れて垂れる。

これで女の子は大体胸元を隠して膝を着く。

チャキツ

「ほう……まだやるか？」

構えて気を籠め……来るか……！！

「斬岩剣……！！」

「斬岩剣……！！」

瞬時に同奥義を放つ。

「え…キヤアアアア。」

刀は折れ、吹き飛ばされる。

「ぐっ……この…ちゃん。」

まだ立つか……”面白い”。見せてやろう俺の”本気”を。

「お嬢ちゃんまだやる気かい？」

「せ…つなです。まだ…やります。」

「刹那……か。詠春、まともな刀を与えてやれ。コイツは”俺が”鍛えてやる。」

「刹那君！コレを！」

夕凧？大戦中に使ってたアノ業物か…。

刹那は夕凧を重そうに抜き、しかしそれでも夕凧をしっかりと構える。

「全力だ。全力で来い刹那……さもなければその髪留めを貰う。」

「ハアアアアアアア神鳴流奥義雷鳴剣！！！！」

気で電気を帯電させるか……。だがまだ全力では無い！

「神鳴流決戦奥義 真雷光剣・改！」

ズバアアアアン

鏝競り合う事も無く刹那は吹き飛ばされる。

「くう。。。」

髪留めは燃え落ち髪はバサツと広がる。

「全力で来いと言ったはずだ。」

「柚木君！！！刹那君は全力で！まだ雷鳴剣を出せる筈が無いんだ
！！！！」

「ハツ黙ってる詠春！翼ぐらい出せよ刹那！！」

「…え。」

「俺は吸血鬼の真祖だ。君が混ざり物でも真正の妖怪でも良いさ…
…護るんだろう？正体がバレる様なら見捨てて逃げるのか？そりゃ
あいいお嬢様は何処ぞ誰かに良い様に使われて捨てられる。」

「掟が、」

「掟？そうかじゃあ掟に従い君は諦めて、お嬢様は今から俺に殺さ

れて鴨川に揚がりました、だ。」

バサア

白い翼が広がる。

「このちゃんには手え出させへん！！！！絶対に！」

翼と同時に殺気が膨れ上がる。

「やつとか…………。」

詠春はかなり広大な結界を張ったか…。無駄な事を。

「ハアアアアア！」

技も小手先も無い。気で振り絞った力と翼の機動力。溢れかえる程の殺気。

”いなす事すらせず、ただの一撃ですらも掠りはしない。”

必死の形相。余裕など一欠けらもなく。

ズパッ

「あつ……………」

片翼が切り落とされてぶら下がる。

「ハッ。つまらねえ……………来世からやり直せよ。」

刀が首に振り下ろされ

。

Side 刹那

「あっ……………」

翼が切り落とされ……………。おかしいな……………昔は自分でコレをやるつもりなのに……………。

コレが無くちゃこのちゃんを護れないのに……………。
そう思うと涙が溢れて来て……………。

でも。

「ハッ。つまらねえ……………来世からやり直せよ。」

冷酷な声と顔の男が私に刀を振り下ろす。

ごめんこのちゃん……………。

「……………な君！」

誰かがうちを呼んでる。

「……つな君！」

詠春さま？

「刹那君！！」

「ハッ！え、ここは？！」

「よっ。お嬢ちゃん良い悪夢見れたか？」

「なっ！？」

急いで翼を広げて確認する。

そこには傷一つ無くて、でも胸元は切れてて、身体中が痛くて……あれ？

「アリス・イン・ワンダーランド。視覚神経から相手の脳に作用して忌み嫌う要素をランダムに選択して作用する。あとは外部から声を掛けてランダムをより最悪の方向へ持っていくだけだ。」

あの痛みが？あの感覚が全て幻覚？！

「一体どこから幻覚に？」

詠春様も同じものを？

「出せる筈の無い雷鳴剣を使いだした時には既に。自分の知る最高の技が容易く打ち破られる悪夢。正確には俺が刹那という固有名称を呼んだ辺りからだな。」

詠春様が抜け殻の様な目をしていらっしやる…。

結局あの人は何をしたかったんだらうか？

本当に幻覚だけだったんやろか？翼の付け根がまだヒリつく感じがある…。

ウチはあの人が嫌いや。大嫌いや。でもこのちゃんを護る為には嫌いな人からでも教えを請う…。

この翼が無くても良い様に！！

S i d e e n d

うーん。いいもの掘り当てた。

ああいう苦惱はエヴァの大好物だしなあ。

いいお土産にもなったし…。桜咲刹那か…うちの部隊に欲しいなあ。

「っと…。巧く転移出来たな。これをちょちよいと撮影しまして此度のエヴァへの貢物と致しましょう。」

指先に光を灯しその明りで淡々と撮影していく。

「えー…一般公開されていないものを中心に。」

ククク……今からエヴァの驚愕の表情を見るのが楽しみだ。

「お、紫檀木画挟軾か……確か復元品では無いな。…お？これはエヴァが見逃した時の公開品か。」

ザッと撮影し終えて。

「任務完了。」

「ただいまー。」

麻帆良の森に建てたログハウス、我らが家に戻り声を掛ける。

「おかえり宗兄！」

いつも通り明るい明日菜と

「やっと帰ったか宗一郎……！さあ京都に行くぞ！」

キメキメのエヴァがいた。

一張羅の黒のフリフリがふんだんに着いているワンピースドレス、
白い帽子。

足元に大きな旅行鞆。

一枚めくることにエヴァの目がキラキラと光る。

なんかコレは助かったな。正解だった。あくまでオマケなんだが助かった。

「おお！おおお！おー！」

一通り歓声をあげつつ見終わると

ぱさっ

「終わったのか？」

「宗一郎？」

「なんだい？」

「これは……あそこだよな？」

「ああ正倉院だよ？何回も見に行けなかったらどう？だから公開品以外も写してきたんだが。」

「どうやって入った！！！」

「ほらヘルメスドライブでパーっと。」

「ふむ……で、何故”前回行った時”に私を”ソレでパーっと”連れて入ってくれなかったのかを小一時間ほど問い詰めたのだが？」

あれ?! 助かる様にフラグを積み立てたはずなのに?!

「わすれ... も...」

39話・京都、剣士の苦悩（後書き）

戦闘描写中にA B見てボロ泣きました。

天使ちゃん見てて色素薄くても可愛いかいいう妄言が湧きました。

まああの可愛さの表現は文章じゃ無理ですが。

40話：夢、災厄の足音

随分エヴァ達は成長した。

タカミチと明日菜は教育学部、エヴァは歴史学科。

初め”大学であればどこでも良いのだろう！宗一郎、私は外国語科に行くぞー！”などと言いだしたエヴァを全力で張り倒して…。

最終的には哲学科と歴史学科で迷い、京都に行く内容を見て歴史学科にしたんだっけな…。

だが残念、その年から東北だったんだよな行先。

まあどっちも道楽的な学科なのが其処は良い。

そうやって揉めている間に明日菜とタカミチは教育学部に決めた。

明日菜は理数科系、タカミチは文系。

「で、エヴァはともかくお前達は将来何になるつもりだ？」

「なーぜ私がかもかくなのだー！」

「エヴァは道楽だろうが。大丈夫。現代の物も600年経てば遺跡だ。俺達には向いてる。百年戦争時代のデータを俺たち以上に持つてる奴なんざ誰も居ない。で、本題は今を生きる二人だ、いいな静かにしてなさい。」

いや本当にそうだ。まだ手紙とか美術品とか手元にあるぞ？

レーベンスシユルト城なんて最たるものだしな…表に出せないが。

「む…。」

「私はそのまま。教師にでもなろうかと思ってる。」

「僕は師匠みたいにNGOで活動したいです。」

「ほうほう教師か…いいんじゃないか？麻帆良から出なくて良いしな。」

「お前今、意図的に流したな。」

「よし、で、タカミチは？」

「え？NGOで活動を。」

「ふむふむ。……戯け…！」

「め…ぷっ…！」

「金の稼げる職にしろ。どういうわけかガトウから高校以降金が支払われていない。これは割と由々しき事態だ。で、現在帝国が払ってるわけだ。」

「はい。」

「俺と俺の家族が申請した金はあまり無茶な額でない限りは帝国が払ってくれる。そもそも裁定がテオだから俺が申請すれば10割通る。若干ヒモという単語が脳裏を掠めるが……しかしタカミチ、お前の名前は何だ？」

「高畑・T・タカミチ……あ。」

気が付いたか。ほら、昔断ったからお前だけ籍違うんだよ。

「柚木明日菜、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル・柚木、
柚木宗一郎。」

「つまり？」

「身内として扱っているが公的にはそうではない。でだ、仕方ないので帝国の戦争孤児用の奨学金を使ってる。50年無利子の返済必須のものだ。」

「返済必須?!」

タカミチの顔が驚愕に染まって行く。

「帝国の公務員的な立場やうちの騎士団に就職すると返済免除やら減額なんだが……普通金が無い子はアリアドネーへ行くんだが……。それはさて置き、ヘラス基準だから返済ペーは非常にゆっくりなんだ100年払いとかザラでな?」

「ええええ無理ですよ?!」

驚愕は青い顔に

「で、俺が払ってやれるかって言うのだな?エヴァと一緒に旅をしていた時代の金は孤児院建設やら運営やらその他諸々で消えたし、寮監時代の金もNGO設立・運営で消えたんだよ。」

「ふん、他人の為に使いすぎなんだよ宗一郎は。」

「まあここで教師とか兼任して色々すれば5年位で返済できるだろうさ。多分。」

「そんな…。」

「ふう……兼業すれば良いではないか。明日菜いい加減にオウガバトルを返せ、まだ攻略しとらんだぞ?!」

「今、ラスボスなんだから待ちなさいよ!」

「何だと?! 私より先に進むとは何様のつもりだっ!」

「こつち、微妙に終わってないからまだ騒がない! ネタバレは絞首刑な! とにかくタカミチは教師になれ。兼業でNGOに所属するなら認めてやらん事もない。」

「本当ですか?!」

「ああ。明日菜とエヴァと俺の攻撃に耐えられたらな。」

一瞬の沈黙。

「無茶ですよ?!?!?!」

「宗一郎、認めんのならそう言ってやるのが優しさだぞ。」

「宗兄、そついつのを無理難題つて言つんだと思つ。」

別荘。

「はい第一回タカミチ君卒業試験を始めますーどんどんぱふぱふ。」

「別名死刑執行とも言つな。」

「さよならタカミチ。楽しかった。」

仁王立ちの三人の前に正座で挑む少年^{イケニエ}。

「では一回戦。明日菜vsタカミチー。」

のそりとタカミチが立ち上がり、明日菜が威風堂々と前に出る。

「軽く揉んであげるわ。」

「お手柔らかにお願いします。」

明日菜は無手。エヴァと二人で調子に乗って色々と仕込んだのだが
…。

基本は咸卦法と蛇と合気術。

離れば居合い拳と魔法。

巧く良い所を吸い取つたらしく、いわゆるオールラウンダータイプ。

が、タカミチは居合い拳と咸卦法を習得するのに精一杯。

豪殺居合い拳も同時三発が限界。

蛇は相性が悪く駄目、合気術も覚えが悪い。

これでも魔法界では質が良い方だと言うから驚きだ。

評価クラスB+。明日菜は外に出してないから未評価。

俺は帝国所属なので評価対象外。エヴァも同じく対象外。

タカミチに言わせればSとかSS+らしいが正直どうでもいい。

ドンドンゴンドンンドンンドンゴンツ。

砂浜が穴だらけになっていく。

「明日菜遊び過ぎだぞ！」

「おい！そこは壊すな！！アツー！」

去年思い付きで作った砂のお城が大砲の様な威力で吹きとぶ。

意外とはしゃいで作ってたよなエヴァ……………不覚にも涙が出かけたのは秘密だ。

あーそっぴや潮干狩りの為に色々蒔いたのになー…………。

状況。

完璧に明日菜の優勢。

タカミチは魔法を逸らし、居合い拳を相殺しつつ全力で回避行動。

明日菜はそれら全てを弾幕にタカミチに接近。

弾幕を縫って前のめりで走るその様は正に蛇。

「フン…遊び過ぎだ。」

「俺と似たような戦略なんだが……遊びが多い事は事実だな。」
そんな会話をしていると……。

「あつ！」

タカミチが腕を取られ、

「えいつ。」

身体が完全に浮いて地面に叩きつけられる。

「ぐふう。」

「勝った！」

明日菜はこちらに向けてVサイン。

「馬鹿者…油断するな。」

「いや問題無い。」

後ろで静かにユラリと立ち上がったタカミチ。

明日菜のその油断しきった背中に豪殺居合い拳を……ドゴンッ。

決める事無く気絶した。

「宗兄勝ったよー。」

「明日菜、遊びが多い。やるなら一撃目で徹底的にだ。最後のは良かったぞ。」

「気絶してても打ち込む気だったわけか…。」

「当然でしょ。じゃあ次、エヴァちゃんゴォ。」

海水をぶっ掛けて起こされるタカミチ。

「はい二回戦エヴァvsタカミチー。」

「宗兄、投げやり過ぎ。」

「いや、ほら…優劣って話じゃないからな。」

エヴァは他人を庇うという行動をしなければ強い。それこそエヴァを五体満足に倒せる人間なら俺でもヤバい敵という事だ。

ドオオオオオオオオオオン。

「終わったな。」

ブン投げて退避行動できないタカミチに氷爆。正直えげつない。

「よし、次は俺だな。明日菜、治癒呪文掛けてやってくれ。」

「わかった。」

「では最終戦 宗一郎vs……全員だな。」

「なにっ?!」

「私はタカミチがNGOやりたいうって言うなら賛成。だから協力するよ。」

明日菜がタカミチの前に立つ。

「ククク…私は面白そうだからコチラに付く。」

エヴァはタカミチの後ろへ…。

「明日菜さん!マスター!」

「ふむ、ふむふむ……ロード:シルバー…」

「氷爆!」

ドオン!

氷の破片が襲いかかる様な爆発のさせ方…。しかし武装錬金は無音展開が出来る。特に戦闘時の闘争本能の昂りで…。

破片はシルバースキンの表面を撫でるだけで終わる。

「アデアット!」

左手にソードサムライX、右手に狂い桜、背中に黒翼。

真上に飛び上がる様に逃げるのと地面一帯が凍りつくのが同タイミング。

「「豪殺居合い拳！！！！」」

ズンッ！

重複し過ぎて単発が把握できない豪殺居合い拳の組み合わせ。それが片翼にだけ集中して当たる。

「くっ！」

流石にバランスを崩して落下。

着地と同時に足元の氷が全て蒸発。猛烈な蒸気が地面から噴き上がる。

「くううう。」

常人であれば、シルバースキンが無ければ一瞬で命を奪われるであろう”自然現象”。

当然、シルバースキンで覆われていない黒翼はカードに戻る。

「エクスキューションーソード！」

影を使つて真後ろに転移したかつ！

流石に断罪の剣をまともに喰らうと拙いッ。

ガシユンッ

ソードサムライXで受け止める、相転移させるエネルギーを飾り緒から逃す。

狂い桜を離し、エヴァの頭を掴むとそのまま蒸気の中に叩き込む。同時にソードサムライXが”核鉄”に戻る。

狂い桜を手に取りうと伸ばすも手は空を切る。

「宗兄ッ！貰った！」

目の隙間を的確に狙った突き、刀の特性状態俺は避けねばならなくなる。

左手で逸らしつつ、右手で手刀を打ち込む。

刀は弾かれるまま飛び、刀から手を離れた明日菜は手刀として出した右腕を取りそのまま背負い投げの要領で俺を投げ飛ばす。

視界が回転。

ズンッ

「かはっ。」

受け身を取ろうとするも直前に腹へ豪殺居合い拳が落ちる。結果、砂浜に強かに打ちつけられる。

「負けてたまるかあああああああ！」

明日菜の腕を掴み跳ね起きると同時に前へ引き倒し腕を脚だけで極める。

蒸気は晴れ、中からタカミチが飛び出してくる。

「アル・アレック・アルゲントウム」

「くっ……タカミチ！！詠唱！！！」

「契約に従え、炎の霸王、来れ浄化の炎、燃え盛る大剣、ほとばしれよソドムを焼きし火と硫黄！罪ありし者を死の塵に！！！」

瞬動及び如何なる移動術を使用してもタカミチには絶対回避出来ない距離。

「燃える天空。」

しかしタカミチは走る事を辞めない。

ドオオオオオオオオオオン。

「思わずやってしまったが……生きてるだろうか。」

「油断したな？」

首を肘で引っ掛けられて、後ろに足を下げて耐えようとするも明日菜が固定しているせいで……。

どつにもならん！

ドサツと転倒。首と腕をエヴァに、両足は明日菜に極められてもがくことしか出来ん。

「豪殺居合い拳！！」

ドンドンドンッ！

「ぐうううう。」

避けようの無い頭に二発、腹に一発。

更にタカミチが馬乗りになって胸に拳を押し当て…。

「頂いたグローブの威力なら……腕と引き換えなら……打ち破れるはずです。」

打ち破つても再生、切り札が無い状態なので詰み。なのだが……

「はぁ………あー。遂に負けたー…。」

「……はぁ。これで逃れたら殺す気でやらんと無理だからな。」

「は……初めて宗兄に勝った……。」

タカミチめ………気絶していやがる。

「実践ならば……掴まれた時点で終わるのだがな……。それでもよく

やったぞ明日菜、タカミチ！今は私達の勝ちだ！」

明日菜に合気術や柔術を教えたりするんじゃないかな……。
エヴァを成長させるべきじゃなかったな……昔なら両腕を極めるの
には身長が足りなかったのに……。

「どうやって燃える天空を乗りきったんだ……。」

「私が範囲外へ蹴り飛ばして、自身は転移。宗一郎を押さえこんだ
わけだ……ふふふ油断したな？」

「はあ……いい加減に離してくれ二人とも。」

「ククク…勝利報酬を奪うとしよう。……その唇、貰い受けるッ！
めきよ。」

一直線に俺の顔へ飛び込んだエヴァは明日菜の蹴りで止まる。

「甘い。宗兄に手は出させない……宗兄は私が貰う。」

「貴様……昔とは随分言う事が変わって来たのではないか？」

「エヴァだけ仮契約してる。ズルい。故に邪魔する。」

「くくく…随分言い訳に走るじゃないか…受けて立つぞ？」

ここに背中に”どこぞの世界の大きな口を広げた蝙蝠”を浮かべた
エヴァと”謎の某UMA”を浮かべた明日菜の戦いの火蓋は切って
落とされた。

戦いに巻き込まれ吹き飛ばされるタカミチを横目で見やりつつ、俺は一日が経つのを必死で待つのがだった。

「はあ……。エヴァも明日菜も断ったんだがなあ……。どうして俺の周りの女の子はこう…。人の話を聞かない子が多いのかね？」

英雄、色を好む。誰が言ったのかわらんが……。俺は憤ましかに過ごしたいものだ。

詠春、ナギ……。最近俺はお前達が羨ましいよ。

こちらは帝国でほったらかしになるから愛想を尽かされないか心配で心配で仕方が無いと言うのに。

Side ?

女と男が話す。

「第一目標とは相討ちか……。フェイト・アーウェルンクスもあつけない。所詮は人形だな。」

男勝りな女。

「それだけナギ・スプリングフィールドは厄介だったという事さ。」

少年の様な声と口調の男。

「取り逃しはどうする?」

「アリカ王女は身籠っている。ナギ・スプリングフィールドの子を。」

「へえ……そつちを最優先で殺すべきだな。ナギ・スプリングフィールドのポテンシャルに王家の血……非常によろしくない。」

「違う違う逆だよ逆。だからこそ”使える”……子供は純真でそして愚かだ。産んで貰わないと困る。」

「では次の目標は吸血鬼共の所でいいんだな?」

「違う違う。今の君たちじゃアレの相手は出来ないよ。だからまず七里…千里だっけ?とにかく裏切り者を見つけ出して殺してよ。」

「解った…だが必ず吸血鬼は狩らせる。」

「うんうん。ま、とにかく七何とかを見つけ出してね。足跡がプツツリと途絶えちゃってさ。」

「我々を何だと思っている?」

そう言い捨てて出て行く女の目には泥の様に煮えたぎった復讐の炎。

「どこまでも永久に追い掛け、追い詰め、そして必ず殺す。執念の獵犬、吸血鬼殺しの……ティンダロス。」

男の顔には張りついた様な笑みと作った様な畏怖の声音。

「しかし言う事を聞かない犬は狂犬ですよお嬢さん。」

そう言いつつ身体が崩れ元の魔族としての身体になる。

「さて…正真正銘最後の核鉄。模造品の模造品。力はほとんど無い形だけの物だがそれでいい。さあ生まれて来る子よ…：刻みつけよ。コレがお前の人生を狂わせるものだ。不死王よ…英雄の子に討たれて死ね！クハハハハハハハ！」

S i d e e n d

改変された運命はより苛烈に。

1993年。

この年の冷夏は日本に大打撃を与え、冬は暖冬が襲った。気象と自然は荒れに荒れる事となる。

…：まるでこれから起こる運命を暗示するかのごとく。

40話：夢、災厄の足音（後書き）

次回

41話：悪夢の再来

41話：悪夢の再来

1996年・冬 イギリス ウェールズの郊外
ドが付くほど田舎の村。

雪がシンシンと降り続く、恐ろしく静かな夜。

悪魔と亜人が村を焼き、村人を石に変えた。

「僕が、僕があんな事を願ったからだ……ひつ。」

少年の前に立ちふさがる悪魔。

「ネギ・スプリングフィールドだな？」

悪魔はニイと笑って懐から多角形の物を取り出す。

「よく見るガキ。」

少年の頭を掴み無理矢理見せつける。

「コレがお前の村を壊したものだ。」

ガシャンと多角形の金属は開き、ナイフに姿を変える。

「ネギ……！」

「ネカネお姉ちゃん!?」

「ほう……データには姉など居なかったはずなのだが……。まあ良
い姉は殺しておくか……。」

ネギを投げ捨てネカネに向き直る。

「ネギには手を出さないで下さい……。」

「面白い。自分の命よりも弟を取るか……素晴らしい。これが人間よ
なあ。」

ナイフは振り上げられ……。

「くそっ！遅かったか……！」

ガトウから連絡を受けてネギの息子のいる村へ向かってはいるが……。
正直麻帆良からイギリスまで転移し続けたのはキツかった……。

燃え盛る村、石化した住民が視界に入る。

悪魔と……角付き……。

風から漂うのは濃い血の臭い。

「あれは刃物かっ!？」

鋭く光る刃物と女性。

ネギ……せめてネギだけでも護らないと。

誰か、私はいいいから……誰かネギを守って!!

パキンッ。

「む？クカカカ……オリジナルが来たか。」

ゴクリと息を呑む。

ナイフは砕け、多角形の金属に戻るがソレも半ばまでヒビが入っている。

「当初の目的は果たしたし……運が良かったね女。」

「ネカネから離れんか悪魔!!」

「スタンさん!!」

「ネギは無事か?!」

「はい!」

「六芒星の星と五芒星の星よ、悪しき霊に封じこぶつ。」

「封魔の瓶ねえコレ嫌いなんだよ。大人しくこんなもん閉じ込められるか思ってたんの?」

スタンさんの、血が、血が…。

「白き雷！！」

ドオオン

「ぬううう、き、貴様は！！！」

「悪い…ちつとばっかし遅かったみてえだな…。」

な、ナギさん？

「何故生きている！？」

「うるせえ！黙ってる！！！」

悪魔の顔を持って…ゴキンッ

「悪い…本当に遅くなったスタン爺さん。」

「馬鹿もん…今更帰ってきおつて…。」

「ネカネちゃん…だよな？」

「え、ええ。」

「俺の息子…いるか？」

「ネギ！ネギ君?!」

悪魔に投げつけられたネギは頭から血を流していた。

「ネギ大丈夫?!」

「大丈夫だよネカネお姉ちゃん…。」

「よお、お前がネギか?」

「お父さん?」

「…らしい。ネギ、お前にコレをやるよ。俺のガキの時から使ってた杖だ。まあ形見の品だ。」

「…ナギさん?」

「ちよつと時間が無くてな…。大丈夫、もうすぐ最強が来る。」

矢が飛んで来てその全ては外れ無く悪魔や亜人を貫いていく。悪魔には急所に、亜人には手や足と言った致命傷にならない所を撃ち抜いていく。

「ほらな?ネカネちゃん…ネギを頼んだぜ?」

そう言つて駆けて行つてしまふナギさん。

ハッと気が付いてネギとスタンさんの治療を始める。
私にしか出来ない事をやらないと…。

「当たつたな…。」

「あつたりめえだ俺様が照準付けてやっただからなあ！」

このオートマトン見てると頭が痛くなるのだが……。信じられるか？コレが俺の別人格らしい。

「あれは……ナギ……か？」

「なんか雰囲気違うな！あれはヤバいぜ。」

「まあいい。悪魔は急所を亜人は足留めで撃つ！」

「あいよ！任せときな！」

もう村へ入るといふ所。

「ナギの気配が消えた？！アイツ何を考えている……エンゼル御前解除、ロード：キラーレイビーズ！」

オートマトンの軍用犬が解き放たれる。

笛に乗せる命令は只一つ。”悪魔を見つけ出し殺せ”

「生存者は貴方達だけか！？」

「ええ……恐らく。」

やはり……遅かった。

恐らくナギの息子だろう杖を握りしめて気絶している少年、女性、怪我をした老人。

「あ……あなた……帝国の……。」

「ああ。帝国の人間だよ……。」

「ど、どうして……連合は救援を送って……くれ……ぬ。」

ごふつと嗜血。傷は腹に穴……。普通なら助からない。だが死んでいないのであれば可能。

「シルバースキン解除、ロード：エンゼル御前。」

ハートアローを取り出し老人に突き刺す。

同時に俺の腹に大穴が空き、老人の傷が完全に癒える。

「かはっ……。」

「今のは?!」

「なんと……。お主、辞めるんじゃない！年老いたツワシが死ぬならまだしも……!」

「問題……無い。すぐに再生する。」

流石に時間は掛かるが傷は修復されていく。

「お主、吸血鬼か……。」

「いや、ただの真祖だよ。」

「帝国で、真祖で最強……まさか、不死王?!」

「はぁ……有名っていうのも困りものだな。」

よっこらせと老人が立ち上がり

「……動くな不死王!!!」

「スタンさん?!」

「手を挙げるべきかな?」

「スタンさん!どうして?!」

「ネカネよ……考えてもみよ。襲ってくるのは悪魔と亜人、連合より早い救援……答えは。」

「貴方はそれなりに優秀な魔法使いなんだろう……ならば亜人が意識を奪われている事には?」

「……………」

「言い訳のつもりではないが、その女性を助けたのは俺だ。」

「……………」

「最後だ。俺が本当にやるなら目撃者も生存者も出さない……。本当は解っているんだろう?事件の黒幕が誰か……って事は。」

「六芒星の星と五芒星の星よ、悪しき霊に封印を、封魔の瓶！」

「ニードルアロー！」

爺さんの封魔の瓶は俺の後ろにいた悪魔に。

俺のニードルアローは屋根の上にいる悪魔に。

「はっ……封印されるかと思っただぜ。」

「フツ……ワシは撃たれるかと思っただぞい？」

「案外ウチの猟犬も役にたたねえな……。」

笛を感高く鳴らすと二匹の犬が戻ってくる。
それらの頭を撫でつつ

「オールクリア。」

武装錬金が待機状態の腕輪に戻る。

場所を移してスタン老の家。

「やはり……か。」

「ええ……此度の襲撃の報せはガトウから受け取りましたから。」

「お主は朝までに亜人達を連れて引き上げてくれ。ワシは悪魔たちの襲撃だったと報告しよう。」

「恩に着る。」

「いいんじゃない……戦争の引き金になりそうな事は潰さねばならん。例え今は起ころんとしても……ネギがナギぐらいの年齢になれば……」

「英雄の子として祀り上げて最前線送り……だな。」

「うむ。」

「それでは失礼する。ナギの息子を頼む。」

「勿論じゃ。」

スタン老の家から出て、縛り上げた亜人達を引きずる様に運ぶ。

「あ、あの！」

「貴女は……ネカネさんだったかな？」

「はい！えっと……ありがとうございます！」

「どういたしまして。」

「あの……サイン頂けませんか?!」

何ともアグレッシブな子だが……。

「……すまない。ここに俺が来た痕跡を残したくは無いだ……その辺りの事情はスタン老から聞いてくれ。いつかここに来た時にサインする事を約束する……それで、いいかな?」

「はい!」

石化した村人の大半は治療しておいたが……。
死んでしまった人間もいるにはいる。

助かった数で考える限り……もう村を存続させる事は不可能だろう。そういう悲しみも押し殺して明るく振る舞っているのだろうか……。

はあ……全く。こういう事をするのは余り良くないのだが……。

「困った時は俺に頼りたまえ……大概是日本の麻帆良学園にいる。」

「……ッ!……ありがとうございます。」

此度の戦い……。

久々の敗戦だな。

ヴェラシオに連絡を付けて秘密裏に操られた亜人達を回収させる。

俺はこの時、気が付かなかった。

この件にも完全なる世界が関わっていた事を。
模造核鉄が存在していた事を。

安静にしている筈のネギ・スプリングフィールドが俺を見ていた事を…。

41話：悪夢の再来（後書き）

ちよつとグダグダしてしまつた感があります。
書き直すかもしれませんorz

次回

42話：ぬらりひよんの思惑

現代麻帆良編突入。

42話：ぬらりひよんの思惑

S i d e 学園長

ふおっふおっふおっ……。数年後に中学生になる予定の子達は実に優秀な者が多い。

全て集めれば一クラス分に匹敵するじゃろう。

婿殿の所から来る木乃香と桜咲刹那。

明石君の所の娘にその他諸々。

更には明日菜君やタカミチ君が教師になるという……。

実に、実に理想的な環境じゃ。

麻帆良のゲートの事も話してしまつて本格的に帝国と繋がつてしまつのも有りじゃな……。

いやいや……政治に関わつてはならん。

ココを戦場にするわけにはいかん。

柚木君を生徒達と仮契約する様に仕向ける？

彼は女性、特に身内には非常に甘い。

それに恐らく好みもソチラであろう。

……教育者として見逃してもよいのじゃろうか？

ま、まあ……吸血鬼で真祖なのじゃ……年齢など些末な事ぞ。多分。

ムムム……。

しかし本当にソチラが好みなのじゃろうか？

寮監時代は浮ついた話も無かったのう……問題などついぞ聞く事が無かった。

しかし女生徒からの評判は確実に良いものにする。

顔も良い、表向きは実に紳士……しかし身内に見せるのは皮肉っぽい様な荒っぽい様な……。

所謂、ギャップ。

真面目で勤勉、そして大人の余裕らしきもの。

まるでワシの若い頃のようにじゃな……！！！！！！！！！！

ゴホン。

しかし何の問題も無いというのは……その、困るのじゃ。

………いっそ、担任に据えてしまうか？！

「というわけでどうかね柚木君。教師をやってみると言つのは。」

「何がというわけでだ！戯け！」

「そこまで言わんでも……。」

「そんなおふざけしてる暇があったら明日菜やタカミチを採用してやってください。教師になる為の教育を受けているんですから。」

「……だからじゃ。彼らの補佐にじゃな……。」

「補佐ならば新田先生にお願いすればいいでしょう。俺が出会った中でも最高峰の素晴らしい教育者だ。」

だ…駄目じゃ！説き伏せられてしもつておる！！否定できんぞい？！

「職に就かせたいなら……そうですね。居なくなっても問題の無い広域指導員なら引き受けますよ?」

そ・れ・じゃ！ワシの脳裏に名案が閃いた！！！！

「広域指導員は風紀を担当する教員がやるのじゃよ。」

「ぬっ?!ほぼボランティアの外部協力者的な立場であつたはずだが?」

知つておつたか……。当然じゃな何年もココにおるのだ…。

「一応、教員の立場でなければいかんのじゃよ。」

もちろん嘘じゃ。嘘八百じゃ。

この時ばかり乗りきつて引き受けさせればワシの勝ちよ。

「そ、それでは寮監を…。」

「今寮監は足りておるのじゃよ。それにずっといて貰わなければならん。」

同じく嘘じゃ。

あと二年で定年なのじゃが、”今は”いるのじゃ。完全な嘘では無いわい。

「よもや教師を引き受けぬ限り諦めない気では……無いだろうな？」

「うぐっ！」

思わず呻いてしまった。

「はぁ……失礼します。適当に店でも開こうかなと思っているので。」

困る困る困る困る困る困る困る困る困る困る……。

「せめて広域指導員は引き受けてくれい……！」

「教員にならなければ駄目なのでは？」

「……嘘じゃ……！」

「あ……夜道は気を付けるよ？老人が転んで首をへし折る事故が起こるかもしれん。」

「頼む！どうか！この通りじゃ！」

机に頭をこすりつけて願う。

「はぁ……わかりました。引き受けましょう。」

ボタンと扉が閉じられる。

な、何とか納めたのじゃ。

生徒が粗暴な若者によって危険の無い被害を受ける。

そこへ柚木君登場。

華麗に追い返して、助けられた生徒は胸キュン。

あれ？ワシ天才じゃないかのう？！

実に穴しか無い発想だった。

Side end

「ただいま！。酷い目に会った。」

「おかえり宗一郎。」

笑顔のエヴァの出迎え……………おかしい。おかしいぞ？！この状況は
おかしい！！！！

左手に掴んだ手紙を振りつつ笑顔で迫ってくるエヴァ。

「なあ宗一郎。」

「な、なんだいエヴァ？」

拙い……よくわからんが拙い。明日菜もタカミチも居ない。チャチヤゼロも居ない！

「これは、なんだ？」

「手紙だね。」

「ネカネ……ふむ……何処の女だ？」

「ああネカネちゃんか。」

「ほう……。」

気温が10度下がった。背中を流れる汗が止まらない。

「テオドラ皇女……まあ認めよう仕方が無い気に入らんが婚約してしまつたのだ義理堅いお前は今更取り止め等しないだろう。ルーシー……近衛騎士だ認めよう仕事中心だ。帝国経由のファンクラブからの手紙……まあいい。それだけ宗一郎の人気があると言う事だ。私も鼻が高い。騎士団員からの手紙……仕方が無い。NGOで助けた子供からの手紙……良い事だ。だが、だがこの手紙はなんだ？」

「え？いや……その。」

「何時からイギリスのウェールズは深刻な紛争地域になった？騎士団の連絡がハートの便箋なわけがないよなあ？一体これはなんだ？ん？答えてみる。」

「ほら……ガトウからの連絡を受けて行ったらどう？それで助けた人の一人だよ。」

「ふむふむ……では何故ハートの便箋なのかを問おう。」

「知らない。可愛らしい物が好きなんじゃないかな？！明日菜の友達もこんな感じじゃないか。」

「ではココで開封しても何の問題も無いよな？」

「え？」

「なっ？」

エヴァの爪が肩に食い込む。

「ああ……。いいと思うよ。個人的にはプライバシーとか……何でも無い。」

開封されて中身が取り出される。

最近主流になりつつある映像の出る便箋。

「お、お久しぶりです柚木さん。ネカネです。今、ウェールズのメルディアナ魔法学校に住んでいます。と、特に重要な要件があるわけではないのですが……。ぶ、ぶ、文通などをしたいと思いいコレを

送りつけてしまいました。ご迷惑かもしれませんが……そのネギや皆さんの近況報告も兼ねて……えっとその……お願いします！またお暇があれば……ウエールズにいらしてください！精一杯おもてなしします！ネカネお姉ちゃん？ネギ？！あわわわ失礼します！お返事下さいお願いします！」

「……………」

痛い沈黙。

「ほほう……宗一郎。まさか仮契約などしておらんだろっな？」

「滅相も無い！仮契約はエヴァとテオとしかしてない。」

「……貴様はな、人からの好意を得やすいんだ。それを意識してやったり、無意識にやったりとするから性質が悪い。」

「手出していないから！数時間しか居なかったから！ネギの姉だぞ？ナギの娘だろ？手出すわけ無いだろ！」

「……それもそうか。では……返事を書く必要も無いな。」

ポツと火が付き手紙が燃え始める。

「あー……その、何かあったら頼ってくれーぐらいは言ったかもしれん。」

ギョロツとエヴァの視線が飛んでくる。

「明日菜と仮契約する、桜咲刹那や近衛木乃香ならまだわかる。」

「へーわかるんだ。」

「何っ?!」

「エヴァちゃん今口を滑らせたね。」

「明日菜?!お前まだ帰って無かったんじゃ...。」

「宗兄。何言ってるの?面白い事になってるから邪魔しない様に二階の窓からこっそり入ったに決まってるじゃない。」

「さっきのは無しだ!忘れる!!!」

「宗兄!?戦力増強を図るべきだと思うのよ。エヴァちゃんのカードから出てるのは魔法球前に置いてあるだけでしょ?やっぱり武器とかだと急な時に契約するよりは今、しておくべきだと思うわ。」

チヨークを取り出し床に契約の魔法陣をスラスラと書いていく明日菜。

あー...駄目だ。不可能だ。不可避です。

「エヴァ、宝石あったかな?!」

「む!...あるぞ!直ぐに取ってくる!いいか明日菜!安易な方法を取るなよ?!」

とう!とばかりに自室に駆け込むエヴァ。

部屋の中を引つ繰り返す音が断続的に聞こえる。

「あつ…宗兄怪我しちゃった絆創膏取つて。」

「解つた。」

救急箱から絆創膏を取り出し明日菜に近付き…。

絶妙なタイミングでニヤツと笑う明日菜。

「しまつ…。」

腕を引つ張られるだけで膝立ちになってしまつ。

顔をガシツと両腕で押さえられる。

確かに突き飛ばせば拒否できるが……。結局のところ、その後で寶石で仮契約するのだ。

それは気まずい…。

そんな事をゴニョゴニョと考えてるうちに…。

ちゅっ。

パツと契約陣が光り。

「なあああああ!!!!」

という寶石を握りしめたエヴァの叫びが聞こえた。

トリプルアイスクリームオンサービスを頭に作られ、正座。

「アデアット……！」

明日菜のアーティファクトは……。

「ま……さか。」

エヴァの呆然とした眩き

「馬鹿な……。」

俺は驚愕の余り立ち上がってしまったている。

シルバースキン……そのアナザータイプを着た明日菜が目の前に立っていた。

「これ宗兄のシルバースキン？」

「違つと……願いたい。」

これがあるなら他のヤバい奴まであるって事じゃないのか？！

「明日菜。ちょっと殴るから受けてみる。」

「わかった。」

アーティファクトの欠点。本型以外や精霊付き以外はろくな説明も無いって事だ。

ゴッ。

「くっ……。」

ズザザッと滑る明日菜。

「宗兄、我慢できないほどじゃないけど痛いわ……。」

内心ホッと息を吐く。

職人の誰かが真似たか……。特許料請求するかな……。

真面目な話、核鉄の武装の中にはヤバい奴がゴロゴロしてる。

ブレイズオブグロリー、ギガントマーチ、ジェノサイドサーカス、バスターバロン。

どれもが隠蔽なんぞ糞喰らえの広範囲破壊型。

バスターバロンなんぞ出た日には大怪獣決戦も真っ青だ。

「あつ……内ポケットに何か紙が入ってる。」

「読んでみる。」

「えーと……この度はご契約おめでとうございます。帝国の装備職人見習いトサカ謹製、偽銀騎士のコートです。耐弾耐刃耐火耐寒耐魔に優れたコートです。戦いの歌が自動で掛かり身体能力を向上させてくれます！時間と共に能力を更新していききたいと思います……だつてさ。」

「トサカ……あー……うちの騎士団の装備発注した工房にいたな……オスティア難民だったはずだが……。」

「つまり…なんだ？見習い職人が作った模造品の出来そこないと。」

「そこまで言うなよエヴァ…。」

「なあ宗一郎。余り言いたくは無いが…宗一郎が契約主だとロクなものが出てこんな…。」

「うぐつ。」

「そんな！エヴァ謝りなさいよ！宗兄は悪く無いわ！…！ちょっとへボいだけじゃない！」

バタンツ

俺はいたたまれず家から飛び出した。

考えてみればそうである。

俺が従者側だと色は銀になる。

高値で取引されるものらしい。

が、俺が主人として契約するとどうだろう。

エヴァは物見の水晶。正直微妙だ。今では魔法球の中から外を確認する時にしか使わない。

明日菜は騎士団の純正品より劣るコート。

正直、テオと契約する時従者のみにして良かった…これでまた…はあ。

泣いても…いいかな？

海岸。

いつもなら釣り人で賑わう筈のそこは一人の男によって占領されていた。

物悲しい暗く沈んだ背中に声を掛けられるものはいない。

「飛び出したものの……大の大人のする事では無いな。どうやって帰る？冗談めかして返すべきだった。気まずいではないか……皆が契約カードに触れない様にして、でも軽く沈んでいる所にタカミチがまた火を付ける。きつとそうなる予感がある。はあ。」

ふと気が付くと隣にちよこんと座る子が居た。

小学生くらいだろうか？

「……………」

まあいいか。声をかけるのもアレだしな。

「おっさんも良くここに来るのか？」

「おっ…………いや、今日が初めてかな。」

おっさんという呼び方に物悲しさを覚えるがまあ今なら見えるだろうな……。

「そっか……………」

女の子とは思えない話し方。

「…………君は？」

「たまに。」

「そうか……。」

お互いの顔も見ずに海だけを眺めて会話する。

「何かあったのかい？」

「そういうあんたこそ。」

「うんまあ俺は色々とな……まあしょうもない行動でこの後どうしようかなんて考えてるだけだ。でも君はたまに来るんだろう？おじさんに話してみるかい？」

「まあ……いいけどよ。あんたまでもそうだし。」

「まるで周りが異常って言いたげだな。」

中学生特有の……なんていったかな？厨二病？小学生だからもつとメルヘンか？

「厨二病でもメルヘンでもねえよ……信じられるか？人が飛んでたんだ。」

「へえ……そいつは不思議だ。」

「それによ、言っちゃあれなんだけど……魔法？みたいなのを使ってる奴とかいてさ。」

「周りに言っても誰も信じてくれない？」

「ああ。見た奴でさえ別に何も不思議な事は起こらなかつたって言うんだぜ？」

学校全体に作用している不自然な事に対する認識阻害結果か……。体質か何かで作用しないのか……。人間不信になるぞ？

「はあ……。」

「なんだよ？あんたも笑うのか？！」

「いや、俺の気のせいじゃ無かつたんだってな。」

「あんたも不自然に思うのか？！」

「ああ。でもなそう言う事を口に出せないのが大人って奴でな。」

いるんだよなこういう子。寮監時代も一人、二人はいた。

「というか…なんだ？疲れて見える幻覚か何かと思ひ込む事にしてた。」

「良かった……。」

「でも魔法か……。うん言い得て妙だけどあるのかもしれないな。」

「で、でもよ魔法なんて…。」

「あるわけない。でもそうとしか言えない事が起こった。だから、

もしかしたらあるのかもしれない。」

「……………」

「そう考えるだけで幾分か楽になる。大きい悩みは置いたり吹っ切れるもんじゃない。胸に抱えて、背中に背負って進むもんだ。」

「……………ありがとうよ。」

立ち上がって背を向ける少女。

「…千雨。」

「宗一郎。」

千雨…か。学園長に報告しておこつて認識阻害で苦しんでる子がいるってな。

「さて…恰好良いセリフを吐いておいてウジウジ悩みっぱなしっていうのもアレだな。」

夕日を背に受けて歩く。

「ふむ……………ネギと玉ねぎ、ニラ、にんにくは確定。さて明日菜の嫌いなものはなんだったかな……………。ついでだタカミチの嫌いな物も買って帰ろつ。」

42話：ぬらりひよんの思惑（後書き）

はい。千雨ちゃん登場です。最も不憫な子です。でも残念。ヒロインには成り得ない。

遂に明日菜と仮契約しました。当初の予定に無かった為、微妙なアーティファクトです。ついでとばかりに彼も登場しました。

ネカネはこれでも秘密のつもりなんだ！

次回

43話：閑話 新たな弟子。いいか？俺はロリコンじゃない。

ちよつと時間推移の都合で出てきていない彼女達と遂にロリコン論争が勃発する二本立て。

43話・閑話 新たな弟子。いいか？俺はロリコンじゃない。(前書き)

少し時は戻って刹那・木乃香麻帆良の小学校へ転入学時点

43話：閑話 新たな弟子。いいか？俺はロリコンじゃない。

Side 刹那

「ほえー大きいなー……。」

「ここまで大きな学園とは……。」

ここにあの人がおる……。ウチは……。あの人に教わるなんて出来るわけない。

「ここにウチらの先生がいるんやんな？……せつちゃん？」

「え……ああ申し訳ありませんお嬢様。」

「せやからお嬢様なんて言わんでええて……。」

「ごめん……このちゃん。」

重い足取りで着いたのは一軒のログハウス。

このちゃんがドアノックハンドルでゴンゴンゴンと絶望の音を響かせる。

「こんにちわ……。えっと……？」

出てきたのは男の人。

あの人の子供だろうか？

「近衛木乃香です。関西呪術協会から参りま”ひ”た！」

「さ、桜咲刹那です。神鳴流から参りました！」

「ああ詠春さんの！師匠！。詠春さんの所から来られましたよー。」

「……タカミチしばし待て！……受けてみよエヴァ……！我が必殺の……。」

「まつ待て、しばし待て！やめっ……。」

「ヘルファイアー。」

二連鎖ー三連鎖ー四連鎖ー五連鎖ー六連鎖 七連鎖 八連鎖 全消し！

ズズン。

「ぬおー！？」

「ふふふ……初代ぶよで俺を負かせると思つなよエヴァ……。」

「師匠ーマスター！？」

「ああすまんタカミチ。なんだ？」

……大丈夫だろうか？

Side end

魔法球内。

「はじめまして……でいいかな木乃香ちゃん。そして久しぶり桜咲
剎那。」

「はじめましてーよろしくえー。」

「宗一郎。私はどちらを担当すればいいんだ？」

「木乃香ちゃんを見てくれ。魔法と技術、戦闘方法を仕込んでくれ。」

「解った。近衛木乃香、こちらへ来い。」

「わかったえ。」

「さて……剣術、格闘は俺が教える。」

「…はい。」

夕風だったか？大太刀……。

「それでいいのか？取り回しが悪いし対人に向かないが。」

「大丈夫です。」

以前は、ちよつとやり過ぎたかな…？

「そんなに力む事は無い気軽に戦り合おうじゃないか。」

ズルリと引き抜かれる大太刀。鞘がカラんと捨てられる。

「……いきます。」

「アデアット。」

スルツと抜き放ち左手に鞘、右手に刀を構える。

「柚木さんは神鳴流なんでしょうか？」

「いや、柚木流だな。」

「……我流ですか？」

「いいや……平安から始まり、平成で誰にも伝えられる事無く絶えた剣だよ。」

「そうですか…。」

「安心したまえ君達のような奇妙奇天烈な剣術では無い。」

正直、気で電流を纏わせて放つなんて事を見よう見まねで良く出来るものだ……。

俺自身原理はまるで解ってない。

殺気がふつりと出始める。

この年齢にして、この濃度……素材は良い。

「その割には神鳴流の剣術も使うのですね？」

「ああ……何度も撃つてくれるから覚えてしまっただけ……？」

その言葉と共に最高潮に高まる殺気。

駆けつつ翼を出して斬り掛かってくる刹那。

それをフランッと流れる様に避ける。

「ほう……翼を始めから出すか。いい心掛けだ。」

「貴方に感謝している事は只一つ、コレを穢れだと思わなくていい。お嬢様も……このちゃんも受け入れてくれた。」

「それは良かった。掟とやらはいいのかね？」

「私は元々追放されているんです……掟など関係無い。」

その言葉とともに斬り掛かる刹那をいなす。

「真面目にやって頂けませんか？」

「至って真面目さ。ただ……神鳴流はパターンがあって潰しやすい。それだけだ。」

「くっ斬岩剣！」

峰で太刀の腹を叩いて威力を殺して受け止め、鞘の突きで首を狙うが、刹那は後ろへ跳躍して逃げつつ

「斬空閃！」

それをユラリとかわす。

「柚木流は…鞘を使う剣術ですか。」

「さあね。」

「それで詠春様を？」

「いや…アレには全力を出しただけだ。」

「全力でやって頂かないと修行になりませんか？」

「今のお前じゃ見る事すら叶わん。」

そう言つて刀を鞘に納める。

途端に破裂する様な殺気と共に刹那が走る。

キンッ

「え？」

「世界最速の抜刀だ。実戦ならば胴が真っ二つだったな。」

夕風が刹那の手から離れ地面に突き立つ。

俺は既に刹那の後ろにいる。

「真祖の身体機能、真祖の感覚機能、そして剣術。それら三つの集大成……まあ柚木流では無い。邪道の剣だ。もっとも柚木も邪道だがね？」

「そんなことより！貴方には殺気が無い！」

「ん？ああ……殺気など必要なのか桜咲刹那？」

「は？」

「君はな…戦闘、勝負、斬り合いに絶対に勝たねばならないという気負いがありすぎる。こんな事を言っっては不謹慎かもしれんが、勝負とは楽しむ為にあるんだ。殺す為では無く。」

「私の剣に遊びは不要です。」

「遊び？楽しみと遊びは違うぞ刹那…。」

「楽しんでいては護る事が出来ない。貴方とは根本が違う！」

「それでも……殺気ぐらいは絶って見せる桜咲刹那。」

「刹那で結構です。」

斬り合いを交えての語り。

「殺気が出てる今じゃ、どうあがいても俺には当てられん。」

「くっ。」

刹那の剣先に気が集中する。

「雷鳴剣！」

同奥義の業。それを読んでいたか、いなかったのかの差。

当然刹那が弾き飛ばされる。

「雷鳴剣は剣先に、雷光剣は剣全体に気を使って電気エネルギーを帯電させる。当然手は読める。」

「うっっ。」

よろめきつつ立ち上がる刹那。

「それならばまだ槍を使った方が読めない。刹那、相手の魔力を見る、気の流れを読め。今から放つものをかわしてみせるッ…百烈桜華斬！！！」

ズザザと滑って刹那は……無傷とは言い難い惨状。

服はスタスタに裂けて、さらに達した剣筋もある。

「斬ってはいない。全て峰打ちだ。」

まあ峰でも斬れるのだが…。

「烏族の血があるならもう少し武芸に秀でていると思ったが……。」

「…まだ、負けてません。」

「いいな、いいじゃないか。実に良い。気でも魔力でも何でもつぎ込め。全力だ…！」

「どうだエヴァ？木乃香ちゃんは。」

「ふむ。まあまあだな余り戦闘向きでは無いがな。」

「とうとう？」

「治療魔法を教えた方がいいな。攻性の呪文には適性が無い……まあタカミチよりはマシだが。」

「アレはウチの中の最低ラインだろう。」

「も、もう少しオブラートに包んで欲しいなあーって！」

「諦めた方がいいわよ……事実だし。」

「こ、これでもメガ口評価じゃA+ですよー?!」

「魔法が使えないからマギステルマギには成れないけどね。」

「成らなくていいですよ……多分認定されたら叩き出されますし……僕も使い勝手のいい人形は勘弁願いたいですよ。」

「フン……まだメガ口内じゃ吸血鬼は討伐対象だろう？」

「……ええ、表向きは帝国との講和で従っていますが……。」

「流石はMMと言った所かね？なあタカミチ。」

「なんですか？」

「マギステル・マギ指定されたら俺を殺しにこいよ。」

「は？」

「何を言っている……。」

お前は何を言っているという顔で睨むエヴァ。

「いやな……死んだふりしてタカミチは名を上げる。俺は永久に隠遁出来るなあと。」

「ふむ、で？」

ここ最近エヴァが冷たい。初めて会った頃が懐かしい。

「この世界の小さな島で俺とテオとエヴァと明日菜で暮らそうかなあじ。」

「アホか宗一郎。お前が偽装でも死んだら魔法世界はまた戦争だぞ

「？」

「やっぱりそうなるか……。」

「宗兄の死んだ後？どう考えてもまともな状況じゃ無くなるわね……背筋がゾットするわ。」

「そう………か。」

今更ながら、いや解ってはいたが……。

守る物が多いのは……辛い。

エヴァはともかく……それ以外は不老でも不死身でも無い。

容易く死ぬ。

首を軽く捻れば、たくさんの血を流せば、重要な器官が潰れれば……”たかだかその程度”で死んでしまう。

「ところで宗一郎。」

「……なんだ？」

「以前から聞きたかったのだが………。」

「エヴァらしくもないズバツと言え。」

「宗一郎……お前の好みはなんだ？」

「」「？」「」

明日菜は解った様な顔でニヤニヤし始めてタカミチと俺だけが意味も解らず首を傾げる。

「だから……なんだ…その、女の好みだ。」

「特に無いが…強いて言えば……。」

明日菜とエヴァが若干前のめりになっている。

なんだ、変な汗が…。

口の中が乾く…。

鼓動が早くなる。

「や、大和撫子？」

「「???」」

「師匠…宗一郎さん？多分通じません……マスターも明日菜さんも外国人です！」

「あ……清楚で凜とし慎ましやかな……言ってしまうば……じゃじゃ馬でない？」

「ふむ、ふむふむふむ。年齢的にはどうなのだ？」

エヴァの顔に青筋が見えるのだが……気のせいだよな？

誰も傷つけぬ言葉を選んで……。

「門戸は広く、上は600歳から下は……常識の範囲内で。」

「わ、私をババアとでも言いたいようだな？」

「ちっ違う！違うぞエヴァ！」

頭を回転させる俺！

「ハッ…些細な事を気にしないのが大和撫子っぽいな。」

わざとらしく横を向いて言ってみる。

「む……。こほんっ…容姿は気にしないのか？」

致命的な事は回避出来た。タカミチがソロリソロリと逃げようとするので床に縫い付ける。

いやはや…エヴァの使う糸も中々に役に立つ。

昔はよくこれで激昂したエヴァに首を絞められたものだ。

「そりやまあ美目麗しい方がいいに決まっているし？可愛らしい方が好きだな。」

「エヴァ、宗兄。茶番は辞めましょう。」

「明日菜？」「明日菜?!」

「エヴァちゃんが聞きたいのはたった一つ。宗兄がロリコンかそうでないかでしょ?!」

ズギャン!!

余りの衝撃発言に家が色々な意味で凍る。

最悪の緊迫感にタカミチが泡を噴いて気絶する。

正直戦場の最前線でもこんな圧力は感じないだろう。

「仕方あるまい……さあ答える宗一郎！」

「ろ、……ロリコンでは無い！」

「それにしても周りに小さい子が多かったわよね。今も新しい子を迎えたし？」

「大きくなったからと言って捨てたわけじゃないだろう?!」

「しかしテオドラ皇女といい、私、明日菜、近衛木乃香に桜咲刹那、ああ難民の少女たちに孤児までか？騎士団の方も美少女が多いなあ。ん？どうだ申し開きはあるか？」

「エヴァは成長したからって追いだしたか?!」

「だが逆に言えば550年以上放置したわけだな？」

「ぬぐつ……。」

しまった…裏目に出るとはッ！

「ロリコンというのは……その小さい子しか愛せないのだろう？それでは俺には当てはまらない。成長したテオも愛してるぞ？」

二対のジト目が痛い。

「テオ（・・・）だけか。ふむ、ふむふむふむふむ。」

この時、ココに至って大きな失態を犯した事に気が付いた。

「え……エヴァも好きだよ？」

今できる精一杯の笑顔を籠めて伝える。

「ではすぐに結婚しろ。ハハハ見た目も問題無いじゃないか。なあ明日菜？」

「ええ兄であり父の結婚式とは嬉しいわねえ？」

二つ目の地雷を踏んだ。

エヴァが笑っているのに怖い。

明日菜の目が冷たい。

「ああここに至って理解したよ宗一郎。貴様はロリコンでもなんでもなく只の女誑しだったのだな。」

「流石に私もフォロー出来ないわ。王族ですら引っ掛ける女誑し……。いつか背中からズブツとやられるわよ？」

「ちがつ…そういう意味の好きではない……！」

「ほう弁解があるなら言ってみる。」

エヴァの手にエクスキューションソードが見える。

「なんというか…エヴァは娘みたいなもので、言い換えれば愛娘と
いうか…な？過ぎた来た年月で言えば頼れる相棒と言うか…：う
ん。永遠に生きるだろう俺には欠かすことのできないのがエヴァな
んだ。」

「む…そう、か…そうかそうか相棒か愛娘か…欠かすことが出来な
いか…ふふふふふふ。」

「くっエヴァちゃんが懐柔された！…：今の聞いてるとプロポーズ
みたいじゃない？でしょタカミ…：役立たず。」

「明日菜は妹だな。うん。俺には妹が居なかったからな…：すんなり
とそこに収まってしまふ。」

「くう…他の子はどうなるのよ？」

「魔法世界の難民や孤児を助けるのは俺の責任だ。教育も嘘偽りな
く教えてる…：きつと俺が仇の子もいるだろう。それでも俺が奪っ
たのは事実だ…：贖罪も含めてるのかもしれないな。」

「ネカネさんは？」

「彼女は…ナギの血縁だろう？俺が居なければナギが英雄だったん
だろうさ…：でもな、真祖に負けた魔法使いとしてのレットルは貼
られた筈だ。反吸血鬼派の人間もナギ達の事まで恨んでる連中が居
る。連中が負けたせいで吸血鬼なんぞを受け入れなくてはならなく
なっただとな？」

「倒した連中までフオローしたいわけ？」

「紅き翼は敵であって敵では無い感じだな。戦争中は殺し合ったけども…個人個人は…アルとラカンはともかく他は嫌いではなかったからな。」

アルは言うまでも無く。ラカンは……テオが気にするから余計に嫌いだ。

「はあ……宗兄はタカミチより複雑な事言ってるよ？」

エヴァはトリップしたまま帰って来ないな……。タカミチは……昇天してるな。

俺初めて見たぜ。

立ったまま口から泡吹いて白目で気絶してる奴。

普段ならエヴァと俺で爆笑する様な光景だ。

「…解ってるぞ。」

「身内が一番って言う割に身内も増えてきたし。」

ああ正直自分でも頭が痛い。

ドンドン戦う理由が増えて行きやがる。

この世界に来る前が本当に懐かしい。あの時は楽だったもんだ…一人しか…いや、自分しか守れて無かったんだからな。

「修羅場だけは回避したいもんだな…。」

「そう。」

「ああ…。」

「宗兄はロリコン？」

「ああ…ああっ?!」

「はい発言頂きましたー。」

くるくるとウォークマンを回す明日菜。

「今のはズルいぞ!？」

「宗兄の教え、戦わなければならない時に一番重要なことは、常に頭に置いておくべきことは “不意打ちをする” こと。より卑怯な方法ほど、より確実な方法でしょ?」

「家庭にソレを持ち込むなあー!」

夜の森に俺の絶叫が響いた。

43話・閑話 新たな弟子。いいか？俺はロリコンじゃない。(後書き)

この内容で3日〜4日…。若干スランプ気味かつ忙しい。

更新頑張ります。

44話：獵犬は放たれた（前書き）

129万アクセス、ユニーク13万到達しました。

処女作でこんな読んで頂けるとは感謝してもしきれません。

dai様、ゴンゴロ様、モルボル様、赤星様、吹風様、星海の来訪者様。

いつも感想ありがとうございます。

大変励みになっております。

44話：獵犬は放たれた

Side ?

男女が大型のテント内で話す。
外には大勢の人間。

「ハツ彼は結局失敗かね？成功かね？わからんな。」

「そういう俺達は裏切り者の搜索に失敗したでしょう？」

「別にいいじゃないか。イスタンブールに渡った事自体が偽装だ。
顔も名前もイマイチわからん…こうなつてはもう見つからんよ。」

「良く言う。探す気が無いだけでしょ。」

「そうとも言えるね…究極、私達は吸血鬼以外に興味が無い。」

「15年。長過ぎた。」

「ああ…志半ばで死んだ同志も多い。」

「今回が我々の…。」

「最後の戦いだ。お前は首魁柚木宗一郎の首を…私は父と夫の仇、
エヴァンジェリンを。」

女が立ち上がりテントの外に出る。

満天の星空の下、寒風吹きすさぶ荒野。野営には最悪の場所。

「諸君：ようやくだ。ようやく立てる時が来た。……作戦への参加は個人の意志を尊重したい。最大標的は不死王、柚木宗一郎。更に闇の福音エヴァンジェリンを同時に相手にすることになる！」

ざわめく者達。武器を握りしめる者達。

「連合、完全なる世界どちらからも支援を受ける事は出来ない。本
作戦は帰還を考えない。これをティンダロス最後の作戦とする！半
刻後、参加するものはココに整列しろ！以上だ！」

服を翻しテントに戻る。

「なあ左京。」

「なんです？」

「何人来るかな？」

「来ますよ驚くほど。それだけ俺達の恨みは深い。」

男の笑みは凄絶で、女は息をのむ。

半刻後。

「ヒュウ……最高だな。」

「言ったでしょう?」

居並ぶ兵士たちは老若男女。

ギラついた目つき、各々手には様々な杖に兵器。

「諸君。感謝する……此度の作戦実行場所は日本、麻帆良学園!」
ざわめきが大きくなる。

「しかし我々はいつもと変わらない。一般人に被害は出さない……
それが大都市であろうと!」

「「「おう!」」」

「標的は二名。不死王と闇の福音! 邪魔をする魔法使いは始末しろ
!」

一歩男が踏み出す。

「各自、魔法や己が武器の調整を怠るな。敵は最大級だ!」

「「これより作戦を説明する!」」

二人の声が共に発される。

S i d e e n d

学園長の呼び出しを受け暗澹たる思いで学園長室を目指す。

また教師をゴリ押しする気だな…全く。

扉をノック。

「失礼する。」

「良く来てくれたのう柚木君。」

「なにかね？教師云々の話なら即刻帰らせてもらうが？」

「……う、む。今日はそうではないのじゃ……。」

「ではなにかね？」

違和感を感じる。言っではアレだがやり放題言いたい放題の学園長にしては様子がおかしい。

「柚木君。…全力でエヴァと逃げてくれんかな？」

「なにかから逃げると？」

「遂に連中が来よる……。」

「また天船の様な輩か？」

「いや…違うのじゃ。もっと性質が悪い連中じゃよ。……吸血鬼狩りのティンダロスじゃ…。」

ティンダロスの猟犬。

一般ではクトウルフ神話の架空の生物。

しかし裏では違う意味になる。

元連合の正規部隊……いや部署セクションがあった。

吸血鬼に賞金首をかけつつ自分たちも追う対吸血鬼専門部署。

しかし終戦交渉で”表向き”吸血鬼が追えなくなり……消滅した。

だがMM元老院の一部とマギステル・マギ脳の魔法使い、部署の間、吸血鬼に親類を奪われた者達が集まってティンダロスの猟犬を形成した。

「いつか来ると思っていたが……。」

「向こうから書簡が来たのじゃよ。差し出すか、関与するな…とな？拳句に襲撃日まで予告しておく。」

「……いつですか？」

「よりによってワシが唯一麻帆良を離れる魔法協会理事会会合の日じゃ…。」

「日程の変更は？」

「出来んのじゃ……いや出来ぬ様にされたというのが正しいかもし

れんわい。」

「タカミチと明日菜と……。」

「刹那君と木乃香はワシに任せい。警護役として来て貰うわい。」

「感謝します……。それから……100%一般人の来ない山を作り出せますか？」

「麻帆良の森を越えた奥の山ならば可能じゃ……人払いの結果、認識障害結界、麻帆良内で山に近付かぬように触れを出せば出来る筈じゃ。」

「そこで迎え撃ちたいのだが……許可は頂けるか？」

「……………」

学園長が唸る様に考える。

初めてこの老人が悩む所を見たかもしれん。

一度顔を下げ、汗を垂らし……。

次に顔を上げた時には学園長は関東魔法協会理事長の顔になっていた。

「絶対に市街地や学校エリアで戦わぬと言うのならば許可しよう。」

「……ありがとうございます。」

「刹那君と木乃香はワシに任せい。警護役として来て貰うわい。」
連中は信用できぬからな……一般人や抵抗しない魔法使いには手を出さないと言ってはいるが……。
ワシには天船の件がある。

「感謝します……。それから……100%一般人の来ない山を作り出せますか？」

「麻帆良の森を越えた奥の山ならば可能じゃ……人払いの結界、認識阻害結界、麻帆良内で山に近付かぬように触れを出せば出来る筈じゃ。」

「そこで迎え撃ちたいのだが……許可は頂けるか？」

「……………」

どうするか……じゃな。学園長として考えるならば麻帆良の外でや
って貰いたい……。

じゃが……。

じゃが理事長と言う立場で考えれば彼の意見に乗るのが吉。

彼への借りは大きい。彼らの始動じゃ木乃香も安全に生きられるで
あるう……。

媚殿が魔法を隠匿したいと言った時には社会的立場の強い見合い相
手を探さねばならんと愚考しておったのじゃが……。

頭が下がる。汗が滴る。

相手は逃げても必ず追い詰めると言われるティンダロス。ならば迎え撃つのが最良。

表向きは存在しない連中。連合からの風当たりも弱くなるじゃろう

…。

彼らの気持ちも解る……解るのじゃが…。

認めてはならん…。復讐を認める訳にはいかんのじゃ！

決めた。

「絶対に市街地や学校エリアで戦わぬと言つのならば許可しよう。」

「…ありがとうございます。」

ワシは決して退けぬ引き金を引いた。

S i d e e n d

「というわけでエヴァ以外全員避難しろ。」

「宗兄！こんな時に置いてけぼりっていうのは無いんじゃない？！」

「そうです！！」

「私は宗一郎に賛成だ。恨まれているのは私と宗一郎だけだろう。」

お前達は逃げた方がいい……それが一番私達の役に立つ。」

「エヴァ、説得は頼んだ。俺は刹那達に連絡しておく。」

「うむ。」

数コールの内に電話が繋がる。

「俺だ。」

「柚木さんですか？」

「刹那か？近くに木乃香はいるな？」

「はい……料理をなさっていますが。」

「呼んでくれ。二人に話がある。」

「わかりました。……おじよ……このちゃん柚木さんからお電話です。」

受話器の向こうから聞こえる喧騒。

「かわりましたえー。」

「しっかりと聞いてくれ。問題が発生した……詳しい事は学園長から聞いてくれ。それから学園長に従いなさい。いいね？」

「なにかあつたんですか?!」

「こちらの個人的な都合だ。」

一方的に電話を切る。

「向こうは上に話を通して来た。一般人に危害を加えないと言ったならば私と同じ土俵……誇りある悪の立場だ。」

「でも復讐なんですよ?!」

「明日菜。退いてはくれないか?」

「宗兄……。」

「連中は吸血鬼、真祖を倒せる様な連中だ。お前達の気持ちも解りし、実力も知っている。それでもお前たちにとって俺達の軽傷は致命的な一撃になりかねん。」

「私たちにとってお前たちに死なれる事程辛い事は無い。それにな復讐と対象になる事など日常茶飯事だ。向こうは覚悟を持って来るんだ……それも死兵としてな。」

「お前達が来ると言うならば俺はお前達の骨を折ってでも止める。」
目を見開き明日菜に殺気を飛ばして宣言する。

「……わかったわよ。でも向こうから手を出してきたらどうするのよ?」

「その時はやっちゃってしまっても構わん。ただし山へは来るな……諸共に潰すぞ?」

明日菜の問いへエヴァが返事を返す。勿論濃厚な殺気を籠めて。

二人を追いだし僅かな食糧と相応の準備をする。

「良かったのか宗一郎?」

こちらを見ずに問いかけるエヴァ。

「何が?」

同じく手元に集中しつつ返事を返す。

「明日菜だ。近衛に桜咲も。」

「なに。あの子たちが屍山血河を歩む必要はない……幸せに生涯を全う出来ればそれに越した事は無い。そうだろ?」

「相も変わらず優しいな……甘いと言い換えた方がいいか?」

長い沈黙。

「だがな……エヴァ。俺達だけだ。」

「判っている。お前と私だけだ。」

「ああ。」

「好都合だ。他の者と足並みを揃える必要は無い…そうだと？」

「ああ。」

「他の者を庇う必要も無い。」

「ああ。」

「ならば お前と私はこの上もなく無敵。」

「どれだけいようか…。」

「叩き伏せて進むだけだ。」

44話：獵犬は放たれた（後書き）

麻帆良編ネギ抜きでは最後の戦い。

茶番はさておき修学旅行編までは戦闘無し！

吸血鬼解放とエヴァが封印されていない時点で襲撃を考えていました。

もしエヴァが公に生きていたらきっと幾多の望まぬ襲撃を受けた事でしょう。

そう考えるとバカナギもそれなりに役に立ちます。

今のエヴァはあの年齢詐称薬で化けた姿と寸分違わぬ状態です。

そして何故かこういう内容の時だけ早く描ける自分が憎らしい。

45話：黄菅蒲。弟子達の戦い。

山の中で野営して二日。
遂に予告の日となった……。

「全く……離そうとしてもバレるものだな。」

「…仕方ないさ俺達が仕込んだんだ。」

クーラーボックスから赤い液体を取り出し煽るように飲み干す。

「くっ……。」

「宗一郎。余り無理はするな……お前は普段血を飲まないから……。」

口の中に鉄の味が広がる。含まれている魔力が喉を焼く。

明日菜の血液。

「無碍には出来んさ……。」

「難儀だな。」

「……エヴァ。連中と戦った事は？」

「無い……と言いたいが残念ながらあるな。宗一郎と離れていた間に襲撃を受けたよ。」

「どうだった？」

「とにかく数と武装だな……銀の弾丸は流石に治り難い。心臓と脳には喰らわん事だ。」

「厄介な……。」

「個々の錬度は低いが上はそうでもない。生きて逃げれる者が少ないせいで情報が殆ど無いのも事実。」

「全員が歩いて来てくれると早く片が付くんだが……。ロード：フェイタルアトラクション、シルバースキン。」

一面が殺気で満たされる。

「来たか……。」

ザッザッザッと踏みしめ掻き分け女が現れる。

「あれは俺が相手しよう……。エヴァはエヴァの流儀でやれ。」

赤と白のストライプシャツ。

黒いショートヘア、化粧つきの無い顔。黒い革手袋。

「初めまして不死王、闇の福音。私がティンダロスのリーダー美奈瀬夏樹だ。」

「これはこれはご丁寧にも。不死王こと柚木宗一郎だ……。随分大がかりな事をしてくれたが……。退く気は無いかね？」

「一歩も引く気は無い。我々は殺す覚悟も殺される覚悟も持ち合わせている。そして忘れがたい恨みがある。何、女だからと言って加減しなくても良い。」

「貴女のお相手は俺が勤めよう。」

「それは困る。私の復讐は闇の福音にしてこそ意味がある。」

「美奈瀬とか言ったな？どついう意味だ？」

エヴァが俺の隣に並ぶ。

「ココに集った同志達はただの吸血鬼嫌いでは無い。ああ昔のティンダロスはそうだった……しかし今は違う。これは只の復讐だ。何も生まない復讐だよ。」

「解っていてやるか。」

「殺す。あの人に誓った。私達が苦しみ、そして貴様等には安らぎが与えられる。そんなものが許せるか……戦争一つで法が変わっても、人の心が変わると思わない。絶対に殺してやるエヴァンジェリン・A・K・マクダウエル……！」

山がビリビリと響くような殺気を進らせて叫ぶ美奈瀬。

「宗一郎。コイツは私が相手する……。」

「いいのか？」

「私が恨みの対象だ。やってやるさ……。」

「では周りのは俺が相對しよう。」

「それは困る不死王。君は俺が殺す。」

いつの間にか後ろにいたのは黒いシャツに白い上着。神経質そうな顔。

メガネをくいつと上げてこちらを睨む。

眼光はまるで槍。

「君は？」

「名乗る名は無い……そう言いたいが美奈瀬さんの方針でな。……」

黒須左京。」

黒須左京の周囲に紫電が飛ぶ。

周りの連中は一步どころか相当離れている。

なるほど……この二人が上の人間か……。

フェイタルアトラクションを半身で構える。

「流石真祖、化け物みたいな武器を軽々と構える。」

「宗一郎、こちらはいい。集中しろ！」

バチツと紫電が弾け黒須の右手に雷で編まれた槍が現れる。

「大技の割に詠唱はしないのかな？」

「必要無い。今の俺は一本の槍だ。只一つの欲望に向かって進む、決して折れぬ槍。立ちふさがる者は全て刺し貫こう。」

ゴウと唸りを立ててフェイタルアトラクションが黒須の居た場所を雑ぎ払う。

重力操作の余波で木が押し折れ潜み隠れていた者まで圧殺する。

「外したか……むっ?!」

殺気を感じて後ろへ飛び退く。

稲光と共に耳を劈く大音量と凄まじい魔力の余波を受ける。

「俺のロンギヌスを辛うじて避け、しかもノーダメージか……。」

再び黒須の右手に紫電が走り槍が再構成される。

「厄介な……。」

S i d e エヴァ

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック 来れ氷精闇の精!闇を従え吹雪け常夜の氷雪!闇の吹雪!」

大概はコレで終わるのだが、恐らく後ろに距離を取っているはず。

「来れ氷精!爆ぜよ風精! 氷爆!」

ズズン…………。

「ふつ…………こんなものだガホッ。」

突き飛ばされて二転三転。

更なる追撃を感じて飛び上がる。

が

ドンッ…。

と内臓に響く一撃を受け吹き飛ばされる。

「カハツ…………貴様…どうやってアレを突破した…。何故貴様から魔力も気も感じられない？」

「死に行くお前が知る必要は無い！2時方向撃てッー！」

銃弾が私の居た場所を抉る。

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック 契約に従い 我に従え
氷の女王 来れとこしえの やみ！えいえんのひょうが！！！全ての
命ある者に等しき死を！其は安らぎ也！！”おわるせかい”」

150フィート四方の広域殲滅呪文。

これで生き残るのは宗一郎ぐらいなものだ。

「油断したな化け物め！」

「なにっ?!」

馬鹿な!?

「我らが名はティンダロス。吸血鬼を追う獵犬……。決して諦めず、必ず追い詰め、殺す。」

革手袋が破れて……。

「なんだ貴様その腕は!!」

「これか?見られてしまったしいいか…。あの人の形見よ。対吸血鬼用の義手。」

「形見?私はそんな珍妙な物を付けた奴など知らんぞ?」

「当然でしょう?あの人は五体満足だったから……改めて父と夫の仇を討たせてもらうわ……。」

「私を倒す為に自分で腕を切り落としたか貴様……。」

「御明察ね闇の福音。」

熱を放つ義手。宗一郎や明日菜やタカミチの言うハイテクという奴なのだろう……。

「大した執念だ……。」

だが、私は負けない。主義にも反しない。

Side end

Side 明日菜

「それにしても……訓練が無いとこんなに退屈なのねー。」

「そうですね……刹那ちゃんや木乃香ちゃんも居ませんし。」

「行きたいけど……。」

遠い山の中。雷光が見えた気がする。

「駄目ですよ。明日菜さんを行かせたら僕まで極刑です。」

「暇だし……よし、買い物行くわよ付き合いなさい！」

「何を急に言いだすんですか?!」

「今、暇でしょ？」

「ええ。」

「帰って来た宗兄はきつとお腹減らしてると思うわ。普段血なんて

飲まないし。」

「あー……血飲むぐらいならカロリーバー齧ってますもんね。トマトジュースじゃなくても良い事に驚いた覚えがあります。」

「いやだって宗兄、生のトマト嫌いだし。とにかく行くわよ。」

「わかりましたよ……行けばいいんでしょう行けば……。」

ボソボソ言ってるけど聞こえるのよね……。面倒だし聞こえなかった事にしよう。

「何か言った？」

「い、いえいえ何も言ってます！何も不満なんてありません。」

ああ、あるのね。殺すわよ。

屋外に出ると息が白い。

「寒くなってきましたね……。」

「そうね……。年から年中エヴァは下着姿に近いし、宗兄はコート着てて季節感がまるで無いけど。もう冬よね……。」

「ハハハ……何か宗一郎さんに買いますか？コートとか。」

「辞めてよ……喜んでくれるだろうけど一年中着そつで心配なのよ。」

「あー……若干否定できないのが悲しいですね。」

「もうね、下着類が箱で来た時は何事かと思っただわ……。」

「全部同じメーカー、同じデザインの下着が各種箱で来ましたからね……。」

「一応ブランド品だったから通したけどアレでその辺の安物だったら取り上げてたわよ。」

「明日菜さん……宗一郎さんを舐めてますよ。」

「どっこういうことよ？」

内心少しムツとする。

「あのブランド、ア行なんですよ……。」

「まさか……。」

「多分。」

「あれね。きっと宗兄はサラリーマンとか天職よ。」

「公の式にはシルバースキンですしね……。」

ザワリと髪の毛が逆立つ感覚。

「……………タカミチ。」

「解ってます。」

敵。それもそれなりの人数がこちらを監視してる。

「このまま気が付かないふりして私達のフィールドに引きずり込むわよ。」

「先月取り壊しの決まったあそこはどうでしょう？」

「いいわね。」

Side end

Side ティンダロスメンバーHeadQuarter

美奈瀬総指揮から離れての行動。

バレれば肅清物だが……………。

化け物の身内なら仕方が無い。

「こちらアルファ2・目標を視認した。」

「こちらマーズ4・こちらからも確認した。女の頭に照準を合わせている。」

「こちらレッド3・後ろに着いた。」

準備は整った。

「こちらHQ全員に通達する。目を離すな。連中を確保すれば作戦の成功率が上昇する！心して掛かれ！」

「了解HQ アルファ3・レッド3・に合流する。」

「こちらデルタ1………先程からベータチームと連絡が繋がらない。確認出来るか?!」

そう言われて初めて標的の横にいるはずのベータチームからの報告が無い事に気が付いた。

「こちらHQ 各員周囲を確認しろ。」

「アルファ2・ネガティブ。」

「マーズ5・ネガティブ。」

「レッド3・ネガ………ポジティブ。ベータ6・を視認。倒れている。」

「こちらHQ どういう意味だレッド3……?」

ベータ6・の配置は………標的の斜め前方のはず……。

「こちらマーズ1・ベータ6・に接近中!」

「ぎゃっ!」

「何があつた?」

「ガッ。」

「こちらマーズ5！仲間がいきなり吹き飛ぶ。意味が解らない。繰り返す！仲間がいきなり吹き飛んだ！」

「ぐおっ。」

「こちらレッド3・エマーゼンシー。二人が走り出した！」

「こちらHQ！仕方が無いマーズ4。発砲を許可する！」

「ネガティブ！木が邪魔で狙えない！」

「こちらHQ全小隊に告ぐ、追跡に入れ！逃がすな！」

くそっ！どうなっついていやがる！

仲間がいきなり吹き飛ぶ？そんな馬鹿な事があつてたまるか…。

魔力反応は無かった。

たかだか大学生にどうしてこうもあしらわれている？！

いくら英雄の残り香だろうと王女だろうと、我々がこうも容易く敗れる筈が無い！

Side end

Side タカミチ

「右前方、スーツの男。」

「はい。」

明日菜さんの指示に従って無音拳を打ち込んでいく。

「並木に入ったら後ろの二人に無音拳打って走るわよ。」

普通の買い物のはずだったのになあ……。

でも大丈夫。

訓練よりもずっと気楽だ……。

”より卑怯な方法ほど、より確実な方法”

僕達人間が宗一郎さんと相对出来る唯一の方法。

同じ心得で挑んで……人間に負ける気がしない！

「今！」

明日菜さんの掛け声で無音拳を顎へ決める。

追手の二人は短い悲鳴を上げて絶命する。

走り出すと同時に銃弾が飛んでくる。

「あーっっっっっ！！」

「タカミチ！止まらない！」

廃ビル。

「馬鹿……止まるなって言ったでしょ？」

「すみません……。」

掠っただけでもジンジンと痛む。

「チツ……予定よりも早いわね。」

「僕も行きます。」

「アンタは上に行きなさい。多分上からも来てる筈だから。」

「わかりました……行きます！」

コンクリート剥き出しの階段を駆け上がる。

S i d e e n d

S i d e 明日菜

「と、言ったものの拙いわねー……全力で咸卦法使ったら外から魔力感知してミサイルでも撃つてきそうだし……。」

武器が無いのが一番痛いわね……。

「アデアット。」

幾ら微妙な性能でも……宗兄とのカード。

「大丈夫。」

フツと息を吐いて金属パイプを手取る。

「……宗兄の戦勝パーティーを邪魔したのだけは……絶対に許さない！」

脚に本当に薄く軽く咸卦法を籠めて走り出す。

「こちらアルファ2・4階に到達した。クリア！」

フツと気を緩めた瞬間に頭上から襲いかかる。

「な……ッ。」

ゴキーンッ

金属パイプのフルスイング。

申し訳程度のヘルメットを砕いて中身をブチマケル。

通信機から声が響く。

「どうしたアルファ2。何があった？異音がしたぞ?!」

答えないと拙いっ!

「すまない資材をぶちまけた。通信機が損傷。」

通じるかな？

「了解。アルファ2。はその場で待機せよ。HQ!アルファ1。フオローに回る。」

「了解アルファ1。アルファ4。入口を固める。マーズ4。5。移動して裏口を押さえろ。」

拙い……。今のは誤魔化せたけど次でバレるじゃない……。

上を確認しなかったり偽装を疑ったりしないとか練度は微妙だけど……。統率がとれてる。

しかもコードが付いてるんだから人数は多い。

「アルファ2。何処だ?!……アレックス!アレックス返事をしろ!まったく気絶してないよな?」

パイプを投擲体勢で構える。全身に咸卦法を纏う。

「……血?まさかつ!」

死体へ駆け寄る男。

「おいアレックス！しっかり…くそっ！ぶっころしてやわばっ！」
身体を貫通して壁に縫い付ける。

「咸卦法全力で使ってもバレないじゃない……警戒し過ぎたわ。」

S i d e e n d

S i d e タカミチ

戦闘のさなか…。

しまった！一人後ろに回られたッ！

「動くなっ！」

銃を構えて威嚇する男。

死を覚悟したけど……なんだ、生かして捕まえる気が……。

「上。注意した方がいいよ？」

「なにっ!？」

ズンッ

「豪殺居合い拳……魔法拳士 タカミチ・T・高畑。推して参る！」

「さて……貴女しか残ってませんね。」

あちらこちらの床が抜け、動く影は自分と…。

「……………」

「女性は極力殺したくは無いので退いて下さい。」

ガシャンと大型の銃が地面に落とされる。

「ここで大人しくして居てください。そしたら生きて帰れます。」

背中を向けて明日菜さんの所へ向かう。

ドンドンッ！

無音拳と銃声。

無音拳は狙い過たず女性の腹に。弾丸は逸れに逸れてどこぞの壁に。

「きゃあああああああ。」

弾き飛ばされ6階から転落する女性。

「言ったじゃないですか……大人しくしてないと死ぬって。」

でも解ってました。きっと貴女は僕が背中を向けた途端に懐の銃を抜くって事は……。

メガネをくいと上げる。

「それでもまだ僕はココで死ぬわけにはいかない。もうすぐ追いつける背中と遙か遠い背中。それを目指さなきゃならないんだ。」

S i d e e n d

S i d e タカミチ & 明日菜

「何者だ…おまえ…ただの……女じゃ…。」

「あんたたちがケンカ売らなきゃただの女でいるわよ。」

「明日菜さんこちらは終わりました。」

「私もよ……さて、学園長も居ないし後始末できる人呼び出さない

と……。」

「あのビル倒壊しそうですね……。」

「あ、すみません柚木明日菜です。……はい。少々襲撃を受けまして……ええ。お願いします。」

親指を立てて笑顔の明日菜さん。

万事解決ですね。グッと背伸びをして……。

「改めて買い物に行きましょうか……。」

S i d e e n d

45話・黄菅蒲。弟子達の戦い。(後書き)

次回

46話・弟切草。シルバーブレット

46話・弟切草。シルバーブレット。

Side ?

なんでござるか……この状況は？

三日前から山籠りして修行に励み、今日は山を降りようとしたらこの戦闘でござる……。

雷を放つ男と、銀の服を着た男が凄まじい戦闘を繰り広げているでござる。

あれは忍術では無い。………里から出る時に聞いてはいたが……あれが魔法と言うモノでござるか。
聞いていたのとは全く違うでござる。

Side end

ズズンっ……もう数え切れないほどの雷撃。

厄介な……造物主の光の攻撃より性質が悪い。
ほぼ光の速度で大威力の魔法を連発。

仕方あるまい。一気に決める！

「フェイタルアトラクション解除。ロード……ディープブレッシ
ング……!!!」

ドゴオオン

突撃可能な潜水艦。

それを地上で出して押し潰す。

「それで倒せると思ったのか不死王？」

「杖も無しに飛ぶか……。」

「杖など無くても飛べるさ……。」

「そこまでの実力ならば、吸血鬼など追わずとも立派な魔法使いに
なれるだろう？」

そう言いつつディープブレッシングを戻す。

「マギステル・マギ？そんなものに興味は無い。俺は貴様を殺した
いだけだ……妹の、美緒の仇のな？」

「俺は吸血活動なんぞしないが？」

「いいや、貴様が戦場で殺したんだよ。メガロの士官だった妹をな
……死体すら発見できなかった。忘れもしないグレートブリッジ奪
還作戦……!」

ジエノサイドサーカスで一掃、更に橋をフェイタルアトラクション

で破壊。

あの日の記憶がフラッシュバックで流れる。

「……いつか、誰か来ると思っていた。」

「英雄だと？ふざけるな……。妹を返せなどとは言わない。不死王、貴様を殺す！！！」

バチツと弾けてその場から消える黒須。

「何っ?!」

パアアアン

「ガッ……………」

「痛むか？痺れるか？人間や通常の吸血鬼なら一撃で意識どころか命を奪う。」

「…すまん。その程度の電撃、ナギの千の雷で耐え慣れた。」

「なに？」

「ブレイズオブグローリー。」

ゴオウと炎で薙ぎ払う。

炎化は危険だ。仮にも山。一般人が居ないとは限らない。この戦闘には近付け無いが炎だけは広がる。

S i d e エヴァンジェリン

巨大な影。

宗一郎め……こんな所でバスターバロンを出すか……さっきの雷と
言い……。

フン……苦戦してるじゃないか。

私もそろそろ見せないとな？

「よそ見している暇があるのか闇の福音……！」

美奈瀬の手が空を切る。

「なに？ガッ……。」

後ろへ影を使って転移、蹴りを放つ。

「転移程度出来ずして何が真祖か。私を倒して見せろ、私を圧倒して魅せろ！我が名は闇の福音、禍音の使徒、人形遣い（ドールマスタール）！エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル！真祖の吸血姫して不死王の永遠の友！！人間如きが勝てると思うな！」

「人間をなめるな化け物め……来い、戦ってやる……！！！」

私を倒していいのは……宗一郎だけだ。

「来れ深淵の闇、燃え盛る大剣、闇と憎悪と破壊、復讐の大焔
我を焼け彼を焼け！そはただ焼き尽くす者！！奈落の業火！！術

式固定……掌握。魔力充填……術式兵装！」

「はは……凄まじい魔力だ。」

「私は女子供は殺さない。それが例え、誰であろうと！」

「は？」

トン……ズンッ

絶妙な力加減。絶対に人間では反応できない速度で接近し当て身。さらに投げつける。

「うわああリーダーがやられた！」

「もう駄目だああ！」

「覚悟の無い者は去れ！逃げた者を私は追わん！」

数人が逃げだすが……。

残りはやる気が……。仕方あるまい。

S i d e e n d

S i d e 楓

もう……わけがわからなくてしよる。

遂に巨大口ボ出現でござる。

魔法……では無い気がする。というか思いたくないでござる。

目が離せない。

「動くな……。」

「ニン?!」

「着いて来て貰おう……。」

し、しまったでござる。

こうも掴まれて、銃を突きつけられてしまつと逃げられんでござる。
中忍に上がったばかりで浮かれておつたのでござる……。

Side end

「はぁ……はぁ……はぁ……なんとか、勝ったか。」

「しゅっ……。」

まさかジエノサイドサーカスを受け切る魔法使いが居たとは……いや、耐えたのは二回目なのだろう。

「まだ……だ。まだ、俺は……死なない。負けて、やるものか……。美緒の仇だけは……。」

膝を笑わせ、全身を震わせグラリと立ち上がる。
紫電が一層迸る。

拙い。バスターバロンの全身を出現させるのはかなり疲れる。
それで全て収納した事が裏目に出た。

だが、この距離。拳で行ける！

グツと拳を握りしめ一步足を進める。

「動くな不死王！！！」

「なっ…………。」

ティンダロスの兵士であろう男は少女の首に手を回し、ナイフを押し当て、銃はこちらに向けている。

「…………一般人には手を出さなかったんじゃないのか？」

瞬動で接近…………却下。

男を弾き飛ばしてもナイフが突き刺さる。

一撃で頭を消し飛ばす…………却下。

ヘルメスをロードする…………却下。

…………詰んだ。

…………いや、まだまだ。俺だからこそ…………切り開ける場所がある。

「何をしている？」

「へへ、黒須さん！早くトドメを刺して下さい！」

「我々の主義に反する事だ。」

「そんな事知ったこつちやないです美奈瀬が勝手に決めた事だ。さつさとコイツを消し飛ばして下さい！あんたしか出来ないんだ！」

「……いいぜ。撃てよクソガキ……見えるか？ここが心臓だ。外すなよ？」

「なに…？」

「その銃で撃ってみろよ、ほら。」

トントンと撃つべき場所を示してやる。

「なんだと…！」

「撃つたらその子供を離せ。それが条件で貴様に俺を殺す権利を与えてやるぞ。」

「マジかよ。へへ…。」

「よく狙え。黒須、そういうわけだ貴様には殺されてやれん。恨むならそこのクソガキを恨め。」

「不死王、いや柚木…どういつつもりだ?!それは銀の弾丸だ。心臓に受ければいくら真祖でも拙いと解っているのか？」

「ああ……来いよクソガキ。」

ダツアアアアン。

弾丸は綺麗に”心臓”へ吸い込まれるように”着弾”する。

S i d e
楓

引きずられて連れ出されるのは戦場。

「動くな不死王!!!」

「なっ……。」

驚き目を見開くのは銀の服を着ていた男。

「……一般人には手を出さなかったんじゃないのか？」

驚きから一転大きな怒りを感じる。

「何をしている？」

怒り？雷の男は怒りを表してこちら睨んでいる。

「へへ、黒須さん！早くトドメを刺して下さい！」

拙者を人質に取った男はそんな事も意に介せず声を張り上げる。

「我々の主義に反する事だ。」

「そんな事知ったこつちやないです美奈瀬が勝手に決めた事だ。さつさとコイツを消し飛ばして下さい！あんたしか出来ないんだ！」

「……いいぜ。撃てよクソガキ……見えるか？ここが心臓だ。外すなよ？」

え……何を言ってるんでござるか？！拙者の為に死ぬつもりでござるか？！

「なに……？」

「その銃で撃ってみろよ、ほら。」

トントンと心臓の直上を叩く男。

「なんだと……！」

「撃つたらその子供を離せ。それが条件で貴様に俺を殺す権利を与えてやるう。」

「マジかよ。へへ……。」

「よく狙え。黒須、そういうわけだ貴様には殺されてやれん。恨むならそのクソガキを恨め。」

「不死王、いや柚木……どういうつもりだ？！それは銀の弾丸だ。心

臆に受けねばいくら真祖でも拙いと解っているのか？」

「ああ……来いよクソガキ。」

やめっ……やめるでござる…。

ダッアアアアア。

赤い華が咲いてユズキが倒れる……生き残れるはずが無い。
拙者の……不注意で人を……。

「おい、そのガキはもういい。離せ。」

「エヴァンジェリンの方も同じ手段で片づけましょうよ！」

「……………ああ。ならこちらへ渡せ。俺が人質を取ろう。お前が撃
て。」

もう……自決を。

腐った男から黒須へと拙者は渡される。

「すまない。大丈夫か？」

「え？」

黒須は拙者の耳元で小声で謝った。

「お前、名前はなんだった？」

「へ？俺っすか？幡中悟道です。へへ俺もこれで幹部ですね！」

「幹部？」

「だって不死王を倒しましたからね！黒須さん総指揮で自分が直属になりますよ！」

「何を言っている？」

「は？いやだから……え？黒須さん？なんで槍出してんすか？」

「貴様はここで死ぬ。昇進も糞もない。」

「ひっ……助けッ……。」

「それは……出来ない相談だ。」

「ふ、不死王……?!」

死んだ人が蘇ったでござる……も、もう駄目でござる。拙者目の前が……。

S i d e e n d

無様に逃げたそうとした男は俺と黒須との間で板挟みになる。

「い、意味がわからねえ！！！手柄だろ？なあ黒須さん！俺、手柄なんていらねえっすから！助けてくださいよ！」

「「幡中、お前はここで俺達に殺される。」」

「なんでハモツてんですか？待って下さいよ！」

「ロード：ヘルメスドライブ。」

腕を掴む。

「離せ！離せこんちくしょう！！！！！」

転送ッ

転移先は上空200メートル。

「貴様是我々の主義に反した。泥を塗って……貴様の罪を裁く！」

ガシヤアアアアン

雷撃が黒須の手から放たれ幡中は碎け散る。

「邪魔が入ったな不死王。」

「問題無い。」

「宗一郎！無事か?!」

エヴァが駆けて来る。

「エヴァ、そちらは終わったか？」

「ああ、氷の柩で氷結封印を施した自力脱出は不可能だ。お前は随分と苦戦してるじゃないか……加勢するか？」

「必要無い。」

「闇の福音。少女を預かってくれ。」

「どづいつ事だ？」

「何、無粋な輩が邪魔をしてな。」

「こちらの落ち度だ。この分じゃ学校へ侵入した馬鹿がいるかもしれない。申し訳ない。」

「そちらには弟子がいる。そんな下司な事をする連中に負ける程や

わに育ててはいない。宗一郎、向こうで待っている。必ず戻れ。」

「了解お姫様。」

「さて、再開しようじゃないか。」

「No Silver Bulletか……。影響は無いんだな？」

「ああ……。頑丈でね？」

紫電が迸り全身にそれを纏い、なおかつ手に槍。

「一撃で決めさせてもらう。」

「ロード：ソードサムライX。同じ言葉を返そう。」

「その命……。奪い去る!!」

Side エヴァ

全く……。宗一郎め。アイツはしぶとくて信念を貫く奴が好きだからな……。

これだから男と言うのは困る。

テオドラ皇女なら卒倒するんじゃないか？

あいつの横に立ってやれるのは私ぐらいのものだ。

美奈瀬を封印した氷の上に胡坐をかき宗一郎が来るのを待つ。

「全く……平穩に暮らしたいものだ。」

Side end

「じふつ……くそつ……あと一步及ばずか……。」

胸を大きく切り裂かれ大の字で倒れる黒須。

「何が……一歩足らずだ。人間の癖によくやる……。」

胸に大きな焦げ跡。
しばらくは治らん。

「それ……なんだ？」

「核鉄と言ってな……魔法とは異なるものだ。」

「道理で敵わんか……まさか心臓の代わりが金属だとは……。」
目が光を失っていく。

「何か望みはあるか黒須左京？」

「何も……無い。とつとつたばね吸血……。」

「せめてもの嫌がらせだ……グレートブリッジに散骨してやる。」

黒須の死体を横抱きにしてエヴァの元へ向かう。

また……甘いだの何だの言われるんだろうな……。

この重さが俺の罪だ。

英雄だの何だの言われた所で……所詮その道は血で濡れている。

46話・弟切草。シルバーブレット。(後書き)

次回

47話・後日談とぬらりひよん

47話・後日談とぬらりひょん(前書き)

一度文章が消えて

吊りたくなりました。

47話・後日談とぬらりひょん

帝国領

グレートブリッジ戦跡

黒須左京の骨を撒く。

粉が強い風に乗って広がる。

「本当に甘い、甘々だ。」

「…黒須美緒の事を調べた。」

「はぁ……軍人だったのだろうか？殺すの殺されるので成り立つ業界だ。恨むのはお門違いだろう。」

「黒須美緒は本来死なない場所にいた。」

「どういう意味だ？」

「後方支援だよ……兄妹で。俺以外が殺しようの無い後方。」

「それでも……だ。戦場と言うモノは得てしてそう言う事が起こる。」

「そうやって割り切れるほど俺もアイツも人間出来て無いんだよ。」

「お前と私は人間を辞めてるかな？」

「笑えない冗談だ。……美奈瀬の方は？」

「釈放無しの終身刑だそうだ。義手も使い物にならん……。」

「エヴァ……女子供は殺さないと言いつつ腕はぶった切ったのか？
確かに死なないが。」

「アホか。あいつは自分で切り落としたんだ。私が殺した人間の形
見らしい。」

「……今回は……なんというか重い。」

「そうか……？」

「ああ、勝った気がしない。」

理由？簡単だ……自分の力を楽しんでいた時代が嫌いなだけだ。
ああ、追われているだけの生活がどれほどに楽だったか。
エヴァと二人、勝手気ままに生きるのがどれほど楽だったのかを考
えてしまう。

「お前、この状況から逃げ出したいかと思って無いだろうな？」

「……わかるか？」

「何年共にいるかと思っている。顔に出ずともわかる。私がお前の事
で知らないのは、私に会う前と私を放置してテオドラ皇女を引っ掛
けた時ぐらいだ。」

「はは……いい加減に許して欲しいなあ。」

「許すかつ。約600年共に居たのに、ポツとでの女いきなり搔つ攫われたんだぞ？皇女でなければ八つ裂きだ！！！！」

「物騒な話だ……。というか皇女でもやる気だつただろ。」

「……………」

顔を赤くして背けるが事態はそこまで可愛いものでは無かつた。

帝国連れてきたの本当にミスだと思つた瞬間だつたぞ？

テオは気が付いて無かつた……あーいや、気が付いてたなあれは。

最近ではテオまで黒い気がするんだ。

今までは他愛ないじゃれ方だったのに、チラツと横目でエヴァを見ていた事は忘れない。

テオが抱きついた瞬間にエヴァの顔が凍りついたのは覚えてる。

おかげでテオの部屋がグラウンド・ゼロもかくやという緊迫感だつたからな。

ヴェラシオ曰く地上で最も敵に回したくない女のTOP2らしい。

この頃、女の子絡みで修羅場が発生する。

自分の節操の無さを今更ながらに自覚した。もっと慎ましかに生きるべきだ。

というかタカミチが彼女を作らないのは日常的にそういうものを見ているからじゃないかと最近不安で堪らない。

アイツが男に走ったらどうしよう……ガトウに送り返そう。着払いで。

そういえばガトウ老けてたなあ……。
クルトは順調に出世してたなあ。

この頃は、ぱったりと完全なる世界の事も途絶えた。

「……………なあエヴァ。」

「ん…？」

「俺麻帆良に帰らなくて良いかな？」

「殺してでも連れて帰る。」

満面の笑顔で棒読み宣言。

「オーケー。五体満足で戻りたい。ロマサガはお断りだ。」

両手をおどける様に上げエヴァの後を追う。

途中パンツと両手で自らの頬を叩く。

胸には信念を抱き、背中に悩みを背負う。

なんと我が人生には荷物が多い事だ。

だが、……………まだ両手があるじゃないか……………持てないわけじゃない。

「ありがとなエヴァ。」

くしゃりと金髪を掴む様に撫でる。

「むおっ?!何をする!は、恥ずかしいではないか!?!」

「じゃあ辞めるか?」

「……………辞めなくていい。」

「ん。正直でよろしい。」

Side 学園長

もうワシいやじゃ…おうち帰りたい。

明日菜君とタカミチ君が暴れたビルや死体の隠蔽。
ワシがおらなんだ時にやったおかげで山のように決裁せねばならん書類がある。

権力は使う為にあると言うが、それなりのリスクと責任があるから振るえるのじゃ…。

もう来年から絶対に魔法協会の集まりはうちでやる。
ワシ麻帆良から出ん。

しかしもっと大変なのが長瀬君じゃな…。
甲賀忍者からの預かり物じゃったからのう…。

魔法の事はそれなりに知っておるとはいえ、うづむ。

もうぶつちゃけ柚木君に責任取らせて教師させようかのう……。
木乃香を入れた中等部1-Aの面子は決まったしのう……。

む……？

来年の四月にタカミチ君と明日菜君を採用する……。しかしコレは表には出ておらん。

名案じゃ。何もかもマルつと片付く名案じゃ。

「ふおつふおつふおつふおつ。」

「学園長先生。変な事考えてないで決裁をお願いします。」

「し、しずな君？ワシをもっと労わって欲しいなあーなんて。」

「今日中に終わらせたらいいですよ？」

ガクリと肩を落とした学園長が居たとか居なかったとか。

S i d e e n d

「お呼びですか学園長？」

「うむ何件かあったの。まずは楓君……人質に取られた少女の事じゃ。」

「ああ……出来るだけ記憶消去は辞めて欲しいと言った筈だが。」

「彼女も一応魔法関係でのう……記憶を消さなくても良いのじゃが……。」

「それは良かった……。」

「うむ。そちらはまあなんとかなったのじゃ。本題は……此度の戦いのおかげでちょっと無視出来ん損害なのじゃよ。」

「ああ……山ですかね？」

思い出すのはティンダロスと戦った山の惨状。加減したとはいえ……。

「うむ。頂上付近がほぼ更地……認識障害とかそういう対応が出来る様な損害を越えておる。確かに強敵であったし、こちらに被害が無くて何よりじゃが……。」

齒に何か詰まった様な話し方……。

「……む。そこまで言うのなら何か用意しているのだろうか？」

「わかるかの？これから先もあの様な事がまた起こるかもしれん。そこでじゃ明日菜君やタカミチ君の採用と”共に”君に教師になって欲しいのじゃよ。」

「は？」

何を言っついていやがるジジイ。まーた教師か。

「普通ならば追いだす所じゃろうが、ワシはそれをしたくないのじや。柚木君も麻帆良に住み慣れたじゃろうしなあ…。でじゃ、もうすぐ特別クラスを作ろうと思つておる。」

前後が繋がって無いなオイ。

「特別クラス？」

「うむ。中等部入学予定の生徒の中から極めて優秀な者を集めた特別クラスじゃ。」

「エリートという意味か？」

「うむ。しかしじゃ、そう言う者達は得てしてこう、まとめにくいものじゃ。そこで君のカリスマを頼りたい。それで今回の件はすべてチャラにしようぞ!!!」

エリートだのカリスマだの言つと……初期のクルトがズラツと並んでいやがるのか？
勘弁願いたい。

「余り頭脳で分けるのは好きではないのだが……。」

「む、勘違いしておらんか？何かの分野に突出したものを集めるのじゃ。だからまとめにくいのじゃよ。」

突出した……あー……うちの刹那の事ですね。解ります。

剣道は出来るのに学力がヤバイ。どうして木乃香の傍にいなから学業が出来ないのか……。

試験前に訓練がまったく出来ん所か、魔法球内で勉強を教える羽目になった。

「わかった…引き受けるしかないようだ。しかし教師免許はどうするのだ？」

「抜かりは無い。既に用意してあるわい！」

バンと引き出しから取り出される紙束。

「……教師免許の下の紙はなんだ？」

「ふおっ?!」

コソコソと机の中に戻していくが……寮監、広域指導員と見える。

「学園長？」

「ふおっ……広域指導員もせんかね？」

「わかった…引き受けよう。ついでに寮監などと言ったら埋めるぞ？」

「ふおっふおっふおっ……ふおっふおっふおっふおっふおっ。」

笑って誤魔化す気だな？あとで木乃香を送り込んでやる。

「失礼する。」

「うむ…。教師関係の資料はまた後で送るぞい。」

教師か……とてつもなく嫌な予感がする。

俺はまだこの時知らなかった。人生最大の苦勞に巻き込まれるとは……。

そうそう、後日学園長室から打撃音と悲鳴が聞こえたのは気のせいだ。

ある雨の日。

「憂鬱ねえ……どうせ降るんなら雪でも降れば良いのに……勘弁して欲しいわ。」

「魔法球へ避難も出来ないしなあ……。なあエヴァ魔法球の設定時間変えられるか？」

「あれは製作時に決定されるからな……。」

ダラダラと各自ソファにグタアと寝そべってたった一台のエアコンの恩恵に預かる。

ブルルルルルと同じく家に一台しか無い電話が喚きだす。

「たーかーみーちー。取れ。」

「明日菜さんの方が近い……わかりました。」

全員の視線に耐えられなかったタカミチは電話へと向かう。

「はい柚木です。……はい、え……わかりました。」

タカミチの顔色が曇るのが見える。

「どうした？」

「宗一郎さん宛の電話です。NGO関連で。」

「わかった。」

よっこらせとソファから離れ電話を受け取る。

来年になったら子機付きの奴を買おう。いまだに黒電話におまけが付いた様な奴では面倒だ。

FAX付き……駄目だなボタンが多いとエヴァが操作出来なくなる。

「代わりました。」

「銀の牙代表の柚木さんですね？」

「ああ。そちらは？」

「申し遅れました四音階の組み鈴の者です。コウキ・タツミヤの件で……。」

「コウキがどうかしたのか？」

コウキの名を聞いた途端に嫌な予感がする。

背中にジトジトとした汗がにじみ出る。舌が乾く。酷く不安になる。ゴクリと唾を飲み込む。

「亡くなりました……。」

「そう……か。葬儀の方は龍宮の本宅でいいのか？」

思わず天を仰ぐ。

「はい。」

「連絡ありがとうございます。」

受話器を下ろし大きくため息を吐く。

「何かあったのか？」

「ああ……ちょっと喪服出してくる。」

神社の横、境内の外にある龍宮家本宅

「この度はまことにご愁傷様でした。謹んでお悔やみ申し上げます。」

しめやかに葬儀が執り行われる。

ザッと見る限りNGO関係がほとんど……。

葬式にしては余りに人が少ないと言わざるを得ない。

これがマギステル・マギにまでなった正義の味方の葬儀か？

解っていた。いつの日かこうなることを。

全てを救う正義の味方には自分だけを守ってくれる正義の味方が必要だ。

果たしてコウキは救えた人間を喜んで死んだのか、救えなくなる事を悔やんで死んだのか？

そんな疑問は顔を見て晴れた……。

ああ、お前は満足して逝ったんだな。

満足そうな笑顔。作ろうと思って出来る顔じゃない。

斎場から出て一服。

タカミチから没収した吸い慣れない煙草を啜えて煙を吐き出す。

アイツ、ガトウが吸っていたなどという下らん理由で吸いだした。今度輸血パックの血を無理矢理飲ませよう。

「久しぶりだねシトーさん？」

そんな現実逃避を女性の声が引き戻す。

声の方向へと振り向くが……誰かわからない。

シトーと呼ぶと言う事はNGO関係なのだろうが……。

褐色の肌、まるでモデルの様な身長とスタイル。正直極上クラスの美人。

「失礼。どこかでお会いしましたか？貴女のような花は一度見たら忘れられないと思うのですが……。」

「ふむ……これでわかるかな？」

そう言っつて魔眼を見せる。

「まさか…アルカナか？」

「マナ。そう呼んで欲しいと言った筈だけどね？」

「そうだったな……マナ、どうしてここに？」

「色々あってね。今は龍宮真名と名乗っているよ。」

「そうか…おめでとつとでも言えばいいかな？」

「期待した反応と違うのが残念かな？」

少し残念な顔をして

真名は”称号”、”徳性”、”方位”、”色調”、”星辰性”、”アーティファクト”が失われたカード……つまり失効した仮契約カードを取り出す。

「コウキの従者だったのか……聞きにくい……あいつは何かを守って死んだんだな？」

「ああ。」

「それならいい。アイツが最期まで己の信念を貫けたのなら……ブラボーだ。」

「触れて欲しい所に触れないで、その顔は反則だよシトーさん。」

きつと俺は今泣きそうな顔なんだろう。

頬に水が流れる感覚がある。

「雨が、降り出したようだ。」

「そうかも……しれないね。」

俺はその日、初めて弟子を失った。

47話・後日談とぬらりひょん(後書き)

次回

48話・超鈴音。詰め込み過ぎ!? 1 - A

48話：超鈴音。詰め込み過ぎ?! 1 - A (前書き)

映画工ボリユニーションはBGM選択が秀逸過ぎるとおもいます。
あと將軍糞まみれからのオチもW

48話：超鈴音。詰め込み過ぎ?! 1 - A

Side 超鈴音

ブンツ……………。

先程まで何もなかった虚空に少女が現れる。

「2000年12月……………長距離時間移動に成功。グラントマスター……………きつと未来は変えて見せるネ。」

少女の服の背中には時計の様なもの、左手には人形。そして右手には……………鈍い光を放つ金属。

Side end

ある冬の日突然学園長の呼び出しを受けた。

「なんだ爺?」

「さ……………最近敬語がすっかり消えてきたのう宗一郎君……………」

「用があるならタカミチを呼び出して欲しい。大抵はアイツで解決するだろ?」

そう言うとキリツと最近久しい真剣な顔になって学園長が口を開く。

「今回ばかりはお主でなくてはならん。」

「まーた連合か？叩き返せ。魔法先生だけでも鬱陶しいのに……。」

詠春の所から来た葛葉刀子とその旦那、明石、シャークティ以外とは余り顔も合わせないほどだ。

まあシスターシャークティは……彼女は彼女で別に会いたくない理由があるのだが……。

「みな連合の者じゃからのう……。しかし違うのじゃ。もっと厄介かもしれん……。」

「もつと?! 勘弁してくれ……そつちで処理できるモノはこつちに押し付けなくてくれ。」

「そつは言わんでくれい。この少女の真意を君に確かめて欲しいのじゃ。」

そつ言つて無理矢理感溢れる形で写真を押しつけて来るジジイ。

「チャオ・リンイン?」

「チャオ・リンシエンというらしい。」

「音をシエンだと……? まあいいか。それでこの子が何か?」

「経歴の一切が存在しないのじゃ。麻帆良に現れた12月以前の記録がの……。」

「そんな奴、どこにでもいるだろう? 嫌な感じもしない……あんた

もそう思ったんだろ？」

「うむ……しかし前例が二度も三度もあるとな？」

わざとらしくチラツと山の方へ目を向けるジジイ。

ここからは見えないが……方角はあっているだけに…。

「わかった。幾つか話して感じた事をジジイに報告。それでいいな
？」

「うむ。頼んだわい……君の家に行って貰うとしよう。」

「会議室か、指導室で良いぞ？」

「問題が無ければこの子は君のクラスに配属される予定じゃ。極めて優秀での、今も大学の工学部にいるはずじゃ。」

……”あの”工学部か？

寮監時代の生徒があそこへ行つて一度とんでもないモノをお礼と称して持ってきた様な気がする。

以降工学部はウチでは鬼門なのだが…。

「わかった。自宅の方へ寄越してくれ。」

コンコンと規則正しいノック音が響く。

タカミチが応対する。

正式に就職したから叩きだそうと思ったのだが飯使い（誤字にあらず）が居なくなるのは朝が弱い我々にとって重要な問題。仕方なく居候をさせている。

「初めまして超鈴音ネ！」

「初めまして柚木宗一郎だ。」

やはり写真の通り聡明そうな顔立ちにハキハキとした物の喋り方。若干エセ中国人臭いのはおそらく語尾の影響だろう。まあ”よろしくアル！”とか言うより遥かにマシだ。そんな奴いなと思うがな。

「まあ座ってくれ。」

「ありがとう。」

ポスンとソファに腰を下ろす。

「学園長にも聞かれた事だと思っけど我慢して欲しい……最近物騒でね？」

「気にしないネ！不審なのは事実ネ。」

「ではまず最初に…君はどこから来たのかな？」

資料には中国の田舎とあるが……。

「火星からネ！」

「そうか火星か。寒そうな所だな。」

中国に火星なんて都市あったかな？まあ中国だしな。

「オイ宗一郎！何を流している！！お前は馬鹿にされたのだぞ？！」

「そうだね。未知との遭遇だね。はいどーどー。……超君、一応君の為にやってるんだ。真面目に答えて欲しいね……まあ面白いジヨークだとは思っけれど。」

「タカミチよりは笑えるが、今はそういう問題では無い。」

「ひ、酷くないですか？！」

「酷く無い。お前取りあえず外行け外。煙草でもふかしてこい。」

いい加減鬱陶しいタカミチを追い払う。

「じゃあ言い換えるネ。私は未来から来た人間ダヨ。」

「はあ……中国の田舎というのは嘘なのかね？」

「嘘ネ。」

「そこまで言うなら証拠を見せてみる。」

「フム……やっぱり信じてくれない力。じゃあコレを見せれば良い力ナ？」

超がそう言つて鞆から取り出すのは一体の人形。

はて、何処かで見た覚えがあ「どうやって盗んだ貴様アアアアアアアア！」エヴァが突然吠えて部屋へ駆けあがる。

「なんだとっ?!」

再び叫んで”ほとんど同じ人形”を持ってエヴァが駆け降りる。

「奇行かエヴァ?」

「宗一郎、お前に対する認識を改める必要があるか?」

「冗談だ。人形がどうかしたのか?」

「お前……覚えてないのか?」

「いや、見覚えがあるのだが……色々都合致しない。」

「お前が大昔に作った人形だ!チャチャゼロみたいなを作ろうとしたアレだ!」

「いや、それはわかるんだが……どうしてそんなにフリフリの服を着ていらっしやるので?」

「……とにかくだ。何故同じものを貴様が持っている超鈴音!」

いや、ちゃんとわかつてるよ。エヴァの少女趣味も、俺が居ない時はそれを抱いて寝ている事も既にチャチャゼロから聞いた。

「一つしか無いモノが同じ時間軸上に存在している。それが何よりの証拠ではないカネ？」

本当に同じものか確かめる手段はある。

「超、それを貸してくれないか？」

「いいヨ。しっかり確認するネ。」

おもむろに服を剥いで背中小さな穴に針を差し込む。

「なにを？」

ポロポロの紙の中。黒と金の編んだものが出て来る。

「それはなんだ？」

久々にコテンと首を傾げるエヴァ。

「ほら18世紀頃に流行っただろっ？ヴィクトリア女王がやってた奴だよ。」

「まだ死んで無いだろー！ー！ー！ー！ー！」

「抱いて寝てる時俺の臭いがするー。とか言ってただろ？」

「なあっ！？」

頭からきこ雲が上がってフラフラとソファに倒れる。

全部戻して超に返す。

「信じがたいが……君は未来から来た。もしくは、完全に複製したか。」

「私もまさかそんな仕掛けがあるとは思わなかったネ。」

うん。まあ……戯れで作ったからな。

「で、何が目的かな未来人さん？」

「宗一郎サン。私に協力してくれないカイ？」

「断る。まずは内容を言っただけで貰わないとな。」

S i d e 超

嘘と事実を交えて話す。

決してバレ無い様に、断言する様に。

真実を知ってしまったら絶対、私はコロサレル。

この世界そのものを壊そうとしてしまっ。

S i d e e n d

「つまり……近未来に起こる魔法世界を襲う災害から救い出す為に魔法を広めると？」

「簡単に言えばそう言う事ネ！」

「確かに……魔法が認識されない限り避難は難しいな……。だが、」

「決して人を殺すような作戦では無いネ！」

世界樹を利用した全世界を対象にし強制認識魔法……。

「強制と言っても頭に叩き込むような影響は無いネ。魔法っていうのがあるんだーぐらいのものヨ。」

「しかし……。」

「今はまだ決めなくていいヨ。でも未来人である事や計画を他に話さないで欲しいネ。考える時間は三年程アルヨ。」

そう言っつて超は帰って行った。

「信じるのか？」

「未来人であるという事実は確かだ。しかも俺達と親しい。」

「どういう事だ？」

「あの人形、そう易々と渡すか？」

「無いな。」

「そういう事だ。俺とエヴァ、ないしはエヴァに近い人間でないとアレを手に入れる事は不可能。」

「弟子以上……と言う事だな。」

「それか……災害が事実で渡さざるを得ない状況になったか。」

「それでも見ず知らずの人間には渡さん。」

「だろうな。必然そういう関係であるのは確定……盗んでいるとしたら腕の一本二本は泣き別れだろう。」

「そもそも生かして帰すか。」

「まだ結論を出すには早いが……救える命は救いたい。」

「私はどう転んでも傍観に徹するでしょう。過去を変えるなど私には侮辱だ。」

「そうか?」

「そつだ。私は真祖の身体を憎んだよ……それでもな、その身体だからこそお前と共に歩めるのだ。ならばやり直しなど必要無い。この歩んで来た道こそが私の誇りだ。」

「俺は……救えるのなら救いたい。超にとっては過去かもしれない……でもな、俺達からすれば未来だ。防げるモノなら防ぎたいと思うのが。」

「まあそう言うだろうとなお前なら。好きなようにすればいい……
…フォローだけはしてやる。」

「ありがとうエヴァ。背中には任せたまよ。」

「……………任せておけ。」

Side タカミチ

「ええ、そうです。ただの中国人の少女ですね。確かに勘やセンス、
頭はいいですが…そこまです。魔力も持っていますし……
魔法を知覚している事も、魔法は科学で証明できます。実験等で至
ったのでしよう。」

「しかしのう……………ううむ。」

「むしろ魔法の知覚云々以前に自立思考する機械を創り出す方を不
思議がるべきですよ。」

「それでものう……。」

「というか……………天船の様な魂から臭う様な腐臭がしない。注意する
に越した事はありませんが警戒し過ぎて肝心な所でボ口を出されて
は困るからな。……………と、以上です。」

「見事にセリフを先読みされとるのう……。タカミチ君、君から見
て彼女はどうじゃった？」

「そうですねーいきなり火星人とか言い出したり意味が解らない時
もあります。大丈夫だと思いますよ？なにより宗一郎さんとエヴ
アがOKを出したなら僕が言う事は何も無いと思います。」

「うむ。解った……。ご苦労じゃったな。」

はあいつもいつも面倒事は僕に任せるんだから……。
世間ではもう一人前の男なただけどなあ……。いつまでも子供扱いは
困る。

ある、晴れた日の午後。

春の訪れを感じつつ、もうすぐ訪れる宗一郎さんの教師姿が見られ
ると思うと心なしか黒い笑顔がでる。僕だって振り回されるのだ…
： 大人な態度を取っているけど内心はガタガタさ。

そんな風に憧れている人がなるのは…… 実に楽しみだ。ああ楽しみ
だ！

しずな先生は優しい様に見えて自覚無くチクリチクリと決るから怖
い。

ほとんど同期だとは思えないよ。

家に帰りつき扉を開こうとする。

開こうとする。

……開こうとする!!!

こんなに重かったかな？そろそろリフォームかな？！

もう一度力を込めて開く！

「あ、開かない!?!」

ガラッ

窓が開く。

「あ、タカミチ。何をしてるんだそんな所で？」

「あ、じゃなくて！開けて下さいよ宗一郎さん！」

「お前に紹介したい子がいるんだ。ほら茶々丸、挨拶。」

「初めまして高畑様。この度、高畑様に代わりこの家の雑事の一切を引き受ける事になりました絡繰 茶々丸です。」

「え？」

「そついう事だから、お前今日から職員寮な！」

「え？」

「そういう事ですので失礼致します。」

「え？」

ガララと丁寧に窓が閉められる。

「う〜う〜う〜 あんまりだ…あああんまりだああアア！」

Side end

「お、おい……何か叫んでるぞアイツ……。」

「扉開けたら間違い無く泣きながら飛び掛かってくるだろうな。」

「エシ……何でも無いわ。」

「食事の支度が出来ました。」

「お、悪いな茶々丸。」

「ふむ、中々……。」

「すごい……間違い無くタカミチより上ね。」

「宗兄！早く！」

「そんな事を言われても…むう…ネクタイなど600年振りで…。」

「ああもう時間が無いわ！始業式と入学式なのよ？！シルバースキ
ン帽子無しで展開すればいいじゃない！！！」

「それは名案だ！ロード：シルバースキン！！！」

「いいわけあるかあああああ！！！！！」

「とてもお似合いになっています。」

「ありがとう茶々丸。じゃっ行ってくる。後で会おう！」

「話を聞けえええええええ！！！」

暴風のような朝。

明日菜と二人麻帆良学園までの道を疾走する。
いや既に疾走の域は越えて瞬動で動いているのだが……。
正に才能の無駄使いという奴だろう。

「おはようございます！」

なんとか職員会議前に滑り込む事が出来た。

教師。実に重い職業だ。

生徒の人生を簡単に左右出来てしまう。

「柚木先生、初担任ですな。頑張ってください。」

「ありがとうございます新田先生。」

一般の先生どころか魔法先生まで特別クラスを把握していないと言
うのだからぬらりひよんめ。

式を終え、1-Aのプレートが垂れ下がる部屋の前で大きく深呼吸
をする。

ガラリツと扉を開けて入ろうとするが嫌な予感を感じ一瞬立ち止ま
る。

目の前を黒板消しが通り過ぎて行く。

「黒板消しトラップ……ふむ。まだ仕掛けが甘い。」

ソレをキャッチして教壇へ向かう。

「はじめまして、君達の担任なる柚木宗一郎だ。」

自己紹介して、カツカツカツとチヨークを響かせ名前を書く。

何かソワソワした空気を感じる。

すぐにただの授業の受け持ち教師でも質問タイムが取られている事に思い当たる。

経験上色々吹っ飛ぶので点呼だけ先に取る。

おい……なんだこのクラスは？！

何故かいる真名、木乃香と刹那はまだしも楓とかいう少女。

超を筆頭として明らかに留学生が多い。

上は真名のおかげで年齢不詳から下は鳴滝双子の偽小学生コンビ。

おいおい普通双子はわかるだろう？！

長谷川千雨？はて、昔どこかで……。

そして……うんうん茶々丸はちゃんと溶け込んでるな。

拳句の果てが……幽霊。頭が痛い。”頭痛が痛い”レベルの話だぞ？

「さて、ホームルームはもうすぐ終わるわけだが……一時間目は俺の授業だ。何か質問はあるかね？」

その途端教室が爆発しそうな勢いで手と声上がる。

「落ちつきたまえ！」

効果なし。

「……………」

足を軽く震脚の要領で地に付ける。

ズンッ

一気に静寂が訪れるが、今を見て古が目を輝かせた様に見える……が、気のせいだ。

「出席番号順に一つだけ質問したまえ。」

「柚木先生と伝説の寮監は同一人物ですか?!」

「伝説かは知らんが寮監をしていた事もある。」

伝説の寮監?何の話だ?明石教授の娘の割に意味が解らん。

「はいはいはい。柚木先生は恋人とかいるのかい?」

「婚約している。」

おおー!とか舌打ちとかが響く。

やはり女子中学生だなあ……人の恋愛などに興味があるのだから。

「何歳ですか?」

「何歳に見えるかね?秘密だ。」

622歳ぐらいになるな。

「柚木先生って二人いるけど、あの人婚約者ですか?」

「明日菜先生の事だな?まあ兄妹のようなものだ。婚約者では無い。」

「
書類は養女だな。

その後は趣味やら何やらとお決まりの質問にお決まりの答えを返す。

「さっきのは震脚アルか?!」

……アルって付ける中国人って居たんだな……

「そのようなものだ。」

「ラブ臭がします!!!」

「はい次。」

そして遂に真名の順番が訪れる。

頼むから不用意な事は話さないでくれよ?

無言で立ち上がり、ニイと……その笑顔は危険だー!!!

「シトーさんは私と結婚してくれるものだとばかり思っていたのがね?」

ぶふおつと噴きだす音が3つ。

その主、俺と刹那と木乃香。

「ど、どどどどどどどつ言う事かなー!」

次は長瀬楓…なんとか逃れたな。

「拙者と手合わせして欲しいでいぢやるー！」

「断る。相手にならん。次！」

「柚木先生！教師と生徒の関係。聞き逃せませんわ説明を求めます
！」

ゆーきーひーろー！！君は真人間だと思っていたのに……。

頭脳明晰・武芸百般。

あの姉と母の血を引いてる事から考えて委員長だろう……。
このクラスのストッパーになり得る人物だったのに！

しかもよりもよって最後か……。

「……………これ以上の話は龍宮自身の過去の話になる。よってこれ
以上の説明は無い。」

しかし追撃を諦めない朝倉と雪広、早乙女。

興味無いふりして一番きよろきよろしている刹那。

「あー先生、ちょっと戦いたくなってきたなあ。」

チラッと長瀬と古に視線を飛ばす。

「やるアルヨ……！」

「やるでいぢやるー！」

途端に誰が勝つかの賭けが始まる。
朝倉もそちらに飛びつく。

「さて、数学の時間を変更して野外活動だ。一人ずつ来たまえ。」

まずは古菲か……。一般人とはいえ武道の名門の跡取り。油断は出来ない。

「ふむ八卦掌かね。」

「先生は構えないアルか？」

「いらぬ。来たまえ古菲。」

古菲が最初の一步を踏み出す瞬間。

「え？」

ベチン

瞬間からのデコピン。

おおーという歓声。多分大半は何が起こったかもわからず適当に言ってるだけだろう。

「次、長瀬。」

俺への賭けが爆発的に増えて成り立たなくなる。

「む……もう少し望みを持って欲しいでござる。」

「安心したまえ。君は俺に敵わない……”この場”、”この時”では絶対に。」

屋上と言つ限られたスペースで、なおかつ衆人環視。

「もちろん、俺はデコピンのみだ。」

しかも全く望むような戦いでは無い。

「それは色々と困るでござるよ。」

全て解つていてやっている。

長瀬は一段早く瞬動に入る。

「ぬっ?!」

抜きの時点で足を掛けられて吹っ飛ぶ所に絶妙なデコピンを撃ちだす。

「終わりだ。」

おおーと言つ声、えなに?どついつことと言つ声が響く。

このクラスを三年間……血を吐きそうだ。そう思いつつ俺の本格的な教師生活は幕を開けた。

48話：超鈴音。詰め込み過ぎ?! 1 - A (後書き)

やっとネギ襲来までのカウントダウンです。

古菲の菲が出てこないっいたらありやしない。菲って書きたい気持ちを押さえつつ菲はWikiからのコピペでいきたいと思います。

ネギってAB型、超はO型。孫以降なんですよねえ

超の言動からすると朝倉やパールを感じる。

49話・日々は賑やかで…(前書き)

6・14 18:30 誤字脱字修正。

49話：日々は賑やかで…

全く……何処がまとめにくいだ…。

俺こんな団結したクラス初めて見たぞ？

最早恒例行事と化したトラップを次々に回避しつつ教壇へ行く。

「こらー。バケツと水は辞めなさい。汚れたらどうするんだ？まったく。」

先日はいきなり歓迎会と称して教室でパーティーだ。

ただ単に騒ぎたいだけじゃないのか？とも思うが、歓迎してくれると言う事は…まあ嬉しかった。

Side 美空

今日もかわしたー！

お願いだから引つかかってよ柚木先生ー！

” いいですか美空、そのカメラでここにある写真以外の柚木さんの姿を撮影しなさい”

ストーカーじゃないですかね?!その写真の量!!!!なんですかそのポスター!?

” えーいやっすよ”

”もし撮影出来たり、新しい情報を得たらその日の訓練は無しにしましょう”

”マジっすか?!やるます!やるっす!”

”その代わり何も得られなければ3倍です”

”ぎゃー!”

な、なんとしてでも情報を……シスターシャークティに話せて、知らない情報を……!

龍宮さんが告つてたなんて報告できないっすよ?!殺されるっす!

Side end

「ん。今日はここまでの範囲だな……何か質問はあるか?」

とまあいつも授業の終わりに質問の時間を取っているが、いまだに授業に関する質問が無い。

本当に授業内容解っているのか甚だ不安だが……まあエスカレーターだしなあ。

テスト結果で居残りさせるか……。

ここで躓くと高校に響くからな。

「センサー!朝神社に居ませんでしたか?」

「む……あんな時間に出歩いていたのかね?参拝だよ。」

「ぎゃー。」

「どつした春日!？」

いきなり奇声を発する春日美空。

この子は確か、シスターシャーケティの所の……。

真祖に十字架など効かんが……どうも麻帆良の教会は変人が集まりやすいらしい。

シスターシャーケティはファンクラブの人間らしいのだが……あの部屋は正直勘弁願いたい。

雑誌が二冊ずつあるんだ。俺がインタビューを受けた奴や帝国の宣伝とかの載ったモノだけ。

壁は写真とポスターで埋まっていて天井を侵食しつつある。

そ、そこまでなら許容しよう……。

コレクターと言う者は見る用、保存用、布教用の3つを用意すると早乙女に聞いた。

早乙女はそちらの道の専門家なので恐らく正しいだろう。

ポスターは市販品とファンクラブ限定品。

1枚数万ドラクマの物があつた様な気がした。

写真は……心なしか盗撮臭……いやいやそんな事はしない筈。仮にもシスターなのだから。

しかし傍に写る女性の顔全てに丁寧に十字架が打ち込んでるのは気のせいですか？

いいえ事実です。

悲鳴を上げなかった自分を褒めてあげたい。引きつる顔で必死に笑顔を作つて逃げだしたものだ。

Side 春日美空

「ん。今日はここまでの範囲だな……何か質問はあるか？」

やっと終わったー……数学とかわからんですよ。

xとか生活に何の影響も無いっす。

成績も400位以下にならなければいいんですよ。

もう当てられない様に養鶏場のチキンの如くプルプル震える事が私の仕事だね！

「センサー！朝、神社に居ませんでしたかー？」

神社？いやいや教会へ行つて下さいよ柚木先生！！

「む…あんな時間に出歩いていたのかね？参拝だよ。」

「ぎゃー。」

参拝……つまり神道って事ですね？！

余計報告出来ないよ？！

か、改宗しませんかね？主に私の為に。

ほら両方ともGOODですよ？和か洋かの差ですよ？！

きっと洋物のGOODの方がナイスバディですよー！ー！ー！？！

Side end

「 柚木せんせい美空ちゃんがダウンしたえー。 」

「 和泉ー。保健室へ送ってやれー。何処かで頭をぶつけたのかもしれん。 」

「 はい。 」

まったく…ままならん。

教師の仕事は面倒だ。

まあもつとも家や別荘で一日中ゴロゴロとしているよりは健全だとは思うが。

ココにいると銃弾飛び交い砂塵が舞う戦場が遠く感じる。

実際は小型ボートで行ける場所が紛争地帯であるにも関わらず……。

「屋上とはいえ中学校の校舎で煙草はどうかと思っよシトーさん？」

「マナのお陰で色々忙しかったからな……。」

「酷いなあ……。で、考えてくれたのかい？」

「仮契約も本契約もこれ以上する気は無い。マナも真名になればいい……。平和に暮せ。ここはソレが出来る国だ。」

「それは出来ない。シトーさん私も超の計画に参加……。いや雇われている。」

「なにっ!?!？」

「早く決断した方がいい。来週には計画の第一段階が始まる。それから……。私は諦めないよ。」

片手をヒラヒラと振りながら屋上から出て行くマナ。

俺はその背中に声をかけることが出来なかった……。

「本当にいいのかな？」

「ああ、協力しよう……それで超、何人巻き込んだ？」

「柚木先生に龍宮サン、ハカセ、五月、茶々丸ネ。エヴァンジェリ
ンは不干涉を誓って貰えたネ。」

「待て超！五月は一般人だろう?!」

私から協力したんですよ柚木先生？

「四葉……いいのかね？」

「五月に協力してもらうのは第一段階だけネ。」

「マナも言っていたが…第一段階とは？」

「名付けて超包子作戦。世界の全てに肉まんを！」

グツと胸の前で握りこぶしを作る超。

「……………?」

思わず首を傾げてしまう。

「冗談ダヨ…半分は。中華料理店を出すネ。会議はそこでやるネ…
…資金もココで作るヨ。」

「そう言う意味か……強制認識で肉まんを買わせるのかと思ったぞ
?」

「ソレは……………考えておくネ!」

笑えない冗談だ…。

私は好きなお料理が出来て、自身の為にもなるので第一段階だけ協力させてもらいます。

ああ……将来は自分の店を持ちたいと言っていたな…。

「ありがとう四葉。」

「おや？私には礼を言ってはくれないのだねシトーさん？」

いつの間に現れたのかマナが茶化してくる。

「君は”雇われた”のだろうか？」

わざわざ強調して返す。

「シトーさん、背中に気を付ける事だね？」

「よく狙えよ？」

仲間割れはいけません！

コアラの幻影。

「あ…：すまない。」

「悪い。」

ああ…そういう意味での四葉君か。

「さて、そろそろミンナに大まかな流れを話しておくヨ？」

「ああ頼んだ。」

「まずはこれから超包子を盛り上げるネ。まあこれは五月が居る限り問題無いネ。次に2003年2月、ナギ・スプリングフィールドの息子ネギ・スプリングフィールドが麻帆良学園に教師として来る。」

「待て超！教師だと？！アレのガキはまだ10歳も行って無いだろっ？！」

「メルディアナ魔法学校を飛び級で卒業するヨ。」

「それ本物か？あのバカの子が？」

「残念な事に本物ネ。」

「そうかそうか……巧い具合にアリカ王女の頭を継いだか。」

「続けるヨ？」

「すまない続けてくれ。」

あれの息子が飛び級とか考えると寒気がするな。

頭が良いうえに父親譲りの魔力、恐らく正義馬鹿……それでもって王家の血？

明日菜の甥と言う事は……身内？
いやいや駄目だ。

「……まあ驚くのはわかるネ。次、ちょうど私達が3年生の時に世界樹が22年に1回の発光現象に入る。その時ようやくコレが使えるネ。」

超が取りだしたのは時計の様な機械。

「懐中時計型航時機カシオペア。使用者の魔力を消費して時間跳躍する機械ネ……私には魔力が無い。だから世界樹が発する魔力を利用して事を起こす。」

「それは俺でも使えるのか？」

「使えるけど今から多用すると肝心な時に使えなくなるヨ。切り札と思つて欲しいネ。」

「……それで俺達はどうすればいい？」

「柚木先生は情報を流して欲しいネ。龍宮サンは柚木先生のサポートと魔法使いへの協力をお願いするヨ。決行日には二人で魔法先生と魔法生徒を制圧してもらつヨ。イイカナ？」

「ああ。引き受けよう。」

「超、協力とは？」

「傭兵として動いてくれればイイネ。でも本気は出さないで欲しいヨ。」

「フツ今までどおりだ。問題無い。」

「じゃあ解散ネ。連絡は超包子か茶々丸を使うネ。」

「超、茶々丸を”使う”とは言わないでくれ。」

「悪かったヨ。連絡は茶々丸にお願いするネ。」

Side 超

茶々丸にあそこまで反応したのは意外だったネ……。計画を少し変更する必要があるヨ。

「ハカセ、茶々丸のコピータイプなのだが。」

「なんです超さん？何か問題がありましたか？量産ももうすぐ出来ますけど？」

「イヤイヤ問題は無いネ。でもチヨット変更があつたネ。個々に茶々丸の様な思考を持たせるヨ……システムの調整は柚木先生にして貰うネ。」

「うーん…もしかして茶々丸の成長の件を鑑みてですか？」

「あそこまで早期に成長するとは思わなかったネ。柚木先生の影響が多分にあると思うヨ。」

「解りました。ただし完成は2003年ぐらいになりますよ?」

「問題無いネ。2004年までに万全になっていけばイイヨ。」

歴史が大きく変化しない限り2004年6月下旬に発光期を迎える
筈ネ。

S i d e e n d

エヴァとじゃれあう茶々丸を見ていて言葉が思わず漏れる。

「しかし……すっかり茶々丸も人間らしくなってきたな。」

「そう…でしょうか?私にはわかりませんが…。」

漏らした言葉に茶々丸が素早く反応する。

「あの言葉から随分変わった様に思うがな?」

「あの言葉?」

「もし君が自分は人形だと泣き叫ぶのならば、我々は玩具に人
を
思える馬鹿どもだと教えてやる!」
だつたかな?いやあアレは近年
稀に見る興味深い問答だつた。茶々丸は自分を人形と言
い
宗一郎は
人だと言つ……いやはやクツクツクツ。」

エヴァは大仰に俺のモノマネをして本当におかしくて堪らないと言
う様に笑う。

「私はどちらかと言うと、”合理的な答えなら機械でも出せる。ば
かなことをするのが人間の仕事だ

。そして茶々丸、君の行動は良い意味ではかな事をしている。”が
印象的、いえ記憶に深く残っています。」

こう何度も言われると自分の言ったセリフが酷く恥ずかしい物であ
るかのように感じてしまう…。

「ああ……宗一郎に頭を撫でられて熱暴走した拳句皿を叩き割った
時だな。……先に言うておくが渡さんからな？」

「え、あ、いえ、そういうわ、わけでは！」

「エヴァいじめるなよ…大人気ない。」

「いじめたわけではない！……くっこのポケロボめ！ええい巻いて
やる！巻いてやる！……！」

「あ、あああっあああー。」

「ふう……。」

茶々丸のネジを巻き倒してご満悦と言った様子のエヴァ。

茶々丸はフラフラとキッチンへ向かう。

「それで、宗一郎。明日菜やタカミチには教えるのか？」

弛みきつた顔を一瞬で正し、真剣な目でこちらを見上げて問う。

「いや…明日菜やタカミチは勿論、刹那にも木乃香にも秘密だ。俺達だけでやる……。最悪の事態が起こっても容易に逃げられる俺達だけだな。」

「タカミチやあの二人はともかく……明日菜は追ってくるぞ？バレた時ただじゃすまないだろうな。」

「わかっていてやる。………もしかしたら、止めて欲しいのかもしれない俺は。」

「私が止めてやるのか？」

「いや…きつとそれじゃあ止まらないのさ。俺のやる事は矛盾する……あの子達を巻き込まない様にすると言いつつ、世界まるごと巻き込もうって言うんだからな。動き出した俺を殴ってでも連れ戻すのは明日菜イモウトの仕事だろ？」

「そんな仕事は知らんが……お前が言うならそうなんだろうな。妻では無く、姉という立ち位置を狙えば良かったと思うよ。」

「姉は………もうこりこりだよ。」

力無く笑う俺にエヴァは深く追究しなかった。
力無く笑う宗一郎に私は深く追究出来なかった。

49話：日々は賑やかで…（後書き）

しばらくはネギ前の学園編です。

今の時系列としては2001年の学祭前辺りです。

次回

50話：笑う死神と銀の悪魔

50話：笑う死神と銀の魔王（前書き）

1話毎が少ないお陰でもう50話こえてしまったー！

お気に入り登録1000件突破しました。正直行くとは思ってませんでした！

みなさんありがとうございますー！！

50話：笑う死神と銀の魔王

三人娘がウィンドウショッピングをしながら仲良く話していた。

「んーやっぱり柚木先生が伝説の寮監だと思っただにゃー!。」

「えっと確かゆーなお父さん達を引っ付けた人だったかな?。」

「うん寮監してたって言うてたし間違い無いと思っただよ!。」

「でもそれやと柚木先生が40代なんて事になってまっつんと違っ?。」

「あ………。」

亜子の冷静なツツコミに裕奈は頭を抱えてしまう。

「高畑先生より年上なのは確定みたいだね。」

「そうなん?。」

「うん。高畑先生が柚木先生の事を師匠とか宗一郎さんって呼んでたからね。」

「ししよー?!なんの師匠かにゃー?。」

「やっぱりアレじゃないかな?。」

「ああ…アレかー。」

「アレやろうなあー。」

三人の頭に思い浮かぶのは二人の少女がデコピンで吹き飛んでいく光景。

「でも私はああいう所が好きだなあ。」

あんまり暴力的じゃないし…と小声でごにょごにょ。

「おっアキラも遂に恋愛かにゃ？」

そんなアキラに裕奈が素早く反応する。

「ち、違う違うそんなじゃないよー！」

アキラは両手を振って必死に否定するが顔は真っ赤。

「アキラもなんやあ…。」

「ん！まさか亜子も？…くぁーッこりゃ柚木先生モテモテだね！いやまいっただお父さんとか言ってるの私くらいじゃない！」

「……………」

「ふお…フオローが欲しいにゃー？」

「あ、ごめん。本気だと思ってたから…。」

「ゆーなはお父さんにゾッコンや思つてたから…」。

「いやいやお父さんが好きなのは変わらないよ！」

「変わらないのかー！ー！ー！ー！ー！」

「おっ可愛い子はっけーん！ねえねえ君、俺とデートしない？デー」。

「なんですか離して下さい。」

いきなり茶髪にピアスを付けた男が話しかけて来て腕を掴んでゆーなを引つ張る。

「離して下さい嫌がつてるよ！」

「ああん？」

「おっほ！俺コツチの子の方が好みー！おにーさんと愉しいとこ行かない？」

茶髪の後ろで煙草を吸っていた金髪男が亜子を掴む。

「やっやめて離してや。」

「関西弁キター！いいねえ萌えるねえ！」

「もう一度言っ離してくれないか？」

周りを見るけれど助けしてくれる雰囲気は無い。

「ツチ。デカいには興味ねえんだよ失せる！」

「ねね、君なんて名前？教えてくれたら腕離すからさあ？」

「い、和泉。」

ゆーなを掴んだ男はキレイやすくて話が通じない。

亜子を掴んだ男は完全に空気が読めない上に好き勝手。

どうする？

「うんうん和泉…なんていうのかな？」

「……。」

「おい。早く言えや……抉るぞ？顔。」

空気読めない方がナイフを出した……。

「てめえ無視してんじゃねえぞ？」

パンッ

掴まれそうになった手を思わず払ってしまつて。

ドンツとゆーなが突き飛ばして男が尻もちを付く。

「つてえ……。」

「おいおい何してんだよ？ガキに倒されてんじゃねえよダセエなあ。」

「うるせえ！！あーいてえいてえなあ！！骨が折れちまったよお

！」

「は？」

思わずポカンと口が開いてしまう。

「そんなので折れるわけ無いでしょ！！！」

それにゆーなが食ってかかる。

「ガタガタうるせえ！そうだ慰謝料寄越せよ。」

「何言ってるの？！そっちからしてきたんでしょ？！」

「ゆーな冷静に！」

まだ亜子が掴まれてるんだって！

「俺が紳士的な内に言う事聞けよ？」

こいつもナイフ持ってるのか……。

「助けて柚木先生！！！！！」

S i d e e n d

よそものの不良が入りこんだ挙句女子生徒が絡まれていると聞いて職員室を飛び出して全速力。

この時見る人が見れば解つただろう。
大戦中の俺がそこに居た。

ナイフの輝き

「助けて柚木先生!!!!!!」

「和泉伏せるツツツ！」

和泉がしゃがむと同時にフィンガースナップ

パチン……むしろパチンという音が指から響き、金髪の男が声を出す事すら出来ずに崩れ落ちる。

「なんだデメエ?!」

茶髪ピアスはナイフを抜いてこちらに向かってくる。

「俺か?この子達の…担任だッ！」

走って来た勢いそのまま突っ込む。

振り回し、振り下ろされるナイフ。

グシャリ…。

受け止めナイフを握り潰す。

「は？え？いやいやおかしいっしょ？なんでナイフが…。」

ああ、君は残念だ。精神操作系の魔法をレジストしてしまうのだね？

「逃がすとても？困るんだよ君達の様なのは直ぐに群れるから。」

逃げだす背中を掴み引き寄せる。

バチッ

「へ、へへ油断しやがったな？」

「それが、どうかしたか？」

スタンガン程度何の苦にもならない。生身で受けても…な。

「は、は、はは、ははは…。」

「もう、終わりか？」

「た、助けてくれよ…な？頼む。もうしねえから！謝るから…！！」

男の振り回した手がシルバースキンの帽子を落とす。

そこにあるのは笑顔。獰猛な笑顔。

「俺は柚木宗一郎。君ら不良にはこう呼ばれてる……銀の悪魔、銀の死神、ああ魔王とも。何故そう言われるかわかるか？どうして二度と麻帆良へ来ようとしなにかわかるか？」

「わ、わからない……た、たすけて……。」

恥も外聞も無く涙を流しそうになる男。

「……………」

頷きを一つ。

二つ。

そうして下ろしてやる。

ホッと気が抜けたその瞬間。

濃厚な殺気を浴びせてやる。

茶髪ピアスはだらしなく尿を垂れ流し気絶する。

「タカミチ。あとはいつもの通りに。」

「わかりました……………でも、やりすぎですよ？」

知った事か。

引きずられていく二人。これでいつもの通り麻帆良の敷地外で漏らしたまま公衆の面前に放置する。

そうそうあの殺気だが……人によっては心を病むぞ？
夢に見るそうだ。暗闇でも、それこそ目を瞑つても自分が殺される
姿が浮かび、それしか考えられなくなる。

エヴァ曰く一種の魔眼。それなりの呪いらしいが。そんなものを使
うほど俺はブチ切れてたわけだ。

「大丈夫か大河内、明石、和泉。」

「ゆううううううなああああつあああああああ……！！！！！！」

明石教授の御到着。

明石を抱きしめ振り回している。

良かったな不良。正しく殺される前に俺が来て。

Side 大河内

柚木先生のおんな顔初めて見たよ……。

いつもは優しそうな顔や、私達を見守るって感じの顔。
気が抜けたときのめんどくさそうな顔。

それでもあんな笑顔を見た事が無い。

笑顔なのに……まるで猛獣が牙を剥いた様なイメージが頭から離れ
ない。

亜子やゆーなは見たんだろうか……。

私は緊張が抜けたのとあの笑顔のおかげで足が震えて動けない…。

Side end

Side 亜子

助けて。そう叫んで

柚木先生は来てくれた。

でもなんやいつもと違って全身銀色で、全身から何か吹き出でて、ああ、怒ってんねやっつて解った。

伏せる言われて伏せたら。

ウチの腕を掴んどった人が吹き出た何かに押し潰されるように、一声も上げる事無く倒れた。

茶髪の人がナイフを振り回して、先生に当たった。

ウチは怖くて目を瞑ったけど……足元に落ちたナイフは、まるで飴細工みたいで…。

逃げようとする人を捕まえて、帽子が飛ばされた。

思わず息を呑んでもうた。

そんな時くらいちゃんが言ってた事を思い出した。

”笑うと言う行為は本来攻撃的な意味アルヨ。獣が牙を剥くのと同じネ。ガオー！”

あの時は冗談や思ったけど。

怖いって言うのと同時になんでやる……もう一度見たいと……思っ
てまっ。

S i d e e n d

おお……デスメガネと魔王だ。

なんだよ魔王って！

死神や悪魔つてもんじゃねえだろあの強さ……。最初のやつは遠当ても
でも無いらしい。

ネットで見たんだけどよお銀の悪魔って昔もいたらしいぜ？

マジかよ？

女子寮の寮監で絶対の壁。全ての男の敵。今ならイージスって名前
が付くぜ……。

デスメガネが従ってるって事はよ……魔王が学園最強か？

なんでも師匠らしいぜ？

いやいや年齢おかしいだろ？！

噂じゃ波紋極めただとか吸血鬼だとか。

それ漫画の読み過ぎだろ。

周りの声が耳に入る。

核心を突いた言葉もあったが学園結界で誤魔化された様だな……。

「さて…怪我は無いみたいだな？明石は教授に拉致されてしまったわけだが…まあ今日は帰りなさい。」

「はい……そのありがとうございました。」

「どうした大河内？足が震えてるぞ？」

「いや、そのちょっと力が抜けてしまって……。」

「では送ろう。背中に？まりたまえ。」

「え？いやあの……。」

「お姫様抱っこは拙いと思ったのだが……。ふむ、しばし待ちたまえ。」

シルバースキンを開け、スーツのポケットを探す。

「あった。」

ソレを掴んで大河内に渡す。

「…これは？」

「リコリス飴だ。舐めたまえ幾らかは落ちつくだろう。和泉も舐めると良い。」

「そういえば……柚木先生がゆーなのお父さんとお母さんをくっ付けたってホンマなん？」

「ああ…そうらしいな……そんなつもりは無かったのだが。」

女子寮に近づく不埒者として幾度と無く投げた覚えがある。

結局俺が根負けして理由を聞いたら辿り着いたら付き合っても良いなんて無茶な内容だったのだが……。結局付き合って結婚して、その子供が生徒になるなんて喜劇としか言いようが無い。

「でもそれやと先生の年齢が……。」

「40歳も手が届くという年齢のはずでは？」

「俺の年齢は……秘密だ。」

「なんで？」

「その方が恰好良いから。」

「「は？」」

「クク……。大分落ちついた様だな…寮まで送ろう。」

Side 和泉亜子

「結局何歳なんだろうね。」

「最後思いつきり誤魔化されたなあー。」

「……………もしかして吸血鬼だったりして……………なんてね？」

「アキラ……………」

「え、亜子？冗談だよ冗談。本気にしちゃ駄目だって。」

「十字架……………当ててみる？」

「た、倒してどうするの？」

「あ。倒したらアカンやん……………」

「その前に吸血鬼なんているわけないよ。」

「そう、だよな。」

でもウチの頭からは離れへん。
燃え上がる様な何かとあの瞳……………。

いつか何も言わずフラリと遠くへ行ってしまう……………そんな気がした。

「超、何か用か？」

「お、やっと来たネ。柚木先生にはコレの調整をして欲しいアル。」
そこにあつた……いたのは一体の茶々丸っばい子。

「この子は？」

「名前はまだ無いアル。同系機を50体ほど量産しようと思ってるネ。」

「何故俺が？そついう機械操作的な物は苦手なのだが？まあ…エヴァ程ではないが。」

携帯。それこそ転生する前は使っていたが……ほぼ着信専用だったように思う。

アレは中々に便利で外に出ているボタンに3つまでの番号を事前に登録しておけばそのボタンを押すだけで電話を掛けれる。
こちらでも手に入れるべきなのだがゴチャゴチャと色々付いている拳句に説明書の分厚さと言ったら眩暈がする。

「それは私から説明します。茶々丸の成長にあれだけの影響を与えたのは柚木先生である可能性が大きいんです。それで量産型の子達は茶々丸の記憶を転写して動かそうと思っていたんですが、柚木先

生に調整というか……コミュニケーションを図って貰ってですね、より幅広い自律行動を……」

葉加瀬の論が熱くなり始めようとしているのに気が付き急いで止める。

「すまん葉加瀬、君が言っている事が理解できない。工学方面には疎くてな……」

「つまり量産機にも茶々丸と同じ様に接してあげて欲しいアル。それがより広い戦術を生み出すネ。」

「ああ、そう言う事か。理解した。」

「ただいまー。」

「おかえ……いつ?!」

「宗一郎！またか！また新しい女か!!!」

「マスター落ちついて下さい。恐らく私の妹機では無いかと判断します。」

「茶々丸の言う通りだ。量産するらしくてな……その走りを俺が引き受ける事になった。起動することに別荘に入って貰う。」

「ふむ……別荘の方の手入れもいい加減しなくてはならんしな……。」

そう別荘の掃除は我々にとって死活問題である。

俺とエヴァはそもそも掃除などしない。

俺は仕事じゃない掃除はしないし、エヴァはそもそもそういう生活能力が皆無。

と、なれば必然タカミチの仕事だが所詮男。

明日菜も整理整頓は比較的苦手。元々がお姫様だったりなわけで…。

その上、明日菜とタカミチは人間。長時間中にいるものではない。

そこへ茶々丸が来たのは大いに助かった。

正に救いの手だった。

辛うじて綺麗だった家は綺麗な家になった。

「よし、では私が名前を付けてやろう。」

「申し訳ありませんエヴァンジェリン様。既に名前はマスターから頂いております。」

「なん……………だ…と？」

そう言っただけに見えるのは花の種の袋。

「カンナと申します。」

「いやエヴァが名付けるとチャチャなんとかになりそうです…。」

「……………」

図星か。

チャチャゼロ、茶々丸と続ければおのずと先が読めるというものだ。エヴァの感性からしてチャチャネ辺りだろう。

「ちなみにあと最低49人送られてくるが……名前のストックはあるか？」

「……………無い。」

そんなにシヨボくれた顔をされると…はあこついう所が甘いのだろ
うな。

「服装はエヴァに任せよう。統一50組みの制服だ。費用は……超
が出すだろう。」

「宗兄！微妙にヒモだよ?!」

「家計が割と火の車なんだ仕方が無いだろう?!」

「それどう考えてもエヴァのワガママのせいだよね?!」

「日中一人で寂しく過ごすエヴァの為なのだ！仕方があるまい?!」
エヴァが好む容姿の19で成長を止めたのだ。あの姿で涙目になっ
て”寂しい。あれ買って。” 縋る様に言われて突っぱねる奴がいた
ら驚きだ。

「本かやの碁盤なんて高級品買うからでしょー！塩ビ製でいいのよ
！エヴァに甘過ぎると思うんだけど?!」

「その件では言い訳させて貰おう。エヴァを外部の指導員として囲
碁部に捻じ込んだ。それに初めにねだられたのは100万越えの高
級品だった。3分の1にした俺を褒めて欲しい。」

「そこ?!そこなの胸張る所?!」

「ええい明日菜五月蠅いぞ。お前は絵の方に使ってるだろう?!」

「私のお給料なんだもん!それに美術部の顧問なのよ?!」

「明日菜、そういうのは巧く経費で処理するものだ。」

「あーまたエヴァに付く!テオに手紙書くんだから!」

「ちよっ?!明日菜!」

「ああ悲しいわ。私に髪飾りを買ってくれた時の宗兄は何処へ行ったのかしら。このままでは悲しみのあまりテオにある事無い事書いて送ってしまいそう。」

「待て、それだけは辞める。」

「ククク、やっつてしまえ明日菜。宗一郎がこちらで私と結婚したと報告してやれ!」

「……………ヤッパリ辞めた。それだとエヴァが得しちゃう。」

「何処が得だ!?魔法世界に戻れなくなるぞ?!」

「というか真面目にこっちへ侵攻しかねん。」

「私戻る気無いし?」

「そういう問題じゃなああーい！」

「私有家計管理するべきでしょうか姉上？」

「ソノ方ガイイナ。旦那御主人ニ甘々ダカラナ。明日菜ニモ、才前ニモ甘イケドヨ。ツーカー誰一人マトモナ生活デキネェンダヨ。」

「初めまして量産型のカンナと申します。」

「ハハハ良カツタナ茶々丸。妹ガ出来タジャネエカ。」

「ありがとうございます姉上。カンナでしたね？宗一郎さんは後継機や量産型という機械扱いを嫌がる人です。自分からでも人形やロボットというのを控えるようにした方がいいですよ。」

「……良く解りませんが、記憶に置いておきます。それで…あの、頭の上の方は？」

「俺力？チャチャゼロダ。才前達ノ姉ダ覚エトケヨ。」

50話：笑う死神と銀の魔王（後書き）

アーオレノ出番ガネエナ。作者ドウナツテイヤガル？

ア？片仮名ガ面倒ダト？ナマスギリニサレタイノカ？

次回ハ51話。

テストと計画ダ。

ミーセバーガーホシイー。描写サレナイダケデー。

普段ハ茶々丸の頭に乗ツカッテルンダゼー。

あらあら名前すら出てきていない私はどうしたらいいんでしょう？

ちよつちづ姉？！黒いオーラ出てるよ？！

あらあら夏美ちゃんはいいわねえ魔法世界にも行けて出番も増えて
仮契約もするのよね？私を出し抜くなんて流石だわ？お尻にネギ入
れる？入れましようね？

ひい？！

まだ千鶴さんはマシよ…彼氏がいると断定された私や、魔法世界に
行かない事が確定してる私たちなんて抹消されたも同然よ？！逆源
氏計画ーって叫んだりネギ君ストーカーする仕事しか無いのよ？！

ふふ…まだ美砂はマシよ…。私なんて英単語野球拳しか…助けてっ
くぎみー！

くぎみー言うな！チア部は不遇なの！私たちなんて亜子が居ないとココにすら出れないの！

「「「「やっつて良かったデコピンロケット！」「」

皆さんなんてまだマシですよ…

「ああ幽霊までいやがる。」で流された私は……。
エヴァさんも居ないから私を見てくれる方は…。

「「「「誰？」「」

ひいーん；

……。ブンブンフルフル

ザジさんは全く出番が無いと嘆いています。
私も褐色なのにどうして？と。

作者曰く学園祭まで待つて欲しい。との事です。

コクン

許可が出ました。

いんちよーどうやって話してるの？！

真心で接すれば大抵はどうにかなりますのよ？

わたくし明日菜さんがおられないお陰で出番が圧倒的に減りました

51話：テストと計画と（前書き）

何故か学園祭編の最終話が書き上がりました。題は恐らく真祖咆哮。

何故？何故なのよー！パーン

51話：テストと計画と

一年目の学園祭をやつと乗り切り夏休み前の試験を迎えた。

「さて、明日から試験だ……解っていると思うが、一定点数以下の者は夏休みが飛ぶと思え。」

「えーやだー。」

「困るです。」

「もうダメアルー。」

「ニンニン……。」

（刹那は…… + 別荘な。）

ビクッ！と刹那が震え涙目でこちらを見て来る。

（そんな仔犬つぼさを出しても駄目だ。ちなみにエヴァが相手だ。）

刹那が頭を抱えて震えだす。

「せつちゃん。大丈夫、一緒に勉強しよな。」

「ごめんこのちゃんお願い……。」

チツ。木乃香が隣と言つのは具合が悪いな。引き離してやろうか？

他の連中は比較的セーフな点数を取れているので”やった!”という顔である。
だが甘い。

「加えて、前回のテストよりも順位を下回った者は追加で宿題を出す。ああ、150位以上は気にするな。その辺からはシビアに順位が変わるからな。」

あの辺りからはたかが一点、されど一点という所になる。

ええーという声が響くがそれを制してプリントを出す。

「まあ俺も鬼ではない。全クラスに渡すが”幸運な事に”うちのクラスが最初に受け取るテスト直前の理数科系対策プリント集だ。ああ、口を滑らせてしまうが俺のテストの問題はこの中に入っている物が多数出題される。各自やる事をお勧めする。」

さて、ここまで言えば理解できるだろう。

宮崎は必死にプリントをめくり、朝倉は”全クラスに配布かー”と言う様な顔。

はあみんな宮崎みたいな子だと助かるんだがなあ……いついかなる時も真面目。

シャイ過ぎる所も正直このクラスでは、まともな部類だしな。
木乃香と那波は周りに教えている。

まあ上位三人は安定。

超に葉加瀬は不安要素ゼロ。雪広は委員長属性発揮で教え回っている。

が、下四人。

綾瀬、古、長瀬、佐々木。どうして君達は能天気なのかな？！

綾瀬は言うまでも無く読書タイム。

他はワイワイと中盤地帯の子達と雑談タイム。

まあ…いいか。

「朝倉、テストのトトカルチョ一番人気はどこクラスだ？」

「おっ流石柚木先生。聞いてから賭ける気だね？」

「当たり前だ。Fクラス辺りが人気だとは思うんだが…。」

「御明察だねえでもCの人気も中々だよ？」

「ふむ、ではFクラスに食券20枚。」

「ハハ八自分のクラスには入れないのかな柚木先生は？」

「ハハ八朝倉、無茶を言うな。ハクホークインじゃあるまいし。まあ、下四人が勉強したら500ぐらい賭けるさ。」

「ねね、先生の事何か教えてよ。なんでもいいからさ？」

「何を企んでいる？」

「いやあー先生で特集組みたくてさ？」

「なら足で集める。そうだろ報道部？」

「いやいや私は突撃班だからさあ。」

「ハハハ、学校内ならば幾らでも追いかけるがいい。特に記事にする様な内容は無いさ。」

「ははは思いつきりあるおかげでヤバい部分は認識阻害と結界で誤魔化してるけどな？」

「そうだな、今日赴任してくる教師調べればいいんじゃないかな？ ヒントはガなんとかフィーニ。」

「それただ単に名前を覚えて無いだけじゃ…。」

「そうとも言う。」

「でも耳より情報だね！助かるよ柚木先生！」

連合からの教師。

朝倉を張りつかせておけば無茶はしないだろう。
妙な物を写せば聞きに来るしな……。

「はじめまして。この度、麻帆良にて教師に着任しましたガンドルフィーニです。」

あー駄目だ。こいつの目は正義病患者だ。

日和見の瀬流彦先生はさて置き、神多羅木、スキンヘッド、式集院はこちらを良く思っていない。

中立が葛葉刀子と明石教授。

葛葉先生は関西呪術協会とは切れていない為派手な動きは出来ない。明石教授は昔の事や、娘の事もあってコチラ寄りの中立。

味方と言って差し支えないのが明日菜と言う事を聞かせられるタカミチ。

教師間の溝には事無かれ主義の学園長。

ジツとこちらを凝視しているガンドルフィーニ。

睨んでいるわけではないようだが……。

Side ガンドルフィーニ

着任数週間前。

「君は今度、麻帆良学園に着任するそうだね？」

「はい。」

「君は帝国の鬼神シルバーオーガを知っているかね？」

「ええ銀騎士や血塗れの銀という名前は聞いています。大戦終結の英雄ですが…。」

「ふむ。君はマギステル・マギを目指しているかね？」

「勿論です！」

「では奴を殺したまえ。奴は今、元史上最高賞金首闇の福音と共に麻帆良に居る。」

「は？」

「アレは英雄かもしれん。だがマギステル・マギからは反する。反する者は悪だ…わかるかね？」

「は、はい。」

「悪は殺さなくてはならない。わかるね？君が奴を仕留めた暁には…君をマギステル・マギに認定しよう。」

「わかりました。」

ある事故に巻き込まれて20年余り。

孤児となった私は連合の出す奨学金を受けて教師になった。

マギステル・マギを目指した。

あの日、身体を張って自分を助けてくれたあの人と並ぶ為に……。あの日助からなかった人と同じ犠牲者を出さない様に……。いつかあ

の人を助ける為に…。

「はじめまして。この度、麻帆良にて教師に着任しましたガンドル
フィーニです。」

居並ぶ同僚の方々の前で挨拶する。

幾ら自分が魔法使いとして優れていても教師としてはまだまだ新米
だ。

緊張する。

ふと視界の端に見覚えのある顔があった。

あの日、自分を助けてくれた魔法使いに似ている。

いや、そんな筈は無い。あの人はもう40弱だろう……。息子さん
だろうか…？会えるのなら会って礼が言いたいものだ。

しかしどう言い出したものか……。もし一般人として育てておられ
た場合：いやいやそんな馬鹿な事をする筈が無い。

マジステル・マジとは魔法使いである限り目指すべきものだ。

そうだ。後で闇の福音の事を聞かなければ。銀騎士はまだしも闇の
福音が本当に学園にいて、許容されているなんて信じがたい。

S i d e e n d

Side 学園長

「学園長先生！ここに闇の福音がいるというのは事実ですか?!」

はあ…困ったのう…こついう純粹培養魔法使いは…。

生まれはともかく育ちは旧世界の者をなるべく選びたいものじゃ。

「それから銀騎士もココにいと聞いたのですが事実ですか？」

「ガンドルフィーニ君じゃったかのう？事を荒立てんでくれんか？

二人はここで静かに暮らしておるのじゃ。」

引かぬのなら記憶素っ飛ばして山中に放置しようかのう…。

絶対にガンドルフィーニ君に勝ち目は無いし、これがワシに出来る
優しさじゃ…。

「はあ……わかりました。失礼します。」

わかっておらん……。連絡を入れておくかのう。

出て行くガンドルフィーニ君の思いつめた背中を見てワシは溜息が
出る。

「そもそも銀騎士……柚木君に対面して気付かんかね?……ふう。」

Side end

「柚木先生でしたよね？」

「ん、ああ。そうですが何か？」

「はあ……面倒な。まあ策を弄して被害範囲を広げてくれるよりはマシか……」

「ウルスラの魔法生徒みたく見て見ぬふりをすればいいものを……」

「正義熱つていうのはコレだから困る。」

「柚木先生のお父様にお会いしたいのですが……」

「は？」

「思わずポカンとしてしまう。」

「停止した空間にブルルと数コール。」

「しずな先生が取って……」

「柚木先生、学園長先生からの内線ですよ？」

「ありがとうございますしずな先生。すみません話は後で。」

「代わりました柚木です。」

「柚木君かね？ガンドルフイーニ君が何かやかすかもしれん。な」

るべく穏便な方向でお願いできんか？」

「それ以前に今、父はいるか？などと聞かれたのだが？」

「ふおっ？どついう意味じゃろう？とにかく彼は君の顔を知らんよ
うじゃ純粹培養連合製の魔法使いじゃよ。」

「はあ…どうせ歓迎会と称した奴やるんだらう？あつちでタカミチ
に相手させる。」

顔を知らないのか……道理で妙な事を聞く筈だ。誰かと勘違いでも
しているのだらう。

「あとで一斉に呼び出すぞい。」

「よろしく頼んだ。では。」

ガチャリと電話を下ろし席に戻る。

「で、父だったか？」

「ええそうです。」

「死んだよとつくの昔にな。」

「そんな……。」

「俺が”15”の時に逝った。もう話はいいかな？忙しいんだ。」

思い出したくも無い話をさせてくれる。

「あの…最後に一つだけ！」

「…なんだ？」

「どんな方でしたか？」

「……………」 “妄執に囚われた狂人” だよ。」

「…え？」

どういう意味か？そんな声を背中に受けつつ俺は職員室を出た。

学園長……………。何かあっても手加減できそうにない。

「さて、皆解っておると思うが…………彼がガンドルフィーニ君。魔法
使いじゃ。」

「学園長、これはただ私のお披露目だけでは無いと思つのですが…
…？」

「ふむ。中々鋭いの…………。腕試しじゃよ。さて、誰に相手して貰お
うかの…………。」

茶番を…タカミチを選ぶのが初めから決まっているのにわざわざ「

ういつのを挟む学園長の遊ぶようなやり方は正直気に入らない。

「そうじゃな…たかは。」

「学園長！柚木先生にお願いしたい！」

「ふおっ?!」「は?」「えっ?」「?!」

「うづむ……君では彼の相手にならんぞい？高畑先生でいいんじゃないかと思うんだがなあ？」

「いいえ。柚木先生でなければなりません。」

「しかし……。」

「はあ……学園長。お望みなんだ通してやれよ。」

「い、いいのかう?」

「仕方あるまい?こうして面と向かって挑まれて断るのはアレだろ
うっ。」

「……新米の先生じゃ”出来るだけ”手加減欲しいのう?」

先程までのある程度緩かった空気がピリピリと引き締まる。

「明日菜、上着を持っててくれ。」

学園長に返事をする事無くネクタイを緩め上着を脱いで渡す。

「さて、理由の如何は問わん。私に挑んだのだ……後悔しながら地に伏すがいい。」

エヴァとの契約カードを取り出し刀を呼び寄せる。

Side ガンドルフィーニ

夜の0時。

世界樹広場という所に魔法先生と魔法生徒だけが呼び出された。つまりコレは私のお披露目会兼力試しなのだろう。銃とナイフを握る手に力が入る。

「さて、皆解っておると思うが……彼がガンドルフィーニ君。魔法使いじゃ。」

学園長の紹介に合わせて頭を下げる。

「学園長、これはただ私のお披露目だけでは無いと思うのですが……」

「ふむ。中々鋭いの……。腕試しじゃよ。さて、誰に相手して貰おうかの……。」

迷っておられるのか……ならば。

「そっじゃな……たかは。」

「学園長！ 柚木先生にお願いしたい！」

「ふおっ?!」「は?」「えっ?」「?!」

会場が驚きに包まれる。

「うつむ……君では彼の相手にならんぞい?高畑先生でいいんじゃないかと思うんだがなあ?」

「いいえ。柚木先生でなければなりません。」

あの人の息子だと言うのに、狂人などと言う柚木先生。

私は今、銀騎士や闇の福音などどうでもいい。
あなたが許せません。

「しかし……。」

何故か嫌がる学園長。

しかし助けは意外な所から差し出された。

「はあ……学園長。お望みなんだ通してやれよ。」

「い、いいのかう?」

「仕方あるまい?こうして面と向かって挑まれて断るのはアレだろ
うつ。」

「……新米の先生じゃ”出来るだけ”手加減欲しいのう?」

先程までの空気が更に強く張り詰める。

「明日菜、上着を持っててくれ。」

明日菜…… 柚木明日菜先生か。血縁者いや似て無い様だから夫婦なのだろう……。

「さて、理由の如何は問わん。私に挑んだのだ……後悔しながら地に伏すがいい。」

そう言つて契約カードからアーティファクトを取り出す。

それに呼応して私は拳銃とナイフを抜く。

「私が勝つたら父親を狂人と言つた事を撤回して貰います！」

ビシッ

「……学園長、治療技術の高い奴を今の内に呼んでおけ……。ガンドルフィーニ……貴様は口に出してはいけない時に口出してはいけない言葉を吐いた。貴様が勝てる見込みはただ一度。その弾丸を頭に打ち込め……さもなければ……その腕、貰い受けるッ！」

Side end

Side 明日菜

あちゃー……宗兄キレちゃったわよ……。なんて事してくれるのかしらガンドルフィーニ。

エヴァから過去の話だけは触れるなつて言われてたから今まで聞かなかつたけれど……。

これは聞き出しとかなないと何処に地雷があるかわからないわね。

ま、なます切りにだけは成らない様に祈っておくわ…。

「フフフフフフフフ…ビデオカメラを持ってきた甲斐がありました。ナイスですよ美空…。」

「し、シスターシャークテイー？状況解ってます？」

「わかってますよ。柚木先生の雄姿が見られるのならば微々たる犠牲です。腕の一本や二本落としてしまえばいいのです。」

な、なんか凄い発言が聞こえたけど聞き逃すべきなのかしら…。

そうしている内に駆け出す宗兄。
ガンドルフィーニは銃を…撃つ。

キインと耳が痛くなるような音。

「ふむ……案外出来るものだな。」

「…一体何を…。」

「見た”だろう？斬ったんだよ弾丸を。」

まあ宗兄なら出来るわよね…。拳圧だろうが魔法だろうが斬るんだから…。

真祖の肉体だから出来るって言うけどエヴァが全力で首振ってるから普通は出来ないんでしょうね…。

……プラセボ効果？

Side end

銃口から飛び出す鉛玉。

回転しながら空気を切り裂き俺の胸へと迫る。

フツと短く息を吐き

弾道上に刀を合わせる。

着弾寸前に刃を滑らせ弾丸を両断ッ！

「ふむ……案外出来るものだな。」

真祖の肉体、反射神経、力。それら全てに元々の剣術。どれが欠けても斬る事は敵わなかっただろう。

「……一体何を……。」

目を見開き愕然としているガンドルフィーニ。

「見た” だろう？ 斬ったんだよ弾丸を。」

無防備に歩を進める。

「くっ……。」

ガンドルフィーニがズレるように動くが、それに合わせこちらもズラす。

「どうした撃たないのか？先程のはマグレかもしれんぞ？」

ガシャン

銃を捨て両手にナイフを持って突撃してくるガンドルフィーニ。

「…浅はかな。沈め。」

ズシンッ

「かつはあっ…！？」

フィンガースナップと同時に地面に張りつくガンドルフィーニ。

「学園長、そろそろ止める用意をしておけ。定番だがそろそろ詠唱に入ろうじゃあないか。」

重力に抗い起き上がる。

「アル・アレック・アルゲントウム 来れ虚空の雷、薙ぎ払え 雷の斧。」

ズバアンと雷撃が飛び、ガンドルフィーニは後ろへ飛ばされる。

「銃を捨てるべきでは無かった。おお地の底に眠る死者の宮殿よ。我等の下に姿を現せ 冥府の石柱！」

「ガッアッ……。」

降り注いだ石柱は吹き飛ぶガンドルフィーニの後ろ。
当然の如く石柱に強かに身体を打ち付ける。

なんとか起き上がるも……。

「馬歩頂肘。」

瞬動で踏みこみ肘で腹へ

「鉄山靠。」

股の間に踏み込んだ足を軸足に肩で弾き飛ばし再度冥府の石柱に打ち付ける。

ズルズルと崩れ落ちるガンドルフィーニ。

「そこまでじゃー！」

学園長の声。

ふっと息を抜き学園長に向き直る。

Side 明日菜

「一応手加減してるんだ……普通ならアソコで胸倉挿んで燃える天
空ぐらいするのに。」

「あ、あれで手加減してるんスカ？」

「そもそも装備すらまともに着て無いし……着てたら馬歩頂肘の時点で肋骨が折れて肺が終わるわね。直後の鉄山靠で即死か重傷。それ以前に居合い使つてれば首と身体か、腰で切り捨てるか……。どちらにしろ死んでるわね。いつそ撃たれても斬られても無視で頭を叩き潰しても終わるわ。」

「ハハハハ……マジツスカ。」

「というか春日さん今日ここにいていいのかしら？明日テストよ？」

「いやぁー……シスターが来ないと××って言うもんですから……。」

「お気の毒さま……今度宗兄から注意して貰っわ。それと……。」

「な、ナンデシヨウ……？」

「美術の課題がまだ未提出なんだけど……。」

「あ。」

「テストの後、居残りしよっか？」

「はい……。あーっー。」

Side end

後日

「さて、ガンドルフィーニ君。ワシには君の目的が見えんのじゃが？」

「目的ですか？」

「うむ。そもそも君は銀騎士の本名も顔も知らないかのう？」

「それは……………」

「やはりの…。入りたまえ柚木君。」

ガチャリと扉を開け学園長室に入る。

「どうじゃ彼は強かったじゃろう？」

「はい…。」

「彼が銀騎士。不死王とも呼ばれておるな…異名は多すぎて挙げらんわい。」

「なっ?!」

「道理で父親だのなんだのと言う筈だ。誰と勘違いしていた？」

「そんな……あの時のあの人が貴方というんですか?!」

「学園長、翻訳頼んだ。俺は老夫婦の様な会話は出来ん。」

「共通認識があるからできるんじゃないよ?!」

「すみませんでしたっ!!!」

いきなりの土下座。

学園長と俺は混乱と困惑の極みだ。

「が、学園いや爺。電波を教師にするな!!!」

「ワシ?!ワシが悪いの?!」

「お前以外に誰がいる?!」

「ワシ悪くない!送って来たの連合じゃよ?!」

「送られるアンタが悪い!」

「理不尽じゃ!!!」

お互いに掴み合って相手を揺すっているとメシメシと学園長が奇怪な頭骨を掴まれ席に投げられる。

「お二人とも落ちついて話して下さい。まずガンドルフィーニ先生に事情を聴くのが最優先では?異論は認めません。」

鬼のしずな先生がいらっしやっただ。

信じられるか？この風格でタカミチの二年先輩なだけというから驚きだ。

「う、うむそうじゃな。ガンドルフィーニ君、頭を上げて詳しく話してくれるかのう？」

「はい……20年少し前になりますが、私はある事故に巻き込まれました。大規模な崩落で……。」

「ゲートポート崩落事件。」

「ふおっ知っておるのかね？」

「ああ…表向き事故だが、あれはテロだ。」

「私はあの時、恐らく貴方に……。」

記憶を辿るが純朴そうな少年だった記憶がある。

「少年をたつた一人助けたな……。あの後グレートブリッジ撤退戦を越えて銀騎士と名乗り始めた。」

「そんな……貴方が……。」

「まあそうなるな。ふむ…ふむふむ……。あの時は急でな…エヴァを逃がす為に大多数を見捨て、気まぐれに近くに居たガキを庇ったのだが……いやはやまさか命を狙われる事になるうとはなあ？」

「柚木君、何かノリノリじゃな？」

「それで少年。連合から何を言われた？正確には元老院から何か言われたかね？」

「銀騎士か闇の福音を始末すれば…マギステル・マギにしてくれると…でも私には、出来ません。」

「ああ…合点が言った。学園長、以前の襲撃を覚えているかね？」

「ティンダロスじゃな？」

「上二人や必死に抵抗してくる連中は良いとして、逃げだした連中の動機が解らなかった。」

「うむ。恐らく今回同様に指示を受けていたと考えて良いのう。」

「しかしガンドルフィーニ…君は運がいい。勘違いとはいえ策を弄することなく掛かって来た事は称賛に値する。まず俺を狙った事も正解だ…うん殺さなくてよかった。」

「最後ワシが障壁をはらなんだら危険だったと思うんじゃないか…？」

「当然アンタが止めると心清い俺は信じていたさ。」

「きよ?!どう考えてもしずな君なみに真っ黒でじゃばらあああああ。あ。」

「何か仰いましたか学園長？」

「何も……。し、しずな君……頭を握ってはならん……出ちゃう。ワシ、脳みそ出ちゃう。」

出るのか……。

……はて、どのように脳が収納されているのか気になるなあ。飛びでないだろうか？

一般とはかけ離れた頭だからこう長い……。

「柚木君?! 興味深げに見とらんとワシを救出して欲しいぞい?!」

「しずな先生いけません。日本では処理が大変です。」

「ふおっ……?!!」

「じゃあ特に問題無さそうネ。」

「ああ。決行日の敵が増えるだけだ。」

「ふむふむ。そういえば柚木先生のあの衣装は色が変わえられるの力ナ?」

「ある程度形状も色も変えられるが?」

特に形状に関しては余り制限は無い。

「オーケーありがとネ。これで一応6割ほど準備は整ったネ！」

「儲かってるじゃないか超包子は。」

「五月の料理の腕を舐めちゃいけないヨ。エヴァンジェリンにも通つて貰つてるネ！」

「タダで食わせてくれてるみたいで助かる。」

「イイヨイイヨ。茶々タイプ調整の礼金とでも思つて欲しいネ。」

「彼女たちも助かっている。とにかく別荘でまともな物を食べるのは感激だ。」

そう別荘は一時間を一日にする。

つまり一日で二十四日進んでしまう……まともな食材を置けばどうなるかは自明の理。

おかげで乾物をモソモソと食べるしかできなかつた。

今や外より豪華な食事と寝転べば出て来る飲み物と実にリゾートだが、下手に豪華などと言うと茶々丸が外で張り切り過ぎてしまう為幾度か酷い事になったが…。

「ああ時間だ…。」

「大変ネ。」

「そう思うならアイツらに教えてやってくれ……。」

「ノンノン。あれは二年最後の時に多少改善するヨ……多分。」

「多分か……まあ行ってくる。」

そうそう見事に俺の夏休みも飛びました。あれだけやって最下位だと?!

刹那にはギリギリ避けられた……。くそっ……。

51話：テストと計画と（後書き）

次の更新は月曜日以降になります。

時間軸は多少飛びます。

次回

52話：ネギ・スプリングフィールド来襲。

52話：ネギ・スプリングフィールド（前書き）

蝶・お待たせしました最新話です！

皆さん風邪に気を付けてくださいね！今年のは腹に来ます！

52話：ネギ・スプリングフィールド

メルディアナ魔法学校の卒業式が終わり…。

「ネギ、課題はなんだったの？」

「今から確認するところ。アーニヤは？」

「私もまだ。」

「開けるね。」

ボウと文字が浮き上がる。

”ネギ・スプリングフィールド 汝に日本で教師をする事を命ず”

「「は？」」

”アンナ・ユーリエウナ・ココロウア 汝に日本へ留学する事を命ず”

「「はあ?!」」

「二人とも卒業おめでとう。課題は何だったのかしら？」

「ネカネおねえちゃん……コレ……。」

「ネカネさん……コレ……。」

「は？」

「なんで私は生徒なのよ?!」

「校長先生！ネギとアーニヤの課題は…?!」

「ネカネ君か…。課題は変更できんのが慣わしじゃが…何か？」

「日本で教師と生徒ですよ?!生徒はともかく先生というのはオカシイでしょう?」

「しかしのう…。」

「本来の物と差し替えましたね？」

「………何故、そう思うのじゃ？」

「アーニヤはともかくネギは…。」

「うむ。………本来の課題は、…。」

言い淀むメルディアナ校長。

「一体何だったのですか？」

「魔法世界、元老院の下で従事せよ。」

「なっ?!」

「元老院は今やバラバラ。まともな政治機能を有しておらん……やり手と有名なクルト・ゲードル総督とて、どういうスタンスで動いているか怪しい。そんな所へ送るぐらいならば我が友の国へ逃がしてしまおうと思っただけ。それに……君の知り合いがそこで勤務している筈じゃ。」

「柚木さん……ですね?」

「真祖にして現・世界最強の魔法使い。大戦の英雄。ヘラスの次期皇帝候補。……正に最高のカードじゃ。彼は子供や女性を殺す事を嫌うしのう。」

「柚木さんをボディガードに使うつもりですか?!」

「ワシは手段を選ばん。スタン老とも相談の上じゃ……ネギにはマジステル・マジでなくともよい。正しい意味で立派な魔法使いになつて欲しいのじゃ。悪を悪と言ひ、虚実で悪と言われる者を善と言つて貰ひ、守れる魔法使いにの。」

「本当のナギ・スプリングフィールドの様に……ですね?」

「うむ。その為なら大戦の英雄であろうと礎になつて貰ひ。……もちろん代償は払ひ。ネカネ君。」

「はい。」

「もし、ネギ君が原因で彼を殺す様な事態になった場合。一度だけワシの命と引き換えにチャンスを与えてやって欲しい。……そう伝えてはくれんかのう？」

「ネギのあの日の記憶の件ですね？」

「うむ。無いとは思いたい、血気に逸り彼に攻撃するような事態だけは避けたい。」

「まさかあの時意識があつたなんて……。記憶もほぼ正確に残っているようですし……。」

「アーニヤ君に伝えていない事が不幸中の幸いじゃ……。二人して亜人に憎悪を抱いた日には……。」

「……違うと何度も言っているのですが……。」

「アレの息子じゃ。聞き分けが悪いのはわかつとるわい。」

二人の溜息の重さはまるでこれから起こる事を暗示しているように……。

パチパチパチと紙が灰に変わる。

「本当にそれでいいのかいクルト？」

枯れた声、曲がった腰、深い皺。

紅き翼の一人。ガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグ。

既に英雄の面影は無く。一人の老人に成り下がっていた。

ズリ下がるメガネを時折上げ、車椅子の上で過ごす様は、とても紅き翼だったとは思えないほどの老化を示している。

対するはクルト・ゲーデル。

メセンブリア元老院にして中立地帯オスティアを統治するメセンブリア側の総督。

幼き姿は成長し青年。若々しい正に今が全盛期と言った風な男。

「ええ。魔法世界の事実を知った今、私にはこうすることしかできません。」

燃えカスの宛先人は柚木宗一郎。

「宗一郎さんには協力します……ですが、この事実をあの人に伝える事は出来ません。」

「しかし…伝える事によつて最悪の出来事は防げるかもしれんぞ？」

「私にはそんな残酷な事は出来ません。貴方の愛したものは、守るべき者のほとんどが、幻に、人形に過ぎないなんて……言えるわけが無い！」

「……………」

「直ぐにソレが起こると言っわけではありません……。いつそテオドラ皇女が寿命で亡くなるまで、この世界が存続してくれれば何とかなるかもしれませんが……。」

「難しい……。のだから?。」

コクリと頷き

「直ぐではありませんが、近い将来起こる事は确实。決して遠い未来の話では無い……。」

「だが……。」

「結婚を勧める手紙を書きます。今のテオドラ様となら堂々と結婚出来るでしょう……と。」

ガトウは深く大きい溜息を吐く。

「……」
「こう考えているワシも……人形なのかもしれん。そう考えると……」

S i d e e n d

「何の用だ爺?。」

「いきなりソレかの?!。」

「と、とにかく全員呼び出すなんて何かあったんですか学園長？」
いきなり俺、エヴァ、明日菜、タカミチがセットで呼び出された。
俺やエヴァは時期的に見て、ナギの息子が来ると言う話だろうと当たり前は付けているが……。
あえて知らないふりをするのが一番綺麗だろう。

「美術部の方へ早く顔を出したいので早く話してくれませんか？」

「……タカミチ君だけじゃ……ワシを蔑ろにせんのは……。」

「爺、要件を早く言え。今から宗一郎にXBOXを買って貰う所だったのだぞ?!」

「ちよっ?!またゲーム買うの?」

「どうせ明日菜もまたそう言いつつやるのだろう?いいではないか!」

「うっ……。」

「ハハっ……楽しそうだなあ……。」

「まあ爺早く話した方がいい。完全に逸れる前に。」

「う、うむ。」

ようやく事態の深刻性を知った爺は一枚の写真を出す。

「これが今度来る新しい先生じゃ。」

「寝言は寝て言え。」

「ボケたか？」

「帰っても良いですね？」

「ハハハ。ネギ君じゃないですか…冗談が過ぎますよ？」

「ちよつ?!誰も信じてくれんのか?!普通驚きじゃ無いかのう？」

「いやいや学園長…この子ども見ても10歳前後よ?ねえ宗兄。」

「ああ。生徒なら解るが……。」

「で、爺。まかり間違つて事実としてだ…何故我々を呼んだ?まともな理由でなければ縊り殺すぞ?」

ゴリツと圧迫する様な殺気がエヴァから溢れ出る。

「ふおつ?!と、とにかくこの少年が柚木君の、1-Aの副担任になるんじゃ。」

「厄介事は勘弁願いたい。優秀なクラスに送れ。うちのクラスにこれ以上ガソリンを注がないでもらいたい。大体、明らかに魔法関係者ですつて雰囲気溢れてるだろうが。」

「実は…ナギの息子でのう。」

「絶対に断る。ああこんなにもお断りしたい気持ちは初めてです。」

「ふむ…どうして私まで呼んだ？」

「そうだね。それだけなら関係無いじゃない。」

「ええ?!二人とも!?ネギ君だよ?明日菜さんの一応甥だよ?!」

「関係無いじゃない。目の前で死にかけたりとか、生徒でない限り興味ないわよ。」

「そもそも私はどうでもいいな。よし爺、縊り殺される準備はいいな?」

「ふおっ?!エヴァ君には教導してもらおうとじゃな…。」

「断る。正義バカにでも頼むか、そもそもタカミチは知り合いらしいな?適任じゃないか。」

「そこはほら、タカミチ魔法駄目だし、戦闘も駄目だし。」

ピシッ

余程ショックだったのか石の様に固まるタカミチ。若干涙が見える。

「な、何度も言いますが…これでも魔法世界での評価は…。」

「宗一郎は評価不能だったな。」

「エヴァもSだか、その辺りだろうな……評価不能とSに教えられて……なあ？」

「そ、そう言う事では無いんじゃないよ。ネギ君は何を勘違いしたか柚木君もあの襲撃事件に関わっておると思っておるらしい。」

「ああ、つまり身の程知らずに現実を叩き込めって事ね！」

割と物騒な事を言い出す明日菜。

「えええ?! いやいや違うぞい? こう青春漫画の様な…夕日に向かつて…的な展開を頼みたいぞい?!」

「無理だな。」

「流石に無理だな。」

「学園長、無謀です。」

「俺が自分に認識阻害を掛ければいいだろう? あの日の俺と判別が付かなければ良いのだしな。」

「いやいやソレではネギ君の修行にやらんでは無いか! ……あっ?!」

「ほうそういう魂胆だったか。」

「タカミチ、明日菜帰っていいぞ。」

「ありがと宗兄。」

「殺しちゃ駄目ですからね？」

明日菜はやっと解放されたと、タカミチは不安げに学園長室を出て行く。

「絶対にお断りだ。」

「ち、違っんじゃないよ。メルディアナの校長と話しあった計画なのじゃ！聞いてくれんか？」

「聞くだけならいいぞ。」

「ネギ君にはマギステル・マギでは無く、ちゃんとした意味での立派な魔法使いになって欲しいのじゃ。その為の試練としてどうか協力してくれんか？」

「やはり断る。魔法学校を卒業したてのガキが魔法の隠蔽などまともにできる筈が無い。」

「だな。一日やそこらでバレて大騒ぎか、記憶消去だ。」

「どうせいきなり記憶を消そうとするだろうさ。人の記憶をなんだと思ってるのかは知らんがな。」

「それでも副担任にはするぞい。これだけは変えられん。」

「うちの生徒を巻き込んだらブチ殺してもいいよな？」

「…え。。。」

生徒がやたら妙な方向に優秀な理由。
仮契約要員と言った感じだろうな。

「なんだ今の反応は？巻き込んでもいいのは既に魔法を知っている
刹那や木乃香、マナに春日といった連中ぐらいだな。」

「むむむ…。」

「木乃香は魔法容量がデカイ上に同じ英雄の子供だ。ネギが役立た
ずでも木乃香は刹那が守る。真名は金を払えばいい。春日は…ま
あ余り巻き込まないでやってくれ。シャークテイーのストッパーが
消えるのは些か拙い。」

「木乃香は戦闘向きでは無いがな。」

「それでもだ。どうせアイツは放っておいても巻き込まれる。」

「うむう…。」

「とりあえずそう言う事だ。俺達は関知しない。」

超の計画の邪魔にもなるだろうしな。

最悪コレで刹那や木乃香を敵に回すが…問題無い。
さり気無く真名を紛れ込ませておいた……スパイというには最高の
ポジションだろう。

写真を見れば見るほど”僕は疑う事を知りません”という顔をして
いる。

「ではこれで失礼する。」

扉が閉まるその瞬間。

「転校生も来るぞい！」

そんな声を聞いた気がする。

Side ネギ

「ここが麻帆良学園かあー。」

「予想以上ね……。」

まるでイギリスの様な街の建物を見て、僕のこれからの生活に対する不安が薄まる。

「ってネギ、私達これから何処へ行けばいいのよ!？」

「あ……。た、確か迎えを送ってくれらって聞いたんだけど……。」

「この中からどうやって私たちを見つけるのよ!？」

周りはまるでフリーガンの様な騒動で生徒達が学校だろっ場所へ向かっている。

「どっしょっしょ。」

困り果てる僕らの影がヌツと出てきた大きな影に隠される。

「やあネギ君、アーニヤちゃん久しぶり。」

「タカミチっ！」

「タカミチさん！」

「どうだい？ 凄い所だろう麻帆良は。」

「うん。日本はたくさんの人がいるね。」

「もしかして毎朝コレなの？」

「まだまださ。ピークは遅刻10分前だね…さ、早く行こう。学園長が頭を長くして待ってるよ。」

首じゃ無くて？

拝啓ネカネおねえちゃん

頭を長い人を発見しました。人を待ち過ぎると首の次に頭が伸びるみたいです。

アーニヤがエイリアンという言葉をもりました。

「ふおっふおっふおっようこそネギ・スプリングフィールド君、アンナ・ユーリエウナ・ココロウア君。ネギ君には2-Aの副担任を、

アンナ君には2・Aの生徒になってもらうぞい？」

「「はい。」」

「チャンスは一度。失敗すればイギリスへ帰って貰うぞい？…それから魔法の事は隠し通しなさい。なるべくなら使わない方がいい。」

そう言われて常に張っていた魔法障壁に気付く。

「あつ。」

「勘の良い子が多いのでな。慎重に行動して欲しいのじゃ。」

「それにしても…遅いですね…。」

タカミチが声を漏らす。

「うむ…やはり駄目かのう。」

「あの…何が駄目なんでしょうか？」

「ネギ君の指導担当で1・Aの担任の先生じゃよ。来てくれる筈なのじゃがのう…。」

「やっぱり…僕が子供だからでしょうか…？」

「それも…あるのじゃが…うむ。」

あわわわ…どうしよう…。始める前から嫌われてるんじゃないよ。僕、マギ、ステル・マギになれないよ…。

Side end

ゴンゴンと若干の苛立ちを持って扉を叩く。

「おお来たか！入ってくれい！」

無言で扉を開ける。

「彼が担任の柚木先生じゃ。」

タカミチと学園長は気が付いた様だったが何も言わない。

「あの……」初めまして” 柚木先生… 今日から副担任になるネギ・スプリングフィールドです。」

「初めましてアンナ・ユーリエウナ・ココロウアです。本日から生徒として2・Aに入る事になりました。よろしく願います。」

「よろしくアンナ君。ようこそ2・Aに… 歓迎しよう。」

あえてネギ・スプリングフィールドを無視してアンナに軽く屈んで手を差し出す。

「それでは学園長。失礼します。アンナ君、教室はこちらだ案内しよう。」

「え、あの……。はい。」

一瞬躊躇するが後を付いてくるアンナ君。

「ほ……ほれ、ネギ君も…付いて行きたまえ…流石に教室では同じ事をせんと思つておる。」

「……はい。」

Side 学園長

ネギ君の背中を見送り、扉が閉まった事を確認して口を開く。

「と、言つたものの本当に大丈夫じゃろうか？」

「…僕に聞かないでくれませんか？割と本気で怒ってますよ？」

「いかなのう…ワシが強引に進めた結果がコレならば拙い事をしたわい。」

「何も言わなければ勝手に鍛えていたと思いますよ？ナギの息子ですし…。ナギとだけはもう一度やり合いたいとか言つてましたし…ガトウさんや詠春さんの老い方かなりガツカリしてましたよ？」

「そつ言つ事は先に言つてくれんかのう…？」

「あの人ああ見えて戦闘狂な所ありますから…。誇り高く、しぶとい人間が好みです。誇りや信念の無い人間は塵芥の如く薙ぎ払いますよ…。」

「タカミチ…よう生き残つたのう……。」

「頑張りました……。明日菜さんや刹那君はあれに耐えるどころか
順応したのが……。はあ。」

「のうタカミチ……。アルビレオが図書館地下に居る事は黙った
方がいいかろう?」

「いつかバレます。学園祭の時にバレてないのが不思議なんですよ
?」

「じゃよなあ……。近いうちに伝えるかろう……。ワシまだ生きたいわい。」

S i d e e n d

「アンナ君はここで待っていたまえ。先に入るのは危険過ぎる……
…ふむ。ネギ・スプリングフィールドと言ったな?先に入ると良い。」

「え?」

「あの……。僕が先に入っても?」

「ああ。」

さあ君の実力を見せてくれよナギの息子。

ガラリと扉を開け、

ポコンツ　黒板消しが頭を直撃する。心の中でひそかに1 H I T！
と思う。

「あわわっ。あっ!？」

ロープに引つ掛かり転倒。　2 H I T！

顔に落ちて来るバケツをなんとか受け止めるが、しかし手が油で滑り顔に激突。　3 H I T！

「え、えへへ。」

バケツを抱えて起き上がるが…不注意。

バナナの皮を踏んでバケツに顔を突っ込んで教壇へ吹き飛んでいく。

4 H I T！5 H I T！

勿論激突。　6 H I T！

痛々しい音が響く。

だが残念。まだ終わらないんだなコレが。

刹那が日頃の恨みを込め、天井に仕込んだ木刀が降り注ぐ。　H I
T数判定不能。

初めはやった！、シャッターチャンス！などという声が聞こえたが後半はほぼ無言。

それもそのはず罨に掛けるべき人物は扉の外にいる。

「こ…子供………？！」

駆け寄ろうとする生徒たちを手を叩き下がらせる。

「はい。今しがた壮絶な自己紹介をしてくれたのが何の冗談か本日から我がクラスの副担任となる野菜坊主君9歳だ。」

「ちよっ?!先生?転校生の情報は貰ってたけど新しい先生は聞いて無いよ?!」

朝倉の微妙な抗議。

「朝倉、鈍ったな?リークだけを頼りにするからそうなる。取材は自分の足と耳で手に入れるものだろう?」

「くっ!」

「少年、もう演技は良いから立ちたまえ。いやあ流石英国人。ギャグのセンスが最先端だね。」

「……………」

見る限り意識が無い。

「ふむ……………」

少年を起こし往復ビンタを軽く入れる。

「へびぶぶうつ！？」

「おはよう少年。9歳にはまだ早い朝かな？」

「あ、あの…。」

腕を引つ張り立たせて教壇の横に置く。

「さて、みんなお待ちかねのメインディッシュ……ゴホン。転校生のアンナ君だ。」

「あ、あの……。」

頭を少しだけ教室に入れた様子が実に小動物感溢れているが…既に足りている要素だ。

「もうトラップは無いはずだ。入って来たまえ。」

おそるおそる教壇に近付くアンナ君。

なんだろうね。鳴滝の双子を合わせて混ぜたらこんな感じになるんじゃないだろうか？

「あートラップを仕掛けた者は掃除するよつに。特に最後の桜咲のトラップは今後辞める様に。さもないと……くっくっくっ。」

刹那が青い顔になってブルブル震えだす。

「さて、アンナ君自己紹介を。」

「はい。アンナ・ユーリエウナ・ココロウアです。アーニヤと呼んでください！」

「……か、……」

予測済みなので軽く離れて耳を塞ぐ。

「……かわいい……！……」

その声とともに駆け寄る生徒達。

委員長は一人ネギに向かうが……。

アンナ……アーニヤ君が質問攻めになっている所をゆっくり後ろに下がる。

「シトーさん……流石にやり過ぎじゃないか？」

「試してみたのだが……期待外れだったよ。」

「わかっていてやるかい？認識阻害は巧く働いてるみたいだけど。その分じゃ直ぐにバレるんじゃないかい？」

「そもそもコレに気が付かないのもどうかと思うがね？」

「所詮子供だよシトーさん。魔力が大きくともコントロールできないんじゃないよ。」

「その割に罨は追加したようだな？」

「……………む。」

顔を背けるが追撃の手は緩めない。

流石にあれば俺でも危ない。油はやってはいけないと思う。

「バケツに塗った油。あれはガンオイルだろう？」

「やはり自分の物を使うべきじゃないな。取っ手にも塗っておいたのだけど…。」

「マナ…………。」

流石に呆れて溜息を吐きつつマナを見る。

「ちゃ、ちゃんと着替えを用意してあったのだが…？」

横にさりげなく置いてあった袋を持ち上げ、スーツをちよろつと見せて来るが…。

「余計にやめてほしい。」

エヴァに殺される。このスーツはワイシャツからネクタイ、上下共に全てエヴァの仕立てたものだ。

着替えた帰った日には何と言われるか。

「善処しよう…。」

S i d e 千雨

あー…今日もうるせえな。

このクラスに配属されてもう二年。

ほんとバカばつかでやってられねえつつの。

まあ…唯一の救いはあの人が担任だった事か？

覚えてねえだろうなと思って無視してたら話し掛けて来たからな…

…。

ちよつとばつかし嬉しかったぜ…。

と、思っていたら私の平穩を脅かす者が追加された。

扉の陰で柚木先生と転校生がいると思つてたら妙なガキもいた。

「アンナ君はここで待っていたまえ。先に入るのは危険過ぎる……」

…ふむ。ネギ・スプリングフィールドと言ったな？先に入ると良い。

「

え？」

「あの……僕が先に入っても？」

「ああ。」

いやいやいや有り得ねえだろ?! トランプって物を超えたやつを仕掛けてあるんだぜ先生?!

正直、あんたが避けれるのもオカシイと思ってるぐらいなんだぜ?!
扉と同時に黒板消し

「あわわっ。あっ!?!」

チョークの粉が目くらましになって下のロープ。

ああ……いつもいつもやり過ぎだと思ってたんだよ…。

やべえ! と思つた水入りバケツは受け止めるものの手が滑つたのか
顔に直撃。

「え、えへへ。」

いやいや笑うところじゃねえ! 下がれよ! ……!

バナナの皮?! マリカーでしか見ないぞオイ?!

滑つて突っ込んで… ああもう見てられねえ…。

痛々しい音。

やっと終わりやがったか…… まあいいんちょや亜子が何とかするだ
ろ… おおお?!

天井の一部が開いて木刀が降りやがった…。

学校壊すのは拙いだろ……。

っていうか木刀……桜咲か。

「こ…子供……？！」

今頃反応しだしたバカ共が向かおうとするが、

パンパンツと柚木先生が手を叩き皆の視線を集める。

「はい。今しがた壮絶な自己紹介をしてくれたのが何の冗談か本日
から我がクラスの副担任となる野菜坊主君9歳だ。」

はああああ？！小学生だろ？！副担任？んなバカな事あってたま
るかよ！

…その前に紹介それでいいのか！？名前本当に野菜坊主なのか？！

「ちよつ？！先生？転校生の情報は貰ってたけど新しい先生は聞い
て無いよ？！」

朝倉の微妙な抗議。

いやいや突っ込む所そこじゃねえだろ！

「朝倉、鈍ったな？リークだけを頼りにするからそうなる。取材は
自分の足と耳で手に入れるものだろう？」

「くっ！」

そんなやり取り求めてねえ！死んで無いかガキ？ガキは嫌いだけど

よ…むやみに傷つくのはどうかと思っただぜ？

「少年、もう演技は良いから立ちたまえ。いやあ流石英国人。ギャグのセンスが最先端だね。」

「……………」

クラス中に笑い声が響いてるけどよ…異常だろ?!最先端?!意味がわからねえ!

「ふむ……………」

木刀の中から引きずり出して…。

はあやっと気が付いたかってオイ!

往復ビンタ。

「へ…ふ…ぶ…う…っ!?!?」

「おはよう少年。9歳にはまだ早い朝かな?」

「え、えと、あの……………」

腕を引っ張り立たせて教壇の横に置く。

はあ…やっと落ち着いたか。

「さて、みんなお待ちかねのメインディッシュ……………ゴホン。転校生のア…ンナ君だ。」

流した――！ 袖木先生なんか今日キレてるよな？ どう見ても。

まあキレるよな……どんな事情が知らねえけどこんなガキがいきなり副担任なんかになったら。

「あの……。」

「もうトラップは無いはずだ。入って来たまえ。」

それじゃ安心できねえ！！ 無いって言いきれよ……目の錯覚か？ 天井付近にキラキラ光る何かがあるんだが……。

おそるおそる教壇に近付く転校生。

まあ気持ちは解るぜ……それにしても何かまともそうだな。コスプレとか良く似合いそうだな……。

「あートラップを仕掛けた者は掃除するよつに。特に最後の桜咲のトラップは今後辞める様に。さもないと……くっくっくつ。」

桜咲がいきなり青くなってブルブル震えだす。

何されたらそんなビビりかたになるんだよ？！

「さて、アンナ君自己紹介を。」

「はい。アンナ・ユーリエウナ・ココロウアです。アーニヤと呼んでくださいー！」

「「「「か、「「「「」

予測済みなので耳を塞ぐ。

「「「「かわいいー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

その声とともに駆け寄る馬鹿共。

これで迎合したらアレもアウトだな。

で、ガキに向かって言ったのはいいんちょ一人か……。薄情な連中だ。

「バカばつかです。」

普段何考えてんのかわかんねえ綾瀬だけど今だけは全面同意出来るぜ……。

転校生が質問攻めになっている隙に柚木先生が下がって来る。

「シトーさん……流石にやり過ぎじゃないか？」

そついや龍宮って柚木先生の事をずっとシトーさんって呼ぶよな……。なんて意味か聞いてえけど……。

「試してみたのだが……期待外れだったよ。」

期待外れ？……私は最近、柚木先生と龍宮はマジで出来てんじゃないかねかと疑ってるんだが。

主語抜きの話多過ぎるだろう？

「わかっていてやるかい？　　は巧く働いてるみたいだけど。
その分じゃ直ぐにバレるんじゃないかい？」

「そもそもコレに気が付かないのもどうかと思うがね？」

「所詮子供だよシトーさん。　　が大きくともコントロールできないじゃ話にならないよ。」

「その割に罫は追加したようだな？」

「……………む。」

「バケツに塗った油。あれは　　オイルだろう？」

「やはり自分の物を使うべきじゃないな。取っ手にも塗っておいたのだけど……………」

「マナ……………」

「ちゃ、ちゃんと着替えを用意してあったのだが…………？」

「余計にやめてほしい。」

「善処しよう……………」

所々聞き取れねえけど……………痴話喧嘩にしか聞こえねえ。

つか地獄送りにしたのはアンタか龍宮。

「なあ先生。」

「ん？」

戻ろうとする柚木先生を引きとめて話し掛ける。

「あのガキは何の冗談だ？」

「学園長のやらかした事だ。」

苦々しそうな顔でガキをみる先生。

ガキはいいんちよに介抱されている。いいんちよってアレか？シヨ
タコンか？

学園長のやらかしたって事は……権力者のガキか。

「大変だな……。」

「ああ大変過ぎて涙が出て来るよ。ちなみに今月からアレが英語の
先生になる。」

「……マジかよ？」

幾ら受験とか無いにしてもソレは酷いだろう？！

「ちなみにアイツはどうもアレらしい。」

アレと言った時に手で軽い符合を出してくれる。

意味は”不可思議な物。見ない・気が付かない振りをする”

先生と私、数少ない一般人が心を磨り潰さない様に生き残る術。その時の符号。

「マジか…。」

「大マジだ。でもなきやあの年齢で教師は無い。法律が許しても俺が許さん。」

「はあ…最悪だ。」

どんどんまともな奴が減る。

「じゃあそろそろ静かにさせて来るから。」

「ああ。」

前途多難だ。柚木先生の背中を見つつそう思った。

Side end

「自己紹介も程々にして、全員席に着けー。アンナ君はあそこの席へ。」

「…あそこじゃ駄目なんですか？」

そう言って指すのはレイの席。

例でもいいし霊でもいい。

そうそうこの幽霊を俺は二年程無視している。

足が無いくせに敷居に躓いて転んだのも見た。

天井に頭をぶつけているのも見た。

しかし無視している。

ああいうモノは直ぐに成仏すべきであって留まって良いものではない。

その内払おうと思っていたが案外安定しているので放置している。

日巫女様ならば話し掛けて導くなんて事も出来るのだろうが…生憎俺にはそんな事は出来ない。

ぶった切るか、封じるか、……ぶった切るか。

「あー……あそこは辞めておきなさい。日本の慣例でね？」

「慣例なのですか！失礼しました。」

ふう…素直な子タンジユンで良かった。

「チツ。」

朝倉は舌打ちをするな！

ネギはともかくアンナ君はナギ関係ではない魔法使いだろう。
心霊現象で苦しむのは本意ではない。

授業は滞りなく進み……。

「あの…次、僕の授業なんですけど…。」

「ああ、確実に一回目の授業は潰れる。諦める野菜少年。」

少年ボロ出すなよ？

委員長と朝倉に歓迎会の用意が転校生だけだったと怒られた挙句に俺が今から菓子を買に行くのだから。飲み物は…明日菜に頼むか。

「まったく…宗兄がイジメるからでしょう?!」

「そう怒鳴らないで欲しい。ちょっとした腕試しのつもりだったんだよ。」

「あのクラスと宗兄だからなんとか成り立つレベルの畏なのよ!魔法学校出の純粹培養が切り抜かれるわけ無いじゃない!」

「だからすまないと…。」

「私じゃ無くてネギ君でしょ謝る相手は!」

「断る。性格はまだしも顔はナギだ。見てるとイライラしてくる。」

「ちよっ?!」

「あれでナギみたく人懐っこい割に強引でバカなら許容できるんだが……。」

「ネカネさんによろしくお願いしますって言われてたでしょ?!」

「む……何故知っている?」

「そりゃあ覗いたからに決まってるでしょ?」

「……………」

「手紙を懐に隠してコソコソと自分の部屋に入ったらそれは”覗いてください”って意味よ。」

「あー…もしかしてー…。」

「エヴァも茶々丸もね。」

「プライバシーとか…無いかな?」

「あると思ってた?」

「家出していいかな?」

「出来ると思ってる?」

「…そうか。」

「で、結婚式何時にするの?」

「クルトからの手紙も見たか…。」

「いいえ。読んだの。」

「……結婚式は春休みにヘラスで挙げようと思っている。それから色々待たせ過ぎたし2・Aの連中が卒業したらヘラスに帰ろうとも思っている。」

「……………そっか。」

「明日菜も髪を染めたら一緒に行けると思うぞ?」

「違うかなあ…そう言う事じゃないんだけど……。やっぱり勝てない勝負ってキツイわね。」

「すまん。」

「いいわよ…別に。……あれ?」

「どうした?」

「階段の所、本を持った子、あれ危ないんじゃない?!」

階段で右へフラフラ、左へヨロヨロ。誰が見ても危険だ。

「荷物…任せた。」

明日菜に荷物を渡しひた走る。

S i d e 宮崎

「よいしょ…よいしょ…ゆえを待つべきだったかもしれないです。でも、ネギ先生とアーニヤさんの歓迎会の用意が、ありますかつあつ…。」

グラリと本が揺れて、身体が浮く。

フワツとした浮遊感。一瞬で理解してしまう。

ギュツと目を瞑り、その瞬間を待つ。

ドンッ

S i d e e n d

「ふう…ヤバかった…。」

地面へ接触する直前に身体を滑り込ませて助けたが…。

階段の上には杖を出して一瞬落下を止めたネギ・スプリングフィールド。

歓迎会に呼びに来たのだろう雪広。

中々の修羅場じゃないか？

「ネギ…先生？」

「野菜少年……。」

「あ、わ、あわわわ……。」

「あ、の、あのあの……。」

混乱した少年1、恐らく男性恐怖症の影響でパニックの少女1。

「委員長！宮崎を保健室に！怪我をしているかもしれん！」

「は、はい！直ぐに連れて行きますわ！」

雪広が宮崎を連れて去り、場にはネギと俺のみ。

「……一体、何をしたのかね？」

さて、俺の事は魔法関係者と聞いていないだろうし、
そもそも、魔法関係者にそんな扱いをされた事は無いだろう少年？

「え、あの……僕は……。」

「一瞬停滞させるなんて……まるで魔法の様じゃないか？」

ビクツと震え、青くなる少年。

「まあいい。宮崎が助かった事は事実だ。教室に戻ろうじゃないか
野菜少年。」

記憶消去を仕掛けて来るか……何もしないか……。

結局大人しく付いてきたか…。

「先に入りたまえ少年。」

「え…いや、もう先には……………」

「もう罫は全て解除した。大丈夫。入りたまえ。」

「うつつ……………」

「行かめと言うならば、先程の事ここで委細聞き出そうか？」

「……………行きます。」

ガラリと扉を開ける。

パンパン！

クラツカーの音。

歓迎の印はネギにとっては致命傷になったようだ。

頭を抱えて震える様は……………。

「ゴホン……………ただのクラツカーだ。」

「へ？」

「ようこそネギ先生！！2 - Aへ！」

「まあこう言う事が好きなクラスだね。……よろしく野菜少年。」
手を引いて起こしてやる。

Side ネギ

み、み、見られたー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！

どうしようどうしようどうしよう！？

「あ、わ、あわわわ……。」「

「委員長！宮崎を保健室に！怪我をしているかもしれない！」

「は、はい！直ぐに連れて行きますわ！」

委員長さんが宮崎さんを連れて保健室へ行く。

…… 本当にどうしよう！？ 柚木先生と二人だよ？！

「……一体、何をしたのかね？」

何もかもわかっているぞ。というような視線。

「え、あの……僕は……。」「

必死に言い訳をあさるけど

「一瞬停滞させるなんて…まるで魔法の様じゃないか？」

ビクツと身体が震える。どうしよう…失敗しちゃう…オコジヨにされちゃう…。

「まあいい。宮崎が助かった事は事実だ。教室に戻ろうじゃないか野菜少年。」

見逃して…くれるの…かな？

後ろを追う様に付いていく。

2-Aの扉の前。

「先に入りたまえ少年。」

「え…いや、もう先には…。。。」

あのトラップを知ってて先に入れたんだよ…ね？やっぱり僕嫌われてるんだ…。

「もう罫は全て解除した。大丈夫。入りたまえ。」

高圧的で、とてもじゃないけどまともに会話出来ないよ…。

「。。。。。。。」

「行かぬと言うならば、先程の事ここで委細聞き出そうか？」

「……行きます。」

折角見なかつた事にしてくれるんだ……行かないと駄目だ……。

ガラリと扉を開ける。

パンパン！

思わず蹲ってしまふ。

ネカネお姉ちゃんが言った。日本では頭を抱えて机の下に入って身を守るんだって！

何時まで経っても痛くならない……。

「ゴホン……ただのクラッカーだ。」

「へ？」

顔を上げると、

「……ようこそネギ先生！！2・Aへ！！！！」

生徒さん達が満面の笑みで、横断幕って言ったっけ？

”アンナちゃん（小さく下にアーニヤちゃん）歓迎会WITHようこそネギ先生！”

書き足したみたい な文字に思わず笑顔が出る。

「まあこう言う事が好きなクラスだね。……よろしく野菜少年。」

柚木先生が初めて僕に向かって笑顔で手を差し出してくれた。

そっか！これがサプライズパーティーって奴なんだねネカネお姉ちゃん！！！！

Side end

歓迎会が始まって5分、それなりの落ち着きを取り戻した頃に扉が開かれる。

そこには笑顔しほの形相の明日菜。

ああ…失念していた。

「宗兄？随分、お楽しみね？」

「あ、明日菜？！これは…その…。」

「宮崎さんを助けたら戻ってくるのが道理じゃないかしら？……無事によかったわね本屋ちゃん。」

「ありがとうございます明日菜先生…。柚木先生も…。」

「なんだ…その、とりあえず駆けつけ一杯…。」

「先生それコーラだから！」

「ちょっとお話ししようか？」

むんずと明日菜に掴まれ強制退場。

「あおう…助けなくていいんでしょうか？」

「ああいいのいいの。兄妹喧嘩だから。」

「でも痴話喧嘩って言うつと翌日吊るされるから気を付けるんだよー。」

「そうそう囲碁部のマクダウエル先生か…。」

「美空の所のシスターさんにね。」

「それは言わないでー…。」

生徒達が好き放題に吹き込んでいく様を見つつ屋上へ連行される。

俺を見送るのは四人。

合掌している葉加瀬、超、龍宮、木乃香のみだった。

刹那め……今日は三倍だ。……付いて来れそうだな。秘かに五倍

にしようと思っただ。

ビクッと刹那が震えたとか震えなかったとか。

52話・ネギ・スプリングフィールド（後書き）

次回

53話・とある授業風景。

53話…とある授業風景

実に退屈だ。

ネギの授業中、俺は中央最後尾でパイプ椅子に足を組み背もたれに身体を預けて座っている。

ネギは黒板前で雪広の用意した台に乗って授業をしている。

特に問題はない様に見受ける。

実際問題英語はネイティブスピーカーから習うに限る。
日本語が余り使っていないのも好印象ではある。

まあ下位4人+刹那がどこまで理解しているかはさて置きだ。
英語のテスト対策も作ってやる必要があるな。

ただこう聞いているとウェールズ訛りというか、非常に聞き取りにくい場面がある。

日本の英語教育は米英語なのだが……。まあそれも些細な事だ。
エヴァみたく元上流階級ならばまだしも一般人は出身の訛りが酷い。
だからこそ日本で9年以上も学んで海外で英語が通じないと言う事が発生するのだが…。

「じゃあこの英文を訳してください。」

ははは…ネギ。それは日本じゃ駄目だ。そう言うのは英文じゃなくて長文になる。

生徒達は皆目を逸らしたり教科書の陰に隠れたりする。

「じゃあ……まき絵さん！」

「えええ?!」

よりによってピンクか!?

「わかんないよー。」

まあ見る限り解るのは雪広、葉加瀬、超、真名ぐらいか……。真名はこっそり自分に注意が行かない様な呪符を張って銃の手入れ。同じく刹那は呪符を使って必死に隠れている。

非常に当てて欲しそうな雪広。

葉加瀬は心ここに有らず。恐らく茶々丸タイプの子達の改良案辺りでも考えてる顔だな。

超は……こつちに手を振るな!

「ううーこんなのわかんないよー!あつ!柚木先生答えてよ!」

「何を言っている佐々木。そこは委員長に振ってやれ。」

そう言いつつ雪広にアイコンタクト。

「ネギ先生!私が答えますわ!」

「じゃ、じゃあいいんちよさんで。」

そうそう。君は無難に事無かれ主義で動いてくれ。そうしてさっさとウエールズに帰ってくれ。
超の計画実行時には居ない方がいい。
学園長も無理難題は出さないだろう。英雄の息子らしく象徴イコンとして祭り上げられてくれ。

「あの…僕の授業はどうでしたか？」

「特に言う事も無いな。……強いて言えばウエールズ訛りはどうにかした方がいい。」

「はい。注意して話します。」

「柚木先生！屋上でなんか喧嘩みたいです！」

「む。面倒な…直ぐに行く。」

屋上

「ウルスラと……よりによってうちのクラスか。」

掴み合って何をしている何を。

「全員静粛に！！」

「あっ柚木先生だ！」「よし勝った！」

「雪広、ウルスラの代表者。状況を説明しなさい。」

「屋上の使用について高等部の方々と揉めていました。こちらは中等部の屋上です…優先権は私達にあるのではないのでしょうか？」

「私達が先に使っていましたのよ？後から来て図々しいのではない？」

双方の話を聞く。最早揉めるような内容では無いと思うのだが…。

手元の紙を見る限り中等部が既に朝の時点で予約している。

「中等部の屋上、更には朝の時点で使用許可もある。中等部が使うのが適切だろう。それにもう高等部の屋上も開いている様に見えるが？」

「柚木先生見えるんですか?!」

見えないのかね？たかだか……。一般の感覚からだと厳しいのか？

「うむ。視力は良くてな。それから双方掴み合うのは良くない…たとえどちらかが先に手を出したとしても…だ。普通の喧嘩でも屋上では洒落にならん。」

そもそも球技自体どうかと思うのだよ。まあそれなりに高いフェンスだから良いのかも知れんが…。

「今回は俺の胸の内に納めておく。次、同じ様な事があればウルスラはシスターシャークターに指導をお願いするぞ？もちろんこち

らは俺と、新田先生で指導する。」

双方から”ひい”という声。

ウルスラの方は何人か顔が青くなってはいたが……。

これだけ脅しておけばまあ以後も問題にならないだろう。

「凄いですね！僕じゃあんな風に出来ませんよ。」

簡単にできれば教師なんて必要ないのだがね？

「生徒指導や授業の方針に困ったら新田先生に質問したまえ。教師というジャンルに置いてこの学園都市であの人に勝る人はいない。」

まあ厳しい方だけどね。

と小さな声で付ける。

あの人は魔法関係では無いし、ネギが頼る人間としては最適。

一般的な魔法使いになるだけなら魔法教師にでも頼ってなあなあでも良いが、教師をやっている以上そんな事は俺が認めない。

この数日後結局、2 - A v s ウルスラの黒百合のドッジボール戦が勃発するのだが、宗一郎に電話で呼び出されたシャークティーが生徒たちに向かって吼えた事は言うまでも無い。

試合終了後に雪広の背中に向かって投げつけられたボールはシャークティーの十字架により”砕かれ”てしまう。その時の顔は生涯忘

れられないだろうと後に美空は大仰に語った。

3月のある日。

「あ、あのあのあの柚木先生!!」

「なんだ野菜少年鬱陶しい。」

「学園長先生に課題を渡されたんですが…。」

差し出してくる封筒を受け取り開く。

” 2 - Aを最下位脱出させたら、正式に副担任にしてあげる。 ”

「ハハハハ……。少年、ウェールズに帰る準備は万端か?」

「えええ?!」

「下4人+刹那がどうにかならんと無理だな。連中が徹夜で勉強するなんて殊勝な事をすれば別だが。」

「そ、そんなに悪いんですか?」

ほれっと成績を渡してやる。

サアアっと顔が青くなる少年。

「上は順調に成績を上げているんだが、下は……見ての通りだ。テスト対策を渡して、対策の時間を取った上でコレなのだから。」
下も流石に一桁台の点数を取る事は無くなった。が、以前最下位。当然だ。全クラスの人間が対策プリントをやっているのだから。基礎を固めさせるのは正解だったようで、上位の人間もミスが減った。
おかげで余計に下が目立つ結果になった事も事実だ。

「あつう……。」「

「まあなんだ？十五年程経てば少年もちゃんとした教師になれるだろう。今回は運が悪かったな。」

「あ、諦めません！今日はテスト対策です！」

「先に言っておくが、あくまでも君の為ではなく、生徒の為の勉強会を開く事だ。」

まかり間違ってもあの魔法を使う事は無いと思うが……マギステル・マギを目指す輩ならやりかねん。

「じゃあ俺はこいで。」

「え？」

「なんだそのネギが収穫前にへし折られたみたいな顔は？」

「今日も後ろにいてくれるのでは？」

「教育実習生じゃあるまいし、テスト対策程度君一人で出来るだろう？俺は別の仕事がある。」

言つなり後ろへ方向転換。

「keep your fingers crossed. (幸運を)」

「で、なんのようだ学園長？」

「いきなり喧嘩腰じゃのう。」

「当たり前だ。本来ならテスト対策を今から作る所なんだが？」

「ネギ君の件での…。」

「断る。」

「はやっ？早いぞ！もっと最後まで聞いてくれい！」

「聞くだけだが？」

「むう……。ネギ君の課題は知っておるな？」

「ああ、えらく無理難題を出したな。あんたらの事だ…なあなあで

進めるものだとばかり思っていた。」

「ワシらはネギ君をマギステル・マギにするつもりはないわい。彼にはちゃんとした……立派な魔法使いになって欲しいのじゃよ……。ワシらの様に権力に踊らされる魔法使いでは無く……。自分の意志と信念に基づいて動く魔法使いにじゃ。」

「お言葉は実にご立派なのだが……諦める。アレには無理だ。覚悟も信念も何もかもが足りない。……まだガンドルフィーニの方がマシだ。」

「……じゃがそれでも、彼には並の魔法使いが持ち得ぬアドバンテージを持っておる！」

爺の顔からいつものおフザケ顔が消える。

「アレはナギにはなれない。そもそも有名になっても良いのか？」

「むっ？」

「アレは、災厄の女王の息子だろう？ 帝国の上層部は誰も思っっちゃいないが、連合はどうだ？」

「……………」

「それこそ、味方である筈のお前達人間からの憎しみを一身に受けるハメになるぞ？ 帝国も紅き翼のファンは少ない。針の筵だな？」

「だからじゃ……お主の弟子にして欲しいんじゃ！ 連合の英雄の息子であり帝国の英雄の弟子……これならば誰も出自を追究せん！」

「あのガキはそれを知ってるのか？」

「まだ知らん。ネギ君は恐らくマギステル・マギを疑う事無く信じ
ておる。父親ナギ・スプリングフィールドの背中を追って生きてお
るんじゃ。」

「弟子も糞もないだろう。俺はアレからすれば父親の敵は僕の敵！
！ぐらいの認識だろう？そもそも……2-Aが最下位を脱出？俺が
二年掛けて地味が上がって来た所だ……しかし流石に最下位はまだ脱
出できないぞ？」

「彼の努力次第じゃ。」

「……そうか。俺が弟子を取る奴は、俺が欲しいと思った人間だけ
だ。俺の弟子にしたければ、俺が欲しいと思う様な働きを魅せる事
だな。」

扉を開け放ち最後に一言だけ問いかける。

「なあ……魔法はそんなに大事かね？」

その答えは無く……。

S i d e 女子寮内大浴場。

「ねえねえネギ君の言ってた意味ってどういう意味なんだろうね？」

まき絵の能天気な声が大風呂に響く。

「最下位脱出できなければ大変な事になる。という話でござるか？」

同じ馬鹿レンジャーの面々が反応しだす。

「確かに2 - Aの成績は連続最下位です。」

「そう言えば今日柚木先生が一緒じゃなかったアルね。」

「ま、まさか…柚木先生がクビとか？」

刹那がポロリと漏らした言葉で浴場がパニックになる。

「マジで?!」

「2 - Aが最下位脱出出来ないと柚木先生がクビになっちゃうの?!」

話はものの数十秒で大きくなる。

「むう…それは困るです。柚木先生は中々の読書家…失うには厳しい人材なのです。」

「ゆえゆえそんな呑気な事言ってる場合じゃないよー。」

「……アレを頼るしかないか。」

「アレって何アルか？」

「聞いて驚くな！図書館の地下には頭を良くする本があるって噂よ
！」

「ハルナ…魔法は幾ら何でも非現実的です。」

「そんな便利なものがあるでござるか。」

「でもそついうの柚木先生嫌いそつだよねー…。」

「確かに…。」

「刹那さんはどう思いますか？」

「えつ……うーん。魔法の本じゃなくて過去のテストを編纂した資料や参考書の事ではないかと…。」

「だよねえ…。」

「……」か罰か…行ってみるのも手ですね。」

S i d e e n d

「今日は刹那来て無いのか？」

「ああ。どうも真剣に取り組む様子じゃないか。刹那は木乃香に任せ
ておけばいいだろう。」

「久しぶりねえーこうやってのんびりするの。」

「そう…だな。」

一等大きなソファの中央に俺が座り両サイドにエヴァと明日菜が座
る。

「ナギの息子の課題は聞いたか？」

「そんな事はどうでもいい。宗一郎、春休みの間に結婚すると言っ
のは事実か？」

「ああ……待たせ過ぎた。いい加減頃合いだと思う……。」

「そうか…はあ。向こうは何れ死ぬぞ。それは理解しているだろう
な？」

「それでも…だ。何と言えば適切なのかな…… I can't s
top loving you 愛さずにはいられなかったかな。」

「エルヴィス・プレスリーじゃあるまいし…。」

「どちらかと言うとレイ・チャールズだと思うわ。」

「どちらにもそんなツツコミは求めていない。ちなみにエルヴィスの方は知り合いだ。直筆サインがあるぞ?」

「そっちの方がどうかと思うわ。表に出すと年齢疑われるわよ?」

「気を付けておく。」

「ともかくだ…。いいか宗一郎、お前は認識が甘い様だから言うておく。人間もそうだが、テニチューマン亜人として我々から比べればガラス細工や鉛細工の様なモノだ。容易く死ぬ。直ぐに老いる。それでもいいのかと私は聞いているんだ。」

「だからこそ美しいとも言えないか?俺は日本刀だ。ただの刃だ…: 日本刀は?、ハバキ柄、切羽、鍔、鞘。それら多くに支えられてやつとまともに扱える。…: テオは俺にとっての鞘だ。」

「ああくそっこんな所でプロポーズを吐くか!」

「宗兄い…: そういうのはテオの前でやるものよ…:。ああ背中が痒い。」

「だ、駄目だ。夜風に当たって来る。」

「私も…: あー痒い。」

二人は身を擦じらせながら家を飛び出して行った。

ああいう反応を露骨にされると実は結構恥ずかしい事を吐いたのではないかとも思う。

「そうか…: こういうものをプロポーズというのか…:。」

「はい。効果のほどは今ご覧になられた威力です。真顔で言うと凄まじい破壊力です故、お気を付け下さい。」

スツと後ろに立って言う茶々丸。

「すまない。茶々丸にそれなりに相応しい言葉を選んでくれと頼んだのに……。」

「いいえ。御自分中の言葉がテオドラ様の心に一番響くかと思いません。……私たちもそうでしたので。」

「ありがとうございます。」

「微力ですがお役に立てた様で良かったと思います。それではマスターを御迎えに参りますので先にお休みになって下さい。」

「ああ、おやすみ茶々丸。」

「はい。おやすみなさいませ。」

S i d e E ヴ ア

世界樹が見える木の上、通り抜ける夜風が心地良い。

「はあ……。真顔で言うか？ああいう事を。」

「それが宗兄でしょ。エヴァも振られたみたいね。」

「五月蠅い。私は……パートナーなのだ。今が駄目なら200年でも待つ。」

「エヴァはいいわよ。私はコレでお終い……あーあ、捨てたけど王女の立場が欲しいかも。」

生気の無かった娘がここまで言うのだ……。まったくアイツは……。

「ああ言いつつ鞘以外の部品が余っている。まったく欲張りな奴だ。」

「部品の中に恐らく男も入ってると思うわよ?」

「……アイツに魅入られた女は悲惨だな。最低でも不老が必須になつて来る。」

「そう言いつつ待つ癖に。」

「仕方あるまい?初めて宗一郎を見た時に私は既に囚われていたんだよ。」

初めは驚いた。痛い事をされるとも思った。

空中を縦横無尽に振り回されて気絶した。

私を真祖に変えたアイツも共に葬った。

旅をした。

城で暮らした。

一時離れてアイツがどれだけ私の中のウェイトを占めていたかがい知らされた。

「泣いてるくせに。」

「お前こそ。」

「ここにいましたか…探しましたよマスター、明日菜様。」

「茶々丸か……お前はどなんだ？」

「歩み寄りには赦されず、抱き上げられても思いは秘めるが花の粹。これが私共の総意です。」

「つまり一気に100人単位を奴は振ったわけか…。」

「刺されてもしょうがない数ね。今度宗兄に昼ドラでも見せようかしら…。」

「ククク…意趣返しという奴か。さりげなく見せるとするか。」

「……アレは。」

「どうした茶々丸？」

「図書館島の方角に多数の人影があります。」

「ほうどれどれ……2-Aの面々か。刹那に木乃香までいるな……図書館で勉強会か？」

「私に聞かれても……。まあ明日聞けばいいでしょ。そろそろ帰りましょエヴァ、茶々丸。」

「そうだな。」

「わかりました。」

はあ……。テオドラ第三皇女。今は祝ってやる。宗一郎を悲しませる事が無い様に長生きしろ。

ここで実力行使に出ようと思わなくなった分、私も甘くなったのだろうな……。

Side end

「出席取るぞー。」

土曜日。テスト対策最後の日。

しかし……。

「な、何故よりによってココに確実に居なければならぬ人間が居ないのか？」

思わず教壇で頭を抱えてしまう。

そう、佐々木まき絵・綾瀬夕映・長瀬楓・古菲・桜咲刹那を筆頭に宮崎のどか、近衛木乃香、早乙女ハルナが欠席。

ちなみに何故か野菜少年も居ない。

「あー……誰か行方を知っている者はいるか？」

「昨日の夜中に楓姉が出て行っただすー。」

「夜から一度も見えて無いねー。」

と鳴滝姉妹。

他は部屋ごと消えているらしく消息不明。

「あ、そーいや昨日大浴場で何か話しとったんとかちやうかな？」

「本当か和泉?!」

「今度のテストが最下位やと柚木先生がクビで、図書館島地下がなんとか言っただよー。」

「……………は？」

「柚木先生がクビになるって本当ですか?!」

「何をどう勘違いしたのか知らんが俺”は”クビにならんぞ?」

「”俺は”と言う事は他の誰かがクビになりますの!?!」

「野菜少年は今、仮採用なのだが…それが取り消されて英国は彼方、ウェールズの片田舎に帰る事になるな。」

「「「「ええー！！」「「「「

「ああ、ネギ先生お可哀想に……短い出会いでしたわ……。」

Side ネギ

「出口が……ありません。」

「「「「ええー！！」「「「「

「どどどどどどーするのよネギ?!?!」

「テストまであと二日です。勉強して耐えましょう！入口があって出口が無いなんて事は有りません！きつと見落としたんでしよう。僕が皆さんを連れて帰りますから安心してください！」

そんな事を言ったもの一向に出口は見つからず土曜日の昼を迎えました……。

事の発端は金曜の深夜。

楓さんに抱えられて図書館島にいました。

寝ていた筈が、図書館島に居た。日本で言うポルナレフ状態ってや

つです。

色々勘違いがあったみたいで道中誤解は解けましたが、長い道のりの末、メルキセデクの書を見つけて駆け寄ったのが本当の運の尽き。

ここまで落ちてしまいました。しかも僕は魔法を封印しています。

本当にどうしようーーーー！！！！

Side end

Side 木乃香

「どうするこのちゃん？」ココ千明さんの…。」

「んー…魔法関係やって言う事は秘密にせなアカンし…ウチらだけで脱出しようと思ったら簡単やねんけど皆を置いて行かれへんからな！」

「

ウチがエレベーターの存在知つとるなんて解つたらゆえが絶対もう一度ココへ来たいって言うからなあ。みんなから顰蹙買ってまうし…。」。図書館探検部にもおられへんようになってまうやん…。」。

「あつ…。」

「どないしたん？」

「ちび刹那が壊れました。3体目です……。」

「どうも意図的やなあ……。まあ教材見る限りおじいちゃんの企み
たいやし……。ま、静観しような。」

千明さんやったら押し花作る用の分厚い重たい本と、恋愛小説しか
置いてへんやろうしなあ。

それも見当たらへんし、材料の花も無い所を見ると……。コレはやら
れたかもなあ。

「解りました。ウチは巡回をつ？」

巡回に行こうとするせつちゃんの前襟を掴んで引き戻す。

「アカン。アカンえ……。せつちゃん。勉強しい。そやないと鉄拳制裁
で済まん様になるわ。」

「鉄拳制裁確定なん?!」

せつちゃんの頭に垂れた犬耳が見えるえ……。

「当たり前やー。協力してもうた時点で同罪やで?そもそも師匠が
こんな状況認める思つかー?」

「……ですよねー。」

「見回りはウチがやるからせつちゃんは勉強しい。100位以内に
は入れたら相殺できると思っえ。」

「わかりました……。」

ああーせっちゃん仔犬みたいで可愛ええわあー。思わずイビる師匠の気持ちがあわかってまうー。

……アカン。エヴァ師匠の性格と嗜好が移ってしもつとる。

Side end

Side アルビレオ

じよばばば

「ふにゃー。」

水鉄砲が命中して式が消える。

「これで三体目ですかね……。中々に可愛らしい式神です。幾ら私と言えどネコ耳でスク水だったら倒せずに通してしまうところでした。メイド服でも結構ですが。……ああイヌ耳でもいいかもしれせん。」

「黙れ変態。」

「……冷たいですね千明。随分長い間司書仲間じゃないですか……ほら、ネコ耳を付けて。」

メキョ……ゴリン……グシャ。

「……………」

無言で粉碎されました。アレは…中々の…厳選品で、高級品で、スペシャルだったのですが……。

「私の世界に土足で入って来た上にまだ狼藉をするのかしら？」

逃げようと離れますが、指を差された途端ゴリゴリと茨が私を絡め取ります。

こゝこれではスペシャルなネコ耳と同じ運命を辿ってしまうのでは？

「い、痛いですよ千明さん？」

「……………実体が無いのに痛みを感じる？それは興味深い。一度絞め殺してみましよう。」

「……………離してくれたら謝ります。」

シウルシウルと地面に消えていく黒い茨。

「コホン。すみませんでした。明日辺りに最下層に行つて何も知らない振りをして子供たちを地上へ返して下さい。」

「面倒な……。」

「学園長からの依頼と言えば動いて頂けますか？それにあの子供達は柚木さんの所の生徒と副担任です。」

「……………はあ。仕方が無い……気は載らないが行くとしましょう。」

「お願いします。」

ふう……本当に痛いですね。敵にだけは回したくありませんが……味方にもなつてくれませんかね彼女は。

まあ会話してくれるだけ当初よりマシですかね。

Side end

ドゴンッ

「ふおっ!?! なんじゃ?」

学園長室の扉を蹴り開け中へ入る。

「貴様、うちの生徒を巻き込んだな?」

声をかけつつ珍妙な頭部を握る。

「い、いや、まさか生徒達が行ってしまつとは思わんかったのじやよ。」

「ほう?あくまでも少年の試練の為だったと?」

「魔法の本と言う餌にも釣られずに職務を全うするものとはばかり……。」

「

「その割には生徒の方に魔法の本の話の流れしたようだな？」

「普通魔法なんぞ信じぬよ。」

「まあ今はそう言う事にしてやる。で、今どこにいるんだ？」

「図書館島最下層じゃ。」

「ああ…七里が居る所か。」

「うむ。最下層は彼女が居住、管理しておる所じゃ。設備も整っておる……それにどうやら勉強会を開いておる様じゃから日曜の夜に迎えを寄越そうと思っておる。」

「最下層の時点で普通は気が付きそうなものだが、ウチの連中だ。魔法関係のヤバいものを出すな。それを条件に今は引いてやる。この頭を吹き飛ばしたい所だが……今は辞めてやる。」

Side 学園長

「ふうー……老体にはキツイ殺気じゃ。」

一息付き、茶でも啜ろうかと思った時。

コンコンと扉がノックされる。

「む…。入りなさい。」

「失礼します。」

入って来たのは新しく派遣された神父殿。
確か魔法関係では無かったはずじゃ。

「おお……確かー……。」

「先日、新しく教会の神父として参りましたウニウエルサーレと申します。」

「これはこれはご丁寧に。ウニウエルサーレ神父。教会をよろしく
お願いします。」

「噛みそうな名前じゃの……。なんとつか面影が柚木君を感じさせる
のじゃが……。」

「顔に何か付いていますか？」

「いやいや失礼。少し見知った人物と似ておつてな。」

「……シスターの言っただけならした柚木教諭ですかね？」

「おおそうじゃ。」

「まあ世界には似た人物が3人程いると言いますからねえ。写真を
見る限りそこまで似ていないと思うのですが……。」

「いやはや足止め悪かったのうウニウエルサーレ神父。引き継ぎは
受け取ったぞい。」

「それでは失礼します。」

パタンと扉が閉じられる。

内線番号を打ち込み待つ。

「もしもし？」

「ワシじゃ。アルビレオかのか？ 柚木君に図書館の件が露見したわい。」

「マジですか？」

「マジじゃ。」

「ま、まあ本気でブチ切れて無いみたいですね……本当にブチ切れていたらここに大きな直通トンネルが出来てる所ですよ。」

「で、のう……お主の事話しちゃっていいかな？」

「……はい？」

「話しちゃっていいかのう？」

「……お断りします。重力を跳ね返す様な方とやり合いたくありません。」

「お主紅き翼じゃろつ？！」

「フルメンバーで掛かって太刀打ち出来なかったというのは事実ですよ?」

「帝国の誇張映画では無く?」

「脚色で言えば連合製作は100%増しで、帝国の方が事実に関わりなく近いですね。」

「半々ぐらいが真実とばかり…。ワシ初めて魔法が効かないという”事実”を知ったのじゃが?」

「相手の魔法を吸収、反射するアレですね。あれにはホント辟易しました。おかげで彼にメインで攻撃するのは詠春やガトウでしたからね。あのコートが敵に奪われでもしたら一国の大軍を相手にすると考えた方がいいですよ。」

「どーしてそーいう事を早く言ってくれんかのー?ネギ君がデコピンですっ飛んで行く風景しか想像できんぞ?」

「……はあ。貴方達は彼を甘く見過ぎている。いいですか?彼だけで世界の二つや二つ相手取れるんです。それをしないのは彼が優しい…そしてそれ以上に守るべき物が増えたからですよ。」

電話の向こう。アルビレオの声がいつになく真剣な物になる。

「……………」

「私は……英雄はもう必要無いと思います。ナギの息子にはただ平和に、健やかに過ごして欲しいと思うんですよ……。先の大戦が終結して20年……もういいじゃないですか。」

「むう。」

「とまあ真剣に言ってみましたが本題はあのスペシャルなネコ耳が壊れました。新しい物をお願いします。」

「あれ結構な額じゃぞ?!」

「黒鉄の茨の前では非常に脆く…。」

「七里君にまたちよっかいを出したのかのう?」

「ははははははははは。」

プツン。

わかっておる。十分にわかっておる。最早老人の夢など継がせるものではないと……。

さよ……ワシは間違っておるのだろうか?

S i d e e n d

「水が気持ちいいねー。」

「そうでござるなあ。」

「非常識加減もここまでくれば最早非常識という言葉は当てはまらないです。」

「はははは……（魔法隠蔽も何も無いじゃない！！！！）」

「ところでアーニヤ殿はネギ坊主の幼馴染とか？」

「そうだけど……なんで知ってるの？」

「雰囲気でござるよ。」

「ねえねえネギ君が教師でどうしてアーニヤちゃんが生徒なのー？」

「それは私も疑問に思ってたです。」

「い、色々あって……ははは（何て言えばいいのよ?!私だって疑問なんだから！！！！！！）」

バラバラバラ……

「何の音？」

「……上っくするー……」

ザイルを使って降りて来る人物。

「…全員服を着るでござる。」

「わかったわ。」

「救出というわけじゃなさそうです。」

Side ネギ

一人の女性が僕達の落ちた穴からロープ一本で降りて来ました。

黒い身体にフィットした服に、黒いグローブ、黒髪。余り特徴の無い女性。

救出の人でしょうか？

「あ、あの……。」

声を掛けましたが、まるで僕が見えていないかのような挙動でキツチンの方へ向かって行きました。

「あれは誰でござるかネギ坊主？」

「ち、ちあ…。」

「思いっきり無視されてたじゃない。」

「うるさいよアーニヤ。」

「あんですって?。」

「二人とも痴話喧嘩してる場合じゃないアル。」

「「してません! (ないわよ!)」」

「ちよっと私が聞いてくるよー。」

「待つでござるよまき絵殿! 相手が何者が解らない以上不用意に近づくべきではないでござる。」

「…。」
「楓さんの言う通りです。この秘境らくせんに慣れた様子で入ってきました

「ああ…何故、残り少ない物から使った。」

冷蔵庫を見て、コチヲを睨んできます。

「ね、ネギ? 拙いんじゃない?。」

「アイヤー…人の家の物を漁った感じアルか?。」

カツカツと足音を響かせてコチラに来る女性。

楓さんが構えちゃってます。…どうしよどうしよ？謝らないと…。

「楓もくーちゃんも構えんでええよー。ここの司書さんやー。」

「このかさん、司書の話なんて聞いてないですよ？」

「ごめんなーゆえー。言うたらアカンて言われてたからー。」

「まさか近衛や桜咲までいるとは……。君達が柚木さん所のクラスの子だな？」

「はい。あの僕、柚木先生のクラスの副担任で…。」

「ああ、別に聞いていない事まで話さなくていい。鬱陶しい。」

「うっ！？」

鬱陶しいって……。思わず泣きそうになるけれどアーニヤの前だ。笑われるわけにはいかない。グツと堪えて前を見る。

「これで全員か近衛？」

「全員おるえー。」

「では先導する。着いてきなさい。」

司書さんの後ろを皆ほとんど無言で付いていく。

魔法の本とか言いだせない状況。

滝の裏に入って。

「チツ。」

滝の裏なのに最後尾の僕にまで聞こえる舌打ち。

「君達の為の仕掛けだろう。あの変態め……。」

そう言われて扉の中をのぞくと、螺旋階段と何か文字が書かれた壁。

「これを昇ればエレベーターがある。それで地上へ直通だ。では二度とここへ来ない様に。」

「（ネギ！この人、高位の魔法使いよ！）」

「あ、あの貴方のお名前は……。アーニヤ？」

「……名乗る意味も価値も無い。そして君の名前を聞く意味も知る価値も無い。早く出て行きなさい。」

「（周りを見なさいよバカネギ！！！！）」

バカと言われたのは癪だけど周りを見て……。初めて自分に向けられている殺気に気が付いた。

無機質な目。こちらを見ている様で全く見ていない瞳。それなのにジワジワと這い寄る様な殺気。

膝が震えて動けなくなる。まるで、まるで……あの日の。

「(なにしてんの……!!こっちに来なさい……!!)」

「ネギくん、アーニヤちゃん何してるのー?」

「い、今行くから!」そこで”待ってて!(ネギ……!!)」

アーニヤに手を引っ張られて僕は螺旋階段に引き込まれる。

それと同時に入口が黒い茨で覆われる。

S i d e e n d

S i d e 千明

ミシツミシツミシツ……。

ザイルを茨で固定し地下洞へ滑り降りる。

子供が十に届くかという数。

全く以って騒がしい。

面倒な……。裏のエレベーターが使用できないとはどういう意味なのか。

慣れた地面の感触。清浄な空気、水の音だけが響く空間。

私はココに自らの欲望そのものを手に入れた。

そこに汚物サワガシイモノがある。

「あ、あの……。」

赤みを帯びた茶髪の子供がこちらを見上げ話しかけて来る。

対処する必要無しと判断。

副担任が来ているという話。その者とだけ会話すれば話が済む事だ。

そこでフツと気になった。

この人数が籠っていたのならば冷蔵庫の食材は……と。

一直線に冷蔵庫に向かう。

ガラリと開き中身を確認する。

……ロクな物が残っていない。

「ああ……何故、残り少ない物から使った。」

意図せず茨が周りの物を抉る。

冷静に、冷静に……自分に言い聞かせ子供の人数を確認する。

近付いてみるが構えるのが二人程。難儀しそうだが問題は無い。

骨の二、三本怪我の内にも入らない。

「楓もくーちゃんも構えんでええよー。ここの司書さんやー。」

が、近衛が前に出て来た。

「このかさん、司書の話なんて聞いてないですよ？」

「ごめんなーゆえー。言うたらアカンて言われてたからー。」

近衛の後ろに桜咲を視認。軽い衝撃と眩暈を覚える。何故あの人に鍛えられていて、この連中をココに通すのか…。

「まさか近衛や桜咲までいるとは……。君達が柚木さん所のクラスの子だな？」

「はい。あの僕、柚木先生のクラスの副担任で…。」

「ああ、別に聞いていない事まで話さなくていい。鬱陶しい。」

冗談も大概にして欲しい。懐かれでもしたら最悪。

「うっ！？」

しかし副担任が居ると言われてはいたが、それらしき者が見当たらない事を考えると…。

近衛がこの場合一番話を通る。

「これで全員か近衛？」

「全員おるえー。」

「では先導する。着いてきなさい。」

無言で付いてきた事に一安心する。

もしこれでギヤイギヤイと騒がれでもしたら殺さない自信が無い。なるべく殺す事を控えるよう言われたが、所詮この身は殺人機械。

息を吸う様に殺し、息を吐く様に潜入し、そして平然と裏切る事が出来る。

滝の裏の扉を開ける。そこにあつたのは石板。実にふざけた内容の石板。

「チツ。」

そういう事が。エレベーターが使えないとは。

「君達の為の仕掛けだろう。あの変態め…。」

子供を前に連れて行き自分は後ろへ下がる。

「これを昇ればエレベーターがある。それで地上へ直通だ。では二度とここへ来ない様に。」

生徒と思わしき者達は石板の問いを次々と突破し上へ昇るが……。

目の前には自称副担任が残っている。

早く行けとばかりに殺気を放つがまるで感じていない。

「あ、あの貴方のお名前は……。」

「……名乗る意味も価値も無い。そして君の名前を聞く意味も知る価値も無い。早く出て行きなさい。」

どうせロクに覚えもしない癖に。

元老院の糞共と同じ顔に見えて来る。

天船なんかと組ませた蛆虫共。

足元から茨が這いだし子供を呑みこもうと近付いていく。

「ネギくん、アーニヤちゃん何してるのー？」

一人の少女の声でハッと茨を戻す。

「い、今行くから！そこで待ってて！」

別の少女が飛び出してきて、子供の手を掴み消える。

仕事は終わった。茨で出入り口を隙間なく塞ぐ。

また静謐な世界が戻って来た。

S i d e e n d

「ひい……ふう……はあ……どこまであるのよこの階段……！」

息も絶え絶えにアーニヤ殿が叫ぶ。

「もうすぐでござるよアーニヤ殿！エレベーターが見えるでござる。

」

「楓さん申し訳ないです……。」

「気にする事は無いでござるよ夕映殿。誰でも得手不得手があるでござる。」

途中で足を挫いてしまった夕映殿を拙者が背負い、皆で螺旋階段を駆け上がる。

思いを馳せるのはちょっと昔の事。

凄まじい戦いに見惚れ、油断した拳句に人質に取られた。

当然里にも伝わり、拙者は上忍への試験を高校卒業まで受けられない事になってしまったでござる。

あの凄まじき人物は今拙者の教師となって活躍している。

あの司書らしき人物。
あれは表の人間では無い。

図書館島地下が清浄な空間であるからこそ、拙者は”降りて来る前に”気が付いた。

裏も裏。高畑先生と同じくらいの年齢であるにも関わらず濃い血の臭いに真名より濃い戦場の気配。

気配が薄い様でいて濃い。掴みどころの無い人物。

思わず身構えたものの勝てる気すらしなかった。大手裏剣ですら事も無げに受け止められる気がしたでござる。

しかし何よりも重要な事。

柚木先生の知り合いであると当人が語った上にこのか殿や刹那の反応からして旧知の間柄。

逆に考えれば柚木先生とこのか殿は何か深いつながりがあるでござる。

今日まで一般人とっておったのでござるが……………。

このか殿の図書館島踏破を思い起こしてみるが……………やはり常人のソレを越えていたでござる。

あの時はネギ坊主が心配で余り目にする事が出来なかったとはいえ……………。

これは何らかのコンタクトを取って柚木殿の指南にあやかりたいものでござる。

Side end

Side まき絵

何とか脱出！

これでテストには何とか間に合うよー！

「やっと脱出だねー！」

「そろそろござるなー！」

「いやー助かったアル。」

「久々の太陽です。」

チンッ

エレベーターが”着いたよ！”お知らせしてくれる。

扉が開くその瞬間を心待ちにする！

ゴゴゴゴと扉がひら、ひあ……。

Side end

S i d e 刹那

「やっと脱出だねー！」

「そつでござるな！」

「いやー助かったアル。」

「久々の太陽です。」

皆口々に脱出を喜ぶ。

しかしウチの頭にある事はたった一つ。

土曜日の無断欠席、日曜日から金曜日の無断欠席。

一般人を止められなかった事。

それらに付いてブチ切れているだろう師匠。

受けるだろう折檻。

と、とりあえず……月曜日まで逃げきってテスト後に謝ろう。
成績発表で挽回して助かろう。

チンツ

戦場へ着きましたとエレベーターが知らせる。

地獄の門がゴゴゴゴと開……………。

「あつ。」

逆光に照らされる仁王立ちの誰か。誰かなんて説明されまでもなく理解出来る。

正にその姿地獄の門番。いや、魔王。

「せー！ つな君、こー！ のか君、佐々木に長瀬に綾瀬に古そしてアーニヤ君。薬味小僧。ちよつと、おはなし（おしおき）しようか。」

ゴガガガガン

あ、頭がクランクランする…。

強烈な拳骨。

一般人のまき絵さんやゆえさん古さんには一発。ウチとこのちゃんどアーニヤさんには二発ずつ。ネギ先生には師匠曰くトリプルアイスクリーム。

「で、でもギャン！」

言い訳は無駄ですネギ先生。合計でトリプルアイスクリームプラスサービスですか。

ハルナさんや宮崎さんまでアイスクリーム乗っけてますね……。は
はコレで済んで良かった…。

「なぁー……にを安心しているのかな、せー……つな君？」
痛がる皆をすり抜けて耳元に息がかかる。

「ひっ!？」

「せー……つな君はチャチャゼロが雪山で待ってるぞ?こー……のか
君には砂漠で明日菜が待ってるぞ?」

小声、しかし大きな声が耳元で宣告される。

「「あ……あうあうあう。」」

「そして残る諸君には優しい優しいタカミチが相手をしてくれる。」

「タカ……ミチ?」

そこには居たのは正真正銘デスメガネ。

「悲しい。悲しいなぁ……僕は今すごく悲しい。そして凄く怒って
いる。着いてきなさい。」

私の頭の中には未だエレベーターのチンツという音が響いていた。

S i d e e n d

53話…とある授業風景（後書き）

学園長との会話中に危うく文面に本田ナイス！！！！と書く所でした。

と書いて数十分後、まさかの遠藤ナイス！と深夜にも関わらず叫びました。

PKでうわああと叫び。

3点目で、神を信じる気持ちになりました。早朝に女子中学生の入浴描写して、ゴールに喜び踊る事なんて今後無いと思います。

本田、遠藤、岡崎最高！

神様、仏様、本田様。岡田監督ゴメン！オウンゴールの件で予選3連敗で帰国なんて言うってごめんなさい！

そして茸は帰ってこい。

この作品のネギ並に影が薄いし、活躍しない。

とまあ書いておいて上げたのは今日。

図書館編も織り込んでしまいました。

全体的にキナ臭くなってくる麻帆良学園。

様々な思惑が交錯して……。

次話でネギ襲来2 - A編は終了。

一体ネギは何時になったら宗一郎に気が付くのか？
そしてネギとアーニャの目的とは…。

次回

53話・終業式と春休み

54話：終業式と春休み

夢を見た。

血、血、血、血。

畳に、障子に、木の廊下に。

赤、朱、紅、赫。

咽返る様な血臭。

桜、櫻。大きな桜。

血を吸って更に妖艶に咲く花。華^{ハナ}毒。

拙い…この先は拙い。覚める。夢なら覚める。

「宗君？」

血まみれの女性。

赤い服。鉄の臭い。艶やかな黒髪は血で濡れ、手には刀。顔には笑顔。

「？」

声が出ない。喉が渴く。

「大丈夫。お姉ちゃんが皆　　したから。これで柚木は二人だけ。」

聞こえない。声が遠い。

「ガアアアアアアア！！！」

そこで目が覚めた。

「驚いた……大丈夫か宗一郎？」

「はあ……はあ、はあ。……エヴァか。」

冷たい手。黒いネグリジエを着たエヴァンジェリン。
月に照らされるその姿は妖艶で。

それでもどことなく幼さを感じさせる笑い方。

「魔されていたからな……。久しぶりじゃないか？」

「ヤバかったよ……。もう少し見ていたら狂っていたかもしれん。」

「昔の……夢か？」

「ああ……嫌な事が最近多過ぎた。」

「話して……楽になる事もあるぞ？まあ昔にも言ったかもしれんが……」

「いや……必要無い。これだけは駄目だ。」

「フツ。」

「なんだよエヴァ。」

「変わって無いなお前は……。一言一句同じ言葉を言つとは。」

「なに……秘密の一つや二つあった方が……。」

「恰好良い。だろっ？馬鹿者。」

ぺちんと額を叩きエヴァが出ていく。

「心配掛けた。おやすみエヴァ。」

「ああ、おやすみ宗一郎。次は叫ばない事だ。」

エヴァが出ていくなり強烈な眠気に襲われる。やはり……疲れがたまっ……。

Side エヴァンジェリン

「眠りの霧。眠れ宗一郎……。夢など見ない深い眠りで。」

宗一郎の寝息が聞こえる。

明日菜が起きている気配は感じない。

「……いつまで私の嘘は通じるかな？」

宗一郎の過去を知らないなど嘘だ。

とつくの昔に知っている。

初めは軽い気持ちで夢を覗いた。後悔した。

どの夢を見ても血があつた。終ぞ私は宗一郎の笑う夢を見る事が無かつた。

宗一郎が異世界から来た事も知っている。行動理念の根底に存在する者たちも知っている。

核鉄がこの世のもので無い事も知っている。

この悪夢を一時でも見ないのであれば幸いだ。帝国に居た時はこの夢を見なかつたのだらう。

私が出来なかつた事をテオドラ皇女はやりよつたわけだ。

「ああくやしいなあ…。」

今日のテストが終わつて、終業式を迎えれば春休み。

それで宗一郎はテオドラ皇女と結婚してしまう。

「婿入りとはいえ皇族が世界に魔法をバラすか……中々どうして。」

艶の効いた笑いが漏れる。

S i d e e n d

S i d e あやか

「駄目ですわ……眠れません。」

ベットから這い出し冷蔵庫へ向かう。

「大丈夫あやか？」

「ちづるさん？ごめんなさい……起こしてしまった様ですわね。」

「最近のあやか、何だかおかしいから。」

「ええ……。少し思い悩む事があつたので……。」

鮮明に思い出されるあの日の出来事。

ネギ先生を歓迎会へお招きしようと後を追いかけて……。

階段から落ちるのどかさんを目撃しました。

私にはどうする事も出来ずに、それを見ることしかできませんでした。

でもネギ先生が長い棒を取り出し、何かを唱えるところのどかさんの落下速度が明らかに弱まり、柚木先生がギリギリ滑り込みクッションになった様でした。

ネギ先生は私に見られた事が駄目でした様で隠そうとしましたが……。

あれは恐らく魔法と言うモノではないでしょうか？

魔法。普通に考えれば存在しないモノ……ですが雪広財閥は凡庸な財閥ではありません。

ちよつと調べればわかることです。この世界には魔法が存在している。

その最たる例が柚木先生。

20数年前から一切容姿体型が変わっていらつしやらない。

「私に話してみない？」

「ちづるさん……。私の悩みの種は他の方の秘密に関わる事です。むやみに広めてはならないと思いますの……。」

得た情報が全て真実だとすれば……魔法使いである事がバレたら小動物に変えられてしまうと言つのです。

これではおいそれと誰かに相談など出来ません。例え一番の親友であつても……。

「……そう。話せるようになったら何時でも頼つてねあやか。私はあやかの味方だから。」

「ありがとうございますちづるさん。」

「おやすみなさい。」

「ええ。おやすみなさい。」

一度、柚木先生に聞いてみましょう。

ネギ先生はああ見えてもパニックに陥りやすいですわ。
ならば理性的に、確実に話が出来る柚木先生を問いただすのが一番
私が協力します。

記憶消去を受けた時の為のテープも作成済みですわ。

S i d e e n d

「これよりテストを始める。」

新田先生の掛け声で始まった試験。

図書館地下組みも定時参加。大きな問題はあつたが……試験を迎え
られた事には安堵する。

「クラスの雰囲気がいつもと違いますなあ柚木先生？」

「そうですね……。皆必死なんですよ。」

「それはまた珍しい……。いつもお気楽な天気なクラスも遂に将来を
視野に？」

「いえいえ違いますよ。学園長が結構無茶な提案をしましてね……。」

「ほう？それは？」

一瞬、新田先生の眼鏡の奥で瞳が光った様に見えるのだが……。
気のせいだと思いたい。数少ないまともな教師で一般人。
この麻帆良で唯一安心して酒を酌み交わせる相手だと言うのに……。

「2 - Aが最下位から脱出する事。」です。さもなければ採用は見送り、国に帰れとね。」

「そんなに難しい事では無かった様ですな……。あの子達もやれば出来るのです。……確かに巧い教え方やテスト対策の資料は重要です。しかしそれだけでは教育は巧く行かないものですよ柚木先生。」

「肝に銘じておきます。」

その辺は2 - Aだからこそ為せる技か。
個人個人の各所に突出しすぎた才と、強い横への繋がり。

はてさて……朝倉に唆されて2 - AのTOPに食券を賭けてしまったが……どう転ぶか。

一位と最下位だけを残し発表が終わる。

二位からブービーまでは実に3点差の争い。

「ふふふ調子はどうだいシトーさん？」

誰もがモニターに集中する中、スルリと真名が隣へ滑り込む。

「真名はどっちに賭けた？」

「言つまでも無いよ。少年が帰国する方に賭けている。」

「俺はお前達の可能性に賭けてみた。」

「教師の鏡だね。そうだシトーさん、この後食事にも行かないかい？私の奢りでいいよ。」

「それはまた魅力的な誘いだがエヴァや明日菜も一緒でいいかね？」

「酷いなあ。それともシトーさんには一人じゃ物足りないのかな？」

「人を何処かの好色魔のように言うな。」

「おやおや別に好色魔とは言って無いさ。それとも自覚でも？…おつと発表だ。」

人をさんざつぱらからかっておいて人混みに消える真名。

『一位は』

「2 - A 成績TOP記念パーティー!!!!」

「「「わあああああ！」「」」

朝倉の掛け声とともに始まったバカ騒ぎ。

大きな樹の下には4人。

「真名、奢ってやろうか？」

大量の食券を持った俺と

「くっ……遠慮しておくよ。」

財布を引っ繰り返している真名と

「いやいやアンタ教師だろ賭けていいのか?!」

めんどくさそうな千雨に

「いいんじゃない？私も毎回賭けてるし……なんていうか麻帆良特有の空気がGOサイン出してるのよねー。」

あーばー明日菜。

一本の木にもたれ掛かりジュースを片手にバカ騒ぎから離れての談話会。

「そっぴやさ籠宮って柚木先生の事をシトーって呼んでるけどアレどういう意味だ？」

千雨のごもつともな疑問が飛んで来る。

「二人の愛の「昔シトー」と名乗っていた時期が会ってな!」…チツ。」

真名がまた場を混乱させるような事を吐きかけたので真実という事
実で押し潰す。

「ほれ日本語の解らない外国人じゃ”ユズキ”も”ソウイチロウ”
も言いにくいわけだ。んでまあ呼びやすいシトーと名乗っていた。」

「外人がジャックとかキャシーとか呼ぶ感じか?」

「そんな感じだ理解が早くて助かる。」

「ああ!そういう理由だったんだ。」

急に合点がいったと手を叩く明日菜。

「明日菜、それは今更じゃないか?なんだと思っていたんだ?」

「いや…宗兄だし、いつもの如く”その方が恰好良いから”だの”
柚木よりシトーの方が恰好良いだろ?”って妄言を言つと思つてた
から。」

明日菜がとんでもなく失礼な事を吐く。

「実は私も軽くそう思っていたんだけど…。」

しかもそれに追従する千雨。

「ちう。」

余りの仕打ちに仕返しがしなくなった。小声でちうと鳴いてみる。もっともこの場にいる人間ならば誰しも聞こえる音量だが。

ピクンッ！千雨が油の差していないロボットの如くゴリゴリとこちらを向く。

「ゆゆゆゆ、柚木先生？な、なんでソレを？」

「先日、我が家にもコンピューターを導入してな。ククク…中々似合っていたと思うぞ？」

「そうねー千雨ちゃんもアレよ？眼鏡無くてもイケると思うわ。エヴァ謹製の服で着せ替え人形したら凄いいもしろ…可愛いと思うわよ。」

「興味深い情報だ…。ちうか。」

「いやいや龍宮！そんな所に反応しなくていいから！！あと明日菜先生は本音がダダ漏れだろ！？」

「自分に正直に生きるっていうのが私の信条だから。」

「まあ柚木家の人間の基本方針だな。」

はしゃぐ薬味少年。同じ様に喜びはしゃぐ生徒達。

「まあ……誰も泣かないのならコレが正解か……。」

自然な笑顔。

「なんか言った宗兄？」

「いいや……ただの独り言だ。」

Side あやか

ち、近付きがたい雰囲気ですわ……。

話す以前の問題ですわ。今、ノコノコと行って聞いた日には……。

”秘密だ。なぜならその方が恰好良いからだ。”

こう普段は誠実でまともで真面目な先生なのですが……。

核心に触れる所まで近付くと笑って誤魔化し、拳句によく解らない根拠の恰好良い論で終結させられてしまいます。

まあ恐らくはソレが目的なのでしょうが……。

Side end

「柚木先生！」

「……………まさかとは思ったが……………呼び出したのは君本人か？……………雪広。」

パーティーの後、職員室に戻ると机の中に手紙が入っていた。

文面は”貴方は不老もしくは不老不死ですね。魔法の存在を知っています。聞きたい事があります屋上へ来てください。”

魔法先生、もしくは魔法生徒ならばこういう文面は書かない。

不老不死を知らない魔法関係者はごく少量。

一般人かとも思ったが”魔法”とある。

目的がわからない。

一般人ならば魔法の真偽について、まず疑問を抱く筈だ。

調べようと動いた所で大体記憶を消されて本来の生活に戻る。

差出人の目的は……………。

望みは不老か、真祖化か……………。

「そうですね。どうしても聞きたい事がありましたので。」

「残念ながら君の望みは叶わない。真祖化の資料は全て失われた。」

これは事実。真祖化の儀式、方法は俺の”頭の中”にしか存在しな

い。

資料はあの時全て燃え尽きた。そしてその著者である糞神父、資料提供者である完全なる世界に至るまで俺が殺し尽くした。

嘘は吐いていない。”資料は”事実無いのだから。

「意味がわかりませんわ……。柚木先生、貴方は不老もしくは不老不死ですわね？」

違うのか？ならば……。

「さて……何の事やら？」

「隠しても無駄ですわ。」

差し出される資料。

そうか……。合点が言った。雪広は魔法関係者では無い。組織力で魔法の存在へ辿り着いた……。

いや学園長の事だ。雪広財閥と資金的な繋がりがある。

「だがコレを俺と特定する証拠は無い。……ああ俺は、お……親父と顔が似ていてな。」

吐き気がする。

「麻帆良大の方の証言があります。20年前のこの写真と貴方は同一人物です。どういいうわけか誰も疑問に思っていないじゃないません

でしたが。」

寮監時代の、寮前で撮影した集合写真。

女生徒達の真ん中に俺、両サイドに明日菜とエヴァンジェリン。

あげくに雪広には学園結界が効いていない。

「だから？ちよっとしたアンチエイジングというやつだ。」

ジリ貧。

雪広は一步踏み出し言う。

「それではネギ先生就任初日、のどかさんをネギ先生が浮かせた事については?!」

駄目だ。もうどうにもならない。

「雪広。」

「なんででしょうか。」

唇を噛み締める雪広。

この分じゃ魔法使いが簡単に記憶を消し飛ばす事を知っている。となれば別の記憶媒体を用意しているだろう。

もつとも……俺は記憶消去など出来んが……。
死よりも残酷な……。

「君の集めた資料は完璧だ。何人の部下が記憶を消されたかは知ら

んがな。それで、君の望みはなんだ？」

「ネギ先生も……。」

「事実だ。何処まで調べた？」

「ネギ先生は……仰る言葉から推測するのみですわ。」

つまりネギの魔法をキツカケにココに長く居る俺が嗅ぎつけられた訳か……。最悪だ。

「俺は記憶を消さない。だが雪広、忘れる。全て忘れて日常に戻りなさい。これは俺の教師としての言葉だ。そして今から言うのは魔法使いとしての俺の言葉だ。自覚が無い様だから言っておく、君は今将来を決めようとしている。忘れて過ごすのならば元通りの世界。進めば血生臭い世界だ。どちらを選ぶべきかは言わずともわかるだろう……！」

「しかし……！」

「しかし何も無い。特に俺やネギを糸口にこの世界に入ろうとするな。死ぬぞ？」

「ネギ先生はそんなに危険な所にいるんですか?!」

「いや。アレは出生と学園長含む特定人種の影響のお陰で危険な所に行く羽目になるだけだ。」

「柚木先生は!？」

「俺か？俺は一等危険だ。雪広、君が一人でこの学園都市の人間を殺すのに一体どれくらいの時間がかかる？」

「……そんな事は出来ませんわ！」

「言い方を変えよう。君一人であの山の木を無くすのに何時間かかるかね？」

「……途方も無い時間がかかりますわ。」

「俺は3分あれば山を更地に出来る。」

青くなって絶句する雪広。

「この学園都市まるごと消すのに……そうだな10分あれば更地にして掃除して昼寝が出来る。そんな事は間違ってもしないがな。」

雪広は顔を地に伏せている。

言っておきながら随分酷な事を話してしまっていると思う。

だが、それでもいい。

怖れが雪広を守る。臆病である事が平穩をもたらす。

「それでも、それでもだ。もし人生を棒に振りたいたいならタカミチに……ゴホン。高畑先生に相談する事だ。」

一度足を突っ込んだ時点で棺桶に片足が入っている。最悪の場合も想定するべき。

まあ俺が棺桶に入ると笑えないが。誰か白木の杭でも持ってきそつだ。

「もつとも、その場合俺が敵に回る事もあるがな。」

「……………」

完全に沈黙してしまった雪広。

時に思うのだ。

記憶消去は人を殺すのに等しい。生きてきた時間の一部を消す事だ。だが……。

忘れた方が幸せな事もあるのではないかと…。

そのまま背中を向け歩き出す。

春休み。

誰もが寝静まったある夜。

小さなトランク片手にゆっくりと窓から脱出する。

とっつ！と飛び出し、ほぼ無音で着地。

どう考えてもエヴァを結婚式に出席させるわけにはいかない。

グランド・ゼロは勘弁願いたい。というか、皇族が居並ぶ中で暴れでもしたらコトだ。

ホッと息を付き立ち上がる。

「よし……。」

「何が”よし!”なんだ？」

正面、仁王立ちで佇む金色夜叉。

「ハハハ…お、おはようエヴァンジェリン。」

「お前のすることぐらい解るわ。」

「マスター嘘はいけません。私のセンサーに宗一郎様が引っかかったのです。」

後ろから茶々丸が出て来る。

「おおい！？ポケロボ！」

「何時の間に……。」

「我々ガイノイド総員で少しずつ宗一郎様の部屋を中心に。」

「普通、玄関じゃないのか!？」

「いえ行動把握が目的ですので。…そもそもココへ侵入するのは易き事。決して外には出しませんが。」

うんうん。指導はちゃんと行き届いてるね。

お前達人間より人間らしいなオイ。

「さて、何処へ行く気だ？」

「け、結婚式に。」

「私を連れて行かない気か？」

周囲の気温がドンドン下がってきている。主に氷の柱とかが生えているからなんだが…。

今更だがヘルメスドライブを使えばよかったと思う。それでも感知しそうなのが茶々丸クオリティーなわけだけど。

「すまない。平和に済ましたいんだ。」

初めて会うテオの姉とかもいるわけで、あと皇后陛下。表に出してはいないがガチガチに緊張している。

「フンッ……まあいい。早く行ってやれ。」

「いってきます。…でいいかな。」

「バカ。」

ヘラス帝国

「はぁ……。」

真っ白な服。胸には花と実に華やかな恰好。

「どうした花婿お！元気がねえじゃねえか。マリッジブルーってやつかあ？」

「茶化すなヴェラシオ。なんでこんなに皇族が多いんだ……。」

コンコン。

「どうぞ。」

入って来たのは巫人の少年。どう考えても皇族だ……。これで何人目だ……？

「えっとお初にお目にかかります宗一郎兄様。第二皇女が第八子、ルフトです。」

「こちらこそ初めましてルフト皇子。この度は……。」

「あわわ！そんな、頭なんて下げないでください！」

「しかし貴方は……。」

「いいんです！僕は生ける英雄に会えただけで満足です！握手してもらっていいですか!?!？」

「握手で良いのならば幾らでも。」

「ではでは失礼しましたー…あつ…結婚おめでとつございます!。」

「ありがとうございます。」

ちなみに似たようなやり取りを既に20数回行ったわけだが…。

「ヴェラシオ、皇族が多過ぎる。」

「俺達は長命種が多いからな…まあ若い期間も相当長いわけで家の規模にもよるが二、三人は最低、多いと十数人程…。」

「次期皇帝争いとかで揉めそうだなオイ。」

「は?」

「なんだそのポカンとした顔は…。」

「宗一郎…お前だぞ?次期皇帝。」

「もう一度言ってくれないかなヴェラシオ。」

「救国の英雄と帝国第三皇女。コレ以外の皇帝皇后候補がいるか?帝国つつつても割と民主主義なんだ。他の奴がなった所で誰も付いて来てくれねえよ…民無き国は国じゃねえ。つか外を見る外を。」

ヴェラシオは呆れ返ったという表情で言う。

仕方なく…しかし以前の経験から学び、ブラインドの隙間から外を窺う。

広場を埋めつくさんばかりの民衆。

「な……なあヴェラシオ…俺はこつ慎ましやかな結婚式をだな…。」

そもそも皇帝は困る。

超の計画に問題が生じる。

「バ・カ・野・郎。これから儀式的な奴をやって、皇帝の祝福を受け、民衆に手え振って、龍樹の加護を受けて、もう一度城へ戻ってきて、大広間使って婚礼パーティーだ。」

「ハハハ……それ一日でやるのか？」

「んなわけねえだろうが！公的な儀式と結婚パレード、龍樹からの加護を受けるまでが一日。帰りは戦艦で船中泊。戻って朝からパーティーが二日から三日。」

「そんなにドンチャン騒ぎしたいのか…？」

「ばっかおめえ政治や軍関連が全員休んだらやべえだろう？だから交代でやるんだよ。まあ最近じゃ一番大きい婚礼になるからもうちつと伸びるかも知れんかな？」

溜息が長々と出てしまつ。

コンコン 響くノックの音。

「まーた来やがった。…どうぞ。」

「失礼します。テオドラ様の準備が整いました。」

「……………ルーシーか？」

いつもの甲冑姿では無くドレスを着たルーシー。
余りにもイメージがかけ離れていた為に思わず問うてしまった。

「おいおい新郎が結婚式直前に別の女に見惚れるかぁー？まあ俺の娘だから仕方が無いよな！」

「結婚式ですから…流石に鎧と言つ訳には行きませんが。」

ズンッと何処から取り出したのか騎士剣を突き刺すルーシー。

「お父さん？余り下らない事言ってるよ髪毛削ぎ落とすわ。」

「決定事項?!」

「っとバカな事してる場合じゃなかった。宗一郎様、式場の方へ。
テオドラ様がお待ちです…お綺麗ですよ。」

「おおお……………」

「どつじゃ？似合っておるか？」

息を呑んだ。浅黒い肌に純白のドレス。

美しさと気品を感じられるのにテオドラ本来の活発さを失わせていない。

それでいて上品な妖艶さがある。

「ああ…抜群に。余りにも美しくて一瞬言葉を失ってしまったぐら
いだよ。」

「ッ…。」

朱に染まるテオ。

「20年も待たせて悪かったな…。」

「うむ。妾はもっと早く…20年前に結婚したかったぞ？この20年、宗一郎の事を思わぬ日は無かった。向こうで誰かと結婚してしまうのではないか、宗一郎が移ろいしてしまうのではないかと。」

テオの手を取り片膝をつく。騎士の誓いの如く。

「俺は刀だ。鞘や柄が無くてはまともに扱う事も出来ない…テオ、俺の鞘になってくれないか？結婚してくれ。」

「……………」

沈黙。

「ずっと昔から妾は宗一郎の鞘じゃ。断る筈など無いじゃろっ！」

Side テオ

今日はやっと結婚式じゃ…。

長かった。

来る日も来る日も宗一郎が旧世界で

アツチで仮契約、コツチで仮契約と繰り返した上に妾の事など忘れて結婚してしまうのではないかと心配であった。

妾よりも頻りにクルトや騎士団と連絡を取りどれほど寂しい思いをしたか。

向こうへ渡ろうにも忙しくて叶わん。

何もかも投げ出し行こうかとも考えたが、己の責務を放棄した妾を宗一郎がどう思つか考えると怖くて出来なかった。

服を着るのに時間がかかると言われ、宗一郎とは一瞬しかおつておらん。

宗一郎が何を考えておるのか…。”愛している”と直接言って貰ったのは何時が最後であろうか？

ああ宗一郎を襲撃した不埒者を幽閉した時であつたらうか…。

「姫様お手を上げてください。」

「うむ。」

このドレスも何と云ってくれるであろうか？

宗一郎にとって20年は本当に短いのであろう。妾にとっての20年は長かった。

共にいるエヴァンジェリンに奪われはしないだろうか？

アスナも初めは妾の為に宗一郎に近づく女を排除すると言いつつシレッと宗一郎争奪戦に加わりよった。

そもそも宗一郎の職場が女子校と聞いた時には頭を抱えたわ。

寮監なる生徒を管理する職ならばまだしも教師などという明らかに女生徒の真ん中。

アリアドネーで教師と生徒が結婚したというゴシップを聞いた時は正に血の気が引いた。

「終わりました。非常にお綺麗ですよ姫様。」

そういつて着付け担当の者達が退室した。

「ルーシー、宗一郎を呼んで来てはくれぬか？」

「わかりました。」

ルーシーも結婚した。あの時ばかりは物悲しく思ったものじゃ…。

「……お、遅いのう…まさか宗一郎は式の直前に…。」

「大丈夫です姫様！落ちついて下さい！」

嫌な予想が湧いて飛び出したい気持ちに襲われるが衛士達に止められてしまう。

コンコン 力強いノックの音。

「入るのじゃ。」

感覚が研ぎ澄まされる。

ギイという扉の音。踏み出される足。

白い礼服を纏った宗一郎。いつもの銀とはまた違った雰囲気で…。

「おおぅ……………」

どうとも取れる宗一郎の声。

「どうじゃ？似合っておるか？」

クルリと一回転。

それこそ今、宗一郎が似合っていないなど言えば妾は倒れ、二度と目が覚めぬ自信がある。

キュツと目を瞑り宗一郎の判定を待つ。

「ああ…抜群に。余りにも美しくて一瞬言葉を失ってしまったぐら
いだよ。」

「ッ……。」

ああ……やはり妾は宗一郎の事が好き好きで堪らないのじゃ。
今の一言で悩みが、不安が霧散した。
心が震え、身体が火照る。

「20年も待たせて悪かったな……。」

「うむ。妾はもつと早く……20年前に結婚したかったぞ？この20年、宗一郎の事を思わぬ日は無かった。向こうで誰かと結婚してしまうのではないか、宗一郎が移ろいでしまうのではないかな。」

妾の不安だった事をこころざばかりに宗一郎にブツける。

宗一郎は無言で妾の手を取り片膝をついた。

妾は宗一郎の手の温もりを感じながらただ、言葉を待つ。

「俺は刀だ。鞘や柄が無くてはまともに扱ふ事も出来ない……テオ、俺の鞘になってくれないか？結婚してくれ。」

「……………」

妾は鞘か……。刀を日常に繋ぎとめるモノ。
ならば妾はとつくの昔に宗一郎の鞘じゃ。
今更言うのは遅いわ！

「ずっと昔から妾は宗一郎の鞘じゃ。断る筈など無いじゃろっ！」

S i d e e n d

皇帝と皇后と皇族、帝国の高官が並ぶホール。

メディアは完全にシャットアウトされている。

赤い絨毯の上をテオと二人歩む。

手には汗、舌と喉が渴く。

見た所参列している皇族はほとんど見覚えがある。
遠方の方に住んでいる方々もおられるようだ。

皇帝の前で二人して膝を付く。

「我、ヘラス帝国皇帝は第三皇女テオドラ・バシレイア・ヘラス・
デ・ヴェスペリスジミアと白銀騎士団隊長柚木宗一郎の婚姻をココ
に認め、祝福する。」

皇帝の宣言と祝福。

宣言が終わると皇族達が静かに拍手をする。

皇族の婚姻は神父の前でやるものでは無く王である皇帝の前で行う

ものらしい。

正直な話

”常に妻を愛し、敬い、慰め、助けて変わることなく、その健やかなるときも、病めるときも、富めるときも、貧しきときも死が二人を分かつときまで、命の日の続く限り”などといった誓いを言う方がはるかに恥ずかしいのだが

これは結婚式というよりも、婚姻の儀式とした方が正しいのかもしれん。

皇帝陛下より剣を賜る。

それを腰に差して退場。

「さあてコレからが本番だぜ宗一郎！」

「なんで運転手がお前なんだヴェラシオ！」

「十数時間運転するんだ。俺しかいねえよ。」

なん……だと？

「そつじゃぞ宗一郎。これから十数時間民衆に手を振りながら龍樹の下へいくのじゃ。」

「笑顔でな！」

「む、無茶を言うな！」

ブロロロ そんな俺の声を無視して車は走り出す。

ワアアアアアアアア

凄まじい歓声。耳が痛い。

最前列の女性たちが泣いているのは気のせいだと思いたい。

テオは見事に外面を作って笑顔で手を振っている。

ヴェラシオも見事に真面目臭い顔で運転している。先程までお茶らけていた雰囲気がるでない。

諦めて笑顔を無理矢理作って、手を振る。

「よいのか宗一郎？」

しかし直ぐにテオが手を引っ張り身を寄せて話しかけて来る。

「何が？」

「笑いで筋肉がひきつるのじゃ。半日耐えられる柔らかい笑みを作るんじゃ。」

「……わかった。」

テオがこの20年間すっかりと皇女の役目を果たしてきた事を思い知らされる。

戦勝パレードではシルバースキンを着て立っただけの中身を変えれる程楽な作業だったが……。

今回はそうもいかない。

「手……腕が……。顔が……頬が……。」

見事に筋肉痛。

修行でもなった事の無い筋肉痛に襲われている。

手はかつてない程に冷え、腕がプルプル震える。

顔は笑顔の形に表情が張りつき必死に両手で頬をこねてほぐす。

「宗一郎立つのじゃ、これが本番ぞ!」

「あ、ああ。」

テオに手を引かれ森に入る。

ズンツ…ズンツという大地を揺るがす足音。

「帝国の守護聖獣 龍樹じゃ。」

眼前に現れるのは巨大な白い龍。

そんじよそこらの鷹龍や翼龍など比べ物にならない程の存在感。

恐らく竜族系の兵士だろつ者が龍樹へ結婚の事を伝えている。

「これより守護聖獣龍樹よりお二人に祝福が与えられます！こらえてください！」

こらえる？！

ゴオオオオオと息を吸い込む龍樹。

木が揺れ、俺達の身体が引きずられる。

直後龍樹の口から息がこちらに向かって放たれる。

「くっ……。」「きゃっ…。」

右手でテオを抱き寄せ支えつつ踏ん張る。

しかし…聖獣か。凄まじい神気だな…。

息を吐き終えた龍樹は身震いしだす。

カランツと龍樹の身体の一部が目の前に降る。

「……………おお。」

「どうしたテオ？」

「初代皇帝以後、父上と宗一郎だけじゃ…龍樹から身体の一部を貰ったのは。」

「光荣…なのか？」

「当たり前じゃ！」

俺は深々と龍樹に頭を下げる。

一瞬龍樹と素手でやりあったらどうなるかなどと考えていた事は口が裂けても言えない。

欠片を拾い、懐へ入れる。

また龍樹はズンツと大地を響かせて森の奥へと帰って行く。

帰還は艦船だったのだが、竜族の兵士や艦長と握手したのは恒例行事なので割愛する。

船内

「はあ……疲れた。」

上着を侍女に渡し、ベッドでくつろぐ。

キングサイズ。船の揺れも軽減する様なものがついているのだろう。

非常に気持ちがいい。

「これで前半戦終了じゃな。帰ればメディア用の結婚式と立食形式のパーティーじゃ！」

「げ、元気だなテオ……。」

立食形式で良かった……。これでフルコースなんて来た日には窓からでも逃げだす所だった。

「何を言っておる！メディア用の結婚式がメインじゃ！ここ20年ほど旧世界の結婚形式が流行りなのじゃ！」

「あー…それはつまり、死が二人を分かつまで云々の奴かな？」

「それじゃそれ！ウエディングケーキもあるぞ！」

メディアの前では軽く済ませる。そう思っていた時期が俺にもありました。

「宗一郎が旧世界の出身じゃろ？だからこっちでは旧世界の特に日本の物が大流行りじゃ。漫画という文化を取り入れようと思っておるのじゃが、どうにもこちらには作家がおらぬのでな…心当たりはないかのう？」

一瞬早乙女の顔が浮かんだが、アレは駄目だ。アイツだけは駄目だ。

授業中に必死の形相で書いていたので取り上げて閲覧したが……。

何故俺とタカミチがネギを取り合って裸でくんずほぐれつせねばならんのだ!!!!!!!!!!

グランツと世界が揺れる感覚を味わったぞ…。

引き破りそうになる衝動を危うい所で抑えて没収と同様のネタ禁止を言い渡したな…。

ライターでは灰が残りそうだったので核鉄を使ったのは心の奥にしまっておく。

その次は何故か彼氏がいる何処ぞの女生徒に手を出し落としてしまう教師。等々。

ああ、明日菜と一緒にメた時もあったな……はは当てにならないなラブ臭。

最近ラブ臭が妄言である事を確信した。

しかし、やたらと似顔絵が巧いお陰で明らかに俺がモデルと解る。

回収を逃した一冊は敬虔なシスターが不良教師に恋して云々という俺×シスターらしいが未だに本が発見できない。

いや、ある場所はわかっているのだが、どうにも危険過ぎる。

ここまでの思考約7秒。

「いやぁー…俺もそう言う方面には疎くてな。」

「そうか……うつむ残念じゃ。」

窓から見下ろす景色。

「何を見ておるのじゃ？」

膝の上に乗って来るテオ。

カタガネ心臓の音が早まる。コドウ

が、特に気にした様子も無いテオ。

「風景を少し…な。」

「コレが宗一郎の守った風景じゃ。緑の大地、豊かな村、民の笑顔。ここが戦地になっておれば全てが欠けておった可能性もある。」

「ああ…。」

そう言いつつテオを抱き寄せ背中から抱きしめる。テオの甘い香りが鼻腔に広がる。

「そ、宗一郎？」

「テオ、愛している。」

「宗一郎…。」

ゴホンツという咳払い。

「あー……なんだ、その…食事だぜ？」

「わかった。すぐに行こう。」

テオを横抱きに抱えて立ち上がる。

「そ、そそそそ宗一郎!?何をしておる!？」

「いや、そのまま連れて行こうと。」

「だ、駄目じゃ駄目じゃ!それはイカン!恥ずかしいわ!」

身を擦るので仕方なく降ろす。

「膝の上に乗る癖に抱きかかえられるのは恥ずかしい…」と。

「なっ?!それはその…二人っきりじゃから恥ずかしく無いのじゃ

!」

「ゴホンツ…宗一郎様、テオドラ皇女殿下…ええい肩つ苦しい!宗一郎、テオ様!イチャイチャしてないでさっさと飯を食ってくれ。みんな待ってるぜ!」

「わりい…。」

「すまぬ。」

こいつ実はもつと大物になるんじゃないか?

S i d e ヴェラシオ

さて、そろそろ呼びに行くかー。

どうやってからかうべきか。

「朝はスूपでフーフー、昼は仕事でフーフー、夜はベッドでフーフーってな！」

「父さん？引きちぎりますよ？」

「何処を！？」

いつの間にか後ろに居た娘に肩を掴まれる。

我が娘ながら恐ろしいぜ。

「まあ真面目に呼んでくるわ。」

「当然です。」

やれやれと肩を竦めて歩く。

全く俺に副隊長を任せてあっちをフラフラこっちをフラフラしようて…。

どうせお互いもしもじとやっているんだろ。ぶっかけてやらな
や…。

コンコンとノック

再三やってみたがまるで反応が無い。

「まるで反応がねえ……。…。入りますよー？」

そっと中へ入る。

が、全く気が付かない二人。良い雰囲気だし邪魔をすのもなあ……。うむ。

と、迷っていると突然宗一郎がテオドラ様を抱きしめた。

やるじゃねえか宗一郎。若い時の俺を思い出すぜ……。。

「そ、宗一郎？」

「テオ、愛している。」

「宗一郎……。。」

待て待て待て始める気だな?!それは拙い!

ゴホンツと咳払いを試みる。

「あー……。なんだ、その…。食事だぜ？」

「わかった。すぐに行く……。。」

そう言うなり抱いたまま立ち上がる。待て、待て待て…俺の想像を100%越えていやがる。

「そ、そそそそ宗一郎!?何をしておる!?!」

「いや、そのまま連れて行こうと。」

「だ、駄目じゃ駄目じゃ!それはイカン!恥ずかしいわ!」

「膝の上に乗る癖に抱きかかえられるのは恥ずかしい…」と。」

「なっ?!それはその…二人つきりじゃから恥ずかしく無いのじゃ!」

なんとという痴話喧嘩。ハッ…俺の心配なんざいらねえなこりゃ。

「ゴホンッ…宗一郎様、テオドラ皇女殿下…ええい肩つ苦しい!宗一郎、テオ様!イチャイチャしてないでさっさと飯を食ってくれ。みんな待つてるぜ!」

「わりい…。」

「すまぬ…。」

なんつうか…俺より圧倒的に年上の癖して息子みたいなんだよな宗一郎は…。

精神は肉体に引っ張られる。あながち間違っても無いらしい。

S i d e e n d

「やっと終わった……。」

「う、うむ……妾もクタクタじゃ……。」

あの後メディア用の結婚式、立食式のパーティーを三日。

肝臓や胃が悲鳴を上げている。

「もっと結婚式とは華やかで楽しいものだとばかり……。」

「最後のパーティー確実に不要だろう……。」

「うむ……アレが一番キツかったのじゃ……。」

「入るぞ。」

そう言つて突然皇帝陛下がお一人で入つて来られる。

「父上?!」

「陛下!?!」

だらけた姿勢を正し、陛下をお迎える。

「楽しんでくれ……。私は宗一郎殿の真意を問いたただけだ。」

「真意？」

テオがキョトンとした顔でこちらを向く。

「何故婚姻の儀式の際、次期皇帝の指名を延期にして欲しいなどと
言った？」

「……人払いをお願いできますか？」

「そいつは出来ねえ相談だ。」「幾らなんでも聞き捨てなりません。」

ヴェラシオとルーシーまでが入って来る。

「なんでお前達が……。」

「私が呼んだのだ。ココにいるものを信頼できぬ。という事は無い
であろう？」

敵わんなあ……。話す事前提で協力するであろう連中も呼びつけてお
くか……。

「俺は……世界に魔法をバラす。」

話す内容は、目的、方法、意味に至るまで全て。

長い沈黙。本当に長い長い沈黙。

「フ、フ、フハハハハハ！流石は媚殿。考える事が違う！世界樹を利用した全世界対象の強制認識魔法！それでは確かに次期皇帝などという立場では拙いな。」

沈黙を笑いで破ったのは皇帝陛下。

豪快な笑いは沈黙で出来た重しを砕く。

「無茶です。そもそもテオドラ様と婚姻された時点で皇族です！」

異を唱えるルーシー。冷静な彼女らしい。

「ハハッ俺は賛成だ。宗一郎らしい！いつそ全世界をヘラスとして統一しちまうか？」

一瞬ポカンとしつつ、豪快な笑顔で下らない冗談を飛ばすヴェラシオ。

「角を隠さずとも、何のしがらみも無く旧世界へ行けるのか…。」

そうなった世界を夢見るテオドラ。

「私はな…余り良い為政者では無かった。それでも昨日よりは今日を、そして明日は今日より良くしていこうとこの国を治めてきた。しかし内政を中心に進めていたおかげで連合の入植、大規模化を抑える事はおるか…この国の腐ってしまった部分の暴走すら止める

事が出来なかった。」

皇帝の独白。

「戦争も軍備の面で劣っておった。それを打開すべく打った起死回生の手段も内部の裏切りで崩れてしまった。あの時、嬪殿が居らねば将兵は壊滅したであろう。……争いを失くす。ありとあらゆる為政者が試み、挫折してきた夢だ。魔法を広めれば助かる者も増えるであろう。しかし当然悪用する物が出る。戦争も魔法を利用した物になる。それはわかっておるのか？ 最悪連合側の兵力を増やす結果にはならぬか？」

「……………」

幾ら俺自身が動いたとしても抑制できぬ影は生まれる。
かなり細かい設定は出来る様だが……瞬間的な効果は少ない。

「皇帝として言うのなら。旧世界六十億の人間の平和の為に、ヘラス帝国八億の安全を無視するわけにはいかん！……しかし、その夢に乗りたいと思うのも同じくだ。」

当然反対は受けるも……の……だとばかり……。

「え？」

「陛下?!」

「魔法を広めてはならない。この法を作ったのは旧世界から来た魔法使いたちだ。我等帝国はソレを批准した覚えも受け入れた覚えも

無い。帝国では5歳の子供でさえ人に魔法を向けてはならん事を心得ている……連合では一番最初に火を灯した後は魔法の射手を覚えるらしいがな。帝国に取って魔法など所詮技術でしかない……。」「個人としては賛成と言いつ切るか…。」

「のう宗一郎……止めて欲しいのではないか？」

「テオ……。」「

「わざわざ言う必要無かったのではないか？父上が言った事も全て理解しておるのであるう？」

「この国は……本当に……。」

「そう……なんだと思う。やってもやらなくてもメリットとデメリットがある。だから言葉じゃ絶対に止まらないんだよ。」「

「なあ宗一郎、お前を殴って止めれる奴なんてこの世に居るのか？」

「なに…本当にやろうと思えば22年周期で出来る。だがやるのは一回だ。」「

「では私は軍備を整えよう。」「

「陛下?!」「

「騒動の鎮圧に連合が動くであろう？ならばソレを我等が抑えてやる。ただしコレは婿殿の計画が成功した時だけだ。……ところで婿殿、顔や正体を偽ってやる事は出来んかね？」

「わかりました…。出来るだけ努力します。」

さて……。結局候補にされてしまったわけだが…。

候補と言っても俺以外居ない時点で……。はあ。

そんな訳で仕方なく正体を誤魔化す方法を模索している。

「シルバースキンAT」

防人衛の武装錬金シルバースキンのアナザータイプが構成される。

蒼と銀のシルバースキン。それはまるで中世の海賊を思わせるのだが…。

「むう……。銀色の部分がまだ残っておるぞ宗一郎？」

「とはいってもなあ……。」

コレが俺の武装錬金の能力プロテウスアビリティーの特性であって…。

新造は出来ないのだが…。

「これじゃあ駄目か？」

「銀は有名過ぎるのじゃ！宗一郎とイメージ出来てしまっわ！」
手をブンブン振って駄目と却下するテオ。

「いつそ黒く出来れば……。」

「……待て、シルバースキンは形状が自由だったはず。」

「シルバースキン。モードチェンジ。」

下からメタルチップが反転していく。

回転していくごとに黒く染まって行くシルバースキン。

組み上がるのは

黒い騎士型の鎧。シルバースキンというよりは最早ブラックスキン。

「おおお！邪悪じゃ！邪悪そうじゃ！」

「テオ地味にへこむ。」

「そうか？なんというか……こうズバツと無表情で切り捨てそうな感じがするぞ？」

「ロード：ソードサムライX。」

現れる刀は黒一色。

ああ……汎用性無いんだなコレ。

「……さすがに拙いのでは無いかのう？」

「ん？」

若干テオの顔が引き攣っているのだが……。

鏡を見る。

漆黒の姿。黒い刀身。何処からどう見ても……。

「……クールでブラボーじゃないか？」

「どっこがじゃー……!……!」

「もう……行ってしまうのか？」

「悪いなテオ……あいつらを卒業させたら戻って来る。どいつもこいつも目が離せなくてな……。」

「う、浮気するで無いぞ?!」

「何、本契約の上書きは出来まい?どっしり構えて待っていてくれ

…夏にはまた来れる！」

ゲート一つ貸し切るかね全く…陛下の配慮に感謝すべきか親馬鹿っぷりに呆れるべきか。

「新婚早々離れるかねフツー。」

「ある意味らしいと言えばらしいと思うけど？それでも一応騎士団を父さんに任せてこっちにいる間ずっとテオドラ様と居たじゃない。」

「俺がお前の母さんと結婚した時にはだなあ…。」

「聞き慣れてるわソレ。……再婚しても良いのよ？」

「イイ子は沢山いるんだけどなあ。」

「飲み屋の子以外ね。」

「じゃあもうちっと一人でいるさ……新人も鍛えなくちゃならねえしな。」

「そういえば……アレ、渡したの？」

「試作二号か？」

「それ以外に何か？」

「工房のトサカが五月蠅くてなあ……。あんな装備いらねえとは思っただが……。一応渡したぞ？鼻で笑われたがな。」

S i d e ? ? ?

「あーやつと帰った！全く監視役は堪らないわねー。」

「文句言わない。」

「だって一日中いちゃいちゃいちゃいちゃ。どこのポルノよ？」

「フェイト様のご命令なの。仕方ないでしょ？柚木宗一郎は極力刺激せず魔法世界移行まで一切手を出さない。周辺も一切直接的な攻撃行動は行わない。単独の強行偵察も禁止。」

「わかってるわよ……。でもいいの？アイツは？」

「アレは制御出来ないもの仕方ないでしょ。元々旧世界の人間だから制御も削除も出来ない……。それに相対してもアレにはもうまともな思考する脳も残ってない。情報は漏れないわ。」

「フェイト様がいなかったら私達でも危うかったもんね……。正直姫様が危険なんじゃないの？」

「大丈夫らしいわ……。柚木宗一郎が鍛えたらしくて、戦闘評価にティンダロスの一部をブツけたらなんと皆殺し。せつかく魔力に反応

してホーミングする武器を持たせたのに……。」

「ってことは咸卦法無しで？」

「そつ。意味不明の拳法でほぼ一撃。生きて喋れる奴が居なかったらしいわよ。仲間意識を使って誘き寄せたりね……聞くより映像記録見れば？私は二日ご飯食べれなかったけれど……とにかく確保をする方法をフェイト様が思案中よ。」

「暦のアーティファクトで身代りにしてーって話じゃないの？」

「バカ。それでどうやって姫様を昏倒させるの？ちなみに私達では一人3分足らずだってさ。」

「なにその時間。」

「私達が脳漿ブチ撒けるまでの時間。」

「……………えー。」

「ちなみにフェイト様から離脱の許可は全員に与えられているわ。柚木宗一郎がスポンサーの孤児院ならば私達でも保護してくれるからって。」

「あんたは？」

「私？残るわよ当然。フェイト様の事好きだもの。」

「いいねー正直者は。まっ私も残るわよ……後方支援だしね。」

54話：終業式と春休み（後書き）

やっと上げれましたー！！！！

日本敗退してしまいましたね。。。

軽くシヨックで文章が書けませんでした。

選手みんな頑張ったと思います。

思い返せば当たる敵全てが格上。

パラグアイ戦も良かった。0-0だったんだ。

本田もFKもかなり警戒させてた。これは凄い事だと思います。

予選リーグなんてモーターギアで火渡やとつきゅんを相手にした様な物です。

失点や一敗なんてかすり傷ですよ。

サッカーばかりになってしまいましたw

今回は

悪夢、エヴァの真実、雪広の到達、結婚式、その後と書いてみました。

次回

55話：桜通りの吸血鬼。

ところで原作のキャラ（教師）死亡はOKでしょうか？

ガンドルじゃないですよ。

生徒の誰かの武装錬金1話的な展開とかは問題無いでしょうか？

一応どつちも駄目。を想定して書いていますが、かなり展開が変わります。

分岐は四種類。

変わるのには主にネギと宗一郎の動き。

汎用予告

宗一郎が居ない間に起こる原因不明の昏睡事件。

事件は徐々に拡大の一途を辿る。

そんな中一人の被害者の首に噛み傷が残っていた…。

一部の魔法使い達の疑惑の目は当然唯一の真祖、エヴァンジェリンに向く。

血気に逸る魔法使いを押し留める学園長。

宗一郎の帰還を待たずに襲撃者特定に乗り出す明日菜。

ネギは逃げる事が許されない闘争に身を投じられる。

麻帆良の空に襲撃者の笑いが響く。

血の焦がれは不滅の妄執。謀略は悪意を伝染させる。

55話：桜通りの吸血鬼

宗一郎出発後二日目の麻帆良。
午後22時。

少女がひた走る。

時折後ろを振り返りつつ必死で。

白い息を吐き恐怖に怯えて。

何かわからない闇からの圧迫。

「はあはあ……ここまでくれば……大丈夫だね。栄子やビビも待つてくれてたらいいのに……。」

桜並木、街灯に照らされる桜通り。

ここだけは闇が払われている。

だから緊張を解く。だから警戒を緩めてしまう。だから……。

「そつだ……栄子に電話をかけて来て貰おう。」

携帯を取り出し、アドレス帳を検索する。

ドンッ

「痛っ……あっ……すみません！」

携帯に集中していた為に誰かとぶつかってしまっ。

そこにいたのは一人の女性。

「こんな時間に一人ですか？ いけませんね…送り返しましょう。」

「えつと……貴女は？」

少女は疑問に思う。目の前のこの人はよく知った人なのに、何かが違うと感じたから。

「シスターシャークティーですよ？何を言っているのですか？」

「……違う。」

「え？」

少女はシャークティーと名乗るソレを突き飛ばし、走り出した。

「ふうん……やっぱり血を吸わないと完成はしませんねえええ。」

少女が必死で稼いだ距離は一瞬で詰められる。

突き飛ばされ少女は桜の木に激突する。

「あつかはっ……。」

強かに背中を打ちつけられ肺が空気を吐き出してしまふ。

「貴女実に美味しそうですねえええ。私の渴きを癒す贄になりなさい。」

「ひ…やつ…助け…栄子…」。

ゴトンッ

少女は打ち捨てられ地面に転がる。

「うううん美味。運動し、恐怖し、絶望した処女の血は至高ですねえまるで長き時を経たワインのようです。エイコはお友達でしょうねええ。美しき友情です。」

ソレは少女の携帯を拾いアドレス帳や画像を見る。

「うううん…いいですねえいいですねえ。貴女の顔も頂きましよう。」

ゴキン…ゴリユン…メシッ…ボキッ…

不快な音と共にそこに少女が現れる。

「栄子助けてえ〜…おやあ？ああ…そういえばまともな声を聞いていませんでしたねえ…んんん、まあいいでしょう。姿だけでも餌にはなりません。」

新しい少女は闇に消える。血の気を失った少女を残して…。

桜通りに響き渡る狂った笑いと共に…。

Side 学園長

「一体どういう事じゃ……。」

昏睡事件の一例目から既に一週間。
既に被害者は二桁。

「まだ原因はわからんのか？」

苛立ちを押さえ魔法教師陣に尋ねる。

「この様な魔法、アーティファクトは幾ら探しても該当しません。」

ガンドルフイーニ君が西洋魔法についての情報を話す。

「陰陽術の類でもありません。」

刀子君が陰陽術について調べた事を話す。

そしてどちらも該当が無かった。

「最悪のタイミングに最悪の事件じゃ……。」

アルにも頼んで調べて貰ってはいるが……。この状況、いつ死人が
出てもおかしくは無い。

柚木君の帰還まで一週間。

無差別に襲っているようで規則的。
ドンドン魔力の高い者が襲われておる。

最終目標は木乃香じゃろうな……。

「失礼します!!!」

扉を開けて入って来るのは神多羅木先生。

「次の犠牲者かの?!」

「そうです…:ですが、首に噛み傷を発見しました!」

ザワツ

会議室が騒がしくなる。一同が瞬間的にイメージしたのは闇の福音の全盛期。

まずいッ……。

「落ちつくのじゃ!エヴァンジェリン君が犯人であるという可能性は極めて低い!!噛み傷だけで反応するで無いわ!!!」

シンツ…と静まる会議室。

ワシには解っておる。様々な勘違いや疑いをかけてはきたが……エヴァンジェリンならばこの様な事は決してしない。
そもそも噛み傷を残す事も不自然。

「しかし諸君の疑う気持ちも解る。タカミチ君、ガンドルフィーニ先生…エヴァンジェリン君の”護衛”をお願いするぞい！」

「はい！」

「神多羅木先生、明石教授は噛み傷の残留魔力の調査を！他の先生方は交代で、必ず二人以上で警戒に当たるのじゃ！！」

全ての教師が散ったあとワシ一人で会議室に残った。

「ネギ君や、木乃香を逃がすべきか……。しかしどうやって？どこへ？それに一般生徒にこれ以上被害が出れば学校どころでは無くなる。かといって授業が無ければ被害者の確認も困難。学園結界の隠蔽力も既に限界点が見え始めたわい。」

S i d e e n d

S i d e エヴァ

「それで私の護衛という事か。笑わせる。」

犯人が来るのでは無く、どこの正義馬鹿がぶち殺されるのを護衛

するんだろっ？

「大体事件の推定時刻はエヴァはちゃんとココでご飯食べてたわよ？」

「明日菜様の言つとおりです。必要でしたら記憶映像を提出いたしますが？」

随分仲間が増えた事だ。大昔ならこの時点で討伐隊が組まれて逃げる羽目になったものだが…。

「タカミチは良いとして、その黒いの。どうして貴様までいる？」

「黒いの…ゴホン。色々引っかかりそうな事を言わないで頂きたい。私の恩人が信頼している”人”です。柚木さんが戻られるまで守るのが私が為せる事です。」

フツ…散々勘違いして宗一郎に襲いかかった奴のセリフとは思えないな。

それに…人、というか…コイツも大馬鹿者だ。

「仕方が無い。オイ茶々丸、タカミチの部屋を開けてやれ簡易ベッドが地下にあったらどう、それも置いておけ。」

「はいマスター。」

「ぼ、僕の部屋残ってるんですかあ！？」

「いいえ。私共ガイノイドの待機場所兼、宗一郎様と触れ合う場所です。決して妹達に触れる事無きようお願い致します。」

「ちゃ、茶々丸？僕の事を何だと思っているんだい？」

「元居候のタダ飯食らいと判断します。ガンドルフィーニ様からは夕食の贅辞を頂きましたが、元居候のタダ飯食らいは無言で召しあがった上に食事の感想がありませんでした。」

「ひ、非常に美味しかったと思うよ？」

「地下室をご用意したい所ですがマスターのご命令です。準備いたして参ります。」

「はは……最近のロボットは冷たいね……。」

S i d e e n d

S i d e 超

おかしい。こんな事件は無かったはず……。

停電に合わせた茶番が起こらなければならぬのに……。

やはり私がココに現れた事に対する齟齬なのか？

コレが運命を変える事件ならば……私は黙認するしかない……。
私があつても良い時は……。

”一つ。家系図にある者が死にそうな時”

”二つ。お前自身が死にそうな時”

”三つ。世界樹の発光する時”

黙って強く、強く核鉄を胸の前で握りしめる。

血が滴り黒く塗りつぶされた中心の数字が露わになる。その番号9
6。

「すまない……まだ私はコレを使う訳には……いかないのだ。」

ギリツと奥歯を噛み締める。

眼光はするどく闇を睨みつける。

呪文回路がチリチリと疼く。

私の命を燃料にして燃え盛る魔力。

この印でさえ、この痛みでさえ……今は愛おしい。

この世界に送られた理由を思い出す。

沢山の候補の中から私が選ばれた理由を

「チャオどうかしたアルか？」

古が突然部屋の中に入って来る。

核鉄を服で隠して応答する。聞かれてはいないはず。

「古！ノックしろといつも言ってるネ！」

「忘れてたアル。チャオが泣いてるかと思って……って怪我してる

アルよ!？」

「大丈夫ネ。ちょっと考え事してたヨ。」

「大丈夫じゃないアル!救急箱取って来る!」

どうして…私に核鉄を託したのですか”母上”?

S i d e e n d

S i d e 明日菜

「危険です明日菜さん!」

「止めないでタカミチ。うちの部員までやられたの!宗兄が戻って来るのを待つつもりだったけど

、もう我慢の限界よ!犯人の腸ブチ撒けてやる!!!」

タカミチを振り切り飛び出す。

タカミチとガンドルフィーニが来て数日。
解決しないどころか被害は拡大。

学園の教師は気が付いて無いみただけど、どう考えても携帯のアドレスから辿って襲ってるわ…。

最初は友人。

そうなると当然ウルスラに被害が多くなる。対して魔法使いはウルスラの生徒を見守る。

ならばと犯人は次に部活繋がりで動き始めた。

どこが本能だけで襲っている猛獣よ！？狡猾さと動物の本能を考えれば立派なハンターじゃない！

「いいじゃないかガンドル、タカミチ。明日菜に対応できないのは真祖ぐらいだろう？吸血鬼程度ならば腸プチ撒けてジジイが泣きながら業者を雇う羽目になるだけだ。」

「ありがとエヴァー！タカミチはちゃんとエヴァーの事見張っておいて！」

咸卦法を掛けて全力で走る。

夜の風が気持ちいい。数度の跳躍で世界樹の頂上に立つ。

目に魔力を込め広範囲に監視する。

これで大抵の所は見渡せる。

「……………いた！」

監視を始めて数十分。顔は見えないが常識外れの移動方法。四足歩行で動物とも人間とも異なる動き方。

「タカミチなら届かないけど……………私なら届くッッ！」

左手に魔力、右手に気を集束させる。

「豪殺居合い拳ッ!!」

跳躍、上空からの豪殺居合い拳。

建物に当たらない様に斜めに打ち込み、吹き飛んだ対象に真上から追撃。そしてトドメの三撃目。

「宗兄なら建物ごと行くんだけど………ね!」

空中で瞬動を数回。さっきまで対象が文字通り這いまわっていた場所に着地。

”建物ごと潰した方が確実だろう?”なんて言うんだから……。

大抵の敵ならミンチなんだけど……。
そう思って下を見るけれど居ない……。しっかりと地面はへこんでるし、血の跡もあるのに。

ああ…そういうことか。

「よし。片づけたわね!楽勝楽勝!」

「このアマああああああつ!!!!」

ソイツは悪辣な笑みを浮かべると、機敏な動きで後ろから私に迫る。

「うおおおおおおおおおおおおおおつ!!!!」

私を襲うの直線的な右腕、しかしそれは囷。

私の”視界外から”弧を描く様に体重が乗った巨木のような左腕が

襲い掛かる。

それは、その場で見ている者がいれば間違いなく私を無残に吹き飛ばすかのように見えただろう。

ソイツもきつとそう思っていた。

「はあああああつ！！！」

「うぐうわあああつ！？」

巨木の豪腕は虚しく空を薙いだ。

そして明日菜が忽然と姿を消した様に見えた刹那。

懐深くに潜り込んだ明日菜の飛び上がる様な電撃の脚が顎を砕いた！

顎の碎ける音、頸椎の折れる音。少し当たった場所がズレたのか頭蓋が碎ける音は聞こえなかった。

「何、それで気配を絶ったつもりなの？生きて、そこに存在しているモノが完全に気配を絶てるとも思ってるの？」

コッチは宗兄から雪山で泣きたくなくなるような訓練受けてるのよ。

わかる？ホワイトアウトして5センチ先も見えないのにナイフ一本で襲いかかって来る茶々丸の妹達や、宗兄に立ち向かわなきゃいけない訓練よ？

茶々丸達のズルいのは私が近付くまで機能を止めて待っていると言
う事。

気配を探ってた日には容易くノックダウンよ！

眠ったままの彼女達を救出に行く宗兄をざまあみると見てたら、そ

れを幸運とばかりに抱きつくあの子達にどれほど嫉妬した事か。まさかのホクホク顔よ?! しかも個々の機体でその情報は堅守。共通記憶にしない。

あの日から彼女達をロボットだと安心していた自分の認識を改めたわよ……。

「っと。いけないいけない、トドメを刺さないと。」

グシャツ…。

顎を砕かれビクビクと跳ねる身体、それを頭蓋ごと首迄を踏み砕く。これで吸血鬼でも死滅する。

「念の為にっつと……炎の精霊……うーん…300柱? 集い来たりて焼き尽くせ連弾、火の300矢。」

アバウトに300柱ぐらいが集束して焼き尽くす。

集め過ぎた為に多少屋根が焦げてしまったけれど……。

「ま、許容範囲でしょ?」

後は学園長に言って……あー…私携帯持って無かったじゃない。

ま、いつか。明日からは被害者も出ないだろうし、昏睡状態の子達も起き上がるでしょ。

S i d e e n d

Side ?

明日菜が去り、誰も居なくなった屋根の上。

灰が静かに集まっていく。

手の形を、腕の形を、顔、身体、脚と順々に再生されていく。

「あ、あ、あ、あああああああ！」

静かに響き渡る叫び。

「酷いですねえ酷いですねえ……。しかし吸血鬼慣れた女ですねえ。この私が一度ならず三度殺されるとは……。しかしこの身体は駄目ですねえ……。俊敏さに欠けます。」

ゴキーン…ゴリユツメシツ…。

巨漢の男の姿は崩れ、
取る姿は女性系。

「女の身体は耐久力が低いのでえすがあ……。んんんー…仕方無いでしょう。やはり魔力のある者を襲う方がいいですねえメインディッシュはエヴァンジェリン、デザートは先程の女です。」

再びソイツは夜の闇に消えた…。

Side end

Side ネギ

「ネギ、起きてる？」

夜。アーニヤと二人っきりの部屋でベッドに潜り込み数十分。

アーニヤが声を掛けてきた。

「何、アーニヤ？」

「柚木宗一郎を恨んでいるって……嘘なんですよ？」

「……なんで？」

「ネカネさんに聞いているもの。ソレを理解出来ないネギじゃないはずでしょ？なのに、騙されているだのっ操られてるんだとか騒いだじゃない。」

ふうと息を吐く。

「やっぱりアーニヤには誤魔化せないかあ……。」

「どっつして？」

「その人は父さんを知ってる。スタン爺ちゃんやネカネお姉ちゃんよりずっと……父さんが言ったらいいんだ”安心しろもうすぐ最強

が来る。”って。その人が持っている武器と悪魔が持っている武器も同じだった。初めは追う為に恨んでるって言ってた…憧れてって言ったらきつとスタン爺ちゃんは止めたから。」

「ちよつと！私そこまで聞いて無いわよ!？」

アーニヤが飛び起きて僕のベッドに乗り込んでくる。

「広めちゃ拙い事があつたからね。あの襲撃には悪魔だけじゃなくて魔法世界の人も関わってたから。」

沢山の亜人がいた。悪魔を倒していたけどあの人は決して亜人を殺す事は無かつた。

「何が目的なのよ?」

「一番は父さんの情報。二番目に核鉄っていうアーティファクト。三番目に弟子入り。」

「弟子入り?!」

「父さんより強いならマギステル・マギへの最短の道だよ。どうしてかスタン爺ちゃんはマギステル・マギを目指すな！なんて言うから魔法もほとんどは自分で勉強するしか無かつたしね。」

はあと大きな溜息をアーニヤが吐く。

「その割にはあんな畏にはかつたのね?」

「うっ………だつて…あんなものが仕掛けられてるなんて普通思わな

いよー」

思い出すだけでも恐ろしい。先生も普通に対応してるし…。

「あれ……？」

「どづしたの？」

「いや、なんか凄く違和感があつて…。何か重要な物がいつも近くにあるのに、それに気が付かないような……。」

まるで認識障害を掛けられている様な……。

「何言ってるのよ……つてああ！もう十時じゃない！寝惚けてるのよ、寝るわよネギー！」

「あ、うん。ごめんアーニヤ。」

ベッドに身を横たえるとすぐに眠気が襲ってきて……。

S i d e e n d

S i d e 千明

「それらしい資料は無いわね。」

地上での昏睡事件にかりだされて二週間近く経った。それらしい資料は全く発見出来ない。

しかし目当ての恋愛小説の原書が見つかったので良しとする。

「そうですねえ…直接赴いて診てみれば別なのかもしれませんが…。余りこういう事は聞きたくないのですが…千明が完全なる世界にいた時には該当能力を使う者がいませんでしたか？」

「アルビレオ…私は連合、元老院側のエージェントだったのよ。完全なる世界には協力していたけれど知っているのは二人。処刑された天船と天船の敬愛していたフェイト・アーウェルンクス。」

よくよく話してしまうものだ。

持っていた情報は墓場まで持って行こうと考えていた時代が懐かしい。

「……………今、なんと？」

「フェイト・アーウェルンクス。二体目のフェイトだけど？」

「アレは何人もいるのですか…？」

まるで今初めて聞いたというようなアルビレオの驚愕の顔。

「そうよ…まあ二体目はもう死んだんじゃないかしら。私の逃亡情報としてイスタンブールと流したでしょう？その後イスタンブールでナギ・スプリングフィールドの行方不明、魔法使い数人の殉職。それらを考えれば、相討ちって所でしょ？」

「……………そうですか…通りで。」

「聞いて無かったの？」

「ええ……。」

「とにかくこれほど無差別に襲うハンターなんて知らないわ。フェイトが使うとも思えないし。」

「どういう事でしょうか？」

「話したと思うけれど私達は柚木宗一郎の監視が仕事だった。フェイト側からは手を出すなと言われていたのよ。元老院は殺せなんて言っただけだ……。襲うにしてももつとマシな方式を取ってるって聞いたしね……。流石に爆弾だの吹き飛ばすだのと言いだした時には呆れ返ったわ。」

「だから事を起こすまで皆、貴方を怪しまなかった。」

「存在感が無いと言えはいいわ。」

「いえいえ私にとっては唯一無二の司書仲間ですよ？さ、ネコ耳を。」

「ベキッ」

「こういう所が無ければもう少し話せる奴なのだが……。」

「上の魔法使い達の目がキティに向いてしまいましたねえ。」

「全くバカな連中だ。アレは絶対にそんな事をしない……。」

「誇りでしょうか？」

「いや、柚木宗一郎がそう言う事を嫌う。そんな行動に出れば嫌われることなど解りきっている。アレは私にですら敵意を剥き出しにする。そんな奴がわざわざ自分から嫌われるような行動をするか？」

「しませんねえ……。」

「アルビレオ、お前はもつと恋愛小説を読んだ方がいい。」

懐から本を取り出しアルに渡す。

「……これは？」

「（アンナ・カレーニナ） トルス

トイの恋愛小説。 初版本……ロシア語よ。」

「……遠慮しておきます。いえ、決してロシア語が読めないわけではないですが。」

「……そう。クレーヴの奥の方がいいかしら？嫉妬としては中々の描写が……。」

「す、少し用事を思い出しました……失礼しますね。」

アルが溶ける様に床に消えていく。

「Wuthering Heights（嵐が丘）の方が良かったかしら……？」

S i d e e n d

S i d e 美空

シスターシャークティーに呼びだされて部屋に入るなり大きな溜息が聞こえた。

ちなみに部屋は例の部屋です。

ううう……逃げたいっす。

「はぁー……まさか結婚されてしまつとは……。」

「し、シスターシャークティー？何かあったんすか？」

「来ましたか美空……。」

「……帰ってもいいっすか？いえ、帰らせて下さい。」

後ろを向いて走って……。

「柚木先生が結婚されてしまったのです……。この世の終わりです。」

「

ぎゃぽっ?!

逃げ脚だけが取り柄の私が捕まってしまうとは……。

(ココネー……！助けて……！)

(ゴメン。ムリ。)

「その……誰と結婚なされたので？」

「帝国の第三皇女です。」

うへー柚木先生皇族っすか……うちのクラスおかしくないっすか……。年齢不明の凄腕スナイパーとかいっつも木刀に見せて真剣持ち歩いてる桜咲とか筆頭に……！絶対他にも関係者いるんだよ……。

「私はこの先どうやって生きていけば……。」

重い！重いですから！

「そっついや……何で柚木先生の事が好きなんスか？」

「何を言ってるんです美空？」

ギロリとこっちを睨んでくるシャーケティー。

「いや、あの変な意味じゃなくて……魔法先生って大体連合出身で、大体紅き翼のファンじゃないですか？」

「よく聞いてくれました美空。話しましょう……これは忘れもし

ない12年前。私が可憐な女学生であったころです。」

……可憐？

「何か？」

「いえっ！何でもないっす！」

やっべえ…。

「続けます。交流区域のオスティアで毎年拳闘大会が開かれている事は知っていますね？」

「あー…まあ一応。」

「12年前大戦の英雄が出場するという噂が広まりました。例に漏れず私の両親は紅き翼のファンでしたから私も連れて行かれました。あの頃は純真可憐でしたのでナギのファンでしたわ。」

「はあ……。」

考えない考えない。疑問を持つてはいけないツス。

「そして現れたのが主催が必死で土下座して頼み込んだという柚木先生でした。連合の観客は大いに落胆していました……てつきりナギやラカンが出ると思われていましたから。しかし私は脳天に響く衝撃でした。運命の人はこの方だ！と。」

「ハハハ……一目惚れっすか……。」

「試合は正に一方的、蹂躪と言っても良いでしょう。大会の優勝者との戦闘でしたがまるで赤子の手を捻るが如く倒しました。その時たまたま攻撃が逸れて障壁が粉々になってしまっ……。」

え……ええっ！？障壁ってあのやたらと分厚いやつですよね?!
アレって割れるもんなんすか?!

あ、ありえねえ。

「ちょうど私の頬を掠めて後ろの座席を吹き飛ばしました。まあ後ろの人たちは帰ってしまっていたので問題はありませんでしたが?そして運命の瞬間が訪れました。試合終了後医務室に来て下さったのです!」

いやまあ…殺しかけたらね?

「そこで私の頬にそつと手を当て、”大丈夫かい?すまなかった。”と言ってくださったのです!その日の帰りにファンクラブに入りました。あの日から私の心は柚木先生一色です!」

「あ……ははは。」

先程まで明るかった……いや夢見心地だったシャークテイーの顔が一点ズンと暗くなる。

「しかし……婚約はただのパフォーマンスだとばかり……そう思っていたら……婚約から20年も経って結婚とは……。」

こつこつこのを躁鬱状態って言うんすかねー……どつやって逃げよう……。

「もうこの先、生きていく甲斐がありません……。」

重いよ…ガツシリ方を掴みだしたのが怖いよ。

「美空……。」

「……はい？」

ナンドロウ…イヤナヨカンガシマスヨ？

「もう貴方を鍛えて一人前にする事しか私には出来ません……。」

ギャポーーー!？

昼下がりの教会。美空の悲鳴が響いたとか響かなかったとか。

S i d e e n d

「明日菜さん……。」

「何、タカミチ？」

「……たった今新しい被害者が出ました。」

サッと血の気が引く。

「嘘……。ちゃんとトドメ刺して……。焼き払ったのよ!?」

「それはつまり相手が複数か、真祖だと言う事だな。真祖なら灰からでも蘇れる。昔下手をこいて焼かれた時の経験だ。」

エヴァがソファにもたれ掛かり腕と脚を組んでふんぞり返って言う。

「それに……。流石に複数なら目立つ上に結界に反応がある筈だ。十中八九、真祖だな……。明日菜、この件からは手を引け。お前では無理だ……。嫌な予感がする。最悪の可能性は容赦も何もない頃の宗一郎に全力で焼き払われて、それでもなお再生した化け物だ。」

エヴァの目が急に鋭くなって周りの温度が急激に下がる。

「知り合い?」

「私が唯一憎しみをもって殺した奴だ。」

その言葉に誰も何も言えず……。私達はただ閉口するだけだった。

55話・桜通りの吸血鬼（後書き）

次回

56話・過去の亡霊

もうすぐ試験の為、更新ペースが更に落ちます。申し訳ないです。

56話：過去からの亡霊（前書き）

完成直前にまさかのロスト

MSエ…。

中盤まで書いて落雷 停電。

その瞬間何か口から出て行きました。

そして消える度に話が変わっていく。

諸事情により編集。（7・15 11：00頃）

56話：過去からの亡霊

「ああ……久しぶりの日本だ。」

湿った空気に温い風。

火薬の臭いも血の臭いもしない平和な国。

過剰と言えるほど舗装された道路。無理矢理植えられた街路樹。

「柚木先生！」

「はい？」

学園の外で他で先生と呼ばれるのは新鮮で、聞き慣れない。

そこにいたのは葛葉刀子。神鳴流剣士。

刹那と違って常識があるのか帯刀していない。

教師陣でも向こうの関係がないせいかな常識的な人間だ。

「これはこれは刀子さん……まさかお出迎えがあるとは。」

「冗談を言っている場合ではありません！麻帆良学園で緊急事態です！至急戻ってください！」

……なんてこった全然平和じゃない。

「
というわけよ。」

明日菜から経緯と状況を聞くが……。

「ハハハハハ……なんで封鎖してないんだ……。」

思わず乾いた笑いが漏れる。

未だにソイツがいると解っていて部活動をさせているこの状況。最も昼で切り上げて入るらしいが……。

「
というか…アイツか？」

「アイツだろうな。最終目標は私か宗一郎だと思っただが……。」

エヴァと俺の共通見解。

随分と古い奴が来たものだ……。

「ちよつ二人ともちゃんとした話し方しようよ！私かわからないじゃない！」

「アイツはな、まだエヴァが純真無垢で可憐で素直だった時代の話だ……。」

ガシッと肩を掴まれる。

「
待て宗一郎。まるで今はそうでは無いかのような言い草ではないか。」

ギチリギチリと爪が食い込む。

「痛い…地味に痛いから！くっ…」
「そーいちろー」の時代って意味だ！」

ボンツとエヴァの顔が朱に染まる。

「なにその舌つたらずな言葉…。」

口を手で押さえプププと笑う明日菜。タカミチは俯き、肩が上下に激しく震えている。

ガンドルフィーニは顔を逸らして必死に堪えている。

事実。

チャチャゼロを作るまでのエヴァは異常なほど可憐だった。

流石領主の娘という感じだった。まあ今も面影は残っていて食事面では色々五月蠅いが。

とにかく妹というよりは完全に娘だった。

重い物を運べば無意識に”んしょ、んしょ”とか…。手伝わなければならぬと思わせる。

俺を驚かす為に隠れて色々作ったり、それでいて完成したら一番見せに来て頭を撫でて貰おうとしたり。

無理して歩いて疲れて、俺の背中であたり…。

ハムスターいや…なんともいえない小動物感溢れる可愛らしさが…。

「ええい余計な事を考えるな話すな！本題に戻すぞ！」

うがー！と吼えるエヴァ。

「ああマスターがあんなに楽しそうに…。」

「ちゃーちゃーまーるー？」

「あ…。」

「このっ！巻いてやる！巻いてやる！巻いてやるううう…！」

「はあ…はあ…。」

肩で息をするエヴァ。まあ…なんだ…イジリすぎた。反省反省…謝らないけど。

「しかし…アイツはどうやってココに入った？」

「へ…？そんなもの普通に…あ…。」

明日菜が気が付いたか。

「あんな奴入ってきたら普通結界に引っかかって…。」

「そう言う事だ。学園長がその者を迎えた…タカミチ、麻帆良周
辺で身元不明の死体が無いか確認してくれ。身元不明の昏睡患者も。」

「わかりました。」

タカミチが上着を持って外へ飛び出す。

アイツは俺達と居ると駄目駄目だが、外面や評判はいいからな。外の調べ物にはうってつけた。

「ガンドルフィーニ君は学園長に事件発生の上、三日前に招いた、もしくは入れた人間を聞いてリストアップ。必要に応じて奇怪な頭を締め上げる。」

「はい！」

頑固で馬鹿で思いこみが激しいが……まあそれなりに優秀。

明日菜に俺の妻かと聞いて俺と明日菜に吊るされたのは生徒にも有名だ……。

何処に吊るしたかは明言しないが麻帆良で一番大きな樹だったという事実は添えておこう。

まあ直球過ぎて連合へ”殺す事はしない！”と言い切ったのは不味かった。

スパイに全く使えん奴も珍しい。……裏切る時には言いそうだから近くに置いておけるがな。

「明日菜は学校へ向かってまだ残っている生徒がいたら寮へ送り届ける。生徒が居なくなったら学園エリアを結界で封鎖しろ……やりたかないが、校舎の一つや二つ吹き飛ばす羽目になる。」

「おい宗一郎。囲碁部の部室と茶道部の部室は吹き飛ばすなよ？私物が置いてある。」

「私物は家に置けよエヴァ……。」

「一々茶器を運ぶなど面倒だろう？合理的なのだ。」

ふんぞり返って言う事だろうか？

あれ確か昔々日本に来た時に若手の陶芸家が茶器を興味津々と見つめるエヴァに感激して渡したものだっけ？その後有名になっていたが……それはさて置き。

「エヴァ……シリアスに行きたいのだが……？」

「大丈夫大丈夫。宗一郎が負ける様だったらどの道誰も勝てん。」

「はあ……俺でも敵わんものはあるんだぞ？」

大きく溜息。

S i d e ネギ

「やっぱりこのまま待ってるわけにはいかないよ……！」

「ネギツ！タカミチさんから私達は手を出さなっって言われてるでしょ！魔力の多いアンタなんて格好の餌じゃない！」

飛び出そうとした僕の前に立ち塞がるアーニヤ。

「それでも……父さんなら行くはずだよ……！」

「ちよっ……！」

杖を掴んで窓から飛び出す。

「待ちなさいネギィ!!」

アーニヤの声を背に飛び立つ。

目指すは学園エリア。

風を纏って飛翔する。

S i d e e n d

「（誰も居ないわね…。部活が終わって2時以上間も経ってるし…
…もう大丈夫だと思うわ。）」

明日菜からの念話が届く。

「（わかった。では封鎖結果を張ってくれ。）」

各基点から光が広がり空が赤く染まる。

「ほうこれは凄い…。中で戦争をやっても外には伝わらないな。」

真名が空を見上げて口笛を一つ。

「中から外が見えないのが欠点だが…。真名はココで待機して
てくれ。」

「いいのかい？せっかく銀の弾丸を用意したのだけど…。」

「いや柚木先生がそうだって言ってるんじゃないわ……。」

「ゴメン……あの時の事思い出してもうて……。」

あの時……ゆーなと亜子と私が柚木先生に助けて貰った日。

私は見てしまった。

飴細工のように潰れたナイフを……。獰猛な笑顔を。

吸血鬼の噂。私はそんな化け物現実には存在しないよと笑って流した。

でも……その瞬間に思い出した。

柚木先生の吸血鬼の噂を……あのナイフを……。

「お二人とも、こんな所で何をなさっているのですか？」

「いいんちよ?!」

「委員長?!なんでココに?」

S i d e e n d

S i d e あやか

桜通りの吸血鬼の噂。

これはきつと魔法使いと関係がありますわ。

襲われた方は皆病院へ入院中、表向きは様々ですが真相は原因不明の昏睡状態。

一瞬犯人は柚木先生では？とくだらない事を思いましたが……。本当にそうであれば私にあんな事を言いませんわ。関わって欲しくないからこそその脅し。護りたいからこそその拒否。

大体無差別に人を襲う、そんな事をする人間ならば風香さんや史伽さんが懐く事はありません。

お子様ですが、人を見分ける目だけは確かですわ！

柚木先生の負担にならぬよう関わらないつもりでした。

しかし……。この様な状況は……。柚木先生不在の中、こんな事件の渦中にまだ幼いネギ先生がいらっしやるはず。じっとしていることなど出来ませんわ。

「と、いきこんではみたものの……。肝心のネギ先生がいませんわね……。。」

むしろ人と会わないのはどういうことですか？

小鳥の声も聞こえません。

そう思っていると突然後ろが赤い壁で封鎖されました。

「……………不味いですわ。」

仕方なく外周を歩く事に致します。

「人影？……………つてあれは……。」

大河内さんと和泉さんではありませんか？

ツカツカと近付き後ろから声をかける。

「お二人とも、こんな所で何をなさっているのですか？」

「いいんちよ?!」

「委員長?!なんでココに？」

グイツと大河内さんに手を引っ張られて思わずしゃがんでしまいました。

「一体何なんですか？」

和泉さんと大河内さんが必死で指さす方を見ました。

「……………なんですか？」

「柚木先生がいるんだよ委員長。」

「あれ?アキラもういはらへんわー。」

帰っていらしたのですか……………。では早々にお二人を連れてこの場を離れませんと……………。

「何をしているお前達。」

「」「柚木先生?!」「」

Side end

「全く……何を考えているんだお前達は……。」

チラチラ視線を感じるから警戒してみれば……和泉がぼこぼこ壁から頭を出すわ、雪広が堂々と歩いて来ていきなり隠れるわ……。

「（明日菜、生徒が居たぞ三人も！）」

「（ええええええ！？）」

「（どういうわけか全員ウチのクラスという戯けた状態だが……。とにかく結界を開いてくれ。）」

「（ちよっ……何？どういう事？…宗兄、外から攻撃受けてる！！）」

念話で明日菜が叫び

同時に結界にヒビが入る。

「ちよおっと拙い事態になった。三人共出来れば目を閉じて耳を塞いで蹲っててくれ……。」

三人にバレる？いや二人か……勘弁してくれ……。

Side ネギ

「へっぴん……？」

部屋から飛び出し箒で全力飛翔……そして壁に激突。

「あいたたた……。」

なんとか姿勢を保って落ちるのを防ぐ。

「これは結界……?!もしかして中に犯人がつ……!くつ……ラス・テル・マ・スキル・マギステル 光の精霊29柱……!魔法の射手 連弾・光の29矢……!」

ガガガガガンツ

全弾命中。結界に軽いヒビ。

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル 来れ雷精 風の精……!」
雷を纏いて(クム・フルグラティオーネ) 吹きすさべ(フレット・テンペスターズ) 南洋の嵐 雷の暴風……!」

遂に結界が耐えきれず粉碎する。

当然だ。結界は内から外へは難く、外から内へは容易いものだったのだから。

「やった!」

少年は戦場の空を飛ぶ。

Side end

「（シトーさん、どうもネギ先生みたいなんだが……撃ち落とすかい？）」

思わず頭を抱えて呻きたくなる。

頭を撃ち抜いてブチ殺して欲しいという欲求が鎌首をもたげることが無理矢理捺じ伏せる。

「（宗兄！発見した！校舎の屋上！真名からの死角！）」

頭を抱えて遂に呻いた。

「バカの子は馬鹿だったか……。」

タイミングが悪すぎる。

「（シトーさん、どうやらその方角に飛んでいく様だけど……。」

頭の中でプツツと音がした。

俺が高血圧だったら憤死してるな……。

「（知らん！もう知らん！俺はこの連中逃がすから戦わせとけ！明日菜、死にそうになったら介入しろ！俺は気絶か死ぬまで出ん！）」

つと下を見れば……

雪広おおおおお！！！！

「和泉、大河内事情はその内話す。とにかく今は逃げなさい。」

二人の手を引き走る。

ああまだるっこしい一人ならば抱きかかえて飛ぶだけで済むのに……

…。

Side ネギ

「貴方が犯人ですね！」

黒い影を見つけて降り立つ僕。

「……………アア？」

ゾクリ……………先程まで全く感じていなかった寒気がつま先から這い上がる。

「仕方ありませんえん。今宵は君で済ましましょうかああ……………」

首が不可能な程曲がってコチラを向く顔は……………。

「え？」

…………… 柚木先生？

じゃないっ！

「誰ですかっ?!」

「……………おやああ？やはり血を吸っていない人間を模するのは難しいですねえ難しいですねえ！」

反射的に後ろへ飛び下がったのは運が良かった。

屋上の一部が削られている。

「ワズ・エイワズ・ソラウ 火精召喚 59柱集い来りて敵を射て
魔法の射手 連弾・火の59矢！」

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル 光の精霊29柱！！ 魔
サキタ・マギゼリエス法の射手 連弾・光の29矢！！
ルーキス」

当たりそうなものを打ち消すが、しかし数が足りない。

周りに火の魔弾が着弾。

瓦礫の破片が頬を裂く。

だがソレに怯むことなく次なる詠唱に入る。

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル 風の精霊11人縛鎖とな
ウンデキム・スピリトゥス・アエリアルレス
りて（ウインクルム・ファクティ） 敵を捕まえる（イニミクム・
サキタ・マギカカプテント） 魔法の射手・戒めの風矢！！
アエール・カプトウーラエ」

煙が晴れる。

そこには縛られた男。

「やった！」

「なんですうう？このお甘っちょろいモノは？」

最早力技ですらない。

大仰に手を振り上げるだけで解ける様に風の戒めは消える。

「そんな……。」

ネギは最悪の一手を打つ。

立ち止まる事。魔法を使わない事。

グワツと飛び掛かる男。

ネギは後ろにずり下がろうとするも

ここは屋上。

フェンスに阻まれる。

ターン

ネギは頭を抱えてしゃがみこむ。

真名の放った弾丸は外れる事無く眉間を撃ち抜き、ネギがしゃがんだ事が幸いする。

男はフェンスを突き破り落ちていく。

S i d e e n d

S i d e 明日菜

「へえ……一緒に落ちてきたら助けるつもりだったんだけど……流石私の甥って感じね。」

ゴシヤッ

男が落ち、そして起き上がる。

「再戦と行きましよう真祖の吸血鬼さん？」

「貴女はデザアートのつもりだったんですがねえ？」

舌舐めずりする辺りが酷くイラつかせる。

「左手に魔力。右手に気。……咸卦法開始。」

「ワズ・エイワツガツアツ……ッ?!」

頭と腕を碎き蹴り飛ばす。

「詠唱なんてさせると思ってるわけ？」

そのまま追撃に入る。

が

懐から取り出すのはカードの束。

「は？」

一瞬。ほんの一瞬疑問で足が止まる。

「アデアットオオオオオオオオ!!!」

剣、刀、槍、鎧、槌。様々なただの武器から魔力を帯びた厄介な武器まで……。

「まずっ……。」

力任せにブン投げて来る。

髪の毛の何本かを切り落として偃月刀が回転しながら後ろの壁に突き刺さる。

次々と様々な武器が飛んでくる。

槍や刀の様に真っ直ぐ飛んでくるモノ、偃月刀みたいに回転して飛んでくるモノ、無理矢理投げられた西洋剣。

それら全てを辛うじて躲わすも無傷と言う訳には行かない。

「相手が悪すぎるッ……。」

ネギがコレを使われていたら有無を言わせず串刺しだっただろう。

途中からアーティファクトを呼ぶも、コレが止めてくれるかは甚だ怪しい。

ので振り回して叩き落とす為に使っている。

「はぁ……はぁ……はぁ……くそっ……。」

血が目に入る鬱陶しさから悪態を吐く。

「諦めて我が糧になりなさあぁあぁい！そして貴女の姿を持って

エヴァンジェリンを探しまあす！」

…え？もしかして…。

「探す？笑わせてくれるわ……アンタ、エヴァをずっと探しててまだ見つからないんでしょ？その節穴じゃ消滅しても見つけれっこないわ！……！」

ギリツと齒ぎしりの音。

やっぱりだ……コイツ、エヴァが成長してる事を知らない！

まあチートだしね……。一番美人な時に成長を止めるなんてズルいわ……。

「問題ありませえん……血と共に記憶も得ればよいだけでえす！」

ジャキツ

槍が掲げられる。

魔法なら打ち消せるんだけどなあ……物理的なのじゃちょっと厳しいわ。

……大丈夫。

状況は絶望的なだけ。絶望じゃない。

宗兄が戦ってきた戦場に比べればこの程度……跳ね返せなくてどうする……のっ！

投擲された槍を無理矢理掴み、その槍で首を落とそうと迫る剣を弾き飛ばす。

この程度で死ぬような人間なら……宗兄の横は歩めない。
ずっとならずと死ぬまで背中を見ることしかできない。

宗兄は何だかんだ言って、前しか見ない人だから。
後ろにいるんじゃない……見てさえくれないッ！

槍が折れれば剣を拾い、掴み迎撃する。それを繰り返して幾合。

「……驚嘆に値しますねえその防御力、瞬発力、判断力に折れない心……クカカカ……そういう心が折れた時こそ一番甘美な血液になるのです。」

「大したことないわ……それよりそれだけアーティファクトを持っていて攻めきれない事を恥じるべきじゃない？」

挑発はするものの……いい加減足が震えてきたわ……。
全く……何してんのよ宗兄？

「ワズ・エイワズ・ソラウ 走れ無影の刃。」

パシユツ

突然肩から血が噴き出す。

「……え？」

肩が切られて右手に力が入らない。

なんで？魔法は無効化できるは……ず。

そこで理解した。
奴は魔法でその辺に突き刺さった槍の穂先を弾いて私を斬った。
咸卦法が無かつたら右腕丸ごと持って行かれる様な一撃。

……最悪。

周りの状況を見てようやく理解した。アーティファクトの乱発は布石。

間違い無く私は追い詰められたのだ……と。

幸いは魔法を無効化出来る事……さもなければ雷で避ける事の出来ない檻が作れる。

「本当は生きた血が一番なのですが……貴女は危険過ぎる。強過ぎる自身を恨んでくださああい……真祖とやりあえる人間が居た事だけは覚えておきましょう。」

避ける場所……無し。

掴む……出来ない。

このアーティファクトが止めてくれる……信用できない。せめてもの抵抗。折りたたみ心臓を護る。

近接戦に入る……無し。負傷が多過ぎる。

咸卦法全力、魔法障壁展開。硬気功開始。

投擲の構え。

「フンツ……!!」

唸りを上げて飛翔する槍。

身構えて耐える。心臓に到達しなければ道は開ける。

アイツは倒したと思い込んでいる。その隙にこそ活路がある!!

「明日菜先生!!!!」

だから横から飛び込んできた生徒に気が付かなかった。

ゾブツ

そんな音が聞こえて……………。

Side end

二人を逃がし雪広の捜索に入る。

真名からネギが気絶したらしいと聞くがどうでもいい。

どうやら敵は明日菜と交戦中。

真名は銀の弾丸がほぼ効果無しと解った時点で引かせた。

「（宗一郎さん！該当者有りです！身元不明の死体が出てます！宗一郎さん似のイタリア系！）」

「（最近許可を与えた人物は神父です！柚木さん似の!!!!）」

タカミチとガンドルフィーニからの遅すぎる連絡。

「雪広何処に居る!!」

今更ながらに真名を引き揚げさせたことを後悔し始める。
加速度的に大きくなる剣戟の音。

念話で刹那と木乃香を呼び出す。

「駄目だ… 搜索に時間をかけるわけにはいかん！」

雪広はきつと刹那が発見する。そう言い聞かせて明日菜の下へと走る。

校舎と校舎の影。

生徒たちが余り立ち寄らず、茶々丸が餌をやるその場所は壮絶な風景と化していた。

あらゆる武器が壁や地面に突き刺さりある種檻を形成している。

明日菜は血まみれで、……………雪広がもつと血まみれで……………。

血が、沸騰した。

気が付けばフェイタルアトラクションを呼び出し跳ね飛ばしていた。

真祖の血が騒ぐ。

誰も彼も皆殺してしまえと。屍の玉座を作れと騒ぐ。

「ロード：シルバースキン、ヘルメスドライブ。」

再生していくソイツを見ながら座標を設定する。

上空。

目指すは高度11000メートル。

焼き尽くしても、バラバラにしても蘇る。
ケルベラスに移送する予定だったが……気が変わった。

「転…送ッ！」

転送の瞬間から猛烈な風が襲う。地上に激突するまでおおよそ45秒程度。

「ヘルメスドライブ解除。ロード：フェイタルアトラクション。」

「何をするつもりですかああ！？叩き落とされた所で私は滅びませんよおおお！？」

「ああ解っている！だから………こうするんだよっ！！！」

対真祖用試作二号なんて甚だ不安な槍を心臓に突き刺し、更にフェイタルアトラクションのインパクトの瞬間。最大出力でかちあげた！！

「幾ら真祖でも宇宙空間じゃどうだ？生きる事すらできない空間なら活動停止に追い込めるさ………もっとも…試した事は無いがな。」

このまま身を任せて落下してもいいが、幾ら不死の身とはいえミンチは痛い。痛いどころかトラウマ並みの痛みだろう。
速やかにヘルメスドライブで勢いを殺しながら着地する事にする。

「どう…木乃香？」

「一応…なんとかなっただと思うんやけど…：…そやかてウチのアーテ
イファクトは傷を治すもんであつて血を補充するもんやないからな
あ…。」

血だまりの中心に雪広。その周囲に三人が集う。

明日菜は心配そうに、木乃香は治療を、刹那は警戒を。

「…状況は？」

「とりあえず内臓と表面の傷は治したえ。ちよつと血が足らへん
と生命力流しすぎたつちゆう状態やねえ。」

「明日菜は？」

「雪広さんのおかげでね…：…肋骨で止めたわ。」

自分の血と恐らく雪広の血のせいでかなり酷い傷に見えるが致命傷
ではなかつたらしい。

ホツと息を着くと同時に多少の怒りがこみあげる。

「ホンマに無茶やえ？ほら、せつちゃんも言つたつてえな。」

「このちゃんの言う通りですよ明日菜さん！イレギュラーな事態が
起こらなかつたら倒れてるのは明日菜さんなんですよ?!」

「ゴメン…：…ちよつと無茶しちゃった。」

「武装鍊金解除。」

右手と心臓に戻った核鉄の内、右手の核鉄を明日菜に投げ渡す。

「咸卦法で無理矢理傷を塞いでいるんだろう？傷口の上にコレを当てている……治療力を促進させるはずだ。」

覗き見していた学園長は身を震わせた。

柚木宗一郎が鍛えた面々の特異性に本人の異常性に。

明日菜の傷が次第に治癒されていく。

老人は思う。

アレがあつたら”さよ”を失う様な事には為らなかつたのではないかと

先に逝つた妻の事も勿論愛してはいた。

だが……霊を学園に縛り付け、そして自分は関西呪術協会を飛び出し魔法協会の理事長の座についた。

この学園から離れぬ為に……。

西と東の争いを悪化させ、縛り付けても姿を見る事すら出来ん初恋の者を思い続ける。

己の為せなかつた事を英雄ナギの子に押し付け……。

真祖の見せた血への妄執。ただ自らの欲望のままに動く様それが己の妄執と変わりが無い事に気が付く。

漏れるのは溜息か自嘲の笑いか……。

一方ネギは誰からも忘れ去られアーニヤが来るまで屋上で完全に気絶していた。

Side 図書館地下組

”昏睡状態だった者達が起き始めた”という報せが地下にも届いて数日後。

「……今更ですがアーティファクトが判明しました。」血の焦がれ”というアーティファクトです。」

「へえ…それで？」

千明は花から目を離す事なく淡々と押し花を作る作業を繰り返す。

「…冷たいですね。牙状のアーティファクトで血を吸う事によって強制的に仮契約と魔力供給をさせる最低最悪のアーティファクトです。」

アルは涼やかな顔の中にも嫌悪という意志が解るほど目が鋭く光る。

「ああ……昏睡状態は継続的な生命力の吸収と魔力切れだったわけか。」

「はい。麻帆良内に何でも揃っているからこそ……ですね。」

「どうということかしらアルビレオ。」

「もし昏睡状態だった子供達を麻帆良から離れた病院に運んでいれば供給出来ず自動的に復帰できたでしょう。」

仮契約にしても本契約にしても精々数千キロが良い所。

だからアイツは学園エリアから動けなかった。

「皮肉ね。」

初めて作業を止めてアルビレオに向き直る。

「全くです……。千明、本を直しに行くので手伝って頂けますか？」

「仕方ないわね。」

図書館の地下は坦々と、しかしゆっくりと時間が過ぎる。

例え図書館島の司書が麻帆良七不思議になっていようとも……。

56話：過去からの亡霊（後書き）

死者の変遷

名無しのハゲ教師&明日菜 MSの妨害

瀬流彦&和泉亜子 雷の攻撃

雪広あやか

無し

戦闘の変遷

宗一郎vs神父

宗一郎&エヴァvs神父

明日菜vs神父

三回目は流石に少量書くたびに保存。
書き溜めする方が多い理由を把握しました。
所詮書き始めて三カ月足らずのド素人です。

次回：57話

テスト前に出来ればもう一話更新したい！

57話：真祖の思惑。 未来人の思惑。 (前書き)

コメント返し出来てませんすみません。

長らくお待たせしました。 完成版です。

57話：真祖の思惑。 未来人の思惑。

さて前回真祖の化け物とやりあったわけだが。

「……三年A組、柚木先生……！！！！！！Withネギ先生
……！！！！！！」

なんでこうもまあ能天気なのか。

進級とはいえ同じクラスだ。

それにもかかわらず大盛り上がりだ……。

昨日まで騒いでた変質者はどうでもいいのか……？

そもそも俺は金 先生か？

俺はあんなに熱血でも真剣でも無いぞ？

「馬鹿ばつかです。」「あほくさ……。」

綾瀬ー！千雨ー！俺の耳には聞こえてるぞー！

「せんせー！いんちよーがいませーん！」

そう事態に色々收拾が付かなくなっているのはストッパーの雪広がないせいでもある。

「雪広は諸事情で二、三日欠席する。雪広が居なくとも節度ある態度で授業を受ける事。いいな？」

「……は……い！」

まあ信用しないがな。

雪広の負傷はかなり大きい。あの場所に木乃香や俺どちらが欠けていても死んでいた。

心臓は外して即死には至らなかったものの内臓はズタズタ。

完全治癒といった所で失った血液や生命エネルギーの保持は難しい
そこで核鉄の生命力を高める効果を使ったのだが……おかげで二、三日程度で退院できる。

あの時もし雪広が死んでいたら俺は核鉄を埋め込んでやっただろうか？

コイツら全員揃って卒業させる。

この思いは信念なのか誓いなのか、それともただの願いなのか？

まあ考えていても仕方が無い。その時がくれば自ずと答えは出るだろう。

……しかし。

よくまあこの野菜少年は動けるものだ。

負傷と失神と失禁で酷い有様だったようだが……。

ふむ……アーニヤに対する認識を引き上げる必要があるな。

湿布臭と消毒臭がするだけで済んでいるのだ……。攻撃系と聞いていたが治癒にもそれなりの明があるらしい。

この分じゃ頭吹き飛ばしても生きてたかもな……。最も、マナに人を余り殺させたくないというのもあつて堪えたが……。

野菜少年は出席を取り、同時に春休みの宿題を回収している。

中々の成績を取ったとはいえ所詮バカレンジャーなどと自分達から名乗る様な連中だ。

これが周りから言われ嫌がっているのなら何とかしようもあるが……。
とにかく手を抜かない事が大切だ。

そう思案していると廊下側から走る足音が聞こえる。

「柚木先生、ネギ先生。今日は身体測定ですよ。3 - Aの皆もすぐに準備してくださいね。」

ああ、確かそんな予定だったな。
体操服に着替えさせて第二体育館まで引率、刀子先生に引き継いで宿題の確認。

「あ、そうでした！ここででしたっけ?!では皆さん身体測定ですので、えと、あのつ、今すぐ脱いで準備してください!」

……え?

馬鹿か?馬鹿の子か君は!?確かに馬鹿^{ナギ}の子だが!
ってそんな事を考えている場合じゃないッ!

一瞬の沈黙

部屋を飛び出すと同時に

「「「「「キヤーーネギ先生……のエッチー……っ!……!」」」」

この時ばかりは己の真祖の肉体と運動神経に心底感謝した。間が開いたのは俺が居ない事に驚いたからだな？

「あう… 柚木先生っていない？！うわーーーーーん間違えましたーーーー！」

真っ赤になって飛び出してくる野菜少年。

「ひ、酷いですよお！置いて行くなんて！！」

当然だ。

君の場合は軽く済むが、俺にとっては死活問題だ。

まず木乃香と刹那が居る。コイツらがエヴァに何を吹き込むかわかつたもんじゃない。

次に真名。ワザと見せつけて来る可能性が非常に高い。

そもそも朝倉がいるのだ。それこそ面白おかしく書かれるか、対価に妙な情報を求められるか…だ。社会的にもまずい。

「全く、今といい昨日といい君は何かと邪魔をするな。」

「えっ……昨日？」

そうそう屋上辺りに呼び出して殴り倒すにも認識障害で

”教師：柚木宗一郎”と”英雄：柚木宗一郎”を同一の物として見れない様になっている。

だからあえて昨日という単語を付けてみたのだが……。良い反応だ。解けかかっていたな。

「一つ言っておく。君は父親の様にはなれない。あの大馬鹿は短絡的で直情的であつちこつちに首を突っ込むがそれなりの実力や覚悟、信念をもっていた。…ああ運も持っていたな。だが君には何一つない。」

「……と、父さんを知ってるんですか?!」

…?

突っ込むとこソコか?

「ナギ・スプリングフィールド。銀騎士に一度たりとも勝つ事の出来なかつた出来損ないの英雄だろ。」

「なっ!?!?どういう意味ですか!?!」

スーツの襟を掴もうとするが身長が足りない。
裾の方を掴むが……時間切れだ。

「ネギ君なにしてるのー?」

佐々木を筆頭に着替え終わった生徒たちがゾロゾロと出て来る。
しかし何故、麻帆良は未だにブルマなのだろうか?
いや、決してそういう気持ちで浮き出た考えではないが。

「い、いえ何もしてませんよ!まき絵さん!」

「じゃあお前達出席番号順で並べー行くぞー。」

ネギが誤魔化すのを尻目に歩き出す。

「柚木先生！放課後屋上に来て下さい！」

第二体育館へ向かう道中ネギが宣言する。

うん。やっぱり君は駄目だ。

後ろで興味津々に聞き耳を立てている連中をどうにかしないと話も出来ないぞ？

「うーん男からの告白は嬉しくないなあ……………」

「ふざけないでくださいっ！……！」

一瞬にしてシンツと静まるウチの連中。

「あ……………」

そこでようやく自分がどんな音で何を話そつとしているのかに気が付き冷静になる。

ネカネ嬢からの手紙通りだな……………。父親^{ナギ}の事となると見境が付かなくなるか……………。

母親は恐らく……………いや、100%アリカ王女だろう。

頑固で猪突猛進？拳句に正義馬鹿？ネカネ嬢、すまないがやはり無理だ。

「とにかく放課後屋上に来て下さい！」

「ふむ…………手が空いたら向かうとしよう。」

Side 亜子

いんちよの欠席ってやっぱり昨日の事が関係しとるんやろか……。

あの時、いんちよが”ネギ先生……”と呟いたのを聞いてしまった。つまりあの場所には柚木先生とネギ先生と明日菜先生、それからいんちよと……多分他に誰かがいた。

「なんか今日の柚木先生元気無かったよねー。」

「そつえばほとんどネギ君がしてたねえー。」

柿崎と桜子の会話が耳に入る。

でもウチとしては元気が無かったって言うよりは何かピリピリしてた様を感じるわあ。

「出来損ないの英雄だろ。」

「なっ!?!?どういう意味ですかっ!?!?」

扉を開ける直前、そんな声が廊下から聞こえた。

出来損ないの英雄ってなんやろ?

「ネギ君なにしてるのー?」

まき絵が尋ねるとネギ君はサッと離れてもった。

「い、いえ何もしてませんよ！まき絵さん！」

「じゃあお前達出席番号順で並べー行くぞー。」

「け、喧嘩かなあ？」

「うーん…ネギ君じゃあ賭けにならないかなあ。最低でも武道四天王クラスでなきゃねえ。」

「朝倉殿、賭け以前の問題でござるよ。古でさえデコピン一発で沈んだでござるよ。」

「アイヤー…アレはまるで石礫の様な威力だったアルよ。」

「んー武道四天王でも無理なんと違うかなあー。あれでも遊んでるえ？」

いいんちよ居ないと誰も喧嘩を止める事を考えへんっていうのも怖いなあ…。

「柚木先生！放課後屋上に来て下さい！」

第二体育館へ向かう道中ネギ君がいきなり宣言する。

「決闘フラグ?!」「ハルナ、妄言も程々にするです。」「あわわ……。」

ドンドン険悪になってきてるんとちゃうかな!?

「うーん男からの告白は嬉しくないなあ……。」

柚木先生は雰囲気と和ませようとしたのか……って、からかってるよ用にしか感じられへん。

「ふざけないでくださいっ！……！」

ネギ君の声の大きさに驚いて、皆シンとしてもうた。

「あ……。」

せやけど柚木先生は何処を吹く風と歩いていく。

「とにかく放課後屋上に来て下さい！」

「ふむ……手が空いたら向かうとしよう。」

なんとかして止めへんと！

Side end

さて……屋上に来てみたものの、完全に予測と一致したのだが……。観戦モードで座っているのが十数人。

明らかに常用外の方法で屋上に来ている者が数人。

この場に3-Aのほとんどが居ると言っても過言ではない。

流石に良識派は居ないと思ったが

早乙女、綾瀬、宮崎までもが観戦席にいる……。

一応止めようとする感じがあるのは大河内ぐらいか……。

面倒な事になった。

「さて、話など出来る状態では無いな野菜少年。」

「え、ええ。僕が迂闊でした……。でも父さんの事だけは話して貰います！」

冷静な様で冷静ではないか。

「1993年イスタンブールにて死亡。公式見解だ。」

実際には行方不明。が、それ以降ナギもアリカ王女も消息不明となれば死亡と考えるだろう。

アイツがどういふ人間か知らなければ……な。

ラカンと一緒にゴキブリ並の生命力に強烈な幸運……俺ですら倒せても殺す事は出来なかった。

「それは公式のものです。……貴方も父さんも1996年冬のウエールズに居た筈です。」

「と、言う事は俺が誰かようやく解ったわけだ？」

「朝の会話で。アーニヤはまだ知りません。」

アーニヤも確か同じ村の出身だったな。両親は幸運な事に両方とも永久石化で済んでいる。

「ちよつ美砂、ネギ君って王子じゃなかったの？！」

「違うみたいね。全くくぎみーは早とちりなんだから。」

「くぎみー言うな！じゃなくて私？！」

「いやここは柚木先生が何者？！ってなるのが普通だと思うよ。」

柿崎の予想があながち間違っていない事に溜息が出る。
「コレでもエンテオフユシアの直系な訳で…。」

「なら生きているのだろうさ。殺しても死なない様な奴だ…何処ぞでのほほんと暮らしているだろうさ。」

「そう…ですか。」

明らかに落胆を示すネギ。

子供らしい顔。年相応の親を求める少年の顔。

その時フツとある事を思い出した。

「そういえば…京都にアイツが使っていた隠れ家の一つがある筈だ。」

まるで某仮面を付けて戦う戦士の様だ。

ネギは地面に叩きつけられ二回ほど跳ねてかなり転がって止まる。

「コフーツ……。」

膝立ちの姿勢でアーニヤが口から白い息を吐き目を爛々と光らせネギの死亡を確認している。

あれ…今日ってシリアス回じゃないのか？

そんなくだらないメタが脳裏を駆け巡るが…。

「柚木先生！ネギが迷惑かけてすみません！すぐに連れて行きますから！！！」

立ちあがってペコンと身を折り、すぐにネギの首根っこを持ちズルズルと連行していく…。

俺はただポカンと見送るしか出来なかった…。

そのまま呆けているとアーニヤと入れ替わりに超が満面の笑みで入って来た。

「はいはいーネギ先生vs柚木先生はお開きネ！賭け食券は下で茶々丸が返すヨー！」

その声を受けて”本当につまらなさそうに”生徒たちが帰っていく。

数分前まであれだけ気配の多かった屋上には既に二人しか居ない。

「……………どういづつもりだ超？」

超の真意を問う。間違いなくアーニヤを連れてきたのは超だ…。

「ふふ…クラスメイトの切実な願いを叶えただけネ。丁度用事もあったし、ついでヨ。」

そこまで言って超の顔が真剣なものになる。

「それじゃあ礼として珈琲でも御馳走しよう。」

「エンゾ。」

スツと静かに珈琲が二つ差し出される。

「ありがとう杜若。」
カキツバタ

「ここも随分綺麗になったネ。」

「ああ。彼女達のお陰で大分な…………。」

見回すと塵一つ無く磨き上げられた床に壁
乱雑に積み上げられていた本は綺麗な本棚にカテゴリ別に並べてあ
る。

「量産型にあれ程の差が出るとは思わなかったネ。驚きヨ。」

「それは葉加瀬の努力もあるぞ？名前を与え、髪型を変えるだけで随分個性は出るものだ。」

「ソウカ……。それから修学旅行までに人工皮膚は間に合いそうにないネ。すまない。」

「いやこちらが急に言い出した事だ。……ところで、アレを止めるほどの用件はあるんだろうな？」

「勿論ヨ。冷静に聞いて欲しい、予定が一年早まったネ。」

「なっ……。」

「世界樹の発光は今年の学園祭になるヨ……。どうやら卒業は出来ないネ。」

「……つまり未来が変わったと考えていいのか？」

「違う…と思う。こちらでは歴史は口伝ネ齟齬があったのか……。どちらにしても歴史を変える要因としては小さいネ。」

「そう……。か。やはりまだ未来に何が起こったか教えてはくれないんだな？」

「すまない、禁止事項ネ。……歴史が本格的に変われば私は消えるヨ。それで納得して欲しい。」

「そうか………わかった準備を進めておこつ。まあもう少し信頼はして欲しいがな。」

Side 超

「すまない、禁止事項ネ。……歴史が本格的に変われば私は消えるヨ。それで納得して欲しい。」

「そうか………わかった準備を進めておこつ。まあもう少し信頼はして欲しいがな。」

その言葉にズキツと胸が痛む。

そんな事に気が付く事は無く柚木宗一郎は背を向けて出て行ってしまつ。

「はあ………」

「鈴音様。」

溜息を吐く超にポニーテールの侍女が声をかける。

「杜若…であつてるか?」

「はい。63番、杜若です。」

「修練状況は？」

「木乃香様は治癒魔法を中心に体術を。刹那様は宗一郎様と剣術と体術を。エヴァンジェリン様は木乃香様の教導に専念されておりま
す。明日菜様は宗一郎様相手に全力戦闘を。宗一郎様は指導と自己
鍛錬を。タカミチは最近来ていませんたるんでますね。映像記録は
必要ですか？」

「いや、その必要は無い。」

修練状況は一応想定内。

はあ……。

屋上の顛末を思い出し溜息が洩れる。

あれが自分の曾祖父、色濃くエンテオフュシアの血が流れている人
物だとは思えない。

「しかし困ったなあ……ネギ坊主が柚木先生の弟子にならない事に
は私が生まれないじゃないか。」

それに……。

この時代の柚木宗一郎はかなり安定している。
精神的にも肉体的にもかなり良好な状態であると言える。
戦闘にも支障無し。

「やはりテオドラ女王が原因と見るべきか……。ならば未来を教える
事は不安定化を招く可能性が……いや……しかし。」

結局あの結末を回避するにはこの時点で魔法を世界に公表するしか

ないのか……。

目を瞑り思い出すと心が軋む。

”世界”を維持する唯一の方法。

それが私が送られる事無く完成された未来^{つじ}。

” 「鈴音、心配しなくていい。難しい事も無い。不可能な事でも無い。元よりこの身、この身体、この魂は、ただこの事の為に存在していたんだ。」 ”

” 「まあ唯一の心残りは……お前の花嫁姿を見る事が出来ないって事だ。……ほら、泣くな。……エヴァ、後は全て任せた。」 ”

” 「……大馬鹿者。」 ”

” 「すまん。」 ”

「鈴音様？大丈夫ですか？」

「あ……ああ。」

無意識に涙が流れていた様だ。

「ちよつと……未来をネ。」

Side end

一足先に魔法球から出て居間に向か……。

「茶々丸、宗兄は何処に居るかしら?!」

明日菜の底冷えする様な声。

向かえないので……さて、どうやって逃げるか。
ここは地下室。

「はい、先刻超さんと共に魔法球へ入られましたよ?」

「超さんと?…まあありがと。」

……緊急用の脱出口用意しておけばよかったな。

「はっ!?!」

脱出口?あるじゃないか。

「武装錬金。 ロード：アンダーグラウンドサーチライト!」

瞬時に空間が形成され俺が飲みこまれる。

「……アレっ?今そこに立ってた様な……。」

隠れると同時に明日菜が踏み込む。

バレル筈が無い。そうは思っても鼓動は早鐘を打つ。

「明日菜さん。宗一郎さんはアンダーグラウンドサーチライトを使われた様です……と朝顔が。」

「へえー、ほー、ふーん？宗兄い〜？聞こえてるんでしょー？今出てきた方がいいと思うなあー？」

「まったく……なんでやる事が微妙に子供の思考回路なのよ……。」
こっそり隠れた事に対しての説教が終わった……。

「いや、全く面目ない。言い返す言葉も無い。」

女性に怒られる事に慣れが無いというか……。どうしてかこう……逃げたくなる。

「で、放課後の行動はどういう事かしら？」

「……ど、どつとは？」

「子供相手に大人気無い。」

「……ソースは？」

「今夜はデミグラスソースの予定ですが……和風の方がよろしかったでしょうか？」

「茶々丸。お願いだから料理に専念してて。こっち説教中だから。あとデミグラスで。」

「はい。」

茶々丸のナイスフォロー？は空しくキッチンへ消えた。

「木乃香。一部始終聞いたわよ。ネギを挑発して焚き付けて…あまつさえバレたんでしょ？何考えてるの？」

「違う。違うぞ明日菜。意図的にバラしたのだよ宗一郎は。大方昨日の件だろう？」

チャチャゼロとテレビを見ながらポテチをつまんでいたエヴァがフオローに入ってくれる。

「ああ…そうなんだ。だから…。」

そのフォローによって誤魔化そうとするが…

「で、肝心な事言えずに京都の隠れ家を教えた…と。放課後でも何でも別に場所はあったでしょ？あんな衆人環視の中で言わなくても。」

しかし的確に明日菜は痛い所を付いてくる。

「むう……。」

いい加減苦しくなってきた。

明日菜の言いたい事は解る。黙って俺達が普通一般人であると思わせておけば平和に暮らせるのに……そういうことだろう。

「まあそこまで責めないであげてほしいヨ明日菜先生。」

「超さん？」

ようやく魔法球から出てきた超がフォローに回ってくれる。

「紆余曲折はあったガ、肝心の話が出来なかったのは私が邪魔してしまったからヨ。申し訳ない。」

そう言っつて超は明日菜に頭を下げる。

「いや……まあ……うーん……あー……いいわいいわよ皆して宗兄の味方？つたく私へのフォローは誰も無いわけね。」

超までこちらに付いたお陰で明日菜は頬を膨らませてスネた。

と、とにかく説教が終わった事は僥倖だ。

悪いな明日菜……この家で計画を知らないのはお前だけなんだ……。

「それじゃ柚木センセイ、また。」

「ああ、ありがとう助かったよ。」

「何、計画の件は明日菜先生には秘密なんダロウ？ならば主犯として共犯者を庇うのは当然ネ。」

そう言って手をヒラヒラと振りつつ夜の闇へ消えていく。

「共犯者…か。中々言っじゃないか超鈴音。」

「エヴァか。」

「お前や私を部下として使う…と言う事だろう？中々どうして…アレの師の顔が見てみたいわ。」

「未来の事だ。恐らくとんでもない奴だろうさ。」

「で、本当にどうするつもり？早晚、敵討とか何とか言ってくるんじゃないの？」

夕食後、幾分落ち付いた明日菜はそう切り出した。

「いや……思ったより聡明だったよ。大体の事は把握しておきながら“そう勘違いしている”と爺共に信じ込ませ、恐らく俺達を当て馬に使う事まで予想して…だろうな。」

「ハハン……あの爺ならそう考えるだろうな。そうなるとやる事は一つだな。」

「そうだな。」

「え、何？どういうことよ？二人だけの世界ってわけ？」

「戯け。弟子だ。弟子入りだよ明日菜。世界最高位の魔法使いがここに二人もいるのだ。そう考えてもおかしくは無い。」

鉄扇を広げ大仰に言うエヴァ。

「面倒ね……確実に面倒だわ……。」

額に手を当て天を仰ぐ明日菜。

「木乃香と刹那の修行を蔑には出来んしな。しかし……。」

「むっ……。」

「どうしたエヴァ？」

「……いや……気のせいだろう。まあ私は別にいいぞ？素質があり私が気に入る性質ならばな？」

「辞めてよエヴァ……。顔を何回か合わせてるけどナギより頭がいだけよ？多分姉さんの血を引いてるからだとは思っけど。」

ネギの対策について茶番を交えつつ話し合う振りをしながら夜は更けていく。

Side ?

「むっ……。」

エヴァがそんな声を上げた時を同じくして学園結界をある動物？が突破した。

「へえっ…へえっ…へえっ…やっと…やっと着いたぜ…麻帆良学園…。」

Side end

大浴場

「キヤアア！」

「ヒヤアアア！？」

「ひゅっ?!」

麻帆良大浴場に突然の悲鳴が次々と上がる。

「どうしたアル?!」

「な、なんかお尻にニユルツとしたものがあああ！」

そう叫ぶのはまき絵。

「えええ？私、太ももでモフツとしてたああ！」

それを聞いて更に叫ぶのは桜子。

「う、うちはなんかツルツルしてたと…思っんやけどなあ？」

最後におつとりと感想を述べるのは木乃香。

「な、なんで皆感触が違うのおおおおおお？！」

まさに浴場はパニックである。

「皆、一旦浴槽から出るでござるよー！」

「……………」

刹那は無言で浴槽を睨む。出てきた者を一刀両断せんが為に。

「（このちゃん？）」

「（大丈夫やえ。害意は無いみたいやけど…えらいすけべえさんやねえ…。）」

「（相手は何やる？）」

「（動物やえ…白い長いのや…クダやらオサキの類やないかなあ？切ったら血いであるからあかんえ？）」

「古、一発頼む。」

「？」

パシヤ。

「ちよっ?!」

「明日の一面は頂いたー!」

カメラを振り上げ声を挙げる朝倉。

チヨンチヨン。

その肩をつつく感触。

当然朝倉は振り返り…

「ん?げっ…いんちよ…!？」

「朝倉さん?いつも私言ってますわよね?浴場にカメラを持ち込んで駄目だと?」

「あやかっ!」

「心配かけましたわ…ちづるさん。」

「いいんちよだー!」

「皆さん心配をお掛けしましたわ。ちよっと体調を崩しまして…でもこの通り、雪広あやかは元気ですわ!」

あやか帰還の騒ぎの中、ゆっくりとソレを掴んで刹那は浴場を出てソレをダストシュートにフルパワーで叩きこんだ。

end

ダストシュート

「げふっ……さ、最近の女子中学生は…過激なん…だぜい……。」
よろよろと立ちあがりネギの臭いを辿る。

「オコジヨ妖精じゃなかったら……俺っち既に死んでるぜ……。」
彼はまだ知らなかった。

……ネギと同室に彼女アイニヤがいる事を。
……既にネカネからの手紙が読まれていた事を。
……唯一の味方ネギが現在説教中である事を。

彼は……知らなかった。

End

57話：真祖の思惑。 未来人の思惑。（後書き）

あれ？夏休みって言うのに全然休めなかったぞ？

今更感満載ですが

ネギま！THE BIBLE購入しました。

なんか本誌がえらいことになっているという噂は聞きました。

ザジ、美空& amp・ココネ、歴史関連で目ぼしい情報あったらコメかメールの方で教えて頂けると幸いです。
特にココネ。

状況によってはココネ関連の話がゴツソリ消えたり追加したりします。

58話：雪広あやか（前書き）

遅れてしまった…。

皆さんいかがお過ごしでしょうか？

珈琲時間は絶賛風邪っ引きでございます。

大変長らくお待たせいたしました。

第58話：雪広あやか。副題：雪広あやかの弟子入り。

58話：雪広あやか。

あやかの部屋

Side あやか

「心配したのよあやか？」

「ごめんなさいちづるさん。」

「まだ顔が少し青いわね……座ってて、ホットミルク入れて来るかな。」

ちづるの優しさが沁みる。

あの瞬間を思い出すだけで震えが来る。

倒れたあの日の記憶。

目を瞑っている。そうは言われてもこの異常事態では……。と、一瞬空を見るとそこには……“赤い髪”の“少年”が飛んでいた。「ネギ先生……？」

気が付いた時には飛び出していました。

しかし

向こうは空を飛ぶ魔法使い。
簡単に見失ってしまいました。

そして聞こえたのは激しい剣撃。

余りの激しさに全身が震えました。

私が見てきた武術が御遊戯に見えるほどの……殺し合い。

これが柚木先生が遠ざけようとした世界。その一端……。

明日菜先生の相手は柚木先生と同じ“不死者”

形勢は返り明日菜先生を貫かんと振り上げられる槍。

思わず身体が出てしまう。

私など何の役に立たないと……わかっているのに。

何故、どうして

私は駆け出していた。

ドンツと

身体の半分が持っていかれる様な衝撃。

声が出ない。痛みを感じない。熱い。冷たい。暖かい。寒い。寒い。
寒い。

ドサッ

遠くで音が響く。

誰かの声が聞こえる。

掠れた風景。

血の色、臭い。

遠く遠く……。

眠い……とても、とても……ねむ

。

そして……。

「あ……………」

白い、どこまでも白い天井。

規則的な模様。

知らない天井。

いつもと違う感触のベッド。

天蓋が無い。

枕も硬い。

布団も重い。

消毒液の臭い。

……病院。

ああ、現実なのだ。とその思いが口からこぼれる。

「夢では…無いの…ですね……。」

「残念ながら現実です。」

ふいに声が掛けられる。

「茶々丸さん…？」

ずっと傍にいてくれたのでしょうか？

「……はい。状況の説明は必要ですか？」

淡々とした口調。事務的で、何となくいつもの茶々丸さんでは無い様な気がしました。

「お願いしますわ…。」

「貴女は飛び出し槍に貫かれました。その為病院へ運び、今日が覚めたわけです。経過時間は27時間少々といった所でしょう。」

「……………」

一日以上も倒れていたのですね……。

「非常に浅慮で無謀な行動です。……しかし一応感謝を。貴女が居なければ槍は明日菜さんの心臓に達したでしょう。最も対処方法はありませんが…。貴女は先程まで衰弱で倒れていただけです。傷の方も痕が残らぬ様に治療してあります。他にご質問は？」

浅慮で無謀…ハッキリ言われるとこれ程重い言葉なのか……。

「あ……ネギ先生は…？」

自分や明日菜先生が大丈夫だと知ると途端にネギ先生が心配になる。

「生きています。負傷の度合いは不明ですが翌日出勤なされているのでその程度の負傷でしょう。」

「そう…ですの……。」

安心感と疑問が浮かぶ。同じ魔法使いであるのに負傷の度合いが不明とはどういうことだろうか。

「足を踏み入れてしまいましたね。」

しばらくの間をもって茶々丸さんが口を開いた。

「ごめんなさい……。」

「雪広さん、貴女にとって平和な日常とは軽いモノですか？」

無機質な目。心の奥底まで見られてしまっている様な感覚。

「いえ……。」

「貴女には選択肢が二つ…いえ三つあります。」

「それは…。」

「一つ、同意の上での記憶消去。二つ、記憶を残し一切の関係を断つ。…三つ、これはオススメ出来ません。魔法を学ぶ。…選んでください雪広さん。」

「どうしてですか？」

「魔法はもうすぐ身近なモノになるでしょう。そして血の臭いのない平和な世界が訪れます。しかしそれ以前に魔法を学ぶのならば…。」

「やか？あやか大丈夫？」

「あ…大丈夫ですわ。少し考え事を…してましたの…。ですから大丈夫ですわ。」

口を付けたホットミルクは唇を湿らせ喉から胸を温める。

マグカップを両手で持ち少し震える声で、でも真剣な目で尋ねる。

「ちづるさん…私はどうすればいいでしょうか…？」

「どうしたのあやか？」

「…私は興味本位である人物の事を調べました。そうしたら今まで見えなかった扉が現れました。」

「それで…?」

「でもその中に居る方曰く、危険だから入るな見なかった事にしろ。でも…私はその扉の境界線上に立っています。」

「うん。」

「その方から示された物は3つ。一つ、全てを忘れさせる事が出来る。二つ、今のまま、でも扉の中を覗く事が許されない立ち位置。三つ、境界線を越えその扉の内側を学ぶ。」

「あやか……。私は貴女の事を全てとまでは言わないけれど知っているつもりよ?」

「ちづるさん……。」

「一つ目をあやかは選ばない。二つ目を選んでみてもきつとあやかはいつか境界線を越えてしまう。あやかは困っている人を見捨てられないでしょう?……でもね決めるのはあやかよ。私はそれを応援する事しか出来ないわ。危険って解ってるだけに…ね。」

「ありがとうございます。ちづるさん…私、ちょっと行ってきますわ。」

「ええ…いつてらっしゃい。」

Side end

S i d e 千鶴

あやかが居なくなり

夏美が寝ている事をソツと確認して机からソレを取り出す。

「…魔法…使いか。」

千鶴の持つ茶色い封筒から写真が零れ落ちる。

” 1990年3月 麻帆良女子中等部3年生一同。寮前にて寮長と共に。”

まだ若いエヴァンジェリン先生と明日菜先生。そして容姿が何一つ変わらない柚木先生。

「ごめんねあやか。これ見つけてしまったの……。」

ふと思い当る事がある。

初等部の頃

千雨さんが不思議なものを見たと言っていた。

あの時は笑い飛ばしてしまっただけれど……。これらが事実だとすれば……。
本当に悪い事をしてしまった。

あやかを止められなかった。

貴女は境界線上に立ち続けるなんて出来ない子だから……。

誰かが傷ついたら、怪我をしていたら、困っていたら貴女はきっと境界線を越えてしまう。

だから

魔法を教わる方がいいと思うの……。

それでも

「ごめんなさい。」

S i d e e n d

病院・裏

「足を踏み入れてしまいましたね。」

対象が落ち付いたであろう時を見計らい言葉を紡ぐ。

「ごめんなさい……。」

「雪広さん、貴女にとって平和な日常とは軽いモノですか？」

「いえ……。」

「貴女には選択肢が二つ……いえ三つあります。」

対象が取る選択肢は既に確定されている。

「それは……。」

「一つ、同意の上での記憶消去。二つ、記憶を残し一切の関係を断つ。……三つ、これはオススメ出来ません。魔法を学ぶ。……選んでください雪広さん。」

「どうしてですか？」

疑問は推奨しないという言葉に対するものであるかと推測。

「魔法はもうすぐ身近なモノになるでしょう。そして血の臭いのしない平和な世界が訪れます。しかしそれ以前に魔法を学ぶのならば……争いの只中に身を沈める事になります。」

「平和な世界……？」

「はい。」 我ら”がマスターの理想。全てを救える世界。それは学園祭を越えて現実となります。」

「茶々丸さん……？」

修正。

「いえ、話が逸れました。修学旅行までに答えを出して下さい。では。」

対象の返事を待たずに退室。

外にいる”姉”に合流する。

「終わりましたよ姉さん。」

「ありがとうございます”撫子”。」

「いえ。」

そういつつ髪をポニーテールに縛る。

「姉さんにとって対象は僚機……いえ、友人というのが適切ですか。人間の友人関係と言う物は我々の僚機関係とは異なるモノであると理解しています。また茶々丸姉さんにとって重要な事であるとも。」

“我々”としても僚機をみすみす危険に陥れる様な事は難しいですからね。

S i d e e n d

学園の外れ。ログハウス。

「ちよつ…つまり雪広さんまで巻き込む気!？」

ネギの対策を話し合う中で

雪広に選択肢を出した事を告げると、途端に明日菜は呆れた様な顔でこちらを睨んできた。

「ああ。その為の手は打った。」

「記憶処理出来るでしょ!？」

「死にかけた記憶はフラッシュバックしやすい。また忘却魔法では何処まで影響して消えるか怪しいモノだ。」

記憶処理の有害性を説く事で何とか明日菜は落ち付いたが…。

明日菜はまだ怒っているな…むう…。

「とうかアレだな明日菜、宗一郎。写真がマズい。非常にマズいぞ。」

エヴァの一声で話題は移る。

「そうね。写真よ…よくよく今まで誤魔化せたもんだけど、考えてみたら一番バレそうな所じゃない。」

「うつむ…」家族”で写真を撮るなぞした事が無かったのだから…注意を怠っていた。」

と、写真をその時初めて撮った宗一郎が呟く。

「私は写真というものが数十年残るモノだとは思っていなかったし

なあ。」

と、古臭い事をエヴァが感慨深げに語る。

「正直私もカメラとか初めて見るモノだったし……。」

と、元・超箱入り（フウイン）娘が言葉を漏らす。

「コノ家、一般常識ガ欠ケ過ギダト思ワネエカ茶々丸？」

「姉さん…身も蓋もありませんね…。」

以前3人が3台の携帯を前に100年の仇敵を見るが如く睨み、頭を抱えて奮戦した挙句

結局タカミチが教える事になった事件が思い出される。

思えば初めてタカミチが人に物を教える事になった記念すべき日でもある。

「と、とにかく修学旅行の時に外へ漏れそうな私達の写真を始末するわ。」

ようやく結論が出た頃

コンコン。

木の静かな音が響く。

「来ちゃったじゃない。」

「だな。」

「夜分遅くに失礼します……柚木先生。」

「……………家の中に入るといい。」

雪広を出迎え、そして地下室へ向かう。

「あの……………」

「話は長くなる。故に有意義に使える場所で話す。付いて来たまえ。」

「じ……………ねほ。」

白い塔、白い砂浜、青い海、青い空。

「魔法の産物だ。どうだ？ちょっとしたものだろっ？」

「え…ええ。」

呆然、いや驚き過ぎて色々ぶっ飛んでしまっているのだろう。雪広は辺りを落ち着き無く見回している。

「この中の一日は外の一時間になる。有り体に言えば修行場所だな。」

「魔法というものは凄いですね…。」

「そう畏まらなくても良い。普通人間は石油が電気を使って生活する。それを魔法でやるだけの話だ。……何か聞きたい事はあるか？」

「どうして私に魔法を教えて頂ける事に？」

「悪く言えば実験。良く言えば計画の前倒し…と言った所だな。」

「……………」

「それから記憶処理はリスクが大き過ぎるのでな…最も、あの程度のトラウマぐらい雪広ならば乗り越えられるという期待もあるが？」

「はあ…。」

「まあコレをやるっ。」

懐から小さな本を出す。

「これは……。」

「ヘラス帝国の孤児院で使っている物だ。いわゆる基礎の基礎本だな。」

「へ、ヘラス帝国？」

そんな国は聞いた事も無いという顔。

まあ魔法を知らない人間がヘラスを知っていたら大騒ぎか。

「む……やはりそこから教えるべきなのか……。」

雪広に魔法世界と言う別世界がある事。

大きく二つの勢力に分かれている事。

自身が帝国側、麻帆良学園やネギは連合側。

大雑把に、それでも嘘偽りなく。

「そして雪広、君に教えるのは帝国式の魔法だ。」

「帝国式と連合式という風に分かれていますか？」

「大まかにな。帝国では主に生活の為の魔法が多い。その分習得は簡単だ。連合式は兵士養成みたいなもんでな……余り好かないんだ。」

「なるほど……。」

「鈴蘭、雪広に杖を。」

「初心者用ですね？」

「ああ。」

雪広に渡されるのは孤児院でも何処でも使う可愛らしい安物の杖。

「魔法の発動は基本的に始動キーと命令呪文に分かれている。初心者が唱える始動キーはプラクテ・ビギナルだ。」

「プラクテ・ビギナル。はい。」

「火を思い浮かべ、杖先に灯すようにアールデスカット。」

「火を灯すように念じて…アールデスカット。わかりました。」

「プラクテ・ビギナル アールデスカット。」

「プラクテ・ビギナル アールデスカット！」

俺の指先には拳大の炎が灯っている。

そして雪広の杖からは…。

ぽふんっ

軽い音を立てて煙が出ただけである。

「……………。」

心なしか雪広の肩が落ちた様な気がした。

「まあ最初はそんなもんだ。炎族の子供ぐらいだな初っ端から成功できるのは。何度も続けてみる、その内魔力が解る様になる。」

「はい。…プラクテ・ビギナル アールデスカット！」

ぽふんっ

折れずに何度も何度も呪文を唱えては情けない煙を出している雪広を見ていると思わず笑みが浮かぶ。

ああ……教師といいコレといい……存外に俺は人に何かを教えると言
う事が好きらしい。

58話・雪広あやか。(後書き)

ちょっと本調子じゃないですが

モリモリ進めていききたいと思います。はい。

59話・それぞれの思惑（前書き）

修学旅行編突入でございます。

明日菜はお留守番。

59話・それぞれの思惑

学園長室。

「　　」といふ計画なんじゃが…どうかのう？」

「どうかと聞かれても…。俺達は関わらない。詠春が協力してその茶番をやると言つのならば静観しようじゃないか。悪戯程度なんだから？」

早朝学園長の呼び出しを受けた。

要は修学旅行でネギ修行のための茶番をやるから云々という話だ。

「うむ…。ワシも考えたのじゃよ…世界も安定してきた今、急いで偉大な魔法使いにする事も無いとな…。」

「ハツ…。そこまでアレを英雄にしたいか爺？」

「したい。したいとも。この老いぼれとは違うなるべく楽な道を歩かせてやりたいんじゃないかよ…。」

ギリッと拳を握りしめコチラを真剣に見つめる爺。

覚悟。それこそ今までの飄々とした態度とも怯えた態度とも異なる……恐らくはこのぬらりひよんの本質。

思わず頼みを受けそうになるが、冷静にカードを出す。

「……それはあの少女の事か？」

「!?!」

ガタンツと音を立てて爺が立ちあがる。

「図星の様だな。忠告しておく……。あれは良く持った方だ……さぞ生前は純真で、それでいて意志がハッキリした少女だったんだろうな……が、いい加減悪いモノへ変わってもおかしくないぞ。」

「お、お主には見えるのか？」

「つい600年程前までは、そっちが専門だったんだ。被う時は言え、安くしておいてやる。」

「む……う……。」

先程の炎の様な意志は何処へやら。すっかり意気消沈と言った風体の爺。

それに背を向け

確信は無かったが……。

あの子を縛り付けたのは、やはりコイツか。

被う…と言っても俺に出来るのは斬り捨てるだけという事が悲しい
がな…。

教室

「さて来週から3・Aは京都・奈良への修学旅行に行くわけだが…。」

「もー準備は済みましたか……！？」

「……は……い……い……」

「…アホ。」「小学生かこいつら。」「」

今日のネギはいつになくテンションが高い。
昨日話した京都の事が余程嬉しいのdarou…。

「うちのクラスは留学生も多く……」

完全復帰した雪広がネギに麻帆良の修学旅行の形式を話している隙
に真名の横に立つ。

「どうしたんだい？浮かない顔じゃないかシトーさん。」「」

「ん、ああ…問題無い。修学旅行でちょっとした茶番があるそうだ。長瀬にもそれとなく言っておいてくれ。」

真名と話しつつ横目で教室の隅を見る。

クラスの盛り上がりを見て喜んでいる少女せうじょ。

ここから出られぬのに憐れな…。

「子供先生の修行かい？」

「ああ…詠春と組んで何かやるつもりらしい。」

「シトーさんが付き合ってやらないからさ。面倒事はコレだよシトーさん。」

指でお金のサインを出す真名。

「実に強かな事で。」

真名の強かさには舌を巻くと言っか…苦笑いしかできないというか…。

ガラリ

引き戸が開かれしずなさんが現れる。

「柚木先生、ネギ先生。学園長がお呼びですよ。」

「あ、はーいーい！」

「わかりました。」

はてさて何を仕掛ける？学園長殿。

学園長室。

「え……し、修学旅行の京都行きは中止……！？」

「うむ京都が駄目だった場合はハワイに……。」

学園長がそういつなりフラフラとネギが壁へ倒れ込む。

「ハワイ！？そんなもんもご……！？」

一瞬ドギツイ形相で外から窓に張り付き叫んだエヴァをそれ以上の形相で明日菜が抑え込んで離れていく。

……見なかった事にしよう。

ネギは気が付かなかった様だが俺と爺の気持ちは一致した。

「あ……コレコレ……。まだ中止とは決まっとらん。ただ先方がかなり嫌がっておつてのう。」

「先方？京都の市役所とかですか？」

何故そうなる。

「いや、うーむ。何と説明してよいやら……関西呪術協会。それが先方の名前じゃな。」

「か…関西呪術協会…!？」

「実はワシ関東魔法協会の理事もやっとなるんじやが、関東魔法協会と関西呪術協会は昔から仲が悪くてのう……。今年は二人魔法先生がいると言ったら修学旅行での京都入りに難色を示してきおった。」

ははは…二人か？引率リストに瀬流彦いたぞ爺。それどころか…エヴァまでいるぞ。これは酷い。

「そんなあ……。」

こちらを継る様に見るネギ。俺は素知らぬ顔で壁にもたれ掛かり学園長を見ている。

「とにかくワシとしては、もう喧嘩はやめて西と仲良くしたいんじや。その為の特使として西へ行ってもらいたい。」

「!」

ネギ顔がハツとなる。

「この親書に向こうの長に渡してくれるだけでいい。ふおっふおっ…ただ道中向こうからの妨害があるかも知れん。彼らも魔法使いである以上生徒たちや一般人に迷惑が及ぶような事はせんじやろうが

……。ネギ君には中々大変な仕事になるじゃろう……しかしこれは君にしか頼む事が出来んのじゃ。良いかの？」

「僕にしか？……わかりました！任せて下さい学園長先生！」

「うむ。任せたぞいお主もくれぐれも周りに魔法がバレんようにの。では修学旅行は予定通り行おう。それでいいかの二人とも。」

「ああ。」

「はいっ！」

「おっと……少々ネギ君は残ってくれんかの。柚木先生は授業へ。」

「では失礼する。」

約定通りネギに説教する訳か……ふむ……珍しい。

Side ネギ

「さて……ネギ君には話しておかなければならぬ事があるのじゃ。」

「はい……なんでしょう？」

「大事な任務の前に余り言いたくは無いのじゃが……これもワシの義務じゃ。」

「……………はい。」

柚木先生の話かな？それとも父さんの？

「二日前、ワシの指示した事を守らず現場に突入したの？」

学園長先生に言われてハツとなる。

「…はい。」

「あの結界は敵が張った物ではなく魔法先生の張った捕縛結界じゃった。」

「えー！」

「非常に手間が掛かる複雑な術式の結界での……それで一人の生徒が中に入ってしもった。」

ゴクリと唾を飲み込む。
まるで知らなかった……。

「結局その生徒は瀕死。非常に優秀な治癒魔法などが無ければ死んでおったじゃろう。」

「……そんな。」

雷に打たれた。そんな言葉が今の僕にはピッタリ合う。

柚木先生の言った意味がわかった。

あの言葉も何もかも……。

「君も一歩間違えれば死んでいたと解っておるのかな？」

「それは……十分に……僕なんかの勝てる相手ではありませんでした。」

「ネギ君は頭も良く周り行動力もある。それは良い事じゃ。しかしそれは上手くいって初めて評価されることじゃ。今回はまだ何とかなった。じゃが同じ事がまた起こったとして同じ様な事になるとは言えん。最悪血の海に沈む事になりえるのじゃ……それを心がけて今回の任務にあたってくれい。」

「はい……。」

ついさつき柚木先生では無く僕に親書が託されたら喜んでしまった……。

気がもう弛んでいた。

僕は馬鹿だ……大馬鹿だ……。

S i d e e n d

S i d e ?

京都市内 某茶屋の一室。

「何故、神鳴流如きが我々の上にいるのか……。」

怒りに震えた男の声が漏れる。

「全くですな。我々は帝国側に付いたと言つのに……あの男が長の座についたせいで有利な交渉も出来なかった。」

「裏切り者が近衛の女を誑し込むとは思いませんでしたからなあ。」

「近衛の娘も娘よ。大鬼神の封印を解くわ、神鳴流如きの男に誑かされるわ……。帝国第三皇女の兄弟辺りに嫁がせる予定であったのにな……。」

「最も……木乃香嬢は予定通り柚木宗一郎の元へ送り込んだわい。何度も何度も殺さぬように丁重に襲撃した甲斐があったというものじゃな。」

下卑た笑いが部屋を満たす。

「しかし麻帆良とは想定外じゃったわい。」

「うむ……。」

「西洋魔法なぞに染まりおつて……。挙句に烏族の混ざり者と共にいるとは……。」

「これ九条殿、口が軽いぞ……帝国も西洋魔法に混血者の国。我らの同志よ。」

「これは失礼しました鷹司殿……。」

「我ら一条、二条、九条、鷹司、タカツカサ今出川、ヤマシナ山科、レイセイ冷泉。今こそ近衛に取って変わる時が来た。決行の日は一週間後、麻帆良学園の修学旅行。」

「実行はワシが後見人を務めておる狗族の混ざり者、天ヶ崎の死に損ない、青山の忌子、帝国からの協力者、それからワシら子飼いの者を使う。木乃香嬢の確保、近衛詠春の暗殺それらを持って成功とする。」

Side end

Side ?

「……詠春様にお伝えしなければ……！」

密談の内容を得た女性は走る。

「それは困るよ。」

「何奴!？」

耳元で声。反射的に女性は蹴撃を見舞う。

ガッ

が、しかし……か細い腕一本でそれは止められる。

「なっ……!!」

後ろへ飛び下がり抜刀。

正眼に構える。近付けば斬り捨てれるように。

「神鳴流かい？それじゃ……よろしく月詠。」

「はい。」

「お前達が実行犯か……この場で斬り捨ててくれる！」

・
・
・
・
・
・
・
「んー。軽すぎますえー!。」

月詠と呼ばれた少女を刀に着いた血を振り払う。
足元には血だまり。
原型を失ったナニカ。

「……殺しちゃったのかい？」

「ん？何か問題ありますー？」

「いや………処理が面倒だなと思ってね。」

「あーバラバラにしてもーたからー。」

少女は笑いながら斬り落とした首を蹴る。

「…次からは気を付けてくれればいい…。」

少年はこめかみに手を当て静かに言った。

計画は漏れることなく実行に移される…。

Side end

Side ネギ

「……………はあ…だからあんなに怒るはずだよ…。僕は駄目だ…。」

「気にすんなよ兄貴!」

胸元から飛び出してくるオコジヨ。

「カモ君?! いつからそこにいたの!?!」

天上に吊るされてたはずなのに!

「ククク…兄貴居る所に俺っちあり。つまり縄程度で俺っちを縛る事なんて出来ないのさ!」

話は前日に遡る。

「兄貴いいい

」!

カモはネギの臭いを辿り部屋に辿り着いた。

「…もしかしてカモ君?!」

「おうよ!!!久しぶりだなネギの兄貴!」

一人と一匹はひっしと抱き合う。

感動の対面。

しかし

「オーケーネギ。そのまま離さないで。」

アーニヤの一言で場が凍りつく。

「お………や?」「なにアーニヤ?」

「アルベール・カモミール。脱獄犯。賞金が掛かってるわ。」

「え………カモ君一体何を……。」

瞬時にネギの顔がひきつる。

「ご、誤解だ兄貴！俺っちは何にもしてねえ！無実だ！」

その眼前に一枚の紙が下される。

「オコジヨ妖精アルベル・カモミール 女性用下着2,000枚を盗む。並びに封印書庫への侵入。女性更衣室への侵入。女性風呂への侵入。」そして脱獄が追加。何か言い逃れできるかしら？」

「カモ君……………」

明らかに失望したよ。という目でカモを見るネギ。

「ち、違っただ聞いてくれよ兄貴！俺っちの病弱な妹の寢床に使うために盗んじまったんだよ！貧乏なオコジヨ妖精にはそれしかなかったんだよ兄貴いいいい！」

「あう…カモ君！」

カモの微妙な言い訳にネギは感動している。

「そんな寸劇良いからソレを寄越しなさいネギ。」

ジワリ。アーニヤがにじり寄る。

「アーニヤはカモ君をどうするつもりなの…？」

「決まってるでしょ英国へ送り返すわ。重犯罪妖精よ。」

「で、でもでも……。」

「さあ！早く！」

ズイとアーニヤが迫る。

「待つてくれえアーニヤの姉御！俺っちは兄貴の為に脱獄してまで日本に来たんだ！5年前あの雪の日、罠に掛けられ縊り殺されるはずだった俺っちを救ってくれた兄貴に使い魔として恩を返してえんだよ！」

「お願いアーニヤ！どうか見逃して……！」

カモを離しアーニヤの手を握って懇願するネギ。

突然手を握られたアーニヤの頬は紅潮し……。

「……………仕方無いわね……わかったわよ。それじゃアルベール？タダ働きを条件に麻帆良にいる間だけ認めるわ……ただし、破廉恥な真似をしたら……。」

「ひいひい……！」

そんな激闘を乗り越え……。

朝起きるとアーニヤの下着の中で寝ているカモがいた。

回想終わり。

「本当にもう駄目だからね？」

「すまねえ兄貴…ついいつもの癖で…。」

だ…大丈夫かな…。不安になってきた。やっぱり…。

「と、とにかく兄貴！修学旅行の準備出来てねえだろ？」

「あっ！」

「敵地に乗り込むんだからよお準備は欠かせないぜ！」

「うん！」

何とか誤魔化した。そう安堵する力モであった。

S i d e e n d

59話：それぞれの思惑（後書き）

思惑一覧表。

学園長・・・詠春と組んでドキドキ親書お届け任務！を画策。

詠春・・・ナギの息子の為、一肌脱ぎます。

ネギ・・・なんて重要な任務なんだ…。

アーニヤ・・・京都?!素敵!

宗一郎・・・あほくさ。エヴァと京都観光を楽しもう。

エヴァ・・・宗一郎と京都を楽しもう。

茶々丸・・・宗一郎&エヴァのフォルダを増やそう!

京都勢・・・木乃香を穩便に確保。詠春倒してワシらの天下だぜ!

フェイト・・・???????

天ヶ崎千草・・・???????

次回

60話：秘密のデート!?!チア部出撃!

60話・秘密のデート！？チア部出撃！（前書き）

美砂によろやくまともな出番が…。

60話：秘密のデート！？チア部出撃！

原宿。快晴。

「いやっほー！ー良い天気い！」

「んーホント。」

チア部の仲良し三人組

柿崎美砂、釘宮円、椎名桜子はこの日原宿に修学旅行で着る服を買いに来ていた。

ゴーヤクレープというゲテモノを食べ、ウィンドウショッピングを一通り楽しんだその時だった。

「あーん楽しい。私たち普段麻帆帆良の外に出ないからねー！」

「ん？」

「どしたの美砂？」

突然美砂が立ち止り一点を凝視し始めた。

「いや、アレ…柚木先生と龍宮じゃない？」

「ホントだー…こんなところでなにやってんだろ…。」

ないんじゃないの？」

「つか絶対昔からの知り合いだよ。龍宮って柚木先生の事“シト
ーさん”だっけ？としか呼ばないし。」

「先生も真名って呼んでるよね…。」

「あわわわわ…た、たた大変なモノ見ちゃったかもーっ！」

大混乱である。

「誰かに知られたらマズいよ、コレ！」

「生徒に手を出すなんてクビだよクビ…！！」

「い、いや待って落ち着いて美砂、桜子。龍宮さんがいつもかなり
積極的だし…ただのデートなんじゃ…。」

「いや、冷静にそれでもアウトなんじゃ？」

「でもでも……。」

色々気になる桜子。

「ねえ…追いかけてみない？」

そんな桜子に美砂は悪魔の誘いをかける。

「面白そー！」

悪魔の誘いにホイホイ付いていく桜子。

「ちよつ美砂?!桜子!?!」

二人を止める。という名目で円は追った。

「全く…普通の服を選んでくれないものかな？」

「ああいう服の方が動きやすいんだ。次はシトーさんの服を買いに行こう。」

「いや、俺はいい。」

「む……いつも同じスーツじゃないか。」

「エヴァのハンドメイドだからな。内側の生地が少し違うぞ?」

「……………」

「むっ…待て、腕を引っ張るな……おい真名……」

「あー…そういえば明日菜先生から聞いた事あるなー。」

「何を？」

「柚木先生って服を箱で買っらしいよ。同じ柄で無地のをドブーン
つて。」

「くっ……柚木先生もいいなって思ってたのに……。」

美砂はくやしそうに拳を打ち付ける。

「最近は何改善してるとか何とかがって。」

微妙なフォローを桜子が入れる。

「いや美砂、逆光源氏計画並みにあやふや過ぎる。あと三鬼追っな。」

冷静に円が突っ込んだ。

「ふう……。」

「少し喫茶店で休もうか。」

「ちよっ……何か凄い高い店に入ったよ!？」

「あそこサンドイッチセットとかで服が買える……。」「

「中まで追うのはキツいね……。どうするっ？」

「大丈夫。成せばなるわよ！」

「ちょっとおまつ……。」「

「ほら行くよクギミー。」「

「クギミー言うな！」

「そっか……。」「

「ああ……。」「

「……………えええええ…何か暗い雰囲気になってるよー！ー！？」

「くぎミーが躊躇するから！どうなってんの！？」

「いやだって紅茶に千円とか出せないし！？」

「とじろで…。」

「ああ…。解っている。」

「なあシトーさん、静かな所で休まないかい？」

「あ…ああ。」

「ちよっ…あわわわわわわ。」

「どどどどどどつする!?!」

「どどどどどどつ!?!」

慌てるそぶりを見せつつ三人の内心は…

() () (教師と生徒の禁断の…!?!?) () ()

良くも悪くもそう言う事に多感なお年頃である。

が、これだけ騒げば気付かれるのは必然。

紅茶の代金を払い、急いで店の外へ出た頃には……。

「み、見失ってしまった……。」

「真名、手を出してみろ。」

「ん？手でも繋いでくれるのかな？」

差し出された手を掴む。

「真名……お前……。」

「ああ……そういう意味か……残念だね。」

浸食か、それとも……。

「魔眼を使うなど、あれ程いったはずだぞ？」

「……………色々あってね。」

「……………。」

「そんな顔をしないでくれよシトーさん。大丈夫、私は混血さ……
それならいつそ完全に魔族になった方がシトーさんの側にいれるだ
ろっ？」

「馬鹿だな……そんな事をしなくても……いや……。なあ真名、俺は

もう結婚しているんだ。」

「だから？」

さしたる驚きも無く平然と真名は言い放つ。

「だからってお前……。」

「それとも……死なない仲間が無いと傍に置くのは嫌かい？弟子はホイホイ取る癖に。」

「……………」

痛い所を突く。この分じゃ雪広の事もバレてるな……。

「俺はな……俺はもう失いたくないんだよ。」

「それは……………」

無理だ。柚木宗一郎が真祖である限り。

「タカミチがな……全てを守る正義の味方を目指してる。コウキと一緒にだ。アイツにクルト並みの冷徹さが少しでもあれば安心出来る。でもなあいつは甘い。いつもいつもいつも怪我をして帰ってくる。確かに、敵に容赦しないだけマシだ。それでも甘い。」

「……………」

真名は黙って俺の独白を聞いてくれている。

「ナギがな、死んだ時と。そう聞いた時は笑い飛ばした。アイツが死ぬわけない。俺が殺せなかった人間だ…。でもな…。次に会ったアイツはアイツじゃなかった。ガトウも老けちまって見る影もない。詠春ももう身体にガタが出て来るだろうさ。」

「戦争じゃ知り合いを沢山失った。俺を慕ってくれた兵士も非戦闘員もテオの衛士達も。呪符使いの医師が殺された時には何一つ間に合わなかった。」

「なあ真名、俺はな。タカミチや次の世代が堂々と正義の味方を名乗って行動できる世界を作りたいんだ。連合の間違ったマジステルマジという偶像ではなく、自身の決めた信念に従う本当の正義の味方だ。」

「第二の Kouki を作らないため…。かい？」

「……………」

「そうかい…。」

「ああ……………」

「と…ころで……………」

「ああ…。解っている。」

三人程…。尾行するにしても釘宮は声大きいな…。
釘宮…ということは他の二人は椎名と柿崎か。

「なあシトーさん、静かな所で休まないかい？」

「あ…ああ。」

「おい…もう少し言い様というものがあるだろう？」

「おや？何か間違った事を言ったかな？」

「はあ…。」

「見失ったよ…はあ…。」

「ねね、アレはネギ君とアーニヤちゃんなんじゃないの？」

「お、ほんとだー。」

「いやあ…初々しいねえ。」

「さっきまでの黒さとはまるで違う初々しさね…。」

「くっ……。同郷の幼馴染…最強のライバルね。」

「あーん…会話が英語だよー。」

「ネギ君、アーニヤちゃん……恐ろしい子っ！」

「ちよつとそこの三人。」

「はい？」 「えつと…シスターさん？」 「ええつと？」

三人に声をかけたのは
100人が100人”シスターさん”と答えるであろう恰好をした
シスターだった。

「この辺りで柚木先生を見かけませんでしたか？」

「「「………はい？」」」

「くっ……まさか誰かと会う前に撒かれてしまつとは……。」

「ええつと…そのー。」

「貴女方は美空のクラスメイトでしょう？」

「ああ、はい。そうですけど……。」

「原宿駅まで追ってきましたのに……。とにかく柚木先生を見ませ
んでしたか？」

「イイエ。見テマセンヨ。」

「そう……。くっ……。どこにいるんでしょう……。悪い女に捕まっていたらよかったです……。手間を掛けましたね。」

そう言うとシスターさんは人混みへと消えていった。

「……………今のはシスターシャーケティ先生？」

「ウルスラの人だけ？」

「もしかして柚木先生が教会嫌いな理由って……………」

「センサー！これ何か預かっちゃって……………」

「ん？どうした椎名？」

「柚木先生に……。でも何か教会宛てなんですけど……………」

「……ッ!？」

「センサー？」

「すまない椎名。教会は苦手で……………代わりに届けてくれないか？」

「教会が嫌いって吸血鬼みたいだよねー。」

「ははははは」

「そのまさか……。」

「それ以上言っちゃ駄目。」

「ハハハハハハ……帰ろっか。」

乾いた美砂の笑いが響く。

色々な意味でドロドロしたものと、初々しく眩しいものと、触れてはならない物を見てしまった三人であった。

「朝倉―学園祭で何か使っらしいから今の内に昔の写真引き出してよ！私いまから取材行ってくるからー。」

「と…頼まれたものの…一体何に使っのかっていう…。」
資料庫をひたすら引っ繰り返す。

こんな所にスクープなんて無いだろうし…。

「教師陣の昔の写真とかあれば…盛り上がったたりしないかねえ？」
そこへハラリと一枚の写真が落ちる。

「ん、なにこれ？」

”××年度卒業生一同”

「へえ……。古いわねえ14、5年前の写真…ん？」

私は写真の中央
生徒たちに囲まれた男に注目した。

「いや、まさか…ねえ…。」
ふと気になった。

これは調べないと夜も眠れないね！
ひたすら写真を引っかきまわす。

そして……

「寮関係の写真！……あつた！」

並べて見比べる。

「いやいやいや……冗談でしょ？ 柚木先生って……。」

そう

朝倉は見つけてしまった。

20年以上容姿が変わらない一人の男を。

「……アンチエイジングの達人？」

今はまだ真相には遠い。

S i d e e n d

60話：秘密のデート！？チア部出撃！（後書き）

明日菜：ねー私の誕生日イベントは？

宗一郎：ない。真・明日菜の誕生日はわからん。作者が把握してない。

明日菜：ちよっ……

シャークティー：そんなことより！私と柚木先生のデー（ry

宗一郎：アアアアアアキコエナイ

朝倉：スクーーーーー！キターーーーーー！

朝倉：作者の好みなのにココの所活躍が無かったし！くくく！

柿崎：いや、アンタまだマシ。それなりの活躍あるんだから。私これで最後かもしれないけど……。

釘宮：大丈夫、大丈夫よ美砂。まだ学園祭がある！亜子がお気に入りに筆頭だから！

柿崎：やっててよかったデコピンロケット！！（涙

椎名：………。いいじゃん…皆活躍がそれなりにあって…私
は…。

真名：フッフフ…専用のアイテムが構想されていないキャラは可哀想
だな。

朝倉：なんて余裕…しかも名前表記が！

真名：わかったか？コレが差というものさ。

楓：ニンニン。

柿崎：長瀬まで！

楓：いや拙者の場合、長瀬という名前を忘れられて……ニン。

真名：ああ作者がFateの時寺楓の方に行ってしまうからな。あ
れも褐色だ。諦めるトーンがあるかないかの差だ。

宗一郎：右肩にココネ、左肩にチビテオ、右腕にテオ、左腕に真名、
対面にザジと時寺とかアホな発言が出るくらいだからな。

テオ：一人で二度美味しい！

次回61話：修学旅行一日目

61話・修学旅行一日目

「おおっ早いすな柚木先生。」

「おはようございます新田先生。同じ電車だったようですね。」

「ああ、おはよう。エヴァンジェリン先生のお陰ですか？」

「いやはやバレてますか…。生徒よりはしゃいでしまつて。」

「はっはっはっ。」

「あ、おはようございます新田先生、柚木先生。いやぁ元気ですねえ…始発なのに生徒に会いましたよ。」

「おはよう瀬流彦君。」

「おはよう瀬流彦。」

エヴァは生徒並だな。

「おはようございまーす！わーみんな早い！」

そういっているとなぎが到着する。

「おはようネギ先生。」

「ネギ君おはよー!」

「待ちきれなくて始発で来ちゃったー。」

ネギが来ると一気に集合場所が騒がしくなる。

「それでは京都行きは3A、3D、3H、3J、3Sの皆さん各クラスの班ごとに点呼を取ってからホームに向かいます。」

「JR新幹線あさま506号。まもなく出発します。」

一班

鳴滝姉妹、柿崎、釘宮、椎名、アーニヤ

二班

古、超、葉加瀬、長瀬、春日、四葉

三班

雪広、那波、村上、長谷川、朝倉、ザジ

四班

佐々木、明石、和泉、龍宮、大河内

五班

近衛、桜咲、綾瀬、早乙女、宮崎、茶々丸

「それではみなさん15年度の修学旅行が始まりました。この四泊五日の旅行で楽しい思い出を作ってくださいね。」

「「「「はーい!」「」「」

流石に修学旅行だけあって綾瀬や長谷川の小さな文句も無いようだ。

「特に怪我などには気を付けてくださいね。」

「ほうカードゲームか。」

見回りの途中、興味深いものを見つける。

「先生もやってみませんか?」

「相手をしてやれ宗一郎。後は私が見回ろう。」

「ん、ありがとうエヴァ。どれ、ルールブックを貸してくれ。」

・
・
・
・
・
「ふむ、大まかに理解した。」

「では私のデッキを…。」

「ありがとう綾瀬。」

「いつけー！“恐怖のカエル地獄”！」

「ふむ…累積ダメージか面倒だな…では“打ち消し呪文”。」

「にゃっ!?!」

「特殊効果でモンスターを召喚。さて…ジワリジワリと攻め落とすてやろう。」

「ひい！」

「くっ…“炎の呪文”！」

「では“痛み分け”だ。更にこのモンスターの特殊効果で“身代わり”。これでこちらへのダメージは0だ。」

「ええつと…切り捨てだから…2点で…うわっ…あと1点だ！」

「裕奈まだ諦めちゃ駄目よ！柚木先生も残り3点まだ起死回生のチャンスはあるわ！」

「パル、次は柚木先生のターンです。」

「……………」

ぼん

早乙女が無言で明石の肩を叩く。

「チェックメイトだ。」

「にゃー!」

「まあ罰金は免除してやってくれ。」

「くっ…まさか先生が勝つなんて!」

おい。

「先生は本当に初プレイですか?」

「ん、ああ。こういうカードゲームは初めてだな。まあルールブックと綾瀬のデッキの内容を見ればカウンターを主体とした絡め手のデッキと理解した。また明石の行動が大量に召喚しての物量戦を主体としたデッキであると読んだのでな……………」

「おおー…流石先生だ……………」

「しかし……………」

「カエル回収終わったアルよ。」

数分間の激闘？の末、カエルは回収された。

もしコレがゴキブリであったならば無事には済まなかっただろう。

……恐ろしい生物兵器だ。

「では口を縛って絶対に逃がすな。保健委員は介抱　　「保健委員も失神してるえー！」　　出来ないので各班毎に助け合え。」

「とりあえずいいんちよさんは至急点呼をお願いします！」

「少年！ここは任せたぞ俺は他の車両で出ていないか確認してくる。」

呪術協会にはやり方が雑すぎる。

狙いは……エヴァか……俺か。それとも別の思惑か……。

思案しつつ車両の扉を開けた瞬間、何かが飛び込む。

「なにっ?!」

ガシャン。

それに気を取られ車内販売のカートにぶつかってしまった。

「きゃっ……。」「

「おっと…すまない。大丈夫かね？」

「ええ…大丈夫です。」

俺を利用してすり抜けたソレはネギの書簡を奪い飛び去る。

やっってくれる。

そしてすれ違う時に思った。

先程の女性は何処かであったような……。
ずっと昔…。

「いや、気のせいだな。」

「おお柚木先生、先程何か大きな声が聞こえましたが大丈夫ですか
な？」

「少し問題が…。そちらの車両では何もありませんでしたか？」

「こちらには何もなかったが…何か？」

「車両中にカエルが生まして…。量からして生徒が持ち込めるモノ
では無かったので……。」

「待てーーーーー！」

ネギは走る。

「書簡を返してくださいーい！」

その声も聞こえないとばかりにツバメは疾風の如く車両を飛んでいく。

「兄貴！！あれは“式神”だ！日本の使い魔法、いや…ペーパー
ゴレムって所だ！」

「くっ拙い！逃げられる！！兄貴、杖は！？」

「持っていないよ！」

「くっ…ここじゃデカイ奴つえを呼ぶわけにも…」。

ツバメの式が飛んでくる。

「柚木流…幻刀。」

刀は鞘から放たれる事無く、しかしツバメは紙に戻り地に落ちる。

「待てーっ！」

「！？」

「……………ネギ先生。」

「さ、桜咲さん…？」

「これはネギ先生の物ですね？」

「え…あーっ！っ！これは僕の大切な親書！！ありがとうございます！
ざいます助かりました！」

「気を付けてくださいね。……………特に向こうについては。では。」

「あ、どうも御親切に。」

ペコッと頭を下げて礼を言うネギ。

「オイオイオイ兄貴！！何が“どうも”だよ！あの女めっちゃ怪しい
じゃねーか！気を付けるよー！！」

「えっ…どづいっこと？」

「兄貴足下を足下に見てみる！」

「こ、コレは!?!」

「さっきの鳥の紙型…つまり奴が術者だよ!」

「えっじゃあ…じゃあ…。」

「そつだ!奴は西からのスパイかもしれねえぜ!」

「えー…!」

「まもなく京都、京都です。」

「皆さん降りる準備をしてくださーい!」

「えーもつっ?!」「けっこう早かったねー!」

「よし!いよいよ京都だ!この地にサウザンドマスターの手がかりが…。」

「どうかしましたかネギ先生?」

「い、いえ!楽しみですねー京都!」

「そうですわねネギ先生!」

「はい、いいんちよさん!では皆さんいざ京都へ!」

清水寺

「京都おー……っ！」

「これが噂の飛び降りるアレ！」

「誰かつ！！飛び降りれっ。」

「では拙者が……。」

「おやめなさいっ！」

「ここが清水寺の本堂いわゆる“清水の舞台”ですね。」

「そつだ！本来は本尊の観音に能や踊りといったものを楽しんでもらうというコンセプトの装置だ。国宝指定だな！有名な“清水寺から飛び降りたつもりで……”という言葉通り江戸時代では実際に234件もの飛び降り事件があつたが、その生存率は85%程だ。この高さの割には意外と高い。それから……。」

「あつっ私の台詞ですー。」

「エヴァは京都マニアだからな……綾瀬、お前の蘊蓄は仏像で使うんだ。エヴァンジェリンの専門外のはずだ。」

「わーっ！凄い！京の街が一望できますねーっ！」

京都を一望する景色。

古都京都の本領発揮と言った所だろう。どうせならば秋に来たかったなどと思いを馳せる。

「ハシャいで落ちないでよネギ。」「落ちないよアーニャ！」

「ネギ先生に喜んで頂けて良かったですわ。」

「ああ、この肌触り……。」

「ああ……やっと京都に来れた……。」

……もう少し静かに堪能できないかね？あと泣くなエヴァ。

「そうそうここから先に進むと恋占いと女性に大人気の地主神社があるです。」

「えー！」

「恋占い！？」

「ではネギ先生一緒にその恋占いなど……。」

「は、はあ。」

「あ、ネギ……ちよっ。。。」

「ほらほらアーニヤちゃんも行くっよー！」

「あ……私もー……。。。」

「ちなみに……その石段を下るとあそこ！有名な“音羽の滝”に出ます。あの三筋の水は飲むとそれぞれ健康・学業・縁結びが成就するとか……。」

「縁結び!?!」

「それだ!?!」

「ホラ！ネギ君行く行こー！ー！ー！」

「あ、コラつまき絵さ……その人達!!ぬけがけは許しませんわよ!ー!」

「いや、そこは団体行動をって言う所では？」

「いいから行くよアーニヤちゃん！」

生徒達が駆けて行く後ろを付いていく。

愛だの恋だのと……この年齢の特権なのだろうな。

「ネギくーん！あっちだよあっち！」

「あんまり走っちゃ駄目ですよー！」

「…いい所だねえカモ君。」

「うん、流石は京都だな妹にも見せてやりたいぜ。」

「木で造った古い建物っていうのが凄くいいっていうか……。」

「だが兄　　「ハツハツハツハツ坊や解ってるじゃないか！これが宮大工の集大成という奴だ。石造りでは表現できない風格と温かみがあるだろう！ハツハツハツ中々いい趣味をしてるじゃないか！」

「あつエヴァンジェリン先生……。」

「ネギくん！エヴァンジェリン先生！こっちこっちー！これが恋占いの石だつてさー！」

「あ、ハローイ！」

「ほう…そんなものまであるのか。」

「へー！目を瞑ってこの石からあの石へたどり着ければ恋が成就

するんですかあ。」

「そっそっ!」

「遠っ!」

「ちょっと!コレ20mはあるわよ!」?

「で、では早速クラス委員長の私から...。」

「あーずるい!私もいくー。」

「わ、私もー!」

「ハッハッハッお前たちそんなに急ぐ事は無い……同じ相手を狙っているのでは無ければな?」

エヴァのある意味色々と理解している発言が出ると

「ハッ!」「?」

三人の顔が変わった。

挑戦者は雪広、佐々木、宮崎、アーニヤの四人。

「行けー!」

「ちよっ本屋そっち違っ!」

「まき絵に50円!」「いいんちよに100円!」「アーニヤちゃんに200円!!!」

ギャラリーが程良く過剰に盛り上がる。

「ククク……やはりこういうものは少々火を付けてやらねばな。」

「マスター。」

「ん?どうした刹那、京都を楽しんでいるか?」

「いえ、少しお話が……。」

「あっつ!」「きゃあ!」

とそれぞれ悲鳴を上げてまき絵とあやかが落とし穴におちる。

しかしアーニヤは華麗にそこをジャンプして……

「きゃん!」「はっつ!」

フラフラと歩いていた宮崎と衝突した。

「アーニヤちゃんすごーい!」

「って!二人とも気絶してるぅー!」

その時二人の手はゴールに届いていた。

「さて…何かあったか？」

「いえ襲撃が…。」

「それは宗一郎から聞いていた事だろう？なに、気にする事はない。多少術は雑で面倒を引き起こしがちだが…この程度なら笑っていられるだろう？」

「しかし……。」

「まあ旅館に着いたら式神返しを貼っておけ。私はむしろ明日菜だけを残してきたガラ空きの麻帆良学園の方が危険だと思うぞ？」

「き、気を取り直して音羽の滝へ行きますわよ。」

「お、何か凄い混んでるよ！」

「ゆえゆえっどれが何だっけー!？」

「右から健康・学業・縁結びです。」

「左・左　　っ！」

その声を発端に皆が縁結びの滝の水を飲もつと殺到する。

「あー！私もっ！」

「お、御待ちなさい皆さん順番を…！」

「あのー…皆さん他の人の迷惑にならない様に…。」

「むっ…。」

「！」

「う、うまい！？もう一杯…！」

「ぶっはあー！何コレ…！」

「た、確かに効きそう…！霊験あらたかなこの味…！」

「いっぱい飲めばいっぱい効くかも…！」

うまい。そんな声を聞いて気になった。

「ほう…音羽の滝か…って美味しいか？湧水でも無かったはずだが

……。」

と、一口付けると……

「あー………これは…酒だな。はっはっはっはっ…。」

「ちよっ！ホントですか柚木先生！」

「ああ少年か。いい酒だな…水で薄まっちゃいるが…。」

「兄貴！オイ兄貴、それってヤバいんじゃないか！？」

オコジヨが喋った？オコジヨ妖精か？

「何かみんな酔いつぶれてしまったようですが……。」

しっかりと水筒に音羽の酒入り水を汲みとった綾瀬が冷静に言う。

「ええー………っ！？」

「い、いいんちよさん？皆さん？！しっかりしてください！」

「はひー？」「ういー。」

アーニヤが必死に介抱に走るが時既に遅し。

「少年、とにかくここから運べ！俺は酒を除けて来る！」

「は、はいっ…！」

「ん…何かお酒くさくないですか？」

「あー！そのあの…。」

「新田先生に瀬流彦！！良い所に来た。」

「これは一体全体…。」

「音羽の滝にその酒樽が仕掛けてありまして…縁結びの水を飲んだ子は皆…とにかく新田先生は警察の方に連絡を。瀬流彦と…しずな先生！こちらを手伝ってください！…酔いつぶれてしまった生徒をバスに押し込みましょう。とりあえず旅館の方に水を用意してもらってください！」

「なんて悪質ないたずらだ…。」

「少年、こういう時は誤魔化す事は無い。冷静に状況を伝えるんだ。」

「は、はいっ…。」

とんでもない事になったな…。

詠春にしては手段が大雑把で目立つ。一般客も巻き込んでいる…。

アイツ…ボケたか？歳だしなあ。

京都・嵐山。旅館。

「やっぱりあの刹那って奴の仕業に違いねえよ兄貴！」

「うーん。確かにちょっと怪しいと思うけど……でも……。」

「ちょっとネギー！」

「あ…アーニヤ…。」

「とりあえず酔ってる皆は部屋に休ませてきたわ……それからアンタ、私に隠してる事があるんじゃないの？」

「じ、実はその……。」

「言うちまえよ兄貴！一人じゃどうにもならねえぜ！」

「ちょっと……何でそういう親書とか大切な事を私に言わないわけ！？しかも今、狙われてるわけでしょ！？その…えーっど？」

「関西呪術協会って言う……。」

「どうりで…あのカエル潰したら紙になるわけよ……。とにかくこれからは力貸してあげるから…まさかいららないなんて言わないわよね？」

「う、うん。」

「そうだアーニヤの姐さん！クラスの桜咲刹那って奴が敵のスパイらしいんだよ！何かしらねーか？」

「ええ…？！スパイって桜咲さんが？近衛さんの幼馴染で京都出身だとか言ってたと思うけど…。」

「それだっ！二人とも京都の出身なんだな！二人とも関西呪術協会の刺客に違いねえ…！」

「う、うー…ん…そうかな…？」

「ネギ先生 教員は早めにお風呂済ませて下さいな。今なら柚木先生もおられますよ。」

「あ、は、はい！しずな先生！」

「1班もすぐにお風呂だし続きは夜の自由時間に聞いわね？」

「あ、うん…！」

「了解ッス！」

「あ、ちゃんと頭洗うのよ！」

「わ、わかってるよ！」

「ふー……やはり温泉はいいですねえ……。」

「教師としてでなければ一杯いきたい所ですなあ。」

「確かに。」

「しかし大変な目に会いましたなあ。」

「ええ……まさか酒を流されるとは……。縁結びの石の方でも落とし穴があつたと聞きました。新幹線の件といい……。偶然だとは思いますがね……。」

「とにかく私たち教師に出来る事は注意を怠らず警戒する事ですな。」

「……そうですね。」

「おっと……そろそろ私は上がります。」

「私はもう少し浸かっていますよ……色々あつて疲れました。」

「はっはっはっ……まだまだ続きますよ柚木先生。では。」

「はい。」

「ふう……。」

湯の中に身を沈める。身体の芯から温まる。

「（宗一郎、聞こえるか？）」

「（ん？どうしたエヴァ？温泉は入ったか気持ちいいぞ？）」

「（いやまだだ私は深夜に入る事にする。今、刹那が式神返しを貼った。ところで刹那が警戒しすぎて酒の相手にならん。茶々丸は呑まんし……。早く風呂を出て相手をしろ！）」

おい……。

「（どうも詠春のやっている事とは思えんのだが……。」

「（うるさい！早く相手をしろおお宗一郎おおー！）」

……酒乱だ……！？

無理矢理念話を打ちきり意識を戻す。

…教師としていいのだろうか？
その前に……そんなに強い酒だったか？

「あつ…… 柚木先生。」

「少年か…。身体を良く流してから風呂に浸かれよ？それからタオルは湯の中に入れるな。日本の風呂のマナーだ。」

「はい！」

「そしてその肩にいる珍妙な生物は風呂の中に入れるなよ？」

「おう！おうおうおう！珍妙な生物とはあんまりにも失礼じゃねえか！？兄さん！」

「か、カモ君！？」

「…ふむ、やはり昼頃のは聞き違えで無かったか。」

「俺たちは由緒正しきオコジヨ妖精！アルベル・カモミール様だ
い！」

「で、オコジヨモドキ風呂には入るなよ？猿や熊が入る様な山奥の秘湯じゃあるまいしな。」

「ギギギギギギ…。」

「か、カモ君も柚木先生も止めてください！」

「あ、兄貴が言っんならよお……。」

「とりあえずカモ君は桶にお湯を入れますからそっちに入ってください。」

「お、おう。」

「柚木先生はカモ君の事をオコジヨモドキって呼ばないでください。」

ほう……。

「まあいいだろう。しかしアルベール・カモミール……何処かで聞いた様な……。」

どこだったか……。

「「!?!?」「」

「だ、ただただ旦那！そいつぁ気のせいですぜ！俺っちは5年前の恩を返しに来ただけの真っ当で真面目なオコジヨ妖精さ！……！」

「ふむ………そうか。」

必死すぎる所に色々と疑念はあるが思い出せないのだからさほど重要なことではないのだろう。

「ところで旦那は魔法先生だよな？」

「ん？ああ、そうだが？」

「3Aに関西呪術協会のスパイがいるんだよっ！そいつが兄貴の親書を盗もつとしていやがるんだ！」

スパイ？

「少年、それは誰だ？」

「えっと…その……。」

「桜咲刹那と近衛木乃香だっ！」

「……くっ。くはははは……。」

「何がおかしいんでい！」

「いやいや余りにも見当違いで笑ってしまったただけだ。あの二人は敵ではないよ。普通の生徒だ…まあ励みたまえ。」

「柚木先生！ぼ、僕に力を貸して下さい！」

「………此度は余程の事で無い限り俺が関わると面倒な事になる。自分の力で乗り切る事だ。」

「おい旦那！魔法先生だろ？！おいってば………なんでい！あの野郎！」

「仕方がないよカモ君……。」

「おいおい兄貴、あの野郎は何なんだよ！」

「カモ君は知らないの？帝国の英雄って呼ばれてる人だよ。」

「なあっ？！血塗れ銀鬼………超大物じゃねえか！そうか………ムムム………トレードマークの服がねえから気付かなかったぜ………。ってえ！麻帆良は連合だろ！？何でこんな所にいるんだよっ？！」

「僕にも解らないけど………きっと何か理由があるんだよ。エヴァンジェリン先生も明日菜先生も一緒だし……。」

「あ………！」

「ど、どうしたのカモ君！？」

「血塗れ銀鬼の側にいるのは闇の福音じゃねえか………！」

「？」

「たあっ………！知らねえのか兄貴！？」

「なにを？」

「吸血鬼解放前までの至上最高賞金首！闇の福音！エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルじゃねえか！！！！泣く子も黙る元・悪の魔法使いだよ！！！！」

「元つて……。エヴァンジェリン先生は厳しいけどいい先生だよ？」

「オイオイオイ……。こりゃあ信用できねえぜ……。」

「どうして？」

「血塗れ銀鬼つて言えばよおどれだけ殺したと思ってんだよ兄貴！」

「それは戦争だったからで……。」

「そりゃあ何万の軍勢対何万のつて戦いでの話だ！あれはよお一人で万軍を相手にして全滅させてんだ！普通じゃねえ！」

「そうだね。そして……。僕の父さんも同じ場所に居たんだ。勝てなかったけど……。負けてない。あの人に近づく事が父さんへの最短路トだと思っただよ……。」

「で、でもよお……。」

カラカラカラ

「……………ん？」

「誰か来たよ？男の先生方か……。なっ！？刹那さん！？」

そこには一糸纏わぬ刹那。

「なななんで！？入口は別なのに中はおんなじー！？」

「落ち着け兄貴っ！混浴っていうやつだ！」

ザツと掛け湯をする刹那。

「ハーーーー背はちっちゃいけど綺麗な人だねー。肌が真っ白。」

「こーゆーのを大和撫子ってんだぜ？」

「せつちゃん待ってーなー！」

「ハッ！」

「な、何見とれてんだんだよっズラかるぜ兄貴！パートナー無し
の接近戦とかそういうレベルじゃねえ！兄貴に二対一は無理だ！」

「う、うん！」

「ふう……困ったな……マスターも師匠もまるで動いてくれない……
ネギ先生ではまるで頼りにならないし……。」

「はう……頼りにならない……。」

頼りにならないという言葉に思わず声が出てしまっ。

「誰だっ！」

指弾で電灯を壊し刀を構える刹那。

(しまった見つかった!?)

「逃げるかつ……神鳴流奥義……斬岩剣!」

ズパツと真ん中の岩が両断される。

(なつ岩が真つ二つに……!?ス……スゴイ!)

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル……風花武装解除!」

「詠唱ッ!このちゃん!」

バシンッ

夕凧が弾き飛ばされる。

(うまい兄貴!!奴の獲物を弾いたぜ!?)

「フツ。」

「兄貴!油断するな突っ込んでくるぞ!」

ネギの苦し紛れの拳が打ち出される。

それを刹那は左腕で受け流し更に一步踏み込む。
右脚を低く、左脚はネギの脚の後ろに。
そして同時に必殺の右拳が撃ち込まれる。

ズンッ

「がふっ…。」

人体では到底鳴らない音が鈍く響き、ネギの肺から空気が逃げ出す。

崩拳。

その名の如くネギは崩れ落ちる。

その首へトドメが突き刺さると言う瞬間。

「せつちゃんストップや!!」

刹那の足は糸に止められる。

「このちゃん!?!」

「ネギ君や!仕留めたらアカンえ!」

「えっ…あ…ネギ先生?す、すみません大丈夫ですか!?!」

「きゅっ。」

「チッ…手え出されへんやないか…。」

「ええええええええええ!では刹那さんも木乃香さんも柚木先生のお弟子さんなんですか!?!」

「ええ…そうですね。このちゃんはどこらかというとマスター…エヴァンジェリンさんの弟子に当たります。」

「たっあー旦那がそれを早く言っといてくれればよう…。」

「二人とも凄いのね…。」

「ところで刹那さんも日本の魔法を使えるんですか？」

「ええ。剣術の補助になるようにと一通りは。」

「なるほど、ちよつとした魔法剣士って奴だな。」

チヨロつとカモがネギの肩へ移動する。

「なっ！クダギツネ!？」

その途端刹那が獲物に手を掛ける。

「へっ!？」

「ど、どうかしたんですか刹那さん!？」

「先日大浴場に入り込んだ妖怪!何故そこにいる!」

「ちよつちがっ違うんだ…。」

「ほう…カモミール…ちよつと私と話そうか？」

「ひっ！」

「カモ君……僕にも弁護できる事と出来ない事があるんだよ？」

「兄貴っ!？」

ドナドナドナドナ……。

「えっと……刹那さん申し訳ないです。オコジヨ妖精で、その……多分悪気は無いと思うんです。」

「……そうですか。」

「それから……その疑ってしまつてすみませんでした……。」

「いえ、先に説明しなかつた私の落ち度ですので……それに……。」

「それに……？」

「いえ、その……。」

「あつ……刹那さん! 敵の事を教えてくれませんか!？」

「……私たちの敵は恐らく関西呪術協会の一部の勢力だと思ひます。陰陽道の“呪符使い”とそれが使う式神。」

「呪符使いというのは……。」

「呪符使いは古くから京都に伝わる日本独自の魔法“陰陽道”を基本にしていますが呪文を唱える間無防備となる弱点はネギ先生達西洋魔法使いと同じ…。故に西洋魔術師で言う従者の様に前鬼や後鬼といった強力な式神をガードに付けているのが普通です。」

「ぜんきにゴキですか……。強そう……。」

「更に関西呪術協会は京都神鳴流と深い関係にあります。神鳴流とは元々京を護り魔を討つ為に組織、訓練された掛け値無し of 力を持つ戦闘集団です。呪符使いの護衛としてコレが付けば非常に厄介です。」

「じゃ、じゃあ神鳴流も敵なんですか！？それじゃ刹那さんは！」

「はい。彼らにとって見れば私も西を抜けた裏切り者。戦うのは元同門になりますね。」

「おい宗一郎！何処を見ている！私を見る私を……！」

「あ……はいはい。これでよろしゅーですかお嬢様？」

「うむ苦しゅない。」

何かおかしい日本語で会話していると思うのだがどうにも酒がまわって上手く頭が働かない。

ゴツゴツゴツゴツと喉を鳴らして日本酒を流し込むエヴァ。

「なあエヴァー……これってもしかしてお神酒ってやつじゃないか？」

「知らん。で、宗一郎お！呑み終わったぞおおおー！」

「おー……。流石エヴァー！」

パチパチと手を叩く。

そして布団へ潜り込もうともそもそ移動し始める……が、

「宗一郎！何処へ行く宗一郎！」

「いや、もう寝ようとなー。」

「宗一郎、そこの鞆を開けるがいい！」

言われるままに鞆を開ける。

大量のガラス瓶に磁器、瀬戸物の瓶……………。

ラベルには 酒造、 酒造、 酒造……………。

「……………酒？」

「京都の地酒だ！」

「きよ……今日はここまでにしなかつたか？」

「らめだー！宗一郎おーお前というやつは……………」

「んー……寝てしもうたあ……。」

「あ……木乃香さん……お水を用意しま……。」

「ええよええよ……大丈夫。ちょっとトイレ行っただけやからー。」

「そうですか。」

「そっやえー……。」

「ふあーわ……ゆえの水やっぱりお酒やったなあ……あかん酔ってもうたわ……。」

ポフツ

「もふっ？」

木乃香が扉を開けた先に居たのは大きい猿の様なモノ。

「……入っとりますえー……なーんてがっ……。」

木乃香は鉄扇を首元に押し付ける。
力を込めれば容易く首は砕けるだろう。

「誰やアンター…見たことないひ…とお…ZZZZZZ。」

しかし木乃香に回った酒がソレを許さなかった。

「あ…危険な…。」

猿女の首元に突き付けられた鉄扇は木乃香が崩れると同時に下がる。

天ヶ崎千草、一度目の命拾いであった。

「は…は…おしっこです…。」

フラフラとトイレへ歩み寄る夕映。

コンコンとノックをすると

「入っておりますえー。」

「は…は…。」

時間が経過することに夕映の動きがドンドン不審になる。

一度布団へ戻り1分。突然転がり始める。

5分程経ち布団から起き上がり控えめにノックをする。

「入っとなりますえー。」

「むうう?!」

7分経ち、もじもじと身体を動かす。

いい加減我慢の限界である。

「ただいま戻りました。……どうかしましたか綾瀬さん？」

「こ、このかさんがトイレに入ってかれこれじゅっ…10分程籠つてて…。ふ、二人で昼の滝の水で晩酌をしていたのでそのせいかもしれません。…」

何故か跳ねだす夕映。

「大丈夫このちゃん？」

「ここ、このかさん私もう………っ。」

「入っとなりますえー。」

「そ、そうですか。」

「ううう………っ。」

夕映は遂にトイレの前で崩れ落ちピクピクと痙攣を始めた。我慢の限界など既に越えている。

「もるですううう………っ。私にも我慢の限界という……ものがっ……。」

「ネギ先生！このちゃんが敵の手に落ちました！師匠の部屋へ行って呼んできてください！！私は先行します！」

「は、はいっ！」

「ネギ！私も桜咲さんと出るわ！」

「わかった！」

バンツと扉が開かれる。

「柚木先生！緊急事態で……酒くさっ!？」

完全に熟睡しているエヴァンジェリン。

「いよう少年ひっく……親書でも取られたかぁー？」

宗一郎は何か動いている。いや不自然に上半身がゆっくりと回転しているが……。

「違います!!木乃香さんが誘拐されましたっ！」

「な、に……。」

「ハツハツハツ！ホンマに皇子さんの言った通りやないか！あの闇の福音が酔いつぶれよった！！！！お嬢さんも巧く確保出来たし完璧や！！」

「対吸血鬼用の酒だよ……おっと追手が来てるよ。」

「チツ神鳴流かいな！月詠はんは？！」

「……寝坊みたいだね。」

「……締まらんなあ……。」

「待てえー！！！」

「千草さん、次の駅で下りて。僕は先回りするよ。」

「ほうか…任せたえ。まあ…そんな仕掛けいらん思っけど…なあっ
！」

呪符を投げつけると同時に烈風が飛ぶ。

「鎌鼬！？くあっ…！」

咄嗟に身構えるも全身に浅く無い裂傷が生まれる。

「炎盾！」

しかし致命傷はアーニヤの盾で何とか防がれる。

「大丈夫！？」

「助かりました…。」

「駅に逃げ込むわよ！」

「アーニヤさん！間抜けな外見ですがかなり強力な術者です！気を付けてください！」

駅に入り改札機を飛び越える。

「終電間際なのに客も乗務員も居ないの！？」

「人払いの呪符です！一般人は近付けません！」

そこへ杖に乗ったネギが現れる。

「アーニヤ！桜咲さん！」

「ネギ！？」

「師匠は！？」

「後から来てくれます！」

「兄貴！電車だ！乗り込め。」

三人転がりこむように電車に飛び乗る。

「セーフ…。」

「ネギ先生！アーニヤさん！前の車両に追い詰めますよ…！」

「まて…！」

「なんや増えとるやないか…：…しゃあないな…お札さんお札さんウチを逃がしておくれやす。」

その言葉と共に呪符から大量の水が溢れだす。

「わ…！つ！？」

「何この水！？」

「ハハ…車内で溺れ死んでまえ。」

「待てゴポボコポボボ…。」

「あぼぼ…こんな水を瞬時に出すたあ日本の魔法はスゲエ…：…！？」

(態勢が取れない……それでも！)

「斬空閃！！！」

剣閃は扉を割り千草のいる車両までも水浸しになる。

「アホな！水の中げぼげぼ。」

駅に付き車両の扉が開く。

同時に水と共に全員がホームに排出される。

「けほっ……何者が知らんがこのちゃんは返してもらおう！」

「ハハツ中々やりますな……しかし木乃香お嬢様は返しまへんえ？」

言つなり木乃香を抱えて走る。

「くっ……ここにも人払い！お二人とも行きますよ！」

「はいっ！」 「わかったわ！」

「ハッ……よう追ってくるわ……。」

「やっとフザケタ着ぐるみを脱いだか！」

「そやけどここでアンタらは仕舞や。最後のお札行かせてもらいますえ。」

「させるかつ！」

「お札さんお札さんウチを逃がしておくれやすっ！京都大文字焼き
！！！！」

ゴウツと巨大な“大”の字の炎が階段を埋め尽くす。

「くっ……。」

「並みの術者ではその炎は越えられまへんえ…ほな、さいなら。」

「行かせるか！」

「ネギ！」

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル！吹け一陣の風！風花風塵
乱舞！！！」

「なっ！？」

「桜咲さん！行って！」

「はいっ！……斬岩剣！！！」

「クマツ!?!」

ドンツと熊鬼が一刀両断される。

「そんなアホなっウチの熊鬼がつ!?!」

「行くよアーニャ!」「わかった!」

「白き雷!」「紅き焰!」

「ウキーーーーーッ!」

「猿鬼!?!」

猿鬼は姿を保つことが出来ずに爆砕する。

「このちゃんを返せーっ!」

千草へ向かって跳躍する刹那。

ガキッ

「なっ……くっ……」

空中で激突する二人。

刹那は後ろへ跳ねる。
が、敵は転がる。

(この剣筋…神鳴流かつ！)

「あいたたー。すみません遅刻してしもて……。」

パンパンと埃を払い立ちあがる。

白いロリータ服。いわゆる甘ロリを着て二刀を構えた少女。

「どうもー神鳴流ですー。おはつにー。」

「え…お…お前が神鳴流剣士…？」

「はいー月詠いますー。見たとこ貴女は神鳴流の先輩さんみたいですけど…護衛に雇われたからには本気でいかせてもらいますわー。」

「こんなのが神鳴流とは…時代も変わったな。」

「フツ…甘く見ると怪我しますえ。ほなよろしゅう月詠はん。」

「ではいきます。ひとつお手柔らかにー。」

間延びした喋りをする月詠は言い終わると同時に駆けだす。

「むっー！」

「えーい…やあ…たあ。とぉー……。」

刃のぶつかる音が響く。

(間延びした外見と喋り方の割に…出来るッ…。)

「ハハハッ伝統か電灯か知らんが神鳴流剣士は化け物相手用の馬鹿デカイ野太刀を後生大事に使てるさかいな小回りの効く二刀の相手をいきなりするのは骨やる？」

「ざーんがーんけーん。」

「くっ。」

「桜咲さん！？加勢するわよネギ！」

「おおっとそれはささへんで！」

「なっ！」

声を上げたと同時にネギは腹部に衝撃を受ける。

「ガッハッ…くっ…。」

「小太郎！後ろの術者は任せたえ！」

「おおっ！…先へは行かさへんで？お前は俺が相手や！」

「どいてくださいー！」

「アカン！西洋魔法使いにはここでオネンネしてもらっついでっ！」

「ネギー！」

「おつと嬢ちゃん動くなや？俺は女は殴らん主義やねん。」

ビシッと指が眼前に突き付けられアーニヤの腰は抜けてしまう。

そして小太郎はネギに飛びかかる。

「兄貴っ！肉弾戦は不利だ！距離を取るんだ！」

「わかつゲフツ…。」

「兄貴！」「ネギ！」

二、三回バウンドしてようやく止まる。

「くっ…ネギ先生！」

「よそ見してる暇はありまへんえー！でも…ああ！先輩ええわあ
ごっつうええわあ〜もうウチたまらへん…。」

「くそっ…柚木流…旋風せんぷう！」

「へっ…へぶっ！」

月詠が壁まで吹き飛ばされる。

しかし直ぐに立ち上がり、構え、刹那を牽制する。

「このちゃんをどうするつもりや…！」

月詠から意識を外さずに問う。

「んー？せやなー…まずは呪薬と呪符使って口を利けんようにして
上手い事ウチらの言う事聞く操り人形にするのがえーな…くっくっ
くっ…。ほな小太郎、月詠はん足止め頼んだで！」

「な…につ…。」

そうか。ならばここで死んでおけ。

突如天から声が聞こえた。

「誰やつ?!」

「ガアアアッ!?!」

「小太郎!?!」

突然激痛が小太郎の四肢を襲った。

「銃声!?!」

刹那は一瞬、銃声に気を取られた。

それを逃す月詠ではない。

「ざんてつせーん!?!」

「しまっ…!？」

確実に刹那の身体を両断する。

と思われた斬鉄閃は刹那に届かない。

逆に月詠が逆袈裟に斬られる。

刹那を庇い月詠を切った銀の影。

ソレはそのまま一足飛びに千草の懐に入り、刃を突き出した。

が、千草は“何か”に後ろへ引かれ刃の範囲から脱する。

二度目の命拾い。

「マズい事になったね…一旦引くよ千草さん。」

「よう…久しぶりじゃないかフェイト。フェイト・アーウェルンクス？」

「久しぶりだね…そして初めまして柚木宗一郎。」

千草を庇う様にフェイトは前に立つ。

しかし

「なんでアンタがそっちにおるんや!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

驚きと恐怖に染まっていたはずの千草が豹変したかの様に叫ぶ。

「千草さん？」

「……………？」

「なんでや?!なんでアンタがそっちに居るんや?!アンタはコッチの……コッチの英雄やないか!!!!!!!!!!」

「君は……君は誰だ。」

「そつやな……そやな……確かにアンタにとってはウチなんて記憶に無いかもしれん。……………ニヤンドマの前線近くの村、野戦病院。」

「まさかつ……。」

フラッシュバックするように記憶が再生される。

助けられなかった呪符使いの夫妻。残されたたった一人の……。

「今日の所は引かせて貰います……。改めてコッチへ木乃香お嬢様と一緒に来て下さい。」

「そついう事らしいよ?とりあえず今回は引かせて貰うよ柚木宗一郎。」

月詠も小太郎という少年もフェイトも千草も全て水に沈むかのよう
に消える。

後に残るは水の染みと血の染み、そして焦げ付いた跡だけだった。

61話：修学旅行一日目（後書き）

駆け足駆け足。

次回：修学旅行二日目

62話：戦いの後

フエイト達が去った大階段。

力無く佇む宗一郎に誰も声を掛ける事が出来ない。

そんな中、木乃香が目を覚ます。

「ふあああ…アレっ？ウチ寝てもうたん？」

「このちゃん！」

刹那がまず一番に駆け寄り介抱を始める。

「くっ…。」

「ネギツ！？」

木乃香の無事に安心したのかネギが倒れる。

ザッとシルバースキンを解除して戻ろうとした時、

「旦那！あの呪符使いと知り合いなのかよっ？」

「「「！！！！」」」

カモの言葉に宗一郎が足を止め、場が凍る。

「いや。」

少しの間と否定。

「おいおいおい！？それじゃさっきの話と違うじゃねえか！！」

「救った人間も殺した人間も多過ぎてイチイチ覚えていく訳が無からう？アルベール・カモミール、貴様は盗んだ下着を一枚一枚記憶しているのか？」

皮肉気な表情で言い放つ。

「げえ！」

カモは自身の罪状を知られていたと理解し奇声を発する。

「携帯は便利だな。すぐに連絡が取れる。」

その言葉を吐いて宗一郎は消えた。

「アルベール？」

「あ、アーニヤの姐さん？」

「さっきの答え

聞かせて貰えないかしら？」

「へくちっ。」

「このちゃん！」

「えへっ…ちょっと冷えてもーた。っひゃあ?!」

刹那は木乃香を抱えあげると、流石に飛ぶ事は自重したのか一目散に旅館へと戻っていく。

後に残されるのはネギとアーニヤとカモ。……そして遙か遠くで銃を構えた真名だけだった。

S i d e 真名

冷え切ったコンクリートの冷たさがシート越しに伝わる。

伏せてシトーさんの合図を静かに待つ。

「くくっ…まるで犬みたいじゃないか。」

尻尾があれば千切れんばかりに振っているのだろうな。

” 魔眼を使うな。”

そんな事を言われても正確にシトーさんのオーダーに答えたいじゃないか。

魔眼がユラリと静かに光を放つ。

と、

その時、合図があった。

既に照準は出来ている。風、問題無し。放てば中る。引き金を絞る様に4度。

放たれた4発の弾丸は的確に少年の四肢を撃ち抜く。

「血管と骨はちゃんと外した。パーフェクトだろシトーさん？」

さて、ご褒美を待とうじゃないかと銃を分解し収納する。

そして次に現場を見ると…。

「報酬3倍だよシトーさん。」

S i d e e n d

旅館の屋根の上。

一人夜風に当たる。

” 救った人間も殺した人間も多過ぎてイチイチ覚えている訳が無かるう？アルベール ”

そんな事は嘘だ。

救った人間も救えなかった人間も覚えている。殺した人間ですらある程度は覚えている。

天ヶ崎夫妻の遺児。

随分所か、かなり印象が変わっていて記憶と一致しなかったが……。

彼女が狙うとすれば

ナギの息子。ネギ・スプリングフィールドと連合側の人間。

だが何故木乃香を誘拐した？

連合側である麻帆良へ移ったから？

いやそれは無い。

詠春以下、京都呪術協会の上の方は知っている筈だ。

彼女の保護を請け負ってくれた鷹司老人も把握している。^{チグサ}

一度連絡を入れてみる必要があるか……。

それにフェイト・アーウェルリンクス。

姿形は変わっていたが

あの雰囲気、言動。

奴が狙うとすれば黄昏の姫御子。

木乃香は関係ない。

「夜風が気持ちいいでござるなあ。」

「長瀬か。」

いつから居たのか？

そんな事を思うぐらいに殺気も存在感も無かった。

どうやら本格的にショックを受けているらしいな。

「ニンニン。」

思うに長瀬は忍者である事を隠しているつもりなのだろうか？

追及しないうちのクラスの特殊性を差っ引いても忍者そのもの過ぎるだろう…。

「なにか用か？一人でトイレに行けぬ歳でも無いだろう？」

言ってから思うが、コレは所謂セクハラというものではないだろうか？

「手合わせをお願いしたいでござる。」

懐から静かに苦無を抜き出し構える長瀬。

いつも開いてるか開いてないか解らない様な目が開かれ、俺の挙動を見ている。

「授業もその真剣さと執念で受けて欲しい物だね。」

パンパンと尻に付いたであろう埃を払い立ち上がる。

そして…

と、構えるか構えないかの瞬間に長瀬は16人以上に分身する。

「ほういい密度だ。」

流石に感嘆の声をあげる。ただ身体一つ、技術だけでここまで辿り着くには相当の修練を積んだに違いない。

「甲賀中忍長瀬楓。参る！」

S i d e 天ヶ崎

「小太郎の傷は？」

「手加減されたね。三日目には動けるようになる程度の傷だよ。」

手加減。こちらの目的を知らなかったが故の判断やろうな……。ウチのあの言葉を聞かへんかったら出て来る気も無かった筈や。

「ほうか。そやったら明日は奈良や。こっちは休憩するしか無いやろ。」

「彼はこちらに来る事は無いよ。恐らくクライアントの方にも連絡が入る。計画は全て潰れたと思った方が良い。」

「皇子はん。アンタほんまは何者や？」

「……どういう意味かな？」

「皇子はんを見た時の反応が驚きやのうて、殺意やった。それも明確な。」

「そつだね。僕は皇子じゃない。クライアント達にソレを報告する

かい？」

いけしゃーしゃーと言いよる。

「報告した所で、あの人らは帝国が後ろに付いとる前提でやっとなのや。そこで皇子はんが偽物とわかつたらウチらは全員切り捨てられるわ。東への、ナギ・スプリングフィールドへの恨みをウチは優先しとる。アンタが実力ある言うんやつたら今更皇子やろうと無かるうとええわ。」

実力は……ウチらを壊滅させる程度の力は確実にもつとるわ。

「賢明な判断で助かるよ。」

「ちなみに……あの人が敵に回る事を知つとつたんかいな。」

「いや、驚きだったよ。」

そう言うて出ていく”フェイト”はん。

「狸め。」

解つとつてやりやがった。ハツ……ホンマに誰も信用出来ひんわ。あの人を相手にして全員が生きとる。これは奇跡と言つてもええ。気い引き締めんな。

S i d e e n d

「ん……んんつ。そーいちろー水、水、みずー。」

頭上に手をやるが水は置いていない。

仕方ないので宗一郎を呼ぶが…

シンツとした部屋。

寝惚け眼で宗一郎の布団の辺りをポテポテと叩き探る。

「居ない。」

うりゅつと瞳が潤むがそこは大人。

フラフラと立ち上がり水を汲む。

「宗一郎め……芸者遊び行くとは…。」

グイッと水を飲み干したフラフラと布団へ戻る。

湧いてくるのは静かな怒り。

そしてエヴァは全力で勘違いした怒りを抱き眠りについた。

63話・修学旅行二日目。一時の平和。

修学旅行・二日目

ホテル・嵐山

「……………」

「ぐくりっ。」

「亜子？大丈夫？」

「ハッ……。アキラ？ごめんウチちょっと……。」

「柚木先生を誘うんでしょ？」

「バツ…バレてるっ?!」

「多分ネギ先生の争奪戦で盛り上がるだろうから、その隙に誘うんだよ。それ逃すと不味いかもしれない。一番の難敵エヴァンジェリン先生は私が引き止めるからっ！」

「わ、わかった…う、ウチ頑張る！」

「よ、よろしければ今日の自由行動…私たちと一緒に行動しません

かー！？」

宮崎の声。

「え、えーとあの…わかりました宮崎さん！今日は僕宮崎さんの

ネギは5班と共に行くのか…。

生徒の護衛となるとどうしても分散する必要がある。

5班には木乃香に刹那、茶々丸までいる。

一応考えた結果なのだろうな。

まあ今日は仕掛けてこないだろう…。

あの犬耳少年の傷も少女剣士の傷も一日で治る様な傷では無い。

少女剣士の方はかなり深くまで斬った。あの傷では神鳴流の技は使えまい。

「さて…。」

「柚木せんせいうちらと周りませんかっ！」

適当に新田先生辺りと回って時間を潰すかと考えた矢先、スーツの裾を和泉に掴まれる。

お前達、スーツの裾好きだな。

「4班か…。」

5班以外襲われる可能性は限りなく低い。

むしろフェイトがいる時点で麻帆良が危険だな。

「だ、駄目ですか？」

うぐっ……上目遣いは反則だぞ和泉……。

「い、いや駄目という事は無い。しかし他の班員は了承して……。」

真名……そもそもこちらから目を離していない。

大河内。グルだな。エヴァを引きとめている。

明石も問題無し。

佐々木は……ネギ争奪戦に負けたか。

「……いるらしいな？それでは一緒に周らせて貰おう。」（エヴァ、5班の警護をそれとなく頼む。）

「（嫌だ。）」

「（おいつ!?!）」

くそっ念話を切られた。

アイツ、朝からどうもおかしいんだが……あの酒の影響か？

「ゆ、柚木先生？やっぱりその……。」

「いやいや問題ない。」

どうやらしかめっ面になっていた様だ……。

S i d e 真名

「柚木せんせいうちらとまわりませんかっ！」

さて……えらく強力なライバルが現れたようだな。

シトーさんは多少ロリコンの気がある。上目遣いにも弱い。

だが和泉はシトーさんが既婚者である事を知らない。

魔法関係者でも無いから説明は出来ないだろうが、おかげで自然と壁が出来る。

あとは何か間違いが起こらない様に私が腕を組めばお終いだ。

すまないな和泉、私の代わりに誘ってくれた事を感謝するぞ？

S i d e e n d

拝啓神様。

いかがお過ごしでしょうか？

こちらはとても空気が厳しいです。敬具。

どうしてこうなった？

4班とまわり始めて1時間。

和泉に誘われ

まあ暇を潰すには良いかと了承した。ここまでに間違いは無い筈だ。

明石先導の下、歩き始めた。

俺はゆっくり後ろを歩くつもりだったが真名に引つ張られた。

ここからおかしくなり始めた気がしない事も無い。

真名は堂々と俺の腕を取っている。

そして

和泉がスーツの裾を掴んでコチラを見ている。

大河内が後ろで凍りついている。

明石、佐々木はそもそも気が付いていない。

改めて言う。

どうしてこうなった？

裾を掴まれ、俺は立ち止った。

当然振り返る。

そうなる俺の腕を確保していた真名も後ろを見る。

そこから何故か俺を挟んで睨みあいだ。

遠くから修羅場だー！とか嬉しそうな声が聞こえたが確実にー

班。柿崎辺りだろう。
いいからお前達は奈良観光しろっ！と叫びたいがそれどころではない。

真名に好意を持たれている事は解っている。

が、和泉はどういうことだ？

結婚してからは特に一般人相手には自重に自重を重ねていた筈だが？

助けを求めて大河内を見るが

逆に説明を求める様な目で見つめられる。

「あー……明石と佐々木が行ってしまっぞ？」

”これはどういう事かなシトーさん？”

”どういことですか柚木先生？”

そんな視線が飛んでくる。

そこで天啓が降りてきた。

「！」

真名から腕をソツと離す。

和泉のスーツを掴んでいる手を離す。

そして二人と手を繋いでみる。

………む？

今のは天啓では無いのか？

和泉は俯いてしまっし、真名はえらく不機嫌である。

地雷か？地雷なのか？！

S i d e 真名

計算違いか。

まさか和泉がここで行動を起こすとは……。

完全に予想外だ。

軽く視線を飛ばすが……。

退かないか。

S i d e e n d

S i d e 和泉

誘えたー！

緊張と喜び。色んな感情が混ぜこぜやった。

アキラに感謝して、前を向いたら龍宮さんと柚木先生が腕を軽く組んだ。

一瞬眩暈がしたわ…。

まさかやった。

龍宮さんと柚木先生の間何かあると思ってたけど、流石にこの事

態は予想外や。

完全に落ち込んでもーた。

せやけど

「大丈夫だよ亜子！今諦めちゃ駄目だ！」

そう言うアキラに勇気付けて貰って、

必死で手を握ろうと……

裾を掴んだ。

全然アカンやんウチ！！！！？？？

S i d e e n d

S i d e 真名

「あー！……明石と佐々木が行ってしまっぞ？」

それどころじゃないだろう？

そう思っているとシトーさんは何を考えたか私から腕を振りほどくと手を握った。

同じく和泉の手も握った。

S i d e e n d

も、文句は出ないので
仕方が無い。俺にはこうすることしかできないのだ。
二人の手を引き大河内に声を掛け明石を追いかけるのであった。

S i d e 一 班

「まさかそんな手段で両方取るとは……流石っ！」

「うひゃー柚木先生大胆……」

「おーい……二人とも帰ってこーい……」

「あつネギ先生見つけたですっ！」

「くっ……こつちも見たいけれど向こつちも惜しいっ！」

「いや、観光は……」

「いくよくぎみー！」

「くぎみー言っなー……」

S i d e e n d

俺はこの後起こる問題を何も考えていなかったと思い知るのは
明石と佐々木が団子屋を見つけた時だった。

まだ日は高い。

団子が……ふむ。この状況では食べれんが、まあいいだろう。

「先生っ！こ、コレッ！」

なん……だ……と？

和泉が差し出す団子の剣。
そのまま食えと申すか？

というかそれは真名ならやりかねんと警戒していた……が、真名が
呆然としている所を見ると和泉がやるのは予想外だったようだ。

「あー……その、なんだ……ありがとう。」

先端から串ごと銜くわえて団子を頂く。

だ、駄目だ恥ずかしいとか最早そういうレベルでは無い。

和泉は言わずもがな、俺の顔も紅潮している事はなんとなく解る。
右手の方向からギリギリという音が聞こえている事は気にしない様
に……気に……。

チラッ

と、音源に目をやるが……

団子突きだしている真名。

。

銜えに行ったらそのまま刺されそうなのだが……。気のせいだよな？

「シトーさん。」

「ん？」

「はい、あーん。」

「ッ?!?!?!?!」

以降の記憶は無い。

どっと疲れた。

ロビーでグタツと疲れて倒れていると、同じくグタツとなったネギが帰ってきた。

傍に来るエヴァに声をかける。

「なあエヴァ、アレはどうなっている？」

「宮崎がネギに告白してな。……見ての通りオーバーヒートだ。」

「ハハハハ…それはまた難儀な…。」

ネカネは釘刺していそうだし、宮崎が告白したと言うなら本気だろう。

9、10歳にその板挟みは厳しいだろうな。

本来ならば生徒に手を出すとは！と注意する立場であるのかも知れんが……まあ俺が言える言葉では無い。

仮契約でもない限り自由恋愛でいいだろう。

「ところで宗一郎。」

「なんだエヴァ？」

「家族会議しようか。」

ゾクツと背筋が震えた。

ただエヴァの笑顔が怖かった。

「さて、どうして家族会議わかるな？」

さて、一体”どれ”だろうか？

昼の事なら覚えがあり過ぎて逃げたいぞ？

しかし…余計な事を言つて罪状を増やす事は無い。

「いえ、わかりません。」

「ほう…ほほうわからないと？」

逆に作用したか？いや、まだだ。

「何もやましい事はしていないから解らないな。」

「宗一郎、貴様結婚しておいて女遊びか？水も用意せずに私を放置して京都の夜を堪能したか？ええ？」

女遊びの所で思わず身体が揺れた事は秘密だ。
残念な事に心当たりが多過ぎる。

「水を用意して無かつた事は謝る！だが緊急事態だつたんだ！」

「ほう緊急事態？下半身のか？」

家なら踏まれてるんだろうなあとか考えつつ
大体だがエヴァの論点が解つた。

「エヴァを置いて行つた事は済まないと思う。余りにも可愛らしく
寝入っていたので気が引けたのだ。」

「かわつ…。」

「それに昨日の夜は瀬流彦がトチって木乃香を誘拐され、それを奪

還しに行っただ。」

「…………ツ！」

「詠春と爺の仕組んだ茶番だと思っっている所があったので起こすのは酷だと思っただ。行かないという選択肢もあったがそれでは後から刹那に何と嫌味を言われるか。つまり仕方が無かったんだ。断じて芸者遊びなど行っていないし、そもそもしたことがない！」

「そうか……。うむ、疑って悪かったな宗一郎！」

一つ、大きな嘘を吐いたが……

今火消しをする事が重要だと俺は思う。

そう俺は決して本国でキャバクラなど行っていないし、こちらで詠春と芸者遊び所か巫女遊びをしたことなど無いのだ。

大体誘う人間が悪いのだ。社交辞令なんだから仕方が無い。

Side ネギ

……み、宮崎さんに……告白されちゃった。

奥ゆかしいと言われる日本の女性に……こ、告白までされてしまった以上、英国紳士としてそれなりの責任を取らないと……！？

“ いいネギ？先生と生徒はそういう関係になっちゃダメよ？”

しかし姉ネカネの声がりフレインする。

うわぁー。。。ダメだぁー。。。僕先生失格だー。。。。

S i d e e n d

「で、アレはどうするんだ？」

「知らん。まあ頼られれば男として言ってる言葉はあるぞ。」

「いや、それは胸を張るところなのか？」

64話・修学旅行二日目、恋は戦争

京都 旅館 嵐山

端的に言おう。
魔法が朝倉にバレた。

「……………少年。」……………ネギ。「……………ネギ先生。」

左から順番に俺、アーニヤ、刹那である。

「はい……………。」

「何故、よりによって、朝倉に、バレるんだ君は……………」

「彼女にバレるって事は世界にバレるって事じゃない……………ネギ、オ
「ジョヨになったらちゃんとお飼ってあげるからね……………」

「そんなあああ……………」

そう……………ネギが猫を助ける為か何かで朝倉にバレた拳句更にもう一度
目の前で飛んだ。
どう弁護しろと？

「お……………いネギ先生……………」

す朝倉さん!」

「……………本当にそのつもりなのか朝倉?」

「勿論だつて柚木先生!報道関係に味方が一人ぐらいいた方がいいつしょ?たとえば……………ほら、こういう写真が公開される事も防げつつて訳よ。」

「むっ……………」

明日菜が麻帆良に残つて処理している筈の写真がそこにはあつた。

「フィルム無しの現物だけださ……………。ソレ私が胸にしまつておかないや学園祭辺りに大公開されちゃうところだつたんだよ?」

「……………はあ。」

これは脅しだぞ?

「どうしたんですのネギ先生、柚木先生?」

「あ、皆さんお疲れ様です。お風呂あがりですか?」

「実は今、朝倉さんと仲良くなつた所なんですよ。」

「そーそー。柚木先生とも…ね。」

(なっとなな…なかよくー!?)

「ちよつ…ネギ先生それは…。」「柚木先生っ!？」

「と、とにかくそろそろ就寝時間だな?皆、早く班部屋に戻る事!」

「えー!」

「あー…そろそろ新田先生の巡回が始まる時間だったような気がするんだ。」

「ひっ!」「戻りますわよ!」

雪広達が部屋へと逃げていく。

「朝倉、くれぐれも余計な事はするなよ?」

「はい!」

本当にわかっているのか?

30分後。

キヤーーーーーッ!キヤハハハハ!キヤッキヤッ!ドタバタ、ドンチヤンドンチャン。あははは

と流石に騒ぎ過ぎだろう……。

「コリア3A!!!いーかげんにしなさい!!!まったくお前らは昨日はトラブルがあつたとはいえ珍しく静かだと思つてれば……いくら担任の柚木先生やネギ先生が優しいからといって学園広域指導員のワシがいる限り好き勝手はさせんぞ!!!」

「これより朝まで自分の班部屋からの退出禁止!!!見つけたらロビーで正座だ!!!わかつたな!!!」

「……えー………っ!?ロビーで正座あ………?」

新田先生の怒声。

にわかに静かになる旅館。

昼の精神的な疲れもあつて俺はすぐさま夢に落ちた。

暗く沈む3-A

だがソレで終わる様なクラスであつたか?いや否だ。
遂に朝倉が動き出す。

「名付けて“くちびる争奪!!!修学旅行でネギ先生や柚木先生とラブラブキッズ大作戦”」

おおっ…と、ざわめく声を朝倉は鎮める。

「ルールは簡単。各班から二人ずつを選手に選び、新田先生方の監視をくぐり、旅館の何処かにいるネギ先生か柚木先生の唇をGET

！妨害可能！ただし武器は両手の枕投げのみ！上位入賞者には豪華賞品プレゼント！なお新田先生に見つかった者は他言無用！朝まで正座！死して屍拾う者無し！！」

「きびしっ！」

「見つかった人は助けないアルか！」

「よし各班10時半までに私に選手二名を報告！11時からゲム開始だー！！」

「「「「おーーーーーっ！」「」「」

Side 朝倉&カモ

「フフ…どう？うまくいったでしょ？」

「さすが姉さん作戦通りだぜ！」

カモが朝倉の胸元から出て来る。

「てゆうか何処に隠れてんの？ヒロいなアンタ。」

「いやぁ面目ない。」

Side end

「はー…もうすぐ11時か…今日も大変だったなあ…」

「ネギ、周囲の見回り行ってきたわ。」

「特に異常はありません。結界も強化しておきました。」

「そついや…何かカモ君も結界貼ってたえ？オコジヨ魔法かなあ？」

「じゃあ次は僕がパトロールに行ってきます。なんだか変な予感があるんです。ここにいたら大変な事になりそうな…」

「言われてみれば確かに異様な気を感じますね。」

「でもこんな時間にネギがいなくなったら拙いんじゃない？」

「そうですね。では身代わりの紙型を貸しましょう。」

「身代わりの紙型？」

「ネギ先生ー？そろそろ寝ましたかー？」

アーニヤは隠れ、刹那と木乃香は瞬時に気配を絶つ。

「あつ…しずな先生。今から寝る所です。」

「生徒の見張りは私たちに任せて下さいな。ネギ先生は10歳なんですから皆と一緒に寝てくださいね。」

「は、はい…。」

S i d e e n d

一班

鳴滝姉妹。

二班

古・長瀬。

三班

雪広・長谷川。

四班

佐々木、龍宮。

五班

宮崎、綾瀬。

「さあやる気0の千雨選手に対してネギ先生への執着と偏愛が周知のいいんちょ凸凹コンビ！一方バカレンジャーから参戦のフェイ選手と楓選手も体力的には侮れない！そして普段馬鹿騒ぎには参加しない龍宮選手の参加する四班は注目だ！！以下、未知数の鳴滝姉妹！大穴の図書館組！さあまだトトカルチョ参加間に会っよー！詳細は私までー！」

「さて、これは報告すべきなのでしょうか？」

そう思い悩む茶々丸を尻目に

「では…ゲーム開始!!」

戦いの火蓋は切って落とされた。

一方その頃、ネギは紙型を残しパトロールへ
そして柚木宗一郎は疲れて完全に眠りに落ちていた。

「あれっ?! 龍宮さんどこいくの!?!」

「佐々木悪いが一人で頑張ってくれ。私は柚木先生の所へ行く。」

「えええっ!?!」

『おおおお!? 四班開始一分足らずで分裂だああー!?! しかしオ
ツズは下がらない!?!』

「はっつ…ひ、一人は不安だよ…ッ! いいんちよ!?!」

『三班、四班エンゲージ!?!』

雪広の枕と佐々木の枕が互いに炸裂。

「ぶっ!」「もっ!」

『しかしいいんちょは倒れない！いきなり波乱の予感だああああ！』

「……………妙な殺気がするな。」

流石に目が覚めてしまった。

「二時間ほど眠れたか……………」

エヴァを起こすと悪いし警戒を兼ねて旅館内を見回ろうかとギィと音鳴りする扉を開け廊下へ出る。

む……………アレは長谷川か？

「おい長谷川…何をしている？」

「げっ…柚木先生!？」

逃げようとする長谷川の襟を掴む。

「長谷川、どうして逃げる？」

「いやだって…かくかくしかじかで…。」

新田先生が出した”ロビーで正座”その為俺から逃げようとしたらしい。

逃げてても無駄だろうに…。

「ああ…俺はその話を聞いていないからな。知らなかったと言う事で見逃してやるう。」

「恩にきるぜ先生。」

「しかし…：…なんというか薄ら寒い気配がするんだが、理由を知らないか？」

「あー…：…テレビ着けたら解ると思つぜ？」

「そうか…：…では用心して部屋に帰れよ？」

「おう。」

さて…：…テレビか
チャンネルを順々に回していく。

『おっと！ネギ先生の部屋の前で一班、二班、五班の乱戦だあああ
！…！…』

「は？…：…え？…：…くちびる…：…争奪戦…：…？ネギ先生や柚木先生とラブラブキッス作戦…：…だ…：…と？」

思わず目を擦る、眉間を揉む。

文字は変わらない。

「何が目的だ？」

馬鹿騒ぎにも程つてもものがあるだろうに…。

「シトーさん。」

「え？」

後ろから聞き覚えのある声を掛けられ振り向く。

「むっ……………ぷはっ……………待て、真名、何をしている！」

『四班龍宮選手濃厚なキスを決めた様だあああああああ！』

生・中・継？

「ふう…とりあえず作戦は完了した。」

「何を考えているんだお前は……………こういうアホな祭りに、いつもは参加しないだろう？」

「今回は別さ…仮契約の魔法陣上での唇争奪戦。負ける訳にはいかないからね。」

「ばくていおー…だ…と？」

「感謝してほしいねシトーさん？私以外だと一般人が来るかもしれないよ？」

「いや一般人なら逃げ切れるが……仮契約だと？」

「ああ。」

「……ロビーで正座している。朝倉は三班だったな……？」

「わかったよ。もう少しリアクションが欲しい所だけどね？」

さあ…嬉しいタノシイ狩りの時間だ。

「そこお……何をしている？」

「ちよっ…お姉ちゃん柚木先生ですう！」

「逃げるよ史伽！」

ギチリ……。

「はうつ！？」「足にシートが！」

シートが二人の足首に絡みつき捕縛する。

ズルズルと力づくで引き寄せ首根っこを掴む。

「二人ともロビーへ行け……この馬鹿騒ぎに参加している者に告ぐ、主犯・朝倉逮捕に協力したものは正座を免除してやる。逃げれば地獄の果てまで鬼ごっこだと思えよ？」

カメラに向かって宣告する。

ハルナはテレビ越しにそれを見て
慌てて携帯電話を取る。

「ちよっ…ゆえ、のどか！引き揚げた方がいいって柚木先生が本気でブチ切れちゃったみたい！！」

「それは本当ですかハルナ?!」

「大マジよ！上からどんどん降りて来てる！」

「と、言う事はまだ時間があるんですね！」

「ちよっゆえ!?!ゆえ?!」

Side 朝倉&カモ

「そ、そろそろズラかるよカモっち！」

「おうよ！多少しよっぺえ拳句に目的は果たしてねえけれど命あつての物種だぜ！」

朝倉とカモは空き部屋から逃げ去る

つもりだった。

金色の悪魔が目の前に立つまでは…。

「やあ朝倉、下等生物。なんだあ？いい羽振りじゃないか？」

真っ白な肌にニタリと笑う赤い口。表情のほとんどは見事な金髪で隠れ…。

その様は正に魑魅魍魎・妖怪の類。

「え、えヴあんじえりん先生……？」

「良い度胸じゃないかあ…なあ…朝倉あ？」

S i d e e n d

「ね、ねえ！ネギ先生が沢山いるみたいに見えるんだけど…」

「ちよつと朝倉！コレどついつこ…。」

生徒にキスを迫る偽ネギ。

しかし…。

宗一郎がソレを容赦無く爆風ごと叩き潰す。人によつては拳の視認すら難しい程の一撃。

「古、長瀬。」

「わ、わかつたアル。ロビーに行くアル。」

「ロビーに行くでござる。」

二人は背中に嫌な汗がダラダラと流れる事を感じつつも素直に必死で頷く。

再び宗一郎がカメラに視線を向ける。

「一班確保。二班確保。四班確保。残りは速やかに出頭しろ。繰り返す。残りは速やかに出頭しろ。」

「や、ヤバいつて……コレ。」

「報告すべきでしたね。……ハルナさん。」

「なに茶々丸？」

「背中のココを押して頂けませんか？」

「べ、別にいいけど……。」

首を傾げながらもハルナは茶々丸の背中中の指定された場所を押す。

「ぼちっ。」

「ぼちっ？」

コテン。

無言で横に倒れる様に眠る茶々丸。

(に、逃げた――――！?)

S i d e あやか

困りましたわね…。

勢いづいて参加してみましたもの……。

魔法関係ですわね。この状況。

「いいんちゃん…ちゅーしましょう。」

さて、明らかに偽物ですわ。

色々グラグラ来ますが、本物のネギ先生ならばこのセリフはあり得ませんわ。

しかし魔法を使おうにも

まずはコレを覚えると嫌な笑顔で渡されたラテン語とギリシャ語の辞書と教科書。

そして初級魔法の本。
しかも生放送中。

「ネギ先生？」

「いいえホギです。」

ええ。偽物ですわね。

「雪広流合気術、雪中花。」

非常に、まことに惜しいですが……ですが、紛い物に渡せる層は有りませんわ。

偽物^{ホギ}は吹き飛ばかと思われたが

ボンッ

「まさか…爆発するとは…雪広あやか、不覚です…わあ。」

雪広あやかリタイヤ。

S i d e e n d

「ネギ本人は居ないのか……。」

二体ほど潰したが本物は居ない。
紙型からして刹那が渡したものだろっな。

しかし刹那、木乃香、アーニヤは居ない。どういう事だ？

Side 刹那他

「あーええお湯やなあ。」

「そうですねえ。」

「ちょ、二人ともこれってバレないの？」

刹那、木乃香、アーニヤは唇争奪戦が開かれている最中、夜風呂を堪能していた。

「大丈夫やえアーニヤちゃん。そこら中に人払いの符と結界が張り巡らしてあるから…来るとしたら師匠ぐらいやねえ。」

「ですが師匠は余この程度の規則違反は余り気にしませんから。」

「……それいいの？教師として…。」

「ええんやない？おかけで広いお風呂を堪能出来るんやー。」

ぷかーとお湯に浮かび刹那の胸、目掛けて流れていく木乃香。

胸を両の手で鷲掴みにする。

「ひゃああ？！」

「んーまだちつぱいなあ…。」

反転してアーニヤへ向かう木乃香。

「こ、木乃香さん！？ひゃああ！」

「んーアーニヤちゃんもちつぱいなあ…。」

非常に揉み足りないと言った調子で手をワキワキとさせる木乃香。

女三人寄れば姦カシマしい。それを体現しつつも彼女達の夜は更けていく。

S i d e e n d

途中昏倒している雪広を発見し、引きずりながらロビーへ向かう。

「あつ 柚木先生！」

ロビーへ入り一番初めに声を掛けてきたのは本物ホントだった。

「今しかないのですのどかつ！」

「綾瀬さんと、宮崎さん?!」

しまった…!!

「宮崎、綾瀬、ネギ。お前達は空気椅子。他は朝まで正座だっ！」
生徒達は文句の声をあげる事も出来ず従う。
主犯、何としても朝倉とカモを見つけないければ。
…仮契約の強制破棄も考えなくてはならない。

「宗一郎。探し物か？」

後ろからエヴァの声がかかる。

「ああエヴァ。朝倉とカモを知らないか？」

振り向きつつ俺は言うが、
エヴァを見て固まった。

カサツとした朝倉。縄でグルグル巻きにされ真っ青なアルベール。
カモミール。

そしてえらくツヤツヤしたエヴァ。

ごっそり吸いましたねエヴァさん。

「あー…エヴァ、ソレはなんだ？」

「主犯だ。」色々な意味で”絞つておいた。

何故だろうか。

怒りよりも何よりも憐れみが勝つたのは…。

Side 千雨

「……………今までで一番幸せかもしれないぜ。」

千雨は本来自分が居たであろう映像を見て、そして一息吐いた。

「はい。」

目の前に差し出されるホットミルク。

「私にか？」

「ええ。」

笑顔で差し出す那波。

「……………ありがとうよ。」

少し躊躇いながらも受け取る。

一口。

丁度いい温度の甘い牛乳が口の中に広がる。

「…うまいな。」

素直な感想が微笑と共に漏れる。

「ふふ。」

那波は優しく微笑んだ。

S
i
d
e

e
n
d

65話・修学旅行三日目。闘争。(前書き)

タイトル訂正 10・19 7:32

65話：修学旅行三日目。闘争。

仁徳紀六十五年、飛驒国に一人有り。

宿讎と曰ふ。其れ為人、體を壱にして両の面有り。

面各相背けり。頂合ひて頂無し。各手足有り。其れ膝有りて臆踵無し。

力多にして軽く捷し。左右に劍を佩きて、四の手に並に弓矢を用ふ。是を以て、皇命に随はず。人民を掠略みて樂とす。

是に、和珥臣の祖難波根子武振熊を遣して誅さしむ。

日本書紀。

Side フェイト

「で、どうするんだい千草さん？襲撃するとしたら今日しか無いけれど。」

隠れ家の一つ。千草さんの後ろに立って声を掛ける。

「本来の計画通りリョウメンスクナを使わんとしゃあないやろ……。」

「駄目だね。」

「は？」

驚き振りかえる千草さん。

「柚木宗一郎なら不完全なりョウメンスクナ程度、一分もかからない。」

完全復活した状態ならば何とか戦える筈だけどね。
それまでを足止めする手段が無い。

拳句に闇の福音までいる。生半可な足止めじゃ結果は見えている。

「なんやて…。」

まあ信じないだろうね。

僕等もその脅威を完全に把握した時には既に手遅れだったよ。

最大の失敗はテオドラ皇女に手を出した事だね。

「直接は見た事無いけれど、彼は地上に太陽を創った。」

「そんなアホな…。」

「オステイア近くに彼が作ったクレーターがある。大地が融解した跡と共にね。」

あくまで公式には新式魔法使用の痕跡という事になっているけれど…。
人の口は塞げないものだね。

アレを見たアリアドネーの騎士から除隊者が出た事は言うまでも無い。

そして組織を離れた人間に緘口令は効きにくいものだ。

「対吸血鬼装備は…。」

「麻帆良学園で対吸血鬼として名を馳せた部隊が壊滅した。」

全くMM元老院も迷惑な事をしてくれた。

本来ならこの作戦や、僕等の最終目的の為に使えたというのに……。

「ほんならどないせい言うんや。」

ドンと机を叩き憤る。

「僕は増援を用意する。それまで決して単独で掛からせない様にしたい。まあ足止めぐらいはいいけれど……。」

「わかった。本山前に罨張つとくわ……。確かあの人の転移法は複数は連れて行けんはずやからな。」

正直彼女の心が揺らぐのが一番の懸念だった。

しかし……彼女の憎悪の炎は思ったより深く濃いモノだったようだ。

「それじゃ。」

狩籠の丘、酒吞童子、鞍馬。京都中の悪鬼悪霊・魍魎魍魎。

流石に制御は難しいだろうけど……足止め出来るならその程度の代償、実に軽い。

完全復活したスクナならば落とす事が出来るかもしれない。

S i d e e n d

「今日は自由行動だ。集合時間までに全員戻る事！緊急事態は各先

生方の携帯に電話を入れる事！いいな？」

「……は……い！……」

返事をするなり生徒は班ごとにバラけていく。

全く。明け方まで正座していた連中とは思えんな。

しかし…

宮崎の仮契約カード。

DIARIUM EJUS…通称イドの絵日記。よりによって魔導士シャントトのマスターピース。

正直な話

破棄するには惜しい性能だ。

挙句に朝倉が賞品として勝者の姿が描かれた綺麗なカードなんて言ってくれたお陰でコピーカードを渡す羽目になってしまった。

まあ呼び出す呪文も解らなければ使えまい。

麻帆良で強制破棄を考えるか。

しかし木乃香や刹那と契約しなくてよかった。

あの段階でネギを殺してしまう所だった。

「それじゃ柚木先生、僕は大阪へ行く生徒達の護衛に行くよ。」

「頼んだぞ瀬流彦。そちらに危険は無いと思いたいんだがな……。」

政治的な都合で”完全なる世界”について話せないのが苦しいが…。瀬流彦は納得してくれた。

やはり持つべき物は友なのだ。そう思う。

「それぐらいの方が僕には向いてるさ。」

さて…昨日は色々都合が悪くてかけられなかったが、鷹司老人に電話でもかけるとしよう。

もしかしたら千草の事を何か知っているかもしれん。

「あの柚木先生。」

携帯を取り出そうと懐に手を入れた時、ネギが話し掛けてきた。

「ネギか。君は君の務めを果たしたまえ。俺は別ルートで本山に入る。」

「はいっ!」

茶番とは言え

反東の連中を抑え込むにはいい材料になる。

ネギが走っていく姿を見送り電話を手取る…が。

「あの…師匠。」

思わず溜息が出る。

「そんなに心配ならお前と木乃香でネギに付いていけ。五班の方は巧く茶々丸が丸めこむだろうさ。」

「ありがとうございますっ!」

全く。

いつまでも俺に聞いてるようじゃ巢立ち出来ないぞ？

己が信念に従え。

自ら決めた信念で動くなら俺は何も言わんぞ。

そうだな……それが出来たら柚木流の真髓をお前に教えてやるよ。

携帯を手に取りアドレス帳を検索する。

ブルルルという単調な呼び出し音。

数コールして電話が取られる。

「柚木宗一郎という者だ。大御所殿は御在宅かな？」

侍女に取り次ぎを願う。

「ワシじゃ。何かあったのかのう？」

「千草の件なんだが……。」

「おおお、彼女か。」

”彼女”？

「麻帆良の修学旅行中という事は把握しているでしょうっ、うちの生徒が彼女とその仲間に誘拐されると言う事があります。」

「なんと……！」

「彼女の居場所に心当たりはありませんか？」

「いや……まさか反東側になっておるとは……。」

「把握しておられないので？」

つい語気を荒げてしまう。

「う、うむ。もう成人したし……彼女の自由だと思いい放任しておいたわ。」

そう……か。

そうだよな。

今の姿を見ても余り歳を取っているとは思わなかったが……あれから20年以上経っている。

「徒党の中に神鳴流剣士、月詠というものが居たのですがそちらから確認出来るでしょうか？かなりの使い手でしたが。」

「月詠……さあ……ワシらは余り神鳴流に詳しく無いから。」

「そう……ですか。」

確かに主従関係があるとはいえかなりの人数がいるからな……。

一段落し適当に挨拶して電話を切ろうと考えた時だった。

「おお、そうじゃ柚木殿。そろそろ……木乃香嬢を関西呪術協会に返しては貰えんかのう？」

鷹司老人はそんな事を言い出した。

「返すも何も詠春に頼まれ預かっているだけです。」

「これはまだ他の者には秘密なのじゃが、帝国の皇子殿達と木乃香嬢にお見合いをして貰いたいのじゃよ。」

「は？」

目が点になる。

「柚木殿が皇帝になるであろうことはワシらも把握しておる。ならば本来皇帝になるはずだった皇子達が不憫であろう？そこで西洋魔法と東洋魔法、魔法世界とこちらの世界の友好を次の世代で行おうではないかと…な？」

つまりは皇子の誰かを呪術協会の長に据えて色々な問題を一挙解決とするわけか。

もしくは傀儡として自分が返り咲くか。

「しかしそれでは木乃香の意志を強制する事になるのでは？」

「いやいやそう語気を荒げんで欲しいのう。何も無理矢理と言う訳では無いわ。見合いというだけでもかなりの成果では無いかのう？」

「わかりました。」

妙な熱意だ。

「おお！解ってくれたかのう！！それでは…。」

「木乃香と刹那に決めさせます。」

「ッ！穢れ…ゴホン。二人を共に鍛えているのかの？」

一瞬詰まり、漏れた言葉。

「ええ。木乃香の護衛となるべく育てられたのですから引き離して鍛えるのは非効率でしょう？」

聞こえなかった振りをして話を続ける。

「う、うむ。お主の方からも薦めてくれる事を願うぞ。」

「それはお約束できません。まだまだ刹那は己が信念が貫ける位置には居ません故。」

何かを言う前に電話を切る。

確信は出来んが

鷹司老は引退したとはいえ呪術協会生え抜きの呪符使い。

元々は帝国についていた派閥の代表。

本来ならば長になっていてもおかしくは無かった人材。

反東派であつてもオカシクは無い。

かなり臭うな…。

信用はしない。なあに…いつも通りだ。

Side ネギS

気が付いたらアーニヤと一緒に五班に捕まっていました。

「ごめんなあネギ君。ゆえを振り切れへんかったんやあ。」

「い、いえ大丈夫です木乃香さん。むしろお二人と一緒に来てくれるのは凄く嬉しいです。」

「ちょっと？私もいるんだけど？」

「も、勿論アーニヤと一緒に来てくれる事も嬉しいよ?!」

どうやって抜けよう。

「おーいネギ君！何してんの？」

「い、いえ何でもありませんよハルナさん！」

そう何故か僕たちはゲームセンターという所にいます。

麻帆良にはこういう所が無かったので凄く新鮮です。

Side end

さて、詠春以外信用出来ない時点で想定していたルートでは本山へ入れないな。

山を幾つか走破すればいいかと思案しつつ京都市内を歩く。

そんな時、少し前の方に雪広を含む三班が見えた。

ブツン。

「あらあら？」

鈍い音が鳴り、那波の鞆の紐が”切断”され落ちる。

一般人にも手を出すかよ…。

「大丈夫か那波？」

落ちた鞆を拾い上げ那波に手渡す。

「あら？ 柚木先生。」

「おっホントだ！」

那波の声にまず朝倉が反応し取り囲まれる。

「先生、私達今から映画村に行くのですが…。」

雪広の控えめな誘い。

「邪魔ではないかね？」

「大丈夫だって！」

控えめに断ろうとするが朝倉に強引に俺を連れて行くところ。

………何故びんぴんしているのか疑問だぞ？

「いやしかしだな…。」

「……………（行く？）。」

ザジが腕を持つ。

「わかった御供しよう。」

生徒達の一番後ろに回る。

キンッ

金属が鋭く跳ねる音。

これで計21本。

神経がすり減りそうだ。

「あっ！アレじゃない!?!」

映画村を発見して声をあげる朝倉。

ザクッ

朝倉の背中を狙った棒手裏剣を腕で受ける。

刃を抜き、そのまま投げ返す。

スーツにサングラス。まあ何とわかりやすい不審者だ…。

胸に刺さったが致命傷では無いだろう。

映画村

なぜ……？

なぜ新撰組の服を着せられている？

「いやあ御客さん似合いますね！。剣道か何かしてはります？」

「はあ…まあ。あつ…模造刀は必要無いです。」

ココへ入ってから飛び道具は来ていない。

外へ出ると……。

「おお。皆、よく似合っているぞ。」

町娘や御姫様、何故かブンヤ風と……実に似合っている。

「あらあら先生も良く似合っていますよ。」

「ありがとうございます。」

仮装したまま観光と洒落込む。

「この御紋が目に入らぬかー！」

各施設では劇や、時代考証が開かれ

道では突然殺陣が始まったりと

エヴァも呼べば良かったな…と言ってもアイツは姫路城に行っちゃ
ったしなあ。

帰って来る気無いだろ…。

忍者館から出ると突如黒装束のいかにもな連中に囲まれる。

「その御姫様を我等に渡して頂こうかっ！」

「なっ……。」

「ここではお客さんを巻き込んで突発的な劇が行われるそうです！」

興奮したのか村上が声を出すが：ああ確か演劇部だったな。

朝倉や長谷川、村上はキヤーキヤーと観衆巻き込み型の劇だと思っているらしい。

が、実戦だ。

芸人がこんなピリピリとした殺気は放てまい。

「断る。」

「邪魔立てするなら斬り捨てる！！」

断るや否や太刀を抜き切りつけて来る。

その刃を掌と拳で折る。

「馬鹿なっ！？」

観衆が集まってきたているが劇だと思っている以上、不信心は抱かない。

そう

模造刀ならば折れても曲がっても違和感を感じない。

そのまま腹に拳を突き刺す様に放つ。

吹き飛び、二転三転してようやく止まる。

観衆がザワリと声をあげる。
すげえだの

糸が見え無かっただの。

しかし…こちらは無手。向こうは真剣。

普通の戦法では劇では無いとバレてしまう。

どうする!?

「いよっ！兄ちゃんやるねっ！」

酔っぱらいか、観衆の一人がこちらへ模造刀を投げ渡す。

「はあああっ！！！」

模造刀と舐めてかかった男が突っ込んでくる。

「ふっ。」

擦れ違いざまに抜刀、腹に決める。

振り向き首に一刀。

「ガッ…。」

男は呻いて崩れ落ちる。

残り二人。

ジリジリと擦り足で挟まれる。
斬り捨てる訳にはいかん。
血は駄目だ。

しかし剣の腕も拳の腕も此方が上。

「キエエエエエー!!」

「ハアアアアー!!!」

二人同時。

片方の振り上げた腕の内に入り込み背負い投げを掛ける。

「なについ?!」

頭から落ちる寸前に頸椎に蹴りを入れ投げ放す。

仲間を避け体制の崩れた所へ走り込む。

剣先を合わせ刀を宙へ飛ばす。

呆然とした顔

鋭く模造刀で首を打つ。

「かはあ…。」

模造刀を鞘に納めた時、ようやく初めに殴り飛ばした男が立ち上がる。

「退けっ！退かぬのならば次は斬り捨てる!!」

声を張り上げあくまで劇だと演出する。

さて、劇に見せ掛けるつもりならば退くのが定石。

「くっ…覚えていろー！」

一人、仲間を置いて逃げ……………る事は出来なかった。

馬車から降りた女に斬られ橋の下へ落ちる。

「おひさしぶりですー！」

異国情緒溢れる姿の月詠。

まさか俺の方へ来るとは……………な。

「あんたが柚木っていう人でええのんかなー？」

「そうだが、何の用だ？」

間が抜けた京都弁の様なモノ。

「勝負。勝負しましょー。センパイに妙な技教えた人とやりあいたいんですー！」

「わかった。」

「ほんなら12時、日本橋で御待ちしてますー。」

そう言つて颯爽と馬車に戻っていく。

あの少女、常軌を逸している。

断れば無差別に斬る。麻帆良の生徒も一般客も女も子供も関係なく斬る。斬りたい。

そうあの眼が言っていた。

「あの……先生？」

那波が何かを察したのか声を掛けてくれるが……。

「問題無いさ。どうやら殺陣の腕を見込まれたらしいな……少しチャンバラごっこをして来よう。」

Side 長谷川

すげえ斬り合いだったぜ。

こついうのを殺陣って言うんだろうな。

映画村なんてシヨボくてダサイと思つていただけだよお……。

…カッコいいじゃねえかよ。

しっかし

柚木先生ってマジで強かつたんだな。

明らか忍者とか格闘バカの言う事もあながち間違いじゃねえって事か。

即興であそこまでやっちまうなんてよ。

S i d e e n d

日本橋

「お待ちしてました！」

先程の恰好で二刀を抜いた月詠。

こちらも刀は用意してある。

同じく抜く。

予告したせいもあってか、かなりの人ばかり。

迂闊な技は使えん。

「京都神鳴流 月詠です！」

「柚木流：柚木宗一郎だ。」

互いに名乗り合う。

まず仕掛けたのは月詠。

二刀を受け流し、こちらからも何合か打ちあつ。
そうして数度刃を合わせ離れる。

腕は刹那より上だな。

太刀の刹那ではこの二刀、苦戦するだろう。

興奮はしない。

冷静に、冷静に動く。

「ええわあ…センパイに妙な技教えよつた邪魔者や思つたけど…
アンタもええわあ。」

恍惚とした顔。

まさしく剣鬼。

「傷はどうしたのかね？」

「くふふ…。お護符ちゃんが代わりに斬れてくれましたー。」

ギリツと鏝迫り合いの音が鳴る。

「いや、内臓にまでキツチリ通した筈だが？」

背骨まで断つ斬撃を内臓までで止めた護符は優秀だと思う。

俺も甘かった。

昔の様にその後ろにあるものまで斬るつもりでやっていたれば殺せた。

「へえ……兄さんホンマに強いんやっ！ざーんがーんけーん！」

突き離してからの斬岩剣。

避けるが斬り込みはどんどん激しくなる。

仕方あるまい。

下に構えた刀を後ろへ引く。

途端に立ち止まる月詠。

あくまで技を見る気か。

刀の峰で石を弾く。

狙うは右目。

更に弾く動作と同時に斬り上げる！

「っ！」

更にトドメとばかりに足で砂を蹴り上げ顔面を執拗に狙う。

石は刀で弾く事も無く手で払う事も無く

首だけを曲げて避ける。

切り上げは小太刀で止められ

砂は月詠の顔を襲った。

必殺を用意するが

「ちいっ！」

片目を開けたまま砂を受け、守った目を代わりに開ける月詠。

「小賢しい技が多いですなあー。」

「君に本来の技を見せたくないものでね。」

技を盗もうとしている。

さもなければこの一連の流れ、後ろへただ下がれば良かった。

「そこーなにをしているー！」

係員か。

これだけ騒いでいればまあそうなるのは必然。

初めから勝つ気は無かった様だな。

賢い狂人と言った所か。

「おっと時間切れみたいですー。兄さんや無くてセンパイの腕に聞きますわー。」

「逃がすかつ！」

「ひゃっきゃこおーー！」

逃げる月詠を追おうとするが符がバラまかれ無数の魑魅魍魎が出現する。

月詠の逃げようとする背中。

「悪いが…君にはここで舞台を降りて貰う。」

…君は危険だ。

「トオツカミ エミタマエ アマテラスオオミカミ オリマシマセ。

」

咳く文言。

ここは日本、それも京都。

俺が本来の俺として戦える最高の環境。

凄まじい光が一带を襲う。

その光の圧力に押し潰されるように魑魅魍魎は灰燼に帰す。

「なっ!?!」

月詠の驚いた声。

そして

「かはっ…。」

光収まらぬ中

投げた手裏剣が月詠の背と首に刺さった事を確認して俺も逃げだす。

Side 月詠

「なんやアレ…あはっ…やっってくれるわー。」

首に手を当て出血を止める。

「剣士や思ってたけど…その実、殺し屋の類やな…。」

ごふつと血を吐く。

ちよつと深くやられてもーたわ。

「あんなもん覚えてセンパイも形振り構わ……………なんや…コレ。」

あ……………れ？

目が…

塞がれた目では無い方

柱が揺らく

「…毒!？」

隠形の符を取り出し自らに貼り付け

気を失った。

S i d e e n d

S i d e 千草

「小太郎!」

「なんや千草のねーちゃん。」

無限方処の結界の中。

小太郎を呼びつける。
嫌な予感がするんや。

「月詠はん何処に行ったか知ってるか？」

「そんなん知る訳無いやん。」

頭が痛とうなってきた。

「ほんなら小太郎、ここで張るとき。ウチは月詠はん探して来るから。手は出さんでええから。」

「おう！」

ホンマにわかつとんかないな……。

S i d e e n d

「これから先生はどちらに？もしよかったら……。」

那波が柔らかく誘ってくるが……。

「すまない。この後は少し古い友人に会うので……。すまない。」

「そうですね。では私達はこれで。」

「ああ。なるべく安全を心掛けてな。」

雪広や那波から離れ走る。

さて、もうネギ達は常識的に考えて既に本山の中だろう。

一番の懸念だった月詠は俺の方へ来た。

致死毒では無いとは言えあの出血。救援を要すだろう。

そうなれば動くのはフェイトのはず。

千草の力量はまるで解らないが…刹那と木乃香を倒す事は出来ん。

犬耳少年は……ネギでも倒せるだろうさ。

狗族変化なんぞ大結界でも張らなければ使えんだろう。

直線で山二つ程か…。

予定通り山の中を走る事にしよう。

Side 朝倉

柚木先生を見送って機械を取り出し操作する。

「それは何ですの朝倉さん！」

いいんちよが声を掛けて来る。

周りも興味津々。

「何って… 柚木先生の懐に入れておいたGPS携帯の位置表示だけど？」

「何をしているんですの……。」

それを渡しなさいとばかりに手を出してくるいいんちよ。
駄目駄目駄目。ここで渡したら計画が色々おじゃんよ！

「柚木先生の古い友人って気にならない？ 仙人でも出て来そうじゃ無い。」

いいんちよが更に何か言いかけた時。

「朝倉さんっ！ ネギ先生は知らないですかっ!？」

ゆえつちが何か慌てて走って来た。

「多分刹那さんやこのかと一緒にいると思っただけどっ!」

パルが補足説明。

まあそう言う事なら任せなさい。

「ネギ君ね？ ちょっと待ってて。」

ゴソゴソともう一つの機械を取り出す。

「あ、朝倉さん？」

若干いいんちよの顔が怖いけど無視無視。何かスクープの予感するし？

あーでもどうしよう

どっちもスクープの予感するんだよねー。

「ネギ先生の懐に以下略。」

表示される位置は最終発信位置。

「あつれ？ネギ君の発信はここで途切れちゃってるけど……柚木先生がネギ君が途切れた所へ向かう様に移動してるっぽいんだけど……。行先はこの神社かな？」

「本当ですかっ!?!？」

「ちよっゆえっちデコ広い！画面見えないって!?!！」

「貸して下さいっ！行きますよのどかっ!?!?!！」

「はっはっはっはっはっ!?!?!？」

ちよっとジョークを飛ばしたのにそっくり無視されて追跡用の携帯を奪われる。

「ちよっゆえっち!?!？」

仕方なく後を追う。

「御待ちなさい朝倉さんっ！」

「ごめんいいんちよ！ちょっと散り返してくるよー！」

ひゃっほう！スクープが一石二鳥！

S i d e e n d

S i d e 雪広

何も無ければよいのですが……。

まあすぐに帰って…来ますわよね？

朝倉さんも魔法の事を知っているらしいですし
常識的に考えて連れ戻してくれるはずですわ。

そして私はギリシヤ語とラテン語を覚えなければ……。

S i d e e n d

S i d e 朝倉

追跡組メンバー

朝倉、綾瀬、宮崎、早乙女

「め、めちやくちゃ早いね……。」

gpsの表示地点がドンドン遠ざかる。
流石にソレを見て私たちは焦りが生まれる。

「多分コレが柚木先生の足跡だと思つてです。」

ゆえつちが足跡を見つけたのでソレを辿ると……。

「茂みじゃん！」

鬱蒼と茂つた何かの草。

それを見て思わず叫んでしまう。

「あ、この中に獣道があるよ？」

「け、けものみち……。」

思わず頭を抱えたくなる。

先生、あなたは熊か何かですか……？

「ナイスですのどか！」

私が一瞬躊躇うけれどゆえつちはそのまま迷いも無く突入していく。

「ええいままよ！」

報道部突撃班朝倉和美とは私の事だ……！

ここで図書館探検部に遅れを取つてなるものか！

S i d e e n d

Side ネギ

「嵌められましたね……無限方処の咒法です。」

刹那さんの冷静な言葉が響く。

本山までもう少し

あと一歩

そんな所で僕が駆け出してしまった為に閉じ込められてしまいました……。

「ど、どうしたら……。」

「ちよっ……何、泣きそうになってんのよ！」

悔しさと恥ずかしさからくる涙で瞳が潤む。

だけどアーニヤの前、こらえて脱出の方法を尋ねる。

「そつやねえ基点を壊すか、空間ソレ自体に歪みを作って壊してまうか……そのぐらいしか出来ひんわー。」

木乃香さんが何処からかジュースの缶を持ってきて僕らに手渡してくれます。

あとさりげなく滅茶苦茶な事が聞こえましたが……柚木

「そうですね。携帯も念話も使えませんし、念の為に放った式神も潰された様ですし。」

そう

僕とアーニヤが先に入り込んでしまい

単独では危険だと御二人も解っていて罨に落ちてくれたんです。

「すみません……。」「ごめんなさい……。」

「ええよネギ君、アーニヤちゃん。死んでまう様な罨でも無いし。」

「では私は基点になりそうな物を片っ端から破壊してきます。」

Side end

Side 小太郎

ぶはっ

俺は思わず飲んどった茶を嘔きだした。

「では私は基点になりそうな物を片っ端から破壊してきます。」

そんな発言が聞こえたからや。

「いやいや強引過ぎるやろ……千草の姉ちゃんは動くなとか言ったけどコレは完全に想定外や!？」

そう言うところ間に鳥居の一基が木っ端みじんに斬り飛ばされた。

まるで野菜を切る感覚で……や。
躊躇いも何も無しかいな……。

「無茶苦茶や。鳥居一基なんぼする思とんねん……。」

朱塗・木製品で本体価格一基40万前後である。

職人の手作りで一つ一つ丁寧に（ry

そんなんどうでもええわ。

と、下らない事が頭を過つとる間に2基目が木っ端微塵になる。

ちなみに基点は6基目であり、到達は5分以内である。

「あ、あかん今止めな手が付けられんようになる。行くで土蜘蛛！
！！」

S i d e e n d

S i d e 刹那

三基目の鳥居を斬り捨てた時

「危ないせつちゃん！」

このちゃんの声に反応して後ろへ飛び下がる。

ズンッ

その瞬間ウチがおった所へ土蜘蛛が落ちる。

「鳥居吹き飛ばすなんて何考えとんのや！ここ神社やぞ？！三本で120万やで!？」

そして何故か土蜘蛛に乗った犬耳少年に説教をくらいました。

「君がコレを作った犯人なんですね！どうしてこんなことをするんですかっ!！」

と、

ネギ先生が正論を言いますが
今のは若干こちらが悪いので私は沈黙しておきましょう。

しかし…止めに入ったという事は鳥居のどれかが基点。
それも非常に近い所にあると考えた方がいい。

直線10基程で足りませんか？

S i d e e n d

S i d e ネギ

「君がコレを作った犯人なんですね！どうしてこんなことをするんですかっ!！」

「そんなん知るかつ！足止めや思つて監視しとつたら鳥居壊しよつて！」

鳥居つてたくさんありますけど……

ストーンヘンジの木製日本版みたいな感じですかね？

見当違いである。

「どうして東西の友好を邪魔するんですかつ！」

「俺はな東や西やそんなんどうでもええんや。西洋魔法使いが気に入らんや！従者だけ戦わせて自分は後方の安全な所でやる腑抜けた魔法使いがな！！」

そう言うなり犬耳少年が殴りかかって来た！

腕を交差させて耐えようとするけどもあっけなく吹き飛ばされる。

「くう。。。」

「ネギ先生！」「ネギ君！」

刹那さんと木乃香さんが僕に駆け寄ろうとしてくれますが……。

「土蜘蛛！！！」

「キシヤアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

大きな蜘蛛が間に立って邪魔します……。

理想的なライ　ーキックのフォーム。そしてアーニヤの蹴りは炎を纏っている。

丁度その蹴りは胸に炸裂する。

「がはあああああ。」

少年はたまらず吹き飛び墜落する。

「これが！西洋魔法使いよ！！！」

「ほえー……なあせつちゃん、アレ師匠見たら絶対……。」

「ええ関心持ちますね。欲しいとか言い出しますね。」

「あ、アーニヤ？」

二人の声も僕には聞こえませんでした。

ただ、ただ

不意打ちだったとは言え僕より一歩前にいるアーニヤがとても……。

「危ないっ！！！」

「えっ？」

刹那さんの声。

僕に覆いかぶさる様な蜘蛛。

Side end

Side 刹那

すさまじい蹴撃。

しかも技名を叫んでからくらわせる辺り師匠と気が合つかもしれませんね。

ホッと安堵した瞬間。

焦げた筈の土蜘蛛がネギ先生へ向け飛び掛かり…

「危ないっ！！！！」

「えっ？」

チィ…あの位置では魔法は撃てない筈…ならば…！

「ネギ先生動かないで下さい！！」
柚木流 鎌鼬！神鳴流 斬

鉄閃！！！！」

二条の剣閃。

斬鉄閃は直線軌道でネギ先生の頭上を薙ぎ払い、鎌鼬は円を描く様にネギ先生をかわし斬り払う。

二種類の斬撃は土蜘蛛を細切れに斬り裂き、一面に緑の液体を撒き

散らせる。

Side end

Side ネギ

刹那さんの放った斬撃が僕の髪と袖を揺らして
蜘蛛を斬り裂きました。

凄い。

恐怖よりも何も凄い。その感情しか生まれてこない。

「くっそ…なるべく硬い奴を連れてきたつもりやってんけどなあ…。」

「「なっ！」」

犬耳少年の声に僕とアーニヤは驚きの声をあげる。

「小太郎。犬上小太郎や。」

名乗ると小太郎君は懐から符を出して投げ捨てる。

「今ので全部持ってかれるとはな…油断しとったわ。同年代でここまでやる奴、しかも女とは驚きや。西洋魔法使いが皆腑抜けや言うたことは撤回するわ。仮面ヲダーやったら爆発四散しとるとこや。」

S i d e e n d

S i d e アーニヤ

「ネギツ!？」

「兄貴!？」

アルベールと声がハモったのはうざったいけど気持ちは一緒ね。

「ネギが勝てる様な相手じゃない!私も不意打ちだから…。」

ネギを引つ張って止めようと走り出そうとした時

木乃香さんと木乃香さんに引きとめられる。

「アーニヤさん。男には絶対に守らなければならない矜持やプライドがあるそうです。」

「刹那さん!でも!」

「まあネギ君も男の子っちゅー事やねん。」

圧倒的に有利なのは小太郎。

当たり前じゃない。ネギが格闘なんて出来るタイプに見える!?!
机に向かって本広げてる姿しか想像できないじゃない!

大体なんで突っ込むの！？
距離を取って詠唱しなさいよ！！

Side end

Side ネギ

くうううう……

小太郎の攻撃を受ける度に障壁がビリビリと音をたてる。
苦し紛れに放つ拳はかわされて
詠唱は確実に邪魔される。

どうする？どうしたらいい？

「兄貴！障壁がもたねえぞ！！」

後ろから力モの声が聞こえる。

一撃一撃が重いのに速い……。。

必死で耐えつつ目を凝らす。

「おらおらおら耐えとるだけかいな！！！！」

小太郎の声が遠く遠く聞こえる程の集中。

足が来る！！

小太郎の右脚ハイキック。

「ふっ！」

ネギは短く息を吐いてしゃがむ。

頭上を風を切る様な小太郎の蹴りが通過する。

これで反げ…

「ぐう……。」

反撃に出ようとしたネギに左脚の回し蹴りが直撃する。

「ネギ！！！！」

アーニヤの悲鳴。

無言でネギは立ち上がる。

「まだ…です。まだ負けてません。」

「へえ…今ので立つんかいな…。根性だけは認めたるわ。」

一度考えた事がある。

自分への魔力供給。

確か昔

ネカネお姉ちゃんの持ってた雑誌。
柚木さんの特集。

ネギが一度目を瞑るとボウツと身体が光る。

小太郎は何を小細工をと。そう考えた。

かわされても連続で攻撃を繋げていくつもりだった。

ネギが……消えた。

右手、右脚。念の為に後ろへ左の裏拳を。

全て空を切る。

「消えたやと!?!」

背中に手が添えられる。

「白き雷。」

その言葉に小太郎は反射的に後ろを振り返った。

しゃがんだネギ、延ばされた腕。そして、白い光。

「ガアアアアアアアアアアアアアア!?!?!」

アーニヤの攻撃で既に小太郎の符は壊滅していた。

つまり……。

脊椎から頭頂部、足先。全身へ電流が走る。

小太郎は意識を手放し昏倒する。

「はあ…はあ…はあ…僕の、勝ちです。」

そう言うなりネギの膝が笑いだす。

息は荒く、全身から汗が噴き出す。

まともに戦った初めての实战。

初めて使った無理矢理の自己供給魔法。

「ネギッ！」

倒れそうになるネギをアーニヤが支える。

Side end

刹那と木乃香はカードに手を当て念話をかわす。

（狗族変化をしなかったとはいえ、まさか本当に倒すとは……。）

（アーニヤちゃんの技で護りの符が無かったっちゅーのも大きいんやろなー。そういえばホンマなんかー師匠等が新しい弟子取るって話は…。）

刹那は軽く驚き、木乃香は目を細めつつ状況を見極める。

(……あの二人だと政治問題になりませんかね。)

(そやねえ ……まあネギ君はあかなあ ……でもアーニヤちゃんの方は気にいるやろうなあ師匠は…。嬉々として修行する所が目には浮かぶわー ……。)

(私達が”アレ”を嫌がったから ……ですか。)

二人は溜息を付き

(恥ずかしゆうて出来ひんて ……自分で名前付けて、決め技で高らかに叫べって ……。)

念話が綺麗にハモった。

「と、とにかくこの無限方処を破壊します!」

夕風を抜き構える刹那。

「神鳴流奥義・百烈桜華斬!」

円を描く様に剣が振られ、

呪刻は鳥居ごと碎け散った。

65話：修学旅行三日目。闘争。（後書き）

次回

66話：修学旅行三日目。英雄vs英雄。

スクナって日本書紀にしか記述が無いんですねえ。
倒す人も一定しませんし

と、うかなんで京都にいるんだよwwwって突っ込んだのは自分だけですかね？

美濃・飛騨に祀ってあげて欲しいものです。

京都なら酒吞童子という奴がいてですね……云々。

後書き・次回予告追記 10・19 7:39

66話・修学旅行三日目 英雄vs英雄 開戦の狼煙(前書き)

正直な話、木乃香やら京都勢の京都弁に変な場所が多いと思います。
自分、兵庫県民ですから。

ここはこうした方がいいとすーというご意見がありましたらお願いします。

66話：修学旅行三日目 英雄VS英雄 開戦の狼煙

関西呪術協会本山

「御帰りなさいませ木乃香お嬢様ー！」

整然と並ぶ巫女のアーチ。

「「へ?!」」

声をあげるのはアーニヤとネギだけ。

「みんな久しぶりやー！」

木乃香が巫女たちに声をかけ、刹那は小太郎を引きずりつつその後ろに控える。

「ようこそやーネギ先生。関西呪術協会総本山へー！」

「「はいいいいいいいいいい?!」」

ネギとアーニヤは驚きのままに叫ぶことしかできない。

「よお遅かったじゃないか。」

「ははは意外と時間がかかりましたねえ。」

宗一郎と詠春が並び立つ。

そしてその後ろには正座で頭に瘤トリプルアイスクリームを作られた四人。

ネギ到着20分前。

「おかしい…。」

山を走破する脚が自然と止まる。

明らかに自分を正確につける音がする。

「武装錬金。ロード：エンゼル御前。」

「久しぶりに登場エンゼル御前!!」

背中に黒い蝙蝠の翼が生えたオートマトン。

どうしてこうコイツは人を不愉快にさせるのだろうか？

「へい宗一郎！ぶつ放すのかよ!？」

「黙っている!」

睨みつけると……ああもう何故小便を漏らす!？

誰だオートマトンに小便機能付けた戯けは……。

約4人程度の追手。

正確に俺の走ったルートを追つか…。

アーチェリーの弦がキリキリと音を立てて引かれる。

「宗一郎！宗一郎！」

「なんだっ!？」

狙いが逸れて矢が放たれる。

ダンツと矢が木に刺さり悲鳴があがる。

「…悲鳴?」

「あれって朝倉や宮崎、綾瀬にハルナじゃねえーのかよお!？」

今更そんな重要な事を言い出すバカマトン。

「当たつたらどうするんだ!さつさと言え糞マトン！」

「あああん!？宗一郎が確かめもせず殺そうとするからじゃねえかよ!!普通足止めだろうがよお!!脳漿ハラワタや腸ハラワタプチ撒けたらどうにもならねえぞお!!」

なあ信じられるか？

コレ、俺の隠れた人格なんだって事。

Side 追跡組

「そことそこの岩を足場にしてコレを飛び越えるです！」

夕映の先導の下、4人は山を駆け抜ける。

藪を抜け、岩を飛び跳ね、木に掛まり、坂を滑り降りる様に。

「きゃっ！」

「のどかつ！」

のどかが木の根に躓いて転倒する。

その手を引こうとハルナは身を屈めた。

結果、それがハルナの命を救った。

ダンッ！

何かが突き刺さる音。

「えっ！？何！？」

「はうう…。」

ハルナは何が起こったかわからず、のどかはハルナの首スレスレに飛んだ矢に卒倒する。

夕映は駆け戻りのどかに近寄る。

朝倉ただ一人、昨夜感じた死の予感を思い出していた。

「ちょ、ちょ、ちょいやバいかも。」

「朝倉！伏せるです！」

夕映の声を聞き朝倉もしゃがむ。

「とりあえず逃げるよ！」

数秒俯き考え答えを導き出す。

「何処へ？」

「とにかく来た道に戻っていいんちょの……って。」

朝倉は初めて前を見る。

硬直した二人と卒倒したのどか。

今話したのは誰？

ソツとGPSに目を落とす。

重なる表示。^{マイカー}鳴り止まない頭の中の警告音。^{シグナル}

木にぶら下がる様に逆さまに降りて来る柚木先生。

「何をしているお前達。」

バサリと広がった髪の毛、鋭い眼光。
詰問する様な言葉。口から覗く牙。

「いきなり撃つなんて酷いよ先生!？」

肯定の言葉に当のハルナが反応する。

「ココ、私有地だしなあ。後を追って来るからてつきり……まあすまんすまん。」

「てつきり……何ですか？」

言葉を濁した部分に夕映が反応する。

「……イノシシやらクマの類とな。」

「しか「それでも危ないよー!」…ハルナ。」

夕映の言葉に被せてハルナが発言する。

「まあ目的地はあそこだ。」

「「「「…神社?」「」「」

「本当に行きたいのなら俺の後を付けず参道を登ればよかったのだ。」

最も参拝以外の理由で一般人が近付くと陰陽術の認識阻害の影響で別の神社に行く羽目になるがね？

「つまり苦勞して危険な目にあつて、頭にたんこぶを作る程の意味はまるでない。ここから真っ直ぐに行けば帰れるぞ。」

「神社に行きたいです!!!!」

誰が答えるよりも早く反応するのは夕映。

既に自分の目的が若干変わっている事には気が付かない。

頭の中には”隠れた名所!!”なんて文字や”まだ見ぬ神社へのあこがれ!”などは無い。

と思いたい。

が、同時に夕映は何となくネギを追う為と言えば無理矢理返される。そんな予感があった。

「関西呪術協会へ関東魔法協会からの書簡をお届けしました!」

「受け取りましょう。」

ネギから詠春へ親書が受け渡される。

これで一応、反関東派はなりを沈める筈だ。

思うに関東関西の争いは近衛の名を持つあのぬらりひょんにも大きな問題があると思うのだが、それはさて置こう。

深く考えるとあの戯けた頭を握りたくなる。

暫くすると宴会が始まる。

生徒たちの手前色々羽目を外すわけにはいかずチビチビと酒を飲む。

「ネギ君、宗一郎。どうです風呂に入りませんか？」

「あ、はい！」

「ああ。」

酔った様に騒ぐ生徒達と巫女を放置して風呂へ向かう。

Side 刹那&アーニヤ

「旅館より凄いわねー。」

湯につかり素直に感想を漏らす。

「春は桜が見えますが、秋はあの山が紅葉で非常にいい景色になるんですよ。」

「へえ〜。でも関西^{コウ}呪術協会が木乃香の実家とは知らなかったわ。二人とも早く言ってくればよかったのに……。」

少し頬を膨らませて不満を言う。

「すみませんアーニヤさん。騙す形になってしまいました……しかし関西と関東の仲が悪いのは事実です。」

「えつと……でも関東の理事長は木乃香のお祖父さんで関西の長はお父さんなんでしょ？」

アーニヤの素直な疑問。

「組織はトップの仲が良くても下はそうとは限りません。それに長も余り盤石なわけでは……あ……すみません後半は忘れて下さい。」

「組織って大変ね……ねえ刹那さん。」

「なんですか？」

「私の事はアーニヤって呼び捨てにしてよ。私も刹那って呼ぶから！」

ガラリッ

「えっ!？」

「!？」

S i d e e n d

「長さんも柚木先生も凄い傷ですね……。」

「はっはっはっ僕のは大半は宗一郎からの傷だねえ。」

「ええ!？」

「なんでしっかり肺まで斬ったのに生きてんのかねえお前は……。」

「いやぁいい医者に当たりました。あとはあのバカの魔力に感謝ですねえ……。」

「ああ、あのバカか。魔力だけならバカみたくあつたからな。」

「バカつて……わぁ！広いお風呂ですねー！」

「はっはっはっ自慢のお風呂ですよ。」

「ほう凝った造りだな。」

浴室の扉をガラリと開け中に入る。

「すまない宗一郎。昔から東を快く思っていない一派がはいたんだけど……後は任せてくれって言えないのが苦しい。」

素直に頭を下げる詠春。

「手練の部下がいるだろう？」

「あいにく腕の立つ者は仕事で西日本全域に出払っていてね……明日の昼には各地から戻ってくると思っただけど……。」

「京都の要所を壊した件といい……今夜にでもやる気か。何にせよ準備が良過ぎる。」

先程入った報告。京都のあちらこちらに封印したはずのモノが解放されている。

伝説としか残ってないような連中まで喚んだ辺りが本気の度合いを証明している。

そして都合良く、いや都合が悪くガラ空きの本山。

どうにもあの人含めて……いいや下手すつと……たまらんな。死体が山積みじゃねえか。

「あの！どうして木乃香さんが狙われるんですかっ!？」

ネギが素直に疑問を口に出す。

「ネギ君にも話しておいた方がいいでしょうね。」

詠春は確認を取る様に俺を見る。

「ああ。」

「……やんごとなき血統を代々受け継ぐこのかには凄まじい呪力、魔力を操る力が眠っています。」

「それこそ俺が吸血の自制を必要とする位にな。」

俺の言葉にネギは身を固くする。

「そしてその力は君のお父さんサウザンドマスターをも凌ぐほどです。ですから幼少から何度も狙われましてね。それで東に、いえ宗一郎に預けて権力争いや政略結婚の的にならない様にしたのです。ですが……」

木乃香の説明が終わり状況を話そうとすると……突然扉の前が騒がしくなる。

「お、おい詠春。」

「おやおやご婦人方が…これはいけませんね！ご案内を間違えたかな。緊急事態ですネギ君、宗一郎！裏口から脱出しましょう！」

Side 刹那&アーニヤ

「ちよつ刹那！？なんで隠れたの！？」

「わかりません！何となくです！」

「師匠だけなら恥ずかしくないのですが……。あれ？」

「…師匠の前で脱いでるのも駄目なのでは？」

「聞こえて来る木乃香の事。」

「つまり、何？私たちが襲われたのは親書狙いじゃなくて木乃香を攫う為の陽動ってわけ？」

「そうなりますね。」

「アーニヤの問いにあっさりと返す。」

「じゃあこの任務、ホント茶番もイイところじゃない…。」

「眉間に皺を寄せてアーニヤが俯く。」

「いえ、先に言った通り仲が悪い事は事実ですから届ける意味はありませんよ。師匠ではその役目を果たせないという事も含めて。」

「えっ？なんでよ柚木先生が届けた方が……。」

「お、おい詠春。」

若干悲鳴に近い師匠の声。

「おやおやご婦人方が…これはいけませんね！ご案内を間違えたかな。緊急事態ですネギ君、宗一郎！裏口から脱出しましょう！」

3人がこちらへ来る。

「ちよっ！？何でこっちに来るの!？」

「わかりません！」

Side end

逃げた先にアーニヤと刹那が居た。

対面。

「………………。大丈夫だ問題無い。タオルと桶でモノは隠れている。」

左手に持ったタオルでモノを隠し、右手を前に突き出し精一杯否定のジェスチャーを取る。

一瞬詰まったが問題は無い。
二人は倫理的に拙い部分はタオルで隠している。
問題無い。

そもそも白く覗く鎖骨や

湯が髪から滴り、うなじへから背中へと流れるライン
白くほっそりとした太ももなど見ていないのだ。

……ただ、胸が些かちっばいな。

「アーニヤ・フレイム・ナックル!!!」 「斬空掌・散!!!」

「待て！落ち付け冷静に話せばわかるぶうあああああ?！」

生徒たちの遠い残響、一人で聞いた。

何故だ…。

「申し訳ありませんでしたっ!!!つい頭に来てやってしまいました
っ！」

詠春が用意したであろう部屋で目が覚め、同時に刹那が土下座する。

恐ろしいなギャグシーン補正は…この俺でも昏倒するか。

「いえ、流石に顎に拳が命中した拳句に後頭部を岩の角で強打すれ

「ば誰でも昏倒するかと。」

「心の文を読むな。」

色々スプラッタな事になったような気はするが、まあ真祖で良かった。

ヘルメットなど被っていないから人間であれば即死だった。

「今はどういう状況だ？」

「はい。犬耳少年…自称犬上小太郎は牢にて拘束中です。このちゃ…木乃香お嬢様は陣を張って防衛中、長は刀を持って本山内の警戒を。ネギ先生とアーニヤは少し離れた部屋に。一般生徒達は一番遠い巫女達の部屋の近くに。」

いちいち直さんでもいいのになあ。

「よし、連中が来るなら一撃離脱が妥当。刹那は遊撃を。俺は屋根の上にいる。」

「わかりました。」

Side フェイト

「ああああ！！何してんねん小太郎は！！」

「落ちついて千草さん。この状況になってしまっただけには悪いけれど困らなくてもらおう。」

千草さんを宥める様に動くしかない。
ここでクライアントが折れては意味が無い。

「困？なんや小太郎に何か仕掛けとんのかいな？」

「彼自身も解らない仕掛けがあるよ。…… 罠を仕掛けて一撃離脱では無くじっくり攻め落とす。」

「なんでや？！あの人が居る拳句に万全の態勢なんやろ？！」

「彼もそう考える筈だ。体制は完璧とは言えずとも万全。ならば僕等が一撃離脱を狙う……とね。」

「裏をかくわけやな。」

ようやく落ち着いたらしい。月詠は何処だ？彼女には剣士の足止めをしてもらわなくては……。

周囲を見回すが……影も形も無い。まさか寝坊ではあるまいし。

「千草さん、ところで月詠はどうしたんだい？」

「あー…なんやあの人の見物に行く言うて手勢連れて行きよった。」

ず、頭痛が。

「あ、あれほど手を出さない様になって言ったのに……。」

「ウチにアレの制御は無理や。人斬りに何言う以前に、常識からしてちやうから話にならん。」

やはり簡単に事は進まないか。
大鬼神と柚木宗一郎をブツけつつ、彼の意志を確認するとしよう。
失敗しても成功しても既に関西の力を削ぐ事は出来た。
どちらに転んでも獲るものは大きい。

S i d e e n d

「なにっ?!」

突如建物全体が揺れる様な衝撃。

「唸り声…?まさかっ!」

S i d e 小太郎

「くそっ…掴まって、こんな所で終わりがいな…。」

暗く冷たい牢獄。

荷物検査をされた以外はおざなりな緩い拘束。
舐められとるのは解る。

「せやけど俺が負け……。」

Side 朝倉

「え？何？今の声?!」

「獣の声…にしては…。」

パルが最初に声を上げ、ゆえっちが思考する。

まずったなあ…本当に危険だったとは……。
後ろの窓を開け逃げれるかを思考する。

「何かヤバそうだし…とりあえず逃げるよ！ゆえっち先に下に降りて安全確保。」

「わかったです。」

「じゃあ私は廊下を見張って…。」

とりあえずあわあわしてる宮崎をゆえっちの所に送ろうと
そう考えた時。

「アル・アレック・アルゲントウム。」

聞き覚えのある声で何かが聞こえた。

パンツとふすまが開け放たれ。

銀色の大男。

「 大気よ 水よ 白霧となれ この者に 一時の安息を 眠りの霧。」

「 え？ 」

噴きだす大量のガス。

「 しまっ……。 」

S i d e e n d

全員の意識が夢に落ちた事を確認する。

「 綾瀬が足りない？ チツ……。 」

「 驚きだね。 」

不意に掛けられた声。

「 フェイト・アーウェルンクス……。 」

「 こういう事は僕がやる筈の仕事なんだけどね？ 」

白髪の少年。

「 どういうつもりだ？ あの少年に強制的なオーバードライブをさせて、更には俺の前に姿を現すとは？ 」

「犬上小太郎はネギ少年に対する囮。そして僕は……君をスカウトに来た。」

一呼吸間を開けて紡がれた言葉は勧誘。

「もう戦争は起こさせんし、魔法世界を壊す事もさせんぞ？」

ギチリと拳を握りしめる音。

「僕は世界を滅ぼす気は無いさ。僕は……僕は世界を救う。」

フェイトの目は俺から外れない。

本気の目。

冗談に聞こえるが、本音。

「お前、本当にフェイト・アーウェルリンクスなのか？」

返す言葉は疑問。

人形の様に無機質なフェイトが俺の知っているフェイト・アーウェルリンクスという人間。

だが目の前のコレはなんだ？

人形のイメージなど無い。真っ直ぐな目。真っ直ぐな態度。

「そうであって、そうではない。と答えるのが適切なんだろうね。そして世界を救う最短ルートは君と帝国の協力だ。」

「連合の協力はいらんのか？」

「ああ必要無い。……今やMM元老院は内部からボロボロと崩壊し

てるよ。近いうちに君が送り込んだクルト・ゲーデルが実権を持つんじゃないかな？でも世界を救うために内部で内紛がある様な所は役に立たない。」

「……今は断らせて貰おう。」

「どうしてだい？」

「お前の時間稼ぎに乗るつもりは無いッ。」

構えるは蛇、撃ちだすは左。

踏み込むは全身。

それをフェイトは手を交差させて受ける。

日本庭園調の砂利の上を滑り、飛ばされるフェイト。

「手抜きの一撃。……これはどういう返事に取ればいいかな？」

「今は答えるつもりが無い。そう取って欲しいものだな。」

「お嬢様ッ！……くっ！どけっ！……！」

刹那の叫び。

「どつやら両方成功したみたいだね。大収穫だよ。」

「その様だな……。」

「宗一郎!!」

「ぐあつ!?!」

詠春が黒服を斬り捨てながらこちらへ来た。

「それじゃ 柚木宗一郎。また会おう。」

そう言うと突然無機質な顔になり水に溶けるフェイト。

「詠春!」

俺に掛かって来た黒服を疾風の如く刀を頭ごと砕き潰す。

「今のは?!」

「こいつらは?!」

俺と詠春の声が重なる。

「反東だけだと思っていましたが……どうやら私も疎まれていたようです……ねっ!」

老いてはいるが、なお鋭い剣筋。
ゾクゾクして来やがる……。

「ああ、駄目だ。お前を見てるとお前と殺り合いたくなる。」

「こんな時にツ……無茶をツハアアアアア!言わないで下さい!!」

会話しつつも俺達の周りは血に染まる。

「おい詠春。こいつらの顔、残ってる必要……あるか？」

「出来れば、その方が楽ですねっ！」

「……そうか。」

パチンと指を弾く。

斬りかかって来た黒服の身体が燃え上がる。

「ひっ……呪符隊！」

ある程度燃やした所で火を止める。

「結構惨いことを……。」

「大丈夫、ブルーレアって所だ。表面もカリッとさせて無いぞ？」

「その表現辞めてくださいね……久々の宴会だったのでステーキ出したんですよ。」

「おいおい学生にビフテキかよ。」

「歳バレますよ。ソレ、若干死語です。」

「死ねええええ近衛詠春……！」

そんな雑談にブチ切れたのか一旦退いた癖に一人が飛び出す。

またパチンと指を弾くが…

「へっ呪符を舐めるな西洋魔法使いつ！」

火は付かずに突進してくる。

「あーあ、そんなにウエルダンがいいかよ。ロード：ブレイズ・オ
ブ・グローリー。」

「屋敷ごとは駄目ですよ!？」

何を使うかわかった詠春が思いつきりこちらを向いて注文付けて来る。

「はいはい大丈夫大丈夫。」

掌の上に火球を生み出し、投げる。

今度は弾かれる事無く燃え尽きる。

「そんな…最大防御の符が…。」
「ひっ…。」
「た、頼む助けてくれ!!」

燃え尽きる様を見てざわめきが広がる。

「まあ…なんだ？お前達。付く相手と牙剥く相手を間違えたな。」

先程よりも大きい火球が精製される。

「そ、宗一郎？もういいのでは？彼らは「こちらでしかるべき制裁を
…。」

「そうか、なら自刃させる。」

詠春の方を見ずに言い捨てる。

「いや、それは…。」

「頼む！見逃してくれ！金を積まれたんだっ！」

「う、上の触れに俺達みたいな下っ端は何も言えないんだ！」

「そうだっ！俺達は命令されただけなんだ！」

口々に始まる言い訳、弁明。

「はあ……興が削がれた。詠春、一つだけ言っておく。俺は反逆者と金だけで動くって奴が嫌いだな……そういう手合いは何度も繰り返す。一番良い始末は首を素っ飛ばしておく事だ。」

「師匠！！このちゃんが……！！」

「わかっている。追っぞ。」

「はいっ！」

「駄目！自我が飛んでる！！！火盾！」

アーニヤが張った防壁の上を小太郎の爪が滑る。

「ラス・テルマ・スキル・マギステル 闇夜切り裂く 一条の光
我が手に宿りて 敵を喰らえ 白き雷！！！」

室内反響の轟音。

「G A A A A A A A A A！」

「嘘……。」

まるで効いていない。

「アーニヤ！外！ここじゃ無理だよ！」

「わかった！フォルティス ラ・ティウス・リリス・リリオス 目
醒め現れよ 燃え出づる火蜥蜴 火を以てして 敵を覆わん 紫炎
の捕らえ手。」

炎が奔り小太郎を絡めつける。

入った時には短い階段が本当に長い。

外！

「ラス・テルマ・スキル・マギステル 来れ雷精 風の精 雷を纏
いて 吹きすさべ 南洋の嵐！！雷の暴風！！！」

地下牢へ向けて撃ちだされる雷の暴風。

「やった……？」

舞いあがる粉塵。一時の沈黙。

「はあはあはあ……多分……閉じ込めただけ……だと思っ。長さんが、対処出来る人でないと……無理。」

「ネギ？大丈夫！？」

「大丈夫……。」

息が切れる。あの戦闘が響いてるなあ……。でもまだ大丈夫。

「お嬢様ツ……くっ！どけっ……！」

「刹那？！」

「しまった！木乃香さんがっ……！」

S i d e e n d

S i d e 刹那

納刀したまま用心して歩く。

気は張り詰め僅かな動きすら見逃さぬように周囲を警戒する。

このちゃんの周囲には3重の結界。

弱点の上は師匠が、下はウチが護る！

Side end

Side 木乃香

「へえ驚いたわあ上には師匠がおるはずなんやけどなあ。」

「……………流石鋭いなあ。酔ってへんかったらそんなに完璧なんかいな。」

「で、ウチを攫ってどうするつもりや？ウチ痛いのと怖いのは嫌いやから……………事と次第によっちゃココで死んでもらうえ？」

正座しながらの瞑想を崩し立ち上がり鉄扇を抜く。

「お嬢さんの魔力使ってスクナを復活させるんや。」

「スクナ？あんなん師匠にかかったら一発で消し炭やん。」

「不完全なスクナならそうなります。せやけど完全復活したスクナは違う！まずはココ、次は関東。きつとウチの復讐は完遂出来る。」

ああ……………この人、きつと死ぬ気なんや。

「最後や、師匠の事どう思うとる？」

「…柚木はんか……ウチにとっては英雄やのうてヒーローやった。
あの地獄ヘルから救い出してくれたヒーローや。せやけどウチはお嬢様
や桜咲みたいに引きとって貰う事は出来なかつた。それだけ…それ
だけです。」

「わかつた。」

せつちゃんも何か間違つたら小太郎君や千草さんみたいになつと
つたんやろか…？
それともウチと一緒に来てくれたんやろか？やっぱり体験してへん
事はわからんなあ。

鉄扇を帯に戻す。

「え？」

「ウチを攫い。スクナ制御の魔力ぐらい出したるわ。」

「……ありがとうございます木乃香お嬢様。」

Side end

Side 刹那

「剣戟、咆哮……くっここを動く訳には……。」

ゾロリと湧いてくる黒い袴に刀と呪符を持った男たち。

「誰だ！」

「死ね。混ざり物。」

抜刀、そして納刀。

「ぐっぐっ。。。」

混ざり物と呼んだ男の膝が地面に付く。

「私を混ざり物と呼ぶな。」

男の腹がジワリと血に染まる。

ゴトリ。

落ちる首、噴きだす血の音。

「バカな…一度しか刀は…。」「強いっ…。」

「この先は誰も通さない。通りたければ死体となって通るが良い！」

「うおおおおー！！！」

ザンッ

「刀ごと…。」「豪剣…。」「女の細腕で…。」

幾ら刀を気で覆っても…。

「お前達、神鳴流じゃないな。弱過ぎる。」

「責様っ！」

呪符を抜く男たち。

ああ、そういう事か。だから”混ざり物”か。

構える。

呪術ですら斬り伏せる為に。

その時

バンツと障子が蹴破られ

猿女が飛び出してくる。

「なにっ?!」

「お嬢様は頂いたえ!!」

下からは誰も…上には師匠がいるはずっ!?

猿女はこのちゃんを抱えて男たちの向こう側へ着地。

向かおうとするウチを斬りかかる様にして止めに来る。

「お嬢様ツ!!…このちゃん…!くっ!どけっ!…!!」

「ここで死ねえ混ざり物お!!…!!」

「神鳴流決戦奥義!」

「まずい!!!バ!」

圧力をかける呪。

だが、刀を振り抜くだけなら首が折れても出来るッ!

「真・雷光剣!」

カッとした光の圧力。

轟音と土煙。

砕けた屋敷の一部と人体の欠片。

あらゆるものの焦げた臭い。

「刹那!」「桜咲さん!」

生き残りが一人。

「た、助け…。」

ザンツと袈裟斬りに一刀両断。

「ひっ…。」「あ…。」

げえと二人が嘔吐する音が聞こえる。
何故吐いているのか理解できない。

「私は先行して追います。」

だけど構っている暇など無い。

壁を越えただ走る。

Side end

「ネギ、こんな所で何をしているっ!」

「うぐえ……。」

「チツ。」

辺りを見回すが何ら吐く様なものは無い。
言える事は激し過ぎる戦闘があつた事だけ。

「アーニヤ話せるか?」

「刹那が多分…敵を皆斬つて、追いつけて出て行きました。」

割と支離滅裂な説明。

「あのバカ……先行したか。」

木乃香が関わると豹変するその性格。まるで治らんな。

「私も行きましよう!」

詠春の声。

「詠春！お前はここに残って結界を再構築しろ！それから名家衆が集まりそうな場所をこのアドレスへ送ってくれ！ちなみにヤバいものをこの先に封印してないか？！」

「リヨウメンスクナの封印…それで木乃香を！」

リヨウメンスクナ…まさか両面宿儺？そんなバカな…。

「リヨウメンスクナ？！なぜその封印が京都にある？！飛驒の千光寺と善久寺で弔って鎮めている筈では…。」

「いえずっとこの先の湖の祭殿で…。千光寺と善久寺とは何の話です？！」

「頭痛に加えて腹痛までしてきた。いいか詠春、再封印するから飛驒へ帰せ。この地にある限り宿儺は鬼神でしかないっ！」

くそっ

そうか伝説や伝承及び歴史に余り齟齬が無いので気付いて無かった。

「御霊信仰が知らんがどうせやるなら四条通りの新町と西洞院の間を南に下がった辺りにある将門でも祀れ！」

招神も出来たし何の問題も無いと思っていたがこんな所に齟齬を置いてくれるなよ…くそったれ。

十中八九、木乃香を攫った理由はリヨウメンスクナの解放と制御。

君は死ぬ気か千草…！

刹那を追って走る。

「なあ旦那！やっぱりあの女と知り合いなんだろう？！いい加減本当の事を言ってくれよっ！」

ネギの肩に乗ったアルベルが俺に向けて疑問を投げる。

この期に及んでしまえば隠す意味も無い。

「チツ……昔、命を助けた少女だ。ネギ、貴様の親父からな。」

「え……。」

「覚えておけ。英雄の負債は引き継がれる…望もつが、望まなからうが怨嗟の波はお前に押し寄せる。」

前方から響く剣戟。

特徴的な髪が揺れる。

「何アレ……。」

アーニヤの声。

「鬼だ。日本式の悪魔召喚だと思え！アデアット！」

「師匠！」

「どういふ状況だ刹那っ！！」

刹那の隣で刀を構えて立つ。

「白髪の少年が連れてきた化け物とこのちゃんの呪力を使って天ヶ崎千草が召喚した鬼共です！」

大量の鬼。数さえ数えられぬような魑魅魍魎。烏族や狐族。おおよそ1000体を越えるだろう。

「何や何やワラワラと湧いてきよったけど…。」

「相手はやっぱりおぼこい嬢ちゃん坊ちゃんがほとんどやないか。」

「ホンマにたいそうな数じゃのう。」

「悪いな嬢ちゃん達。こんな数でヤルんは気が向けへんねんけど喚ばれた以上しゃあないねん。」

「ネギ…。」

「はい。ラステルマスキルマギステル 逆巻け春の嵐我らに風の加護を！風花旋風、風障壁！！」

ゴオッオオオオオオと唸りをあげる風が俺達を囲む。

「よし！手短かに作戦立てようぜ！？どうするこいつはかなりまずい状況だ！！」

「京都の要所を潰したのはこの為か……酒吞童子……大物にも程がある。」

「僕とアーニヤが残りますっ！」

「駄目だ。幾つかお前達には相手に出来ない様な数百年単位の化け物がある。お前たちじゃ耐えても数分、後ろから挟撃される羽目になるか本山が完全に堕ちるか、京都が血の海になる。」

一番可能性が高いのは京都が襲われるという事態。これだけは避けなくてはならない。

召喚された鬼はまだしも、フェイトの連れてきた鬼は……洒落にならない。

「師匠……私が一人ここに残り鬼達を引きつけます。その間に皆さんでお嬢様を追ってください。」

刹那の選択。木乃香の元に一番先に行きたいだろうに……。

「ええっ！？」「無茶よ！」

「任せてください。ああいう化け物を退治調伏するのが私の本来の仕事ですから。」

「幾らなんでもこの量では……。」

「では俺も残ってやろう。」

「師匠?!」

「勘違いするな。エヴァが来るまでだ。ネギ、アーニヤ。木乃香の奪還だけでいい。奪還してここまで逃げ切れ。」

「その後はどうするんですか?!?!?」

「俺が一人で全て喰い止める。あと本山付近から全員で最大最高の障壁と隠蔽をこの辺りに掛けてくれればいい。」

「でもっ…!」

「実に旦那任せな上、あの白い奴の問題は置いてけぼりだが、やるっきゃねえな!他にまともな代替案はあるか!?!」

なおも食い下がるネギをアルベルが意見をまとめることで黙らせる。

伊達にオコジヨ妖精というわけではないのだな。

この件が終われば本^{イギリス}国への強制送還も考えていたが改めよう。ヒゲと皮でいいか。

「……………」

「ねえみたいだな。よし決まりだ!!そうとなったらアレもやっところぞ!ズバツとブツチュツとよう!」

「アレって?」

「キッスだよキス。手間のかかる他のやり方じゃ時間がねえ！」

「こんな時に何を行っている…?」

先程上がったアルベールの評価が地の底にまで落ちる。

「ちげえよ旦那!こんな時だからこそ最大の保険を掛けるんだよっ
「!」

「ところで誰と誰がやるのよ?」

「アーニヤの姐さんと兄貴に決まってんじゃねえか!」

一瞬の沈黙。

「……………してなかったのか。」「え……………していらっしやるものだとばかり……………」

俺と刹那は流石のこの状況に戸惑いを覚える。

真っ赤な顔になって沸騰しそうなアーニヤ。

気恥ずかしさか何かかオドオドしだすネギ。

しかしネギがアーニヤを見るとアーニヤは顔を背ける。

「し、仕方ないわね。緊急事態だから認めるのよ。いいわね?!」

「う、うん。」

初々しい接吻。

「パクティオーー!!」

「なあ刹那、こういうのを…えー…つんでれ?というんだったか?」

「知りません。早乙女さん辺りに聞いて下さい。」

そう言われて思い出した。ああ綾瀬を逃がしたのだったな……まあこちらに普通近付かないだろう。

「風が止むな。」

「来るわよネギ!」

「死ぬなよ刹那?」

まだお前には教えてない事があるんだ。

「私もまだ死にたくはありません。」

「そろそろか……。」

「ハッ…待たせよってからに……。」

鬼たちの声も鮮明に聞こえる。

「！」

「雷の暴風！！」「炎の烈風！！」

夜空を二条の光が疾走する。

「おおお。」

「西洋魔術師かあ！？」

「オヤビン！逃がしちまっただ！」

「おうおう50体は喰われたか。」

「やれやれ西欧魔術にはわびさびっちゅうもんがなくてアカン。」

「おいてめえらああ！ガタガタうるせえぞ！こちとら数百年ぶりの餌なんだよっ！」

鬼のざわめき。最後のバカでかい声は酒吞童子が。
わかりやすくいいねえ…。

「おい、おいおい貴様まるで殺せるかのように言ってくるじゃないか？」

「なんやお前？奇天烈な恰好しよってからに。」

「……………ほな始めますえ。」

「ん。わかった。」

自らの額に呪符を貼り付け目を閉じる。

「イジャヤ…高天の腹に神留りまして事始めたまひし神ろき・神ろみの命もて、天の高市に八重萬の神等を神集へ集へたまひ、神議り議りたまひて。」

遠くに聞こえる祝詞。

泣きそうな悲しそうな、せやけどしっかりとした。

ウチは静かに

西洋魔法を唱えた。

「夢の妖精 女王メイヴよ 扉を開けて 夢へと いざなえ。」

静かに静かに千草さんの意識に溶け込む様に。
過去を見る為に。

S i d e 夕映

に、逃げてしまったです。
安全確保と言われ周りを見渡し、次はきつとのどかが降りて来る筈だと…。

現実はまだならぬ声、倒れる音。

気が付けば足は離れる様に動いていたです。

バカです、アホです。でもあの状況で逃げる以外の選択は無かったです。

ああもうこの考えが余計にアホなのです…。

逃げた先に広がる光景。

大量の化け物としか呼べないモノ。

危うく粗相をやらかす所だったです。

誰に助けを求めれば…？

警察はおるか自衛隊ですらこんな非現実的な事に対処してくれる機関など日本のどこにも…

ハッと頭を過るのはクラスの面々。

自分よりも大きい男を吹き飛ばすクーフェイ。

忍者の様な身のこなしを見せる楓。

ミステリアスな雰囲気の龍宮真名。

「そ、そうですあの人たちなら…」

S i d e e n d

S i d e 真名

自由行動から帰りソファで寛いでいると楓の特徴的な携帯ファーザーの着メロが鳴りだす。

「む…？どうした夕映どの？」

ほえほえした雰囲気を一転させ電話を受ける楓。

「まずは落ち着くでござるよ。落ち着いて…ふむ…ふむ…山の中で？ほう…ふむ…。」

思索しているのかしていないのか…。

ただ真剣であることは薄く開いた目が証明している。

「…つまり、助けが必要でござるかな？リーダー。」

「何か厄介事か楓？」

「かくかくしかじかでござるよ。」

楓の説明を聞いて自らの携帯を確認するも…何も無い。

最近放置プレイが過ぎるんじゃないかなシトーさん？

S i d e e n d

S i d e エヴァ

「マスター。」

「なんだ茶々丸？抹茶八つ橋はやらんぞ？」

「いえ、宗一郎さんからのメールなのですが……。」

ほう…：やっと仕事か。

「見せろ。」

どうやら緊急事態らしいな。

宗一郎の打ったメールでは無い。妙な敬語…近衛詠春か。

自慢ではないが私も宗一郎もまともにケータイは扱えていない！
電話機能ぐらいだぞ使えるのは！

「ふむ。征くぞ茶々丸、若い連中には任せられん汚れ仕事だ。」

Side ネギ

後方から聞こえる轟音。

凄まじい閃光。

「旦那達派手にやってんなあ…。しかし…：兄貴。連中何かおっばじめた様だぜ…。」

「わかってる。加速！」

加速。その魔法に合わせるかのように祭壇から天を衝く様に光が伸

びる。

「この強力な魔力は…?! 儀式召喚魔法…!」

「かなり大がかりなものを呼び出すつもりね…。」

平行に横に並び飛翔する二人。

「兄貴! 姐さん! 急げ手遅れになる前に…!」

「う、うん!… あっ!」

少年の瞳が木乃香を捉える。

「木乃香さん…!」

S i d e e n d

「ハアハアハア……………」

刹那が太刀を地面に突き刺し身体を支える様に荒い息を吐く。

浅い傷でも積み重ねれば相当な傷になる。

「休んどの暇なんてないでえええええ!」

「くっ…！」

斬りかかって来る鬼への反応が一瞬遅れる。

俺は咄嗟に刹那の前に立つ。

鬼の刀がシルバースキンに接触する金属音、そしてヴァルキリースカートの斬撃。

「刹那！ここはもういい行け！…大技を使い過ぎだ。嫌な光が見える…ネギでは間に合わんかもしれん。」

決戦奥義なんぞ度々使う技では無い。

「しかしっ！」

突き飛ばすように刹那を押しそうとするが……。

「…行かしまへんえー。刹那センパイ？」

「っ…月詠…！」

「バカなっ！」

ロリータな服が血に染まりえらくスプラッタな姿。

毒を撃ちこみ数日はまともに動けぬ筈の月詠がいた。

「あはっ……毒抜くの時間掛かりましたー。アホな人や。殺せる相手を殺さへんなんて二流三流のやる事やー。」

「いやあああああ!!!」

ザンツ…………ゴトリ。

烏族と鬼の首が落ち、噴き出す血飛沫を全身に浴びる。

テンガロンハットは既に解除し、手と刀を縛る布状に変えている。

顔を伝う血。

それを舐める。

「不味い不味い血だ。魔力で構成されている癖に不味くて反吐が出そうだ。」

花の様に芳しいテオの血や、凄まじい香気を放つ木乃香の血、気と魔力が荒れ狂った様な明日菜の血。
足元にも及ばない。

ああ……存外にグルメなのだな俺は。
いや？

極上しか飲まなかったからだな。

「てめえ…………。」

「ハツ…輸血パツクの血より不味いんだよ鬼共。糞つ暗い穴蔵や岩の下なんぞ飽きただろっ?」

一際大きな鬼が前に出る。

66話：修学旅行三日目 英雄vs英雄 開戦の狼煙（後書き）

様々な思いと思惑が絡み合う古の街、京都。

大切なモノを護る為だけに剣を覚えた少女。

ただ生まれながらにしての剣鬼であった少女。

西と東その両方を身につけた調和の象徴たる少女。

許せぬと20年余り経っても燃え上がる憎悪の炎を持つ元・少女。

父の背中を追い続けた少年。

その少年を思い続ける素直ではない少女。

複数の思惑を同時に操る少年。

未だ本性を現さない英雄。

老人たちは力かと笑い企む。

全て巻き込み火の手があがる。

何を得て何を失い何を見るのか？

ただ…導火線の火は静かに、静かに灯された。

次回修学旅行篇三日目 英雄vs英雄 終局。

解説？Q&A？

Q・千光寺と善久寺って何？

A・両面宿儺を開基とした寺。

飛騨・美濃では両面宿儺は飛騨国に仏教を伝えたとされています。朝廷（多数）から見たスクナは鬼。

飛騨国（少数）からは信仰の対象として見られたスクナ。

これってこの小説の主人公と被りませんか？

Q・酒吞童子

A・京都と丹波国の国境の大枝（老の坂）に住んでいたとされる鬼の頭領。

大枝町の酒吞童子伝説の方を採用。

残念ながら引き立て役。

Q・ネギまの鬼って斬られたら消えるだけじゃね？

A・狩籠の丘というその昔、京都市中の魑魅魍魎を封じた場所があったですね

そこからの連中は血が出るよ！死体が残るよ！

Q・鬼多過ぎだろwww

A・ワサワサいるねっ！木乃香の実力も原作より高いからね！主人公弱くなってね？という意見からちよつと派手めがいいよねっという発想。

Q・もつと強力な武装錬金あるでしょ！

A・らめえ京都が消し飛んじやう！山崩れやミサイル、山火事なんて論外っ！

そう言いつつ火炎同化で戦う設定が初期プロットに…。

67話・修学旅行三日目。 英雄vs英雄 終局。(前書き)

えー先に一言。

京都名家衆と同姓の方、申し訳ないです。

どうしてでしょうか？綺麗な老人が書けません。

ちなみに京都名家衆は

安土桃山時代位の京都の近衛家と近そくな権力者達からピックアップしています。

67話：修学旅行三日目。 英雄VS英雄 終局。

Side 刹那

ウチはこの人が嫌いだった。

初対面でいきなりウチの翼を出させた上にトラウマを抉られた。

翼の悩みを話したら鼻で笑われた。

拳句に”ほう本物が。いい羽毛布団が出来そうだな。”などと言いながら羽根を筆られた。

里で白い翼の忌み子として白い眼で見られて生きてきた時でさえ里を飛び出し長に拾われ、神鳴流の中で育った時にもこんな酷い扱いを受けた事は無かった。

確かに混血、雑種そんな言葉の暴力や陰湿な攻撃よりも痛めつけられた。

それなのにや

このちゃんがそんな男の下へ行く事になった。

置いていかれる。そう思った時にこの人は狙い澄ましたかのように悪魔の言葉と手を投げかけてきた。

”ついでだが、お前も来るか？”

付いていくという選択以外ウチには無かった。

麻帆良学園に着いて修行や思てたら

呼吸法や気の回し方、基礎訓練ばかりの毎日。

マスターの下に付いたこのちゃんはメキメキ力を付けて行って…。

その内にこのちゃんが鉄扇を使った体術まで始めて…。

置いて行かれる。ウチの護衛の必要なんて無くなる。

そう思てたら悲しゅうて悲しゅうて…悔しくて。もっとも今考える

とウチの護衛なんて必要無かったけれど……。

ある日

長から頂いた夕凧を取り上げられた。

始まったのは体術。

解つたのは顔ですら容赦無く殴られるという事。全身痣だらけで寝るのがキツイ日もあった。

それでも夕凧を奪われたウチは必死で体術を吸収するしか出来ない。嫌いと言う感情はこの時には”いつか、この手で、殺したる。”に変わっていた。

だから師匠の鍛錬も食い入る様に見続けた。

そしてようやく剣術の修行に入った頃には多少の怪我では動じない様になつとった。

久々に夕凧を持って驚いたのは、その軽さ。気を流さなくても片手で自在に操る事が出来た事。

柚木流は神鳴流と全く違う。妖怪を相手にする技術では無く、人。

対人術。

卑怯、狡いやり方、畏なんでもござれ。身をもって体験した。

対忍者、対剣士、対火縄銃!?

神鳴流に飛び道具は効かないなどと言つたら飛び道具でズタボロにされたのは言うまでも無い。

そんなウチにも教えられてない事がある。

姉弟子でもある明日菜先生は習得している”蛇”。

一度だけ。

”蛇”を使った組み手をしたけれど”一度見られたら余り意味が無い技術”などと

それで対処出来るのは達人の域にいる人だけだと思う。

きつとウチがまだ教えられる段階や無いんやと思つとった。

「刹那。アレはお前より上だ。」

「…はい。」

だから相手にするな、逃げろと言われるんやろうか？
ウチはそんなに頼りないんやろうか？

「斬り捨てる。勝てたらお前は殻付きヒヨコ卒業だ。」

「はいつ！」

ヒヨコ以下の扱いなんや……それでも今は、嬉しい。
いつ師匠が嫌いつて感情が消えたのかはわからない。

「へえ…余裕やなー。大事な弟子が死んでもええんやー？」

月詠と向かい合う。

「死ぬのはお前だ月詠ッ！！」

S i d e e n d

京都市内 某茶屋

老人たちは円陣を組む様に座る。

「計画は水泡と帰したな。」

「うむ。我らが部下がこれほど使えんゴミだとは思わんかったわい。」

「全くだ。死ぬのならせめて詠春の首を落とせば良いモノを……。」

「何を勝手に終わらせようとしておるのじゃ冷泉、今出川、一条！
！！ワシと犬上小太郎の繋がりには明白！ここで終わらせればワシの
立場はどうなるっ！」

「そのような事は知らんわ。大体、山科殿が悪い。特定しやすいモノ
を使うなど二流のやる事ぞ？」

「二条貴様ツ！犬上を出せと言ったのはお主じゃろっ！！！」

「ふむ。ところで鷹司殿は何処かのう？」

「ハッ現場であろうよ。アレは前線上がりだ。我等の様に畳の上の
作法は知らんのよ。」

「普段は鷹司殿の腰巾着の癖によく言っなあ九条殿。」

「何い……？誰が腰巾着じゃと？！」

ダンッ

「ええい！そのような事はどうでもいいわっ！これからどうするのじゃっ！」

畳に手を叩きつけいきり立つ山科老人。

「何、簡単な事だ。天ヶ崎千草と犬上小太郎を始末すればよかろう？」

「そうじゃそうじゃ。あの二人を始末してしまえば話は終わりぞ！月詠は所詮狂人。証言能力も無いわ！」

「柚木宗一郎と面識があるのも鷹司殿だけじゃな。」

「いくら柚木宗一郎が獵犬の様にしつこかろうて、我等には辿りつけまい。詠春もワシらには手を出せんからのう。」

思い思いの笑い声が響く。

「どれ、ひとまず酒でも呑もうではないか。女将！酒だ！」

「ふう………ちよいと抜ける。」

「なんじゃ今出川殿、会合前から何度も何度も抜けるのは？」

「ひっひっひっ聞いてやるな冷泉。こやつ頻尿なのよ普段は女中にオムツを履かせて貰っておるのだ。」

九条老人の言葉に冷泉老人以外が一斉に笑い始める。
先程までいきり立っていた山科老人までも笑いを漏らす。

「なっ……女中の手など借りてはおらん！冗談も大概にしてもらいたいぞ九条殿！だ、大体だこの歳になれば下半身からガタが来るものだっお主らとてそうじゃろう!？」

「何を言っておるワシのココはまだ現役じゃ。」

「それで先月女中に手を出して別居か笑えるのう？孫の様な年齢に手を出すとはいやはや……。」

Side end

Side エヴァ

「ああもついい、盗聴の必要はない！耳が腐るっ!」

「はい、マスター。」

メールに載っていた茶屋は二店。
その内一店がコレだ。

「なあ茶々丸、こいつらは何故宗一郎の十分の一程度しか生きていないのにココまで下品なんだろうな？」

「それは宗一郎さんが上品だからでは……？元の出来が違つと言いますか……。初期不良？」

「まあ当たらずとも遠からずだろうな。そもそも宗一郎は何故、私が煽情的な姿で布団に潜り込んでも興奮しないのか……。やはり口リコンなのだろうか？ いやテオドラ皇女には今の年齢でも手を出した。何故だ……。？」

「娘か猫の類だと思われるのでは……。おっとコレは口に出さずに共通記憶に送りましょう。」

「ダダ漏れだポケロボ。巻いてやる！巻いてやる！巻いてやる！！」

宗一郎が与えた個性が知らんが茶々丸を筆頭に妙に感性がズレているような……。

とにかく飛び掛かり頭のネジを巻けるだけ巻き倒してやる！

「あ、あああーそんなに巻いては……はうっ……。」

「ハア……全く。まあ仕事に掛かるうじゃないか茶々丸。」

「は、はひっ。結果、始動します。」

茶屋から爺共以外が静かに何かに釣られるように出ていく。

効果は靨面なのだが
ふむ。

科学だの電気だのを併用する結果……さっぱり原理がわからん。

「標的以外の排除に成功。行けます。」

「うむ。」

乗り気はしないが、宗一郎が子供に始末させない理由はわかった。確かに

私が一番向いている。悪い意味では無く…な。どれ宗一郎の期待に答えてやろうじゃないか。

茶々丸に結界の維持管理を任せ、ゆつくりと私は影に沈む。

突然明りが落ちる。

「なんじゃ?」

「停電か…珍しい。」

「それよりも女将!酒はまだかつ!」

明かりが消え、いつまでも来ない女将に不満と苛立ちが募る。

業を煮やしふすまを開けるタイミングで今出川老人が飛び込んでくる。

「おかしいぞ!誰も居らん!」

「なんじゃと!」

ガタンっ

「何!？」

外へ出ようとするも外へ通じる入口が全て閉ざされる。

「な、何者だ!ワシらを関西呪術協会の重鎮と知つての狼藉かつ!
!！」

「フンツ他愛ないな関西呪術協会も。この程度の連中が重鎮か。」

「なっ!」「いつのまに!」「無礼者!！」

正に嫌悪感。

結界にも気付かず、私が静かに現れたとはいえ声をかけるまで気付かず…。

爺共は次々に符を取り出し

呪が放たれ

障壁で尽く弾かれ私には傷さえ付かない。

「……………本気でやってもいいぞ?」

「まさか我等の符が効かぬ?!」「馬鹿なっ化け物めっ!」「まさか……………その髪、この強さ……………」

詠春…

貴様も大変だな。

「エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル……………」

「なっ……………金色夜叉だと!?!」「不死女王……………」
「闇の福音……………」

っ！」

爺共がようやく状況の悪さに気付き逃亡を図るが無駄。

「開かぬ!?」「馬鹿なっ!?」

「か、金ならあるぞ!幾らでもある!」

「ず、ズルいではないか二条!」「金を持ってきておらんお主が悪いわっ!」

醜い命乞いの争いを始める爺共。

確かに。コレは子供の負う様な仕事じゃあないな。私や宗一郎の様な過去の遺物で無くては…な。
手をかざす。

ただそれだけで老人達はレジストする事も出来ず凍りついていく。

「このまま砕いてもいいが……茶屋の為だ貴様等には些か勿体無いが…。」

腕からエクスキューションソードが伸びる。

無音の一閃。

「さて、本会場もイイ感じに暖まってるじゃないか…。」

見上げる先には煌々と輝く光、荒れ狂う様な魔力。

覆い隠す筈の結界越しに感じられる異様な圧力。

木や森はざわめき、動物たちが啼く。

「さて、行くぞ茶々丸。急がないと出番がなくなるからな。」

「はいマスター。」

S i d e e n d

「ネギ……しくじったか。」

最早何体目が数える事すら出来ない鬼を切り飛ばす。

目の端。

光の柱へ向かって飛んでいた筈のネギとアーニヤが落ちる姿が見えた。

「数や！数で囲め！幾ら強い言っても一度にぎょーさんは相手に出来ひんで！！！」

既に刹那の姿は見えない。

意識を張る事も無くただ殺気の方へ刀を振る。攻撃を察知した方向へとヴァルキリースカートの刃が走る。

全方向に鬼、烏族、狗族、魑魅魍魎。勿論頭上も地中。暗器既に0。

妖刀と呼ばれた我が刀も既に食傷気味。

「獲った！！！！！」

身体の半分以上を断ち割られた鬼が叫ぶ。
刀を抱いて苦悶の表情。

殺到する鬼。

「アベアット。ロード：フェイタルアクション！」

分離させダブルトマホーク。

重力の方向を上へ最大限。

軽く当たるだけで紙くずの様に鬼が吹き飛ぶ。

作戦はネギの撃墜で破綻。

木乃香の意識があると確認できているのならば辺り一帯更地にして
しまっ手もあるが…。

多少被害は出るがコレを逃すよりかはマシだろう。

しかし木乃香と刹那を失うには痛すぎる戦場だ。

それにこの様な段階で魔法バレを引き起こす訳にはいかない。

「ロード：激戦。シルバースキン解除ロード：ニアデスハピネス！」

戦力戦術全てにおいて制限された状態。そこで自身が如何に戦える
か？

本番前の演習だと思えばいい。

本番は自身が育てた才能ある戦士達。

ニアデスハピネスを蝙蝠の羽根の形に固定する。

フォームの変わった俺を警戒して距離を開ける鬼共。
掌の上にわざとらしく蝙蝠を作り一体の目の前まで飛ばす。

「な、なんや蝙蝠…ッ!？」

掴まれる寸前に指を弾く。

爆音。

そして鬼共は気付く。

自分の周囲を飛ぶ大量の蝙蝠に。

「逃げっ……!」

Side ネギ

木乃香さんを視界にとらえた事。
これが僕達にとって致命的な隙になった。

「ヴィシユ・タル・リ・シユタル・ヴァンゲイト おお 地の底に
眠る死者の宮殿よ 我らの下に姿を現せ 冥府の石柱。」

「兄貴っ!!!上だ!!!!!!」

見上げた先は空を埋め尽くすほどの量と大質量の柱、いや最早壁と
言って差し支えが無い。

「アーニャー!」

避けようと二人で回避行動に入る。
しかし柱はネギの想定以上に長く大きく重い。

「あっ！」

杖の一部がかかる。

それだけで引きずられるように落下する。

「ネギツ！きゃあ！？」

「っ……。」

とんでもなく痛む身体を引き起こし周りを見渡す。
膨大な数の石柱。間違いなく高位の魔法使い。

「やあネギ・スプリングフィールド。」

地面から数センチ浮いている白い髪の少年。

「君は……。」

ネギは驚きつつも白髪の少年の目を見返し少年の名を尋ねようとした。

「君に何も思う所が無いわけじゃないけれど、今、君に、あそこに
辿り着かれるのは困るんだ。」

返答は名前ではなく目的。少年の右手に光が灯る。

「何である人に協力するの！？あの人は僕の友達をさらって酷い事をしようとしているんだよ?!」

「端的に言えば世界を救う為。」

「…え？」

少年の思いもよらない返答にネギの思考は中断される。何を言っているのか一瞬理解できなくなる。

そしてそれを逃すフェイトでは無い。

「ヴィシユ・タル・リ・シユタル・ヴァンゲイト 時を奪つ毒の吐息を 石の息吹。」

「フォルティス・ラ・ティウス・リリス・リリオス 火精召喚 槍の火蜥蜴29柱！！集い来たりて吹き飛ばせっ！！」

ネギに石化のの息吹が届く寸前にネギを護る様に火属性の魔法の射手が着弾し煙を吹き飛ばす。

「ネギッ！ボサツとしないのっ！私達の目的は何?!」

「木乃香さんを助ける事！」

「させないよ。」

「がっ…。」

一瞬。一瞬意識が逸れただけで懐に潜り込まれ、肘で撃たれ吹き飛ばネギ。

「ネギ！フォルティス・ラ・ティウス・リリス・リリオス 火精召喚 槍の…」

「遅い。ヴィシュ・タル・リ・シユタル・ヴァンゲイト 小さき王、八つ足の蜥蜴、邪眼の主よ。その光、わが手に宿し、災いなる眼差しで射よ。」

「しまっ……。」

ドンッ！

アーニヤを射るはずの石化の光は巨大な手裏剣によって止められる。

「何！？」「え？」

フェイトは眼の端に動くものを捉えた。そちらへ反応しようとした、その刹那。胸に手が添えられる。

「くっ…。」

吹き飛ばされるが、木に身体を打ち付ける前に蹴り飛ばし体勢を整える。

「残像に分身攻撃……。良い密度だね。」

「長瀬さん……！」

「何やらとんでもない敵の様でござるな…アーニヤ殿、ネギ坊主。」

Side end

Side 楓

「何やらとんでもない敵の様でござるな…アーニヤ殿、ネギ坊主。」

救援に来たつもりだったでござるが………コレは不味い。

今の”二撃”

あの光を手裏剣で止められたのは幸い。

その後の攻撃、全力を出して一撃が通ったのみ。

分身15体の殺気を持つ攻撃。それは見破られていたでござる。

一つ間違っていれば落ちていたのは拙者の首でござる。

現に分身15体は構成を保てぬほどの攻撃を受けているでござる。

通った一撃も拙者としては動けぬようにする程の一撃。

しかし実際は……。

「分身は16だった様だね。見くびっていたよ。」

「出来ればもっと拙者を見くびって欲しいでござるよっ。」

油断無く構える少年。

隙が……無いでござる。

「アーニヤ殿、ネギ坊主と目的を……足止めをする自信は無いでござる。」

ざるよ?」

「援軍か……。これは”彼”の呼んだ援軍では無いね……。」

真名、恨むでござるよ?」

”これは……想像以上でござるな。拙者が……”

”楓は先行して綾瀬を保護して少年の所へ。私はシトーさんの横に行く。”

”ま、真名…（欲望丸出しでござるな!）”

”行ってしまったアル。”

”古、ココに残って戦うといいと思うでござる。ちよつとばかり重
いし大きいでござるが……。”

どう考えても作戦ミスでござるよ!??

麻帆良武道四天王とか言ってるでござるが実力差は

刹那、真名、拙者、古の順でござるよ!??

内心は大混乱。外はフェイトと極限の睨みあい。

実際の所、フェイトも内心”忍者。話は聞いていたけれど本当にいたのか…。環辺りは聞いたら喜びそうだね…。”などと考えているのだが外からはまるでわからない。

「彼”とは誰でござるかな？」

夕映殿の言った襲撃者との少年は違う様でござるな…。

「…………… 柚木宗一郎。」

確信は持てぬでござるが、少年は柚木先生と戦える段階にいる。
不味いどころか最悪でござるよ。

それでも…。

「甲賀中忍、長瀬楓…………… 参るっ！」

S i d e e n d

自分ごと周囲を吹き飛ばしての仕切り直し。

「兄さん… 滅茶苦茶や。アンタみたいなのと戦ったのは初めてやで。」

「褒め言葉として受け取っておこう。ニアデスハピネス、激戦解除。
ロード：ライトニングペイルライダー、シルバースキン。」

もっとも戦略的柔軟性の優れる槍を抜く。

突撃を敢行する為に半身を引く。

そして……………
俺は鬼共のド真中に突如出現した妙に綺麗な”段ボール”に気が付いた。

「なんやコレ？」

鬼の一匹がそれに気が付き、近寄り。
そして……「よいしょっ…ッ!？」

爆炎と共に木つ端微塵に吹き飛んだ。

「何や!？」 「新手やと!？」

「真名か…。」

S i d e 刹那

「ほらほらほらほらあ あああ!」

「くっ…ハアアアア!…!」

「センパイええわあ ホンマにええわあ 最高や!ウチの理想や!」

「ぐうう…黙れ!黙れ!黙れ月詠!」

神鳴流奥義の撃ち合いは既に終わった。
斬撃が飛び交う。

一閃、二閃、三閃。既に目では追えぬ速度に至り、不可視領域での剣戟は音だけがその存在証明となる。互いに技は使えない。この速度での応酬に気を練る間は致命的な隙になる。最低限の動きで最も効率的な攻撃を撃ちあう。本気の殺し合い。この場で決着を付ける覚悟。この場でウチに何か劣っている部分があるとすれば人を殺した事がないという事。

近づく鬼は細切れとなって霧散する。

ギッ

先程から何度も夕凧が啼く。

(マズイ……。夕凧がもたないッ！)

「…ッ！旋風！」

「おー…ふふふ。神鳴流とその変な流派…その二つしか無いんやねーセンパイ。幾ら神速で撃ち合おうと基本は神鳴流。その構えから変わったら変な技が来る。予測出来たら怖い事ありまへん。」

技は避けられ…光の柱がその輝きを増す。
詠春様申し訳ありません。

夕凧を…折ります。
夕凧、ごめんな。

肉が裂け血が噴き出る音が響く。

「は…え…？」

ボトリと月詠の右腕が後ろに落ちる。

月詠の肩口からシャワーの様に血が噴き出す。

刹那は木乃香との仮契約の産物。アーティファクト その名、タケミカズチ 建御雷。
そして刹那の白き翼。

「センパイ…翼なんてあつたんかいな…とんだ奥の…手やわ。」

月詠は悲鳴を上げる事も無く

ただ嬉しそうに飛び去る刹那を失血で気を失うまで狂気の瞳で見つめていた。

S i d e e n d

月夜に刹那の翼が広がる。

「刹那は行ったか…。」

「ああ…。見事な剣だった。」

いつの間にかに背中の方に温もりがある。

俺の影に転移してきたのか…ネギの方へ行ってくれる方が後が楽

なんだけどな。
それでも笑みが浮かぶ。

宗一郎とエヴァは背中合わせで敵陣の真ん中に立つ。

(シトーさん。援軍は必要かい?)

段ボールを爆破した真名の念話。

(来なくてもいいと言っても来るんだらう?)

先程と似た様な段ボールが現れる。

ザワリ、ドヨドヨと鬼にざわめきが走る。

段ボールがスつと持ち上がりカジユアルな服で銃を構えた真名とカ
ンフーっばい衣装で構えた古が出現する。

「おおぅ!?!」

鬼の中にどよめきが広がる。

「これは……中々の団体さんだね。古を連れて来るんじゃないか
った。」

「ギヤアア!」「ぐはっ!?!」「なんやっ……がはっ……?!」

「うひゃー硬いアルねー!真名連れてこないなんて仲間外れは困る
アル。」

舐めて古に掛かった鬼が吹き飛び叫ぶ。

「ハッ…せっかくのシリアスをブチ壊してくれるじゃないか…。」

「しかしまあ宗一郎、こいつらを殲滅してアレを始末する事になりそうだな？」

天を衝く光はどんどん力を増していく。

「仕方ないさ…。しかしまあ4人もいれば不可能ではない。」

「シトーさんは”またゴミだ。”って嘆いたけれど意外と色々出来るだろう？私のアーティファクトは。」

ニヤリと笑って取り出されるカードは事故で結んでしまった仮契約の証。

アーティファクト”蛇の段ボール”。

sneakとsnakeを掛けてんだか掛けて無いんだか…。

そもそも何でラテン語表記じゃないのかと…。

「ところでアレは…爆発するのかな？」

試しに出した時に突然真名が”被らなくては…”などと言いだした挙句に俺も無理矢理引きずり込まれたのだが…アレ、爆発したのかな？

「種類があつてね。片付いたらゆっくり見せるよ。」

「それはよかった。で、何故古がいるのか聞かせて貰おうか？」

「にやはははは…いやぁコレ本物アルか？」

どうも殴っても実感がならしく手を握ったり開いたり拳を確かめる古。

ほのぼのと話してはいるが

辺り一面は女子中学生の、いや女子供が見る様な状況では無い。

「本物だ。怖くなったら逃げていいぞ？それぐらいの脚力はあると俺は思っているのだな。」

「大丈夫アル！」

握り拳を作つて答える古。

「よし結界は強化して張つたぞ宗一郎。存分に戦え。」

「ありがとうエヴァ。二人共、逃げだした連中を優先で討つてくれ。」

「私達は……。」

「少々本気を出す。」

「了解。」「わ、わかつたアル。」

「さて、征こうか宗一郎。」「ああ征こうかエヴァ。」

「武装錬金……ロード……ブレイズオブグロリー……」「術式兵装……氷

夕映は楓に抱えられながら戦場を移動する。
目にするのは神秘の塊。誰しも子供のころに憧れた魔法の世界。
常識が覆る。

「不味いでござるな……夕映殿。」

「なんでしょうか楓さん？身体が薄く…？」

抱えられていた私の足が地面に着きました。

「夕映殿、ここからは一人で走るでござる。恐らく本山と言われる
ところが一番安全で…。」

フツと楓さんが消えてしまい私はポツンと取り残されてしまいまし
た。

「泣かないです。楓さんも手が放せなくなっただけです。だから…
…。」

夕映は一度逃げだした本山へ向けて走り出した。

S i d e e n d

S i d e 楓 v s フ ェ イ ト

「……………状況は終了した。」

「何…。」

ネギ坊主とアーニヤ殿を逃がして数分。
突然白髪少年はそう声を発した。

「まさか日本に忍者が実在したとは驚いたよ。でもココまでだ盤上に全てが揃った”石化の邪眼”」

無詠唱の石化の邪眼。

「くっ…。」

避ける事すら出来ず直撃。

身体の中から足先、手先、そして顔まで石化していく。

「さよなら甲賀忍者。君は厄介だ。」

フェイトは掴んだ石の槍を投擲。

楓の石化した身体は砕けて散らばる。

「……………騙された。これが変わり身の術か。厄介だけど……………うん。面白い。」

トプンッ

フェイトは水の塊となって消える。

それを確認してか楓の声が漏れる。

「ハアハアハア……くっ……。」

石化し始める身体。

分身を使つて必死で自身を運ぶ。

「真名には感謝しておくべきでござろうなあ……このアミュレットとやらが無ければ今頃アレでござる。」

目線の先にあるのは石化し砕かれた丸太。

「これが……拙者の限界でござるな。柚木先生……ネギ坊主を……。」

S i d e e n d

S i d e 千草

「ただいま。」

「えらく遅かつたやないか祝詞はもう読み終わったで？」

言葉通り光の柱の中に明確に四つ手二面の姿が見えている。

光が収まれば完全復活。

「来たね。」

湖面に白い波が立つ。

「ナギ・スプリングフィールドの子供か…。」

やっと来たか。父様と母様の仇、討たせて貰うえ。

S i d e e n d

楓さんに足止めをして貰ってようやく僕等は湖に辿り着く。
目指すは祭壇。

「アーニャ!」

「何?」

「高度を下げて作戦は で、だから で、どうかな?」

「いいじゃない!流石私を抜いて首席卒業なだけはあるわね。」「
流石兄貴だぜ!」

「契約執行300秒間!ネギの従者アンナ・ユーリエウナ・ココロ
ウア!」

「行くわよ!」「うん!」

「加速！！」

二人は並んで湖面スレスレを高速で飛翔する。

「貴女は制御を続けて。ライク…ルビカント、彼らの足止めを。」

片角の悪魔がネギ達に向かって飛翔する。

「ネギ！」

「大丈夫！」

「最大加速！」

悪魔との激突の寸前

「解放 白き雷！」

白き雷は悪魔を貫き橋桁まで砕く。

そのまま最大速度での飛翔。

「吹き飛ばせ炎！アーニャフレイムー！ナツクル！」

炎は湖にアーニャと共に激突する。

「あつっ…！何や!？」

「爆発で大量の水をあげ、熱で水蒸気に……これに紛れて近づく気かい？無駄な…。」

「加速追加!」

その声と共に杖の後ろが激しく燃える。

「そこかっ!」

フェイトは気配のする方向へ手を向ける。

「障壁突破石の槍!」

が、突き出した石の槍の軌道上には何も無い。

「ッ!？」

身体の数センチ横を火が付いた杖が通り抜ける。

「杖…?」

ダンッ

ネギは後ろの柱の一つに接触。

「雷の暴風!!!」

「！」

ドオンッ

橋桁の大半を吹き飛ばしフェイトに直撃。

「やった?!」

煙は晴れる。

「…で？」

「う、うそ……今の威力で…障壁を抜けないなんて…」

「はぁ…つまらないよ。この程度の威力かい？ナギ・スプリングフ
イールドの子供だろう?」

「につ…。」

「何がおかし…。」

ズンッ

「がっ…あっ…。」

「硬い障壁だけど……絶対破れない程じゃないわね?」

後ろからアーニヤの蹴りが炸裂した。

「君は湖の上で墜落した…はずだ。」

「便利よね？従者召喚って。」

「杖よ！」

ネギが杖を呼び寄せ、私は構える。

「ネギ！」

「わかってる今のうちに木乃香さんをツ？」

木乃香が寝かされていたはずの場所に木乃香は居ない。

そして…復活は成った。

「ふふふ…一足遅かったようですねあ復活儀式はたった今終わりましたえ。」

天を衝く光は裂け、中から二面2対の腕を持つ巨人が出現する。

「そんな…あんなっ…あんなの…。」

「オイオイオイオイちよっと待てよデカすぎるぜ！」

ネギが苦し紛れに放った雷の暴風もアーニヤの炎の烈風も全て弾かれる。

「アハハハハハ！それが精いっぱいかいな！まるで効かへんわ！

このかお嬢様の力で制御可能な今、もう何も怖いモンはありませんえ！なにもかも蹴散らしたるわっ！！まずはナギの息子！お前からやー！！」

「く…くそおっ…。」

「ネギ！諦めないで！何か策は…何か策があるはずよっ！」

「そっただぜ兄貴！しっかりしろ！」

「中々いい作戦だったけれど…：…：幾ら君でもアレには勝てないだろう？僕に攻撃を通した所まで良く頑張ったよサウザンドマスターの係累達。諦めてココで散るといい。」

「ネギ、一旦下がるわよ！ここじゃ腕の一振りでも吹き飛ばされるわ！」

「う、うん！」

「逃がさないよ。ヴィシユタルリシユタルヴァンゲイト小さき王八つ足の蜥蜴邪眼の主よ時を奪う毒の吐息を！ 石の息吹！」

石に変える煙が一面を満たす。

「……………しまった……………大きすぎた。」

「アーニャー!？」

「だいじょう……ぶじやないみたいね。」

アーニヤの足に、ネギは腕に石化を受けた。
発動の直前にお互いを庇いながら跳んだが……。

「さて……どうしようかしら？アレを倒せそうな人は遙か後方。木乃香さんを取り返すにもあの呪符使いと一緒にアレの肩の上。ネギも私も石化途中で飛翔は無理。そもそも私は杖がもたない。見事に詰んだわね。」

何かを諦めた様子でアーニヤが大鬼神を見上げる。

「とにかく逃げようアーニヤ。」「そうだぜ姐御！らしくねえぜ！」

「アンタは一人で逃げなさい。私は……足手まといよ。ここがフロントラインじゃなきゃ私も何とかって思うけど……いけ好かない白髪のアレとあの鬼神。あの呪符使いが制御に手間取ってる間に逃げて。」

「アーニヤ！」

「刹那！？」

「刹那さん！？」

刹那の背中に広がる翼。片翼が血で濡れた純白の翼。

「私がこのちゃんを取り返します。」

「それしか無いわね……。行つて！」

「ここにいたのかい？」

煙が晴れてそこまで離れていなかったネギとアーニヤ、更に刹那は当然の様に見つかる。
構わず刹那は飛翔する。

「魔法の射手 光の一矢！」

刹那を落とそうとしたフェイトの手にネギの射手が命中する。

「あくまで邪魔するというわけだね？」

フェイトの目がネギとアーニヤに向く。

「アーニヤ…僕は、逃げない。」

「ネギ!？」

「（まあ舐めた大馬鹿で糞つたれな発言だがその勇気だけは買っ
やる。）」

「え?」「なに?」

「（いいか野菜少年?死ぬ気で戦え。3分…あー…まあそれぐらい
で行ってやる。）」

「作戦タイムは終わりかい？」

「終わったよ。」

手に弓が現れる。

「あ、アカン……。」

千草が逃げる。そして……スクナの制御は解けた。

「エヴァ、残党は頼めるか？」

「任せる私も出番が欲しい。」

「何か漏れてはならない言葉が漏れたが任せる。アデアット。」

取り出したカードはテオとの契約カード。

黒翼を展開、刹那の様にスクナの元へ羽ばたく。

「流石に疲労が溜まって来ている。しかも完全に顕現したか……これだから御霊信仰は困るんだ。」

と独り言を呟き気が付いた。

スクナが弓を弾いている。

狙いは言うまでも無く……。

「ロード：シルバースキン……！」

空に爆炎が広がる。

「柚木先生!？」

「うそ……。」

「師匠!？」

黒い翼を広げた銀色の影がスクナの放った矢とぶつかり消し飛んだ。

「……意外な結末だね。悪いけど僕はここで退場しよう。」

橋桁から湖に溶け込むようにフェイトの姿が薄れる。

「そんな……。」

「ネギ!行きなさい!」

スクナは第一射に満足し第二射を構える。

狙いは…エヴァンジェリンが支える今の最前線。フロントライン

「まずい……!フォルティス・ラ・ティウス・リリス・リリオス来れ火精 風の精 炎を纏いて焼き尽くせ 地獄の嵐 炎の烈風!」

アーニヤの魔法がスクナの右目に命中しスクナがひるみ顔を背ける。

しかし衝撃で傷んだアーニヤの杖は焼け付く様にその役目を終える。

「行きますっ！神鳴流決戦奥義！真・雷光拳。」

ズズンッ

初めてスクナの足が一步下がる。

「ははっ……これで一步……。」

これだけやってようやく一步である。

そしてようやくスクナは下を見る。

「アーニヤ、ネギ先生！！最大防御の障壁を！」

弓に番えた矢は消えスクナの口腔に光が凝縮される。

もしまともに受ければ影も形も残らないだろうことが容易に予想できる。

「刹那さん！」

「刹那は木乃香さんを連れて逃げて……！」

「う、ウチは大丈夫やから。結界ぐらい貼らせてえな。」

「それにもう逃げるだけの時間はありません。ありったけの符を使ってもこの一撃を耐えられるかどうか……。」

ザッと先頭に刹那が出る。

後ろにはアーニヤとネギの障壁。全員を覆うように貼られた木乃香の障壁。

「全員吹き飛ばされたらすみません……………来ます!!!」

カッとスクナの口が開かれ光が放たれる。

祭壇を砕き水を巻きあげ橋を砕いて迫る。

「…………ゴクリ。」

凄まじい衝撃と音の中、誰かが唾呑む音が響く。

接触の瞬間は何百倍にも引き延ばされる感覚。

遂に自分のすぐ近くの橋が砕かれる。

「シルバースキンリバーズ！」

衝撃波と共に暗黒に包まれる。

直撃の寸前に師匠の声が聞こえた気が……………。

スクナの一撃はエヴァの直ぐ傍まで伸びる。

「え…………。」「これは…………。」「師匠!」「師匠無事やったんや!」

「刹那よくやった…………。いいか?少年、特別だ。特別に見せてやる。このような大規模な戦いでお前たち魔法使いの役目は只一つ。最大火力で敵を屠る砲台だ。」

一瞬で刹那達は湖の外へと飛ばされる。

「……ここならば市街地を消し飛ばす憂いも無い！来い！ロード：
バスターバロン！！！！！」

結界もエヴァが相当なモノを張った。

それに……下手な武装錬金では飛驒の大英雄に失礼と言うモノ。
かくして京都山中に二人の巨人が現れる。

片や飛驒の大英雄スクナ、片や帝国の英雄が操る錬金の巨人バスターバロン。

ただ掬い上げるような腕の一振り。

それだけであるスクナが弾き飛ばされる。

「ロード：ブレイズオブグロリー！いくぞ？ガンザックオープン
！」

炎を纏い、炎を推進力に足したバスターバロンの突撃推進。

その威力、地上兵器は元より全ての武装錬金中トップを誇る破壊力。

「ゴアアアアアアアアア！」

咆哮。口腔に溜まるのは先程よりも強い光量。

「眠れ飛驒の大英雄！！さすれば飛驒の地に必ず返してやる！！ブ
レイズオブグロリーイイイイイイ！！イグニッション！」

スクナの一撃を止め鬼達の氷像を尻目に溜息を吐くエヴァ。
パチン

指の弾く音に誘発されたかのように次々と鬼が砕かれて還っていく。
その光景は正に壮観。

「だが……私がやりたかつたな……。ああいうデカブツを砕いた時の
羨望の目が堪らないというのにな。」

「はあ……はあ……はあ……はははっスクナでもアカンのかいな。流石、
流石やほんま……ウチなんかやっても敵わん様な人なんや。」

ザリッ

「鷹司はん!？」

森から現れるのは鷹司老人。

「失敗したのう天ヶ崎……。」

「ああ。初めから何もかも失敗や……木乃香お嬢様かて自分から協力
してくれはったから攫えて、スクナを召喚出来た。拳句力を貸して
貰ろうとんのに制御が出来ひん完敗や。ウチの負けや。」

「逃げて再起を図るかのう?」

「無理や。あれ以上のもんもあらへんし、操る事も出来ひん……ウチに出来るのは……。」

森の奥で自害する事しか無い。その為のモンはちゃんと持つとる。

その言葉を遮り鷹司老人が口を開く。

「まあそうかもしれないねえ……でももの……お主が捕まると我らが困るのよ。」

懐から抜かれるのは拳銃。

「なっ!?!?どういうこと……。」

「君はここで彼らに討たれて死ぬ。……そういつ事じゃよ。」

撃鉄が起こされる。

そうか、それでも……ええかな?自分でやるんも、やられるんも一緒や。

「すまないねえ……ワシの見通しが甘かったばかりに。」

引き金が引かれるその寸前

「ダンナ……待ツタ甲斐ガアツタゼ。」

「なっ!誰だ!?!」

声が辺りに響く。

「女、自分の目的、欲望、理想ノタメニ、他人ノ犠牲ヲ厭ワヌ者。ソレガ悪人ダ。ダガ誇リアル悪ナラバ、イツノ日力自ラモ同ジ悪ニ滅ボサレルコトヲ覚悟スルモノダ。才前ニソノ覚悟ガアルカ？」

「誰だ！何処にいる！！！」

鷹司老人は千草から銃口を外し周りを見る。

「覚悟ガネエンナラテメエハ、タダノバカカ、三流デ腰抜ケノ小悪党ダ。誇リナキ悪ハ、地ベタニ這イツクバツテ死ニヤガレ。サアドウダ答エ口。」

「ウチは元々生きて帰るつもりはない。ナギ・スプリングフィールドにもその子供にもほとんど逆恨みや…ちょっと関わったぐらいのな。それでもウチはただ許されへんかった。ただそれだけや。アンタに討たれても鷹司はんに撃たれても、自分でケリ付けるんも一緒や。」

「黙れ天ヶ崎！誰じゃ！出てこい！」

半狂乱の様に叫ぶ老人。

「ソウカ……ワカッタ。ダケドナア…爺、テメエハタダノ腐レ外道ダ。」

「ひっ！」

鷹司老人の肩に何かがトンと乗る。

「テムエダケハ……死ンデオケ。」

一閃。

ゴトリと老人の首が落ちる。

そしてそのまま剣は千草に振り下ろされる。

千草は正座し目を瞑りただ待つ。

「……………」

ザンツ

「え……？」

剣はスレスレの、動けば死んでいただろう部分を通り千草の目の前に突き刺さるのみ。

「マア……ダンナノ頼ミダ。御主人モ甘イシ……テムエハ生カシテ
オイテヤルヨ。」

「ハッ……！……ゆ……夢？」

「夢なものかバカタレ！」

飛び起き叫んだネギの脳天にエヴァの拳が落ちる。

「あ、ネギも起きたんだ…。」「ネギ坊主、無事でなによりでございます。」

アーニヤと楓の頭にコブがデカデカと出来ている。

「前に出た三人全員石化。貴様等これが永久石化ならば今も石像だという事を覚えておけ。」

「すみません。」「ごめんなさい。」「悪かったでござる…。」

「まあ奴が前フエイトに出ずに後ろに控えていた事、真名が一部原因であることも鑑みて拳骨で済んでいると覚えておけ。」

パンツと良い音をさせて駆けこんでくる木乃香。

「師匠!!！」

「なんだ朝飯か？」

「りよ、旅館でウチらの紙型が暴走してるて連絡が…！」

「詠春…！くそっ全力で戻るぞ…！さっさと着替える野菜少年！」

「は、はいい！」

67話：修学旅行三日目。 英雄vs英雄 終局。（後書き）

突然寒くなりましたが皆様、「耐寒訓練です！」と隣で犬耳刹那が頑張っていると思つて生き残りましょう。

「耐寒訓練や〜！」でも「この程度耐寒訓練にもなりはしないよ。」でもokですが、

「ハハハハハ！この程度も耐えれんのかっ！！！」という金髪の吸血鬼の高笑いが聞こえたら急いで暖房を付けましょう。
多分手加減を忘れていきます。

次回

修学旅行篇最終話

10月中に修学旅行篇は終わりませんでしたっ！
しかもちよつと荒い気が…orz

P.S. 親知らずを甘く見て放置した結果来週手術です。

NEW! 設定へ追加。

龍宮真名アーティファクト 蛇の段ボール” snake snake
eak”

アーニヤのアーティファクト 炎熱籠手、火炎の靴

アーニヤの場合原作で成就すれば変更有り。

68話・修学旅行最終日 闇と思惑とナギの家

京都・嵐山・旅館

S i d e アーニヤ

一部屋に雑魚寝の様に倒れる生徒達。

「あふう……おはよう刹那……早いよね。」

アーニヤの目が覚める。
視界に入るのは外を眺めている刹那。

「ええ……大変な一夜でしたね。」

「……でもこうして嵐山の旅館で寝転がっていると昨日の事って何か夢みたいね……。」

「ふふ……そうですね。傷も消してもらいましたしね。」

アーニヤはゆっくり起き上がろうとして……起き上がる事は出来なかった。

「あ……駄目……筋肉痛みたい……アイタタ……。」

「ふふっ……もう少し休むといいですよ時間はまだありますから。」

アーニヤはその笑顔に白い翼を幻視した。

朝日に輝く純白の天使の羽根を。

Side end

旅館 宗一郎の部屋

朝起きた時点でエヴァはどこかに行ったのか居ない。

これ幸いと一人静かに考え事していると無言で木乃香が扉を開けて入って来た。木乃香にしては珍しい事だ。

「どうかしたのか？」

「師匠：ホンマにええの？」

何時になく真剣な木乃香の顔と瞳。

「……………何のこと」

「千草さんの事や！解って誤魔化すん辞めてえな師匠！」

その剣幕に言葉に詰まる。

「千草さんの過去をウチは見たんや。師匠が殆ど話してくれへん大戦の記憶や！」

「記録は見せたはずだ。」

製作された映画や実写込みの映像記録は帝国、連合、アリアドネー製を無作為に見せた。

「それは”記録”であって”記憶”やない！表の公表されとる事だけや！そんな時師匠が何思とったんかも何か裏があるんかも知らん！」
ようやく木乃香が真に言いたい事がわかった。

木乃香は、千草の記憶を見たんだろう。意図的か副次的なものかはわからないが…。

「何を見た…？」

「連合の魔法使いが病院を襲撃した所や。助けられたんも千草さんだけの事件や……。」

「そうか…。」

「あんな事件どの記録にも無かったえ。」

「当然だ非公開記録だからな。帝国も連合も非公開の作戦がいくつもある。全て公開すればどの国も団体も組織も機能しなくなる。」

「師匠がウチらに言った夢は何なん？！誰も泣かない世界が欲しいって！タカミチ先生やウチらが自分の正義を貫ける世界を作りたいって！アレは嘘なん！？」

「それは……。」

「幾ら内政不干涉や政治問題や言つても引き渡したらどないなるかなんて想像せんでも解るやん！……お父様はそんな無茶な事せーへんやろうけど……。」

想像の必要など無い。極刑か幽閉以外に何かあるのか。

詠春の事を信頼していながら、それでも長としては信用していないのか……。

「一歩間違えてれば小太郎君はせつちゃん、千草さんは……！」

「止める！木乃香お前……自分から付いて行つたのか。」

考えてみれば、いや考えるまでも無く酔っぱらつてもいない万全の状態の木乃香ならばフェイト以外ならば危なげなく戦えた筈だ。それが碌な戦闘も無く連れ去られた。今思えばおかしいと誰もが勘付いても良かった事実。

「せつちゃんにも師匠にも悪いとは思つたけれど、千草さんは全部背負い込む気やった！誇りある悪やった！」

「お前……。」

木乃香に対する怒りが生まれる。手を振り上げる。木乃香は目を瞑る事無く見返したまま。
そして

「宗一郎。お前の負けだ。」

ただそう宣告された。

「マスター！」

「エヴァ……。」

窓の棧に腰掛け朝日に金の髪を輝かせたエヴァが何時の間にかいた。

「チャチャゼロに助命のチャンスを与える様に言ったのは誰だ？ いやこの言い方は間違っているな……なにしろ宗一郎しか居ないんだからな。チャチャゼロが”真面目に”指示した事を聞くのは宗一郎からの言葉くらいなものだ。」

小声で私の命令だとテキストにやるあの性格はなんだ？と聞こえるが聞こえないフリをしたほうがいいな。逆鱗に逆撫でた上で煙草を押し付ける様なものだ。

「え？」

木乃香が俺を見て固まる。

「……………」

余りの気まずさに俺は言葉も出ない。

「本来のお前なら迷い無く殺すだろう？チャチャゼロも端からアレを殺す気は無かった。そもそも私と私の従者は女子供は殺さない。なのにワザワザそんな事を頼んだ時点でお前の心は決まっているも同然だ。」

エヴァは言葉を一度切り、

「今度こそ助けたいのだろうか？」

「……………寝る。」

そう。俺が詠春にただ一言こう言えばいい。助命してくれと。関西呪術協会とて大きいとは言え所詮は一団体。

それどころか今の一番の収入は空前の日本、旧世界ブームである帝国との貿易による利益。

それに命令を効いて動いていたから仕方がないという大義名分も作ろうと思えば作れる。

だが俺はソレを決断できないでいる。理由など解らない。意地なのかもしれない。

無意識に詠春を信頼しているのかもしれない。

フェイトとの会話が尾を引いているのかもしれない。

……甘くなっただけのロクデナシなのかもしれない。

「師匠！」

背を向けて部屋を出ようとする俺に木乃香の声が追う。

行く先など無いが……いや瀬流彦なら無理が通るだろう……。

「凍る大地。」

しかしそんな俺の脚がビシッと音を立てて床と一体化する。冷静な話、床は痛まないだろうか？

「何を……？」

「馬鹿者。寝る？何を言っている？お前は散々ガキ共とデートを楽しんでおいて私は茶々丸と女二人で寂しく京都奈良観光だと？最終日の今日は私とデートに決まっているだろうが！拒否権は無い！」

「へ？マスター！？」

そのセリフは俺のセリフだ木乃香。

「木乃香、お前は付いてくるな。他の連中にも厳命しておけ！さあいくぞ宗一郎！」

「ちよつまっエヴァ！おい！」

「ドナドナや。」

救援は頼めそうにない。

「やあ皆さん、休めましたか？」

「どうもー長さん！」

「タバコアカンー！」

約束した時間に多くの人間が集まる。

俺やエヴァ、ネギ、アーニヤ、早乙女、綾瀬、宮崎、朝倉、刹那、木乃香、雪広、茶々丸。

「この奥で三階建ての狭い建物です。」

「ねえねえ何処へ行くの？」

「何でもネギ先生の父親の別荘に…。」

「へー。」

「ネギ先生の…パパ…。」

生徒達の多くは多くは知らず興味本位で付いてきたようだ。

詠春曰く”まあ大丈夫でしょう”何て微妙な返事が返ってきたが…。
生徒たちが後ろでワイワイと盛り上がる中詠春がソツと近付いてくる。

「スクナの再封印は完了しました。」

「そうか…。なるべく早期に彼を飛騨に返してやってくれ。彼にとつて京都は最悪の敵地だ…。飛騨の地でなら彼も暴れる事は無いさ。あの時言った通り将門公の首塚がある。彼は手厚く奉れば民に庇護を与える人だ…。京都の首塚は粗末にも程がある。」

「わかりました。その様に計らいます。それから各所の結界、要所は既に再建に入りました。」

「そうか、何から何まで悪いな。」

「いえ…今回は迷惑をかけました。もっと良くスクナを調べておけば…。」

「まあ今回は仕方がないさ。」

「そう言えば何故かその辺りの所に妙に詳しいんだな宗一郎。」

「ん、ああ…大昔にちよつと…な。」

そのセリフにエヴァと詠春は”本当に一体幾つなのか聞くべきなのだろうか？”と思ったとか何とか。

茶々丸は冷静に

西暦427年（仁徳天皇崩御）以前に生まれた（約1600年前）と推測したとかしなかつたとか。

「長さん、小太郎君は…。」

ネギが心配気な顔で詠春に尋ねる。

「彼は比較的早期に捕縛された事もありますし、牢破りは無理矢理操作されてのものですからそれほど重くはならないでしょう。が…それなりの処罰はあると思います。天ヶ崎千草についても…まあその辺りは私たちに任せてください。」

「詠春、その辺りは少し後で話したいが、先に重要な事を言う。黒幕の大半は始末してしまつたが二人逃がした。」

「誰です？」

「名乗つたからには間違いないだろうし、気配が似ていたとは思つが…フェイト・アーウェルンクス。大分様子は変わっていたが完全なる世界のフェイトだ。それから神鳴流の月詠。」

驚いた事に月詠は片腕だけ残して消えた。

化け物度合いで言えば俺やエヴァとタメ張れるんじゃないかと思う。

「しかし彼は20年以上前に貴方が……。」

「目撃例……というか直接指示するような行動だけならば5・6年前にあつたな……。」

エヴァが天船事件の事を出す。

「わかりましたこちらでも警戒しましょう。月詠に関しては……念の為山狩りを行っていますが状況を聞く限りは……。」

「あ……言い忘れていたがガトウやお前が昏倒した毒を受けても即日復帰したぞアレは？」

「あのナギが”汚ねえっ！！ズルいぞチクショー！”って叫んだアレですか？」

「ああ。」

「人員を増やして範囲を近畿全域に広がります。」

結局月詠の正体は詠春から聞けなかったが様子を見る限り聞き出せそうにない。

まあ脅威の度合いとしては得意の二刀が出来ない以上かなり下がったと言えるだろう。

もうすぐ着くだろうそんな時、おずおずと刹那が出て来る。

「あの…長。」

「どうしましたか刹那君？」

「申し訳ありません！長から頂いた剣を折ってしまいました。一応回収できるだけは回収したのですが…。」

「気にしないでください刹那君。木乃香を守ってくれと渡した剣です。木乃香の為に折ったのなら仕方ない事です。それに…剣も物、いつかは土に還るモノです。残った剣は加工し終えたら麻帆良へ送ります。ですからこれからも木乃香の事を…。」

「はいっ！命に代えても！」

「おい刹那物騒な事を言うな…お前は青山鶴子や青山素子に勝てるように鍛える予定なんだ勝手に死ぬな。」

「は?!」

刹那の顔が愕然・呆然という顔に変わる。

「そういえば鶴子君がまた試合がしたいとか何とか…。」

「断る。滅殺斬空斬魔閃を喰らうと流石に再生に時間が掛かるんだ。あと殺してはならない相手を全力で戦うのは勘弁願いたい。」

そんなこんな会話をしている間に馬鹿の隠れ家^{ナギ}が見える。

「ここにです。」

詠春が指すその家は草木茂り白い壁がほとんど見えなくなった天文台付きの住居。

「なんか秘密の隠れ家みたいねー。」「天文台があるー。」「おー…。」

生徒は口々に感嘆の声を上げる。

「10年の間に草木が茂ってしまいました。中は綺麗なものですよ。どうぞネギ君。」

確かにそれなりの手入れは為されている様で蜘蛛の巣があったりという事は無い。

しかし

良かった…まだ残ってて。適当で言ったから結構心配したのだ。

「わー。」「すごい本がたくさん。」「け、けっこーおしゃれ…。」

図書館探検部は早速本に釣られたか…。

「彼が最後に訪れた時のまま保存しています。」

「ここに昔、父さんが…！」

ネギは感極まったのか涙目で周囲を見つめている。

「オイ詠春、いいのかアレ？」

冷静にエヴァが指さし言う先には梯子に昇って本を手取る探検部の面々。

「素人目には何の本かわからないでしょう…。お嬢さん方故人の物ですからあまり手荒に扱わないでくださいね！」

まあ確かに読めないだろう。魔法は基本的に古典言語だ。わざわざ英訳や日本語訳をしている魔道書なんぞある訳がない。

あーいや…あつたな何冊か…読む人間の言語に合わせる丁寧な奴が…。

「よめる？」

「ギリシヤ語は流石に…。」

バカブラックという割に”本気を出せば”英語や国語の点数のいい綾瀬が一番の懸念だったが読めない様だ。本は…ははっ…読めたら昏倒させる所だった。

雪広はというと面々から隠れるように本を開き読んでいる。

修行…というか学習の成果が出ている様だ。そろそろ実践に入ってもいい頃合いか…。

ある程度のラインへ学園祭までに到達すればいい。

雪広は一般人の魔法習得モデルケース第一号としては悪くない。いや最適と言っても過言ではない。

学習能力は高く運動もできる。またプロモーションとしてもいいだろう。

容姿端麗、頭脳明晰、性格は明るく心配りが出来る。宣伝効果としてはこれ以上の人材は手元に無い。

「どうですかネギ君？」

「は、はい見たいものや調べたいものがたくさんあって…時間がもつとあれば…」

確かに…俺もココを調べる必要があるそうだな…。

馬鹿が揃えたにしてはやけに小難しい本が多い。

創世伝説の本まで…アイツがそんな事を調べるタマか？

「ははは。またいつでも来て良いですよ鍵をお渡ししましょう。」

「あの…長さん父さんの事を聞いていいですか？」

「…ふむ、そうですね…木乃香、刹那君、アーニヤ君こっちへ…あと雪広君も。貴女達にも色々話しておいた方がいいでしょう。」

詠春が雪広に声を掛けた瞬間にネギとアーニヤが”え！？”という表情を見せるが雪広はそれに笑顔で答える。

老いても詠春と言う事か…。

俺達は詠春に案内され奥の部屋へ入る。

「…この写真は？」

目につく場所に置いてあるのは一枚の写真。フィリウス・ゼクト…
…つまり大戦中の写真か。

「サウザンドマスターの戦友たち…この黒い服が私です。」

「戦友……。」

「ええ20年前の写真です。」

「わひゃーこれ父様？わかい。」

この頃の詠春は斬り甲斐があった。しかし……一番後ろで目立ってんなこのゴキブリ（ラカン）は…。

「私の隣にいるのがナギ、サウザンドマスターです。」

「……これが父さん……。」

「どれですの？ネギ先生のお父様は？」

「これやて…結構かつこえーわ。」

などとナギ品評会を始めた。

実はラカンが嫌いなのは、そういう事が原因なのだが、今は割愛しよう。

思い出すとこの一帯がクレーターになりそうだ。

「あれ？こっちの写真は？」

と、全く別の事を考えていたらアーニヤがとんでもない写真を見つめる。

「これもしかして…。」

俺とナギと詠春、ガトウやタカミチ、クルトの写真。

この時には既にラカンとアルビレオ・イマは行方をくらませていた筈だ。

もつともラカンはその様に俺が追い込んだわけだが。

幸いテオとアリカ女王や明日菜の写真は無いので安心した。

「あの、バカ……。」

しかしそんな呻き声しか出ない。

なんでこの写真を目に付く所に置くんのだあの馬鹿は。

「ど、どうして父さんと柚木先生と一緒に写ってるんですか?!」

ほら。そう来るに決まってるじゃないか。

「そ、それはさておき私はかつての大戦でまだ少年だったナギと共に戦った戦友でした。……………」

天ヶ崎千草の両親もその戦争で命を落としています……彼女の西洋魔術師の恨みと今回の行動もコレが原因でしょう。」

「そう……ですか。」

「……そして20年前に平和が戻った時以来彼と私は無二の共であったと思います。しかし彼は10年前突然姿を消す……彼の最後の足取り、彼がどうなったかを知る者はいません。ただし公式の記録では1993年死亡。ソレ以上の事は私にも……すいませんネギ君。」

「い、いえそんなありがとございます。」

「…結局手掛かり無しかあ。」

「残念だったな兄貴…。」

「うつんそんなことないよアーニヤ、カモ君。父さんの部屋を見れただけでも甲斐はあったよ。」

ゾロゾロと部屋から出ていく面々。

「……ネギ君実はコレなんだがね。」

詠春がネギだけを呼び止め何かを渡す。

別段興味は無いのでナギの揃えた本の傾向を分析する為に見回す。

…？アレは？

「はーいそつちのみなさん難しい話は終わったかな？記念写真撮るよー下に集まってー！」

気になる背表紙を見つけた瞬間に朝倉が声を掛けて来る。

「記念写真？」

アーニヤが疑問形で尋ねる。

「そーそー忘れてたの！他の班はもー撮ってあるんだよ。」

しかし写真で痛い目にあつた俺達としては写真は不味い。

というかさっきの件も合わせると俺は写真がどうやら鬼門らしい。

「わ、わたしはいいぞそのようなもの!」「同じく。生徒たちだけで写すといい。」

なので必死に断るが

「いーからエヴァ先生! 柚木先生!」

強引に引っ張られ

「あっおい朝倉ひっぱるな!」「待て写真は…!」

しかし一般人がいる中でまだ魔法について言う訳にもいかず
説得力ある断り方も出来ずに撮られてしまう。

「朝倉ア…覚えて…って居ない!？」

「朝倉なら写真撮ってすぐに逃げ出しましたよ?」

事情が余り解っていない刹那の言葉と共に、「とりあえず朝倉の血
だけ一度限界知覚まで吸っておこう」と俺とエヴァは共通認識を得
た。

その後結局俺は木乃香に背を押され天ヶ崎千草の助命と減刑を詠春
に頼んだのであった。

「はい皆さんこの後私たちは午前中の内に麻帆良学園へ到着。その後は学園駅にて解散、各自帰宅となります。みなさん修学旅行楽しかったですかー！」

「……………はいーい！ー！」「……………」

「だから幼稚園かつー。」

「アホばつかです。」

しずな先生の言葉でやっとこの修学旅行が終わるのだと告げられる。いや実際は教職員は帰っても仕事があるわけだが？

「ネギ先生結局お父様の行方わからなくて残念でしたわね。」

「あ、いえ！いいんちよさん実は…あの後、長さんにも少し話が出来てそれで手がかりを教えて頂いたんです！」

「そうですね！どのような手掛かりですか？！」

「えっと…帰ってから開けてみるつもりなんですけど……………」

そう言っ取り出すのは巻物の様な物。

魔力の籠っていない何の変哲もない巻物。

会話を聞き目視でそれを確認しつつメの言葉を言う。

「ネギせんせー！先生も絞めの一言お願いしますー。」

当然俺が終われば副担任であるネギが呼ばれる訳だが

「あ、ハイ！」

ガッ ドテーーン

盛大に躓いて転倒した。

「ネギ先生!？」

「しまらんなあオイ。」

オチの様にエヴァがボソツと言いつつ放った。

新幹線

「やれやれあれほどうるさかった3Aが静かなモノですな。」

生徒たちの楽しげな寝顔を見ていつもは厳格な新田先生の顔も綻ぶ。

「ふふ。ホントにハシヤギ疲れたんでしょうね。」

共に優しく微笑むのはしずな先生。

そして宗一郎は京都・奈良を堪能し大収穫でホクホク顔のエヴァン
ジェリンの隣。

座席で死んだように深い深い夢の中に沈んでいた。

「もう京都は………勘弁願いたい。」

麻帆良学園

Side 明日菜

「無いつ！どうやってもどこを探しても無いつ！」

ほとんど不眠不休で資料室や倉庫を漁って四日。
ただの一枚も目的の写真が見つからない。

そこへ運悪く子羊イケニエが通りかかる。

「あの…どうかされましたか明日菜先生？」

「あ、貴女報道部よね?!」

明日菜は凄まじい形相で報道部の生徒の両肩を掴む。

「ひゃあああ!!!??」

悲鳴を上げてもこれを逃せば後が無いとばかりに放さない。

「1983年以降の寮関係の写真知らないかしら!？」

「……え、えつと……あつ!」

「何!？」

「学園祭関係でどこかのサークルから学園の歴史に関しての資料が欲しいって要請があつて……丁度私は別のネタ追つて……たまたま暇だった中等部の朝倉に任せましたよ?無いなら多分朝倉が全部持つてるんじゃないですかね?あの子優秀だから。」

「そんな……。」

ガクリと明日菜が膝を付く。

「ちよつ……明日菜先生?!」

「もつ……ダメ。」

そのまま前のめりに倒れる明日菜。

完全な骨折り損のくたびれ儲けであった。

S i d e e n d

Side ?

暗い室内

女性は電話で誰かと会話している。

「はい。……………はい。まだ秘密になされるのですか？……………しかし！
……………ええ、はい…そう、ですか。」

「ええその件に関しては…。まだ宗一郎様との接触はさせていません。私としましては面会をさせた方がいいとは思っているのですが……………はい。正体がバレると……………はい。」

「現状と致しましては私が猛烈な接触を図る事により……………はい。
意図的にココへ近寄らない様に図っています。」

「確かに。確かに辛い事ですがココへ私を就けて頂いた事には感謝
しております。」

「はい、了解しました。それでは次の定期連絡に。我らが王に栄光
あれ。」

Side end

68話・修学旅行最終日 闇と思惑とネギの家（後書き）

はい。

新たな要素を追加しての修学旅行篇決着です。

次回からは一ヶ月ぶりの麻帆良学園です。（おい

しかし切りが良い上に、この度皆さまのお陰でPV400万突破致しましたので記念の番外編を入れていこうと思います。

と言う事で予定は特別編を。

そしてその後はお待ちかねのネギフルボツコタイムです。
刹那の受けたえげつない技の数々がネギへと振り掛かる。果たして
ネギは生き残れるのか。

宗一郎「おい作者、これは一体どういう事だ？」

珈琲「ええと…。」

宗一郎「ラブコメディじゃなかったのか?! なんだフライング土下座って…。」

珈琲「その…。」

宗一郎「テオの体操服が見れるんじゃないのか?!」

珈琲「申し訳ありません! 親不知に虫歯に病気にレポートと忙し過ぎてコメディが書けません!」

宗一郎「なん…だ…と?! じゃあ何か二本立て考えてたのは企画倒れか!」

珈琲「本当に申し訳ないです。それで、ですね…その代案と致しまして…。」

宗一郎「ほう言ってみる下らなければ木っ端みじんにするぞ?」

珈琲「名付けて…」ルート分岐で消えた運命。」です。」

宗一郎「なんだそれは?」

珈琲「プロット段階の話や読者の皆さまにアンケートを取った結果分

岐して消えたルートを晒します。」

宗一郎「まあ暇つぶしには成るだろうな。書いてみる。」

珈琲「はい。書かせて頂きます。」

PV400万突破記念：フライング土下座！本編に影響せず。

戦前編プロットNO3

出現ポイント 現在の作品と同じ位置。

エヴァと出会う。

しばらく旅

砂漠地帯で城を手に入れる。

戦争が始まってしばらくしたらエヴァを残して魔法世界へ。エヴァが独り立ちするも良し。

原作過去編に介入

大戦

ルート選択で消失した反英雄ルート。

大戦は帝国の勝利に終わる。

しかし一掃出来ていなかった完全なる世界のスパイにより皇帝が暗殺。

テオドラを人質に取られる。

仕方なく拘束されアリカの役をこなそうとする。

公式発表：銀の悪魔として死亡。

テオドラの慟哭と共に章を終える。

数年後

ヘラスでテオドラと再会。

吸血鬼保護団体を立ち上げる

ギルド「永久とわの揺り籠」

銀の牙でもいいかも >現在のNGO団体の名前へ受け継がれる。

残党や吸血鬼狩りから守るためにエヴァを学園に封印 >保留

一人旅

真名に会う

詠春の頼みで木乃香と刹那に介入

麻帆良へ 同時にエヴァも（保留）

ネギ到来

ネギ同棲解消

襲撃イベント無し。テストとして実行。ぬらりひょん脅されて協賛。

修学旅行編 敵側に核鉄「ルリヲヘッド（類似）」In小太郎

弟子入り 試験官は主人公 原作以上にフルボッコ。一撃も入れられず

悪魔襲撃 悪魔が2体。内一体は核鉄持ち オリジナル武装錬金

学園祭編 超側に参戦 核鉄の解析依頼を条件 主人公vsネギ&

ネギの従者

ネギの従者について

主人公はフラグブレイカーとして行動

のどか 主人公が救出 ネギに魔法を使わせない

使ったとしても奪う！

明日菜 同棲解消・エヴァ襲撃イベントは戦闘試験風。アスナは宮

崎で足止め

刹那・木乃香 お互いで仮契約。

関係は改善しているため仲良し。

ネギに仮契約をさせない 目標。

あやか・アーニャは可

魔法バレを減らす

ホレ薬は没収&お説教ルート

というかバレさせてお説教もいいかもしれない

「君をネギスプリングフィールドとして見るものは居ない。君はナギの息子、英雄の息子という価値以外無いのだ。主席卒業もこの試練も全てな！」的な

キスイベントも潰す ただし朝倉にはバレル

月詠、千草どちらかは引き入れる

千草かも（保留

正体がバレるのは修学旅行後

プロットNO1 初期設定

現れるのはグレートブリッジ戦。

驚くべき事に宗一郎がなんとネギま！を知っているという謎設定。

序章も人物設定も同じだと言っのにw

ヒロイン：エヴァンジェリン

Side 帝国兵

連合の喉元。グレートブリッジを陥落させ

ついに我々へラス帝国は連合を根絶やしに・・・

するはずだった

それをあの銀色のアンノーンが全て台無しにしてくれた
連合の奪還作戦を向かい討とう。という時に

奴は初め空から落ちてきた

橋のど真ん中に落ちたソイツを俺達は連合の送り込んだ兵器だと思
った

だが俺達は大部隊だ

こんなアンノーンはすぐにぶち殺して壁に掲げてやるう。そう思っ
て襲いかかった。

だがソイツには何も通らない。

剣も魔法も銃も・・・

「畜生なんでコイツ何にも効かないんだ！！！」

S i d e 柚木宗一郎

何故か橋の上に落ちて、何か囲まれて、一斉攻撃を受けている
さて・・・どうしたものか・・・つかネギま！ってこんな世界だっ
け・・・？

「殺せ！銀色の化け物を殺せッ！」

まあ・・・とにかく・・・殺しに来るんだらう
なら仕方ないよな

覚悟を決めて俺は・・・雄たけびを上げて軍勢に突っ込んだ
「うおおおおおおお」

S i d e 紅の翼

「おや・・・既に誰か乗り込んでいるようですねえ」

「なんだとアル?! うらやましいなオイ」

「そういう問題ではないでしょう・・・」

「俺達も乗り込もうぜ!!!」

「考え無しじゃの」

「いくぜ! 百重千重と重なりて走れよ稲妻。千の雷」

グレート≡ブリッジ奪還作戦は成功し・・・

俺達はソイツと対面する事になる

「ようアンタすげーな! どこの部隊の奴だよ?」

「いや・・・俺は巻き込まれただけなんだが・・・」

「「「「は?」「」「」」

事情を聴いて・・・

抱腹絶倒が約二名

「・・・ふふふ。いや失礼、私は青木詠春だよろしく」

「俺は・・・柚木。柚木宗一郎だ。」

「俺はナギ。ナギスプリングフィールド」

「私はアルビレオ・イマ」

「俺はラカんだ！」

「ワシはゼクト。ナギの師匠じゃ」

はて・・・こんなキャラクターネギま！に居ただろうか・・・
ナギ・・・どこかで見た事があるような、無いような

その後俺はナギ達に協力する運びとなった

あの橋。グレートブリッジというらしいのだが一大重要拠点だった
ようだ

あの戦闘で一気に話が広がってしまったため一緒にいるといっても
過言では無い

ナギスプリングフィールド 赤毛の悪魔、千の呪文を持つ男
俺からすれば

赤毛の魔法もろくに覚えてないような駄目な奴だったが・・・

青木詠春

京都神鳴流の宗家。サムライマスター

気弱そうなのに強い意志が見え隠れする青年。ただしエロに弱い

アルビレオイマ

変態。胡散臭い。

まあ・・・俺が言うべきではない

そして俺

銀色の魔人、銀色の悪魔
ナギ曰く・・・動く盾

あの戦闘後一人の時に解除してみたのだが
どうにも若返っていて

しかも日本人離れた顔つきになっていた・・・
自分ながら違和感もあるし

という事で実は一度も解除していないという有様だ

あの戦闘以後、戦況はひっくり返り

連合は怒涛の大躍進を成した

この頃ナギ達にはファンクラブが多数あったのだが

自分にはこの外見のせいかわファンクラブが少なかった

が、中身は女だとか美青年とかと囁かれた

英雄の側にいるだけでよもや悪い解釈が出ないとは思わなかった

同行する内に仲間が増え

協力者を得て

争いを引き起こしている「完全なる世界」とやらの秘密結社を知った

アリカ王女という美しい女性にも出会った

俺やラカンには内偵や調査というには目立ちすぎる事もあってリゾー

ト気分を満喫したり

束の間のバカンスを楽しんだ

やがて証拠を掴んだナギ達がマクギル元老院議員に会いに行った際

俺はアリカ姫の護衛を受けていた
自分で言うのもなんだが・・・生前の殺すだけの仕事より護る仕事
が楽しいと感じるようになってしまった

が

ナギの馬鹿が何故か反逆者。

くそつたれな事をしてくれやがったわけだ。

そして今俺は夜の迷宮にいる。

「なんとかならんのか銀の騎士よ？」

「おお！銀の魔人の中はそなたの様な普通そうな人間であつたか！」

普通って……うんお嬢さん割と酷いね。

「この結界。中からはどうにも……一応人間のつもりなんですけど……」

横柄そうなのがアリカ姫

テンション高いのがヘラスの第三皇女テオドラ

「しかしナギ達がこちらに向かってくるでしろうし……それ
までに……内部を制圧しておきましょうか」

「しかしいつもの物は取り上げられたのではないのか？」

「あれはダミーでして……」

胸に手を当て、闘争本能を呼び起こす

武装錬金！」

掛け声と共に銀の装甲が装着される

「防護服の武装錬金。シルバースキン。いざ！推して参る」

見張りの兵士を蛇で屠っていく

硬いシルバースキンの打撃は蛇によってより凶悪な物に変化する

「さて・・・そろそろ来るはずですよ？アリカ姫、テオドラ第三皇女」

言い終わると同時に壁の一部が崩れ

「よう！迎えに来たぜ姫さんに宗一郎」

「遅いぞ我が騎士」

「やつと来たかナギ」

「捕まってるじゃねーよ」

「はっ 反逆者にされんなよ」

お互い笑い合い

ナギは真剣な顔で

「さて、姫さん。助けてやったわいいけど、ここからは大変だぜ？連合にも帝国にもアンタの国にも味方はいねえ」

ガトウがその補足説明を行う

「つまり・・・連合に帝国・・・そして我がオステイア。世界全てが我らの敵という訳じゃな？・・・じゃが、主と主の「紅き翼」は無敵なのじゃろ？」

何かを決意したかの様なアリカ姫の表情、口調

続けて

「世界全てが敵？良いではないか、こちらの兵はたった8人。だが最強の8人じゃ！ならば我等が世界を救おう。我が騎士ナギよ我が盾となり剣となれ」

「やれやれ。相変わらずおつかねえ姫さんだぜ。いいぜ俺の杖と翼、あんたに預けよう」

それから怒涛の六ヶ月だった

味方を増やし敵を討つ。それだけとは言え世界が敵だった

そして俺達は遂に奴ら・・・完全なる世界の本拠地を突き止めた
世界最古の都 王都オステイア空中王宮最奥部
その名も墓守人の宮殿

突入の段に至って帝国・連合・アリアドネー混成部隊ですら止められない大軍の自動人形と召喚魔が更に投入され

俺は足止めを買ってでた。

「行けナギ。黄昏の姫御子を救い出すんだろう？それはお前でなければ出来んさ」

「わりいな・・・」

「ハッ死ぬわけじゃなし・・・お前の方がヤバ気なんだ。行けよ」

「ああ」

走り行くナギ達を見送り・・・

「さて・・・アリアドネーの少女」

「はい。なんででしょうか？」

聡明そうな顔つきに、正に戦乙女と言った風格を持つ少女は俺の声に答える

「全員下がらせる。今からやるのは加減が全く出来ん。ナギの千の雷ぐらいを想定しとけ」

「は・・・？はい解りました。全部隊一時後退せよ！！銀騎士殿が出られる！」

「それじゃあ・・・行くとしますか
懐から二つ目の核金を取り出し念じる。

思い描くは最強の火炎。不条理の戦士。

武装錬金！！」

シルバースキンの上を炎が走る

「焼夷弾の武装錬金・・・ブレイズ・オブ・グロリー」

敵軍の上空にまで飛びあがり

「さて・・・今から諸君に降り注ぐは周囲500m、瞬間最大五千百度の炎。すまないが消滅してくれたまえ・・・ブレイズオブグロリー」

言葉と共に炎を纏いながら敵軍中央に落下

襲いかかる炎は人であるうが機械であるうが魔であるうが
そのことごとくを焼き払い焼き尽くす

「すごい……」

「なんて威力だ……」

「さすがナギ殿の仲間……ケタが違う」

口々に部隊内の者が圧倒される

理不尽なまでの威力。“ただの一度も一小節も”詠唱していない驚き。

敵軍掃討が終わりかけた頃

「なんだっあの光はッ」

墓守人の宮殿が強烈な光を放ち始め

俺は作戦が失敗だったかと。ナギが負けてしまったのかと。

しかし

メガロセンブリアとテオドラ率いる北方艦隊、アリカ姫の指示で

危うい所で反転封印された

つまり結論で言えば世界は救われた

こうして世界を戦火の混乱に陥れたおされた一団とその首領は退治された

そして、ナギは魔法世界で知らぬ者なき英雄となり世界は平和となった

が、世界はいつも全ての者が笑顔で終わる事は無かった。

アリカ姫は

民を殺し国を落とした大罪人として

事件の黒幕として処刑される事となった

「なんでアリカ様が戦争の首謀者なんですか！」

「落ち着くんだクルト」

「これが落ち着けられますか！？いいんですかナギさん！アリカ様が処刑されても！」

「……………」

ナギは沈黙。

その日からもうすぐ二年が経とうとしていた。

その間は戦災復興や盗賊団潰しをしていた。

最近では紅き翼を離れたクルトが頻繁に連絡を入れて来る
だがナギは動かない

「ナギ。やるなら言えよ……ポートは確保しておいた。旧世界には俺が行きたいんでな、しかし慣れてなくて間違っつて二人分ほど余
つてんだ」

「すまない。宗一郎」

「ハッ。お前の為じゃねえよ」

そしてアリカ様の処刑当日

「……………」

紅き翼のアジトでは全員が口を閉じていた。

しかし、しびれを切らしたタカミチが

「みなさん、どうして行こうとしないんですか?!」

「落ち着けタカミチ。俺達が行っても意味がねえんだよ。」

「そうですねよタカミチ。ナギはこの程度の事で見捨てたりする様な者ではありませんよ」

アルがまともな事話してるの俺は初めて聞いたかもしれん

その時ちようどドアが開き

「アリカを助けに行く。来てくれるか？」

「もちろん」「いいでしょう」「貸しだぜ？」「ほらな言っただろ？」

こうして俺達はアリカ様を助けに処刑場に乱入
アリカ様を奪還

反撃があると思っていたが

今や英雄の俺達、不明瞭な処刑と組み合わせれば

手を出せなかったのか・・・それとも折り込み済だったか・・・

「やっとくつついたか・・・」

「そうですねこれで紅き翼も解散ですかね？」

「戦争も終わったしいいんじゃないかねえか？」

そうして和やかなムードの時に詠春の故郷で神話級の鬼が出たらしい

まあその鬼もナギやラカンの敵ではなかった

さすがに少しも俺の出番が無かった事に驚いた

その後俺は日本を周り

柚木流が存在していない事を知り

改めて異世界に来た事を思い知る

生前日本を出た事が無いのを思い出し世界も回る事にした

道中ある事に気が付いた。

傷の治りが早すぎる事に、容貌が変わらない事に

自分の身体の思わぬ変化に戸惑っている時に大勢に追いかけられる少女を見た

俺は咄嗟にシルバースキンの中に取り込む事で

少女を隠す事に成功した

「君の名前は？」

名前を聞くと

「エヴァンジェリン・A・K・マグダウエル！真祖の吸血鬼で600万ドルの賞金首だ！」

と無い胸を張って威張られた

「はぁ・・・すごいすごい」

「貴様！私は闇の福音だぞ?!」

両手を振って威張られる。やべえ可愛く見えてきたぞ？

「あー・・・はいはい。聞いた事あるなあー」

思わず気の抜けた返事をしてしまった

すると少女は俺を舐めるように見て・・・

「・・・貴様どこかで見た事があると思ったら銀の魔人か!？」

「・・・」

思わず絶句

「その顔、反応。当たりだな？よしお前私の従者になれ！」

「・・・は？」

何を言ってるんだこのお子様は・・・

「冗談も休み休みに・・・」

「そうか実力行使が良いか？わかった。氷精武装解除」
エクサルマティオー

魔法を拳で受け止め右腕に纏わせる

「なっ!？」

驚愕と言った風な少女

「返すぜ？氷精武装解除ッ！」

氷の風が少女を襲い服を氷漬かせる

「じゃあな！」

その隙に俺は逃げ出した

その後

俺はエヴァンジェリンを思い出した

「どうしてあんな重要キャラを忘れてんだよ俺。タカミチもじゃねえか!.....しまっ!ガトウがヤバイ」

エヴァンジェリンから関係性を思い出しガトウの下へ行くも手遅れとしか言えなかった.....

ガトウを弔い

アスナはタカミチが記憶を消して引き取るそうだ。

詠春は国元で結婚。恐らく近衛家のハズだ

ラカン、アルは行方不明。

そして俺は.....

「シトー.....政務がキツイのじゃ」

「仕事だからな.....」

何故かヘラスでテオドラの側にいる

魔法世界に戻ってきて宿に泊まって以後の記憶があやふやだ
聞くとテオドラが曖昧になるので恐らく拉致された
幾度か書類仕事が嫌で逃げ出したがパクティオーカードのお陰で逃
げる事もままならない。

朝起きてテオドラと食事をして、テオドラと仕事をして、テオドラ
と遊んで、またテオドラと仕事をする日々。

銀のコートはテオドラ直属の者達の制服になっている

年を取らないのと柚木宗一郎の名と姿が有名過ぎて問題なので柚の
英語訳を抜いてテオドラに付けてもらった名前がシトー

公務の途中あのナギが死んだという噂も入ったが
それはデマだろう。アレが殺されるって言うならそれこそ世界は破
滅するし

そもそも殺しても死ぬような奴じゃない
言ってることが滅茶苦茶だがアイツが無敵なのも事実だ

ヘラスに居を構えて数年。政務は落ち着き

テオドラは実に美しく豊かさを持つ女性になっていた

ある日の朝、邸宅のポストを見ると詠春からの手紙が入っていた
初めは、なんだ娘自慢かと思って読んでいたがどうにもキナ臭い
関西呪術協会の長の実の娘が関東魔法協会の本部に通う。

これで穩便に済むはずが無い
護衛も付けてあるらしいが・・・

話から考えて桜咲刹那だろう

ヘラスにいる間も完全なる世界の残党探しはやっていたが・・・
詠春に伝えなくてはならない事もあるし

物語の本筋は麻帆良学園だろう・・・

旧世界のそれなりのお金も同封されていたし・・・

行くか

旧世界へ

俺はこの事をテオドラに伝えに行つた

「とうわけなんだが・・・いいかなテオ？」

「ダメじゃ」

「なんで?!」

「お主は私の騎士じゃぞ？お主が私から離れたらどうする気じゃ？
！」

「確かにそうなんだけどな？テオも確かに大事だけど、同じくらい
かつての盟友も大事なんだ」

そう言つてテオドラの頭を撫でつつ見つめる

「わ・・・わかつたのじゃ・・・その代わりなるべく手紙を送るの
じゃぞ？」

「わかつたよ我が主」

その日いつも以上に引つ付くテオドラと共に仕事を済ませ
翌日見送られて旧世界へと向かつた

第2話 日本。

この世界に関西国際空港は無い
そこから行けば近いなあとか言う甘い考えは消し飛んだ
なので俺は今、成田空港にいる

京都への道のりは新幹線

詠春の家に着くと

「いらっしやいませ、シトー様」

数十人の巫女さんのお出迎え。これは・・・詠春の趣味なのだろうか

「やあよく来てくれたね宗一郎・・・今はシトーだったね。ちなみにどうだい？いつもなら数百人はいるんだけどね」

「お前・・・こういう事に耐性付いたのか？」

「ふふふ結婚してからね。」

「惚気るな燃やすぞ？」

「まあまあ・・・今回は頼みを聞いてくれてすまない」

「貸し2つだな。向こうへ連絡は通ってるのか？」

「ああ勿論だよ。行くのは明日にして今日は泊っていけ。積もる話もあるだろう？」

「お言葉に甘えよう。惚気と娘自慢以外なら聞くぞ？まあ夜まで京都観光でもしてくる」

「そうか、部屋は準備しておこう」

屋敷を出て

あれがああ詠春か・・・丸くなって老いたな
まあ精神面では俺も老いてきたがな

夜に完全なる世界の生き残りがいる事を伝え
内部をしっかりと束ねるようにと注意を促した

フェイトの事を伝えてもいいのだが・・・それによって歴史が大きく変わると先が完全に読めなくなってしまう
ただでさえイレギュラーである俺がいるのだから・・・

麻帆良

夜の麻帆良学園の広場に俺はいる
今から所謂試験的な物を行うらしい

ことの起こりは昼

麻帆良学園に着いた俺は学園長室で
妖怪・・・いや宇宙人・・・いやいや

仙人の様な風貌の独特な雰囲気のお爺さんと対面していた

「おおよく来てくれたなシトー君。話は婿殿から聞いておるぞ？木乃香の護衛と刹那君の修行に教師、警備員までやってくれるとは・・・

」

「ええ護衛の仕事が本業ですが、教師を目指していた頃もありまして・・・拠点については一戸建て平屋でもいいので用意をしてもいい」

「それについては構わんぞい。今夜、魔法先生と魔法生徒に挨拶してもらおう出来れば試合も一戦ほどのう。」

「ええ構いませんよ。」

「では深夜0時に世界樹前の広場に」

「わかった。それまで此処を見物していよう」

夜

「フオッフオッフオツみな揃ったようじゃのう?」

「学園長、何故召集を?ここ最近は何もないと思うのですが」

「そんな物騒な内容では無いぞい。今日からこの学園に新しい先生が来てくれたので紹介をの」

「どうも」

学園長の陰から出つつ挨拶を

「うわっ」「影から!」「気配が無かったぞ?!」

「今日からこの学園で教師や警備員を務めてもらっシトー君じゃ」

「はじめまして。」

「さて、誰に一戦してもらおうかのう？ シトー君どの位行けるかのう？」

「タカミチじゃ相手になりませんし……まとめてパパつと三人程」

俺の言葉に苛立ったのか

長い髪の剣士風の女性と黒っぽい肌でメガネをかけた男、魔法生徒らしき女の子

「じゃあ今前に出た御三人でどうぞ」

「刀子先生にガンドルフィーニ君、それに高音君じゃな」
学園長が名前を言って確認を取る

「先手はそちらでどうぞ。武装錬金」

その声を合図にして

ガンドルフィーニが魔法銃を抜き、高音が影操術で影を伸ばし、刀子が刀を抜いた

シルバースキン定着直後に刀子が一撃を入れる

「なっ……」

その辺りから周りの魔法先生や魔法生徒の一部が騒ぎだす

「銀の騎士？」「銀の魔人？」「絶対防衛？」「紅き翼の……」

そんな中タカミチだけが「宗一郎さん？」と呟いたのには誰も気が付かなかった

通らない事に気が付き下がろうとする刀子の顎を死角から打ち抜く
そこへ高音の影が絡みつきガンドルフィーニの魔法銃が当たるが損
害はゼロ

影を引きちぎり魔法銃から放たれる魔法を足場に虚空瞬動
軽く入れた肘でガンドルフィーニは昏倒
高音の拳を入れるも自動防御で止められる

「くっ」
高音が引こうと下がる所へ

「シルバースキンリバーズ」
もう一つの核金がシルバースキンへと変わり高音に絡みつき影ごと
拘束する

後ろから再び斬りかかる刀子の腹に蹴りを入れ弾き飛ばす。
激しく吹き飛び樹に叩きつけられ昏倒。

その時間僅か30秒・・・

「チエックメイトだ」

啞然とした空気。第一線級の三人の実力者が一撃も通せずに出た
しかも倒した相手は紅き翼の銀の騎士

「宗一郎さん・・・生きてたんですね・・・」

「あれ？タカミチって知らなかったっけ？ついでに今はシトーって
名乗ってたんだ」

「知りませんでしたよ普段もそのコート着てたから素顔なんて一、
二回しか・・・それに二十年も音沙汰なしだったじゃないですか・・・

「・

「悪い悪いここ十年程はヘラスにいたからな」

「あの・・・・・・・・・・」

「ん？君は？」

「えと、その佐倉愛衣です。握手してもらえませんか?!」
「おーおどおどしてて可愛」シトー!!!!!!」今テオの声が聞こえた気がする

「いいよ」

理想は

瞬動 瞬動二連 虚空瞬動 ブラボー流星脚
高速で近寄る ジャンプ 更にジャンプ キック
流星脚に魔法を込められれば仮面ライダー再現。

仮契約はエヴァ、テオ、明石裕奈、和泉亜子、龍宮？

テオがマスター、主人公が従者

アーティファクト

狂い桜 柚木宗一郎が生前愛用した日本刀

柚木家初代からの家宝

通常の日本刀だったが樹齢500年の桜に憑いてきた悪鬼悪霊を切り捨てる内に刀身が紅く染まり

悪鬼妖怪等、人間以外の者に対する概念兵器にまで昇格した剣

悪鬼妖怪、悪魔、人外はこの刀で切られた場合傷が非常に治りにくい使用者の血を垂らす事によって更に強化される(傷の呪い強化、切れ味の向上)

魔法は精霊なので流れを切れる。

人に対しては普通の日本刀

エヴァがマスター、主人公が従者

アーティファクト

時を歪めし慈母の抱擁

外の1時間が中の12時間に相当する空間を作り出す

内部では傷の治りが早くなる他、居住スペースが存在する外からの干渉は不可能

なお、別荘など他の道具の中でさらに展開する事は不可能

裕奈が従者

眠り誘う左方・石化せし右方「安らかな死を与えし双銃

左手に来る銃は当たった敵に眠りを 解除可能

右手に来る銃は当たった敵を石に 解除可能(永久石化ではない)

それら二つを合体させた物が本来の銃

裕奈の闘争本能が全開になった時のみ解放される

永久石化で更に砕く。

学園祭編でネギと仮契約しそうだ。と考えた結果。

和泉亜子が従者

代行者のコート

耐弾耐刃耐火耐寒耐魔法の黒いコート

コートの内には黒鍵が数百本収納されている。解除 召喚で元の数へ
聖典による付与を受けた黒鍵も存在する
身体能力を向上させる

龍宮真名が従者

撃滅せし必殺の魔弾

形状：対戦車ライフル

魔力と気を纏う為に対象に大威力の破壊をもたらす 弾丸の咸卦法

弾丸は三発。撃ち尽くすと丸二日補充されない

また弾丸は真名の魔眼とリンクする為ほぼ必中

威力はシルバースキンが爆せて内部に衝撃が入る程

PV400万突破記念：フライング土下座！本編に影響せず。（後書き）

宗一郎「おっそろしいなオイ！しかし殆どメモ書きだな。」

珈琲「こういうメモの羅列を作って推敲しながらここに直接打ち込んで書いてるんですよ。」

宗一郎「だからたまに全文消える訳だな。」

珈琲「申し訳ない。ちなみに進行中の奴はプロットNo2-B」

宗一郎「というか…高音出て来てないよな？」

珈琲「プロットと共に消滅しました。」

高音「ひどっ！ひどいですわ！？あと愛衣！この裏切り者！！！！」

愛衣「ごめんなさいお姉さまああああ！」

珈琲「だって出て来ても脱ぐだけだし。反英雄ルートだと仕事あったんだけどね。」

宗一郎「何気に酷いな作者。」

珈琲「あれ好みじゃないんだよ。」

宗一郎「好みで出番が消されるのか……。」

鳴滝「S」……。」

宗一郎「しかも俺の設定だとネギま！知ってるわけないな？」

珈琲「そうだね。まともな人生歩んでないしね。」

宗一郎「あー…俺が元いた世界って…。」

珈琲「永遠かもしれない”の世界。神様がそこらじゅうにいてポンポン呼べる世界。少女漫画。赤石路代先生の作品。この辺はまた後々。」

宗一郎「お前…男だろう？少女コミックって…いや、否定はしないぞ？」

珈琲「御姉さま方の本です。ネギま！も御姉さまの所有物です。」

宗一郎「夜中の三時に24時間開いてるスーパーまで買い物へ行くせる姉か？」

珈琲「Yes」

宗一郎「まあ作者は実家以外だと姉に土下座して生きてるしな。」

珈琲「これで実家が”男子は台所に入るべからず”、”長男は武道さえ出来ればいい”でなければ引きこもってますよ。」

宗一郎「それで作者、トイレが頻繁だが大丈夫か？」

珈琲「大問題だ。ノロウイルスに感染している。トイレと部屋の往復以外を禁じられている。一番いいビオフェルミンをくれ。もしくは

は真祖の身体をくれ。」

次回からは通常運転。

女神の来日に関しては今後完成し次第掲載いたします。

69話：弟子入り試験（前書き）

様々な思惑が交差した修学旅行は終わった。
しかしその頃学園では明日菜が疲労で倒れ、新たな影が暗躍を始めた。

待望？のネギフルボッコ回。

69話：弟子入り試験

Side ネギ

夢の中で繰り返し返される映像。

最強無敵の二人の真祖。ハイデライトウォーカー

昔見た父ナギの姿。

飛び起きる。

「はあ……はあ……。」

「眠れないの？」

アーニヤの声。

「うん……新幹線の中で寝ちゃったしね。アーニヤは？」

「私も寝れない。あの光景が目には焼きついちゃって……ね。」

「僕も……。」

そっかアーニヤも……。

「ネギ。」

「何アーニヤ？」

「あの人を目指すのは辞めなさい。無理よ魔法の範疇じゃないわ……」

…。聞いた事もない。」

僕たちは目を合わす事無く天井を見て話す。

「禁書や禁呪かもしれないし……。あの人と父さんは戦ったんだ。一番の近道だよ！」

「それは真祖だから負担に耐えられるだけでしょ！？一番の近道つて…ネギ、あんたまさか！」

アーニヤが飛び起きて僕を見る。

「僕は……。あの人に、柚木さんの弟子になる！」

「ま、待ちなさい！それなら私も行くわ！」

S i d e e n d

「何？俺の弟子？アホか貴様らは。私は大量に弟子を取る事はしない。魔法ならスタン老にでも頼めばいい体術もな。」

朝っぱらから何だと表に出てみればコレだ。

ネギとアーニヤが俺へ弟子入りをしたいと言い出した…。ナギも馬鹿だったがコイツも大概だな。

「いえ！昨日の戦いを見て魔法使いの戦いを学ぶにはお二人しか居ないと思いました！」

ふたり？！

「待て私も入ってるのか?!」

ソファから飛び起きるエヴァ。

「はい！エヴァンジェリンさんの魔法も柚木さんに負けないほど凄
いと思っただんです！」

あー……これはめんどろな事に……

「ほう……ほう。ふん……まあいいじゃないか宗一郎。今度の土曜日
世界樹前に来い。弟子に取るかテストしてやる。」

ほーら始まった。

誰の入れ知恵だ？爺か？

「な、宗一郎！」

「あ、ああ……そうだな。」

「……ありがとうございます……！」

走り去る野菜少年とアーニヤ。

アーニヤ、君はまだまともな部類だと思っていたのだがね？
しかし……

「え、エヴァさんどういうおつもりで？」

「ん？まあテストで無理難題押しつけて帰らせればいいだろう？何
度も何度も来られる方が迷惑だ。」

「そうだな。ああ良かった…本気かと思ったぞ？」

「こっちは起こされたのだ…茶々丸、水。」

頭を押さえつつフラフラとソファへ戻るエヴァ。

「それは…買ってきた酒を片っ端から開けるからだろう…。」

木曜日

茶々丸達のメンテナンスがてらに朝の散歩をしている時だった。

「ほうカンフーが随分と熱心だな。」

ネギが古とカンフーの稽古をしていた。

ほう…これは…いい口実が出来たな。

「あれ？エヴァ先生に柚木先生、茶々丸おはようアル。」

「おはようございます…。」

「そうかそうかカンフーの修行をすることにしたんだな！じゃあ私
たちへの弟子入りはアーニヤだけでいいな宗一郎！」

アーニヤだけなら弟子入りなんてしないだろう。

「ああそうだなエヴァ！これでかなり楽になったな！」

「え、う？！あついえコレはあの少年の戦い方の研究で！」

野菜少年は手を振って否定する。

「いやいや気にする事は無い、元々俺達は弟子など取る気はなかつ
たしな！存分にカンフーごっこに勤しむと良い！」

よし余った弟子入り試験の日は刹那を仕上げる時間に費やそうか。
とりあえず拳で刀を砕ける様に仕込まなくては…。

「あわわ違っんですー！」

「どゆことネギ君？」

見物だろう佐々木が出て来る。

「えと、あの…お二人に弟子にしてもらうつもりだったんですけど
………」

待つ必要も弁解も聞く意味はないと判断してエヴァを促す。

「フン…ではな少年。子供にはカンフーごっこがお似合いだよ。」

「あつ待つてくださーい！」

これで終わり。差し出せる対価も無い癖に弟子入りを頼むからだ。木乃香は極東最高峰の血を。

刹那は俺が欲しいと思ったから引きとつたに過ぎない。

雪広は計画の布石。

少年、アーニヤ。お前達を俺が欲する要素はあるのか？

「ちよつとエヴァンジェリン先生！何でそんな事言うんですか！弟子にする位してあげればいいのにつ！」

しかし佐々木が食いついた。

珍しい。

こんな事も言えるんだな。

「ふん。子供の遊びに付き合う趣味は無いんだ。弟子ぐらいとはまあ子供らしい意見だな佐々木まき絵。」

「な…！ネギ先生はすぐに強くなるもんね！弟子入りなんかしなくてもすぐに達人だよーだっ！」

「えっ？ちよつまつまきえさん！？」

ああ……うん…なんと行っていいか…流石バカピンク。どうしてそうエヴァの怒るポイントを突ける？

そしてエヴァ、俺は今君の身長が凄く低く見える。

「ほうすぐに達人か…。達人かあ！それは面白そうだ。一度は弟子入りテストを約束したのだソレは違えん…。しかし今、貴様の弟子入りテストの内容が決まったぞ？そのカンフーごっこで宗一郎を倒せばいい、それで合格にしてやる。どんな手段を使ってもいいぞ？」
俺には金髪少女の幻想が見える。

「いーよ！わかった！そんなのネギ君なら楽勝だよ！」

” さあ子供の喧嘩の様相を呈して参りました…。
冷静に解説を始めようとする茶々丸の妹達。

「煽るな蒲公英、牡丹。」

「ちよつまき絵さん！？柚木先生はくーさんや楓さんをデコピンで倒してるんですよ！？」

「大丈夫だよ！ネギ君ならできるよ！」

その自信はどこから来るんだ…！？

「宗一郎。見せつけてやれ。」

「はあ…子供の喧嘩みたいだなオイ。」

「しるさいやね！」

尻を蹴飛ばされて仕方なく瞬動に入る。

「え？」

バチン

「はぐっ！」

どさっ

「あ！ネギ君っ！」

瞬間からのデコピン。適当にやったが吹き飛ぶ程度の威力にはなっ
たか。

「達人ならば宗一郎を倒して見せる。場所はここ、世界樹広場。時
刻は土曜日からの3時間だ。ま、せいぜい頑張ることだな！」

自分がやったわけでもないのに胸を張るエヴァ。
まあ俺が馬鹿にされたと思って怒っているんだろっな…。言つと火
に油つてやつだろっが…。

去っていく俺達。後方がちよつとした騒ぎになる。

「ネギ！？」 アーニヤか。

「ネギ坊主?!」 長瀬。

「ネギ先生っ!?!」 刹那？

「ちよつ大丈夫ながあつたの？」

「しつかりするアル！」

「も…もしかして私…マズい事しちゃった…？」

もしかしなくてもマズい事だ。

まあ初めからそれなりの無理難題を言つつもりだったわけで……。

気にするな佐々木。

S i d e ネギ・s

「柚木先生相手に正面から挑むのは馬鹿をみるアル。当てれるのも今のネギ坊主じゃ一撃と考えたほうがいいアル。油断を誘つての奇襲か相討ち覚悟の一撃アルね。」

「一度つきり…ですか。」

「正々堂々の試合で奇襲は難しいアルからカウンターをいくつか教えるネ。カウンターこそは中国拳法の得意中の得意アルよ！」

「はい古老師！」

「あの作戦で行けると思っでござるか？」

「楓、わかっていて聞くな。」

「無茶苦茶でござるな……拙者も昔あの人の戦闘を見たでござるよ。山の中で雷を纏った男との戦闘を……。」

「それは初耳ですが……そこまでの本気も全力も出さない筈。最初の瞬動からの攻撃で気絶するのがネギ先生にとって一番安全で諦めがつく。」

「厳しいでござるなあ刹那は。」

S i d e e n d

S i d e 超の研究室

「じゃあハカセ、茶々丸達のメンテナンスは頼んだアル！」

超がハカセを送り出し振り返る。

その顔は真剣。

「さて話して貰おうか超。何故宮崎の仮契約強制解除を止めたのかを。」

修学旅行が終わり学校に着いた夜。

俺は宮崎の契約を強制破棄するために部屋に侵入していた。傍目からすると実に変態的で問題があるが仕方がなかった。そこへコイツは、超は電話を掛けてきた。

曰く、宮崎の契約破棄は待つて欲しい。と

「簡単ネ。あれは非常に貴重なアーティファクト。いや……そもそもこのクラスに集められた人間は稀少なアーティファクトを呼び寄せる可能性のある人間で構成されているアル。」

宮崎並にヤバい連中がいるって事か…。

「しかしアレは一般人だ…。」

危険過ぎる。イドの絵日記など出て来るとは思わなかった。

「それにこの時代の宮崎サンは仮契約していたヨ。その運命まで捻じ曲げると想定している計画に支障が生じるヨ。」

「確かにな運命と言うモノはどんな些細なことで変容するかは解らない。」

エヴァがどこか遠くを見て呟く。

「そうか……ああそういえば、超。ネギは俺の弟子になったか？」

「……………ネギ坊主を弟子に取る事は無かったと聞いてるネ。」

「つまりアーニヤは弟子に取ったわけだな。」

ボソツとエヴァが言う。

「き、禁則事項ネ！」

「当たり前らしいな宗一郎。」

最近分かった事だが、超は状況が悪くなると禁則事項といただきます。

「そうだな。それはまあともかく宮崎の件は保留だ。覚悟も何もない恋愛感情だけで魔法に関わるなど今の時点では大問題だ。」

S i d e e n d

「これで時間内に教えられることは全て教えたアル。あとは天に運を任せ残りの8時間を休息と復習にあてるヨロシ。」

「はいクー老師！」

「ネギ君今夜何か試合するんだってー!？」

「差し入れに豪華特製夕ご飯弁当つくってきたわー。ほんでその試合には勝てそーなん？」

「……………無理アル。ネギ坊主の呑みこみは反則的にいいアル。ふ

「つーなら一カ月かかる技を三時間で覚えるアル。全くどうなつとるかねこのガキは、世の中不公平アル。それでも柚木先生の方がもつと上ネ……。」

「……な、なんだつてー!」「」「」

「ネギ坊主には言っていないアルが、これは弟子入りを断る為の勝負かもしれないネ。せめて一撃を入れることが条件ならどうにかなたネ……。」

「そんなぁ……。」

「勝つなんて無茶な条件だと思ったけど……そういうことか……。」

稽古がてらの戦闘なんて甘く見てたわ……。」

でもまさか殺しに来るなんて無い……わよね?

京都でのあの写真もあるし簡単に引き受けるんじゃないかって馬鹿な考えだった訳ね。

でもそれじゃああの写真は一体どういう事?

サウザンドマスターと銀騎士の写真。戦時中か戦後の写真だったわよね……?

両大国の英雄の写真って地味に国際問題なんじゃ……?」

戦いの中で友情が芽生えた? そんな少年漫画じゃあるまいし。でも詠春さんは……うーん。」

「アーニヤちゃん何か言つた?」

「え、いや……何もつて、ちょっとネギあんだなんか臭くない?」

ツンと鼻をつく汗の臭い。」

普通忘れません。

その瞬間、その場にいたネギ以外は同じ思いを抱いた。

「全くエヴァも宗兄も底意地が悪いわよ！？倒せるわけ無いじゃない！一撃入れるとかなら可能性のかけらぐらいはあるけど……。」

「いやなあ……断る為のテストなわけであ。」

「はあ！？なにそれ大人のやる事?!」

「いやまあ……うん。非常に大人気ないのは解っているんだが……俺はネギを弟子に取る気は無い。しかし普通に断れば後ろに控えているだろう爺がどんな面倒事を引き起こす事やら。」

「エヴァンジェリンさん！柚木先生！ネギ・スプリングフィールド弟子入りテストを受けに来ました！」

やる気満々。しかし……なんだ杖も持ってきていないのか。拍子抜けもいい所だ。

「よく逃げずにきたなばーや。ではさっそく始めようじゃないか。」
上着を脱ぎネクタイを外し茶々丸に投げる。

「前に言った通り宗一郎を倒せば合格だ。3時間経つか手も足も出
ずにくたばればそれまでだ。」

「わかりました…！」

ここでクルトの様に多少ゴネてくれる方が先の楽しみがあるという
ものなんだがなあ。
駆け引きに弱いのはナギ譲りか子供らしさか。

「うむ…それよりも……………そのギャラリーは何とかならんかっ
たのかー！！！！」

「はあ…ついてきちゃって。」

中々うまい手だ。

魔法の運用や戦術面で劣るネギが俺の魔法を封じ、更に不死者とし
ての再生能力を封じる。

仮に使ったとしても生徒を盾に出来…………いや、ネギがそこまで考え
る筈がないか。

「ネギ坊主！最後のアドバイスアル！柚木先生が消えたら全力で逃
げるアル！」

「ねえくーふえ消えるって？」

「恐らく瞬動や縮地アル。」

「以前拙者らが受けたモノでござるな。」

「消えたと認識した時には眼前にデコピンの切っ先が来てたアル。」

古のアドバイス。確かに、確かに初撃は逃れる事が出来る。
だが……それは。

「さて、拙いアドバイスはそれで終わりか？」

「…お願いします。」

「ではお二人とも構えはよろしいですか？」

茶々丸が審判役か。確かに時間計測も見ているだけの審判も茶々丸が最適だ。

「はいっ！」

「ああ。」

ネギはカンフーの基本姿勢。

それに対し俺は腕をダラリと下げたまま。

「始め!!！」

茶々丸の掛け声と共に瞬動に入る。

「くうっ!?!?」

額を掠る様にデコピンの切っ先が伸びるが当たらない。
ネギが返しに拳を放つが俺は既に居ない。

「ふむ…まあ初見では無いからな。…いくぞ？」

幾度か技を交える。

ネギの体重が軽い為かまるで痛みは無い。

「ほう八極拳か…。套路を覚えただけで勝てるとても思ったか？」

ネギにわかりやすく崩拳の動きを見せる。

当然ネギは内側から俺の右腕を左腕で払う様にする。

「ネギ坊主!!」

流石古家の人間、技を読んだか。だが既に遅い。

ミシッ

骨の軋む音。

「かはっ…!？」

ネギの腹部に左脚の蹴りが入り後ろに大きく吹き飛ばされる。

「ヒソウケン キョウセンカイイン
秘宗拳胸前挂印。」

ネギがもう一度構えるまで平然と待つ。

追撃をすれば終わる。だがそれではこの時間を取った意味が無い。
だがまるで燃えない。

淡々と作業の様な闘い。

ネギの左拳に対し左拳をカウンターで合わせる。

リーチの長い俺の拳が不完全に決まる。

その腕を取り六大開の型に入られる前に右拳を前進しつつ打ち込む。それでも甘ければ更に前進しつつ左拳を。

一方の拳が放たれた時、もう一方の拳は自分の頭の後ろに隠す様に…。
連続して弧を描いて打ち出す。

「か、蟹形アルかつ！？ネギ坊主！倒れる前に離れるアル！！」

しかしネギは下がらず逆に前へ出る。

「ハアッ！」

ネギは気合の声と共に右脚の蹴りを放つ。

跳ね上がる脚を冷静に手首を交差させ掌で受け、ネギが蹴り足を引くと同時に後ろ回し蹴りの要領で右脚を軸に轉身。

俺の左脚をネギの左脚に引っかける。

ネギの左脚に寄りかかる様に接近、更に尻もちを付くが如く座りこむ。

「潰れるッ！」

「ガッ…ア…ア…ア…。」

感触からして膝は折れてはいない。が、今日はもうまともに戦闘は

出来まい。

ネギの叫びを聞いてギャラリーの女子生徒が悲鳴を上げる。

「トウロウケン 螳螂拳……………ザタイ 挫腿……。柚木先生！やり過ぎアル！！！」

「なにそれくーちゃん！？」

「ネギ坊主の……………身体がもう少し大きければ完全に膝が壊されているでござる！！！」

「そんなっ！！」

そう。ネギが大人の体格ならば今の技で死んでいる。
倒れこむ際に首に肘を本来は入れるのだから。

「ネギ！棄権しなさい！！！柚木先生は本気よ！！！！」

騒然となるギャラリー。

しかしネギは俺が離れるとゆっくりと立ち上がる。

「自身への契約執行で瞬間的に防御力を上げた。といったところか？」

「はい……………。詠唱する時間はありましたから。」

「面白い。」

初めてネギが面白い。そう思った。

蟹形を脱する時に指示に従う事も選択肢に入れた上で、あくまで前へ出る事を選び更には挫腿を最小限の被害に抑えた。やはり…………アレの息子だ。

スツと両手を掲げる。

「来いよ少年。」

「行きますっ！！」

そして闘志も潰えない。ああ…………クルトともタカミチとも異なる。これが若さか才能か？

Side エヴァンジェリン

やれやれ…………宗一郎、お前殺す気か？

顔が笑ってるな…………はあ…………また弟子をとるつもりか。

「まさかここまでとは思わなかったアル…………。」

「凄い…………なネギ君は…………。」

「もっとペチペチ叩きあうだけだと思ったのに…………。」

「ねえ両手を掲げたけど降参？」

「恐らく違つてござるよ。何かの型でござるつ。」

長瀬の言葉は正しい。

宗一郎は組み手に入るだろう。

「柔道だね…多分。」

「ここ…下、石畳みつ!!!」

そう佐々木まき絵が叫んだ時には既にネギは宙を舞っている。

「背負い投げッ！」

「雷。」

あれは…初見では死ぬぞ?!私ですら一度行動不能に陥つた!

宙を舞うネギ。

頭から真つ逆さまに石畳へ墜ちる。

抵抗するネギ。

しかし頭から墜落する寸前に後頭部に蹴りが入る。

おかげで背中から着地するが……。

「またでござる…先程から殺し技ばかり…。」

「え?でも今、頭から落ちない様に蹴つたんじゃないの?」

長瀬の言葉に佐々木が首を傾げる。

「違います。」

「桜咲さん!？」

刹那に木乃香、気になって試合の方まで見に来たのか……フン、訓練をしておけと命じた筈だがな？

「今のは頸椎を砕きに行ったのですよ。ネギ先生が思ったよりも軽く早く落ちた為に後頭部で済みました。お陰で首から墜ちる事も避ける事ができた……最も砕くつもりは無い様でしたが。」

「刹那、お主は柚木殿の弟子にござろう?。」

「ええ。あの程度で死ぬぐらいなら弟子にはなれません。逆に言えばならない方がいい。」

もつともな意見だな刹那。

「……拙者が本気で挑んで、勝率は?。」

「楓なら真名の弾丸を目視で避ける。とだけ言えばわかるんじゃないか?。」

「……無茶苦茶でござるよ?。」

それが出来るから宗一郎とも言えるわけだがな。

S i d e e n d

二時間半が経過。

正直な話、ここまでネギが立っている事は奇跡に近い。
偶然やまぐれ……いや、認めよう。

俺は幾度となく殺し技を打っている。勿論観衆が嫌なモノを見ない
様に頭を割り碎いてりはしていないが、それでも挫腿、雷、馬歩頂
肘からの鉄山靠、天頭墮……。他にも様々ものを使った。
それを無詠唱展開の障壁に自身への魔力供給で乗り切っている。

昔の刹那を思い出させる。

意識が一瞬外へ向いた瞬間ネギの攻撃が迫る。

逸らし懐へ入る。

「心意六合拳・单把^{タンバ}。」

「ふっ…。」

「鋭いが実直すぎる。読み易い動きだ。」

膝を付くネギ。

今までは「こ」で止めていた。

だが…。

「眠れ。」

前蹴りを一発。

「うぐっ…。」

倒れ込むネギの顔へ震脚を打つが顔を逸らす事で回避される。

転がる様に逃げるネギの横腹を掬い上げる様に蹴りあげる。

「くっ…。。ふっ…!?!」

勢いを利用して立つネギ。

間合いを一気に詰めボクシングの要領で顔や胸に拳を打つ。

「トドメだッ！」

ふらついた所へ大振りな蹴り。

当たれば吹き飛び、残り時間では再起不能。

ギユッ

「消え…。」

大きく振った右脚を地面に下ろし、すぐさま左脚で雑ぐ様に蹴りを入れる。

目の端に特徴的な髪の色。

「この期に及んで……！」

転身跨打が脇腹に深く入る。

「ッ……！」

だが痛みを堪えるのはネギ。

「え?! なんで?」

「決まったと思うんだけど……。」

「まさかっ硬気功アルかっ?!」

「この期に及んで活歩を会得するかよ少年……。」

正直に言おう。瞠目したよネギ、ネギ・スプリングフィールド。

「おい宗一郎! 残り10分だぞ何をモタモタやっている! 本当に弟子に取るつもりかっ!?!」

エヴァのイラついた声。

そこで我に帰る。

そうだ。俺はネギを弟子に取る訳にはいかないのだ。

アレの息子だから。

なあそうだろうナギ？お前は言ったよな？”俺を倒し得る息子を作
つてみせる”と。

「良くやったよ少年。」

息を整える。思考がクリアになる。感覚が研ぎ澄まされる。

「え、じゃあ！」

「何を勘違いしている。良くやったよくやったよ少年。だが……お
遊びはここまでだ。」

構えを変える。

身体の横で木を抱くように構える。

「逃げ…逃げてくださいネギ先生！！」「おい宗一郎！！」「ア力
ン師匠！」

意味を知る全ての者が皆、叫ぶ。

「刹那！？」

アーニヤの声。走り出した刹那。

「あの構えは何かヤバそうな気がするでござる。」

刹那に一瞬遅れて走り出す長瀬。

だが遅い。

ゴツ…ガツ…

構えが変わった途端、辛うじて今まで反応していたネギは全く反応できなくなつた。

右腕一本が蛇の様に撓り絡みつきネギの身体を文字通り破壊する。受けた場所は瞬時に毒々しいまでの紫色や黒へと変わる。骨も無事では済まない。

顔へ、猛烈な勢いで迫る右手を止めようとネギは顔の前で両手を組む。

が、その瞬間

今まで微動だにしなかつた左手腕が伸びネギの鳩尾へ吸い込まれる。

ネギは声を出す事も出来ず吹き飛ぶ。

「師匠！」

迫る刹那の腕を掴みそのまま投げ飛ばす。

投げ飛ばされた刹那を受け止めた長瀬がそのまま学園長の石像に衝突。砕けて二人とも動かなくなる。

一般生徒はそれを見て駆け出そうとする膝が笑い、腰が抜ける。

「おい終わりかネギ、ネギ・スプリングフィールド！！その程度か！お前の親父は立ちあがったぞ！もつとしぶとい、もつと手ごたえがあったぞ！」

ビクンツと反応を示す。

「ま…です。…まら、です……まだいけまふ。」

ガクガクと膝を震わし立ちあがる。

「そつだ。お前はまだ五体満足だ…。腕がある脚がある牙がある。まだ生きている…まだ戦える。さあ！さあ私を魅せるネギ・スプリングフィールド！！！」

「いきまひゅ！」

半身で右腕を振るう。

ネギはそれを回避しつつ活歩。右の死角に入りこむ。

俺はステップを踏みながら左腕を打ち込む。

ゴキンツ

掌で受けたのだろう。肩の外れる音が響く。しかし止まらず崩拳を俺の脇腹へ。

メシツと骨が軋む音が響く。

そしてネギの顎に外側から右腕の肘が入る。

コンツという感触。

更にその肘を返す様に胸へめり込むように…打つ。

ゴトンツ

操り人形が糸を切られた様に力無く崩れ落ちる。

痛いほどの沈黙。

完全に動かなくなった事を確認して声を出す。

「……木乃香、治療してやれ。」

「あ、はいな。」

「ネギ君!!」「ネギ坊主!」「ネギっ!」

生徒達が駆けよるのを尻目に瞬動で逃げる様に離れる。

シャツを脱ぐと脇腹には紫色に腫れた傷。

「二度も“同じ場所に”打たればこうなるか…。」

骨は中へ向かって折れ、内臓に突き刺さっている。

「じぶっ…。」

口から喀血。もたれ掛かる様に座りこむ。

「意図的に再生を止めると…面倒だな…。」

爪を鋭く尖らせ患部を抉り取る。

「ふっ……ぐっ……。」

次に中途半端に折れ内臓に刺さった骨を強引に引き抜く。

「はぁ……はぁ……はぁ……。」

再生力を上げるとドンドン修復されていく。

戦争で学んだ治療。

下手に自己治癒に頼るより取り去った方が回復が早い。

肉体から離れたソレらは灰になってサラサラと消える。

「宗兄……。」

中々に怖い顔だ。

「明日菜か……。」

「やり過ぎ。蛇を見せる事無かったじゃない……。」

別にネギやこの場にいる人間では覚える事は不可能だ。

確かに初見に対して最強だが、見切る様な実力が無ければ行動が解つていても避ける事は出来ん。

だが、明日菜の言っている事はそう言う意味ではないのだろう。

「人は何かを成す為に生を受け、成し終えた後死んでいく。では真祖で、限りなく生きる存在である私は一体何を成せるのだろうか

「？」

「馬鹿。もう成したじゃない……だから休めばいいじゃない。」

「そうだな…そうあればいいな。」

「けどなあ明日菜、まだなんだこの20数年で蒔いた種はよつやく蓄になったんだ。」

「柚木さん……………」

「まだ安静にしてなアカンて！」

木乃香とアーニヤに支えられたネギが現れる。

「何の用だ？」

「父さんの……父さんの事を話して下さい。」

「クルトみたく食い下がったりはしないか…。」

「まあそれでも色々はぐらかして大したことは教えなかったしなあ。」

「アレの話か。断る。自分で調べて見せるネギ・スプリングフィールドその為に京都へ行ったのだろう？」

「ちょっと！そんな言い方無いじゃない！！！」

「アーニヤが堪え切れなくなったのか吼えだす。」

「こんなになるまで痛めつけて弟子に取る気も最初っから無かった

くせこー！」

「え？」

「あつたとも。」

「倒せる訳無いじゃない！戦争の英雄を、サウザンドマスターも手玉に取った貴方に敵う訳ないじゃない！！！」

「では何故条件を変える様に交渉しなかった？何故一人で戦う選択をした？交渉する程度の頭脳はあるはずだあの馬鹿と違ってな…無茶だと思ふのならば条件を変える様に交渉するべきだ。これは殺し合いでは無いのだからな。そして敵わないと分かっているのにお前はただ糞真面目に真正面から挑んだ。何故頭を使わない？何故裏をかかない？刹那や長瀬もそちらに居たな？何故頼らない？古にも加勢を頼めば良かった。流石に一般人の前でそれだけの人数に仕掛けられ俺とて不覚を取っただろうさ。それからアーニヤいやアンナ・ユーリエウナ・ココロウア。どうしてアーティファクトでも使って支援しなかった？私が弟子に取るつもりが無いと、そう考えていてどうして今まで動かなかった？」

「それは……アーティファクトなんて皆の前じゃ……。それに……私は……。」

言葉に詰まるアーニヤ。何の声も出無いネギ。

「バレても記憶を消せばよかろう？それが君達連合の、立派な魔法使い（マギステルマギ）とやらのやり方だ。」

「そんなこと出来る訳ない！クラスメイトなのよ!？」

69話：弟子入り試験（後書き）

期間が開いた割にはクオリティーががが…orz

はてさて何とか入りたい悪魔襲撃編

その前に海へも行きたい。

年内できるだけ更新頑張ります。

70話・南国の暗雲(前書き)

大変長らくお待たせしました。

しかも予告日より遅れてるし……。

1月中に更新できませんでしたorz

70話：南国の暗雲

荒れた丘陵。

最後の決着の幕が降りる。

「ツつづ……。」

ナギが膝を付き首元に刀が突き付けられる。

「これで終わりだな。」

「ああ、終わりだ。くそつ……結局一度も勝てず仕舞いかよ。」

「なに俺は不死者だ。ノスフエラトウお前の命尽きるまで挑んで来ると良い……お前は本気を出すのに値する。」

刀を仕舞い倒れたナギの腕を掴み引き起こす。

「それは……褒め言葉って事でいいのかよ？」

「ああ構わんよ。」

「へっ……その顔いつか悔しさで溢れるようにしてやるぜ。」

「楽しみに待つとしよう5年後か？10年後か？」

「いや……もつと先だ！俺はよお馬鹿だ。それでも直感って奴で解るんだぜ俺がどう頑張っても敵わねえってよ……でもな、俺とアリカの子がお前を倒す。アリカはほら、頑固で人の話なんか聞きゃあし

ないけど頭は良いからな！俺様のスーパーな魔力容量とアリカのク
レバーな頭でコレと決めた事に対する意志は固いぜ？何せ俺達の子
供だからな！」

「くっ……はははははっその発想は無かった……それからナギ、後
ろを見た方がいい。」

「あ？…っ！？アリカ！」

振り返るナギ。汗の流れる音が聞こえる。

「ほう…頑固で人の話を聞かない？良く言ったぞナギ、そこへ直れ。」

「いや、頭が固いつていうのか？その…アレだ…ええと！？おい宗
一郎なんて言えはいい！？」

「諦める。」

「へぶうあああ。」

アリカ王女……いやただの人になったのだったな。

アリカの鉄拳で宙を舞い地面に激突するナギ。なんだろうっなあこの
ダメージは…やはり魔法障壁は偉大なのだろう。

「銀騎士……いや柚木宗一郎であったな。」

「ああ。」

「色々と迷惑を掛けたすまぬ……。」

「俺が俺の為にやった事だ気にするな。まあ確かに？世界を救う羽目になった上に自棄になったか自ら罪を認めるなんて事をやらしくてくださるどこぞの王族の自白を揉み消したり拳げ句救出を手伝ったり……全く好き放題やってくれたよ。」

「ッ……………！」

俯くアリカ。

決して”うわぁこの反応新鮮で面白いなあ”などと考えてはいない。

「冗談だ。」

頭に手を載せグシヤグシヤと撫でる。

「なっ何をするっ!?!？」

「ん？テオは喜ぶんだがなあ…。」

アリカのアップパーが鳩尾に刺さる。

しかしシルバースキンがその衝撃を伝える事は無い。

「………………。お主のコレは魔法でも科学とやらでも無いな？」

ジツと拳を見つめ小さい声でそう尋ねるアリカ。

「お主を初めて見た時から思っておった……お主だけは”外側”におる。そんな気がするのじゃ。」

「…………それは帝国の機密情報って事で勘弁願いたいね。」

「そうか……いや、妾……私の推測がお主の存在によって否定されたのは好ましい。この世界は儂い泡沫の夢などでは無かったのじゃからな……。」

「何の話だ？」

「亡き父王が言ったのだ。人の生もこの世界も全ては儂い泡沫の夢に過ぎぬ……とな。」

「はっ……何だそれは？胡蝶の夢ではあるまいし……。っと、そろそろ時間だな。」

「胡蝶の夢……？」

「ナギに……あー……旧世界で調べな。時間は死ぬまであるんだナギと子供を作って幸せに暮らせ。アスナは俺が最期まで看取ろう。」

「何から何まで……すまぬ。……おい、いつまで寝ておるナギ……！」

一度深く頭を下げ、次に顔を上げたアリカの目には迷い憂いも何もかも消えていた。

踵を返しナギの下へ。

「おおぅ……！」

ナギを引きずる様に起こすアリカ。

くくっ……早速尻に敷かれたか。

「ゲートが安定しました！ナギ、アリカ様！」

クルトが叫ぶ。

ゲートの発光。

光の中、ナギは最後まで子供っぽい笑顔で。アリカは申し訳なさそうで、それでいて凜とした顔で。魔法世界から消えた。

それが二人を見た最期だった……。

随分と懐かしい夢を見た。

アレの子供ならば既に全盛期のナギと同じ年齢なのだろうと頭の片隅で何処かそう考えていた。

それがまさか中学生にも満たぬ年齢だとはな……。

身体を起こし水差しの水を流し込む。

「おはようございます。」

「ああ、おはよう茶々丸。」

身体を起こし立ち上がる。

茶々丸から服一式を受け取る。
と、同時に茶々丸はエヴァを起こしに行く。

茶々丸も随分成長　　という表現で良いのか？　　したな。

最初の頃は下着を変える時までこちらを無表情に見ていたモノだが
……。

ある日突然赤面からの暴走。今では上半身裸すら駄目だ……女の子
らしいといえばらしいのだがなあ。

対象的に茶々丸の妹達は脱がしに来る……これは感情・動機付け
としては成功なのだろうか？失敗なのだろうか？

Side 千雨

これは一体どうなっついていやがる？

最近平和だった事に対する代償ってヤツなのか！？

柚木先生とネギ先生と一緒に来てホームルームをするのが3 - A恒
例の朝の儀式だった。

ところがだ…この2日は一人ずつしか来ない。

もう一つ。

柚木先生が授業の時はネギ先生が後ろに。ネギ先生が授業の時は柚
木先生が後ろにいた。

それが二日前から唐突に無くなった。

それだけならまだ、まだ何とか違和感で片付ける事が出来た。

アーニヤとネギ先生。

柚木先生と古、佐々木、大河内、亜子。

この組み合わせの会話に激しく違和感を感じる。

極めつけが事務会話以外まるで話さない柚木先生とネギ先生だ。

柚木先生はそんな素振りは見せないけどよぉ…二日前の放課後以降何かがあった。

お陰でクラス全体が妙にギスギスしてやがるぜ。
いいんちよまでが首を捻ってやがる。どうしてこうなった……。

S i d e e n d

S i d e あやか

い、一体どういう事ですのこの事態は？

二日前から私への指導まで止まりましたわ……。そしてネギ先生と柚木先生のこの状況。

週末にネギ先生とプライベートビーチでデートなどと考えていた自分が恥ずかしいですわ！

「へえそんな事考えてたんだあ大胆だねえいいんちよも。」

「朝倉さん!？」

声に出ていたようですわっ！不覚。

「なんの事でしょうオホホ……。」

「まあまあまあ誤魔化さなくてもいいって！計画は御破算だけどさ、この状況はいいんちよも何とかしたいんじゃないの？」

「それは……。」

その通りなのですが……朝倉さんに任せるとするのは少々ではすまない不安感が……。

「原因を知らないいいんちよより状況が多少なりとも解ってる私の方がいいと……げふっ

「どういう事ですの！？……あっ……。」

……気が動転して思わず朝倉さんの首元を掴み激しく揺らしてしましたわ……。

「つまり弟子入り試験を受けたけれどネギ先生は惨敗、弟子入り試験は失敗。なのに最後に文句を付けたアーニヤさんだけが弟子入りを認められた……と。」

「そつ。くーちゃん曰くロクに太刀打ちも出来ずにメツタ打ちで翌日学校へ来れたのが不思議とか何とか。その辺は木乃香が何とかしたんだとは思うけどね。」

状況だけ聞けば意味不明どころか理不尽ですわね……。以前なら柚木先生に飛び掛かっていた所ですが、私に何か出来る事はあるでしょうか？

本と言う教材で魔法を教えられている私は言わば二人の中間地点。弟子でも無ければ、それを頼めるような立場でも無い。

私が今学んでいる様な生活に使う様な魔法。これとて使い方を間違えれば容易に人を傷つけてしまう。

火を灯す呪文。水を生み出す呪文。穴を掘る呪文。物を動かす呪文。世界を平和に出来る一方で世界を危険にってしまう力。

まずは確かめなくてはなりません。ネギ先生がどうして弟子入りを望むのかを。

「とりあえずさ、プライベートビーチ行っちゃ行って釣れた子を全員。それから渦中の人物たちは全員参加になるように出来るかな？」

「え、ええ。」

何か一混乱起きそうですわね。

S i d e e n d

「海い？この時期にか？行きたければ幾らでもソレで行けるだろう

……。」

「そんな言わんと行こうやー師匠ー。」

夜。訓練後、俺は木乃香にまわりつかれていた。

「で、刹那も行きたいのか？」

「ええと……このちゃんが行くなら……。」

聞いた俺が馬鹿だった。

雪広がバカンスに行こうと言い出した。

そこで海に行く事になって雪広財閥所有の南の島のプライベートビーチに行く事になった。

この時期に海になった理由や海外かよという辺りは最早考えない様にするしかない。

しかし簡単には行かない。”保護者”が必要だというのだ。

そこで白羽の矢が立ったのが俺。ネギでは保護者にならないというのが最大のポイントらしい。

「しかしなあ……。」

面倒臭いにも程がある。

海なんて別荘で好きなだけ入れられるだろうが……というのが大きい。綺麗だし。年中泳げるし。黙っても酒は出るし煽いでくれるしビーチチェアにパラソルも瞬時に出る。至れり尽くせりだ。

だが、こうも思ってしまう。
この年頃の子供は幾ら知能や思考や精神年齢は高くとも同年代の子供と遊ぶべきだと。
その辺を明日菜やエヴァやタカミチにはさせてやれなかった。自分も出来なかった。
だからこそ刹那や木乃香にも短い”今”を謳歌して欲しいという気持ちがある。

「はあ…仕方ない今回だけだからな！」

「やったー流石師匠やー！」

了承するなり水着や浮き輪を取りに駆け出す満面の笑みの二人。

それを見送り思わず弛んでしまった顔をパンツと叩き直す。

「まあ最近頑張っていたからな…御褒美だという事にしようじゃないか。」

Side 木乃香

「よし上手く誘えたえ！」

「ヒヤヒヤものでしたけどねえ…。」

「まあそれもこれも演技抜きでせっちゃんが海行く事を楽しみにしとったからやな！」

「ちがつー！このちゃんやって楽しみにしとったやん!？」

「あーあーきこえへーんきこえへーん。」

聞こえへん聞こえへん。しゃーないやんウチかて中学生や。
それに……麻帆良の皆と遊べんのも”今年”が”最後”かもしれん
から……………。

「せやけど……ようせつちゃん生きてるなあ……。」

せつちゃんの腕を掴んでまじまじと見つめる。……すべすべやあ。

「……………はい?」

「ネギ先生との試合見て解ったやんけど師匠の武術、節操無さ過ぎ
やろー……。」

「元々は一つみたいですけどねえ……。ウチらには教えてくれへんネ
ギ先生に最後に使った技。」

「アレかあー。んー……………でもかなり手加減はしとったよなあ。」

思い返す限り目や首は狙ってへんし……………。

「そうですね最後の技ですら目視出来ましたし……………。」

「なあ、せつちゃん。ウチらって師匠とマスターについて長いけど
何も知らんなあ……………。」

「マスターはともかく師匠は映画ぐらいですからねえ……………せやけど、
師匠が強くなったのは真祖になってからやと思う。……………いえ、思い

たい。」

思いたい？

「どづいづ事なん？」

「被弾前提、怪我前提”。そう言えばこのちゃんやったら解ると
思っんやけど……。」

「そう言えばせつちゃんもやたら素手で何もかも対応する様に訓練
されとつたよなあ……。」

「今度聞いてみたいですねえ……で、このちゃん？」

「なんや？」

「なんで……なんで……折角の南の島で水着がスクール水着なん！
?!?!?!?」

「そらぺったんこのせつちゃんにはソレが一番やからや！それに比
べてなんやこのPADは！」

せつちゃんが使おうとしていた微妙なビキニとPADを天に掲げる！

「ちよっ……!?!?何時の間に！」

「そんなん描写外でに決まってるやん！ラン！」

燃え上がる水着と忌まわしきPAD。やったえ師匠、悪は滅した！

「ああああ……。」

膝から崩れ落ちるせつちゃん。

「大丈夫。悪霊は灰も残さず消えたえ。さあウチとお揃いでスクール水着や。師匠も喜ぶえ！」

少女たちの夜は更けていく。

S i d e e n d

青い海。青い空。白い砂浜。照り付ける太陽。
笑い合い微笑ましく砂浜を走り。波に遊ばれ。自然を満喫している。

が。

その砂浜に一人、スーツの男がいつもにも増して厳しい顔で腕を組み、仁王立ちしていた……。

「暑いだろ……常識的に考えて。」

「驚いたな……こういう騒ぎには普段参加しないだろう長谷川？」

「べ、別に来たくて来たんじゃないよ……いいんちよが誘ってきたし、こんな遠い南の島にタダで遊びに来れるから試しに来てみただけだ……そ、それよりコレ、そんな格好じゃ暑いだろ？」

長谷川から差し出されるコーラを開け飲み干す。

「美味い。」

「脱いだらいいじゃねえか……。」

「いやそう言う訳にはいかん。監督、保護者としてきているのだからな。」

「ウチの連中なら溺れる心配なんて無いって……。」

「それでも万が一という事がある。特にウチの連中だけに何が起るか……。まあ長谷川は楽しむといい。」

「まあ……またもってきてやるよつ。」

駆け出す長谷川。

「ああ、長谷川。」

「ん？」

「その水着、良く似合ってるぞ。」

真っ赤になって反転、駆け出して行った。はて……まずったか？

S i d e 雪広

柚木先生は海の方角を見ている。今しかない。

「ネギ先生、ちょっとよろしいですか？」

「いいですよ！」

明るい様でいて……まだ暗いですわね。

人気の薄い方へ連れ出す。

いつもなら別路線に入りたい所ですが、今は我慢ですわあやかっ！

「ネギ先生はどうして柚木先生の弟子になりたいのですか？」

「何故……ですか。僕は父さんを探しに日本へ来たんです……6年前僕の故郷である事件が起きました。それを解決したのが父さんと柚木先生なんです。」

「まあ……それは……。」

「僕は父さんの様になりたい。でも色々、何もかも足りなくて……。唯一の手掛かりも未だに解けていません。近付くためには父さんに今解る一番近い人に弟子入りするしかないんですっ！」

だから、ボロボロになるまで必死に……。普通なら抱きしめたい。頭を撫でたい。

ですが、まだ聞きたい事は聞けていません。一番の正念場ですわ…。

「ネギ先生は……。魔法をどう思われますか？」

「えっ……。何で？え？なんで僕が魔法使いだって知ってるんですか！？」

え？ネギ先生、それをお認めになってどうするんですの……！

と、とりあえずシナリオ通りに進めるしかありませんわっ！

「プラクテビギナル アールデスカット。」

掌の上に火が灯ります。

本当は魔法を否定し誤魔化そうとするネギ先生に見せて聞き出す予定でしたが……。

大・誤・算！ですわ。

「あ、ああ驚いたー…いいんちよさんも魔法使いだったんですね！」

「ええ一応。それ……。」

「じゃあ魔法をどう思うかなんて決まってるじゃないですか！目指すべき物は一つ！立派な魔法使い（マギ・ステルマギ）です！」

ちょっと意味がわかりませんわ。

連合の魔法使いという存在は大体こう答えると聞いてはいましたが

余りにもテンプレートですわ…。

「せ、先生にとってマギステルマギとはどういったものでしょうか？」

「父さんの様な人です！」

……………。

「ネギ先生。」

「はい？」

「今のネギ先生では一生弟子入りは出来ないと思いますわ。不肖、雪広あやか微力ながら協力を…と思っておりますが今のネギ先生のお言葉を聞いてその意味も無いと解りました。」

「え？」

「今のまま弟子入りすれば確かに強くなるでしょう。ですが、それではきつといつか先生は誰かを意図せず傷付け、殺める事になるでしょう。そして先生はきつとその事に耐えられはしないでしよう。」

何もかも解りました柚木先生。

私にネギ先生の弟子入りの件を何も話されなかったのかも。何故アーニヤさんだけが弟子入りを認められたのかも。

私はネギ先生の事を弟の様に愛しています。ですから私はネギ先生をそんな延々と続く苦行の道へと送り出す事は出来ません。

ですから今は背中を向ける事が最適解。最善。

「待って下さい！僕は、僕はどうしたらっ！」

Side end

Side ネギ

(今のネギ先生では一生弟子入りは出来ない)

(今のネギ先生では一生弟子入りは出来ない)

(今のネギ先生では一生弟子入りは出来ない)

その言葉が何度も再生される。

いいんちよさんが魔法使いだった事も驚きでしたが何よりもその言葉が心に深く突き刺さりました。

「今の僕じゃ……ダメ？」

何が悪かったのか。僕がいいんちよさんに言った言葉を思い返す。父さんを探しに来た事。マギステルマギを目指している事。

ダメだ。何も悪い所は無い筈だ。

僕が……弱いから？

暗号の一つも解けないから？

あの日からアーニヤとも上手くいって無い。

そもそも教師だって出来ていなかった。

あの日の翌日、僕は僕の仕事を周りの先生方にやってもらっていた事に初めて気が付いた。

それも自分から気が付いたんじゃない。

新田先生に言われて初めて気が付いたんだ。いつもギリギリに着いて、毎日早い時間に帰れて……。

それは新田先生やしずな先生、瀬流彦先生、そして柚木先生が分担して片付けていたから。

「僕には……。」

父さんみたいにはなれないのかな。

Side end

Side 朝倉

「ではこれより仲直り大作戦を実行するよっ！」

「ええと……つまり私は溺れてるふりをしてネギを待てばいい訳？」

「その通りッ！ネギ君は今自信を失って萎びた残念なネギになるわけよ！そこでアーニヤを助けて自信回復& amp・自然と仲直り晴れて新鮮な青ネギにつてわけよ！」

どーよこの完璧な作戦。

テンパッタネギ君が仮契約カードの召喚を使う訳が無いし必然飛び

込み、二人はラブロマンス。

「ねえ朝倉、それだと溺れた演技の直後に柚木先生が飛び込んで詰むんじゃないかな…？」

「ウチもそう思うんやけど……。」

一番の難敵に対してアキラと亜子が反応する。

当然そこをカバーしなくては、この作戦の成功確率は0に限りなく近くなる。

「そこはもう二人の手腕だよ。ただ先日の事に対しての二人の疑問を素直にぶつけるだけでいいよ！」

「え、ウチらが…？」

「まき絵でもいいんだけど、多分それをすると言明する事自体をめんどくさいと思う可能性が高い訳よ……それにあんな事になったのは自分の所為だってああ見えても落ち込んでるしね。それじゃ散開！」

二人は柚木先生の下へ、アーニヤは海へ。

そして私は……。

やっぱりドツキリとピンチが無くちゃドラマは生まれないうねえ！！

Side end

「先生、ちょっといいですか？」

「なんだ2人とも…？」

大河内と和泉の2人が並々ならぬ気迫で詰め寄って来た。和泉は普段気弱なだけにそれなりの驚きがある。

「この間の事について説明して貰いたいです。」

ああ、またその件かとも思う。

だが2人はその場に居た。ある程度の説明は必要だろう。

翌日の早朝に家のドアを叩いたウルスラの何とかグッドマンみたく門前払いする必要は無い。

「いいだろう…。」

「2人は、あー佐々木も古も含めてだがネギが何をどうしたいのかを知っているのか？」

最初にそう、俺が先に疑問を持ったのがそこだ。

確かめねばならない。

ネギの下らない幻想マキステルマキに看過されてしまったのか、それとも成り行きなのか。

「ええと、何かよわからへんけど…ネギ先生が一生懸命頑張つて…せやから応援しに行ったら…。」

先に口を開いたのは和泉。

「大河内も似たようなものだな？」

慎重に頷く大河内。

これはこちらも慎重に動くべきか。大河内の洞察力を舐めると誤魔化す所も誤魔化しきれん。

「俺はまずネギの弟子入りを断った。唐突に弟子になりたいなどと言われても困る。何を目的に何のために使うのか？安易に教える事は出来ない。」

「でも…。」

「まあ…待て。なるべく生徒には見せたくなかったのだが…。」

和泉を抑えて手近な木に拳を添える。

気を込める程でも無い。声を出すほどでもない。ただ、少し押すように撃ち出す。

ズズンと音を立てて木が折れる。

青々と茂った柔軟性のあるはずの木が倒れる。

驚きで沈黙する2人。

「これがネギが欲した力だ。こんなものはな、無い方がいいんだ。使う機会が無ければ無い程素晴らしい事なんだよ………これで納得できたか？」

小さく頷く和泉。

俺は思わず目を逸らす。

ああ、怖がられているな……とは思う。

だが安心して欲しい。今はまだ言えないが俺は学祭を最後に教師を辞める。

背中を向けて離れよう。それが最善。

彼女達に触れないのが最も良い選択だ。

そつとその白い首を掴むだけで意識を刈り取る事が出来る。

人は驚くほどに脆く弱い。

俺は彼女達にそれを振るう事は無いだろうが、彼女達がそう受け取るとは限らない……いや無い。

ぎゅっ……と、手が握られた。

驚きと共に振り返る。

掴まれた右腕、掴んだのは両手。

「う、ウチ、何となく柚木先生が凄い強い人なんやってわかつつたんです……！」

何時、何を見られた？

まさか和泉まで巻き込んでしまったのか？

「前にウチらが怖い人らに囲まれた時にナイフを飴細工みたいにしてたし……。」

ああ、あの時はほんの少しキレていたからな……。

「怖くないのか？」

「全然……先生は使えるからいうて無闇に使ったりしーひんとウチは思ってます。」

最後の方は聞き取り難かったが……教師として信頼されているのだな……。

しかし

大河内は動いていない。

「先生がどれだけ手加減したかも、どうして弟子入りを断ったのかも解りました。でも、どうしてそれならあそこまで……ボロボロになるまでする必要があったんですか!？」

大河内はそこが聞きたかったわけか。

手加減している事も解っていた。なおかつあの場に居たのならナイフの事もスタンガンの事も見ていた筈。しかしそこは説明しても良いものか？

「ある男と約束したんだよ。ネギが生まれるずっと前に。」

「その人と、あそこまでやった事に関係があるんですか？」

「あるさーつ話をしてやろう……昔々

ある所に二つの大きな国と一つの小さな国がありました。

その国々は帝国という勢力と連合と言う勢力で戦争を行っていました

た。

これから話すのは帝国の褐色の肌を持つ王女と小国、されど権威ある国の白い肌の王女。それぞれに仕えた男の話だ。

帝国についたのは銀の騎士。そして連合についたのは赤髪の騎士。

2人は何度も刃を交えました。

殺す殺されるという関係。

ある種似た様な境遇。

銀の騎士は常に勝ち続けました。でも、赤髪の騎士の命を奪う事は出来ませんでした。

やがて戦争も末期に入り苛烈な消耗戦。

王女たちは将来を憂い戦争を終わらせる事に尽力しました。

結局戦争は停戦という形に落ち着きました。

しかし白き肌の王女はその代償に国を失いました。

更に罪を問われた王女は愛した赤髪の騎士と手と手を取り合い何処とも知らぬ彼方へと消えました。

しかし最後に赤髪の騎士は言いました。

”俺の息子が必ずお前を打ち倒す。首を洗って待っている”と。

銀の騎士は嬉しそうに笑って答えました。

”ああ、楽しみにその時を待とう。”と。

とまあそんな感じでどーだ？

「先生、本当に今何歳ですか？」

地味に怒り気味の大河内。ううむ、割と真剣な話だったのだが……。

「今年で……えー……ろっぴゃく……よんじゅう……そこそこじゃないかな？」

ぷつと堪え切れない様な笑いが和泉から漏れる。

「あ、アカン。真面目な顔して無茶苦茶なボケやぶつ…あはははは。」

啞然とする大河内、笑い始める和泉。

この雰囲気、利用しない手は無い。

なんだが面白かったという風にしてしまおう。

「ああそうだ大河内、吸血鬼の嫌いなモノ知ってるか？」

「はい？ええと、十字架とか教会とかニンニクとか胸に杭を打つとかですか？」

パーフェクトだ大河内。ちなみに俺はどれも効かないぞ。

「理由、考えた事あるか？」

「ないですけど……。」

「俺はな吸血鬼だから理由がわかるぞ？吸血鬼って奴は首から血を吸うだろう？清らかな乙女の首筋にいざってその時にニンニクの強い口臭なんてたまらんだろう？お断り願いたいね。」

「アカン…ウチ、もう、息出来ひん。」

腕につかまったままツボに入ったのか笑い続ける和泉。
ひーひー笑うとはこの事だな。

「杭を心臓に刺したらーって弱点でも何でもなく純粹に死んでしま
うよ。それで動くから吸血鬼だとは思わないか？」

「あ、確かに。」

大河内も流され始める。

「ってそれ吸血鬼じゃ無くても解りますっ!」

一しきり笑った後、背を向け一言。

「まあそうだな、ネギが……俺を納得させるだけの理由と意志を示
したら再戦して”やらんこともない”かもな。」

砂浜に戻るとちよつとした騒ぎ。

やれアーニヤがおぼれかけた。

やれ鮫が出た。

ネギが鮫に格闘技で敗れた。などなど。

全くおかしい話だ。鮫の出る海域でも無ければアーニヤが溺れるは
ずが……ああ。

このクラスを二年も担当していれば嫌でも解る。

ネギを励ましつつアーニヤと仲直り作戦と言った感じだろう。

……その割にネギの表情は余り良くないがな。

S i d e ネギ

僕はどうしたらいいんだろう？

どうしてアーニヤは認められたんだろう？

「あの…ネギ先生。」

「あ、夕映さん…と、のどかさん。どうかしましたか？」

「先日お借りした図書館島の暗号が解けたです。」

「ほ、本当ですか?!」

京都で手に入れた父さんの手掛かり。そうだ今の僕にはコレしかない。

のどかさんが巻物を広げて一点を指しました。

「恐らく…こ、コレが暗号…のつもりなんじゃないかなあって…その…。」

そこには父さんらしき顔の絵と…カタカナの文字。暗号ですら無い。

何で気が付かなかつたんだろう…。

「あつー！ホントです！のどかさん、夕映さん！ありがとうございます！
ます…！」

「いえ、声には出ていませんが……。」

夕映さんがのどかさんの方をみて

のどかさんがためらいがちに僕に見せたのは一冊の本。

「あ、あの、ネギ先生……すみません。その……勝手に心を読んで
しまつて……。」

蘇るのは修学旅行での出来事^{キス}……。

70話：南国の暗雲（後書き）

今後の更新について。

必死に頑張ってみましたが留年が成績表到着前に確定しました……。私学で金銭に余裕が無いため最悪辞めて就職等になるかもしれない。ん。

そうになると更新が難しく、更に実家にはネット回線？地デジ？なにそれ？状態で一ヶ月に一回更新出来るか出来ないかという状況になります……。

一応生存報告は活動報告等で定期的にしたいとおもいます……。

次回

71話：麻帆良強襲。

カモの策謀。

フェイトの暗躍。

絡み合う策略が混乱をもたらす。

71話：麻帆良襲撃 - 前編 - (前書き)

お久しぶりです。お待たせしました!!再開します。

南海で巻き起こった騒動は緩やかにされど激しく加速していく。

71話：麻帆良襲撃 - 前編 -

ダメだ……記憶を消さなくちゃ！
マジステル・マジになれないッ！

杖を握る。

「ちよーーっと思ったアアアアアア！」

「カモ君！？」

記憶を消そうとした僕の前に割り込むようにカモ君が飛び込んでくる。

「兄貴、記憶を消すなんてとんでもないぜ。」

「で、でも夕映さんは魔法を知らない一般人だし……。」

「ちっちっちっ。甘い、甘いぜ兄貴。マジステルマジとあろうものが従者の一人も持ってねえなんて格好が付かないぜ！しかもせっかく契約したのにほったらかしとはそりゃあねえぜ！」

「仮契約の事は黙ってる様について言われたよ！？」

「そうやって唯々諾々と従うから勝ち目の無い勝負で誤魔化されたんじゃないか兄貴？」

う……。

「それならのどかさんは解るけど、どうして夕映さんまで！」

「いやあ俺っちも不覚だったぜ…暗号解読まで頼むんだからてつきり契約の一つもしてるものだとお…一つ言っておくけどよお俺っちがゲロっちまったのは夕映っちが魔法の事に気付いてたからだぜ？でなきやうっかりに定評のある俺っちでも一般人の前じゃ喋らねえよ。」

そっか…暗号の中に魔法を指し示す物があつたら…。

「まあまあそんなに落ち込む事あねえよ兄貴。のどか嬢ちゃんと夕映っちが親友だぜ？言わない方が負担になるってもんよ！」

「そ、そっかなあ？」

「おつよ。ところで兄貴、とりあえず夕映っちと一発行つとこうぜ
！」

「…一発行つておくとはなんです、カモ（・・）さん？」

若干怖い顔で夕映は問う。

それに気が付かずカモは饒舌に話す。

「一発ぶちゅつとかまして仮契約一枚ぶべばっ!？」

最後まで言い切る前にカモ君は、ひったくられ地面と熱い抱擁^{ハグ}を交わしていた。

「カ・モ・さ・ん？」

叩きつけた主はカモを薄く睨み静かに声を送る。

「あ……つといけねえいけねえ……まあ夕映つちじゃ前衛系のアーティファクトが難しいだろうしなあ。」

カモは目線を逸らすように話題をすりかえようとする。

「えっと……その、私もコレでネギせんせーの力に、なれると思います……。あんまり役に……。」

「立つです。ノドカのアーティファクトは心を読むモノです。例えば柚木先生が幾ら強くても先手を常に取れば負ける道理はないです。」

言われて考える。

果たして先を読んだ所で勝てるのだろうか？

心を読まれていると解った時点で戦闘スタイルを変えてくる。

そんな予知にも似た様なモノが脳裏に走る。

”思考？人を倒すのに何か考える必要があるのか？”などと言いかねないのではないか？と。

そもそも僕が勝てる筈が無い。

先を読んでもどうあがいてもアレを出されたら終わり。

あの日の最後。

障壁も何も出来ずに、何をされたかも解らずに倒れた。

撓り絡みつく様な腕。

顎に何か当たって……記憶が無い。

何をどうすれば認めて貰えるのか？

どうしてアーニヤは認めて貰えたのか？

どうしていいんちよさんはああ言ったのか？

わからない事だらけだ…。

たった一つ。

その3つが解れば何もかも解決する。そんな直感だけが僕の脳裏にゆらめいていた。

Side 宗一郎

明日菜もエヴァも茶々丸も居ない一人の夜。

俺は、眠れないでいた。

いや、眠ったものの悪夢で目を覚ました。という表現が正しいのだろうか。

まるで子供の様だと自嘲して笑う。

思い返せば一人で眠る夜など何百年振りなのだろうか？

煙草を啜え指を弾くと火が灯る。

大して美味くも無い紫煙をくゆらせる。

酒が目に入る。

空になり転がった酒瓶。

エヴァか新田先生やタカミチ、ヴェラシオと一緒に飲まなくては酔う事すら出来ない。

皆で飲むとあれ程に美味しいモノも無いというのに、一人で飲むとまるで水の様だ…。

潮騒を背中に聞きつつデッキに身を任せズルズルと滑る様に床に尻を着ける。

悪夢で目を覚ます位ならば眠らなければいい。

真祖である自分にとって睡眠など嗜好でしかない筈だ。だが習慣となったソレは波の様に押し寄せる。

その時。

コンコンと、扉が叩かれた。

「誰だ？」

「私アルヨ。入っていいかい？」

さして断る理由も無い。

「ああ。」

スルツと扉が薄く開き超が入って来る。

「アイヤー……これは……。」

酒瓶や煙草の煙が充満する様を見て超の顔が引きつる。

「これは…吸ったら狂う毒とか……。」

「そんな物は撒いてない…で、何の用だ超鈴音。」

「一人では眠れてないんじゃないかなって思ってたネ。心配して来てみたヨ。」

なんでその事を知っているのか…。テオも知らないはずなんだがな？
エヴァと茶々丸くらいしか知らない筈……。

「なんでって顔はしなくていいネ。私は未来人ヨ。」

「そんなにコレを有名なのか？」

長い沈黙。

「ソレを失くす為に私がこの時代に来たヨ。」

答えない……か。

コイツの素性はわからないが……極めて近い位置の人間……であって
ほしいね。

スツと超が手を伸ばす。

「コレはなんだ？」

「握って寝るといいネ。」

満面の笑顔の超。

その手は取らず背を向け布団を被る。

たちまち眠気が襲ってきて……………。

Side 超

定期的な寝息。

安定した脈拍と呼吸。

寝入った事を確認して布団をめくり顔を覗きこむ。

まだ安らかな寝顔。

そつと額に手を当て呟く。

「日本からは遠く心もとないが…………トオツカミ エミタマエ ック
ヨミ オリマシマセ。」

月の光が重点的に大師父に注がれる。

夢の無い眠りへと落とす。

そつして初めて顔を真近で見つめる。

「こうして見ていると…………本当に母上は大師父に良く似ておられる…………。私も似ていて良いはずなんだけどなあ。やはりエンテオフュシアの血の方が濃く出るのだろうか？それでも黒髪黒目だけは…………ああ、本当に嬉しい。」

ふつと溜息を付き中空を見上げる。

「しかし私が来たせいなのか史実が狂ってしまったているなあ…………それとも元々私たちに与えられていた情報が偽りだったのか…………ネギ坊主は想定以上に甘い上にお子様、大師父は落胆から来る失望と持

ち前の頑固さでドンドンこじれるばかり。このままだと計画前が変わりそうだよ……はぁ……。」

少し強引な手段に出るべきか？

現状ならネギにも大師父にもエヴァンジェリンにも勝利できる。

ネギはともかく

大師父は状況を設定することでシルバースキンとフェイタルアトラクシヨン以外に脅威は無い。

しかしそうなると使命にも計画にも影響が大きすぎる……

待て。

本日の日付は……

やはり、ああ……麻帆良学園襲撃の日がもうすぐじゃないか。

ネギ坊主にも大師父にとっても大きな変化。ターニングポイント

そんな誰にも話せない”レキッ事実”をただ大師父の手を握りながら考える。

もうすぐ夜が明ける。

S i d e e n d

S i d e 高畑

「ねえタカミチ聞いてる？」

「あ、ああうん。勿論聞いているとも。」

既にエヴァは寝てしまった。

宗一郎さんの家で明日菜さんの愚痴聞き役として僕はお酒を飲んでるわけだ。

「でね毎朝毎朝宗兄とエヴァが同じベッドで寝てるわけよーそれを起こしに行く私の身にもなってよー……まあ最近茶々丸がやってくれてるけどさー……。」

「そ、そういえば……。」

「あによ？」

完全に目が据わってるなー……帰れるかな今日……。

「宗一郎さんって昔から一人で寝てる事の方が少ないんじゃないかな？少なくともこの20年はそう思っただけど……。」

記憶によれば僕がここに来た当初は二人が横に寝てたし

そのうち明日菜さんが離れて、でもエヴァが絶対に離れなかった……。

魔法世界に居た時はきつと仲間やテオドラ皇女と寝てただろうし、その前はエヴァとって……アレ？

「そーいえばそうねえーって子供じゃないんだからさー。」

僕なんかじゃ三年もあればそれこそマトモな手段じゃ勝てなくなるだろうね。

でも弟子入りしてほしくないという気持ちもある。強くなつたネギ君を連合が利用しないはずがない。

同時に何の役にも立たなければ早晩消されるだろうと言う事も予想は出来る。

彼は連合にとつて”最も渴望する存在”であると同時に”最も抹殺したい存在”でもあるのだから。

「大体さあ弟子入りなんて志願しなきゃよかつたのよ。」

「えっ…。」

「宗兄の習性っていうか感性っていうのか擦り寄ってくる犬より噛みつく狂犬の方に興味持つわけよ。」

「それって所謂クルトと僕の対比かな？」

「そんな感じ。あとはねえナギが頼んでたら別なのよ…木乃香が詠春に頼まれてでしょ？友人からの頼まれ事なら聞くのよ。例えこの間まで斬り合つてても。」

なんとなく宗一郎さんの弟子達を思い浮かべる。

クルトは一応弟子入り。僕はガトウさんから頼まれて。木乃香ちゃんも詠春さんから、刹那君は…噛み付いたんだだろうねえ…。

アーニヤ君も…。

「あと弟子が一人死んでるのも痛いかなあ…。」

「あれ？聞いた事無いけど？」

「コウキだったかな？宗兄のクラスの子の関係者。タカミチがNGの活動に偽装して完全なる世界の残党狩りしてた時の弟子よ。」

「あの時かあ…一番色々激しかった時期だったね…。」

「っていつかさあ最近エヴァと宗兄と超さんが……………」

「…っと、なんだい……………って寝ちゃったか。」

超鈴音。

身元不明、経歴不詳、名前の読みも明らかに違和感満載。

そんな彼女を宗一郎さんとエヴァが”揃って”問題無しと判定を下した。

あの時はそう疑問を抱かなかったけれど……………今にして思えばごり押しに近い推薦だった。

そして弟子でも無いのに別荘の利用、茶々丸を筆頭にした最新鋭ガインノイドが大量に……………。

なんだろう凄く、嫌な感じがする。

「おっと…明日菜さんをソファに寝かせないと。」

お姫様抱っこの要領で運びそつと寝かせる。その上に毛布を掛ける。

「うっん……………」

「ああ明日菜さん綺麗だな。ここで手を出してもバレないんじゃないかな

いかなとタカミチはそつと思った。」

「ちよつ?!」

いつの間にか後ろに居たガイノイドの一体が上着を持って立っていた…。

「いつの間に?という質問に答えるのでしたら明日菜様の顔をマジマジと見つめていた辺りでしょうか?」

「いや、その、見つめていたつもりは無いんだけどね?」

「そうですか。」

なんだか気不味いんだよなあ

なんというかそんなつもりは無いと思うんだけど、こっつ…嫌われてる気が…。

色々思う所はあるけれど上着を受け取り羽織る。

「じゃあ、おやすみ。」

僕の言葉に一礼して見送ってくれる。

やっぱり僕の気のせいかな?

扉が閉まるその瞬間。

” 知らなければ…気が付かなければよかった。という事もありますよ。”

そんな声が聞こえた気がした。

S i d e e n d

色々あったが無事南の島から帰還。

生徒の誰にも怪我は無かった。

やはり住み慣れた麻帆良という土地は安心する。

いつも通りの授業や指導員としての業務を終え帰宅。

しかし日常にイレギュラーが現れる。

「柚木先生！」

振りかえるとそこに居たのは長い金髪・ウルスラの少女とその後ろにいるうちの制服を着ている少女。

「誰かね？」

「高音・D・グッドマンです。」

「ふむ。ではグッドマン君、何の用かな？俺はウルスラの方は担当していないんだがな？」

ウルスラの制服は見るだけで近くにシャークティーがいる気がして苦手だ。

「高音で結構です。…これまでは帝国とはいえ大戦終結の功労者の一人。更に非公式とはいえこの学園にも長く居られます。」

「ああ…魔法関係か。で、グッドマンつまり君は何が言いたいのかね？」

「ネギ先生を弟子に取らない所か、逆にサウザンドマスターとは何の関わりの無い女生徒を弟子にしたのはどういうことですか？」

「はあ…部外者が今更そのことか……。爺の差し金か、はたまたただの正義馬鹿なのか。」

「貴方もマギステルマギならばッ…！」

そのワードに少しの殺意を振りまくと警戒するように半歩下がりに押し黙る。

ああ。ネギよりその辺の反応はマシだな。

が、どうやら下がった理由は別だったようだな…。

「マギステルマギ？それが何を意味するかもわからん小娘がごちゃごちゃと人の家の前で騒がしい。」

エヴァが外に出てきてしまった様だ…ああ面倒な…。

「闇の福音…！」

「ハハハおい聞いたか宗一郎？コイツ絶滅危惧種みたいな反応だぞ。」

高音・D・グッドマンとやらは幼い時に連合にでも居たんだろうな。今時エヴァを敬意以外で”闇の福音”と呼ぶのはガチガチに連合の教育を受けているか死にたい奴か。

帝国内じゃ吸血鬼・真祖の扱いは格段に上がった。中でも俺の関係者、特にエヴァの扱いは大きい。

一応世界的にも追われることは無くなったが：まあそれは表向きの綺麗な話。

連合じゃ今でも真祖や吸血鬼って奴は倒すべき敵あくで初等教育じゃ血を啜る非道で狡猾な化け物扱い。

「た、高音お姉さま……。」

と、今まで後ろに小さく隠れていた少女が高音を呼ぶ。

その声には聞き覚え、いや顔にも見覚えがあった。

「おや？もしかしてジョンソン魔法学校に居た佐倉メイ……かな？」

「えっ、あっ……はい。」

「例の件で話が来ているはずだが、その件について今度ゆっくり話したい。いいかな？」

「おい宗一郎、既婚者がナンパか？」

エヴァ、何故さつきより怒っている。

「違う違う高音なんたらは知らんが、その佐倉メイはジョンソン魔法学校でオールAの成績なんだよ。それで本国からスカウトされているはずなんだ。」

「スカウトだと？」

「うちには良くも悪くも癖が強いのが多くてなー。こういうオールラウンダーで優秀な子が一人は欲しい所なんだ。」

”ヘラスの白銀騎士団” そう聞けば今や”帝国最強”と理解しておかしくない。

まあ中身は魔法制御は上手いのに体術はダメ。体術は出来るのに魔法制御がダメ。そういう風にムラが多い。

元々種族部隊で構成されていることが多いヘラス帝国軍の中で種族単位で構成していないのがウチだけというのが一番大きい。

発足時は野良吸血鬼や負傷兵など裏切りが無い様に面子を集めた。

次に引き抜きだがこれも優秀過ぎる者を抜くと軍が弱くなってしまふ。そうなるって一点突破な才能を有する奴を抜く事が多くなる。

しかも白銀騎士団は性質上”テオドラの護衛”という最大級の任務がある。いや作戦的には最上位ではないが、俺にとって最上位の問題だ。

謀反や裏切りだけは何かあっても避けたい。

新兵も孤児院上がりしか取っていない現状、平均的で優秀な兵士が欲しい。

なおかつテオドラが退屈しない様に相手が出来る気品と教養も欲しい。

だがしかしテオドラに虫が近付くのは罷りならんでなるべくなら女性がいい。

当初は木乃香をと考えていたが最近の言動や行動を見る限り西の長になる様にするのがベスト。

明日菜は公式の場に出さない方がいい。エヴァや真名は論外。火にガソリンやナパームを注いでどうする。

「なっ！メイは帝国には行きませんわ！帝国ではマギステルマギにはなれません！」

「お、お姉さま落ち着いてください。」

「いいえ！落ち着いていられるものですかっ！」

しまったな……「うもぎゃんぎゃん喚きだすとは……」。

S i d e x x x

「ふむ……これが麻帆良学園ですか。うん。確かに大きな力を感じる。君はどう思うかねヘルマン卿。」

「かなりの規模だと言えますかな。」

ヘルマン卿と言われた人物は紳士然とした初老の少し小汚い姿。対する男は女にも見えなくは無い顔、気品のある小綺麗な服、首の周りには純白のファー、くすんだ金の錫を持ち麻帆良学園を睥睨している。

「わかっているだろうけどヘルマン卿はネギ・スプリングフィールド

ドの戦力評価を。大公は麻帆良学園全体の足止めを行ってもらいた
い。」

「6年前のあの少年か、いやはや懐かしい。」

「私の足を雑兵如きが止められるのかね？」

「雑兵ばかりと侮ると痛い目を見るよ、幾ら貴方でも。」

「それは面白い。蠅の王たる私に触れるものがあるとは実に面白い。」

蠅の王はクツクツと笑い悠然と歩を進め始めた。

Side end

Side 犬上小太郎

「じふっ…かつ…。」

ひゅーひゅーという笛の様な呼吸。吐血。全身裂傷。目眩。酷い耳
鳴り。

目は血で塞がれ見えない。

だが見えないはずの目だけが爛々と光り這う様にあがっていた。

「伝え……ネギ。麻帆良に。アイツは……ヤバ……い。」

小太郎と彼らの戦いは一瞬。

一番ヤバいと感じた男への奇襲。

だが気が付かれ錫が振るわれ黒いナニかに包まれ、こうなった。

奇跡と言えるならばソイツは小太郎を見もしなかった事。

それ故に狗族とのハーフだと気が付かなかった事。狗族の血が生命力を喚起する。

更には近衛詠春謹製の強力な護符があつた事。

それらが小太郎の命を繋ぎ止めた。

既に麻帆良学園都市内ではあるがそれでも広い。そして小太郎は麻帆良を知らない。

覚えのある臭いを必死で辿りココに着いた。

称賛に値する生命力。

二人分の足音。

だが最早小太郎の意識は風前の灯火。

臭いだけを必死で感じ取る。

甘い柔らかい香り。恐らく女性。

敵は男が3人。

つまり敵では無い。かもしれない。

「あら？」

S i d e e n d

S i d e 千鶴

「あら？」

保育園の帰り部活終わりの夏美ちゃんと一緒に道を歩いていると黒い何かがうごいめいていました。

「どしたの千鶴さん？」

「あそこ。何かいるわね。」

「ん、ホントだ。ちょっと見て来るっ。」

まさかこの時はあんな事になるとは思いもしませんでした。

「野良犬かなあ？」

「違う………みたいね。」

犬の背中に背負った鞆。巻き付けられた手紙。べったりと付く血。しかし出血自体は収まっている様にも見える。

「とにかく放置は出来ないわ。連れていきましょ。」

Side end

Side 夏美

村上夏美です。地味です。ほぼ初登場です。
人質なう。

連れて帰って来たワンコは血塗れの少年にジョブチェンジしました
……。

「電話を切れ！」

「ねえとりあえず落ち着いて。」

「ココは何処や？」

「麻帆良学園の女子寮よ。あんまり動くとまた出血するから……。」

「なんや麻帆良か……よかった……。学園長かネギかユズキソウイチ
ロウにかぶっ……。」

ひいひい血吐いちゃったよ……!!

「柚木先生かネギ先生か学園長先生に連絡すればいいのかしら？」

「そうや……襲撃、危険、金色の錫。それで伝わるはず……や。三人の内の誰かにこの手紙を届けてく……ね。」

どさつと倒れる音。

「夏美ちゃんその子の手当てお願い。私は先生方に連絡取るから……。」

て、手当てって……ど、どうしよ!??

S i d e e n d

S i d e 近衛近右衛門

ゾクリと全身の毛が逆立つような感覚。

「何が、何が結界を越えよった?!」

学園長近衛近右衛門は伊達に学園長をしていない。

麻帆良という広大な霊地の管理者にして神木バントウの守護者。

結界に何かが侵入すれば感知するのは当然として、学園中のあらゆる所を遠視出来る。

最もコレは柚木宗一郎と姫御子アステを受け入れる時に万一を危惧して付加したもののじゃが……。

だがこの時ばかりはそれが巧く機能しない。

何かが結界を悠然と越え電気が走る様な痛みを伝えた。遠視をしても黒くボヤけてしまう。

「全魔法先生に伝える！！強大な侵入者じゃ！魔法生徒は手を出さべからず！！これは致命じゃ！！！」

まさか、まさかとは思つが……噂に聞く王公級。

場合によっては柚木君やエヴァンジェリン君の協力も仰がなければならぬな……。

S i d e e n d

S i d e 宗一郎

” 「全魔法関係者に伝える！！強大な侵入者じゃ！魔法生徒は手を出さべからず！！これは致命じゃ！！！」 ”

何かが侵入したと同時に流れる学園長の広域念話。

どこぞの馬鹿が懲りずに仕掛けてきたのか？

それにしては単騎というのは幾ら何でもオカシイ。

そもそも隠れる気すらないのかこの場所からでも敵が来たと解る。
”殺し”の仕事に単騎はあり得ない。

「行きますよメイ！」

「えっ…でも…。」

「佐倉、グッドマンと共に避難しろアレはお前たちの敵う敵ではない。
」

「そんな事はありません！さ、行きますよメイ。」

「お、お姉さま……………本気で言ってますか？」

それは”冗談だろう？”や”解らないなんて事ないですよね？”といった意味の疑問。

「な、何を言っ……………」

「つまりお前よりそっちの従者の方が優れた感知能力を持っている
と言っ事だ。で、行くか宗一郎？」

身も蓋も無い一言。

その一言でグッドマンは目を見開き呆然とする。
同様にメイも何かに怯える様に俯く。

「いや……………シンニエウシヤ御客人は俺達が目的では無い様だ。エヴァは爺が頭を下
げて来るまで動かなくていいだろう。何だかんだと平和ボケしてい
てもこういう考え方の連中は沢山居るんだ…今日は機嫌が悪いこの
上エヴァが後ろから撃たれでもしたらその辺を消し飛ばしてしまう

かもしれん。」

適当に言ってエヴァを戻らせ佐倉とグッドマンをその場に置いて向かう。

侵入と同時に俺に会いに来た客人フェイトの下へ……………。

71話：麻帆良襲撃 - 前編 - (後書き)

3月23日20:00調べ

総合評価6581pt

お気に入り登録2478件

総合PV5828130アクセス

総合ユニーク536503

作品開始からほぼ一年。

これからもよろしくお願い致します。

没ネタ。ミニ番外編。

「はつくしよん!!!」

「刹那!?!」「せつちゃんどないしたん!?!?」

刹那のくしゃみに宗一郎と木乃香が反応する。

「た、大した事無いかと…軽い風邪でしょう季節の変わり目ですし…。」

「それは油断だ(や)!」

「えええええ!?!」

「木乃香!氷嚢と魔法薬取ってこい。」

「わかったえ！」

「ちよっ…そんな大げさな！」

「大げさじゃない（やない）！」

「この間養鶏場のニワトリや野鳥が全滅したというニュースがあっただろう！」

「沢山死んで大変な事になったんやで！？あああどうないしょ師匠、感染してたら……。」

「お、落ち付け、落ちつくんだ木乃香！イクシールなら何とかしてくれる。さ、最悪真祖化という手段もある。」

「……あの心配して頂けるのは嬉しいのですが、出来れば…ええ、なるべくなら”鳥インフルエンザ”ではなく普通のインフルエンザを疑って欲しかったです……。orz」

没理由：本当に今年も鳥インフルエンザ大発生。しかも住んでる所で。でも卵美味しいです。

72話：麻帆良襲撃 - 中編 - (前書き)

ちよつとした喧嘩でどうも肋骨さんがヒビったくさい。姉エ……。

更に親不知さんが侵攻中。

そんなこんなで逆境尽くしの珈琲時間です。

今回後書き多いです。

そして衝撃の中編。

72話：麻帆良襲撃 - 中編 -

Side あやか

「塗るだけで痩身・美白・引き締め・潤い効果！！一人でもお手軽全身パツク”ぬるぬる君X”！！」

私が湯船に浸かっていると突然裕奈さんが某青狸や某通販会社の社長のように何かを取り出し、よく解らない事を始めました。少々美顔などには興味がありますが……………

そんな事を考えていた時

チリチリとうなじが疼く様な痛みが走りました。

それは練習がてらに仕掛けておけと言われた防犯用探知結界からの反応でした。それも私の部屋の……………

どうしたらいいか？師匠は”何が起こつてもまず冷静に状況を整理しろ”と言われましたが幾ら何でもまさか引つかかるなんて想定外でしたわ。

視覚を繋げるなんて術式はまだ組み込めませんし……………

「ん…おい、ちょっと…そのぬるぬる中に入れてないよなー？」

「えー！？」

「入れてないよー？」

確かに裕奈さんは何も入れていないですわね…ですが、嫌な感じがしますわ…。

「お、おいちよつと待てよ何かこの水からみついてくるぞ?!…おわつちよつ待てお前!?そこは洒落にならね…。」

「きゃあ!?!」

「何コレー!?!」

「いやあーん!ぬるぬるー!?!」

千雨さんを筆頭に悲鳴が次々と…つまりコレは敵ですわね。

しかしソレらは私に触れもせずに混乱を…。

”ありとあらゆる手段で敵を混乱させる。殺すにしろ逃げるにしろ役に立つ。”

目的が何かあるはず…。

今襲われていないのは少し離れている私と…のどかさん夕映さん朝倉さん古菲さんのグループ。

あら?

今一つあのグループの関係性がわかりませんわ。

「ッ!?!」

突然の事でした。

一瞬の思考。その一瞬で水が彼女達を包み、彼女達を恐らく水の転移魔法で連れ去りました。

「あれ？ゆえー？のどかー？」

彼女らを探すハルナさんの横をすり抜け部屋へと急ぎます。
部屋では騒ぎは起こっていないようですが、今の事と何らかのかわりがあるのは事実でしょう。

S i d e e n d

S i d e スライム

「獲物が沢山居るぜ？」

「目標は4人だけデスヨ。」

「他の奴はいーの力？久しぶりの娑婆だしちょっとイタズラしてこーぜ！」

「あの髪の長い人とシニヨンキャップの人の周辺以外ならいいデスヨ。柚木宗一郎の一次関係者には手を出さないのが”契約”デス。」

「ちっ…面倒な契約だぜ。」

「彼は危険……………彼に殺された者の一部は”魂ごと消滅”した……………」

「だからわざわざ王公級が出てきたわけデス。」

「まあ今は楽しもうぜ！」

S i d e e n d

S i d e 小太郎

「うっ……。」

痛みと共に目が覚める。

「あっ！まだ起きちゃダメだよ！」

ショートカットの女の子。

「さっきはスマン……ココが麻帆良やって解って無かったから……。」

「うっん、ちょっと怖かったけど大丈夫だよ。あっ……私、村上夏美。夏美って呼んで。」

一時とはいえ怖い思いをさせてもうたのに夏美姉ちゃんは笑って許してくれた。

そうして自分が名乗りもしていない事を思い出した。それから手紙ともう一人の姉ちゃんの事も。

「あ……俺は小太郎や。さっきの姉ちゃんは……。」

「ちづ姉は小太郎君の手紙を届けに行つたよ。」

しまった！！緊急事態とは言えなんちゅう迂闊な事をやったんや俺は！

「どっちの方向や！？あの姉ちゃんがヤバいかもしれん！」

俺は立ち上がり……

「がっ……………」

「ヤバいつて……あつ駄目っ！出血は止まってるけどその傷で動ける訳ないよ！？」

「くっ…………夏美姉ちゃん、ちょっと目瞑っててくれへんか？」

「え……でも……頼む！」……その間に行ったりしたらダメだよ！？」

よし……ここが麻帆良学園の女子寮なら一か八かや……。
殺気を振りまいたらきつと誰かが気付いてくれる……はず。

「千鶴さん！夏美さん！」

それを行おうとする寸前、部屋の前から声が聞こえた。

「あれ？いいんちよ？」

「知り合いか？」

「うん……このルームメイトでウチのクラスの委員長だよ。」

3・Aの委員長……。

「雪広、雪広あやかって名前か?!」

「え……うん。そうだけど……。」

「夏美さん、そこに誰かいませんか?」

夏美姉ちゃんが俺に聞く様に首を傾けてくれる。

一応状況を臆ながらとは言え理解してくれてるらしい。

そのサインに俺は頷く。

「いるよ……ちょっと怪我した子なんだけど……。」

その返答を聞いて漸く入ってきたのは聞いていた通りの人物。

「夏美さん、その少年は?」

「雪広の姉ちゃん近衛詠春からの使いの小太郎や、至急柚木宗一郎と連絡が取りたいねん!」

「近衛詠春さん……わかりましたわ。」

Side end

Side あやか

扉の前で耳をすませる。

結界内に2人、千鶴さんは外へ出たことから相手に殺意が無いと思われますわ。

「千鶴さん！夏美さん！」

「あれ？いいんちょ？」

一度だけ夏美さんの声が響き、それから何かを躊躇つかの様な反応

「夏美さん、そこに誰かいませんか？」

「いるよ……ちよつと怪我した”子”なんだけど……。」

怪我……………。

恐らく施設からの帰りにソレを助けてしまった。と予測出来ますわね。

千鶴さんが怪我した子供を放置する筈がありませんわ。

決心して扉を開けましょう。

中に居たのは黒髪・黒目の日本人風の少年。

ですが少々獣臭いので恐らくはハーフでしょう。

「夏美さん、その少年は？」

「雪広の姉ちゃん近衛詠春からの使いの小太郎や、至急柚木宗一郎と連絡が取りたいねん！」

「近衛詠春さん……わかりましたわ。」

完全完璧に魔法関係ですわね……。

Side end

Side 千鶴

「こんばんわお嬢さん。」

「はい、こんばんわ……アラ……？ここは女子寮エリアですよ？」

小太郎君の手紙を届けようとした所で雨に濡れた黒いコートの男性に遭遇しました。

確かに女子寮エリアに男性がいるのは変ですが、どこかの寮長さんかもしれないし、麻帆良学園なら私の知らない先生かもしれない。

それに挨拶を頂いたのならばそこまで不自然な人物ではないかもしれませんが。

「いやはやその様だね……ところで、その手紙は……誰に届けるものかね？」

「ッ！」

直感、あるいは予感。あの子は酷い怪我をしていました。怪我をさせた本人もしくは仲間……そんな直感が私の脳裏を走りました。

と、同時に駆け出しました。

「ふむやはり狼男ウエアウォルフの少年の手紙の様だね。」

「そんな!？」

それなりの速度で逃げた筈。

「まったく大公はその絶対の自信が仇になるな。さて、内容は知らんがソレを渡してはくれないかなお嬢さん。」

「貴方があの子を傷付けた方ですね？」

「いや、私はその様な事はしていないよ。仲間がやっただろうと問い詰められればそうだと答えるしかないが。」

「そんな方へは渡せません。」

「どうしてもかな?君は一般人の様に見受けられるのだが……ソレは命を掛けてまで守るものかな?」

「ええ、あの子があんな怪我して吐血してまで必死で伝えたかった事をそれを為した方へ渡すなんて出来ません。」

圧倒される様な感覚。今にも押し潰されそうほどのプレッシャー。ただ目だけは逸らすまいと……。

「これは驚いた。気丈なお嬢さんだ……私の威圧アクマに耐え、なおかつ目を逸らさないとは……。本来予定には無かったが君にも一緒に来て頂く事にしようか。」

その男の手が私に伸びて来て……

。

Side end

Side ネギ

「ネギ、あんた何時までそうやってウジウジしてる気!？」

「だって……僕だけ弟子入り出来なくて……。」

「ッそれは……。」

「ただ解ってる事はあるんだ……何をどうすれば認めて貰えるのか? どうしてアーニヤは認めて貰えたのか? どうしていいんちよさんはああ言ったのか? ……この疑問さえ解決できれば糸口が見えるんだよ……。」

「いいんちよさん……ああアヤカね。何言われたの……まあ大体予想は付くんだけど。」

アーニヤにいいんちよさんに言われた事、僕が言った事を簡潔に伝えました。

「そう……あのね、ネギ。」

「何?」

アーニヤの顔を見て僕は凄く嫌な予感がしたんです。でも聞くしかない。

「私ね…間違ってた。何もかも。何も知らなかった……………ネギ、私はマギステルマギにならない。」

え？

ヤは今何て言ったの？

アーニ

ナイ。

ワカラ

魔法使い（マギステル・マギ）にならない？

立派な

理解デキナイ。

言葉が

「ど、ど…どういう意味！？アーニヤ！？」

「麻帆良学園は一応卒業はするつもりだけど……………その後私はヘラスがアリアドネーに行くわ。私はそこで私の目的を叶えるの。」

「嘘だよね……………ねえアーニヤ……………」

掴もうとした手は届かない。

「ネギの夢を私は批判したりしないよ。ネギはお父さんの背中を追い続ければいいし、マギステル・マギになってもいいんじゃないかな。」

ワカラナイ。ワカラナイ。解らない。判らない。分からない。ワカラナイ。

「アーニヤの目的って何!？」

「お父さんたちの治療。それから悪を悪と言って、虚実で悪と言われる人を善と言って庇えて、出来るだけ多くの力無き人を守る魔法使いに……私はなりたい。」

なんだ…それじゃ立派な魔法使い（マギステル・マギ）じゃないか。

「それなら!」「ねえネギ、どうして悪魔を滅ぼす魔法を探したの?」……え?」

「禁書庫でどうしてあの魔法を探したの?」
どうして死者蘇生や永久石化の解呪を探さなかったの?」

「それは…えつと…あの……。」

「私ね悪魔なんてどうでもよかったの。今も学院で眠ってるお父さんたちを治したかった……ねえネギ答えて、どうして6千7百万人も居て
誰一人永久石化を解呪出来ない理由を。」

あ……。

「だから私はアリアドネーで治療魔法を習う。それからヘラスの白銀騎士団に入るわ……そしたら皇族専用だった書庫にも入れる様になるって教えてもらったしね。」

アーニヤが、近くに、こんなにも近くに居るのにとても遠い。遠くて。僕だけが闇コトクの中に置いていかれる。

頭がぐらぐらする。

何も言えない。何も出来ない。

何度思い出してもメルディアナで習った治療魔法は簡単なモノだけ。自分が探した魔法も全て攻撃の為。何かを傷付ける力だけ。

ああ……いいんちよさんの言いたかった事が、少し解ったのかもしれない。だけど……。

それでも僕は……。

「ネギツ！！！！」

扉の外。悪寒が走るほどの魔力。

” 「全魔法関係者に伝える！！強大な侵入者じゃ！魔法生徒は手を出さべからず！！これは致命じゃ！！！！」 ”

同時に入る学園長先生の悲鳴に近い広域念話。

杖を持って蹴り破る様にして扉を開ける。

「君がネギ・スプリングフィールドかい？」

圧倒される様な存在。魔力が噴き零れる様にその人から風が吹く。くすんだ金色の王冠、同じくくすんだ金色の錫。銀色の髪に今まで見た事の無い様な顔付き。

首には白い毛皮。紫や紅に金糸といった豪華な服装。闇より深い色のマント。

「貴方は…。」

「質問しているのは私だ答えなさい。少年、君がネギ・スプリングフィールドか？」

「はい……僕がネギ・スプリングフィールドです。」

そう答えるなり舐める様な視線が僕を襲う。

「取るに足らぬ俗物。いささか楽しみにしてはいたのだがコレでは興奮めにも程があるな。」

その言葉は紛れもなく僕への評価。

「なっ……!!」

「もう一人の少女は既に転移したか……ふむ”面白い”。取るに足らぬ少年、世界樹の所へ行け。さもなければ……貴様の従者は死ぬ。

「そんな! どうしっ…!」 ヘルマンや契約主は生かして返すつもりだろう……しかし私を興奮めさせた罰だ。精々足搔けよ俗物?」

途中で言葉を挟むも魔力の奔流で二の句がつけなくなってしまった。そうして言葉を終えるとその人は「ぶわっと音を立てて」無数の十二か”に変わって僕たちの部屋の窓を粉碎して出ていく。

「痛っ…。」

頬が裂けていた。

膝が笑う。恐怖のあまり座りこみそうになる気持ちと身体を必死で起こす。

従者……のどかさや夕映さん！

少年は悪魔が去った窓から飛び出すように世界樹へ向けて飛び去った。

S i d e e n d

S i d e 宗一郎

世界樹が遠くに見える場所。

注意しなければわからないほどの結界。

躊躇なくその結界内へ踏み込む。

「やあ 柚木宗一郎。」

「久しぶりだな フェイト・アーウェルンクス。」

当然待っていたのは白髪の少年。

その辺の喫茶店のテラスから律儀に運んだのか テーブルが一つに椅子が二つ。珈琲が二杯。

椅子に座り砂糖とミルクを退けて珈琲を啜る。

「美味しいな……お前が淹れたのか？」

「それは良かった……これだけが唯一の趣味だね。」

お互いもう一度珈琲に口を付け……。

「それにしても……毒か何か入れているとは思わなかったのかい？」

「”話”をするんだろう？ 入れる意味が無い……それにこんな香り高い物に異物を入れるなど冒涇だとは思わないかね？……むしろそれなら砂糖かミルクのどちらかに毒を仕込む方がマシだ。」

「君は話が解って助かるよ……さてそろそろ本題に入ってもいいかな？」

「構わない。」

「京都では騒がしくて最後まで話が出来なかったからね……今度は

騒ぎをある程度操作して混乱を起こした。アレ相手に生半可な数で挑んだら不味いという事ぐらいは幾ら何でも彼らにも理解出来るだろうからね。つまり話している間、此処に誰かが来ると言う事も無いだろうし邪魔も盗聴もされない。」

「饒舌だな。しかしネギの方にも妙な奴を放つたな？」

「イギリスで封印された悪魔をね……怖い顔だね。大丈夫だよ掠め取っただけさ。封印主には一切傷付けていない。」

「強行偵察……いや戦力評価といったところか。」

「メインイベントは君との交渉だよ。」

「交渉……？」

「僕と共に世界を救って欲しい。」

は？

「と、言っても理解できないだろうね。端的に言うならば”魔法世界は崩壊の危機を迎えている。”」

「信じるとでも？」

「クルト・ゲードルや帝国の上層部でも一握りの者は把握している筈だよ。特にクルト・ゲードルは確実と言ってもいい。ただソレを君に伝える勇氣は誰も無かった……それに帝国では僕からしても奇跡としか呼べない事態が起こっていてね……その辺りを含めて伝え

るべきか否かを迷っているんだろうと。」

「奇跡？何の話だ？」

「そうか……手紙はまだ届いていない様だね。」第三皇女が身籠った”そう言えば君にも理解出来るだろう？”

「なっ……!!」

そうか結婚式の時の……。

「情報としてはダダ漏れのモノだよ。おかげで帝国は呑気にお祭りムードだ。」

「魔法世界の崩壊を信じるとして……だ。それを俺に伝えてお前に何の得がある？」

「崩壊してしまえば大勢の命が失われる。その前に”完全なる世界”へ移したい。」

「完全なる世界？それはお前達の組織名称だろう？」

「確かに組織名称でもあるね。でもソレはコレとは別だ。完全なる世界はあらゆる苦痛から解き放たれた幸せな世界だと聞いている。」

”聞いている”か…。

「そんな伝聞の様なあやふやな世界へ連れて行くより此方へ連れてくればいい。」

「13億以上を受け入れる容量キャパシティがあるとでも？」

「創る手段も、方法もある。」

計画が数段階早くなるだけの話。

「……残念ながらそれは不可能だよ。何しろ魔法世界の人間は

デミ・ヒューマン
亜人だから。そう言う。だがそんな問題は……

幻想の存在。極端に言ってしまうえば人形だからね。」

「馬鹿な……。」

落ちる様な感覚。汗が引く。

「残念ながら事実だよ。月並みな話だけど僕のこの首を賭けてもいい。君が愛した第三皇女も、その民も肩を並べた友人も、樹も獣も全てが作り物ニセモノだ。」

そんな事があるか……。そんな事がある筈がない。

汗と埃とむせる様な血の香り。戦場の臭い。仲間たちと呑んだ酒場の独特な香り。

ドラゴンの肉の癖のある味。戦勝祝いだと、森で採れる木の実で出来た店主特製の酒の味。

テオドラに真祖だと打ち明けたあの場所。満天の星空の美しさ。潮騒の音が響く小高い丘。

惑と共に皇帝陛下と話し合った結果がこうだ。
今戻ってもすぐに領土回復運動は起こらない。融和政策の甲斐もあ
つてか混血が増えて来ていると言う話も聞く。
以前の種族単位の紛争も減り、何もかもこれからというのが実状。

「僕に、フェイト・アーウェルンクスに……完全なる世界に協力し
てくれないか、柚木宗一郎？」

俺はその提案に……………。

S i d e e n d

72話：麻帆良襲撃 - 中編 - (後書き)

設定& amp ;用語説明

防犯用探知結界と書いてセ ムと読む。(殴

ヘラス帝国で大衆に使われている魔法。

使う者が使えば視覚をリンクさせて結界内を見る事も出来る。

更に複雑な術式で大音量の警報を出したり麻痺呪文や焼失を組み込めるが、そういう者は一般的にその技能・技術を生かした仕事をする。

連合の術者にとっては鍵閉め・鍵開け呪文の複雑で面倒なモノ。

例：帝国印で蠟封された手紙 対象の人物以外が開封すると瞬時に焼失。

今回作者自身の最大級の疑問をアーニヤに言っただけでした。

「どうして6千7百万人も魔法使いが居て、何故永久石化を解呪出来ないか？」

そして何故帝国を頼らなかつたのか？アリアドネーは？

紅き翼 超前のめりパーティー

この世界ロクに治癒術者がいない！致命的に少ない！

募集

1. シスターシャークテイーの詠唱キー

後編UPまでの間に届いたものでじっくり来たものを使わせて頂きます。(ヤメテ石投げないで

次回予告

麻帆良襲撃 - 後編 -

まだ描写されていない幕。麻帆良襲撃における最後の幕が開く。

フェイトの誘い。己の立つ場所が揺らぐ宗一郎。

連れ去られたのどか・朝倉・夕映・古・千鶴。

アーニヤの宣言に何もかもが揺れるネギ。

孤独の戦場。

アーニヤとあやかは?!

そして遂に重い頭を動かす学園長!

73話：麻帆良襲撃 - 後編 - (前書き)

お待たせしました。今回超難産。

34巻いい。セクストウムちゃん可愛い。

脱がされっぷりは書店じゃガン見出来ないレベル。

もっと早く出てたら今回ガッツリ握手しかねないほど。

熱さが欲しい……。武装錬金のDVDを最初から見直し中。

とつきゆんのホットパンツ素晴らしいなあ@4話

そして思い出した。

バルスカってコンパクトモードなんてのがあったね。

以前のアンケート？案募集？

シスターシャークテイーの詠唱キーは絡操人形さんより
使用する魔法案を佐藤Sさんより頂きました。

73話：麻帆良襲撃 - 後編 -

僕に、フェイト・アーウェルンクスに……完全なる世界コスモ・エンテレケイアに協力してくれないか、柚木宗一郎？」

差し伸べられた片手。

その手を握るべきか否か。是と答えるべきか否と答えるべきか。フェイト・アーウェルンクスを”完全なる世界”を信じられるのか？

「少なくとも……今、俺がその手を払う明確な理由はない。だが……だが？」

思い出すのは20年前の戦い。

そう。俺は奴の死を確認した。トドメを刺す寸前、自らの組織の主であった造物主ライフメーカーの光に貫かれて……。再度確認したのは七里を拘束した時。

聞いた情報は”生存”と”ナギへの襲撃計画”。情報部から聞いた話ではイスタンブールでナギは消息を絶った。ナギを倒すには最低でもフェイトクラスの实力者で無ければならぬ。

二度目の邂逅は京都。フェイトにしては妙な動き。

「俺はお前を、お前自身を信用できない。」

「……………理由を聞いても？」

「お前の目的だよ。」世界を救う”そう言いながらナギを襲撃したり、俺達に刺客を放つたり、京都で意味不明な襲撃を演じた。」

「京都の件以外は僕は計画も立案も襲撃もしていない。完全に無関係……とは言い辛いけれどね。」

フェイトは言葉を区切り

「……僕は3番目でね。京都の件は仲間が騙されてねスクナを復活させる必要があった。」

3番目。そう言ったフェイトの顔は苦虫を噛み潰したような顔。

「そう……か。」

昔の無表情・無機質・無感情で人形のようなフェイトだったならば俺は話を聞く事も無かった。

だが今のコイツは、今のコイツには表情もある。趣味もある。なによりコイツに俺は”惹かれている”。

「今すぐに答えは出せない。」

一存で決めるわけにはいかない。テオとエヴァからは意見が欲しい。

「……期待してもいいのかな？」

だが最終的に決めるのは俺だ。

あの時決めた。俺はテオの為に世界を救う（ほろぼす）と。

それは例え彼女が人形ガロティアであろうと変わらない。

今の幸せも全て彼女が俺に与えてくれた。

彼女が彼女であったからこそ俺は死を撒き散らす災害にも枯れた存在にもならず済んだのだから。

「ああ。」

フェイトの少し小さい、されど力強い手と握手を交わした。

Side end

モニタールーム

「反応増えます！5、10いえ……多数！」

モニターに反映されるのは魔力分布図。

「なんだって…！」

「明石教授！どうすればっ!？」

「夏目君、モニターに出せるかい？」

「やってみます！」

「これは一体……。」

二人の目に入るのは複数の同じ服装、同じ顔の者達。

麻帆良襲撃の第三幕が開く。

「これは……。」

「葛葉、動揺するないつも通りだ。」

神鳴流剣士・葛葉刀子と神多羅木の前にいるのは数人の同じ姿形のモノ。

葛葉が先行し一番前に居るソレに雷鳴剣を叩きこむ。と、同時に葛葉は瞬動で戻る。

下がる葛葉を支援するが如く神多羅木の無詠唱の風魔法が矢継ぎ早にフィンガースナップで撃ち出される。

「やりましたか!？」

「いや気配が消えていない。」

巻き上げられた埃が風によって払われる。

「今のは現代の攻撃か?魔法使い。」

「無傷!？」

「デイグ・デイル・ディリック・ヴォルホール 来れ 清浄シヤウジヤウの風
薙ぎ払え 風の鉄槌!」

不可視の風の塊が地面へと男に放たれる。

トラックに跳ね飛ばされたかのように吹き飛ばされる男。木に衝突すると同時に無数の黒い群体に変化する。

しかしすぐさまソレは一塊りに戻る。

「ハイ・エンシェント…ほう。バアル・ゼブル・ベルゼビユート嵐よ 吹きすさべ 炎よ喰らい尽くせ 神罰の嵐。」

右手で錫を振るいつつ吼える様に詠唱する。

左に風と火の塊が現れ撃ち出される。

「デイグ・デイル・デイリック・ヴォルホール 風花 風障壁！障壁最大！」

「四天結界独鈷鍊殻！」

神多羅木と葛葉は自身最大の防御魔法や防御法を使い耐えようと身構える。

着弾。

一瞬にして10tトラックの衝撃からをも身を守る筈の風障壁が弾け飛び、そのまま四天結界独鈷鍊殻を独鈷の刺さった大地ごと吹き飛ばす。

「中々楽しめたぞ人間。が、実に惜しい100年ほど修行して出直せ。」

「くっ………神多羅木さん……！」

葛葉の目には神多羅木の姿が確認できない。
流れ出る血液が視界を、意識を奪う。

男は遠くを見る。

世界樹で嘔き上がる魔力。

「ヘルマン卿は遊びが過ぎる。あのような俗物にそこまでの価値があるのやら……。」

眩き、溜息。

「人間はここ数百年で極端に脆くなった。まともに私に対抗できるのが人間を外れし化物だけだと言うのだから。」

「そこまですべルゼブプ。」

「女、惨たらしく死にたくなければ私をその名で呼ぶな。」

ベルゼブプ。異教の民が私を呼んだ言葉。

私の民を殺し私を否定し異教を広めた預言者。

巨大な十字の物体を両肩に浮かべた女。その姿が余りにも似ていて憎悪が募る。

「ミ・カエル・ラ・ファエル・ガブリエル 罰の十字架19片！

集い来たりて敵を討て!!」

右肩の傍に浮かんでいる十字の物体から十字架が魔法の射手ごと飛び出し私を撃ち抜く。

「ヘブライ人の十字架……!! バアル・ゼブル・ベルゼビユート 嵐よ 吹きすさべ 炎よ喰らい尽くせ 神罰の嵐。」

「ミ・カエル・ラ・ファエル・ガブリエル 罰の十字架1001片!
集い来たりて敵を討て!!」

”相殺”しつつも私の魔法を着実に異教の使徒を喰らうが如く迫る。

「ミ・カエル・ラ・ファエル・ガブリエル 罪の十字架 原罪の楯!
」

女は左肩の傍に浮かんでいた十字架を引きよせ盾の様に構える。
やがて私の魔法が十字架の弾丸を押し切りソレに直撃する。

Side 美空

「うひゃー……シスターシャークティーあれを耐えきったよ……。」

「……強い。」

「うちの学校やっぱヤバいの多いって……。人間から外れてる人多すぎるって。」

少し離れた建物の屋上。

美空とココネはその戦いを見物していた。

当然好奇心である。

「しっかしあんな武装初めて見たっすよ。」

「ミソラ、さっきの事、内緒。」

「シスターシャーケティーが誰かに武装の使用許可取ってた件スよね?」

その問いにココネは頷く。

「んー…巧い事動けばソレをネタに修行から解放っても考えたスけど……それだとココネが困るンスよねえ……。」

「ミソラ、キライ?」

ココネは自身を指して問う。

「それは無いっす。修行は面倒だし魔法に出来るだけ関わりたくないっすけどココネと会えたのは良かったと思ってるっすよ。なによ”大事な”マスターっすよ。」

にへらあっと笑いココネの後ろへ回って抱き上げる。

「さあてそうと決まればそろそろ逃げるっすよ。」

ココネはほっと息を吐き、美空はそれを何処か微笑ましく思う。

内心は
最近どんどん事件の中心に引き寄せられてる感じがするんですけど…
気のせいすかね。などと遠い目をしつつ。

アーティファクトである靴を出し自室へと逃げ帰るのであった。

余談ではあるがその予感間違っていない。

S i d e e n d

シスターシャークティールはこの世で最も厄介な悪魔と一進一退の攻防を繰り返していた。

厄介…ですね。

ここまでの大物が出なければコレも使わずに済んだのですが。
何より不味いのはコレの許可を取る所をミソラに聞かれました…。
現時点での露見は不味い、非常にまずい。
学園長にバレても柚木先生にバレても私は終わる。

しかし ココネが巧くやってくれろと信じましょう。

「クルーチス
十字架よ！」

無駄、ですか。

大穴を開けたはずの部分へ蠅が集まり修復する。

ベルゼバブ、ベールゼブブ、バアル・ゼブル、バアル、プリアポス、ベロボーグ、ベルゼビュート数多くの名で呼ばれ過去旧世界に存在し力を振るった神であり悪魔。個にして群。群にして個。

「どうした女？諦めるのか？」

「いいえ、少し攻め方を考えあぐねていただけ…です。」

後ろへ大きく飛び下がりがりつつ推進力に十字砲火の噴射力を利用。十字架をバラ撒き着地。

「ミ・カエル・ラ・ファエル・ガブリエル 全に救いをもたらす為に 個に救いをもたらす為に 主よ彼の罪を許し給え 『罪過の楔』」

「何!？」

詠唱の終了と共に今までばら撒かれ砕かれていない全ての十字架が光を放つ。

そして

ズンッ

一瞬の地響きと共に光の柱が立ち昇り天を衝く。

「やりました……。」「

光が収まるとそこには何もなく。

しかし耳が何かを感じている。

「羽……音？」

見まわし気がつく。

蠅の群れ。

巨大な旋風。

Side 明石

「反応が一つに集束し始めた?!」

(明石先生、ワシが出る! 結界の維持を科学重視へ変更するのじゃ
!)

「ッ……夏目君、学園長が出る。」

「わかりましたっ!」

Side end

Side 超

「葉加瀬、これをどう見る力？」

「メイン以外、茶々丸なら気付かれる事無く侵入出来ると思います

よ。」

「そう力。計画変更無し。サア、学園長を見物しよう力。」

「学園長ってそんなに強力な魔法使いなんですか？」

「……学園で三番目に強いネ。」

「柚木先生、エヴァンジェリン先生、学園長……という事ですか。」

「違うヨ。私、柚木先生、学園長、エヴァンジェリン先生の順番ネ。」

「もう超さんは……でも学園長がエヴァンジェリン先生より上なんですか。」

「この学園内だけで言えば……ネ。」

伊達に極東”元”最高の魔力を持ち動乱の時期にメガロメセンブリアを学内に入れず

しかし終戦と共に黄昏の姫御子、銀騎士、闇の福音、アルビレオ・イマを懐へ入れる政治手腕。

聖地の管理者や地脈操作に関しては旧世界でも5本の指には入るだろう。

「学園長が出ました。」

「ベルゼブブも”本体”に為ったネ。踊れ魔法使い共、私の掌の上で存分に……。」

S i d e e n d

S i d e 近右衛門

なん……じゃコレは。

「シスターシャークティー！葛葉君と神多羅木君を連れて下がるん
じゃ！」

涼やかと言っても良かった男はその姿を大きく変容させ巨大な八工
と化していた。

猛烈な腐臭。くすんだ金色の王冠。王冠よりくすんだ金の王錫。赤
い大きな目。

「バアル・ゼブル・ベルゼビュート 「燃える天空。」 ツ!？」

無詠唱の広域殲滅呪文。命中した感触はある。
しかし倒した感触は無い。

「馬鹿なッ…人間如きがそれを無詠唱で使ったと?!」

羽音が混じる様な声。それはまさに地獄からの声。人の身体を蝕む
音。

「ワシを舐めるでないわ。ココで、この地でもう何も喪ってな
るものか……！」

疾走。老体には限度を越えた動き。

「滅びる腐れるひれ伏せ人間ッツ！」

王錫を振る。

小太郎を半死半生に追いやった蠅の風。

「燃える天空。」

蠅を吹き飛ばし燃やし尽くす。

だが止まらない。一步でも前へ、前へ。

「言つたはずじゃ、人間をワシを舐めるな…と。紅き焰。」

粉塵。灰。煙の中を抜け蠅の王の顔に掌を付け……。

炎が迸る。

顔を含め上半身が消し飛ぶ。

距離を取る様に蠅の腹を蹴って後ろへの大跳躍。

「トドメじゃ……燃える天空。」

Side end

Side 超

「かなり長い複数の遅延詠唱。地脈を利用した瞬動もどき、符を使った身体能力の引き上げ……。老いとは怖いものネ。」

「一応反応が消えた所を見ると倒した…という解釈ですか？」

「魔族は還るといふ表現が正しいヨ。しかし……かなり無理をしたネ。二、三日は寝込むダロウ。」

「つと… 柚木先生は観測しますか？」

「ダメ。」

大師父とフエイトの会話はあつてはならない。

「えっ？」

「観測先はネギ・スプリングフィールド。今夜彼は大きな成長を迎える筈ネ。」

Side end

Side アーニヤ

ネギと悪魔の戦闘が始まって数分。
私は踏み込めないでいた……。

囚われたクラスメイトは
宮崎さん、朝倉さん、綾瀬さん、古さん、エロガモ。そして気絶した那波さん。

どうして那波さんが居る訳！？他は何て言うか魔法に関わってる感丸出しなんだけど。

見張りはスライム三体。

気付かれている節は無い。
助けを呼ぼうにも師匠からは反応がない。

ただ虎視眈々と機会を待つ。

「那波さんだけは絶対に。出来れば他の面子も。」

悪魔の拳がネギを掠る。それだけで何メートルも吹き飛ばす。

「期待外れだよネギ君。」

悪魔の音が響く。

「あの時からどの程度成長したか楽しみだっただが……。目には迷いしか無い。簡単な攻撃も避けられない。失望したよ。もっと君に本気になってもらわないと私も困るんだよ。」

メキメキと姿が変わり、それを見たネギが……。暴走状態！？

今しか無い！

陰から飛び出す。

「フォルティス ラ・ティウス リリス・リリオス 目醒め現れよ

燃え出づる火蜥蜴 火を以てして 敵を覆わん 紫炎の捕らえ

手！！」

ネギに向かって捕縛魔法を放ち無理矢理引きずり落とす。

二つの水球の真ん中に飛び込み炎を込めた蹴りと拳を入れる。

「「!？」」

「……気配が無かった。」

スライム達の虚はついた。

水球は弾け囚われのクラスメイト達は解放された。
状況は依然最悪。

「ギャンツ。」

ネギは……落下。まあ当然、でない石化してたじゃない。

「ネギ！魔法の射手！」

「ラス・テル マ・スキル マギステル 光の精霊67柱！ 集い
来たりて 敵を射て！」

67本の光が伸びる。

「驚いた……しかし当たらなッ……に!？」

回避行動をとる悪魔。

「ただ私はネギの魔法、それも基礎魔法や射手の誘導については信
頼している。
確実に中る。」

朝倉さんと宮崎さん、綾瀬さんが那波さんを確保。
古さんはスライムへ。

「アデアット！」

空中で動きが止まった悪魔。
スライムからの詠唱妨害も無い。
行ける。

「フォルティス ラ・ティウス リリス・リリオス ものみな 焼
き尽くす 浄北の炎 破壊の王にして 再生の徴よ 我が手に宿り
て 敵を喰らえ 紅き焰！」

叩き落とすように紅き焰を放つ。

走りだす。

一歩、二歩、三歩……もどかしい。

墜落寸前。

溜める。

「アーニャ・フレイム……キック！」

「ガアッ……ハッア!？」

S i d e e n d

S i d e 超

願わくば……この戦いがネギ・スプリングフィールドにとっての楔になりますように。

「さあ葉加瀬、戻って次善策を練るヨ。」

想定外の出来事には驚いたが、逆に言えば私が此処へ来た意味がコシほどに大きいと言う事。

未来の改変は出来ている。既存の未来の知識に頼るのは辞めようじゃないか。

大丈夫だ。私には全てがある。

この身は全てその為にある。

Side end

Side ネギ

全身が痛い。

身体を無理矢理動かしてヘルマンさんが倒れた場所へ近付く。

「まさか……伏兵とは。そのような素振り……。」

「僕も知りませんでした。」

「そうか、道理で気付けぬはず。とはいえ君達の勝ちだ……トドメを刺さなくていいのかね？このままにすれば私は唯、召喚を解かれ自分の国へと帰るだけだ。しばし眠れば復活してしまっぞ？」

「……………それは。」

「君の事は聞いている。君が日本に来る前に覚えた戦闘用呪文のうち、最後に覚えた上位古代語魔法……アレはその為の呪文のはずだぞ？本来封印する事でしか対処できない我々のような高位の魔物を完全に打ち滅ぼし消滅させる超高等呪文。君が復讐の為に血のにじむ思いで覚えた呪文だよ。」

「僕は……僕は……。」

「さあ……私を滅ぼすんだネギ君。」

ここでヘルマンさんを滅ぼせば……柚木先生は、僕を……認めてくれるかな？

杖を握る手に力が入る。

「ネギっ！」

「ッ！……あっ……。」

アーニヤの声で自分が何をしようとしていたか理解……”それではきつといつか先生は誰かを意図せず傷付け、殺める事になるでしょう”

頭を金槌で打たれた様な衝撃。

「僕は確かに貴方が憎い」「では」「でも、トドメは刺しません。」

沈黙。

「すまない。」

真名と宗一郎。

「しかし彼女、意外とやるじゃないか弟子入りしてそんなに経過してない筈だけども。」

「二か月分くらいは仕込んだぞ？大事な戦力”だった”からな。」

「”だった”？」

「ああ……非常に貴重な戦力になってしまった。もっと此方で戦力を集める必要がある。」

「私には頼らないのかい……？」

「何を請求されるか怖くてな。」

「そんなに高いモノじゃないさ正式な側室にしてくれればいい。」

「確かに側室の制度はあるがな？糞長い出張に行って旦那が愛人連れて帰ったら本妻はどう思うよ？ただでさえ戦力も女だらけだっていうのに。」

「修羅場だろうね。それで超の計画は？」

「サラッと流すなよ。計画への協力は継続する魔法世界を何とかした後に必要な計画だ。しかし問い詰める必要はある……苦労をかけるな。」

「お互い様さ。」

「全くだ。」

学園は夜明けを迎える。

朝日に照らされる場に悪魔は居ない。

魔法使い達はそれぞれ一時の平穏を得る。

異世界人は世界の真実に直面した。

未来人は全ての始まりを宣言する。

73話：麻帆良襲撃 - 後編 - (後書き)

超式学園ランク

- 1・超鈴音
- 2・柚木宗一郎
- 3・ぬらりひょん - エヴァンジェリン (同列)
- 5・高畑

アーニヤ・フレイム・キック

クウガ マイティキック。

走った後に燃えた感じの足跡が残る感じ。

次回予告

迫る麻帆良祭。

麻帆良祭。それは最大のイベント。

麻帆良祭。それは陰謀蠢く大舞台。

麻帆良祭。それは莫大な金が動く。

準備に励む少女達。

しかし…少女達にポルターガイストが迫る!!!

麻帆良学園。

長き歴史を誇るこの学校には

何時の頃からか

「人ではない何か」が

住んでいるという噂がある

例えば。女子トイレの奥から三番目に”い”る女の子。

例えば。理科室を動き回るといふ模型たち。

例えば

音楽室に。階段に。

古びた大鏡に。廊下に。

裏の小さな祠に。校庭に。

視聴覚室に。美術室に。

家庭課室に。職員室に。

他にもたくさん。

キリがないくらいにタクサン。

この学校には「人では無い何か」が確かに住んでいて

彼らは自分たちを「かいだん」と呼んでいる。

少女が耳にしたのは「人食い」のウワサ

「只のウワサ」と少女は笑う。

では不幸にも目にしてしまった「ソレ」は一抹の夢か幻か

突如として投げ込まれてしまった「非日常」との狭間

その中で少女は何を思い何を求めるのか

力を求める者には、その身の破滅が

真理を求める者には、深い絶望が

忘れるなかれ あなたを人に繋ぎ止めてくれるのは
かけがえの無い隣人だという事を。

設定 最新版。(前書き)

クロスSS紹介サイトに載ってました。

多分お気に入り登録されているどなたかだと思しますので
ここで感謝をば

ありがとうございます！

設定 最新版。

主人公

柚木宗一郎

男性

22歳の風貌。既に本人が年齢を自覚していない。

黒髪・黒目

和風の顔立ち。(PEACE MAKER 鐵)の土方歳三を温和にした感じの顔。

異世界「永遠かもしれない」で任務中に死亡。

元の世界で愛した女性の保護を条件に身体を再構成されて「ネギま！」の世界へ送られる。

「ネギま！」の真祖の肉体。

「Fate/stay night」の蛇。

「武装錬金」の核鉄二つを与えられた。

武装錬金

腕輪の武装錬金プロテウスアビリティー 96番97番
プレズレット

形状：ヘキサゴンパネルで構成された腕輪

特性：変幻と能力付与

特徴：他の武装錬金の能力に変化し能力を使用者に付与する

一つの腕輪に付き一つの武装錬金をセット出来る

単体でオリジナルの同一武装錬金と戦えば僅差で負ける程度

の出力

魔法の発動体としても機能する

従者契約二枚。

1・エヴァンジェリン

日本刀・狂桜

反りの少ない刀、鍔無し。

元の世界で使用していた刀。

2・テオドラ

黒翼

飛ぶ事ができる。+アルファ。

付随効果は本契約によって解放された。

ヒロイン格

テオドラ・バシレイア・ヘラス・デ・ヴェスペリスジミア

ヘラス帝国の第三皇女。色黒の亜人。

三十路だがヘラス族は長命なので人間換算ではまだ十代。

作中にて柚木宗一郎と結婚。

次代の皇后。

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル

真祖の吸血姫。

原作とは異なり成長している。

正しくはキドニードガーの武装錬金クロム クレイドル トウ
グ
レイブ（千歳の没・武装錬金）の特性、年齢操作を使った為。

柚木明日菜

原作と異なり成長し教師。

柚木家唯一の良心。

出番が少ないのがたまに傷。

記憶操作はされて居ないが……。

アーティファクトは偽・シルバースキン。

龍宮真名

コウキと出会う前に遭遇。

虎視眈々と側室：どこるか正室狙い。

ちやつかり仮契約を修学旅行で成功する。

蛇の段ボール ” snake sneak ”

効果：段ボールを生み出す。

段ボールには種類がある。産み出す時に種類を選択する。

段ボール爆弾。段ボールスタングレネード。段ボール戦車。ラブ段ボール。

ただの段ボール。認識阻害の掛かる段ボール。段ボールハウス。

どこぞの世界でどこかの誰かが使いこなした段ボールが流れ着いたモノ。

使用者は何故か段ボールを被りたくなる魔のアーティファクト。スネエエエエエク。

帝国勢力

近衛騎士団団長 ルーシディティ・ウインスレット

剣の腕は帝国でも5本の指に入るほどの騎士。通称ルーシー。また彼女は決して兜を付ける事がなく、戦の邪魔になることも承知で髪も伸ばしている。

これは例え乱戦となっても自分が健在である事を知らせ、士気を鼓舞させるためである。

白銀騎士団副団長 ヴェラシオ・ウインスレット

魔法剣士。飄々としつつも優秀な指揮官だった。

大戦を共に切り抜け白銀騎士団副長の座についた。

宗一郎の唯一の飲み友達。

前述のルーシディティ・ウインスレットの父親。

元スパイ 七里千明

異常な程地味で特徴の無い外見と存在感のなさが彼女の特性である。性格は陰気。明るい場所や賑やかなイベントを嫌い、他人との触れ合いを厭う。

一人静かに読書をし、音楽を聴く時間を好む。

MM元老院のスパイだったが死亡工作をして寝返った。

現在は麻帆良学園の地下で司書補佐をしている。

医務官 天ヶ崎千草

幼少期に大戦で両親を失った。

自刃覚悟で京都の事件を起こすも最後は支援者からも裏切られ確保される。

各種嘆願で関西呪術協会から帝国へ移送。

帝国での判決は情状酌量で労働懲役。

白銀騎士団医務官として配属された。

見習い 犬上小太郎

千草と共に行動するも早期リタイヤ。

微罪だが詠春の配慮で帝国籍。

白銀騎士団・見習い。

関西呪術協会

大戦期からの協力関係。

終戦後は互いの人材育成や貿易、技術交換等を行っている。

近衛木乃香

次期関西呪術協会の長。

治療術を陰陽・魔法の両面から習得中。

エヴァンジェリン直伝鉄扇術や一通りの武術を習得。

桜咲刹那

鳥族と人間のハーフ。

翼についてはそれなりの範囲にバレているが特に気にはしていない。

アンナ・ユーリエウナ・ココロウア

何故か弟子入りさせられるものの最終的には帝国へ渡る事を決意。

アーティファクトはネギとの従者契約。

炎熱籠手、火炎の靴

効果：炎系の魔法の威力を純粹に上昇させる。

戦時中炎族の為に製作された武器のオリジナル原型。

闇の魔法の大幅劣化、低負担、炎のみ高威力の兵装。

炎族は固有の火炎同化スキルがある為籠手と靴しか存在しない。

雪広あやか

隠蔽されていたはずの宗一郎が不老不死であるという真実に辿り着いた。

魔法を一から勉強中。
課題の山にめげない本作最高の努力人。

ネギ

ネギ。

言わずと知れたネギ坊主。

宮崎のどか

読心少女

綾瀬夕映

古菲

長瀬 楓？

超

超鈴音

本作最強と想定。

最も改変されている原作登場人物と言っても過言ではない。
柚木宗一郎とネギ・スプリングフィールドの子孫。
つまり……。

葉加瀬聡美

超の協力者。

茶々丸

超の超科学と魔法の合成によって造られたガイノイド。

茶々丸の妹達

シスターズ

花の名前を与えられた意志を持ち自立行動が可能なガイノイド。
ただし各機能に置いて茶々丸に劣る。

別荘の管理、本宅の清掃、警備などを全般に引き受ける。

74話：ゴーストバスター？（前書き）

もう原作がブツ飛び過ぎて後から修正しようそうしようと思わないと駄目ですね。

原作ネギがその辺のチート主人公ぐらいなら倒せそうな感じになってきましたね。

vs 敵オールスターはまさかとは思っていたけどやりましたね。燃える。

そして今話はドタバタ乱痴気シリアル幽霊退治？回。

遂に超がその正体を見せ始める。

74話：ゴーストバスター？

麻帆良祭とは？

そう聞かれれば10人が10人こつ答えるだろう。

”麻帆良最大の馬鹿騒ぎ”と。

今日は麻帆良祭の出し物を決める。

それすなわち

この扉の向こうには阿鼻叫喚の地獄が待ち構えていると言つ事だ。

「少年。」

「はい？」

「決して流されるな。正気を保て。解らない事に返事をするな。いいな？」

一年目は酷い目に会った。

「ええ…ええと？」

「い・い・な？さもなければ地獄を見るぞ？」

忘れるなかれ、ウチのクラスは3-A。

扉を開く。

二年間。馬鹿騒ぎと戦い培った経験。得た教訓。失いかけた意識。どんな戦場のどんな敵より戦慄した。恐怖した。

”好きにやらせたら收拾が付かなくなる。”

が、目の前の光景は ” どの風俗店だ ” 今年も色々ぶっ飛んでいた。

いや、決してエヴァに酒を盛って完全に意識を失くさせた後、屋敷中の女性を眠らせ、秘密で詠春や神鳴流の若衆と夜の街に遊びに行ったりなどはしていない。天には誓えないが。

目を見開き硬直したネギ少年。

何故かバニーの大河内 (意外と似合ってるな。うん。

貞淑な筈の衣装が破廉恥な事になっている春日 (これはこれで。

普段は着ない様なミニ袴巫女の真名 (長い脚がいいな。

ミニスカネコ耳ナース和泉 (要素が多すぎるだろう。

刹那 (何かこう…残念だ。何故素直に着たんだお前は…。

この間わずか0.1秒。

「酷ッ?!」

コラ刹那、心を読むな。

「お前達はイメクラでもやるつもりなのか…？」

「イメクラ？」

口が滑った。

「ええと…メイドカフェは去年やりましたので今年は…なんでしたっけ？」

ナイスアシストだ雪広。

去年のメイド喫茶も千雨が居なかったらどうなっていた事か。

「…コスプレ喫茶…！…！…！」

一部コスプレの範囲外がいるだろう。刹那とか刹那とか刹那とか。

「酷ッ！」

「と、とにかく全員座れ、一旦座れ。桜咲と大河内は何か羽織れ。」

精神に何かこう多大なダメージを受けた。

つてまだネギは復帰不能か。今日ばかりは仕方ない。お前の心境、解る解るぞ少年。

「毎年言っている様な気がしなくてもないが服装が過激すぎる。大学のサークルならまだしも大河内と桜咲の服装はやり過ぎだ。」

「えー硬いつて袖木センサーはー。」「目新しくないと稼げないですよー!」「他はいいのかよ。」

アップー組が不平不満をこぼす。

しかしながらホツと息を吐く者も数名。よかつたまだ大丈夫。まだ制御できるぞ袖木宗一郎!

「どこがだ。先程の光景は新田先生なら説教では済まんぞ?案を出し実現に向けて考える事は正しい。だがもう少し周りを見て考える……正直今の恰好で堂々と人前に出れるか?」

「あー……うん、やりすぎたかも。」

朝倉がブンヤ的な視点で色々気付いたらしく若干の反省を見せる。

「まあとりあえず案をあげていけ。最後に多数決するぞー。そしてネギ少年、いい加減復帰するんだ。」

「…あつすみません。」

再起動確認。

この間の戦いで何か理解したのか、それとも落ち込んでいるのか悩んでいるのか迷っているのか俺の目からは解らない。ただ何かを抱えたのだろうとしか。

会話も戦闘もアーニヤ越しの情報しか得ていない。アーニヤとて会話を全て聞いたわけでも戦闘の経緯を最初から見ていたわけでもない。

だが経緯はどうあれ事実として
ネギとアーニヤは爵位級の悪魔に勝利した。
そしてネギはトドメを刺さなかった。

ネギがトドメを刺さなかった事は驚きだった。

人は何かを殺した時、大きく変化をする。

そしてそれは何かしらの形で心に堆積しその者の今後を形成する。
だが殺さないと言う選択をした時、同じく大きな変化を与える。
対象への負の感情の大きさ・種類によってソイツは様々な影響となる。

果たしてネギは何を得、何を失ったのか？

さて、ネギが生徒の案を書き出し羅列したものを眺める。

- ・ 大正カフェ
- ・ 演劇
- ・ お化け屋敷
- ・ 占いの館
- ・ 中華飯店
- ・ ネットカフェ

まともな案も出せるじゃないか！

「さて、この中で多数決でも取るか。」

さあ投票を。という所で終業のチャイムが鳴り響く。

「まあ明日でもいいだろう。」

帰路につく生徒達を見送る。

チラリと向こうに気付かれない様に視線を向ける。

村上の前、朝倉の横。存在感の薄い幽霊。薄すぎると言ってもいい。異常な程だ。例えるなら出来あがった紅茶に水を足したような。珈琲を遠心分離器にかけた後の上澄みというか。

ああいう手合いを相手にして来た俺でさえ見失うことがある。

不憫だが浄霊出来る様な腕は無い。かといって除霊までを行うほどでもない。

どうにかしてはやりたいが、こんな事なら浄霊のやり方を聞いておくべきだった。

” 浄霊ですか。いえ、私の任務は貴女を護ることです。必要ありません。立ち塞がるなら全て斬ります。”

” 私がない時はどうするつもりなの？”

” 貴女の元に駆けつけるために斬ります。”

” もう……。いつか後悔するわよ？”

これで先に死んでいるわけだからもう……。な。ホントに後悔していませんよ日巫女様。

翌日！

「えーどの案も非常に僅差や同数で。」

「もめにもめたわけだが。」

ああ、甘く見ていたよ。なぜ綺麗に割れるんだお前たちは。

「柚木先生と僕で厳正に選考と抽選をした結果3・Aの出し物を”お化け屋敷”に決めたいと思っんですが…ど、どうでしょうか!？」

「……いいんじゃない?」「」「」

なんとか妥当な線で決まった様だな…。

無意識にネギが相坂を数えた時には冷や汗が背中から噴き出した物だが……。

しかし昨日はフリーズ等醜態をさらし超包子で泣き上戸で意識を飛ばすと好き放題やらかしたが今日はココまでまとめるのか。

”男子三日会わざれば刮目して見よ”とは良く言った物だ。誰が何を吹き込んだのやら。

しかしお化け屋敷か……ハハッ、ホンモノの吸血鬼にホンモノの幽霊。洒落にならん!

騒動の日!

遂にやつちまったか…。
どうやったらあんなに薄い幽霊がこんな悪意ある写りをするのか考
えただけで頭が痛くなる。

相坂の写真が和泉に撮られた。

せめてまともな写ってりやあなあ…。とうか…。その、写るもん
なんだな…。

流石に写真は色々と鬼門な気がして来た。

「柚木先生、ネギ君！何とかならないですか？流石にあんなの出る
んじゃ皆残ってくれないよーっ！」

もっともだ。

対処できる腕と知識が無けりや俺だってお断り願いたい。

「ただでさえウチのクラス部活の方で忙しい奴多い上に進行遅れて
るしねー。」

決めるのも遅かったからな！

「まあ、まあウチのクラスはお化け屋敷なわけだから宣伝に…。」

「ならへんってーっ！」

アーニヤのズレたフォーローと和泉の絶叫。

だよなあ。開催中ならまだしも開催前にソレは洒落にならん。当日には生徒たちは暗闇の中で待機するわけだからな。

「こりゃいつそ討伐隊でも作るかねー？」

「おっ？つまり肝試し？！いいね！」

さっき幽霊が出て作業が出来ないと言ったその口で肝試しか明石、早乙女。

「あっ……そういえば。」

「どうしたネギ君？」

「実は前から気になってたんですけど名簿に……あの写真の幽霊はこの人じゃないですか？」

何故今、よりによって今、そこに気が付くんだネギ少年！

「ねえねえ柚木先生？」

朝倉か、大体何を聞きたいか解るな。

「相坂さよか？」

「流石！」

「そつとしいてやれ他の連中には落ち着かせる為にそれらしいモノを作つて配る様に葉加瀬に言つておいた。」

万一の保険もかけたが……な。相手が特殊過ぎる。イレギュラー

「……………もしかして。」

若干青に顔になる朝倉。

「ん？」

「ずっと知つてたとか？」

「ずっと居たな。」

「……………席に座つてたとか？」

「ほら入学式の翌日にくじ引きしただろ？」

「あ……。」「

「それからずっと隣に居たぞ。」

「……………」

あ、泡吹いて気絶した。

夜！

Side 朝倉

あー…アレかーそれらしいモノって。

よくよく考えてみれば科学系の超りんやハカセが幽霊とか信じるわけないよねー。

「朝倉の姉さんこの子については？」

カモ君久々に見たなー。

「な、なんとか調べたよ、うん。相坂さよ没年1940年。確かにこの学校に通ってたみたい。詳細はわからないけど15歳の若さで亡くなってるね。」

でもどーも死因とかその辺りが改竄されてる感じがしたんだよねえ。その辺は私の鼻だから辿り着けたわけだけど。

こりゃ柚木先生も何か知ってると見たほうがいいのかな？

年数で言えば学園長とか知ってるそうよねえ……あーでもあそこはまずいわね。うーん。

「ふむ、ほぼそいつの霊で確定だな。何の未練か知らねえが成仏させてやるのが人情ってもんだ。なあ兄貴！」

「う、うん。そーだね。」

あー…言った方がいいかな？

このままだとネギ君流されそうだしなあ…。しかもあの道具は見た目だけだしなあ。

「相坂さよさんかあ…でもそんなに悪い人には見えない気もするんだけどなあ。」

「兄貴、名簿の写真に騙されるなよ？まずはコイツが出てきた理由を調べるんだ。」

「う、うん。じゃ、じゃあ宮崎さんお願いします！」

「は、はい！行きます！相坂さん…あなたが出てきた目的は何ですか？」

さてこの本は人の心が書き出されるらしいけど…。

「あなたも　一緒に　こっちに　遊びましょう　友達に　のどかさん　嬉しい。」

うん、駄目だわ。

「悪霊です！やっぱりこの人悪霊ですうー！ー！ー！っ！！」

本屋の絶叫。

「総員戦闘配置ー！」
「防御円陣！！」

あー……逃げた方がいいかなこりゃ？

だって武器はガラクタだし。いや超りん関わってるから高級な玩具

くらいの性能のはずだけど。

しかしスクープは逃しがたい！

ガタガタガタと窓が音を立てる。

机と椅子が宙を舞う。

「大スクープ！今こそ真実を射抜く私の写真技術を見せる時！！激写！！」

そして華麗に逃走……なんて出来ないよね。

柚木先生に連絡するか、多分近くに陣取ってるんだろうし。

S i d e e n d

S i d e 宗一郎

「なんだ朝倉？」

着信。

「どうやら”予定通り”警告を無視したようだな。

「ポルターガイストとか血文字とか、憑依とか始まっちゃって……。」

墜ちたか。

状況はわからんが行動からして看過は出来ん。

「対策はもう送ってある。」

「へ？」

Side end

「滅茶苦茶です！」

「ど、どうしましょう!？」

「そこまでだネギ先生。あとは我々が対処する。」

「師匠の指示とは言え…い、いいのかなー皆の前でこんな。」

真名と刹那が混乱の極みに達した教室に突入。
撃退と追跡を開始する。

「た、龍宮さん・桜咲さん待って…!」

追いかけようとするネギ。

そこへ朝倉が撮影した映像を見せる。

泣き顔で名簿の顔で写る相坂さよ。

Side 真名

「目標の姿がほとんど見えないぞ！」

「私達が教えられるまで気付かなかつたんだ！恐ろしく隠密性の高い霊体だよ！予定通りの場所へ追い詰めるぞ刹那！」

霊体にも有効な弾丸が雨霰と放たれる。

「奥義・斬魔剣ツ！！！」

相坂は弾丸と斬撃によって”予定通りの逃走ルートへ誘導されていく”当然、当の本人には知覚できない。

”壁抜けは出来ないようにした。”か、手段はわからないが凄まじいな。

追う視線の先。シトーさんの待機ポイントで対象が固定される。

「あ………れ？身体が動かない？」

「すまないな相坂、拘束させてもらった。」

魔眼をもつてしても見えない何かを対象を縛っている。注視してみれば壁の四方に文字の書いてある札。

「と、いうわけだ。成仏しな。」

銃口を身動き取れない相坂に合わせる。

ゆっくり引き金を……。

相坂は動けない。
だが笑みを見せる。

「そ、そういうわけで僕でよければ。」「私で良ければ。席、隣だしね?」

朝倉とネギの言葉を聞いた途端、相坂さよはその存在を薄くする。

「無事：成仏したようです。」

Side 宗一郎

「うとうとう……と、とにかく待つて下さい。お願いです柚木先生、龍宮さん、桜咲さん……この人は悪い幽霊じゃないんです。」

壁に激突したにも関わらず立ち上がり幽霊の弁解を始めるネギ。
いつもはイラつくその姿が
怪我をしても幽霊を護ろうとする姿に……

俺は彼女を幻視した。

”大丈夫、今はこんな姿だけどこの人は悪い人じゃないから。”

「そんな甘い事を言って、他の生徒に被害が出たらどうするつもりだ?」

”また貴女はそんな甘い事を！それで貴女が怪我をしては元も子もありません!”

同じ様な発言。

「で、でも。」

”それでも…私は私に助けられるものは、全て助けたいの。だから
…”

思い出を
過去を振り切る。

「まあまあ…友達が欲しかっただけなんだよね？さよちゃん。」

朝倉のフォロー。

「え…？」

「そ、そういうわけで僕でよければ。」私で良ければ。席、隣だしね？」

朝倉とネギの言葉を聞いた途端、相坂さよはその存在を薄くする。

「無事…成仏したようです。」

いや、居るぞ。というか貴様は英国人だろう！成仏はおかしくないか！？

ともかく……堕ちていない事は見て取れた。

あとは結界を……「待つ…待つんじゃ 柚木君!」

ほう面白い方向へ転がりそうだ。

走ってくるのはぬらりひょん。

妖怪も結界で拘束出来るが……さて学園長はどうだろうか？

結界に踏み込むぬらりひょん。

結界を越えるぬらりひょん。

……チツ。

「どういう状況か大体解っているんだろう？」

「じゃからこうして止めに来たわけじゃ。」

この場でネタバラシして本人に現状を理解させ更にぬらりひょんを失脚させるべきか？

この場では抑えて本人には伝えずぬらりひょんの弱みを握り利用すべきか？

失脚させた場合学園に送られてくる新しい学園長は十中八九…いや確実に連合の息が濃くかかった奴が来るだろう。

とは言え恐らくすぐには処分されない。

そうなれば要らぬ反感を買うだろうし……。

保険を蒔いておくべきか。

「壊。」

結界を構成する符の文字が徐々に消え結界が解ける。

「大方の見当はついたがココでお披露目と行くか？それとも……。」

無言の学園長。

釣れるか釣れないか。

「…出来れば二人きりで話したいのお。」

「いいとも。少年、幽霊は消えたと言ってやれコレ以上遅れると流石にマズいぞ？」

「あ……はい。」

駆け出すネギ。

アイコンタクトを送ってからネギを追う朝倉。

学園長室

「三重の防壁結界に遮音結界・認識阻害結界の重ね掛け……か。俺の予測は大正解という訳だな。」

「いつから勘付いていたのかのう……？」

「相坂を見た時から何となく気付いてはいたさ。明確にそうだと思うたのは今日だがな？」

大禁呪”死者の蘇生”

別段俺個人としては死者の蘇生は問題ない。

ここは日本。死者の蘇生・復活を為す秘宝も存在する。

だが連合は認めていない。

連合では詠唱を知るだけでも重罪。実際に行えば成否に関わらず死刑も有り得る程の大禁呪。

相坂はその大禁呪の失敗作。

それはつまり魂を戻すことすら不可能な程の器の破損があったという事。

「間違えていれば指摘しろ近右衛門。相坂さよは何者かに殺されお前が大禁呪を使用した。だが器が破損していて戻すことは出来なかった。それで仕方なく魔力を使い魂だけを学園に定着させた……当時彼女が座っていた場に。」

「その予測で大方正解しておる……しかし、禁呪については責めんのかのう……？」

「愛していたんだろう？」

「ッ！」

「何を驚く事がある？お前たち連合の人間が共通目的であるところのマジステルマジを捨てるどころか己の命を賭けてまで為す大禁呪。その一步を功名心だけで踏み込めるものかね？他の奴ならまだしも近衛近右衛門：お前に限ってそれはない。」

そうその点だけは俺は近右衛門を評価している。

もし俺がテオドラやエヴァを失っていけば同じ手段を取った。禁呪で駄目なら神話の秘宝でも探すだろうし縋るだろう。

「ふう……それでワシに何を要求するんじゃ？」

「随分と殊勝じゃないか。」

「覚悟はしておる。」

「ネギの指導を神多羅木にやらせる。同じ風系統を得意とする魔法使いだろ？ 体術は古菲から仕込まれているし魔法を磨けばまあ使えるだろう。」

「ふおっ！？」

「今日からでもダイオラマ魔法球で出来るだけ修行させろ。」

「てつきりワシを……辞めさせて何になる？」……むう。しかし神多羅木君かね。そこで柚木君が指導してくれると嬉しいんじやがのう？」

「立場解ってるのかジジイ？ まあ安心しろアーニヤの方は仕込んでやる。それにな……俺の戦い方はネギには真似出来んよ。ネギには人を殺せない。ネギを英雄にはしてやるな……ナギと同じものを背負わせる気がお前たちは。」

「必要があれば。」

「ハッ……必要があればだと？ 笑わせる。」

「とかく要求は呑もう。」

その答えを聞いて背を向け部屋を出る。

さあ問わなければならない。超よ、お前の目的は何だ？

S i d e 学園長

ノック。

「おおネギ君入ってきてくれるかの？」

「はい！」

少し緊張した面持ち。しかし、学園に来たあの日より確実に成長しておる。

「さて、ネギ君。長らく君の魔法を指導する先生を置かなかったが、近々の事件も踏まえ指導者としてこの神多羅木先生を付ける。君と同じ風系統の優秀な魔法使いじゃしっかりと学ぶとよい。」

「よろしくネギ先生。」

「よろしくお願ひします神多羅木先生！」

満足げに頷く。

そこでハッと気がつく。

学園祭に出てくるであろうアルビレオ・イマの話忘れておった！

「ま、まあ良いか。」

「は？」「？」

「い、いや何でもないぞい。」

どうせ被害を受けるのはアルビレオだけじゃし。

まさか柚木君とて衆人環視の中で図書館を吹き飛ばす事など無いじゃろっし！

……………無いじゃろっしな？

S i d e e n d

S i d e 超鈴音

携帯が震える。

簡素な文章。

場所と時刻の指定。

「ハカセ。」

「はい？なんですか超さん？」

「少し出てくるネ。無いとは思うが、私がもし戻らなければ……。」

「はい、大丈夫ですよ。実験を行ってませんから保証は出来ませんが理論上は”麻帆良が失敗しても術式は発動”します。」

「ウム。やはりハカセに協力して貰って良かったヨ。安心して任せることが出来るネ。」

予定通り柚木先生の作り上げたNGO銀の牙は利用できた。

12ヶ所全てを押さえる事は流石に出来なかったが上々の仕上がり。

未来は変える。例えどんな障害があろうと。

携帯を手に取り龍宮の仕事用に掛ける。

”なんだい超？”

「追加依頼ネ。報酬は後払い現物支給で転移符10枚。」

”随分と破格じゃないか。”

「弾丸は以前渡した銀弾で頼むヨ。当てなくてイイネ。」

”そういう事か。牽制にしかないぞ？”

「問題ないヨ。」

” 死なないでくれよ？ ”

サア話し合いで決着出来るといいネ先生……いや、大師父。

S i d e e n d

t o b e c o n t i n u e d

74話：ゴーストバスター？（後書き）

追記

まさかの予約投稿ミス。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9044k/>

魔法先生ネギま！銀の風が吹く

2011年7月30日11時18分発行